モダンワールド

森野青果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モダンワールド

【Ｎコード】
Ｎ０９３０Ｍ

【作者名】
森野青果

【あらすじ】
おれの仕事はなんでも屋だが、回ってくるのはアブナイ害虫の駆除ばかり。しかも十一歳の洟垂れ社長（超絶美少年）にこき使われるという、ヒサンな日々である。あるとき、ぶっ壊れた家事用チャペック（大昔はロボットと呼ばれたらしい）の代わりを求めて、知り合いのジャンク屋へ立ち寄ったところ、戦時中に開発されたという、とんでもない殺戮兵器をつかまされてしまう。しかもそいつの外見は、虫も殺さないような美少女で……

1（1）

1

二十日以上も仕事がなければ、いいかげん、体もなまる。

「作業服にキノコが生えちまいそうだ」

ワットの野郎を怒鳴りつけてやったが、やつは電話の向こうで、ふふんと鼻を鳴らしやがった。

「それでしばらく、食事にはこまらないでしょう」

「おれに毒キノコを食えと？」

「毒とは限りませんよ。もうちょっとポジティブに考えてほしいですね。なんでしたら、刷新会議の端末から、『食べられるキノコリスト』を取り寄せて差し上げましょうか」

うっかり第四種の害虫を素手でつかんだように、おれは顔をしかめた。昨今流行りのポジティブ思考というやつが、多脚ワームの次に嫌いなのだ。おれが黙っているのをいいことに、ワットの野郎は、ツァラトゥストラ教の聖歌隊みたいなボーイソプラノで、ころころとまくしたてた。

「ぼくなら、家事用のチャペックを新調することをお勧めしますね、エイジさん。作業服がピカピカになった上、美味しいキノコ料理にもありつける。明日も自宅待機になりますから、ちょうどよかった。払い下げのマーケットでも覗いてみては？」

おれは無言で受話器を叩きつけた。ちん、と間抜けな音をたてて、そいつは黒ずんだダイヤルの上で沈黙した。本当は線を引きちぎって、十一階の窓から放り投げてやりたいのだが、これを繋げるまでの苦労を考えれば、気勢をそがれる。処理班にいた頃は、自分用の端末さえ所有していたというのに。

「くそっ、何が刷新会議だ」

かわりに壁を蹴りつけると、ぐわんと虚ろな音をたて、足の指が

ぴりぴり痛んだ。

半年前に、人類刷新会議がこの地区を制圧してからというもの、たしかに治安はよくなったが、おれの仕事はめっきり減った。やつらは世のため人のためと称して、その日暮らしの貧乏人から、せっせと仕事を取り上げるばかり。

おれが所属する竹本商事は、いわゆる「なんでも屋」だ。社長はさっきの電話のくそガキで、竹本ワット十一歳。本来なら、ランドセルを背負ってお手々つないで学校へ行くべきところ。去年、親父を亡くして以来、事務所の奥にふんぞり返って、おれたちしがない労働者を鼻であしらう日々である。

なんでも屋である以上、依頼を受ければ何でもするが、かかってくる電話の九十パーセントは、害虫駆除の依頼だ。おれに回されるのは、駆除の中でも最も危険な仕事ばかり。第四種はあたりまえ。基本的には、第三種以上の害虫を扱うことになる。

第三種以上のレベルになると、多くの確率でイミテーション・ボディの遺伝子が混入している。まったくもって、危険きわまりない。

「くそっ、ワットの野郎。日ごろ一番アブナイ仕事を押しつけておいて、依頼が減ればおれをまっ先に干しやがるとは、理不尽な」

おれはずかずかとキッチンへ踏み込み、乱暴に冷蔵庫を開けた。一本だけ残っていた合成ビールの缶を開け、半分ほどひと息に飲みほした。停電続きでろくに冷えておらず、接着ゴムの臭いが鼻を刺激した。が、少しばかり、頭を冷やすには役だった。

（大のおとなが、十一歳の洟垂れを相手に本気になって……）

床に転がっているチャペックが目に入った。一見、隣の冷蔵庫と似たり寄ったりだが、万能という名の不便なマニピュレーターがついており、一応二足歩行もできていた。第二次百年戦争前までは、この種の機械はロボットと称されていたらしく、変態博士の相崎氏は、いまだにその古風な呼び名を用いていたっけ。

たしかに、二週間前にこいつが沈黙してからというもの、おれの部屋は確実に臭うようになった。外から帰ってきたときなど、一瞬、

本気で鼻が曲がるくらい。この芸を極めれば、路上で小銭を稼げそうだが、キノコが生える以前に、多脚ワームの巣にされてはかなわない。

「八幡商店に、掘り出し物があるかもしれないな」

どうせ明日も休みである。曲芸的な技で、空き缶を満杯のゴミ箱の上に載せると、おれは居間に戻り、外套を引っ掛けた。机の上からＭ３６を取り上げ、シリンダーを抜いて、五発の弾が装填してあることを確かめた。ジーンズのポケットに突っ込んだままコサックダンスを踊っても、ミニリボルバーは暴発しないのが取り柄だ。

防腐靴を履いて部屋を出ると、吹き抜けの天井から、まだうっすらと明かりがさしていた。常夜灯はとっくに全滅しているので、まずはありがたい。近ごろでは、こんな雇用促進住宅の回廊にまで、蠕動ワームＱ５型、俗名ゴクツブシがうろつくようになっていた。

ゴクツブシは基本的に無害だが、うっかり踏んづけると、バケツ一杯ぶんの体液を吐き出すから厄介だ。まともに浴びれば、確実に三週間は腐ったトマトの臭いが消えず、さらに一月の間、イタリア料理が食えなくなるだろう。

エレベーターは動いてはいるものの、完全に制御不能。こんな地獄の遊具になんか乗りたくないので、階段をとぼとぼ降りるしかない。七階から下は封鎖されており、回廊への入り口は、ぶ厚い鉄板で塞がれていた。鉄板の向こうにどんなものが棲みついているのか、あまり考えたくなかった。

1（2）

（やはり、電話を入れておくべきだったか）

階段の途中で、おれは立ち止まった。三階と四階の間である。戻るつもりはまったくなかった。これまで、いつ立ち寄っても八幡商店は開いていたし、無駄足になったらなったで、べつにかまわない。仰々しく予約を入れるまでもない。何よりも、電話を見るとまたあのワットのくそガキを思い出しそうで、それがいやだった。

足を止めたのは、靴音が聞こえたからだ。

カツ、カツ、カツと速いリズムで床を打ち鳴らしている。一階のロビーを走りぬけ、階段にさしかかり、さらに駆け上がってくる様子。おれは下方の踊り場を凝視した。しだいに高まる靴音に、荒い息づかいが混じる。女であるらしい。

何ものかに、彼女が追われていると確信したとき、人影が踊り場に飛び出してきた。ほっそりとしたシルエット。長いストレートヘアが、肩に背に乱れている。上を向いたせつな、彼女はぎょっと立ち止まり、大きく目を見開くのがわかった。おれはわざと道化じみた動作で、見えない帽子をとる仕ぐさ。

「ごきげんよう、セニョリータ」

ぼくと踊っていただけませんか？　とでも言うように、深々とおじぎした。二メートル下の踊り場で、ふと緊張が緩む気配を感じた。

「エイジさん？」

「シ（はい）」

相手が落ち着くのを確認して、おれはゆっくりと階段を降りた。薄闇の中、上品な香水の香りが、彼女をふんわりと包んでいた。地味な濃紺のロングコート。ブラウスの襟元にのぞくリボンタイも、彼女をまるで高校生のように、初々しく見せていた。キノコ男は、内心たじろいだ。

この女性がだれなのか、もちろんとっくにわかっていた。一月ほ

ど前に一一〇七号室に越してきたのだが、わざわざ隣のおれの部屋まで挨拶に訪れたときは、さすがに面食らったものだ。

（レイチェルと申します）

（外国のかた？）

（いいえ。もちろん本名ではありませんわ）

まあ、おれだって「エイジ」というコードネームで通しているのだから、他人をとやかく言えた義理ではないのだが。それでも驚いたのは、レイチェルがカタギにしか見えなかったからだ。おれみたいに後ろ暗い商売をしている人間とは、根本的に人種が違う。後ろ暗い商売をしているからこそ、そのへんの嗅覚には自信があった。

推定年齢一九歳。他人の素性を根掘り葉掘り訊かない主義だが、大学生と考えるのが妥当だろう。

「よかった。わたし怖くて！」

いきなり、花束が胸に飛びこんできた。とても抱えきれないくらいの花束。芳香に溺れそうになりながら、どうにかこうにか踊り場から落下しないよう、踏みとどまった。思わず覆った腕の中で、驚くほど華奢な体が鳩のように震えていた。

「いったい？」

「犬に追いかけられたんです。それも体があり得ない角度にねじ曲がって、白目を剥いて、黒い斑紋の浮いた舌を、ぬめぬめと地面に引きずっていました」

「寄生虫……おそらく、サミダレムシでしょう」

レイチェルの簡潔、かつ的確な描写のおかげで、おれはすぐに特定できた。寄生型ワームＣＢ４－２４、サミダレムシは小型から中型の犬にしか寄生しない。哀れな話だが、寄生された犬は、末期には完全に体を乗っ取られ、彼女が話したような、おぞましい姿でさまよい歩く。

「時々、人を追いかけますが、襲いかかることはまずありません。体を乗っ取られてもまだ、わずかに意識が残っているんでしょう。飼い主の面影を慕うのだといわれています」

胸にしがみついている彼女の両手に、ぎゅっと力がこもった。おいおい、いくら顔見知りとはいえ、ろくに素性も知らない者どうし、これはまずいんじゃないか。もしおれに下心があれば、この場で簡単に押し倒せるんだぜセニョリータ。などと考えつつ、ともすれば反応しそうになる股間を懸命にセーブしつつも、例の嗅覚がみょうな違和感を嗅ぎとっていた。

必死に逃げてきたわりに、さっきの説明は上出来すぎやしないか？

「ごめんなさい、取り乱しちゃって。でも、エイジさんが害虫駆除の専門家でよかった」

ようやく身を離し、レイチェルは笑顔をみせた。害虫駆除の専門家は、引きつった笑みを返し、さりげなくズボンのポケットに手を入れた。こいつはＭ３６よりずっと扱いにくい。

「暗くなってからの一人歩きは、あまり感心できませんね」

「気をつけます。じつは近ごろ、部屋に虫がいそうな気がして不安なんです。それで帰宅するのがいやで……お暇な時でかまいませんから、今度調べてもらえますか。あっ、もちろん報酬はお支払いしますから」

2（1）

2

「お暇な時で構いませんから……だとさ」

ジャンク屋のガレージで、八幡ブラザースの弟に、おれはレイチェルとのいきさつを話し終えたところだ。

「ひょっとするとその子、エイジさんに気があるんじゃないですかね」

「あり得ん。隣に住んでるだけだぞ。顔を合わせれば挨拶くらいはするが、それまでの話だ」

そう言って煙草をくわえたとたん、ガラクタの山の中からマジックハンドがにゅっと飛び出し、おれの鼻先にミニチュアのマグナムを突きつけた。カチリという音がして、銃口に小さな火がともり、ちょっと顎を突き出すだけで、煙草に点火できた。

ジャンク屋の双子の片割れは、いたずらに成功した小学生のように、満面の笑みを浮かべた。

「とびっきりのセンサーが使われているんです。じつは、旧首長連合軍の掃討車から失敬したシロモノでして」

「変態博士の作品か」

「ええ、まあ」

「掃討車といえば、悪名高い虐殺機械じゃないか。そんなものから部品をパクった上に、しかもなんという無駄な用途に……」

はん、平和利用と呼びたまえ。などと、皮肉たっぷり反論する相崎博士の顔が、目に浮かぶようである。

八幡ブラザーズの弟は赤いキャップを後ろ向きにかぶり、銀縁眼鏡をかけて、もとは白かったと思われる灰色のツナギを着ていた。名を一彦といい、兄のほうは一朗という。一卵性の双子ゆえ、顔も体つきも立体コピーにかけたようだが、性格は瓜二つとは言いがた

く、キュウリとナスビくらいには違う。
　弟のほうが、よくいえば物腰がやわらかく、要するに抜け目がなかった。
「そのレイチェルさんという人、美人なんですか」
　得体の知れないバッテリーが積み上げられた辺りから、場違いなコーヒーの香りとともに、二葉が顔を出した。まったく、八幡商店のガレージの中は、ガラクタの迷路である。体を横にしなければ通り抜けられず、どこに何があるのか、おれはいまだに把握できていない。
　二葉は、おれが腰かけている売り物の事務机に、湯気のたつカップをのせた。ブラザースの妹で、かれらより八つ年下の十七歳。やはり眼鏡をかけているが、愛くるしい顔立ちに、お下げ髪が似合っていた。学校から帰ったばかりなのかセーラー服姿で、いかにも興味しんしんな目を向けた。
「聞いていたのか？」
「はい。監視カメラで」
　にっこりと小首をかしげる。ある意味、一彦に輪をかけて油断も隙もない。
「ここじゃ、うかつなことは言えないなあ。ああ、たしかに美人だよ。とびっきりをつけてもいい。しかもあんなボロマンションに、独りで住むような人種とは、とても思えない。におうんだな。育ちのよさを感じるんだ」
「つまり、どこぞの首長の血族ではないか、と？」
　一彦に真顔でうなずき、おれはため息とともに煙を吐き出した。
　近年では煙草の質も低下する一方で、純粋なものはとても手に入らない。貧乏人ご用達の安煙草に至っては、六、七割がた代用品が混ざっているが、へたに純なモノを吸うよりも、くらくらと効く。どんな草が混ぜてあるのか、あまり想像したくないが。
「今どき、どこぞのご令嬢といえば、ほかに考えられまい。レイチェルという偽名を使うのも、そうすると納得がゆく」

第二次百年戦争終結後も、国内はなかば内戦状態が続き、政権はめまぐるしく入れ替わった。首長連合は群雄割拠を妥協的に認めたかたちで、ほぼ七年の間、政権を掌握した。いにしえの神聖ローマ帝国にも似た、有力者たちによる連合政権である。

首長と呼ばれる有力者たちは、いにしえの貴族をおもわせた。強大な私兵こそが、かれらの権力の拠り所である。荘厳な屋敷をかまえ、宝石や美術品を収集し、美食と遊戯に耽溺した。政治的には権謀術策にあけくれて、隙あらばライバルを失脚させ、おのれの領土を増やし、血族を富ませることに腐心した。

堕落と退廃を極めたあげく、人類刷新会議によってうち破られるまでは……

「そっか。レイチェルさんがもし首長の血族だとしたら、しっかり隠れてないと、刷新さんに身柄を拘束されちゃうわけだ」

「あくまで、例えばの話だよ。おれの考えすぎかもしれないし」

「エイジさん、レイチェルさんのことばかり考えてたのかなあ。ねえねえ、彼女さ。おっぱい大きかった？」

2（2）

フラッシュバックが起きた。いきなり飛びこんできたレイチェルが、鳩のようにおののく感触がよみがえる。かたく抱きしめれば壊れてしまいそうなほど、華奢な体だったけれど……

「ああ。とびっきりをつけてもいい」

「変態」

「なんでだ？　きみが訊くから、正直に答えたまでじゃないか」

「問答無用。そんなにおっぱいが好きなら、刷新会議に対抗して、大日本おっぱい党でも結成すれば？」

ふくれ面をして腕を組んだまま、二葉は、ぷいとそっぽを向いた。この年頃の女の子の気持ちは、新型ワームの生態より理解しがたい。くっくっと肩を揺らしながら、一彦が尋ねた。

「そういえば彼女、寄生された犬に追いかけられたそうですが。エイジさんもそいつを見たんですか」

大日本おっぱい党員は首を振り、煙草を揉み消した。商売がら、さすがに気になったから、街路に下りてだいぶ探してみたのだが、それらしい影も形もなかった。

「実際、気になったんだよなあ。まるで図鑑を読み上げるような説明が。だからサミダレムシだと、すぐにわかったんだが……ふつう、血相を変えて逃げてくるほど、怖い思いをさせられた相手を、ああも簡潔に描写できるだろうか」

「嘘だと考えたほうが、辻褄が合うわけですね」

「ああ。レイチェルを追いかけたのは、決してサミダレムシに寄生された犬なんかじゃない」

ばすん、ばすん、と痙攣的なエンジン音が近づいてきた。あんな音をたてる車は、八幡ブラザーズのトラック以外あり得ない。燃えるものなら何でも燃料にできる、あれもまたドクター相崎の愉快な発明品のひとつだ。

ガラクタに埋もれて、ここからは見えないが、ガラガラと表のシャッターが押し上げられ、トラックが入ると、また下ろされた様子。それでも人が屈んで通れるくらいは、開いている筈である。おれもそこを潜って入って来たのだから。間もなく、一彦とウリふたつの若い男があらわれた。

「やあエイジさん、いらっしゃい。頼まれていた弾薬は、取り置きしてありますよ」

いにしえの野球少年みたいに、一朗は赤いキャップのつばに手をかけた。同じ背格好。同じ服装。同じ眼鏡に同じ顔。ツナギの染まり具合までまったく同じだが、唯一、キャップを前向きに被っているところで、弟と区別できた。

「ありがとう。だが今日は、タマを受け取りに来たわけじゃないんだ。このところ仕事にあぶれてね。まだまだ余っているくらいさ」

一朗は大きなバッグを、どさりと肩からおろし、おれの隣に腰かけた。手つかずのまま冷めたコーヒーを目にすると、ひょいとカップを取り上げ、ひと息に飲みほした。

「へえ。てことは、アブナイ虫の数が減ってるんですかね」

「まさか。実際、どんどん増える一方だよ。ワットが仕入れてきた情報によれば、ごく最近、ＢＤ－２９地区が居住不能地区に指定されて、完全封鎖の憂き目にあっている。いきなり、フェイズ５が発動しちまったんだ」

「ＩＢに？」

「いや、虫さ。閉鎖された団地ごと、多脚ワームの巣にされてね。地区担当者のずさんな管理のせいで、発見が遅れたのが命取りになった。もちろん第三種以上ともなれば、イミテーションボディと無関係とはいえないが」

目の前のカップをひねりまわしながら、一朗は最低の代用コーヒーを飲まされたような顔をした。かわりに一彦が口を開いた。

「フェイズ５ということは、生き残った人ごと、ですよね」

「そうなるな。首長連合の時代なら、金を積むなり何なりして、抜

け道もあったんだが、刷新のやつらは徹底的にやりやがる。クリーンな政治・クリーンな街づくりの名のもとに」

そのうえ民間のハンターを締め出しては、とても駆除に手が回るまい。現に、第四種以下のワームなら、あたりまえに目にするようになった。部屋に戻りたくないと言ったレイチェルの怯えも、ゆえにあながち嘘とは言いきれない。

「わっ！」

無意識に煙草をくわえたところで、また例のマグナムが伸びてきた。しかめ面で火のお相伴にあづかるおれを見て、一朗は肩を揺らした。

「ハハハ。お気に召したらお持ち帰りになりませんか。安くしときますよ」

「遠慮しておく。掃討車の火で煙草を吸うなんて、ネタにしてもブラックすぎるよ。それより、家事用チャペックを見せてもらえないかな。以前もらったやつは重宝してたんだが、二週間ほど前から、ウンともスンとも言わなくなってね」

「明らかに寿命でしょう。ナナコ七式でしたっけ。あいつは、連合が政権をとる以前の払い下げですからね。最近では、ずっと高性能のチャペックが、ぐっと安く買えますぜ。どうぞ、こちらへ」

3（1）

3

おそらく方向的には、ガレージの奥へ向かっているのだろう。一朗の背にしたがって、ガラクタの迷路を行くうちに、方向感覚など、とっくに吹き飛んでしまっていたが。

かつて妻がいた頃、ルナパークの迷路に入ったことがある。外から見ればごく小さなパビリオンなのに、足を踏み入れたとたん、広大な迷宮に迷いこんだ気がした。複雑に組み合わせられた鏡によって感覚が狂わされ、同じところをぐるぐる回っていることに気づかなかった。

一彦は店番に残り、海綿体ワームのように頬をふくらませたまま、二葉が後ろからついてきた。おれが少しでももたつけば、容赦なく蹴りを入れてくる。

「痛いって。靴の先が尻の割れ目に入ったぞ」

「ごめんなさい。わたし、足が速くて」

「健脚なんだな」

「美脚なのよ。おっぱい党員には見えないでしょうけど」

と、まだ根にもっている。

一朗が身を屈め、ガラクタのトンネルに潜りこんだ。身の危険を感じつつ、おれも後に続いたが、予想された背後からの集中砲火は鳴りをひそめたまま。

無事に通り抜けたときは思わずため息を洩らした。狭苦しさに馴染んだ体には、ずいぶん広く感じられた。裸ダイオードに照らされた空間の両側に、三十体ほどのチャペックが所狭しと並ぶさまは、壮観といえた。

「ほお、これは……」

「すごいでしょう。ＢＢ－３３地区にジャンク屋は星の数ほどあり

ますが、これほど粒を揃えている店はうちだけです」
　自慢しつつ、鼻の下を指でこするのだ。そこが油で黒く汚れたところまで、漫画を切り抜いたようだ。おれは一台のチャペックの前に歩を進めた。先日お亡くなりになったナナコ七式同様、ありふれた箱型だが、黒光りするボディは新品と見紛うばかり。操作パネルや計器類を見れば、桁違いの性能が予想された。
「最近はコードレスが常識なんだな。電池切れしないのかい」
「ええ。電池パックのほかに、自己供給型のバッテリーを内臓していますから。二十四時間でも四十八時間でも、止まっちまうことはまずありません」
「そのうちチャペックの労働組合ができるんじゃないか」
　うちの七式は二十四時間中、最低でも四時間、通常六時間は「眠らせる」必要があった。ケーブル式なので電源は問題ないが、冷却が間に合わない。
　例えば例の掃討車なんかは、じつにイヤらしく立ち回り、わずかな物陰に隠れた人間をも確実に蜂の巣にするが、演算処理装置や関節にかかる負担は、家事用チャペックよりはるかに小さい。つまり人間をばりばり撃ち殺すよりも、ジャガイモの皮を剥くほうが、はるかに高度な神経と筋肉との連係プレイを要求される。より崇高な労働といえる。
「値札がついてないね」
「時価と相手によりけりで」
「最近は厳しくなってるんだろう。値札に限らず、食い物がいつまで食えるとか、そんなことまで書いて貼っておくらしい」
「クロック鳥の卵に貼ってあるのを見ましたよ。三年後の日付だったんで、親爺を問いつめたところ、雛がかえれば少なくともあと三年は食えるって。たしかにねえ、何でも刷新さんの言いなりになってたら、商売上がったりですから」
「値切る楽しみもなくなるよなあ」
　苦笑しつつ、おれは居並ぶチャペックに次々と目を転じた。色や

デザインこそ違え、新しい型になるほど個性というか、面白みがなくなるようだ。

「うーん、どうもね。あらためて七式に愛着がわいてくるようだよ。これより古い型はもうないのかな」

「ええ。七式クラスになると部品も入手困難ですから、修理はまず無理でしょうね……あ、一つだけ手がありました」

期待をこめた眼差しをあびて、一朗はかえってすまなそうな顔をした。キャップの上からぼりぼり頭を掻きながら、首を縮めて言う。

「相崎博士なら、なんとか動かせると思うんですが……あ、やっぱりだめですか」

おれは無言で両手を広げてみせた。博士に腕をふるわせるよりは、あのままスクラップにしたほうが七式のためだ。さもないと、目も当てられないような変態チャペック……博士流に合わせれば変態ロボットが誕生してしまう。おぞましい悲劇を想像して、蒼ざめているおれの袖を、二葉がしきりに引っ張っていた。

「ほら、あれなんかお気に召すんじゃない？　エイジさん、変なものが好きでしょう」

異論はあったものの、彼女が指さした方へ目を向けると、最も奥まった辺りに、何やら異質なものが立っている様子。他のチャペックと明らかに異なる、有機的なフォルム。金属的な光沢もなく、柔らかな布地に包まれているようだ。お伽話に出てくる、磁石の女神像に引き寄せられる船のように、おれは奥へ足を進めた。

3（2）

人形だ、とまず考えた。大きさは箱型のチャペックと変わらないから、十歳くらいの子供程度。現にその人形は、ちょうどそれくらいの少女の姿をかたどっていた。

髪は短い、いわゆる「おかっぱ」。頭のうしろに大きなリボン。ガラスのように、うつろな瞳がぱっちりと見開かれ、苺色の唇が、かすかに笑みを浮かべている。人間の顔だちをリアルに再現したのではなく、わざと人形らしいデフォルメが加えられているようだ。

童話から抜け出したような青いエプロンドレス。ウェイトをとるためか、体のわりに大きな茶色いブーツを履いていた。

「これも家事用チャペックかい」

おれの驚きを前に、二葉は腕を組んだまま、満足そうにうなずいた。

「とある首長の屋敷で使われていたハンドメイドの逸品よ。型は古いけど、金に飽かせて贅沢な機能が盛りこまれているわ」

「動くのか？」

「ばっちり整備してあります。ちょっと見てみますか」

妹の言葉をうけて胸を張ったわりに、一朗が少々顔を赤らめた。その理由は、三十秒後に判明した。かれはポケットからじゃらじゃらと鍵を取り出し、赤いプレートのついた一つを選り分けると、おもむろに少女人形のスカートをまくり上げ、顔を突っこんだ。なるほど、そこに操作パネルがあるのはわかるが、よそ目には変質者にしか見えない。

「ハンドメイドだから型番はないの。名前は、テレーズ。呼んであげると喜ぶわ」

ブーン、と、かすかな震動があり、少女の瞳が光沢を帯びるのがわかった。次に右を向き、左を向く仕ぐさは、目覚めたあと両親を探しているといった風情。五本の指をぴんと伸ばし、相変わらずき

ょろきょろしながら、一歩、また一歩。よちよち歩きで近づいてきた。
「あなたがわたしのご主人さまですか？」
「えっ……」
「もしあなたがわたしのご主人さまなら、識別コードを音声で入力してください」
合成音には違いないが、女の子らしい自然な声。ひとつひとつの言葉にあわせて唇が動くと、小さな白い歯がのぞいた。両手を可愛らしく胸の前に組み、小首をかしげて、少女はおれの返事を待つ様子……たしかにこれはよくできている。暇な金持ちの考えることは、おれたち凡人の想像を絶する。
二葉に目顔で促されるまま、おれは少女の名を口にした。少女が数回、大きく目をしばたたく間、古風な電気ゲームをおもわせるアクセス音が聞こえた。
「認識しました。何なりとお申しつけください。ご主人さま」
テレーズは両手でスカートをちょっとつまみ、舞踏会ふうのおじぎをした。そのままもとの人形に戻ったように、ぴたりと動かなくなった。タイマーが切れたのだ。さっき一朗がパネルを操作して設定したのであって、そういった基本的な動作は他の家事用チャペックと変わらない。と、理屈ではわかっていても、おれは少なからず動揺していた。
一朗が満足げに微笑むさまは、妹とそっくりだった。
「お気に召しましたか？」
「いや驚いたね。お伽話を目の当たりにしているようだった」
けれども数十分後、おれはこれの百倍驚かせることになるのだが。むろん、このときは知るよしもなかった。
「ただ、あまり実用的とは言えないなあ。手入れも大変そうだし。前の七式みたいに、蹴飛ばしながら使うくらいがちょうどいいんだ。チャペックだとわかっていても、まさかこの子は蹴飛ばせないしなあ」

「わたしはぴったりだと思うけど。エイジさんみたいな、キノコが生えそうなやもめ暮らしには特に。こんな可愛い女の子が温かい料理を作って待っているのよ。生活に潤いが生じると思わない？」

依然、おじぎをしたまま固まっている人形に目をやり、おれはうなった。

たしかに可愛い。それは認めるが、必要以上に可愛くないか？おれは大日本おっぱい党員だから、ロリータに興味はないが、それでもこんなチャペックと同じ部屋で寝起きしていたら、いつしか目くるめくアブノーマルな世界に踏みこんでしまいそうで、空恐ろしいものがある。

だいいち、もうすぐ三十にもなろうという、むさくるしい男に、お伽話の世界は似合わない……何だかんだと渋っているところへ、一彦がトンネルから顔を出した。かれもまた監視カメラで、我々のやり取りを聞いていたとおぼしい。

「兄さん、あれをエイジさんに見せてあげたら？」

裸ダイオードの灯りしかないので、辺りはけっこう薄暗い。にもかかわらず、一彦の一言に反応して、一朗の顔がさっと蒼ざめるのがわかった。弟に比べて、じつはちょっと小心な兄の性格は知っていたが、それでもかれをここまで狼狽させる「あれ」とは何なのか。当然おれは気になった。

4（1）

4

十五分後、おれたちは変態博士の部屋にいた。

博士は八幡商店の二階に居候している。普通に訪ねれば五分とかからないところ、三倍も時間を要したのは、おれがゴネたからだ。

ガレージの二階なので、それなりに広い。博士はそこを書斎と研究室と寝室と物置に分けて使っていた。研究室はさらにいくつかに分けられ、玩具みたいな発明品から、とても口に出せないような、デンジャラスな実験まで行われているという噂だ。

もしここ、ＢＢ－３３地区が一夜にして壊滅したとすれば、それは多脚ワームのせいでも首長連合の残党のせいでもイミテーションボディのせいでもなく、博士が実験に失敗したせいだとおれは信じる。それがどんな実験なのか、夢にも考えたくないけれど。

「はん、器より中身だとか、そんな陳腐な議論に耳を貸すほど、吾輩はヒマじゃない。ただ同時に、器にこだわっている暇もないというだけでね」

キイキイとかん高い声で博士はまくしたてる。大昔の漫画から、マッドサイエンティストの絵を切り抜いてくれば、そのまま相崎博士の出来上がりである。白髪まじりのオールバック。痩せこけた頬。異様に尖った鼻に、ちょこんと載っている真円形の眼鏡。よれよれのネクタイをしめた上から、焦げ跡だらけの白衣を引きずっている。

そして鼻の下には、原始的民主主義時代の変態画家のような、ピンと斜め上を向いた時計髭をたくわえているのだった。

おれはえらく古めかしい意匠のソファの上で縮こまっていた。手には黒い液体の入ったビーカーを握って。どうやらこの生温かい液体はコーヒーであるらしく、八幡ブラザーズと妹は何のためらいもなく飲んだばかりか、呆れたことに、非常に旨いという感想までも

らした。

「こいつを飲むくらいなら、一週間断食したほうがましだ」

ワームのホルマリン漬けを見たような顔でおれがつぶやくと、すかさず博士がキイキイわめいたところで今に至る。

おれたちが座っているのは、博士の書斎であり、応接室や居間を兼ねた部屋である。悪趣味を絵に描いて額縁に入れれば、この部屋が出来上がると考えていい。

壁には鹿の首の剥製や、解剖の様子を描いた油絵がかかり、どうし見てもレプリカとは思えない、等身大の人骨がぶら下がっている。机、椅子、壁紙、絨毯などは、限定的君主制の時代からタイムトリップしてきたように、どれも極めて古めかしい。

この書斎は異様に細長く、奥まったところは闇にかすんでいる。書棚にぎっしりと詰まった本が、どこまで続くのか見当もつかない。

「で、何の用だったかな？　この頃は物忘れがひどくてこまる。神経細胞を陽子イオン化する理論さえ確立できれば、こんな悩み吹き飛ぶんだがな」

その前に地球が吹き飛ぶんじゃないか。と言いたかったが黙っていた。

博士はソファに深々と沈み、白衣の内ポケットからみょうに太い葉巻を取り出して、口にくわえた。すかさず横から助手の黒木がマッチをすり、煙草の前に炎をかざした。あのマグナム着火装置を自分では使わないのだから、呆れた発明家だ。

黒木が喋るところを、まだ一度も見たことがない。ファーストネームすら知らない。年は八幡兄弟と同じくらいか。ほっそりと背が高く、冷たく整った顔は、常に少し蒼ざめて見えた。看護婦、というノスタルジックな呼称が似合いそうな白衣を身にまとい、博士の隣でいつも微動だにせずに控えていた。謎の女である。

「ですから、エイジさんが家事用チャペック……いえ、ロボットを探しているそうなので。あれが役にたつんじゃないかと」

一朗が身振りつきでそう言った。博士は大量の煙を吐きながら、

うっとりと目を閉じた。

「ああ、あれか。完璧には程遠いが、どうにか使えるくらまでは調整できておる。接合部への不可侵率も常時八十七、八パーセントまで上昇したからな。臨界に達することはまずあるまい。そろそろ下界を歩かせてやってもいい、とは吾輩も考えていたところだ。せっかく二本の足を持って生れてきたんだからなあ……」

ちなみにおれはまだ「あれ」が何なのか、全く聞かされていない。百聞は何とやらと言われては好奇心に勝てず、ふだんなら、汚染地帯の次に避けたい博士の根城へ、しぶしぶ足を運ばざるを得なかった。

最初は変り種のチャペックくらいに考えていたが、博士の口ぶりでは、まるで二本足の原子爆弾の話でもしているように聞こえる。おれは不可解な身震いにみまわれた。現に、原子爆弾よりもっと恐るべきものが、目と鼻の先に横たわっていたのだが……博士は目を細めに開いて、銀縁の眼鏡の光沢よりも鋭く、ギロリとおれを睨んだ。

「きみの手に負えるかな?」

陳腐な言い回しだが、カチンときた。おれだってその気になれば、軍事用チャペックくらい自在に操れる。一般人が夢想だにできないような、ロストテクノロジーの知識もある。ただ面倒くさいから知識をひけらかさないだけで。だてに処理班に在籍していたわけではない。

だから、墓穴を掘った。今ならまだ逃げ出せたのに、最後のチャンスを逃してしまった。

「手に負えるか負えないか、見せてもらわなければわかりませんよ。案内してください」

4（2）

憤懣やるかたない、といった調子でおれは席を立った。一朗が当惑した目線を弟に送り、一彦は片目を閉じて応えた。この、兄弟の瞬間的なやりとりを見てしまったおれの胸に、雷雲のごとき不安が広がった。が、もはや後には引けない状態。

「黒木くん、案内したまえ。吾輩もあとから行く」

それまで直立不動を維持していた黒木の体が、ゆらりと揺れて、おれのほうを向いた。相変わらず一言も発しないまま、ついて来るよう目顔でうながす。

白い背中に従いながら、彼女こそチャペック、いやロボットではないかと考えた。感情というものが全く感じられない。その点に関しては、ロボット以上かもしれない。例の七式に至っては、機嫌がよくない時の料理は確実にまずかった。意志とまでは言わないが、感情が流れているような気がしていた。

ぎっしりと本が詰まった書棚の間を、ずっと奥へ進んだ。床には大邸宅の廊下に用いるような、細長い緋色の絨毯が敷かれていた。一箇所だけ、剥き出しの壁に銅版画がかかっていた。白い髭を床まで垂らした男が、古めかしい実験器具に埋もれかけ、周りを妖怪どもが飛び回る。中世といわれる時代の科学者……

当時、かれらは錬金術師と呼ばれていた。

突き当たりに、鉄の扉がひかえていた。思いきり眉をひそめたのは、汚染地帯を封鎖する扉とそっくりだったからだ。

黒木は扉についたカバーを開けて、数字キーに暗証番号を入力した。次に、巨大な金庫をおもわせるハンドルを握ると、細い体に不似合いな力を込めて、きりきりと回した。扉が内側へスライドするとき、そのぶ厚さに、あらためて驚かされた。蒼い光とともに、白い冷気がわーっとあふれ出た。

事実、その中は冷蔵庫なみに冷えており、おれは思わず首を縮め

た。蒼い照明は薄暗く、ぶーんという音が腹の底まで響くようだ。たいして広くもない空間に、様々な機械がごちゃごちゃと積み上げられ、床はコードやチューブの類いで足の踏み場もないほど。無数の計器が明滅し、得体の知れない溶液が、ガラスの中でごぼごぼと泡を吹いていた。

実験室の中央に横たわるのは、楕円形のカプセル。金色の、古めかしいバスタブを二つ上下に合わせたように、ぴったりと閉ざされている。ゆえに中は確認できないが、明らかに人一人横たえるのに、ちょうどいい大きさ……黒木に尋ねてもむだだと思い、おれは八幡ブラザースをかえりみた。

「この中に？」

兄弟は同時にうなずいた。一彦は不敵に微笑み、一朗の顔は引きつっていた。

カプセルはどことなく、貝殻をおもわせた。金色の貝殻が二つに割れて、いったい何があらわれるというのか……

「きみは処理班にいたそうじゃないか」

ぎょっとして振り向いた。いつのまにか相崎博士が立っており、銀縁眼鏡の上から、凍りつくような眼差しをじっと注いでいた。おれは強いて笑おうとしたが、右の頬が痙攣したばかり。

「昔の話です」

「気取りなさんな。少なくとも、三頭委員会の時代より前でなければ、昔とは言わんよ」

今度は左の頬が痙攣したが、笑おうとしたのではなく、怒りの爆発を抑えたためだ。処理班時代のことは話したくないし、思い出したくもない。まして茶々を入れられるなど、断じて我慢ならぬ。けれど、そんなおれの感情にはお構いなしに、博士は語をついだ。

「まあ、曲がりなりにも処理班にいたのであれば、きみはＩＢの専門家であったわけだ」

ＩＢ。あるいは、イミテーションボディ。何度耳にしても戦慄を誘う言葉だが、博士の口から出るとなおさら、まがまがしく響いた。

あり得ない話だが、まるで博士自身が、かれらの誕生に一役買っていたかのように。

イミテーションボディという存在、もしくは概念を、一口に説明するのは難しい。むしろ、極彩色のパルプマガジンにおいて、三文画家が腕をふるうような、通俗的な怪物を想像したほうが手っ取り早いかもしれない。現に、おれは処理班時代、まさにそういった怪物を何度も目の当たりにしてきた。

例えば、カマキリという昆虫は絶滅して久しいが、まさにあれとそっくりなＩＢと出くわしたことがある。ただし、牛二頭ぶんくらいの大きさがあり、複眼は四つ。全身は金属でコーティングされ、胸部には六対の巨大な鎌をたずさえていたけれど。その姿はまさしく、最も進化した死神といえた。

「今さら、おれが説明するまでもありませんよ。第二次百年戦争初期に投入された、言語道断な生物型殺戮兵器……」

人間がかれらを制御できなくなるまで、さほど時間はかからなかった。ひとたび暴走が始まると、もはや誰にも止められず、百年にわたって、殺戮と破壊を繰り返した。改造された遺伝子の命ずるままに。人間への憎悪に、ひたすら駆りたてられて。

極めて皮肉な話だが、イミテーションボディに対抗するためには、生き残った人間たちが、国境を越えて結束する以外なかった。勝敗もうやむやなまま戦争は終結し、人間対ＩＢの戦闘が繰り広げられた。それは史上類を見ないほど酸鼻を極めた、血みどろの死闘だった。

戦後五十年を経て、人間たちはかろうじて自身の領域から、ＩＢを締め出すことに成功した。けれど、むろんかれらが滅びたわけではない。汚染地帯と呼ばれる荒地にかれらは棲息し、隙をうかがっては、常に人間の領域への侵入をこころみた。

改造された遺伝子の命ずるままに。人間への憎悪に、ひたすら駆りたてられて。

4（3）

「よもや専門家のきみまでが、ＩＢをパルプマガジンの挿絵と同列には考えておるまいね」

「専門家といったって、ぶち壊すほうの専門ですからね。肉屋が動物学者ではないように。兵士が哲学者とは限らないように。おれがイミテーションボディの本質について知る必要は、全くないわけです」

「はん、うまいこと言ったつもりだろうが、詭弁もいいところだ。ＩＢとは剥き出しの真理だよ。謎そのものでありながら、答えでもある。相対する者を取り込まずにはおかない。だからきみに話を振ったのだ」

おれは答えず、左の頬が痙攣するにまかせた。ともすれば鮮明によみがえりそうになる、死んだ妻の面影を、脳裏から遠ざけるだけで精一杯だった。

相崎博士は両手をポケットに突っ込んだまま、追いつめるように、じわじわと距離を縮めた。黒木が動いて、再び背後のドアを閉ざした。地区ごと封鎖するのに使えそうな扉を、よくあの細い体で開け閉めできるものだ。と、少し気がまぎれたところで、ようやくおれは口を開いた。

「あなたにいくら茶化されようと、昔のことは昔のこと。今は考えたくないんですよ。あの存在については」

「ほう。それは気の毒な」

「気の毒だと？」

部屋じゅうのコードで、博士の首をしめてやりたい衝動を、かろうじて抑えた。おれが処理班を辞めた理由を、この男が知るはずがない。八幡兄弟にさえ話していないのだから、知りようがない。にもかかわらず、最も触れてほしくない傷口に、ぐさぐさと言葉の刃物を突きたてる技術は、天才的といえた。

十数秒の睨みあいの末、博士は声をたてて笑った。耳ざわりな、金属質の笑い声が、異様な室内にこだまを返した。まるで錬金術師の使い魔どもが、銅版画の中から抜け出して、キイキイとこの部屋を飛び回るように。

「我々はどうしようもなく傲慢な存在だ。自由意志で物事を決めているように錯覚しているが、じつは違うのかもしれないな。きみ、素手でビッグバンを止められるかね？　まあそう怖い顔をしなさんな。きみがここへ来たのも、偶然という名の必然であったと、吾輩は言いたいのだ。家政婦ロボットを探しているのだったな。黒木くん、彼女を紹介してあげたまえ」

黒木は無言でおれの横をすり抜けると、カプセルの前に立った。扉の暗証番号を入力した時と同じ無表情、無感動な動作で、かたわらのキーボードを叩いた。がくん、と重い反応があり、脇に取り付けられた太いアームによって、金色のカプセルの蓋が徐々にせり上がっていった。隙間から白い冷気があふれ、床にたなびいた。

培養液のにおい。

おれは思わず身を乗り出した。

培養液はカプセルの縁までなみなみと張られ、みずから蛍光を発していた。中に横たわる、真っ白い、ほっそりとしたシルエットがみとめられた。

まだ十三、四歳くらいの、少女の裸身だ。成熟しきっていない。春が来て莟はほころんだけれど、まだ開ききっていない花弁のような、甘美なもどかしさ。短く切り揃えた髪が培養液の中で、微風になぶられるように、さらさらと揺れていた。

愛くるしい顔だち。唇にはうっすらと笑みを浮かべ、カゲロウのように夢の中をただようのか、薄い瞼を静かに閉じていた……おれはつぶやいた。

「ちょっと待て」

「パルスは全てＣＮＣ溶液を介して行き来しておる。噂には聞いておったが、いやはや驚愕の化合物だよ。もし発掘された時点で液漏

れを起こしていたら、吾輩といえど、手も足も出なかったことを告白しておかねばなるまい」

「だからちょっと待て」

「それでも難題は山積みされていた。何といっても危険だった。いわば戦時中の不発弾を掘り起こし、実験室に持ち込んだようなものだからな。それも特A級の大量殺戮兵器さ。起動させたが最後、どこまでもどこまでも暴走しないという保障はない。いや、むしろそうなる確率のほうがはるかに高かった」

憑かれたように、古いオペラでも口ずさむように博士はまくしたてた。おれはかたわらの、頑丈そうな機械の側面を思いきり叩くことで、終わりのない戯言を中断させた。

「待てと言ってるだろう！　何だこれは？」

少女の表情が、培養液の中で、びくりと強ばるのを見た。音に反応したとしか思えなかった。狡猾なフクロウのように、相崎博士は小首をかしげた。

「愚問だな。さっきから、さんざん説明しておる筈だが」

「黙れ。詭弁を弄しているのはどっちだ？　おれはあんたが嫌いだが、少なくとも軽蔑はしていなかった。ろくな実験はしないにせよ、非人道的なマネだけはやらない男だと買いかぶっていた。ところがどうだ。こいつは悪魔の所業じゃないか？　場末に巣食う、悪魔に魂を売ったマッドサイエンティストどもと、あんたは同類だったわけだ」

けれども博士は顔色ひとつ変えず、冷たい表情に薄笑いすら浮かべて、静かに首を振った。まるでどうしようもなく頭の鈍い教え子を前にした、数学教師のように。

4（4）－5（1）

「ならば問おう。いったいきみは、彼女をどのような存在と考えておるのかね」

おれは改めてカプセルの中身を見下ろした。蛍光を発する培養液は、まるで少女自身の輝きを伝えるようだ。一糸まとわぬ……と思っていた彼女の左手首に、ごく細い、金属の腕輪らしきものがみとめられた。プラチナに似た質感。象形文字をおもわせる浮き彫りがあり、唯一、この部分にだけ数本のプラグが接続されていた。

彼女の表情は少し硬くなっていた。眉間に小さな皺を寄せ、光る液体の中で、わずかに身をのけぞらせたさまは、苦悶するようでもあり、恥らっているようにも思えた。

「合成ゲノムを用いた人造人間だ。ほかに考えようがない」

いや、ひょっとすると、「普通の」クローンである可能性も高い。そう考えたのは、左手首の腕輪がみょうに気になったからだ。何らかの理由で「手首だけになった」少女の、本体のほうを再生させたのかもしれない……いずれにせよ、非人道的な所業には違いない。

相崎博士こそ、現代のフランケンシュタインであり、プロメテウスの亡霊ではないか。

「当たらずとも遠からずと言っておこう。しかし頭脳の回転が極めて緩慢な点はともかく、きみくらいばか正直なほうが、彼女を託すには向いているのかもしれないな」

「託すだと？　おれのやり方でいいのなら、遠慮はしない」

ジーンズのポケットからＭ３６を抜いた。少女の心臓に狙いをさだめ、親指で撃鉄を起こした。博士が眉間に皺を寄せた。その哀れむような表情に、不本意ながら、おれは少々たじろいだ。

「いやはや、呆れてモノが言えんよ！　きみの脳細胞はピルトダウン人の化石かね？　いったい処理班にいて何を学習したのやら」

「こうするのが彼女のためだ」

「それこそ、傲慢極まりない人間のエゴだと思わんのか。まあ、撃ちたければ撃ってみたまえ。そんな玩具が、ニッケルコイン一枚ぶんの役にも立たんことくらい、きみが一番知っている筈だがね」

おれは銃口の先を見つめたまま、これ以上ないほど目を見開いていたと思う。

極めて緩慢な頭脳の回転が、ピルトダウン人の化石なみの脳細胞が、ようやく一つの事実の前にたどり着いていた。

なかば無意識に、悪夢から逃れようとするかのように、首を振ったのは、ほかのアイデアを懸命に探そうとしたのだろう。けれど、直感という名の制御不可能な力が、最も信じ難い、信じたくない、驚嘆すべき事実の前に、おれを連れ戻すのだった。

「まさか……」

「その、まさかさ」

不敵な笑みを浮かべた博士の顔が、眩暈の中で揺らめいた。圧倒的な力で、おれの視線は少女の、無垢としか言いようのない裸身の上に引き戻された。脳裏で一つの単語が、烈火のごとく燃え上がる気がした。

イミテーションボディ！

5

八幡ブラザースは語る。

「カプセルを掘り起こしたのは、およそ二月前。区域の北の郊外でした」

「アハハ、一朗兄さん、エイジさんにまで嘘をつかなくてもいいだろう。境界線よりも十キロ近く先でしたよ。もちろん汚染地帯に入っています。でも北のあの辺りは、比較的汚染が軽微で、近年はＩＢも全く確認されていませんからね。事実上は緩衝地帯と考えてよいでしょう。そうしてぼくたちジャンク屋にとっては、宝の山でもありました」

「その日は、二葉の学校が休みだったもので、店番を妹にまかせて、珍しく一彦と二人で出かけました。北の境界は警備が甘く、フェンスも老朽化しているため、抜け道は複数確保してあります」

「例えば、フェンスに突っ込んだまま干からびている、二十メートル級の多脚ワームがありますよね。じつはあの虫の体内が、いい感じにトンネルになっているんです。死骸とはいえ、無数の脚を突き出したワームの口に飛び込もうなんて、誰も考えませんものね。でも、うちのトラックくらいなら、わりとスムーズに通れるんですよ」

一説によると、多脚ワームは退化したイミテーションボディと考えられていた。ワーム類の中では、兇暴性、攻撃力、再生力、どれも桁違いに突出しており、最も恐れられている害虫のひとつだ。もちろん、駆除対象の第一種に指定されていた。

5（2）

弟の語を兄が継いだ。

「五キロ以内はあらかた調査済みなので、もう少し遠出してみることにしたんです。一応用意してはいましたが、十キロ以内なら、防護服もいらないだろうとタカをくくって」

「なにせ初めての場所ですから、ぼくたちは当てずっぽうに車を走らせました」

「辺りは雑草に埋もれかけた瓦礫の原で、トラックの強化タイヤはパリパリと、常に何らかの障害物を粉砕しながら進みます」

「シートにもたれて、ぼんやりとリアウインドウを眺めていたぼくは、急に跳ね起きて、ハンドルを握る兄の肩を叩きました。一軒だけ、ぽつんと建っている家を見つけたのです」

「教会のような工場みたいな、みょうてけれんな建物でしたね。ジャンク屋のカンといいますか、一目で『これは』と思いましたね。瓦礫を割りながら、どうにか建物の近くまで車を寄せました。ガス爆発でも起こしたように、屋根が半分吹き飛んでいて、全体はびっしりと蔓草に覆われています」

大気汚染と温暖化によって季節は狂い、一年の四分の三を夏が占めるようになっていた。夏と冬の間に、春と秋は存在せず、ゆえに二月前といえば、まだ夏の盛りだった。

「さっそく車を降りようとした兄の腕を、ぼくはつかみました。目の前のポーチで、蛇腹草が毒々しい、赤い実をつけていたからです。周りと異なり、この建物の中だけ、いちじるしく汚染されている可能性があります。目配せして防護服を着こみ、高圧ガス銃を装備しました」

「玄関のドアを蹴破るのは造作ありませんでしたよ。空爆を受けたみたいに、中はがらんどうで、壁はあらかた吹き飛び、二階の天井から一階の床まで、吹き抜けになっていました」

「小型のワームが数匹這っているだけで、やばそうな生き物の気配はありません。そのかわり、めぼしいものも何もなくて、拍子抜けしたように、顔を見合わせました」
「引き返そうとしたところで、急に足もとがぐらついて、おれは思わず叫び声を上げて倒れました」
「振り向くと、床の石畳がすり鉢上に陥没しています。ぼくはトラックまで走り、大きなハンマーを取ってきました。思いきり打ち下ろすと、案の定、四角い穴がぽっかりと口を開けました」
「よほど深いのか、中は真っ黒です。覗きこむと、冷気がひんやりと顔にかかります」
「ハンマーを捨てて、懐中電灯で中を照らしました。礫で組まれた四角い壁が、はるか下まで垂直に伸びているようです。壁には、鉄の梯子が打ちつけられていました」
「一彦が降りようとするのを、おれは慌てて引き止めましたよ。なにしろ、ここは汚染地帯です。人間の領域ではありませんから、何が潜んでいるか、知れたものじゃありません」
(お宝が詰まっているかもよ)
(よく聞け一彦。むかしむかし、一人のミイラ取りがおってな)
(わかったよ。心配性だなあ、兄さんは。安全ベルトとロープを持ってくるから、何かあったら引き上げて)
「エイジさんもご存知のとおり、おれの右腕は強化アームですからね。しぶしぶOKしたんです。弟のやつは、するすると身軽に下りて行きます。懐中電灯の灯りは揺れながら、たちまち闇に呑まれました」
「ゆうに四、五階建てのビルくらいの深さはありましたね。底までたどり着くと、飛び上がるほど冷たい水が、くるぶしまで溜まっていました。梯子の向かい側に横穴があり、やはり礫で囲われていて、身を屈めれば支障なく進めそうです」
「ロープの動きが急に止んだかと思うと、今度はずっと緩やかに解け始めました。それも一分とたたないうちに、またぴたりと止まっ

たんです」
「横穴の突き当たりに、木の扉がありました。場合によってはハンマーを投げてもらうつもりでしたが、材木がすっかり腐っていたらしく、簡単に蹴破ることができました。中は意外に広く、弓形の天井に光を向けると、コウモリが驚いて、わらわらと飛びたちました」
　そこは地下の礼拝堂をおもわせたという。朽ちかけたベンチが並び、横に聖歌隊席が、奥には祭壇らしきものがみとめられた。ぼろぼろの垂れ幕。落下した額縁。石畳の床を黒々と満たす水の上で、懐中電灯の光ばかりが、散り散りに乱れた。
「神様の像はひとつもありませんでした。かわりに、銀の板をくりぬいたような、奇妙なシンボルマークが、祭壇の奥の壁にかかっていました。そうですね……ちょうどアルファベットのAを逆さにしたような」
　おれは目を見張った。
　まぎれもなく、ツァラトゥストラ教のシンボルではないか。
「カプセルを見つけたのは、祭壇の中です。蝋燭や供物をのせる台の下で、半分水に漬かっていました。いい地金になりそうですが、こんな金属の塊、とても一人では運べませんから、ロープを結んで、兄に引き上げてもらいました」
「すっかり苔むして汚れきっていましたが、こすってみると、きらきらと金色に輝きます。掌を当てると、かすかに、ぶーんという震動が伝わってきます」
「いったいこれが何なのか、二人ともさっぱりわかりませんでした。そこで毛布でぐるぐる巻きにして持ち帰り、二階の相崎博士に鑑定を依頼したというわけです」
　こうして無邪気で愉快な八幡ブラザースは、パンドラの箱を持ち帰ったのである。

6（1）

6

自分が絶叫していることにさえ気づかなかった。

目の前で、五発の弾が瞬く間に撃ち尽くされるのを、遠くのできごとのように眺めていた。

少女は目を閉じたまま。その静かな寝顔に、かすかに哀しみの色がうつろった。

まるでスローモーションの映像のように、少女の左手が突き出されるのを見た。プラグが次々と引きちぎられ、ほっそりとした左腕が、湖底に潜む未知の爬虫類のように、培養液から浮上した。腕輪が眩い光を発したかと思うと、手首から先が、五本の鋭い刃をそなえた、複雑でまがまがしい機械へと変化した。

Ｍ３６が撃ち出した五発の弾丸は、鋼の刃によってことごとく粉砕され、カプセルの外に飛び散っていた。

（胡桃割り人形）

混乱を極めた脳裏に、脈絡のない単語が浮かんで消えた。おれは汗にまみれ、荒い息を吐きながら、それでも目を逸らせずにいた。再び腕輪が輝き、鋼の粉砕機の形状が崩れて、ふっくらと白くて柔らかな、五本の指に戻っていった。その手はまるで、おれに救いを求めているようだった。

培養液の中から、少女は目を見開いて、じっとおれを見つめていた。

再び絶叫がほとばしった。

数秒間、今どこにいるのかわからず、闇の中で目をしばたたかせた。

見慣れた蒼い薄闇。空気清浄機の低い震動……半身を起こすと毛

布が床にすべり落ち、かわりに冷たい空気が身にまとわりついた。それでいて、寝汗をびっしょりとかいているのだ。

カーテンは閉まっているが、常夜灯の蒼い光が入り込み、ものの形をおぼろげに浮かび上がらせた。まぎれもなく、おれの部屋だ。シャツとジーンズを着たまま、ソファの上で眠っていたらしい。胸ポケットを探ると、くしゃくしゃにつぶれた煙草の箱があらわれた。

一本取り出し、火をつけず口にくわえた。硝煙のにおいを記憶から追い払うため、軽く頭をふった。

少女の片腕がゆっくりと液の中に沈んだとき、薄い瞼もまた閉じられていた。それでもガラスのようにうつろで、小動物のように無心な鳶色の瞳の残像が、悔恨の中で胸をえぐった。

「気がすんだかね」

おれの指から、Ｍ３６が床にすべり落ちた。ごとり、という音が空虚なこだまを返した。

「いったい……なんだって……こんな」

「不用意に驚かせたことは、素直に謝ろう。ＩＢの恐ろしさを知り尽くしているきみだ。ただし彼女は、きみが考えているような野生種の自己進化型とは、根本的な出自が異なる」

ぼんやりと、相崎博士に目を向けた。かれの顔が白く滲んで見えたのは、おれが涙を流したせいだろう。恐ろしかったのだ。

「自己進化型ではない？」

「さよう。彼女の全身のうち、真にＩＢである部分は、きみも目にしたとおり、左手首から先だけだ。そこに野生種が一体、まるごと封じこまれておる。残りの部分は、いわばコピーされたＩＢと考えてよろしい」

頭をめぐらして、粉砕された弾丸を目で数えた。破片のひとつは床に深々と突き刺ささり、あるものは計器のガラスをまっぷたつにしていた。博士は続けた。

「きみはさっき、合成ゲノムの名を口にしたが、ちょうどあれと似

たやりかただよ。ただし、実験室で合成されたのは人間ではなく、ＩＢの遺伝情報だがね」

「何のために？」

「もし政治的な思惑についての質問なら、わからないとしか答えようがない。吾輩は一介の科学者に過ぎないのだから。まあ製作者側の善意を前提に考えれば、対ＩＢ用の兵器として、これほど強力なものはあるまい」

「少女の姿に似せる意味がわからない」

「そのほうが汎用性は高くなるだろう。同じ能力をもつのなら、何も好き好んでグロテスクな形体をとる必要はない。むしろ外見は無力さを装ったほうが、様々な点で有利に運ぶ」

「汎用性、か。大立ち回りから暗殺まで、何でもこいというわけだ……それで、なぜこの子をおれに押し付ける気になった。八幡兄弟に入れ知恵したのも、あんたなんだろう？」

ありがたいことに、ジーンズのポケットを探ると、ちゃんとライターが入っていた。煙草に火をつけても、炎は消さず、部屋の奥へ目をこらした。壁際のベッドが、ぼんやりと眺められた。その上で、毛布にくるまって横たわる、華奢な体の線も。

6（2）

壁のほうを向いて、その体は横たわっているらしい。ほんのわずか、背中をまるめて。毛布で顔を覆うようにして。

ライターの炎に映えて、髪の毛がしっとりと光沢を宿す。エナメルをおもわせるが、金属的な硬さは感じられない。呼吸にあわせて、肩がかすかに上下する。羽毛のような寝息が聞こえた気がした。

（イミテーションボディも、夢をみるのだろうか）

炎を消すと、ほっそりとしたシルエットはまた闇に覆われた。まるで、夢そのもののように。

「極めて情緒的な問題からだよ。ヒトは所詮、情緒という飴玉をしゃぶっていなければ、せちがらい世の中を生きるに忍びない、じつに脆弱な生き物だ」

「おれがこの核弾頭より危険な女の子の、お守に向いていると？」

「いかにも。娘にするにはちと大きすぎるが、年の離れた妹くらいに考えれば、かわいいものだろう」

冗談じゃない。おれはそうつぶやいて、拳を握りしめた。何が情緒だ。さっき彼女の左手が瞬く間に変形して、弾丸を木っ端微塵にするのを目の当たりにしたばかりだ。そこには、イミテーションボディがまるごと一体、封じこめられているという。

「カプセルごと、地中深く埋めてしまうのが最善策だ。北の境界から二十キロほど行ったところに、廃坑があるだろう。あそこに放りこんで、上からハッパをかければいい」

「はん、たとえ日本海溝に沈めても、その気になれば、この子は自力で這い上がることができるよ。そうして、この子のような存在を誕が出るほど欲しているヤカラに、みすみす利用されるのがオチだ。次にきみが彼女と会うとき、これほど友好的な対面になるとは限らんよ」

返す言葉がなかった。
おそらく、そのとおりだろう。古い諺にもある。一度動き始めたIBは、誰にも止められない、と。
「酷なようだが、エイジくん。運命だと思ってあきらめるんだな。今すぐきみは二つの選択肢のうちの一つを選ばなければならない。すなわち、彼女を味方につけるか。それとも、敵にまわすか、だ」

闇の中で煙草を吸うのが好きだ。ほんの鼻先で、蛍火ほどの炎が楽しげに瞬き、次に紫煙が宙を舞う。眠れぬ夜にあらわれる、羊たちの亡霊のように、煙は闇の中でジーグを踊る。
もし眠れぬ夜が訪れたとき、彼女は何を数えるのだろうか。

今をときめくメタルスター、ジギー・バンデル・ルーデンの超絶テクをおもわせて、キーボードを叩く黒木の指は見えなかった。漆黒の夜のようなモニターの中を、白い数字や記号が星の数ほど流れてゆく。
このいかにも旧式のノート型コンピュータは、少女の眠るカプセルに直に接続されていた。さらにもう一台の、似通ったコンピュータがそれに繋がれ、こちらのモニターでは無数のポリゴンが描き出す少女のシルエットが、刻々と変化するグラフや数値に囲まれて、ゆるやかに回転していた。
一時間近くも、キーを叩く音だけがうつろに響いていた。そしてかなり唐突に、黒木の指がぴたりと止まった。おれの顔を注視しているが、相変わらず一言も発しない。代わりに博士が口を開いた。いつになく、緊張に上ずった声で。
「セットアップ完了だ。起動させるには、きみが名前を考えなきゃいかん」
「名前を？」
「もちろん、この子の名だよ。決まったら、そっちのモニターに手をかざしてくれ」

当然おれは戸惑った。子供どころか、仔猫さえ飼ったことがない。人生において、何かに名前をつける経験なんて、これが最初ではあるまいか。黒木は感情のない目を、対して博士は好奇の眼差しを注いでいる。額に汗を浮かべたまま、おれは目を閉じた。

（この花が一番好きなの）

単調なメロディが、頭の奥で鳴っていた。玩具のピアノを叩くような、あるいはよちよち歩きをするような、たどたどしい音……おれは目を開き、こくりとうなずいた。

モニターからはいつのまにかポリゴンが消えて、ほとんど真っ白になっていた。そっと右手をかざすと、そっくり同じ輪郭があらわれた。黒木に目で促され、おれは手をかざしたまま、カプセルの中を覗きこんだ。

名を呼んだ。白い光があふれた。培養液の中で、少女はゆっくりと目を開き……

花のように微笑んだ。

7（1）

7

……ぶうううーーーんんんーーーんん……。

どこかで翅つきワームが飛び回っていた。いやそれとも、時計が鳴っているのだろうか。しかし、こんな妙てけれんな音をたてる時計など、存在するとは思えないが。

眠気が深い霧のように纏わりついていた。百年も錆びたままの鎧戸みたいに、瞼が重かった。

……ぶううーーーんんんーーーんん……。

不可解な音は、しだいに近づいてくるようだ。渾身の力で薄目を開けると、容赦なく白い光が飛び込んできた。なんてこった、カーテンが開いているのか。おまけにすっかり陽が昇っているというわけか。

夜行性の吸血虫が日光を嫌う気持ちが、今こそ理解できる気がした。ここのところずっと仕事がなかったせいで、おれの生態もやつらと似たり寄ったり。日の光を避けて、闇にうごめく。あとは血を吸うか吸わないかの違いしかない。

猫のように虹彩を調整しながら、少しずつ瞼をこじ開けた。ほっそりとした二本の脚が、目の前に並んでいた。レースに縁どられて、太腿もあらわに、白い長靴下につつまれて。

なるほどこれは女の脚だ。それもまだ少女らしい。きっとこちらに尻を突き出す恰好で、前屈みになって何かしているのだろう。翅つきワームみたいな音をたてながら……霧の中に、昨夜の記憶の断片が、ぼんやりと浮かんだ。

（エイジさんは先に戻られてください。追ってお届けにあがりますから）

あの悪夢のような研究室で、そう言ったのは一朗だったか一彦だ

ったか。

とにかくおれは疲れていた。何を考えるのも面倒だった。八幡兄弟の提案を、わたりに船とばかりに帰宅した。電灯をともしたまま、上着だけを脱ぎ、帰り道で買った合成ビールと毛布をソファの上に持ちこんで、ぐったりと身を沈めた。時計を見ると、十一時を回っていた。部屋の鍵は開けっ放しにしておいた。

間もなく記憶が途絶えて、次に目を覚ましたのは真夜中とおぼしい。電灯は消えて真っ暗だった。眠っている間にブラザースが訪れ、「納品」して帰ったのだろう。煙草を吸うために火をつけると、ベッドの上に横たわる、華奢なシルエットがみとめられた。煙草を一本灰にして、おれはまた目を閉じた。

……ぶうーーーんんんーーーんん……。

唸り声の余韻を残して、音が止んだ。ふんわりと、レースがひるがえり、たっぷりと結んだ白いリボンが揺れた。

「お目覚めになったのですね」

見知らぬ少女が小首をかしげていた。

肩をふくらませた濃紺のワンピース。フリルのついたエプロンが、童話的で可愛らしい。この服装に、けれどおれは見覚えがあった。たしか新東亜ホテルで働く、客室係のメイドの制服ではあるまいか。

首長連合の時代、新東亜ホテルはなかば官営の施設で、首長かその血族以外泊まれない、高級ホテルだった。人類刷新会議が政権を握ると民営化されて、庶民も無理をすれば泊まれる程度には、料金が下げられた。二葉がそこでアルバイトをしていたのだ。

希望者が多いため、倍率がすごかったらしいが、それだけ給料がいいのだろう。採用が決まった時は彼女も喜んで、おれに制服を見せびらかしたものである。

しかしどう考えても、ここは高級ホテルとは似ても似つかない。キノコが生えそうなおれの部屋に違いない。少女が手にしているのは、おそろしく旧式の電気掃除機のノズルらしい。なるほど、あれは掃除機の音だったのか。けれど、そもそも由緒正しき新東亜ホテ

ルのメイドが、こんな所でキノコ人間の世話を焼く道理など……

「わああっ！」

おれは跳ね起きた。ソファの背を乗り越えて、後ろに転げ落ちた。こんなヤワな素材が盾代わりになるとは思えないが、一秒くらいは時間が稼げるだろう。ポケットからＭ３６を引き抜き、銃口を床につけたまま、トリガーに指を添えた。弾薬はすでに装填してあった。

少女はくるくると目をまるくした。

「どうかなさいましたか？」

「きみは……」

イミテーションボディ。

と、言おうとして口をつぐんだ。いや、髪形といい顔立ちといい、確かに昨夜、培養液の中で見たのと同じ少女である。けれど、弾丸を粉砕したときの凄まじい殺気が、今は微塵も感じられない。あどけない少女が、無防備につっ立っているだけである。おれが銃を構えていることなど夢にも知らないような、はにかんだ表情で。

7（2）

おれは混乱した。あの狂気の実験室で、カプセルの中に横たわっていたからこそ、恐ろしげだったが。今こうして、エプロンをつけてもじもじしているところは、普通の、いや普通以上に可愛らしい女の子にしか見えない。

だがしかし、これが擬態に過ぎないことは、ゆうべ思い知らされたばかりではないか。彼女が超殺戮兵器であればこそ、外見は無力さを装ったほうが何かと有利にはたらく。それこそ新東亜ホテルの客室係のふりをして、泊まり客の要人を、強化人間のボディーガードごと抹殺することもたやすい。とはいうものの……

「あの、お食事になさいますか？　すぐにご用意できますけど」

少女のこまったような顔を見ていると、さすがに居たたまれなくなる。いじめているような気がしてくる。変態博士ではないが、ヒトはなんと情緒に弱い生き物か。

「きみは、その……おれに危害を加える意志はないのか」

我ながら間の抜けた質問だ。もしそのつもりでも、ハイと答えるばかはいない。少女は、本当にわけがわからないといったふうに、また小首をかしげた。

「マスターがそれをお望みになるのですか」

「は？」

「マスターがそれを望まれるのでしたら、ご命令どおり致します」

少女の目つきが変わった。掃除機のノズルを放り出し、素早く片膝をついて、左手を突き出した。こちらへ向けて真っ直ぐ伸ばされた指が五本とも、ハガネ色の、鋭い円錐形に変化した。

「わあっ！　望んでないし望んだ覚えもないし金輪際望まない！」

「では何をお望みですか」

「そ、そうだな。いっ、一服しよう。うん、そうしよう。コーヒーでも紅茶でも梅昆布茶でも何でもいいから、とっ、とりあえず淹れ

てくれないか」

そう言ったとたん、目の表情が和らいだ。左手が瞬く間に復元し、上品な仕ぐさで立ち上がると、両手でスカートをちょっとつまんでお辞儀した。

「かしこまりました」

胡蝶のような白いリボンを、ふわりと揺らして、キッチンのほうへ行きかけ、思い出したように立ち止まった。おれの心臓が一秒ほど止まったが、振り向いた目つきは柔和だった。

「伝言がありました。十一時ごろ、八幡商店さまがお見えになるそうです」

彼女の姿が見えなくなると、おれは床にへたりこんだ。鼓動が高鳴り、汗でシャツが貼りついていた。時計に目をやるとまだ九時すぎ。最近のおれとしては、とんでもなく早起きだ。八幡ブラザースが来るのは、おそらく彼女の「取り扱い説明」のためだろう。けっきょく表向きは、家事用チャペックを一体、購入したことになるのだろうか。

得体の知れない超兵器を押し付けられたうえ、金までとられてはかなわないが……軽い食器の音が止んで、少女が顔を出した。

「お待たせしました。どちらでお召し上がりになりますか」

「そっちへ行くよ」

キッチンは見違えるほど片付いていた。スペースの三分の二以上を占めていたゴミの山が、奇麗さっぱり消滅し、流し台から床に至るまで、ピカピカに磨き上げられていた。ダイニングテーブルには、清潔なテーブルクロスがかけられ、鉢植えの花まで飾ってあった。ユリの花に似た赤い……

（この花が一番好きなの）

頭の中で、たどたどしいピアノの音が鳴り始め、おれは思わず、こめかみを押さえた。白い霧の向こうで、柔らかな笑顔の幻影が揺れた。赤い花。妻が一番好きだった……

「……アマリリス」

「はい」
「えっ？」
テーブルに片手をついたまま、おれは目を開けた。ユリに似た赤い花から、少女へと視線を移した。ティーカップの載った盆を手にしたまま、彼女は微笑んだ。
「昨夜、マスターにつけていただきました。わたしの名前です」
薔薇の紅茶は申しぶんなかった。比べては申し訳ないが、ナナコ七式にここまで繊細な芸当はできない。彼女は……アマリリスはまるで人間そのものではないか。円い盆を胸に抱いて、かたわらに立っている少女を見上げた。とても、人造人間とは思えない。
「きみは、その……紅茶は飲めるのか」
「はい。いただけます」
「じゃあ、きみのぶんも用意して、ここに座ってくれないか」

7（3）

アマリリスは軽くうなずき、手際よく自分のカップを用意して、目の前に腰をおろした。おれと色違いの赤いカップだし、椅子の音はたてないし、メイドの恰好をしていることも相まって、自分の部屋にいることさえ、うっかり忘れそうになる。

ソーサーごと持ち上げて、薄いカップの縁を口へ運ぶ。たしかに「美味しい」という顔をしたが、本当に味がわかっているのかどうか。そんなことも含めて、さて、何から尋ねたものか。考えてみれば、おれは彼女のことを何も知らないに等しいのだ。

カプセルが発見されたイキサツなら、ブラザースから聞いていた。しかしそれ以前の「過去」に関しては、まったくの謎だ。第二次百年戦争時に作られたらしいと変態博士は言うが、それから現在まで膨大な時間が経過している。彼女は何をしていたのか。ずっと眠っていたのか。そもそも記憶があるのか……

思わずカップの前に指を組んで、また前方に目をやった。アマリリスはカップとソーサをテーブルに戻し、おれを見てちょっと首をかしげた。お話があるのでしたら、うけたまわります、といったところか。よく機転のきく、この年頃の少女の仕ぐさそのもので、やはり夕べの出来事との接点を見失いそうになる。

八幡ブラザースが来れば、もうちょっと突っ込んだ話も聞けるだろう。が、心情的に、かれらが来る前に、彼女と少しは話しておきたかった。とりあえず、無難なところから尋ねることにした。

「きみは、その……お腹は空くのかい」

「空腹感はございません。設定を書き換えれば、それを感じることもできますが」

「きみにとっての食物、つまりエネルギー源は何だろう？」

「基本的には必要ありませんが、たまに外部から摂取するほうが望ましいようです。熱に換えられるものなら、何でも摂取できますが、

現在の設定では、マスター同様、食事による方法に最適化されています」

基本的に腹は減らないが、たまには飯を食ったほうが健康にいい、といったところか。

しかし、少女はさらりと言ってのけたが、基本的にエネルギーを必要としないという事実は、あまりにも驚異的と言わざるを得ない。それは彼女の内部にも、あの「永久機関」が内臓されていることを意味した。はからずも、おれはしょっぱなから、最も本質的な質問をぶつけてしまったわけだ。

一度動き始めたＩＢは、誰にも止められない……この諺は、イミテーションボディの根本といえる、永久機関の驚異を語ったものだ。言うまでもなく、それはエネルギーを必要としないエンジンをあらわす。理論上、このエンジンは決して止まることがない。

ゆえにＩＢは、理論上、死ぬことがない。

イミテーションボディを神とあおぐ新興宗教もあると聞く。例のカプセルが発見された地下室が、ツァラトゥストラ教と関係があるらしいことは、八幡兄弟の証言から知れた。この教団は秘密結社的な色合いが濃く、表向きは神の存在を否定し、「超人」としての再生を説く。一方で、ＩＢ崇拝の温床であるという噂もあるのだ。

むろん、永久機関とえいども、かつて人間が作り出した機械に過ぎない。ただ、現在では最大級のロストテクノロジーとみなされている。

おれの知る限り最も高い技術力をもつ、あの相崎博士でさえ、いまだにそのメカニズムを解き明かすことができない。永久機関の秘密を手に入れた者が世界を征す、と言われるくらい。人類刷新会議にせよ首長連合の残党にせよ、謎の解明に血眼になっているのだが。

「マスター」

呼ばれてびくりと顔を上げた。何度呼ばれてもなかなか慣れない。

「紅茶をもう一杯、いかがですか。それとも、ほかのものをお作りしましょうか」

「あ、ああ、ありがとう。じゃあ、紅茶をもらおうか」
メイドのほうが主人より百倍気品があるのも、考えものである。
砂糖を断り、二杯めの紅茶を一口すすって、おれはまた推理した。
アマリリスが内蔵している永久機関は、おそらく野生種のＩＢのそれと比べて、不完全なものではあるまいか。昨夜も聞いたとおり、彼女の中で、純粋にイミテーションボディである部分は、左手首から先だけであり、残りの体は、ＩＢの遺伝子に改良を加えて合成されたものだから。どうしてもオリジナルとの差異が生じてしまうのだろう。
彼女はオリジナルのＩＢではない。とりもなおさず、この事実は、おれを少なからず安堵させた。
「つかぬことを訊くけれど、きみはきみ自身を、どういう存在として把握してるのかな」
我ながら変なことを訊いたものだし、案の定、アマリリスも小首をかしげた。どうやらこれが少女の癖であるらしく、なかなか可愛らしい仕ぐさであることは、認めねばなるまい。
「ご質問の意味がよく呑みこめません」
「つまりその……ぼくにとって、きみはどういう存在なんだろうか」

8（1）

8

少女が何か答えようとしたとき、チャイムが鳴った。
時計に目をやると、まだ十時になっていない。おれは首をひねりながら席を立った。わりと時間に正確な八幡兄弟にしては、ずいぶん早いお出ましである。
「あっ、わたしが出ますから」
「いいよ。その恰好で出られると、なんだかこっちが照れくさい」
カメラつきインターフォン、などという高級なものはハナからついていない。小廊下でアマリリスを追い抜いて、何気なくノブに手をかけたとき、なんでも屋のカン、というやつか。一瞬、頭の中で警報が鳴った。
「どちらさま？」
返事がない。ドアスコープに目を当てたが、真っ暗で何も見えない。
いよいよ「やばい」と感じたところで、勢いよくドアが引き開けられた。昨夜から、鍵は開けっ放しだったのだ。身構える間もなく、胸元に自動小銃を突きつけられた。反射的に振り返ると、すでにアマリリスは猫のように身を低くしていた。
「手を出すな！　おとなしくしていろ」
今にも飛びかかる体勢から、少女が身を起こすのを確認して、おれはゆっくりと手をあげた。ガスマスクのようなものを被ったコマンドが二人、目の前に並んでいる。後ろにもう一人立っている黒服が、指揮官だろうか。コマンドの服装から、すぐに人類刷新会議の武装警官だと察しがついた。それも、テロリストの検挙を主な任務とする別働隊とおぼしい。
近頃、なんでも屋をはじめ、私的に武装した組織への風当たりが

強いのは確かだ。しかし、おれは下っ端の契約社員に過ぎないのであって、ガサ入れならワットの所へ行くべきではあるまいか。それとも、すでに事務所へは踏み込んだ後で、ついでに下っ端もしょっ引こうというわけか。

　無言でコマンドに促されるまま、おれは頭の後ろに手を組んで、中へ後退りした。最後に入ってきた指揮官は、黒いバイザーのついたヘルメットで、頭部をすっぽりと覆っていた。まだかなり若いのか、みょうに華奢な体つき。アマリリスの姿をみとめると、さすがに驚いたリアクションをみせた。

「あの子は？」

　バイザーにさえぎられて、くぐもった声は、明らかに女のものだ。

「年の離れた妹だ」

「ほう。なぜ新東亜ホテルのメイドの恰好を？」

　おれはニヤリと笑って答えなかった。じつは内心、パニックにおちいりかけていたのだが。しかしこのタイミングで、刷新会議がアマリリスの正体を嗅ぎつけているとは考えがたい。少女にメイドの恰好をさせて喜ぶ変態、くらいに思わせておくのが無難だろう。変質者の逮捕は、別働隊の管轄外なのだから。

　コマンドは二人ともおれに銃を向けたまま。まったくアマリリスを警戒していないのだから、擬態の効果恐るべし、である。素早く周囲を見わたして、黒服の指揮官が言う。

「とつぜん驚かせてすまなかった。少し話したいのだが」

「十一時にお客が来るんですがね。それまでに終わるんでしたら」

「出方次第と言っておく。ともあれ、それは預からせてもらう」

　そう言っておれに近づき、ポケットからＭ３６を抜き取った。香水のにおいがした。壁に押し付けるなり床に転がすなりして、身体検査されるのかと思っていたが、反対に彼女は、コマンドを二人とも後ろに下がらせた。おれは肩をすくめて腕をおろした。お世辞にも友好的とは言えないにせよ、いきなり身柄を拘束するつもりはないらしい。

「アマリリス、この方たちにお茶を」
ガスマスク越しに飲めるのか疑問だが、半分は皮肉のつもり。もう半分は、なるべくかれらの視界から少女を遠ざけておきたい気持ちで、そう命じた。黒服は何も突っ込まず、少女がお辞儀をしてキッチンへ向かうまで、無言で見送っていた。おれは目顔で促して、かれらを居間へ案内した。
さっきまでおれが寝ていたソファの上で、黒服は足を組んだ。いかにも武装警官らしい横柄な態度だが、間近で見ると、細くて柔らかい体の線は隠しようがない。おっぱいもけっこうありそうだ。コマンドは銃を上に向けて両脇にひかえている。小テーブルを挟む恰好で、おれは椅子にかけ、わざととぼけた質問をした。
「何かあったんですか」
「我々の素性はわかっているな？」
「ある意味で。もっとも、身分証や令状の提示が必要になるくらい、刷新さんには治安回復に励んでもらいたいんですがね」

8（2）

「残念ながら、ＩＤの提示は義務付けられていない。コードネーム『カヲリ』、とでも名のっておこうか」

黒服はそう言って、バイザーを少しだけ持ち上げた。真紅に塗られた唇が、薄く微笑んでいた。きっといい女に違いない。おれはそう直感した。

「おれのＩＤは見なくていいんですか？」

「ふん。モグリのなんでも屋なら、偽造はお手のものだろう。エイジさんとやら。以前は連合の処理班にいたそうじゃないか」

「よくご存知で」

胸ポケットを探ると、ガスマスクの一人が素早く銃口を向けた。薄っぺらな煙草の箱を、ひらひらと振ってみせたが、実際に一本取り出すまで、狙いを定められたまま。たしかに小型爆弾である可能性はゼロではないが、ご苦労な話である。その間も、核弾頭より恐ろしい超兵器が、台所でお茶を淹れているとは、夢にも知らずに。

おれは苦笑しつつ、煙を吐いた。コードネーム「カヲリ」が尋ねた。

「今でも連合と繋がりはあるのか」

「まったく」

「正直に答えたほうが身のためだぞ」

「疑うんなら、家宅捜査でも何でもすればいい。三年前に辞職して、それっきりだよ。だいいちおれは、首長の血族じゃない。ちょっとばかし給料はよかったが、連合政権時代の処理班といえば、今のあんたたちよりも、ずっと位は下なんだぜ。今さらやつらに義理立てする理由は何もないよ」

信じたのかどうなのか、カヲリは何も答えない。黒いバイザーの向こうで、どんな顔をしているのか、まったく読めない。ただ、やつらの目的が、首長連合の残党狩りらしいことは、だいたい察しが

ついた。
　ふと、レイチェルの顔が浮かんだ。次の瞬間、いやな予感は見事に的中した。
「隣は一一〇七号室だったな。住人と交流はあるのか」
「顔を合わせれば、挨拶くらいはしますがね。それだけです」
　アマリリスはキッチンに入ったきり、なかなか戻らなかった。食器の音も全く聞こえず、静まり返っている。電池切れ、という考えを、煙草とともに揉み消した。たった数時間で止まったのでは、七式にも劣る。永久機関の名がすたる。
　それにしても、レイチェルが首長の血族ではないかという疑惑は、図星だったのだろうか。相変わらず相手の表情の読めないことが、おれを苛立たせた。残り二本になった、貴重な煙草にまた火をつけた。
「隣人の名を聞いているか」
「レイチェルとか言ってましたね。学校で芝居でもやってるんですかね」
「学生だと思うのか」
「さあ。若い娘のことを根掘り葉掘り訊くのは、マナー違反でしょう。おれなんか相手にするより、隣に行って直接尋ねたらどうですか」
「調べたさ。とっくにドロンされた後だったがね」
「えっ……」
　目を見張っている間に、彼女は立ち上がった。薔薇に似た、香水のにおいが漂った。
「邪魔したな。見送りは結構。機転の利く妹さんにも、よろしく言っておいてくれ」
　カヲリが先に立ち、ガスマスク二名が後に続いた。部屋を出て行くまで、三人とも一度も振り向かなかった。ドアの閉まる音が聞こえたところで、振り返ると、盆を手にアマリリスが立っていた。紅茶ではなく、冷たい水を満たしたコップが一つだけ載っていた。

なるほど、さっき飛びかかりかけたこととといい、命令に忠実なばかりでなく、おそろしく機転が利く。おれは水をひと息に飲み干すと、盆に戻すついでに、少女の耳もとに顔を寄せた。

「おそらく盗聴器が仕掛けられたと思うが、探知できるか？」

少女は無言でうなずき、盆を小テーブルに載せて、ソファの足もとにうずくまった。間もなく、色も形もコガネムシに似た装置が差し出された。自力で潜り込めるタイプらしく、これならカヲリが一度も身を屈めずに仕掛けられたのも道理だ。おれは棒読みで言ってやった。

「おや、煙草を落としたと思ったら、こんなところに変な虫がいやがった。えい、虫め。害虫退治の専門家を舐めるなよ。こうしてくれる」

床に叩きつけ、ついでに鉄板つきのスリッパで踏みつけた。ぐしゃりと潰れる感触は、決して気持ちのいいものではなかった。

8（3）－9（1）

アマリリスを連れて部屋を出ると、一一〇七号室のドアの前に立った。ノックしたが、やはり返事はない。ノブを回して引いてみると、何の抵抗もなく開いた。チェーンもかかっていない。刷新の連中がピッキングしたに違いないが、まったく物音がしなかったのだから、プロの泥棒顔負けである。

玄関に靴は一足もなく、傘の類いも見当たらない。静まり返った小廊下の突き当たりに見えるドアは、ぴったりと閉ざされている。人が生活していた気配を全く感じないまま、廊下を進み、ドアを開けた。グリーンのカーテンがぴったりと閉ざされている以外、調度類は何もない。がらんとした四角い空間で、剥き出しの床が冷たい光沢を浮かべているばかり。

残り一本に火をつけるついでに、おれは身を屈め、アマリリスに囁いた。

「何か仕掛けられているか？」

しばらく辺りに目を走らせて、少女は首を振った。すると連中は、レイチェルがもうここに戻らないと踏んだのか。

台所も同様に藻抜けの殻で、食器や調理器具はおろか、ゴミひとつ落ちていない。ただ、蛇口からこぼれる水滴が、ぴちゃっ、ぴちゃっ、と、数秒おきに滴っている。覗きこむと、ガラスのコップがひとつだけ置き去りにされ、水が縁まで溜まっていた。

おれは煙草をくわえたまま、もう一つの部屋へ通じるドアに近づき、引き開けた。こちらもカーテンが閉められており、隣室や台所より、さらに暗く感じた。何もないのかと思えば、シングルベッドがぽつんと、壁に寄せられている。シーツが蒼白く目に映え、まるで病院のベッドのようだと考えた。むろん、上には誰も寝ていない。

お世辞にも趣味はよくないが、おれは掛け布団をめくって、顔を近づけた。女らしい、残り香があった。

「いったいどういうことだ。昨日まで、確かに彼女はここに住んでたんだぜ。夜逃げにしたって、手際がよすぎねえか」

と、アマリリスを相手にぼやいても仕方がない。急に息苦しさを覚えて、カーテンを半分開き、窓をあけた。鍵をかけなくても内側からしか開かないのは、おれの部屋と同じ仕組みだ。煙草の灰を落とすついでに、窓枠に肘をかけ、外を眺めた。郊外では、この雇用促進住宅が群を抜いて背が高く、ごちゃごちゃと建てこんでいる灰色の街並を見下ろす恰好。

首長連合にせよ人類刷新会議にせよ、二言目には復興復興と口にするが、その言葉は、いわば神様のいない教会の鐘のようなもの。むなしく響くだけだ。内戦状態は果てしなく続き、ＩＢやワームが駆逐されることはない。闇商人やモグリのなんでも屋がいなければ、ヒトの暮らしは成り立たない。

むしろ「復興」など、されないほうがよいのではないかと、よく考える。長期にわたる悲惨な戦争の果てに、イミテーションボディを生み出したのは何だったのか。悪夢のような経済力と技術力の産物ではないのか。欲望が生み出したシステムの暴走……そんなものを再構築することを「復興」と呼ぶのなら、おれは願い下げである。

空はどんよりと曇っていた。市街地のほうは、さらに濃いスモッグが降りて、灰色にかすんで見えた。丘の上のビル群は、ヨーロッパの古城のように見えなくもない。ほんの半年前までは、首長が統括する企業のオフィスが占めていたガラスの塔も、今は刷新会議に接収されて、行政府と化していた。無人の監視用ヘリが何機も、まわりを飛んでいた。

ここ、ＢＢ－３３地区に、最高府を置く計画もあると聞く。おれは軽く舌打ちして、最後の煙草を投げ捨てた。

9

本日二度めのチャイムが鳴ったのは、十一時二分前。兄弟で来る

のかと思えば、一朗が二葉を連れてあらわれた。そのうえ人が住めそうなほど巨大な段ボールを台車にのせて、無骨なチャペックに引かせていた。帽子の唾に手をかけて、一朗が言う。

「いろいろ入用かと思いまして」

「ありがたいね。段ボールの中身は全部、煙草なんだろう?」

たちまち二葉の蹴りが炸裂した。つまらないジョークへの突っ込みとしては、ひどすぎる仕打ちである。代わりに優しい兄が、黙って一箱わたしてくれた。

「きみ、学校は?」

「創立記念日よ」

おれを一睨みして席を立ち、二葉はアマリリスの世話を焼き始めた。今日は眼鏡をかけておらず、ミリタリージャケットをざっくりと着て、ジーンズを穿いていた。髪はうしろで一つに束ねてある。

「似合ってるじゃない。このまま新東亜ホテルで働けそう。窮屈なことない?」

はい、と答えて、少女は例のスカートをつまむ仕ぐさ。

「やっぱりな。きみがアルバイトで着ていたやつか」

「少し寸法は詰めたけどね。それにしても、ここで美味しいお茶が飲めるなんて、思ってもみなかったわ」

9（2）

「ああ、そのことなんだが。なぜこの子に、いきなり旨い茶を淹れるスキルがそなわっているのか、単純に疑問だ」

二葉はアマリリスの服の点検を終えると、立ったままソーサーごとカップを持ち上げた。旨そうに一口飲んで、いかにも呆れ果てた口調で言う。

「それを言うなら、会話が成り立っている時点で、疑問を感じるべきじゃない」

「ま、まあ。たしかにな……」

おれは内心、絶句していた。なるほど、たいていのチャペックには、人工知能が埋めこまれている。簡単な会話なら、たしかに成り立つ。けれどそれはあらかじめ記憶された、膨大なパターンを読みこんでいるだけであって、天気を聞けば晴れだと答えるが、雨の日に「いい天気だ」などと会話をふると、たちまち相手は混乱する。ところが、

「なあ、アマリリス、今日はどんな天気だ?」

「スモッグの影響で、だいぶ曇っているようです。午後からは小雨が予想されます」

「そうか。じつにいい天気だな」

「もしお望みでしたら、午後には濃いめのダージリンをお淹れします。雨の音を聞きながら、お召し上がりください」

と、じつに機転が利く。では、さらに難題をふっかけてみよう。

「なあ、もし、コウモリ傘とミシンが解剖台の上でフォックストロットを踊っていたら、おまえはどう思う?」

「とっても、シュールです」

じつに面白い。パターンを読みとるだけの人工知能には、とても真似できない芸当である。カップを置いて、二葉が言う。

「ある程度、こちらで設定できるのよ。ＣＮＣ溶液を通じたパルス

のやりとりでね。彼女の場合、いわば、あなたのお手伝いさんとして最適化してあるの。本当はこういうの、悪用されたらこまるから、慎重に人を選ばなくちゃいけないんだけど……」

「おれにロリータ趣味はない」

「そ。大日本おっぱい党員の食指は動かないと判断して、エイジさんの命令は基本的に何も拒まないよう、設定されているわ」

何も拒まない、ことはないだろう。武装警官が乱入したときも、彼女はをかれらに茶を出さなかった。いやそれ以前に、命令を出すより先に、飛びかかろうとさえした。首をひねっているおれを、一朗が目ざとくフォローした。

「あくまで基本的には、ですね。彼女は鉄の塊ではなく、生きた細胞の集合体ですから。細胞のひとつひとつが、独自の思考を持っているわけです。もちろん、博士の受け売りですがね」

頭脳万能主義を真っ向から否定する、相崎博士らしい理屈である。例えばチャペック、いやロボットの設計においても、電子頭脳だけ発達させたものは、木偶のぼうでしかない。末端の回路が、頭脳と同等のはたらきをしなければ意味がない。ちょうど、脳から採取しても皮膚から採取しても、細胞が基本的に同じ作りであるように。

ツァラトゥストラ教ではないが、この考えを突き詰めれば、細胞をもち、遺伝子をもち、自己増殖するＩＢこそが、最も理想的な機械生命体ということになる。人類への憎悪を、生きる糧としていなければ……

「しかし、よく博士がこの子を手放す気になったな。永久機関……博士流にいえば、タオエンジンか。その生きた標本みたいなものだろうに」

「手放してはないでしょう。博士としては、あなたに託すのも実験の一環なんだから。なんでもフルに使ってみないと、性能はわからないものね。そのかわり、彼女は定期的に博士の実験室でメンテナンスされるわ……ほら、そんな渋い顔しない。むやみに電流を流したりして、苛めるわけじゃないんだし」

十万ボルトの電気風呂に入れても、涼しい顔をしているのではないか。おれはため息混じりに、入り口のほうをかえりみた。どうやって運びこんだのか不思議なほど、巨大な段ボールが据えてあり、かたわらに、油圧チューブや計器類が剥き出しの、作業用チャペックがひかえていた。

「大荷物の中身は何だ？」

「花嫁道具、といったところかしら。ダイニングの奥に、もうひとつ小部屋があったわよね。あそこをアマリリスちゃん用に使わせてもらうわ」

「もらうわ、って。問答無用なのか」

問答無用なの。そう言って二葉は片目を閉じた。ジャケットのポケットからコントローラーを取り出し、音声とボタンを使って、作業用チャペックに荷解きをするよう、指示を与えた。小部屋は確かに使っていなかった。というより、前にいつ覗いたのか覚えていないという、いわゆる「開かずの間」と化していた。

大段ボールの中には、さらに幾つかの段ボールに分けられて荷物が入っているようだ。大きさといい形といい、最も大きな箱がベッドだと思っていると、大昔の空想科学小説に出てくる宇宙船のような、金色に輝くハマキ型の物体があらわれた。

9（3）

「カプセルじゃないか。研究室から持ち出してよかったのか」
「レプリカなんですよ。博士お手製の。彼女を休息させるには、ＣＮＣ溶液がベストですからね」
　一朗がそう説明する間にも、荷解きされた段ボールから、いくつものポリタンクが出てきた。ほかにも、カプセルの周りに置くのであろう、機械類が次々とあらわれた。
　開かずの間を開くときは、さすがに緊張した。何かを収納した記憶があるのだが、それが何だったのか思い出せない。生ゴミでも放置していようものなら、ワームが湧いている可能性がある。けれど、いざ開けてみると、蠢くものはなく、ただ軍用らしい一体のチャペックが、直立不動の姿勢を保っていた。二葉が目をまるくした。
「なに、これ？」
「処理班時代の相棒だよ……」
　おれはぼんやりとつぶやいた。あらゆる装甲が傷つき、歪み、穴だらけになっていた。頭部のセンサーは打ち砕かれ、両脚とも膝から下が吹き飛ばされていた。それでも両手に装填された機関銃を構え、向かってくる敵への闘志を漲らせているようだ。二度と動かない体で……こいつがいたことを忘れていたなんて、おれは呆れた薄情者だ。
　どうするのよ、これ。と、眉をひそめた二葉の前に、目をきらきらさせながら、一朗がしゃしゃり出た。
「エイジさん！　これはもしかして山田式ポッド三型、通称『山ポッド』ではありませんか！」
「ああ、よく知ってるな。見てのとおり、今はスクラップ同然だがね」
「譲ってください。是非に、何としてでも。なんでしたら、言い値で買い取らせていただきます！」

「ちょっと兄さん、何言ってるのよ。こんなガラクタ……」
「ガラクタとは何事か！　山ポッドといえば、たった四機の試作機しか作られなかったレアモノ。それでいて名機の誉れ高い。計器の一つでも手に入れば、マニアは涎を垂らして気絶するほどなのに……こんなところに、これほど完全な形で一機眠っていたとは」
　一朗の目は輝きを増す一方。対して二葉は、ますます顔を曇らせて、「変態だわ」とつぶやいた。おれは震えている一朗の肩を叩いた。
「持っていていいよ。金なんかいらない。捨てるに捨てられず、処置にこまっていたくらいさ。きみに引き取られるのなら、こいつだって本望だろう」
　涙を流して踊り狂う一朗を尻目に、二葉はてきぱきと支持を飛ばした。山ポッドが運び出されると、あとはこの部屋には何もない。今さらながら、おれはあいつを、ここに葬ったつもりでいたのだな、と考えた。山ポッドを開かずの間に、妻の思い出を胸の中に封印したまま、その日暮らしの生活を、ただぼんやりと送ってきた。
　アマリリスが甲斐甲斐しく掃除機をかけ、雑巾がけをすると、たちまちピカピカになった。古いカーテンが外され、二葉の選択らしい、木馬の柄がプリントされたカーテンがかけられた。そこへ作業用チャペックが、次々と機械類を運びこむ。カプセルが据えられ、周辺機が接続されると、ＣＮＣ溶液がポリタンクから注がれた。
　独特な、木の香をおもわせるにおいが広がる。
　部屋はすっかり、博士の実験室と変わらぬ様相を呈したが、衣装箪笥や本棚、書き物机に椅子くらいは、なんとか置けたようだ。本棚はまだ空っぽだが、段ボールのひとつに、若干の衣類が入っており、二葉が一枚ずつ広げては、アマリリスの前にかざしている。
「今日は午後からでないと、マーケットが開かなくてさ。古着屋の親爺を叩き起こして、急遽、調達してきたんだけど。うーん、これもなんか地味よねえ」
「このような服はもうございませんか？」

「えっ。新東亜ホテルのメイド用の？」
「はい。これでしたら、とても動きやすいですし、マスターのお役にたてます。それに……」
少女は言葉に詰まり、エプロンをぎゅっと握りしめて、うつむいた。こころなしか、頬を染めているように見えた。なんということだ。この機械生命体には、恥じらいという感情まであるのか。それになんという可愛さだろう。エプロンを握る小さな手のひとつは、その気があれば、三十分でこの地区を壊滅させられるというのに。
「気に入ったのね。たしかに、あのセンスゼロの親爺が見つくろった服なんかより、百倍可愛いからなあ。じゃあ帰ったら至急調達して、バイク便の兄さんにでも持たせてあげる」
搬入が終わると、おれたちはまた居間に戻った。もう十二時を回っており、外では雨が降り始めたらしく、ぱらぱらと窓を打つ音が聞こえた。
「アマリリスちゃん、申し訳ないんだけど、簡単にで構わないから、昼食を作ってもらえる？　材料は買ってあるわ」
初めからここで食うつもりだったらしい。アマリリスが台所へ入ると、間もなくいい香りが漂い始めた。あの台所が料理に使われるのは、何週間ぶりだったか。そもそも、ナナコ七式は自分の体内に材料を取り込んで調理していたので、包丁やフライパンが使われること自体、かつてなかった。
二葉はソファの上で軽く腕を組み、意味ありげな視線を向けた。おれは、いやな予感がした。
「お隣のグラマーさんは、お元気？」

9（4）

ポーカーフェイスは、あまり得意ではない。だいたいほとんど、顔に出る。単純ばかなのだから仕方がない。もとよりカンの鋭い二葉のこと、おれの動揺を見逃すわけがなかった。

「何かあったわね」

しかし考えてみれば、隠す理由も存在しない。むしろ、おれ一人の頭では処理できずにいたのだから。訊かれなくても、こちらから話していたかもしれないのだ。

たいして長い話でもなかった。

いきなり刷新の武装警官があらわれ、レイチェルのことを訊いた。隣室はすでに藻抜けの殻だった。武装警官たちが、なぜレイチェルを探していたのか。そしてまた、なぜ彼女が忽然と消えたのか、それはさっぱりわからない。

話し終える頃に、ちょうどアマリリスが食事を運んできた。少女が補助的に食物を必要とすることを聞いていたので、自分のぶんも用意するよう言ってある。メニューはパンにオムレツにサラダ。シンプルな料理ほど腕前が問われるものだが、山ポッドの一件で舞い上がっている一朗が「旨い」と感動した時点で、保証されたといえるだろう。

四名とも、それぞれの理由で腹を空かせていたらしく、昼食は黙々と、速やかに進行した。食後にアマリリスが用意したのは、いかにも濃く淹れたコーヒーだった。

「これまで、レイチェルさんの部屋に入ったことは？」

香りを楽しむのか、カップを手にしたまま、二葉が尋ねた。多少、猫舌であるらしく、そういえば、目つきや仕ぐさもどこか猫をおもわせる。

「あるわけがない。ドアがちょっと開いていたくらいじゃ、簡単に部屋の中が覗けないのは、ここと同じさ」

「じゃあ、もとから部屋の中が、あんなふうだった可能性もある、と」

ゾッとしないアイデアだ。

が、たしかにベッドだけはあったのだから、外で食事を済ませるなりすれば、あんな寒々とした部屋でも、住めないことはない。衣類を詰めた手荷物ひとつで、いつでもドロンできるだろう。レイチェルは、いつか手入れがあることを予期しながら、隣に隠れ住んでいたというわけか。だが、しかし、

「わざわざ、おれの隣に部屋を借りた理由がわからない。空き部屋なら腐るほどあるんだし、おれ自身、この階のどこにどんなやつが住んでいるか、それさえ全く把握していない。つまりこの雇用促進住宅なら、他の住人に気づかれず隠れ住むことは、そう難しくはないってことだ。なのに彼女は、部屋に虫がいるようで怖いと言った。今度調べてくれと言ったんだぜ」

「ついでに、おっぱいも調べるつもりだった？」

「そりゃまあ少しは……いや、だから、おかしいだろう。最初からドロンするつもりなら、部屋に虫がいようがミノタウロスが出ようが、怯える必要はない」

「演技だったと考えるのが妥当じゃない？　ゆうべ彼女がエイジさんに抱きついて、サミダレムシに追いかけられたと言ったときも、演技くさかったんでしょう」

「何者かに追われていたのは事実だよ。ただ、それは虫じゃないと感じただけだ。どうしてもおれには、彼女がおれと関係を持ちたがっていたように思えるんだよ」

「助平」

「いや変な意味じゃないぞ。おれの助けを必要としていたのは、嘘じゃない気がする」

「ほんと、男ってみんな、うぬぼれ屋なんだから」

冷徹に言い放って、コーヒーを口へ運んだ。いつも思うのだが、本当にブラザースより八つも年下なのだろうか。ものすごく頭が切

れるし、落ち着いている。まあ、おっぱいはアマリリスといい勝負だと踏んでいるが。そうして竹本ワットという、二葉に輪をかけて早熟な小僧を知っているのだが。

とはいえ、次の二葉のセリフには、たちまち脳髄を吹き飛ばされた。

「監視カメラを仕掛けてはどうかしら」

「どこに？」

「決まってるじゃない。隣の部屋よ。まだベッドが残っていたんだから、レイチェルさんが戻ってくるかもしれないってことでしょう。もしかしたら、運よくたまたまいなかっただけで、武装警官が踏みこんだことさえ知らない可能性も、ないわけじゃない。ちょっとカゼ気味でとか言ってさ、何食わぬ顔で訪ねてくるかもよ」

おれが絶句している間にも、二葉は一朗にトラックから機材を運んでくるよう指示している。兄の威厳のカケラもない動作で、一朗は階下へ走り、油で汚れた段ボールごと、機材をかかえて戻ってきた。そもそも、なんでトラックに監視カメラを一式積んでいるのか、理解に苦しむ。

アマリリスは鼻歌まじりに食器を洗っていた。よく聞けば、ワーグナーの『タンホイザー』序曲であった。おれは思考停止状態のまま、かれらについて部屋を出、再び隣室に侵入した。むろん誰もおらず、ひととおり点検した二葉の驚くべき発言を、どこか遠くのできごとのように聞いていた。

「カメラは寝室と浴室に仕掛けるわ」

「なんだって？」

「居間に仕掛けたって意味がないもの。覚えておいてね、エイジさん。女が隠れて何かするときは、必ず浴室を使うものよ」

10（1）

10

ドアの開く音を聞いた気がして、うたた寝のうたた寝から覚めた。書きもの机に突っ伏して、おれは眠っていたようだ。部屋の中は薄暗い。カーテンは開いたまま。窓には、この世のものとは思えない夕焼けが映っていた。夢の中の情景を、四角く切りとったように。

さっきの音を最後に、辺りは静まり返っていた。耳を済ませたが、ことりとも音がしない。かすかな人の気配だけが、残像めいて漂っているばかり。ではあのドアの音は、誰かが出て行く音だったのか。

肘が何かに触れて、蒼い光がぱっとともった。旧式のノート型コンピュータのモニターだと知れた。このタイプは相崎博士のお気に入りで、四角い奇形の二枚貝のように、研究所の至る所で口を開けていた。これは今日の昼間、八幡兄妹が置いていったものだ。

ディスプレイには、「ＢｅｄＲｏｏｍ」および「ＢａｔｈＲｏｏｍ」の文字が左右に並んでいた。右側が、アクティブの状態にあるようだ。

おれは眉をひそめつつ、無意識に耳を澄ました。ときどきカリカリと、コンピュータの内臓ディスクが空咳するばかりで、やはりほかに音はない。もう一度窓のほうを振り向いた。ついさっきと比べても、いっそう紫がかった空を、サーチライトの筋が手さぐりしながら横ぎった。

アマリリスは買い物に出たのか。それとも自室に下がったのか。そもそもおれは、いつ頃から居眠りしていたのか……一向に冴えない意識の中で、「ＢａｔｈＲｏｏｍ」の文字だけが、夕空に血を混ぜたような色で、くっきりと浮かんでいた。

どうもなかなか意識がはっきりしない。ひょっとすると、まだ夢を見ているのかもしれない。夢を見ながら、これは夢じゃないかと

疑っている状態。もしそうなら、しめたものだ。夢の中なら、何をしても罪に問われない。例え罪に問われても、目覚めてしまえばチャラになる。両手で札束をつかんでも、やっぱりチャラになるように。

ネズミとかいう、有線の入力装置に手を伸ばした。カーソルが動いて「ＢａｔｈＲｏｏｍ」の上に止まると、文字が血の色に染め上げられた。押せ、と主張しているように見えた。

（夢の中なら、何をしても罪に問われない）

クリックする指が震えた。眩暈のように、画面がぐらりと揺れたかと思うと、背後に強烈な人の気配を感じた。部屋を漂っていた無数の、影のように薄い気配が、急に凝り固まり、一個の人間を捏ね上げたかのように。血の色をした夕焼けを背中から浴びて、そこにはレイチェルが立っていた。

彼女は何も身につけていなかった。

雨に降られたのか、長い髪が海藻のように張りついていた。血の色をした逆光が、華奢でありながら、圧倒的に肉感的なシルエットを描きだしていた。暗い影の中で、肌がしっとりと潤っているのがわかるのだ。黒曜石のように、濡れた眼差しが、じっとおれの視線に重ねられた。

（レイチェル、きみは……）

自分でも、何を言おうとしたのかわからない。いきなりけたたましく鳴り始めた電話のベルが、おれの声を掻き消し、同時に彼女の幻影もまた消失した。うたた寝から覚めたおれは、見事に椅子から転げ落ちた。

「痛え……っ！」

机に這い上がり、重い受話器を持ち上げた。聖歌隊じみたボーイソプラノ。聞き慣れた、いや聞き飽きたワットの声が、ころころと笑っていた。

「どうせ寝ぼけたまま電話をとろうとして、つまづいて転んだとか、そんなところでしょう。よからぬ夢でも見ていましたか？」

「余計なお世話だ。ことさら、あんたみたいな子供には言われたくない」

「子供の忠告も聞けないようでは、大物にはなれませんよ。神様はときどき、少年少女の姿を借りてお出ましになる」

と、少年のくせに抹香くさいことを言う。おれが苛立っていたのは言うまでもなく、こいつのせいで夢を破られたからだ。おれの雇い主で竹本商事の十一歳の社長、竹本ワットは澄んだ声で続けた。

「社に連絡を頂ける時間は、とっくに過ぎてますが」

「あいにく、夢の中で電話をかける特技は持ち合わせてないんでね。そもそもここ二十日以上も、せっせと電話をかけ続けたというのに、一回だって仕事があったか？　いい加減うんざりするのが、人情ってもんだろう」

偉そうに言い放ったものの、本当に一日も電話を欠かさなかったか、じつは心もとない。逆に言えば、ワットのほうからかけてきたことが、内々おれを驚かせていた。窓のほうをかえりみると、血のような夕焼けが映っていた。夢の中の光景とあまりにも似ていたので、思わず辺りへ視線をさまよわせた。

むろん、レイチェルの姿はどこにもなかった。ただ、百合の花のような残り香が、うっすらと漂っているばかりで。

10（2）

「エイジさん、起きてますか？」
「おかげさまでな」
「もう一度言いますよ。明日、いつでも構いませんので、我が社に寄ってもらいたいんですが」
　時々ワットは「我が社」という古風な言い回しをする。いや、そんなことよりも、我が社に寄れ、ということは、むろん仕事の話以外考えられない。
　短い冬の間は、ワームの活動もさすがに鈍くなる。おれたち害虫屋にとっては、いわばシーズオフとなるうえ、例の政権交代の影響でこの有様。これはもう、次の夏季まで仕事はお預けか、と、なかば覚悟していた矢先、唐突にお呼びがかかったのだから、驚きもする。
（間違いなく大モノだな……）
　小口の仕事なら、電話口で済ませられるだろう。だいたいそんな軽い依頼が、元処理班に回ってくるわけがない。しかもこの季節、刷新の圧力を突破して舞い込んだのだから……受話器を持つ手が汗ばむのがわかった。ＩＢとお見合いするよりは千五百倍ましだが、緊張するなというほうが無理だ。怖気づかないよう、おれはわざと話題を変えた。
「つかぬことを訊くが、刷新の愉快なガスマスク部隊がそっちに行かなかったか？」
「身に覚えがありませんね。武装警官にでも踏みこまれたのですか」
「お目当てはおれじゃなかったけどな。ガスマスクなだけに、いろいろと嗅ぎつけていたよ。そっちの端末、ガス洩れは大丈夫か」
「我が社では、従業員の個人情報はクローズドサークルシステムで管理しております」
「いかにも問題やら殺人やらが起きそうなシステムだな。ともかく、

明日は寄らせてもらう。いかにもヤバそうなにおいがするけどな。背に腹は変えられん」

一名余分に養わなくちゃいけなくなったし。そう考えながら苦笑していると、いきなりやつは天井まで飛び上がりそうになることを言った。

「そうそう、忘れるところでした。明日はエイジさんの新しい家事用チャペックと、ご同行願います」

問いただす前に電話はきれていた。

かけ直そうと思い、電話機のフックを叩いたところで、思い直した。都合の悪い電話に、やつは出ないし、出てもはぐらかされるだけだ。三十にもなろうという男が、十一歳の洟たれに翻弄される姿は情けないが、ワットは特別、というより異常だ。ガキの皮をかぶった怪物だ。

やつがどこまでアマリリスの実情を把握しているのか、わからない。ゆうべの電話で、チャペックの買い替えを勧めたことからして、八幡兄弟か、あるいは博士あたりとグルだったのかもしれない。竹本商事は、八幡商店の立派な取引先であり、またどうやらワットは変態博士と個人的な付き合いがある様子だから。どこから情報が洩れても、不思議はないのだ。

部屋はほとんど闇に包まれ、相変わらず静まり返っていた。煙草を探ると、肘が何かに触れて、蒼い光が間近でともった。机の上のノート型コンピュータは、夢の中同様、二つの「Ｒｏｏｍ」のうち一つを選択せよと、無言の催促を続けている。あんな夢を見るなんて、二葉に何を言われても文句は言えまい。

（案外、ものすごく女に飢えているのかもな）

レイチェルの裸体が思い返された。手を伸ばせば触れられそうだったし、触れたとたん彼女の肌は、指の間でぐにゃりと押しつぶされそうだった。なによりも、薄闇の中に浮かぶ目の輝きが、生々しく脳裏に焼きついていた。現実に、彼女がそこに立っていたとしか、思えないほどに。

煙草に火をつけて、深々と煙を吸った。気のない素振りにシンシンな興味を隠しつつ、ネズミを動かし、クリックした。たちまち画面が黒く塗りつぶされ、時折走る走査線のほかに、何も見えなくなった。おれは煙と一緒に苦笑を洩らした。寝室のほうを選択すると、窓から射す外光がわずかに映る程度で、こちらも画面の大半を闇が占領していた。

「マスター。もう起きていらっしゃいますか。ご夕食は、いかがなさいますか」

あたふたと、コンピュータの電源を落とした。寝起きなので、たいして腹も減っていないが、かといってすることもない。

「電気をつけていいよ。これから作るのかい？」

「温めるだけですので、十五分以内にご用意できます。メニューはシーフードドリアと玄三豆のスープ。それとマカロニサラダです」

「シーフード、ね……いただくとしようか」

かつては生命の故郷といわれた海も、現在は突然変異体のルツボだ。両極をのぞく、ほぼ全域が汚染地帯に指定されていた。

海底油田から大量の原油が流出し、その他の汚染物質と混ざり合い、さらに水棲のイミテーションボディが入り込んで、生命体の遺伝子はめちゃくちゃに掻き乱され……要するに、何が棲んでいるのかわからない状態。のんびり釣糸でも垂らそうものなら、オルドビス紀に絶滅したような化け物が、うじゃうじゃ釣れるだろう。

むろん食卓にのぼるのは、戦前に保存された遺伝子を「解凍」した魚介類だ。アマリリスはエビや貝を上手にキノコと組み合わせ、見た目も奇麗なソースをたっぷりと用いた。曲がりなりにも、ここにおいておれは、念願のキノコ料理にありつけたわけだ。

11（1）

11

もしもその道を突っ切って行けたら、イシカワの遅刻は少なくとも半減していただろう。

この道が通れないばかりに、まるごと一区画ぶん、回りこまなければいけないのだから、同じ走るにしても、五分は差がつく。この五分差が瀬戸際となる。

校門には必ず風紀の鬼久保が待ち構えていた。軍用チャペックに人の皮をかぶせたような恐るべき体躯。それでいて護身体育の教師ではなく、旧文学を教えているのだから、恋歌を詠んでも脅迫状にしか聞こえない。手製の短い竹刀を常備しており、遅刻者には容赦なく尻に一撃食らわせた。

今やイシカワは、鬼久保に完全に目をつけられていた。不良っぽい外見のせいだと、自分でもわかっていた。詰襟の学生服のボタンを外して、赤いセーターを覗かせ、裾からはわざとシャツを食み出させたうえ、ズボンの裾は常に地を引きずる恰好。サイドだけ髪を後ろに撫でつけた姿は、額縁に入れて不良博物館に展示できそうである。

親からも教師からも眉をひそめられたが、イシカワ自身、自分を不良だとは考えていない。ちょっと個性的なだけで、本当はものすごくいいやつなのだと独り、悦に入っている。

「今日はもう来ないんじゃないかな」

四本めの煙草に火をつけたところで、立てたキックボードにもたれて、タミーが言った。吉田民雄は眼鏡をかけて背が低く、いかにも気弱そうな優等生タイプ。毎朝、イシカワの「儀式」に付き合っているのは、脅迫されているからだと、ほとんどの教師が信じていた。

「それにここで煙草を吸うのも、まずいんじゃない」
「刷新か？　やつらは腰抜けさ。何回もお巡りに見つかってるが、すぐに消せば文句一つ言ってこない」
「でも、しっかりファイリングされてると思うな。変な煙でも出そうものなら、たちまちソフトボールが三、四個飛んでくるんじゃない」
　ソフトボールとは、最近よく見かけるようになった人類刷新会議の超小型無人偵察機である。探知機能のほかに、小型拳銃程度の火力も備えている。見かけによらず汎用性が高く、ふだんは路上を転げ回りながら情報を収集し、不審者に対しては銃身をあらわして、威嚇することもできる。噂によると、現行犯で射殺された者もいると聞く。
　鼻で嘲おうとして、イシカワは図らずも、ぞくりと肩をすくめた。煙草はいつも、路上に立っているイーズラック人から買っている。完璧にガラのよくない日本語をあやつり、「ばかばっか」が口癖だが、商売はわりと良心的。ところが最近、売り物の質があやしくなってきており、一口吸ったとたん、ひどく噎せて、揉み消してしまうことがよくあった。
　どうもそのへんの雑草を乾かしたものに、違法な薬物を混ぜて、煙草と称したものが紛れ込んでいるらしい。タミーに怖気づいたと悟られぬよう、かれはさりげなく煙草を捨てた。
「おとといは、来たぜ」
　タミーも一緒に走ったのだから、言うまでもないのだが、あえて口に出すことで、ミントガムのような幸福感を噛みしめた。ついでに尻ポケットから合成革のカードケースを取り出し、宝の地図でも広げるように開いた。なけなしの金をはたいて、情報屋に隠し撮りしてもらった一枚の写真が、そこにはさまっていた。
　女学生のバストアップ。下校中をズームで狙ったのか、手前に写りこんだ友達の肩の向こうで、顔もこころなしか、うつむき加減だ。清楚なセーラー服。お下げ髪に眼鏡という、いかにも地味な組み合

わせの下に、華やかな素顔が垣間見られた。間違いなく美人だ、とかれは目を細める。おっぱいは小さいが、それもまたよし。

彼女の名は八幡二葉。区立第三女子高校の二年生だ。

自宅は１３市街の古物商であるらしい。両親の所在は不明。年の離れた二人の兄がおり、商売は兄たちが切り回している。学校の成績は良好だが、病弱らしく欠席が多い。男女交際の痕跡は認められず……情報屋の報告を鵜呑みにすれば、そういうことになる。おおむね正しいのかもしれないが、病弱、の二文字だけは何としても納得がいかない。

病弱な娘が、あんな殺人的な速度で走れるものか。たしかに彼女は改造ローラーシューズを履いているが、それでも中学時代、四百メートルで地区大の準優勝経験をもつイシカワと互角か、ともすればぶっちぎる娘が、病弱なわけがない。

区立第三女子と、鬼久保が待ち受ける第九男子高校とは、通りをはさんでほぼ向かい合っていた。ただし道の上には陸橋が立ちふさがり、しっかりと目隠しの役目を果たしていたが。イシカワが韋駄天のごとき三女生の存在に気づいたのは、一月ほど前。イーズラック人が立つ場所を変えたため、やむなくいつもの通学路を少し迂回した時だった。

（ごめん、遅刻しそうなの。そこどいて！）

ライターがなかなかつかず、歩道の真ん中に突っ立って、カチカチやっていた。彼女はたしかそう叫んだようだが、食パンをくわえていたため、うまく聞き取れなかった。かれの口から煙草がぽろりとこぼれ、目は驚愕に見開かれた。瞬く間に、いや瞬く間もなく、改造ローラーシューズを履いた彼女は、イシカワの面前に突っ込んできた。

「うわあああああっ！」

反射的に、かれはうずくまった。それを予期していたような絶妙なタイミングで、セーラー服が宙を舞った。朝の陽光が一瞬の影を描き、頭をかかえたまま見上げたかれは、すんなりと伸びた脚と、

純白のパンティーをたしかに見た。

11（2）

次の日から、彼女と走るのがイシカワの日課になった。彼女はべつに迷惑がる様子もなく、かれが伴走するのを黙認した。三度めからは、挨拶もしてくれた。

（おはよう）

（おれ、いっ、イシカワ。だっ、だっ、第九の二年）

（そうなんだ。急がないと遅れちゃうよ、お隣さん）

なにしろ全力疾走しているため、茶を飲みながら話すのとはわけがちがう。女の子は息ひとつ切らしていないが、こっちがちょっと気を抜けば、たちまち引き離されてしまう。けっきょく二葉のプロフィールを知るためには、情報屋に頼るしかなかった。

もちろん下校時刻も狙ったが、なぜか一向につかまらない。陸橋を越えて待ち伏せていると、必ず三女の教師から追い払われるし、この場所にも再三、暗くなるまで立っていたが、帰りは違う道を通るのか、一度も逢えずじまい。だいいち、彼女が毎朝必ず、この場所を駆け抜けるとは限らず、二日に一度逢えればラッキーなほうだ。

「だからさあ、手紙をわたすとか、いろいろ方法はあるわけじゃない。家だってつきとめてるんだろう」

タミーが言うのも、もっともだ。ちなみにタミーが付き合うようになったのは、家がこの近くで、同じクラスのイシカワを見かけ、やあ、何やってるの？　と、声をかけたのがきっかけ。イシカワとしても、待っている間は退屈なので事情を話すと、タミーはさっそくキックボードを取ってきた。

かれは考える。柄にもない手紙はともかく、偶然をよそおって家を訪ねることは可能だ。さいわい二葉の家は、八幡商店とかいう古物商なのだから、オーディオの部品でも探しに、男子高校生がふらりと訪れても、まったく不自然ではない。ただし進展にはリスクがつきものであり、決定的な破局に対する漠然とした不安が、かれの

足を鈍らせた。
せめてもうしばらくの間、この奇妙な朝の逢瀬を楽しみたい気がした。
「そろそろやばいな。タミーは先に行っていいよ」
「まだ待つのかい？」
イシカワはどこか痛むように口の端を歪め、煙草を抜き出そうとして、また引っ込めた。
今朝は親とひと悶着あり、虫の居所がよくなかった。小遣いの前借りがかさんでいることから始まり、成績だ服装だ煙草だと、お定まりの説教が続いた。多少の個性は認めろよ。おれはこんなにもいいヤツじゃないか。そう思うのだが、カネの弱みを握られている以上、おとなしく拝聴するしかない。親に楯つくのは不良のすることだから。
だから今朝はいつにも増して、八幡二葉に逢いたかった。大好きな彼女と全力で走って、スカッとしたかった。
「タイムリミットだな……」
腕時計を眺め、泣きそうな声でイシカワがつぶやいた。タミーは所在なさげにキックボードを弄びながら、いつも暴走女子が突進してくる方を眺めた。ほとんどシャッターで覆われた殺風景なビル群。錆びの浮いた鉄板の歩道。スクラップと判別し難い、違法駐車の車たち。周りにかれら以外の人影はなく、仔猫一匹歩いてこない。
いい加減、自分たちも走らないと間に合わないが、イシカワはふてくされたように、ポケットに手を入れたまま。二葉抜きで走るとなると、まるで鬼久保が怖くてそうするようで、とても癪にさわる。ぷいと振り返ると、ぴったりと閉ざされた鉄の扉が、威圧的に立ちふさがっていた。
豪邸の門扉をおもわせる鉄格子には、枯れたツタが絡みつき、鬱蒼と茂る常緑樹に埋もれかけて、石畳の小道が向こうへ続いていた。番線でくくりつけられた注意書きを見て、イシカワは眉をひそめた。
「私道につき通行できません、だとよ。通行できない道なんか、道

じゃねえよ。なあ、タミー」
「近道でもするつもり？」
「いつもこいつが癪にさわってたんだよ。私道って、何様のつもりだよ。ケチケチしやがって」
もう間に合わないとあきらめたのか、タミーは私道を封鎖する扉に背中でもたれ、腕組みをしたまま、つぶやいた。
「ここが本当にやばいって噂、聞いたことない？」
いつになく沈痛な声だったので、イシカワは驚いた目を向けた。鉄格子の向こうで、常緑樹の梢が、不穏な揺れかたをした。かん高い声で鳴きながら、黒い鳥が飛んだ。
「何だよ。侵入したとたん、刷新が飛んできて、パクられるとでもいうのか」
「その逆だよ。この土地は、旧首長連合系の財力が絡んでいるらしくてね。刷新会議といえども容易に接収できずにいる、大げさに言うと治外法権地帯さ。そして近所の噂では、私道に入ったきり、二度と出て来ない者があとを絶たないらしい」
「二度と、出て来ない？」
「消えてしまうんだよ。今のイシカワくんと同じように、近道をしようと思って入りこんだきり、ね」

11（3）

イシカワの背筋を、冷たい稲妻が貫いた。日頃は気弱そうなタミーの姿が、私道を守護する小さな怪物のように見えた。

ビルの壁面の間を、鉄格子の扉は、いかにも唐突な感じで塞いでいる。注意書きがなければ、誰もが個人宅の門扉だと思うだろう。道に敷かれた石畳は蒼みがかり、広さは大人二人が肩を並べられる程度。わずかな上り勾配で、左にゆるやかにカーブしながら、常緑樹のトンネルに隠れて先は見えない。

いったいどこに出るのか。道である以上、必ず出口がある筈だが、その地点を明確に指し示せる者は、極めて少ないだろう。イシカワもずいぶん探した。区画をぐるりと回りこんで、ようやく「ここだ」と見当をつけたのが、廃材で組まれた鳥居の奥。鉄板を溶接した、あやしげな祠が、いかにも不自然に行く手を阻んでいた。

祠の上には、常緑樹の梢が覆いかぶさっていたから、まず間違いない。こちら側みたいに、立派な扉があるわけではないのだ。そうして思ったとおり、三女と第九は目と鼻の先である。

「どういうことだよ。道を通ったくらいで、人がそう簡単に消えちまうのか」

声がかすれたのは、口の中がからからに乾いていたからだ。タミーの口ぶりだと、まるで人間がドロンと消えてしまうように聞こえる。俗に行方不明になることを「蒸発」というが、文字どおり、煙と化してしまうようではないか。おぞましいイメージを振り払うように、かれは首を振った。

「あり得ねえだろう。たとえばアブナイ無法者がたむろしていて、通りかかったやつの金品を奪うついでに、殺して木の根元に埋めちまうとか。それならわかるが」

「どうかな。噂によると無法者とは程遠い、女の子が立っているらしいね」

「女の子？」
　我ながらばかみたいに口をあんぐりと開けた。ぽつりと、私道にたたずむ八幡二葉の姿が、脳裏に浮かんだ。
「うん。十歳くらいの子で、服装はその時々で異なるけれど、必ず赤い靴を履いている。夜中や、薄暗い雨の日なんか、その子が私道にじっと立っているんだけど。よく見ると、全身がぼうっと光っているんだって」
「ばかばかしい。何を言い出すかと思えば、今どきガキも怖がらねえような怪談話かよ。私道に食われちまった子供の幽霊が、うらめしや～ってわけか」
「ちがうよ。その女の子が、人を食うんだよ」
　イシカワはまたぽかんと口を開けた。笑い飛ばすかわりに、切羽つまったような呻き声が洩れた。たいした風もないのに、常緑樹がざわめき、石畳の上で濃い影が揺れた。化け物どもが舌なめずりしながら、囁きあっているような光景……唐突にまた、二葉のイメージが目の前の光景に重なった。
（おとといは、来たぜ）
　だが、昨日は来なかった。そして今朝も、彼女は現れそうにない。むろん、「病弱な」彼女が休むことは、そう珍しくはない。けれど考えてみれば、二日続けて来なかったことなど、これまであったろうか。あったかもしれないが、かれの胸騒ぎは、ほぼ頂点に達していた。鉄格子の間に細い体を滑りこませる二葉の姿が、妄想と呼ぶにはあまりにも鮮明に浮かんだ。
　蒼い石畳の上を駆けて行く、セーラー服の後姿。その先で樹木はざわめき、おいでおいでをする暗い影の上に、血の色をした赤い靴が……
「わあああああっ！」
「イシカワくん？」
「タミー、どうしよう。きっとあの子は、八幡二葉は、ここから近道したに違いない。もう食われちまったんだろうか、なあタミー。

どうしよう」

かれが眉をひそめたのは、その可能性がゼロとは言いきれないからだ。加えてイシカワの目を見れば、とても私道を探索せずには、おさまりがつきそうにない。のみならず、世の中には、他人に引きずられやすいタイプが存在する。タミーがそうであるように。

「仕方ないなあ」

鉄格子を半分抜けたところで、早くもイシカワは進退窮まった。先に潜ったタミーがおもいきり引っ張ると、断末魔のごとき声を張り上げて、どうにか転がり出た。肋骨が折れたと騒いでいるが、本当にそうなら、今頃ぐうの音も出まい。

また風が吹いて、影が踊った。歩道から眺めた印象より、常緑樹の木立はいっそう深く、こうなると、ちょっとした森である。

「どう考えても、ただの道じゃねえよなあ。公園か何かの跡地だろう」

肋骨を押さえて、かれは立ち上がった。肩を並べて歩きだし、木立の陰に入ったとたん、しんしんと体が冷えた。肘をさすって、タミーが言う。

「もともとこの区画には竜門寺家の別邸が建っていたんだ。ところが三年前に急に取り壊されて、宅地として競売にかけられた。この『私道』だけを除いてね」

「竜門寺と言やあ、首長連合のナンバーツーだった……？」

11（4）

「実質、ナンバーワンといえるね。黒幕というやつさ」
「刷新に負けてから、当主は国外に亡命したと聞いたが」
「死亡説もあるよ。ただ、すでに竜門寺真一郎が死んでいたとしても、三人の息子たち……いわゆる竜門寺チルドレンがいる。まだ一人も行方がわからない以上、人類刷新会議は最大の不安要素を抱えたままなのさ。武装警官やソフトボールが走り回っているのは、何もきみの煙草を取り締まるためじゃない」
「首長連合の残党どもを、竜門寺が陰で操っているってことか」
「活動資金がそこから出ているのは、間違いないだろうね。刷新会議は竜門寺家の資産を凍結しようと躍起になってるけど、カネに関するノウハウなら、向こうのほうが何枚もウワテだもの。きっと連中、かなり焦ってる」
会話が途切れると同時に、どちらからともなく立ち止まった。
周囲は常緑樹の陰に、すっぽりと覆われた恰好。行く手は相変わらず木立に隠れて定かでなく、振り返ると、すでに門扉は死角に入っていた。影が濃くなればそれだけ、道は蒼みを増すようだ。まるで赤い靴が映えるよう、あつらえたようだと考え、タミーは眉をひそめた。木洩れ日が蛇の背の模様のように、まだらに浮いていた。
どぼん、と近くで水の音がした。
「あれ……」
亀のように首を縮めたまま、イシカワが指さした。前方右側の潅木の中に、噴水らしきものが、ほとんど埋もれかけていた。雨水だろうか、水盤に水が溜まり、そこに映った緑の梢を、大きな波紋が乱していた。ミカゲ石の縁が所々欠けているが、黒い光沢を保ったまま。中央では怪魚の彫像が、とっくに水を吐かなくなった後も、あんぐりと口を開けていた。
引き寄せられるように、タミーは道をそれた。止めるタイミング

を逸したまま、イシカワもついてきた。水盤を覗きこむと、思いのほか水は深く、澄んでいる様子。青々とした葉が何枚か浮いて、波紋にくるくると翻弄されていた。誰に言うともなしに、タミーはつぶやいた。

「さっきからずっと気になってたんだ。封鎖された場所にしては、奇麗すぎるんだよね。噴水があるってことは、もとは庭の中だろう。石畳の遊歩道を、そのまま残したんじゃないかな……庭師の亡霊ごと」

「いい加減にしろよ。女の子の幽霊の次は、庭師のおっさんか」

「おや。女の子が庭師では、不自然かい？」

振り向いたタミーの挑発的な笑顔が、かれを震え上がらせた。いったい何の話をしているのか。自分たちは、二葉を探しに来たのではなかったのか。混乱する頭でそう考えたとき、ごぼっ、という音が響いた。反射的にタミーが振り返り、イシカワはミカゲ石の縁に手をかけた。

細かい泡を吐きながら、まるまると肥えたフナほどの、黒い影がゆっくりと浮上してきた。が、水面にあらわれたそれは、魚ではなく、まだ真新しいストラップシューズ。たちまちイシカワの目が真円形に見開かれたのは、それが区立第三女子高の「指定靴」に違いなかったからだ。のみならず、サイズもぴったり合いそうな……

頭が真っ白になった。飛び込むつもりで水盤に片足をかけたとき、何者かが、うしろから肩に手をおいた。タミーでない証拠に、かれも両手をミカゲ石にかけていた。ぎょっと振り返ると、お下げ髪の女学生が、眼鏡の奥で、リスのように瞳を動かした。

「おはよう」

タミーが支えてくれなければ、まともに背後へ引っくり返っていただろう。八幡二葉は、古風な学生鞄を両手で提げ、イシカワとタミーの顔を交互に見比べた。当然のことながら、「指定靴」を両足に履いている。これが改造ローラーシューズであることも知っている。

「泳ぐつもり？」
「い、いや。変わった魚がいたもんで……」
「そうなんだ。でも、命を賭けたいほど魚好きでなければ、この道は通らないほうがいいと思うな。噂は聞いてるんでしょう、イシカワくん」
名前を覚えていてくれた、という感慨は、彼女の刺すような視線を浴びて凍りついた。二葉はくるりとスカートを揺らし、二人に背を向けて歩き始めた。引き返すのではなく、先へ行くのである。残された二人は顔を見合わせ、あわてて後を追った。歩きながら、彼女は言う。
「昨夜からね、三女の三年生が一人、行方不明になってるの。第九の男子生徒と、ここでたびたび逢っていたらしいのね。人を食う私道なんて、荒唐無稽なデマだと決めてかかっていたのでしょう。わたしも何度か注意したんだけど、聞く耳持たなかったみたいで……三女だけでも、今月に入ってもう四人めなのよ」
「四人も、かい？」
タミーの声は、珍しく震えていた。二葉は足を止めた。カツカツという靴音が途絶え、ざわめく葉叢の音が残された。お下げ髪が揺れて、セーラー服の衿の上から、彼女は振り向いた。
「学校側が揉み消しているだけで、第九のほうでもけっこう消えている筈よ。少なくとも、昨夜は一人」

12（1）

12

事務所へ寄るのは、昼飯を済ませてからにした。外で食ってもよかったのだが、へたな店に入るより、格安で旨いものが食えるのだ。アマリリスが超兵器である事実を、忘れたわけではない。けれど、料理が上手いのもまた事実ではないか。

今日も朝から少女は、新東亜ホテルのメイドの恰好をしていた。メタマテリアルで構築された機械生命体は、このエプロンドレスがお気に入りらしい。

二葉の言葉どおり、昨日のうちにバイク便のアンちゃんが届けに来たのだ。黒田竜夫という、バイク賊あがりの面白い兄ちゃんで、自称、覆面ライダー黒竜。二葉あたりは「タッちゃん」と呼ぶ。いまだに本多平八郎忠勝みたいな恰好で走り回るから、制限速度を守っても、警官にちょくちょく止められるとか。

それでも組織に属さず、バイク一台で食っているのだから、小学生にこき使われているおれからすれば、見上げたものだ。１３市街界隈を縄張りにしており、商店街の使い走りが主な仕事。まだハタチ前で、どうも二葉に気があるらしい。おれにはさっぱり理解できないが、小さなおっぱいが好きなのだろう。

アマリリスが浮かれているのは、なんとなくわかった。

昼飯を作る間、ずっと『タンホイザー』序曲を口ずさんでいた。一緒に飯を食いながら、通常の二倍くらい口数が多かった。心なしか目が輝き、頬がゆるんでいた。もともと無口で表情も乏しいほうなので、見ていてちょっと面白かった。

彼女には、過去の記憶がないらしい。

言葉や料理や歌は知っていても、自分がかつてどこにいて、何をしたのか。そもそも、カプセルの外に出たことがあるか。それさえ

も、わからないという。相崎博士が記憶へのハッキングを試みたところ、完膚なきまでにブロックされたとか。ともあれ、少なくとも「アマリリスとして」は、これが初めての外出となる。

「何を着ていくんだ？」

「このままではいけませんか」

「昨日、タツがいろいろ持ってきただろう。それはいわば作業服なんだし。せっかくだから、好きな服を着ていきなさい」

と、まるでこの子の「おじさま」である。

食器を洗い終えて、彼女は自室に下がった。実際、どんな服を選ぶのか興味があった。マグマの中を泳げる少女は、元来、衣服を必要としない。けれど、擬態のアイテムとしては極めて重要なポイントといえる。おそらく伝説のカメレオンが環境に溶け込むように、アサシンとしての本能に目覚め、目立たない中にもキラリと光る……

「いや、きみ……仮装舞踏会に行くんじゃないんだから」

フランス人形の前で、おれは目をまるくした。バツグンに機転の効く、家事から戦闘までこなす少女には、服装のセンスがまるでなかった。結局、おれが部屋まで着いて行き、無難そうな服を選んだ。親戚の家を訪ねる中学生みたいな恰好になったが、不服はないらしく、しばらく独りでくるくる回っていた。

ツーシートしかない軽量型ガス自動車の助手席に少女を乗せ、半地下の駐車場を出た。レイチェルは車を持っていたのだろうか……まばらにとめられた車を眺めながら、ふとそんな考えが脳裏をよぎった。

竹本商事の事務所は、第四市街にある。駅裏の一等地である。とはいえ、大資本の商業施設が集中する駅前と異なり、日陰の印象はぬぐえない。小ぶりなビルが密集し、どれもが老朽化している。狭い道は入り組み、通行人の三割くらいは、確実に迷子である。

会社の駐車場は猫の額ほどで、毎度、車をとめるだけで、ひと汗かかされる。そこから近道しても、オフィスまで五分はかかる。いっそ、近くに違法駐車したいところだが、近頃では警官の下請人が

見張っていて、へたをするとタイヤに磁気リベットを打ち込まれかねない。

下請人はリベット屋と呼ばれ、洒落ではないが、ドライバーたちに憎まれている。磁気リベットはタイヤの回転を完全に止めるため、専用の機械がなければテコでも外れない。仕方なくリベット屋の支部に電話して、来てもらうことになるのだが、外すだけで数千から数万サークルとられる仕組みだ。ふつう、口止め料として何万か支払うことになる。

三階建ての小さなビルが、竹本商事である。一階は展示場で、二階がオフィス。三階は居住スペースになっている。外壁はセンスを疑う緑色。極めてせまい階段。エレベーターもあるにはあるが、乗ったためしがない。おれは大嫌いなモニターつきインターフォンのボタンを押した。

「あら、エイジさん。お久しぶり」

モニターの中で、茨城麗子が小首をかしげ、愛想笑いを浮かべていた。久しぶりも何も、仕事を回さなかったのはそっちだろうと思ったが、ドアを蹴りつけたりせずに、おとなしく待っていた。しかし考えてみれば、おれはアマリリスをけしかけて事務所を襲い、金を強奪することもできるわけだ。いやいや、その気になれば、世界征服だって可能だろう。

今さら思いつくこと自体、おれのやる気のなさを如実に物語っているが。

12（2）

ドアが開いた。何というのか知らないが、いかにもブランドものの香水のにおい。茨城麗子は、衿ぐりがV字型に切れこんだ水色のニットを、ゆったりと着ていた。少し身を屈めて会釈するとき、豊満な胸の谷間がくっきりと刻印された。

歳は、八幡兄弟より少し行っていると思う。セミロングのストレートヘア。見事に通った鼻筋。きつめの顔立ちを、柔らかな物腰がカバーしていた。何といっても、マグナム級のおっぱいの持ち主だった。さらに目のやり場にこまるほど身をかがめて、麗子はアマリリスの顔を覗きこんだ。

「いらっしゃい。可愛いのね」

「なぜ驚かない？」

おれの質問に彼女は答えず、意味ありげに微笑んで背中を向けた。有能な秘書もいたものだ。目の保養をさせてもらったくせに、仏頂面のまま、おれは彼女の背中に従った。観葉植物と磨りガラスの衝立で目隠しされたオフィスの中を通り抜けた。十名近い内勤者がいる筈だが、おれは麗子以外、顔もろくに覚えていない。奥のドアの前に立ち、彼女がノックした。

「どうぞ」

忌々しいボーイソプラノがこたえた。応接セットのソファに、十一歳の少年は沈みこむように身をあずけていた。童話に出てくる王子様の挿絵を切り抜けば、竹本ワットになると考えていい。凄みを感じるほど美しい顔だち。抜けるような白皙。ガラス細工のように、華奢な体つき。お掛けください。と言ってかざした指もほっそりとして、工芸品をおもわせた。

おれたちが座ると、麗子はワットの前に黒い木製の角錐を置いた。そこに白い達筆で「社長」と書いてある。かれの背後には、ボッティチェルリの『春』の複製がかかっている。首長の屋敷からくすね

てきたような、草花模様の赤いソファといい、アマリリスの服のセンスの数段上をいっている。が、かれの美貌にみょうにマッチしているのも事実。

麗子が一礼して部屋を出ると、相変わらず鼻持ちならない流し目をくれて、ワットが口を開いた。

「少し痩せましたか」

「おかげさまでな」

「家事用チャペックが壊れたせいですね。でも、これからはだいじょうぶでしょう。アマリリスさんが美味しい料理を作ってくださいますから」

「だから、なぜこの子の名前を知っているんだ」

秘書に輪をかけて意味深長な眼差しを送り、ワットはほくそ笑んだ。

「この子……ですか」

対して、当の「この子」はというと、料理の腕前を褒められたのが嬉しかったらしく、可憐に頬を染めているのだ。おれは軽くテーブルを叩いた。

「わざわざ嫌味を聞きにきたんじゃない。この子がどういう存在か、だいたいわかっているようだが、その点もあえて突っ込まない。仕事の話があるんなら、さっさと聞かせてくれ」

言い終わるのを待っていたようにドアが開き、コーヒーカップの載った盆を手に、麗子が入ってきた。低いガラステーブルにカップを置く時は、躍動する白い谷間が垣間見られた。次に彼女は、かたわらのスチールデスクから、あらかじめ用意していたとおぼしいファイルを取り出し、ワットに手わたした。そのままかれの横に、姿勢のいい立ち姿で控えている。

ワットは、青いファイルカバーを開き、一人でざっと眺めて、また閉じた。そのままテーブルに放り出し、おれたちにコーヒーを勧めて、自身もカップを口へ運んだ。切れ長の目の端で、麗子をかえりみた。

「少し、濃いですね」
「申し訳ございません」
「どう思われますか」
　これはアマリリスに尋ねたようだ。穏やかな口調のわりに、鋭い視線が注がれていた。彼女は一口飲んで、カップを置いた。何と答えるか、おれもちょっと興味が湧いた。
「わたしは、これくらいが」
　ハ長調のボーイソプラノを響かせて、ワットの笑い声が弾けた。嘲笑されたのなら即座に席を蹴るところだが、なぜか心底喜んでいるように聞こえた。それゆえに、かえって不気味ではあるが。
「気に入りました。もちろん、アマリリスさんには、エイジさんと同等の報酬を支払わせていただきます」
　口をはさみたいのを渾身の力でこらえ、相手の出かたを待った。急に仕事が来たことが、少女の出現と連動しているのは確かだ。ほとんど無意識に煙草の箱を取り出し、禁煙の文字を見つけて、またポケットに引っ込めた。薄笑いを浮かべたまま、ワットが切り出す。
「第十一街区に私道があるのをご存知でしょうか。誰も通れないよう、完全に封鎖されておりまして、とくに学校のある側は、入り口がカモフラージュされているくらいです。もともと竜門寺家の別邸の敷地だったようですが……ここを通る者が、頻繁に『食われる』というのです」

12（3）

「食われる、とは？」

古めかしい怪談話を聞くようだった。それでいて、背中に水を浴びたような気がした。

「さすがエイジさん。よい質問です。情報屋が集めた噂話によると、消えるのでも、いなくなるのでもなく、食われるというのです」

「十一街区の私道なら、おれも知っているが。封鎖されている以上は、被害が続出するほどの、通行人もいないんじゃないか」

「子供や学生が通りますね。通せんぼされたら、ますます入りたくなるのが人情ですから。ちょうどあの近辺には学校も多いですし」

二葉の通う高校が、たしかあの辺りだ。何度か車で送らされた覚えがある。ワットはマニキュアを塗った女のように、自身の指の爪を眺めながら語をついだ。

「それにどうも、あの道には人を引き寄せる、不思議な魔力があるようです。そのことを示す情報を、数え上げればきりがありますが、詳しくは、ファイルを読んでいただければわかりますが、もちろん中には荒唐無稽な説が混じっています。ただ、ひとつだけ、あらゆる噂に共通するのは……」

赤い靴を履いた、十歳くらいの女の子。

「幽霊か」

「なんとでも、ご自由に」

「ますます怪談じみてくるな。なんでも屋である以上、幽霊のお相手もしなくちゃいけないんだろうが、おれにゴーストバスターの真似事ができるかな」

「その女の子が、人を食うのだとしたら？」

おれは口をつぐんだ。思い当たるフシが大いにあった。すでに冷めかけたコーヒーを一息に飲んだが、味もわからなかったほどに。

「まさか……」

「エイジさんなら、ご理解いただけると思っていました」
「しかし、そんなことができるのは……」
「断定はさし控えるべきでしょう。何が生じるかわからない。それがぼくたちの住む現代、モダンワールドではありませんか」
空のカップをひねくり回しながら、視線をさまよわせ、隣に座るアマリリスに目を止めた。ソファに浅くかけ、軽く握った両手を膝に添えている。少し俯いた顔に、生真面目な表情が浮かぶ。なぜだろう。彼女が視界に入ったとたん、安堵している自分に気づいた。おかげで、皮肉を言う余裕ができた。
「この化け物退治の依頼は、どこから舞い込んだんだ？　おっと、竜門寺家だというジョークなら、笑えないから却下だ」
「笑えませんね。刷新会議に知られたら、銃殺刑ものですよ。ぼくが子供でもね」
「否定しないのか」
「役所に届けは出してありますよ。とあるお金持ちの有志が、現状を見るに見かねて、化け物退治を依頼した。ということになっています。匿名の有志の素性に関して、我が社は全く感知しないし、する必要もないわけです。当然、来社したのは代理人ですからね」
「竜門寺とまでは言わなくとも、首長の残党である可能性が濃厚じゃないか。よくそれで刷新がＯＫしたもんだ」
「複雑怪奇なオトナの事情が、絡んでいるんでしょう。けれど、我が社としてはノータッチです。依頼を遂行するのみです。それになんといっても、ぼくはまだ子供ですから」
ウインクしやがった。オトナの事情はわからないと言いたいのか。女の子みたいな顔をして、どこまでも食えないガキである。
「ちょっと二人で話せないか」
そう言うと、ワットは麗子に目配せした。アマリリスを連れて彼女が部屋を出ると、おれは単刀直入にきり出した。
「あの子がイミテーションボディだと知っているのか」
「シ（はい）」

「誰から聞いた」
「お察しのとおりですよ。ただ誤解のないように申しておきますが、仕事をさせるのは、アマリリスさんのためでもあるのです」
「なんだと？」
「ＩＢの存在意義が人間への憎悪に由来することは、元専門家のあなたに言うまでもないでしょう。彼女の本体からは憎悪が抜かれていますが、左手首から先だけは、生のままのＩＢです」
言われなくてもわかっている。彼女の左手は、血に飢えているのだ。殺戮を求めているのだ。もし無理に左手の欲求を押さえこめば、いつか暴走するだろう。本体への浸蝕が始まるだろう……足を組みかえて、ワットは続けた。
「もうおわかりですね。そういうことなのです。ですからこのプロジェクトは我が社にとっても、アマリリスさんにとっても、そしてエイジさんにとっても、利益になるのですよ」
とても十一歳の少年とは思えない、もの凄い笑みをワットは浮かべた。

13（1）

13

事務所を出たとたん、どっと疲れが出た。反対にアマリリスは、やはりどこか浮かれていた。機械なのだから疲れは感じないだろう。けれど、見るからに足取りが軽いのだ。

「せっかく駅前まで来たんだから、買い物でもして帰るか」

「はい」

声が弾んでいた。

（イミテーションボディは、いわばエイジさんにとって、仇なのでしょう。全てのＩＢを、あなたは今でも憎んでいますよね）

ワットの言葉が、残響のように頭にこびりついていた。

（それなのに、なぜアマリリスさんを引き取られたのですか。本体はコピーとはいえ、ＩＢそのものである彼女を）

（当然、我を忘れたさ。弾丸を五発もくれてやった。もちろん、効きやしないよ。蝿が止まったほどの効果もなかったろう。けれど、あのとき彼女は、培養液の中で目を開いた。おれに向けられた眼差しはとても……）

とても哀しそうだった。

「駐車場代がもったいないから、南口まで歩くぞ。いいな」

「はい。マスターがよろしければ」

擬態の成果だ。安っぽい同情だ。彼女が従順なのは、そう設定されているからに過ぎない。また、もし彼女が、これほどまでに人間の少女と見紛うばかりでなければ、おれの態度も確実に違っていただろう。

わかっているつもりでも、彼女を見ていると、胸の内に不可思議な感情が湧いてくる。この感情は、哀しみに似ている。胸がしめつけられるような。今すぐどこかに隠れて、こっそりと泣きたいよう

な。

「さっきの男の子は、社長なのですか」

「ワットのことか。男の子という言葉が、あれほど似合わないやつもいないな」

「マスターと気が合っていますね」

縁起でもないことを言う。が、これほど罵りあいながらも、やつは一向におれをクビにせず、おれも一向に辞める気配がない。もちろんおれはワットが好きではないし、あんな腹黒い野郎は大人でも珍しいと思っている。にもかかわらず、お互いがお互いを、どこかで必要としている。

「教えてやろう。そういうのを、腐れ縁というのだ」

「登録しました。応用するとこうなるのでしょうか。わたしとマスターは、腐れ縁である」

思わず苦笑した。否定はしないが、微妙にニュアンスが違う。このての融通のきかなさは、やはり「ロボット」らしい。

南口へ抜ける駅のコンコースは、ちょっとした街路と化している。つぎはぎだらけの殺風景な壁面。ぶ厚い鉄板で塞がれた岐路。明らかに場違いな、模造大理石の円柱。常に雑踏しており、電動二輪で通過する横着者もいる。両側には露天や屋台が並ぶ。しきりにウインクを送ってくる男がいたら、麻薬か武器の密売人だと思ってまず間違いない。

「あの女の人ですが」

「茨城麗子？」

「はい。わざとマスターに胸を見せていました」

柱に頭をぶつけそうになった。それにしても、珍しく少女がよく喋るのは、外の世界が面白いからだろう。変態博士も言ってなかったか。

（そろそろ下界を歩かせてやってもいい、とは吾輩も考えていたところだ。せっかく二本の足を持って生れてきたんだからなあ……）

ただ、彼女が本当に初めて下界を歩くのか、それはわからない。

過去の記憶がないからだ。ただ、おれは至って不信心な男だが、もし輪廻を信じれば、人間だって同じかもしれない。この世界でじたばたと生き、死んで生まれ変われば、また振り出しに戻っている。

「もしおれが死んだら、きみはどうなるんだろう」

不意に、彼女は立ち止まった。振り返ると、うつむいた顔に髪の毛がかかり、表情が読めなかった。さっきまでとは打って変わった、低い声で彼女はつぶやく。

「マスター以外の命令をきくことはできません。ゆえに、記憶はリセットされ、全てのシステムは停止します。もしその状態で無理に動かそうとすれば、自爆装置が作動します」

聞いてはいけないことを聞いた気がした。雑踏の中でぽつんとうつむいたまま、少女はまるで泣いているように見えた。

「すまなかった。そ、そうだ。デパートに着いたら、何か好きなものを買うといい。きみにも報酬が入るのだから、遠慮はいらないぞ」

肩に手を置くと、少女は顔を上げた。ぱっと輝いた表情に、泣いた痕跡はまったくなかった。はた目には、おれは親ばか以外の何ものでもないだろう。

13（2）

ちなみにアマリリスが買ったのは、ファッション雑誌と料理の本とジグソーパズルだった。

「遠慮はいらないと言っただろう。ほかに欲しいものはないのか」

「ございません」

と、嬉しそうに包みを抱えている。なるほど考えてみれば、おそらくまだ、外の世界に対する情報量が圧倒的に少ないのだから、何が欲しいのか、わからないのもうなずける。

少女の服のセンスのなさが、それを端的に証明している。例えば、レシピなら古くなっても、まず問題なく使える。が、流行は時代とともにめまぐるしく変化する。女性の服装など、その最たるものだ。アマリリスはセンスがないのではなく、流行を知らなかっただけだ。まあ、それにしても時代錯誤がすぎていたが。

しかし、何ゆえにジグソーパズルなのだろう。

食料を買い終え、コンコースを北口へ引き返す途中、おれはふと足を止めた。長髪のイーズラック人が、わざと柱の陰に陣どり、絨毯の上にあぐらをかいて、しきりにウィンクを送ってくる。かれらは瞳の色がほとんど白に近いので、すぐにわかる。お互いに社会の裏道を歩く者のカンで、おれはぴんときた。

「すまないが、ちょっとここで待っていてくれ」

アマリリスに食料の袋をわたし、両手の指をポケットに引っかけ、鼻歌まじりに近づいた。絨毯の前にしゃがむと、獣じみた、独特な体臭が鼻をつく。目の前には煙草の箱や、あやしげなアクセサリーが並んでいた。おれは片目を閉じてから、ラクダの描かれた箱をひとつ持ち上げ、それがずっしりと重いことを確認した。

ニヤリと笑って目をあげると、ガラスのようにうつろな瞳が、おれを凝視していた。彫刻みたいに高い鼻。肌は皺だらけで髪の毛は真っ白だが、背筋はしゃんとしていた。

「強い煙草はあるかい。マグナム級のやつ」
　無言でうなずき、かれは革のチョッキの内ポケットに手を入れた。おれもＭ３６のグリップを握ったが、たいして警戒はしていなかった。取り出された煙草の箱は見たこともない銘柄で、花束が描かれていた。趣味のよくないことに、花のひとつは頭にリボンを結んだ女の子の顔なのだ。意外に張りのあるバリトンが答えた。
「イズラウン製です。もう作っておりませんが」
「買おう。いくらだ？」
　おれは言い値で買い取った。イズラウンは第二次百年戦争で消滅した強力な武装国家だ。戦争の勃発時に暗躍し、またイミテーションボディの開発にも一役買っていた。むろん、まがい物をつかまされた可能性はあるが、闇取引にリスクはつきもの。最終的には、カンを信じるしかないのだ。
　待っているアマリリスの姿を見て、おれは苦笑を禁じ得なかった。いくつも荷物を抱えているのに、左手はフリーのまま。もしちょっとでも、イーズラック人が不穏な行動をとれば、コンコースに血の雨が降っただろう。
　武装警官が来た時もそうだが、少々過剰に反応しすぎるようだ。ワットが言ったとおり、少女の左手は人間の血に飢えているのだろうか。

　食事のあと、おれは青表紙のファイルを読むことにした。
「食器を洗ったら、あとは好きにしていいよ。部屋はせまいだろうから、ここを使ってかまわない」
「了解しました。明日の朝は？」
「そうだな。仕事も入ったことだし、昼まで寝ているわけにもゆくまい。十時には起こしてくれ」
　かしこまりましたと言って、アマリリスは台所へ下がった。大きな屋敷ならこれで恰好がつくのだが、ここは居間と書斎と寝室をかねていて、しかもバスやトイレへの通り道だ。机に向かうおれの背

後を、ぱたぱたと少女が通り過ぎ、やがてシャワーを使う音が聞こえてきた。またぱたぱたが始まり、静かになったところで振り返ると、ぺたんと床に座っていた。

彼女の前には、ジグソーパズルのピースが散らばっていた。

おれは仕事もそっちのけで、興味を覚えた。彼女の脳は電子頭脳なのだから、ジグソーパズルなどお茶の子さいさい。へたすると三分で完成させるのではないか。そう考えながらそっと机を離れ、覗きこんだ。

箱の完成見本を見れば、何百年か前の風景写真とおぼしい。花が咲き乱れる草原の中に湖があり、森がそれを取り囲み、雪を頂いた山が遠くに連なる。空も湖も、どこまでも青く澄んでいる。世界に汚染物質がばら撒かれる前、地球のどこかには、こんな天国みたいな風景が実在したのだろう。

それにしても、見ているこっちがむず痒くなるほど、アマリリスの手が進まない。たっぷり十分もかけて、四つのピースをやっと組んだが、そのうち一つはどうも違うようである。指摘してやると、少女は振り向いた。泣きそうな顔をしているのかと思えば、案外けろりとして。

「気づきませんでした。マスターは頭がよいのですね」

と、電子頭脳に褒められた。

13（3）

おれはファイルに目を通す作業に戻った。ざっと眺めた限り、ワットが簡潔に説明した以上の内容は、見当たらなさそうだ。ただ、どうやって撮ったのか、現場をほぼ上空から写した写真が入っていたのには、驚かされた。

よほど遠くから望遠で狙ったのか、ずいぶん不鮮明な写真だ。無理もない。政権がめまぐるしく入れ替わる中、為政者たちは空からの偵察に神経を尖らせてきた。ヘリやジャイロなどもってのほか。たとえ冗談半分で、自作の無人偵察機を飛ばしても、見つかりしだい銃殺刑だ。眉をひそめて、おれは写真を灯りにかざした。

無機質なビルが建ち並ぶ区画を、こんもりと茂った緑の帯が、南北に縦断している。まるで巨大な多毛ワームが、街の中に食い入っているようで、シュールというより、おぞましい。ところが、肝心な私道の中の様子は、木立にさえぎられて、全く見えないのだ。所持しているだけで後ろに手が回る資料なのに、これではまるで役にたたない。

「ち……」

「何か問題でも？」

床にぺたんと座り、ピースを一つ手にしたまま、アマリリスが振り向いていた。こんな姿は、パズルに興じる中学生と変わらない。おれは苦笑しつつ、ノープロブレムのゼスチュア。

さらに資料をめくると、次にあらわれたのは、ペン画に薄く着色した私道の俯瞰図だ。ルナパークのパンフレットに載っているような、くだけた絵柄で、正確さは欠けるが、とてもわかりやすい。

常緑樹の木立の中を、石畳の道は左にゆるやかにカーブしている。南側の出入り口は門扉に似た鉄格子の扉。学園通りに面する北側は、あやしげな神社の裏につながり、ここで木立がぐっと両側からせまり、祠でふさがれている。神社側から何気なく眺めただけでは、道

は全く見えないだろう。
（神社の祠が、秘密の出入り口というわけか。怪談話にはもってこいのロケ地だな）
道の周囲には、枯れた噴水があり、壊れかけた東屋がある。これだけなら、庭園の一部だったという過去もうなずけるが、遊具や、動物を飼う檻らしきものがみとめられた。絵柄と相まって、まさにルナパークではないか。
おれはさっきの写真を抜いて、透明シートにはさんだ。その上から、イラストを参考にしつつ、おおまかな物の位置を描きこんでいった。さらにファイルをめくると、案の定、その辺りの地下の見取り図があらわれた。
現代の都市区はどこもそうだが、地下が鬼門である。
歴史家たちが「メトロポリス・ムーブメント」と呼ぶように、戦前は地下都市の建設が盛んだった。全盛期には、建築物が四割。交通機関に至ってはほぼ百パーセント、地底に移されたという。それらがイミテーションボディに蹂躙された時の有様は、ちょっと想像したくない。文字通りの、地獄絵図が現出したことだろう。
むろん現在、地下都市の廃墟は全て封印されている。地上との間にぶ厚い鉄板が無数に埋め込まれ、ＩＢや第三種以上のワームをはじめ、得体の知れないものたちが這い上がってくる隙はない……ことになっている。
どこが政権をとっても、為政者たちは、必ずそこのところを強調する。地下の封印は万全です。ずさんな前政権とは違うのです。地区民の皆様の安全と安眠は、当政権が保障します。とかなんとか声を大にするけれど、しかしそれが嘘である証拠に、おれたちの仕事はなくならない。
「マスター」
真後ろで声がして、思わずびくりと肩を揺らした。アマリリスはそのまま漫画に貼れそうな、眠たげな目をしていた。
「お先に休ませていただきます。パズルは、このままにしておいて

よいですか」
「構わないよ。はかどったかい？」
「はい。十三ピース組みました」
なぜか誇らしげであった。一時間近くかけてこれなのだから、九八九ピース、全て組み上がるのはいつのことだろう。彼女が培養液のベッドのある自室に下がったのが、まだ十時すぎ。こんなところも、お子様である。
煙草に火をつけて、ファイルから地下の見取り図を外した。透明シートに入れて写真と重ねれば、縮尺もほぼ合っている。おまけにトレーシングペーパーに印刷されているので、これで、上空、地上、地下と、三つの階層の重なり具合が、手に取るようにわかるのだ。
「やっぱりな……」
背筋を三度、冷たい稲妻が貫いた。妖怪は鬼門からやって来るもの。怪異は必ず地下とリンクしている筈だった。そうして思ったとおり、第１１街区の真下には、戦前に築かれた地底動物園が、そのまま埋もれていた。
四度めの戦慄が走ったのは、ノックの音を聞いたからだ。時計を見ると十時三十五分。今、武装警察に踏み込まれては、いろいろとまずい。緊急用の隠し場所にファイルを放りこみ、Ｍ３６を片手に、おれは忍び足で玄関へ向かった。

14（1）

14

「わたしでなければ、今頃アマリリスちゃんが黙っていないわよ」
ドアを開けた体勢のまま、きょとんとしているおれの前で、腰に片手をあてて二葉がそう言った。こんな遅い時間に、学校帰りでもあるまいが、セーラー服を着て髪を編んだまま。
「ちょっとお邪魔するね」
「お、おい……」
「安心して。夕食をいただきに来たわけじゃないから」
面食らっているおれを尻目に、勝手に上がりこみ、つかつかとリビングへ。ある意味、武装警察よりタチがよくない。
「さすがに片づいているわね。アマリリスちゃんは、もう寝たの？」
「残念だったな。イブニングティーをご馳走できなくて」
「これは？」
おれの皮肉をスルーして、ジグソーパズルの前に片膝をついた。眼鏡を外して胸のポケットに入れ、前髪を掻き分けて顔を近寄せた。ありふれた風景画のパズルの、どこがそんなに珍しいのか。ちなみに兄貴たちと違って、彼女の眼鏡は伊達である。
アマリリスがつなげた部分は青一色で、空なのか湖なのか、それとも山脈の一部か、判然としない。おれはパズラーじゃないので、どこから組んでゆけば早いのか、そのてのコツはわからないが、もっと手がかりの多い部分から組めばいいのに、とは思う。いきさつを説明すると、二葉はいかにも驚いた顔を上げた。
「すごいじゃない！」
「どこが？　小一時間かけてやっとこれだぜ。きょうび、小学生のほうがよほど要領よくやれる」
小学生、と口にして、ワットの顔が思い浮かび、おれは苦虫を噛

みつぶした。赤ん坊と言うべきだったか。二葉は立ち上がり、机から勝手に椅子を引き寄せ、腰かけた。

「ジグソーパズルは、電子頭脳が最も苦手とするもののひとつよ」

「そうなのか？　でも前任のナナコ七式はチェスの名手だったぜ」

「チェスとパズルは別モノよ。もし七式にパズルをやらせたら、一ヶ月かけても、ひとつも組めないでしょう」

今度はおれが驚く番だった。二葉は、満足げなウインクをひとつくれた。

「そ。それだけ、アマリリスちゃんが優秀だってこと」

「驚いた。しかし、電子頭脳にも意外な盲点があるもんだな」

「センスというものを持たないからね」

センス？　と、鸚鵡返ししながら、必然的に今日の昼、フランス人形と化したアマリリスが思い起こされた。ロボットには、センスがない？

「ヤマカンとか直感と、言いかえてもよいかしら。パズルのピースを選ぶとき、エイジさんはいちいちモノサシで測ったりする？」

「いや。なんとなく、ピンときたやつを組んでみるな」

「それこそが、センスでしょう。機械にはそれがないから、まさにいちいち計算するわけよ。ところがジグソーパズルのピースくらい膨大な数になると、とても処理が追いつかない」

おれは煙草に火をつけ、溜め息とともに煙を吐いた。

欲しいものを買っていいと言ったのに、なぜアマリリスは、パズルとファッション雑誌を選んだのだろう。機械だから、おれに尽くすよう設定されているから、おれのために、苦手を克服するために、これらを買ったのだろうか。処理班時代の相棒、山ポッドが、蜂の巣になりながら、おれたちを守ろうとしたように。

その疑問を口にすると、二葉は足を組みかえて、机に軽く頬杖をついた。

「一概にそうとも言えないんじゃないかしら。エイジさんは、好きなものを買えと言ったわけでしょう。アマリリスちゃんにとって、

その命令は絶対よ。偽って嫌いなものを買ったり、やりたくないことをするとは考えられない」

「ああ、なるほど。じゃあ、あいつにとってパズルをやるのは……」

「面白いんだと思う。料理や服に関しても同じ。そう考えると、中学生くらいの女の子と変わらなくなるわね。思い出してほしいのは、彼女がチャペックではなく、イミテーションボディだということ。わたしたちは、ＩＢの全貌をまったく把握しきれていないのよ。だから……」

だから？　と、おれはまた鸚鵡になった。この年端もゆかぬセーラー服の少女を、縋るような目で見ていた。

「アマリリスちゃんに『センス』が存在しないとは、言いきれないわ」

14（2）

くわえたままの煙草から、ぽとりと灰がこぼれた。怖いもの知らずの二葉の顔も、心なしか緊張しているように見えた。

言われてみれば、我々は「センス」を当たり前のように振り回しているが、こいつがどこからやって来るのか、じつは誰も知らない。こう言ってよければ、神の領域から到来するのかもしれない。なぜなら、ヒトは神が作ったものだから。

ならば、イミテーションボディとは何者か？　ヒトが作ったモノには違いあるまい。が、あろうことか、ヒトは神の領域に属していた禁断の技術を盗んで、この超兵器を創造した。そしてあたかも、神域を侵した罰を与えられたように、ＩＢの反逆にあった。

パンドラの箱を開いたように。

「そろそろ行かなくちゃ。外出の準備をしてくれない？」

造作あるまい。煙草を揉み消して、上着を引っ掛けるだけでいいのだから。しかし、いったい彼女は、何をしに来たのだろう。

「送るのは構わんが。ここまでどうやって来たんだ？」

「カズ兄さんと一緒よ。あとボーイフレンドが二人」

「なんだと？」

八幡商店のトラックは、下の駐車場にとまっていた。助手席に乗り込むと、一彦が肩をすくめるように会釈する。二葉は後ろの座席に、学生服姿の男の子二人と、ぎゅうぎゅう詰めに収まった。彼女の隣に、小柄で利発そうな少年が。そのまた隣には、背の高い、石器時代の不良みたいな男の子が、半身をサイドウインドウにへばりつかせていた。一彦が言う。

「兄貴のやつ、はしゃいでましたよ」

「山ポッドかい？」

「ずっといじってなきゃ、気がすまないみたいで。おかげで今夜は、ぼくが妹のお守です」

「いじってるって、まさか整備しているのか？　床の間にでも飾るのかと思っていたが。どうあがいても、あれは二度と動かないだろう」

あまり思い出したくない光景が脳裏をよぎった。膝から下を吹き飛ばされ、動きを封じられたあと、まがまがしい無数の鉄の爪が、なぶるようにサンポッドの全身の装甲を貫いた。頭部はとっくに潰されていた。機械とは思えない断末魔。爪の先から腐食液が注ぎ込まれ、山ポッドの至る所から、厭な臭いのする煙が吹き出した。

それでも相棒は、弾が尽きるまで、機関銃を撃ち続けた。撃ち続けたからこそ、おれは助かったのだ。おれだけが……後ろから肩を叩かれ、のろのろと振り向いた。車内には計器類の光しかないので、泣き顔はごまかせたろう。

「紹介しておくわ。タミーくんとイシカワくん。二人とも第九男子校の二年生よ」

少年たちは、ぎこちなく頭を下げた。物理的にも心理的にも固まっている様子。二葉はボーイフレンドだと言っていたが、連行されているようにしか見えない。まあ、おれも一彦も裏側の人間だから、怯えるのも無理はあるまい。たとえスーツを着ていても、素性というやつは、においのように表に出てしまうものだ。

「害虫屋のエイジだ。二葉にどう口説かれたのか知らないが、遅くまでほっつき歩いてて、だいじょうぶなのか？」

一週間塩漬けにして歯車の錆びたチャペックみたいに、少年たちはうなずいた。いじめているようで気が咎めるが、二葉に振り回されている点では、おれも似たような立場か。半分開き直りつつ、おれは胸ポケットからマグナム弾をひとつ、つまみ上げた。「におい」でわかるのか、一彦は身を乗り出した。

「それは？」

「駅の中でイーズラック人が売っていた。イズラウン製だというが、どう思う？」

一彦は弾薬を受け取ると、小型ライトの光を当てながら、しばら

くひねり回していた。兄の一朗と違って、あまり感情を表に出さないほうだが、それでも肩の辺りから、興奮が伝わるようだ。かれは、大きな溜め息をひとつもらした。

「まず本物でしょう。しかも、Nで始まる製造番号ですから……何発あるんですか」

煙草の箱の封を切るときの興奮は、今も忘れられない。花束の絵柄も悪趣味なら、紙も粗悪なパッケージ。銀紙を破ると、つんと血をおもわせる金属的なにおいがして、おがくずに詰められていた、三発の弾薬が机に転がる。生き物じみた金色の光沢。磨き上げられたように、錆び一つ浮いていなかった。

「不発はないと思いますが。たとえうち二発が湿気ていても、充分、事足りるでしょう。ひょっとすると今回は、アマリリスさんの出番はないかもしれませんね」

「何言っているの、カズ兄さん。外したらそれっきりの弾薬と、超兵器を一緒にしないで」

ガンスリンガーとしては、ずいぶん見くびられたものだが、二葉の言うとおりだろう。ただ、おれが大枚はたいてこんなものを買ったのも、心のどこかで、一彦が言ったような事態を望んでいたからかもしれない。甘い感傷なのはわかっている。けれど、できればアマリリスには、血なまぐさい仕事をさせたくなかった。

15（1）

15

ヘッドライトがともされたとき、あまりの眩しさに、イシカワは目を閉じた。

ずっと考えていたけれど、どう見てもダイオード系の光源ではない。化学反応を利用した、未知の発光装置ではあるまいか。不安定ではあるが、光はかなり強烈。それだけで交通規制に引っかかりそうだが、そもそもこのトラック、叩けば叩くほどヤバそうな埃が、飛び出してくるようじゃないか。

運転席の男が、二葉の兄だという。なるほど端正な口もとは、妹にそっくりである。ちなみにイシカワは、女の子の口が好きなのだ。淫らな意味ではなく、純粋な口フェチ。二葉が上品な唇を動かして喋る様子を眺めているだけで、頭がくらくらするほどに。

（もし、万が一、あの口にキスできたら、心臓が止まるかもしれない）

かれらを乗せたトラックは、奇怪なエンジン音を上げて、夜の街路に滑り出た。街灯などという、気のきいたシロモノは、ほとんど息絶えている。人影はおろか、すれ違う車もなく、郊外の街路は、ゴーストタウンのように閑散としている。

「午前中までに仕上げなくちゃいけないの。どうせあのヤローは、昼まで寝てるでしょうから」

古風な学生鞄の中からスケッチブックを取り出して、八幡二葉がそう言ったのだ。もちろん、今朝の私道での出来事である。人を食うといわれる道の真ん中で、悠長に芸術の宿題でもやり始める気なのか……かれの横から覗きこんで、タミーが感嘆の声を上げた。

「へえ、上手いんだ」

ふん、男がそんな軽口を。と思いきや、あろうことか二葉は頬を染め、小声で「ありがとう」と言ったのだ。明らかに先を越されて、イシカワは地団太を踏んだ。

スケッチブックいっぱいに描かれていたのは、この私道の俯瞰図らしい。ルナパークのパンフレットを、かれもまた思い出した。あらかた完成しているが、道に沿った部分が所々、素描のまま残されていた。ピカソとレンブラントの違いもわからない。漫画しか読まないイシカワであるが、単純によく描けていると感心した。

日はしだいに高くなり、しかも晴れてきた。二葉は木洩れ日のする草の上に、ふんわりとスカートを広げて腰をおろし、スケッチに余念がない。そばで黙って眺めているだけで、イシカワは天にも昇る心持ち。ここで何人も「食われて」いるという怪談話が、だんだん信じられなくなってきた。

イシカワは夢想する。

神社の方角から、赤い靴を履いた十歳くらいの女の子がやって来て、血だらけの口でニタニタ笑う。二葉は悲鳴を上げてスケッチブックを放り出し、かれに抱きつく。かれは彼女の身をかばい、拳を握って化け物の前に進み出る。決して不良ではないけれど、なぜかいつもインネンをつけられるせいで、中学時代から喧嘩は百戦錬磨である。

（とっとと失せな。たとえあんたが人食いでも、女は殴らない主義でね）

化け物は、かれの騎士道精神に恐れをなして逃げて行く。おおセニョリータ、これで一件落着です。このおれの目の黒いうちは、やつの悪事は許しません。「とろん」とした目で、彼女はかれを見上げている。ガラス細工のような肩を抱くと、その目は静かに閉じられ、摘みたての苺みたいな唇が、唇が、きっきっ、キスの予感に震えて……

「イシカワくん、涎、垂れてるよ」

至近距離からタミーが覗きこんでいた。わっ！　と叫んで、かれ

は後ろにのけぞった。

それにしても、妙てけれんな私道ではある。噴水があり、壊れかけた東屋があり、動物園の檻のようなものさえ、常緑樹の間に散らばっている。古めかしいメリーゴーランドがあらわれた時には、さすがに我が目を疑った。

「なんでこんなものが……ここはルナパークか？」

屋根の内側には、お伽話の挿絵みたいな、顔のある月や星がちりばめられている。木馬や馬車は陶製で、首がとれたり足が折れたり、あらかたどこか破損しているのが、いかにももったいない。規模は小さいけれど、このまま売っても、かなり儲かるのではあるまいか。

尋ねたいことは山ほどあったが、熱心にスケッチしている二葉に、話しかけるわけにもいかない。彼女はほとんど迷うことなく、製図用のペンで線を決めると、鉛筆の下絵を消し、上から水彩パステルで、薄く色を置いてゆく。いろいろとやばい現状を忘れるほど、眺めているだけで楽しい光景だった。二葉が描画を終えたのは、正午近く。

「意外に時間かかっちゃった。急ぐわよ、タミー。イシカワくんも」

タミーの後回しにされた不服を口にする前に、バレリーナのように、彼女の脚が水平に持ち上げられた。そのまま、かかとが石畳にまっすぐ振り下ろされると、カツンと音がして、靴底からローラーが飛び出した様子。むろん、イシカワの目には、ひるがえるスカートと、やはりバレリーナのように、しなやかな脚しか映らなかったけれど。

15（2）

石畳に火花が散った。二葉は鞄を小脇に抱えると、もう、二人のはるか先を走っていた。漫画ふうに飛び上がってイシカワが後を追い、タミーは素早くキックボードを組みたてた。ホビー用の強化イオンエンジンを底に取り付けてあるので、いくらか推進力の足しにはなる。

八幡二葉を懸命に追いながら、イシカワの胸は躍った。これよ、これ。そうこなくっちゃ。花に嵐の例えもあるさ。走り抜けるのが青春だ！

とはいえ、ワンブロックを突っきる道の、それも途中から辿るだけなので、たちまち北の端に突き当たる。イシカワも内側から見るのは初めてだが、常緑樹としぶとい蔓草に覆われて、鉄の壁がふさいでいる。その前に二葉が、ぽつんと立っていた。セーラー服の白いラインが、みょうに眩しい。かれらと異なり、息ひとつ切らしていない様子。

「ここが出口？」

二葉はふり返り、少し脇へ退いた。赤錆の浮いたドアが嵌めこまれていた。学校の屋上に出るドアみたいだが、赤錆がまるで血のりのようで、イシカワはゾッと肩をすくめた。青表紙のファイルに網羅された怪談話によれば、赤い靴の少女があらわれると、ここのドアが開かなくなるという。逃げてもここで追いつめられて、食われてしまうという。

彼女はノブを握り、手前に引いた。ぎぎっ、と音が鳴り、中は真っ暗。覗きこむと、シャワールームほどの空間があり、短い階段が、奥の壁に達している。そこに、両開きの窓ともドアともつかないものが嵌まっている。

ちょっとお願い、という声とともに、鞄が投げ渡された。キャッチしたイシカワが呻き声を上げたほどの、意外な重さ。

「ごめんなさい。辞書が三冊入っているの」
階段の上で背中を丸めて、彼女は宙を掻くように両手を差し出した。蝶番のきしむ音がして、白い光が流れこんだ。ちょうど鏡を通り抜けるアリスのポーズに似ているが、むろんイシカワは、そんな童話の存在すら知らないし、知っていたとしても、それどころではなかった。
なぜなら両開きの扉を潜るとき、彼女はきわどい恰好でお尻を突き出し、スカートの中が覗けそうだったから。
二葉とタミーは容易に潜り抜けたものの、イシカワの番になるとまた一騒動あった。けれど今回は、片方の手を二葉が引いてくれたため、激痛の中でも頬は緩みっぱなし。肋骨を全部くれてやってもいいと考えた。
転がり出たのが、例のあやしげな神社の境内。イシカワの背後で、祠の扉がひとりでに閉まる音が響いた。とんだ人食い神社もあったものだ。青い顔の神主でも出てきたら、もっと絵になるだろうに。ここでは管理人はおろか、参拝者さえ見かけたことがなかった。
鳥居の前に、いかにも目立つ赤い車が横づけされていた。変てこな軽量型トラックが、その後ろにつけてあり、二台とも進行方向と反対に頭を向けた恰好。かれがぽかんと口を開けている間に、赤い車のドアが開き、なまめかしくも白い脚が、すらりと降りてきた。続いてかれの目に飛び込んできたのは、青いニットにつつまれた、メガトン級のおっぱい。
おっぱいの前にスケッチブックを差し出しながら、二葉が言う。
「間に合ったかしら」
「だいじょうぶ。まだ来社してないわ。今頃のんびりご飯でも食べてるんでしょう」
二葉が「あのヤロー」と言っていた男のことだ。白い谷間で溺れそうになりながら、イシカワは直感した。その一言はいかにも憎々しげに放たれたが、どこか正反対のトーンが籠もっていたのも事実。ちょうどかれが、自作の自称万能オーディオを「鉄クズ」と呼ぶよ

うな。いや、さらに細やかな感情が。

「ごめんなさいね。危険な仕事を押しつけちゃって。でも、あなたに頼むのが一番早くて確実だから」

メガトンおっぱいは、いきなりかれらに目を向けた。そこで初めてイシカワも顔を見た。薄い唇が真紅に塗られているため、笑うと赤い新月のよう。茨城麗子という名は、あとで二葉から知らされた。

「あのヤロー」が勤める会社の社長秘書だとか。

「頼もしいボディーガードが、二人もいたのね。ありがとう」

ミニサイズのワームも殺さないようなタミーとワンセットにされたのは不服だったが、おっぱいの魔力に呪縛されたように、エヘヘとかれは頭を掻いた。そのまま麗子は身をひるがえし、車に飛び乗ると、ブレーキ音を響かせてUターンし、走り去ったのだ。あとには変てこな軽量型トラックが残された。乗っているのは、二葉の兄だという。

今運転している「カズ兄さん」と瓜二つだが、赤いキャップを前向きに被っており、「イチロー兄さん」と二葉は呼んだ。かれこそボディーガードとして来ていることは、なんとなく理解できた。降りる前に「イチロー兄さん」はマイクつきのヘッドフォンを外し、どう見てもバズーカとしか思えない筒を、後ろの座席へ放り込んだから。二葉が訊いた。

「これからどうするの。学校へ行く?」

かれらは顔を見合わせた。全く選択肢に入っていなかったことが、お互いの目の中に読みとれた。

「行かないんだ。じゃあうちに来ない? ご飯くらいご馳走するよ」

異存はなかった。イチロー兄さんは怖かったし、茨城麗子も含めて、明らかに善良な地区民とは思えなかったが、昼飯はおろか、夕飯までしっかりご馳走になった。そして今に至るのだ。

16

16

震動だ。

気のせいかと考えたが、それは二度、三度と続ざまに体に伝わる。地震ではなく、爆発でもなく、何か重いものどうしがぶつかるような。例えば、二台のトラックが断続的に、追突を繰り返しているような。

最初、震動に気づいたのはおれだけのようだった。相変わらず、暗い街路が続いていた。敏感な小動物のように、二葉がバックシートから身を乗り出したとき、おれの予感は確信に変わった。

「何かしら」

一彦がブレーキを踏んだのが三十秒後。車が止まると、かれはヘッドライトをアップにした。文字どおり、四基のライトがモーターで持ち上がり、強い光を前方に投げかけた。煙が見えた。路肩に乗り捨てられた車のうち、何台かが燃えているらしい。エンジンも燃料も抜かれていない車が残っていたのは、驚きである。

深夜徘徊の不良少年どもが、面白半分に燃やしているのか。どうやら、そんな可愛い連中の仕業でないことは、路面をふさいで黒々と横たわるシルエットが物語っていた。

大きさは、ちょうどこのトラックくらい。ずんぐりむっくりして、背が丸く盛り上がり、頭部は小さい。後方では四本の細長い尾が、神経的に蠢いている。絶滅したアルマジロという動物を、何十倍も巨大に、何百倍もおぞましくしたような……そいつは乗り捨てられた小型バスに体当たりすると、一撃で見事にコの字にへこませた。

ぐわんと音がして、地面が揺れた。

「エイジさん……」

「ああ、間違いない。アーマードワームだ」

第三種に分類される。ここまでのデカブツはおれも初めて目にするが、腹部を除く全身が、非常に硬いウロコで覆われているのが特徴。兇暴性は低く、普段はおとなしいくらいだが、こまったことに人肉が大好物。一度味をしめると、人間を襲うようになる。

おそらくこいつも、車内でいちゃついているカップルでも食ったのだろう。それでほとんどがスクラップとも知らず、路上駐車の車を漁っていたのだろう。こんな具合に頭も鈍いので、処分は比較的楽なほう。動作ものろくさいし、一度引っくり返してしまえば、ミニリボルバーでも仕留められるが、いかんせん、こいつはでかすぎた。

アーマードワームは、後退りして小型バスから離れると、体をこちらへ向け始めた。いくら動きが鈍いとはいえ、突進して来られたら厄介だ。長い耳の下で、四つの眼がライトをぎらぎらと反射したとき、後ろの不良少年が、ひっ、と小さく叫んだ。

「やれやれ、いつからこの地区は、第三種のワームが公道をのし歩くようになったんだ。このぶんじゃ、フェイズワンが発動するのも時間の問題だぞ」

「つべこべ言ってる暇があったら、何とかしたら？　専門家でしょう」

後ろから二葉に首をしめられつつ、おれは再びイズラウン製の弾薬を取り出した。通常、アーマードワームを処分するときは、地雷へ追いこむか、チームを組んで二手に分かれ、一方がロープを使って引っくり返す役を受け持つ。むろん、今のところそんな余裕はなさそうだが。

「カズ、サンルーフを開けてくれ」

屋根に出て片膝をついた。意外に強い夜風が、よれよれの外套をはためかせた。おれは脇に吊ったホルスターから六インチのパイソンを抜き、シリンダーを外した。六発こめていた弾を全て抜いてポケットに収めると、かわりにイーズラック人から買った弾を、一発だけ装填した。

通常の弾丸では、軽く弾かれてしまう。こいつの衝撃で、どうにかこうにか引っくり返すことさえできたら、あとは足で踏んでも処分できる。

前方に盛り上がる小山のような背中から、くぐもった咆哮が洩れた。好物のにおいを嗅ぎつけて、四つの眼が、まがまがしい光をおびた。巨体の両脇がおぞましい蠕動を開始し、間もなく推進運動へと変換された。地響きとともに、アーマードワームはまっすぐに突っ込んできた。

思ったとおりの行動に出てくれるとは、なんて単純なやつ。一瞬先の行動も読めない多脚ワームに、爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだ。とはいえ、この一発がもし不発だったら、まずもっておれはオシャカだ。ま、そのときはそのとき。やつが一番不味い男を食わされている間に、一彦がうまく逃げてくれるだろう。

「ナムハチマンダイボサツ」

こんな時に効くのだという、かつて妻から教わったマジナイを口にすると、急接近してくる黒い小山に狙いを定めて、引きがねを引いた。

轟音。そして、すさまじい反動。

ある程度覚悟して踏ん張っていたものの、おれは耐えきれず、トラックの屋根から後ろに弾き飛ばされた。ゆえに、ガス輸送車が丸ごと吹っ飛んだような音を聞いたときは、まだ宙に浮いていた。路面を転げて、ようやく顔を上げたとき、トラックの前方に巨大な火柱が出現し、辺りを昼のように明るく照らしていた。

動きを止めるどころの騒ぎではない。アーマードワームは、まさに木っ端微塵だった。

17（1）

17

再び、トラックが動き始めた。

おれはぐったりとシートにもたれ、目を閉じていた。ジャケットにこびりついた硝煙の臭い。冷却スプレーで応急手当はしたものの、右の手首がずきずきうずく。打ち身と擦り傷で、体じゅうが痛み、瞼の裏では、炎の残像が狂気のカドリーユを踊っていた。

しかし、この程度で済んだのは、儲けものと言わざるを得ない。もしツキに見放されていたら、今頃はデカブツの腹の中か、あるいは手首から先を銃に持って行かれたか。いずれにせよ、二葉のコゴトを音楽のように聞きながら、のんびり座ってなどいられなかったろう。

「まったく、専門家が聞いて呆れるわ。街なかで、野戦砲なみの火気をぶっ放すなんて。もし屋根から落ちてなかったら、エイジさん、今ごろあなたローストチキンよ」

肩をすくめた。チキンは臆病者のスラングなので、まさにその通り。世にも食えない鶏料理の出来上がりというわけだ。

「なんで黙ってるのよ」

「おれは食えないが、きみはうまいことを言う」

「ばかじゃないの。曲がりなりにも、あなたが体を張って守ったんでしょう。ずぶ濡れの野良犬みたいにしょぼくれてないで、少しは胸を張りなさいよ」

と、すこぶる機嫌がよくない。手首に包帯を巻いてもらったとき、珍しく甲斐甲斐しいね、などと軽口を叩いたのが癪にさわったのか。隣で一彦が、しきりにくすくす笑っているが。

「しかし驚きましたね。パイソンは無事なんですか」

「ああ。とっくにオシャカかと思っていたが。シリンダーが焦げた

程度で、まだまだ撃てるよ」
　コルト・パイソン。何百年も前のオリジナルと外見は同じだが、電気弾や特殊な火薬が撃ち出せるよう、一応は改造強化されている。処理班時代から、ともに死線を越えてきた銃なので、さすがに愛着もある。ふくれ面のまま、二葉が口をはさんだ。
「そういえばエイジさんて、回転式ばっかりよね。Ｍ３６もそうだし。業界では珍しいんじゃないの？」
「クラシック銃を愛用している時点で、珍種の部類なんだが。普通はオートマチックだよなあ」
「どうしてリボルバーにこだわるの？」
　弾倉がクルクル回るからさ。そう答えると、二葉の目がまるくなるのが、見ないでもわかった。数秒後、「変態」の一言で締めくくられた。まったくその通りなのだが、なぜか昔から、回るものが好きなのだ。中でも観覧車は最高だ。乗るよりも、眺めているほうが面白く、とくに日が暮れてから、きらきらと回転する光景は、いつまでも見飽きなかった。
　今ではルナパークから、観覧車は撤去されている。派手好みの前政権から倹約路線へと移るに及んで、抹消されたものの一つだ。おれは決して前政権の支持者ではないが、無駄の一言でささやかな夢をつぶされるのは、やりきれない。
　不意に、瞼の裏の残像が一人の女の姿を結んだ。きらびやかな観覧車を背景に、女のシルエットはたたずみ、夜風に髪をなぶらせていた。妻だろうか。幻影だと知りながら、意識は歩み寄ろうとあがいた。近くでいきなりオルゴールが鳴り始め、明滅する灯りが彼女の顔を照らした。
　レイチェルだった。赤い月のように、微笑んでいた。
　車が停車する反動で、短い夢から引き戻された。目を開けるまでもなく、おれのチキンな二の腕は、見事に粟立っていた。例の人を食う私道の前に着いたのだ。となると、なぜ二葉がこんな遅い時間に、下見と称しておれを現場に連行したのか、意図の十分の一くら

いはわかる気がした。
突進するアーマードワームを前にしたときも、これほど恐ろしくはなかった。そもそも恐ろしさの質が違う。あのときは闘牛士の心境。対して今は、デカブツの何十倍もある鯨の背に乗った、エイハブ船長の気分だ。
有名な物語と異なり、鯨の影は漆黒だ。海原の下に、漏出した海底油田のように広がっている。そいつは限りなく兇暴で、全人類に敵意を抱き、血みどろのアギトで無数の人間を噛み砕いてきた。それはわかっているけれど、今はなぜか不気味なまでに、鳴りをひそめている。
船はおろか、島影すらない。見晴るかす大海原の中、漆黒の巨影の上に独り、ぽつんと突っ立ってる。そんな不安感……おれはあえて尋ねた。
「ここはどこだ」
「夜の動物園」
口の端を歪めて笑い、目を開けた。夜の動物園か。ガキの頃はそう聞いただけで、うきうきしたものだ。様々な遊具がきらきらと回っていたし、いじけた夜行性の獣どもにさえ親しみを覚えた。処理班で働くようになってからは、仔猫を見るのも厭になったけれど。
外はまだ風が強く、しかもみょうに生温かかった。にもかかわらず、ゾッと寒気を覚えて、外套の衿を掻き合わせた。硝煙の臭いが、なぜか少しばかりおれを安堵させた。

17（2）

「これだけの人数がいれば、まず彼女は仕掛けてこないわ」
「彼女？」
「赤い靴の、ね。青表紙のファイルにもあったでしょう。彼女が襲うのは基本的に、一人。多くて二人までよ。もちろん、用心するに越したことはないけどね」
それで「ボーイフレンド」を二人も連れていたのか。
敵が襲撃する人数をしぼるのは、明らかにトラップを使用するためだ。広範囲に攻撃できないうえ、一人でも逃げられたら、仕掛けがバレてしまうのだろう。
ならばどう出る？
依頼の内容によって、おれは個人で行動するときもあれば、チームを組む場合もある。今回のような大捕り物となると、もちろん複数で動く。その場合、人員の選抜はおれに任される。予算にもよるが、個人的に他の業者を雇うのはかまわない。
しばしばおれは、八幡兄弟に話を持ちこむ。ぼったくられる心配がなく、へたな業者より手際がいいから。しかし薄々気づいていたけれど、私道の俯瞰図を二葉に依頼したのは、ワットの野郎か茨城麗子に決まっている。未成年者を巻き込むのは、おれの主義に反している。
ともあれ、私道にオトリを泳がせつつ、武装したハンターで周りを囲む、オーソドックスな戦術が最も効率的とえいる。が、居住地に囲まれた私道の性質上、それは不可能。必然的に、二人以下のハンターがオトリを兼ねるしかない。すると必然的に、おれとアマリリスが……
ワットの恐るべき笑顔が浮かんだ。何もかも、やつの思惑どおりじゃないか。
「夜間のご入園はこちらからお願い致します。硝煙臭いお客さま」

二葉が片手でスカートを押さえ、もう片方の手で、鉄の門扉を差していた。すでに縄梯子がかかっているのは、一彦の早業だろう。常夜灯代わりに、ヘッドライトが無言で奥を照らしていた。

いにしえのニンジャのように、おれと一彦は縄梯子に取りついた。背の高い不良少年が後に続き、どすんと尻餅をついた。二葉はもう一人の小柄な少年と、格子の隙間から易々と入ってきた。レディを受け止めるアテが外れたのか、不良少年は呆然としていた。

常緑樹の黒い影が風にざわめき、獣の唸り声に似た音をたてた。石畳の道がぼうっと蒼く浮かび、前方で闇に呑まれていた。車の中で感じた恐ろしさは飽和状態に達し、むしろ感情を麻痺させていた。それでいて、木の葉一枚一枚が鳴る音まで聞き分けられそうなほど、神経が研ぎ澄まされている……この感じ。

それは処理班時代に何度も味わった感覚と、よく似ていた。

さらに奥へ進んだところで、さっそく怪異にみまわれた。

噴水が湧いていた。みずから燐光を発するような、青い水しぶきを散らしながら、怪魚の口から水盤へと、滔々と流れこんだ。怪魚の眼はザクロ石の色に輝き、苦悶にのたうつように身をくねらせながら、さらに大量の水を吐いた。水盤の中では、まるまると肥えた生き物が泳ぎ回り、水棲哺乳類めいた背中を、時折ぬらぬらと覗かせた。

パイソンのグリップにかけた手を、二葉が肩で制した。

「プラズマの亡霊に過ぎませんわ、お客さま」

先を行く衿の白いラインを、慌てて追いかけた。道が蛇の背のように浮き上がって見えるのは、ライトによる錯覚とは思えない。ガラスの割れた常夜灯がひとりでにともり、しゅうしゅうとガス状の光を発した。そこへ群がるのは小型の翅つきワームではなく、とっくの昔に絶滅した珍種の昆虫とおぼしい。

肩にとまった一匹を、ぎょっとして払いのけた。全長を越える触角。モダンアートのような、翅の模様。きしきしと首を振りながら、昆虫は石畳に吸われるように消えうせた。

森の中に散らばる檻の中では、蒼白い炎が燃えていた。たとえ触れても、熱さは感じられず、むしろ氷のように冷たいのかもしれない。古い怪談話の中で、温度のない炎は「陰火」と呼ばれる。肉体を失った霊魂が、恨みを残して燃えるという。実際、それぞれの蒼い炎の中には、獣たちがうずくまっていた。

かれらは一様に、蒼い、凍りつくような眼差しで、おれを凝視していた。

（もうたくさんだ）

木立から目をそらし、道を急いだ。いつ二葉を追い抜いたのかわからない。左側でどっと光があふれたため、思わず身構えた。見れば、誰も乗っていない瀬戸物のメリーゴーランドが、くるくると回っていた。伴奏もなく、みずから陰火を発して、首のない馬や、天蓋の落ちた馬車が、ごとんごとんと音をたてて。いや……

一人だけ、白い馬に乗った少女がいる。つややかな鞍の上に、ちょんと横座りして、青いリボンのついた帽子をかぶり、リボンと同じ色のワンピースを着て。まるでスローモーションの映像のように、徐々に迫り出してくる。

白い、薄汚れたソックスの先に、エナメル質の赤い光沢をみとめたとき、おれは背中に水を浴びた気がした。

人間の顔ではなかった。

見開かれた瞳は瞬きひとつせず、どこまでも虚ろな眼差しがじっとこっちを見つめて……木馬が遠ざかるにつれて、等身大のビスクドールの首は、あり得ない角度にねじ曲げられた。ふくよかな唇に、薄い笑みを浮かべたまま。

18（1）

18

目を開けると、ほんの数センチ上にアマリリスの顔があった。

「わっ」

「お目覚めですか」

驚いた反動で、危うく頭突きを食らわせるところ。彼女が軽く身をかわしたのは言うまでもない。

「十時になりました。今すぐ紅茶をおもちしますが、こちらでお召し上がりですか」

目をしばたたかせ、ほとんど惰性でうなずいた。彼女の姿が視界から消え、かわりに天井が白っぽくのぞいた。朝食の用意をしていたのか、部屋にはクロック鳥の卵を焼いた、甘い香りが漂っていた。カーテンを開ける音が聞こえ、陽光が天井を明るく照らした。今朝は晴れているらしい。それにしても、

（さっき、偶然目を覚まさなかったら、アマリリスは、どんな方法で起こすつもりだったんだろう。この件はぜひとも、問いただしておかなければ）

と、決意してみたものの、起き上がると同時に忘れていた。言うまでもなく、おれの血圧は極めて低い。

「痛てぇ……」

体の節々がずきずきする。ポンコツチャペックに神経があれば、こんな感じだろうか。右の手首には、真新しい包帯が巻かれたまま……おれはハッと振り向いた。枕元には今朝の新聞が、きれいに折りたたまれていた。夜中の事件なら、もう出ている筈。新聞を引っつかみ、がさがさと開きながら、社会面や地方版に目を通した。

さびれた郊外だった。周囲にひと気はなく、建物も見当たらなかった。それでも街中で、あれほどの爆発が起きたのだ。それに、あ

の時のアーマードワームの行動からして、犠牲者が出ていないとは思えない。にもかかわらず、関連づけられそうな記事は、一行も出ていなかった。

「紅茶をおもちしました。ジャスミンとブレンドしてみたのですが」

カップの載った盆を手に、アマリリスが小首をかしげていた。本人は微笑んでいるつもりかもしれないが、時計みたいにコッチコッチの無表情。

「えっ。ここで飲むの？」

「はい。九分三十五秒前に了解していただきました。それとも、変更なさいますか」

「いいよ、ありがとう。なんだか本当に、新東亜ホテルに泊まったみたいだなあ」

ここで一緒に笑ってくれると間がもつのだが、彼女はおれを置き去りにして、サイドテーブルにカップを載せた。彼女にウィットは通じても、ジョークは通じないという法則を得た。

「十五分後に、お食事でかまいませんか」

うなずいてみせると、背を向けた。背中の白いリボン結びが、可憐に揺れた。ここでやっと気づいたのだが、昨日とくらべて、ちょっとよそよそし過ぎはしないか。機械によそよそしいも何もないのだろうが、やはり昨夜とのギャップを感じる。平たく言えば、どうも今朝は機嫌がよくない。顔には全く出さないが、出さないゆえに、滲み出てくるオーラを感じる。

けれど考えても仕方がないので、新聞をたたんで膝に載せ、カップを手にした。紅茶の味は申しぶんなく、しかもジャスミンがほどよく効いて、ともすればまどろみそうになる神経を、しだいに覚醒させるようだ。ふと紙面に目を落とすと、「新型ワーム」の文字が目に飛び込んできた。

「なんだと？」

少々紅茶に噎せつつ、慌てて新聞を取り上げた。第一面の記事を見落としてたとしたら、「もと暗し」どころか、灯台そのものが見

えていなかったに等しい。が、すぐにそれは全く別の地区を報じたものと判明した。ＣＮ－４４地区といわれても、どのへんにあるのか見当もつかない。

嘘か誠か、新型ワームは天使とそっくりな姿をしているという。そんなものが現れるようでは、世も末である。

「世界の終末を象徴しているのかしら。ツァラトゥストラ教徒が聞いたら、放っておかないでしょう」

驚いて顔を向けると、ソファから二葉が立ち上がったところ。ソーサーごとティーカップを手にしたまま、いかにもうまそうに一口すすって、音が出そうなウインクをくれた。

「きっ、きみ、学校は？」

「創立記念日よ」

髪を編んでなければ、眼鏡もかけてないので、最初から行くつもりなどなかったのだろう。ずっとそこにいたのかと尋ねれば、九時半からいたと言う。

「起こしてくれればよかったのに……もしかして、アマリリスに阻止されたのか」

「まさか。そこまで融通が利かない子じゃないことくらい、あなたが一番わかっているでしょう。時間まで寝かせておくよう、わたしが頼んだの。だってエイジさん、丸太のように眠ってるんだもの」

肩を揺らして笑っている。よく紅茶がこぼれないものだ。おれはさっと目を走らせ、二葉を小さく手招きをした。怪訝な顔で近づいてきたところ、彼女の耳に囁いた。

「なあ、どうしてあの子が不機嫌なのか、わかるか？」

18（2）

いきなり囁くとは思わなかったのか、二葉の横顔は目を見開いていた。みるみる頬が赤く染まり、音がしそうな瞬きをした。

「ば、ばかね。そんなの決まってるじゃない。ゆうべエイジさんは彼女を置いて出かけ、擦り傷やら打ち身やらを、いっぱい作って帰ってきた」

「それで？」

「アマリリスちゃんは怒った」

複雑な方程式か、禅問答を前にしたように、うーんと腕を組んだ。木魚でも叩きたい気分でしばらく考え、ぽんと膝を打った。

「つまり、置いてけぼりにされたのが気に食わなかった？」

「ピルトダウン人なみの鈍さね」

アマリリスが顔を出し、食事の用意ができたことを告げた。ダイニングに入ると、テーブルの上には当然のように、三人ぶんの朝食が。クロワッサンにバター。ベーコンエッグにサラダ。唐辛子とトマトで味付けした玄三豆のスープ。パンとクロック鳥の卵以外、缶詰であることを忘れるほど、上手に調理されていた。

「豪家だなあ」

ばかみたいな、けれど素直な感想をもらしたものの、依然、少女は表情を変えない。あからさまに怒ってはいないが、明らかに怒っている。

「最近では月に一種の割合で、新型ワームが出現しているそうよ。もちろん、第三種以上の、ね。でも、あくまでこれは政府が公認した数だから、現状はもっとひどいんでしょう」

クロワッサンをちぎってはスープにひたしながら、二葉が言う。まるで隣の猫が仔猫を何匹生んだとか、そういった口調である。おれは苦虫を大量に噛みぶつした。

「大規模な変動が起こる前ぶれ、か……」

「ツァラトゥストラ教の信者でなくても、天使型ワームの出現は、やっぱり気になるわ」

ワームとＩＢは根本的に異なるが、決して無関係ではない。これまでも多くの地区が、イミテーションボディによって壊滅させられており、最近また、惨劇が起こる頻度が増えていた。いくら政府が情報統制を行っても、そのての話は、おのずと耳に入るものだ。そうして、ＩＢの侵攻が始まる前ぶれとして、ワームが必ず不穏な動きをみせた。

すなわち、大量発生や、極端な巨大化、奇形化、新種の出現などである。

ツァラトゥストラ教の中でも過激な一派は、これこそ救世主到来の前兆と騒ぎたてる。かれらのいう救世主とは、神ではない。肉体を備えた「超人」であり、最終的には人類が超人へ進化することで、この地獄じみた世界から救われると説く。そして人類進化の鍵を握るのが、イミテーションボディであるらしい。

なかば無意識に、おれの視線はアマリリスに向けられた。

少女はパンを切り分けるのにも、フォークとナイフを使っていた。一切れずつ、器用にバターを塗って口へ運ぶ。中学生くらいの女の子が、マナー本を読みかじった姿と何ら変わらない。しかしツァラトゥストラ教徒にとっては、彼女はまさに「超人」の資格を備えていまいか。

「そうね。彼女の存在がジークムント旅団あたりに知られたら、ちょっと厄介よね」

まるでおれの頭の中を読んだように、二葉が言った。ジークムント旅団とは、ツァラトゥストラ教過激派の一つで、東アジアに勢力圏をもつ。宗派の理念のためなら人殺しも厭わない、テロリスト集団である。この地区にも潜入しているという噂があり、刷新会議は躍起なってアジトを探しているようだ。

思い起こせば、少女が眠っていた黄金のカプセルは、ツァラトゥストラ教の礼拝堂とおぼしい場所で発見されたのだ。二葉の言葉は、

鉄槌の音のように重く、胸の内に響いた。
「ところでわたし、エイジさんの意見を聞きに来たんだけど」
彼女が来意を告げるとは珍しい。もの問いたげな視線を向けると、手でつまんだレタスを口へ放りこみ、挑発的に指を舐めた。
「見たんでしょう、あれを」
「あれ？」
「赤い靴を履いた女の子」
寒気におそわれた。長い睫毛に縁どられた、決して瞬きしない、どこまでも虚ろな眼差し。ふっくらとした唇が、真後ろを向いたまま、薄く微笑みかけるさまが、ありありと浮かんだ。
木馬の回転につれて人形が視界から隠れると、メリーゴーランドは、いつのまにか静止していた。常夜灯は消え、噴水は死に絶え、檻の中の獣たちは、蒼い燐光ごと見えなくなっていた。あとには、闇を孕んだ常緑樹のざわめきだけが残された……
「人形だったよ。等身大のビスクドールだ」
たしかに、世にもおぞましい光景だった。けれどあれが人形である以上、最もおれが恐れていたものとは違っていた。そのことを確かめられただけでも、夜中の下見は無駄ではなかった。

18（3）

そう……あの人形は明らかに、「擬人」ではなかった。

「わかってるわよ。わたしも見たんだから。そうじゃなくて、少女人形と連続失踪事件との繋がりについて、どう考えてるわけ？」

なぜかいつも二葉は、サラダにドレッシングをかけない。指先でレタスを器用に折りたたんでは、そのままさくさくと噛んでいる。おれは答えた。

「そういえば、だいぶ前にそんな怪奇映画を観たな。古い屋敷で、夜な夜な人形が動き出して人間を襲うという。むごたらしい連続殺人事件の犯人が人形だなんて、最初は誰も疑わない。昼間、やつらは愛らしい顔で座っているからね。ところが夜になると白目をむき、牙を剥き出しにして歩き出す。包丁を逆手に持って、寝室に忍び込む」

面白い映画だったので、つい言い方に熱が入った。随所でチャペックをうまく使った仕掛けも凝っていた。おれはキッチュな怪奇映画が大好きなのだ。けれど目をやると、二葉は世にもつまらなさそうな顔をしており、反対にアマリリスは、まん円い目をして、身を乗り出していた。

「あの……マスター、そのお話の続きは、どうなるのですか？」

もしかしてこの超兵器は、怖がりなのだろうか。

「心配しなくても、最後はちゃんと退治されるよ。悪魔祓いの専門家が事件解決に乗り出すという、お定まりのパターンさ」

「まさか少女人形が牙を剥いて、被害者たちをぺろりと食べたなんて、言わないでしょうね」

「ああ。間違いなく、人形は目くらましだよ。注意を引きつけるためのオトリさ」

「典型的なトラップというわけね。絶滅した深海魚みたいな」

おそらくアンコウのことを言っているのだろう。牙だらけの巨大

な口をもつこの魚は、海底の砂の中に潜み、頭部の疑似餌を動かして他の魚をおびき寄せ、捕食するという。

「問題は、本来の敵がどんなやつで、どれほどの能力をもっているか、まったくわからないことだ。私道のどこに潜んでいるやら、それも含めてね」

「一応、スキャナーは雇う？」

情報屋の中でも、機械による探知機能に特化した業者を、スキャナーと呼ぶ。どうかな、と、おれはつぶやいた。

「ゆうべは愛らしい手品に夢中で気づかなかったが、一彦が複合カウンターで、私道の端から端までスキャンしたそうじゃないか。けれど、狂った磁石のように、始終めちゃくちゃに針が触れて、お話にならなかったとか。小型とはいえ、一彦のカウンターは博士がチューンアップした精度の高いやつだろう。そのうえプロを雇ったところで、成果があがるかどうか」

計器が狂う理由は、わかりきっている。あの辺り一帯の地下に、とんでもない汚染物質が埋まっているからだ。住民たちはその上で、何も知らずに寝起きしている。よくあることだが、やりきれない話だ。

アマリリスが食器を下げ、紅茶一式を載せたカートを押してきた。相変わらず感情がつかめないが、少しは機嫌が直った模様。ソーサーを持ち上げて、二葉が言う。

「昨夜の怪異については？」

「きみはプラズマの亡霊だと言っていたが。やはり、あのワンブロックの地下に、汚染された動物園が埋まっていることと、関係があるんだろうか」

「大ありでしょうね。情報やエネルギーを地下から汲み取って、幻影に変換した、といった感じかしら。まさに亡霊が出現するプロセスと同じなのよ」

「変換機の役目を果たしたのが、深海魚……本来の敵なんだな」

だとすると、並大抵の能力ではない。狡猾な多脚ワームでさえ、

あれほど大規模な幻像を生み出せるタイプには、そうそうお目にかかれないだろう……煙草に火をつけ、深々と吸った。えらく染みると思えば、起きてまだ一本めの煙草だ。

ノックの音がした。

このあいだ、武装警察に踏み込まれたばかりなので、おれはぴりぴりと緊張した。

「二葉はここを動くな。アマリリスが応対に出ろ。相手が誰か名乗らせるんだ。おれが合図するまで、決してドアを開けるな」

まだ長い煙草を揉み消し、一秒間迷ったあと、パイソンを手にした。なんとなく、胸騒ぎがしていた。アマリリスがドアの前に立つと、向こう側から死角になる、左側の壁に張りついた。少女が誰何する声を聞きながら、カメラつきインターフォンは買うべきだと考えた。

「クラウン宅配です。お隣の一一〇七号室のかたがお留守みたいなので、よろしければ、荷物を預かっていただけませんか」

少女の隣に割り込み、ドアスコープを覗いた。黄色いぶかぶかの作業着に、緑の帽子をかぶった小男がたっており、後ろに運搬用チャペックが。同様な帽子をかぶり、商標入りのエプロンをつけ、ボール箱をひとつ抱えていた。何の変哲もない、宅配業者の姿。

伝票を見れば、レイチェルの本名がわかるかもしれない。そんな好奇心は、たいてい面倒な結果を招くものだが。アマリリスを後ろに下がらせ、パイソンをベルトにはさんで、ドアを開けた。小男は年齢不詳で、この業者のトレードマークであるピエロのメイクをしていた。

「ここにサインをお願いします」

18（4）

チャペックの腕が前方に伸びて、ボール箱が差し出された。上に貼られた黄色い伝票に目を走らせると、たしかに住所は隣の部屋。宛名は、「レイチェル様」だ。送り主は、株式会社東部ネットワークという、何屋ともとれる会社名。拍子抜けした気分でサインすると、ピエロは控えをもぎとった。

「じゃあ、お荷物のほう、お渡ししておきますね。ちょっと重いので、お気をつけください」

満面のニヤニヤ笑いで言う。チャペックは、緑色の帽子をかぶった頭部をペコリと下げ、腕の位置を心もち低くして、ロックを外した。横幅が四十五センチほどの段ボールは無地で、なるほど、リンゴをいっぱい詰めたように、ずしりと重い。一旦、床に下ろそうと思い、振り向いたところで、おれは驚愕に目を見開いた。

アマリリスの左手は、すでに長大な金属の爪状に変化していた。

「マスター、箱を投げて！」

思案する暇はなかった。渾身の力で箱を放り出すと、少女は片膝をつき、爪の切っ先を揃えて、真っ直ぐに突き出した。何かが貫かれる確かな手ごたえが、鈍い音と化して響き、次に化け物じみた、世にもおぞましい悲鳴が炸裂した。粘性をともなう青黒い液体が、壁に、大量に飛び散った。

銃を抜くことも忘れて、おれは床に落ちたボール箱を見つめた。青黒い染みがみるみる段ボールを濡らし、床に広がる。裂け目から黒い毛の塊が覗いており、ぴくぴくと痙攣しながら、六十センチほどの針金のように細い突起を何本も突き出した。

突起のいくつかは宙に跳ね上げられたまま、別の何本かは脚の役目を果たして、球状の毛の塊である本体を持ち上げた。そのままのろのろと、玄関の方へ這って行こうとする。

「藻状ワームか」

本体である頭部と、細長い十二本の突起から成り、頭部には魔除けの目とそっくりな感覚器が、縦に三つ並んでいる。カテゴリーは第三種。家屋に棲みつかれたが最後、寝ている人間のもとに音もなく忍びより、毛むくじゃらの頭部の下から針を伸ばして首に突き刺し、あくまで血を啜るのだ。

玄関にたどり着く前に、藻状ワームは、ぐしゃりと音をたててくずおれた。頭部がほぼ両断されており、切断面から、脳髄に似た臓器がどろりと垂れた。

飛ぶように、アマリリスが目の前を横切ったので、ようやく我に返った。パイソンを抜いて後を追うと、回廊で先程の運搬用チャペックが、お出迎えとばかりに、三重チェーンソーを振りかざしていた。

頭部を狙って二連射したが、二発とも帽子のツバにのめりこんだ。海綿体金属による防弾装甲だ。その間に、発狂したタービンのような唸り声を上げて、チェーンソーが少女の頭上に振り下ろされた。ギイイイン、という、世にもおぞましい音が、回廊に鳴り響く。少女は挨拶するように左手を上げて、三重チェーンソーを受け止めていた。

ひととおり火花を散らしたあと、爪の間でチェーンソーは完全に沈黙した。バーがぐにゃりと握り潰された。チャペックは武器を手放し、恐怖するように頭部のセンサーを明滅させて、一、二歩後退した。チェーンソーを床に放り出し、体勢を低くしたところで、アマリリスは肩越しに振り向いた。もの問いたげな眼差し。

「動力だけを止めろ。メモリーカードは回収したい」

彼女が踏み込むまで、一秒ほど間があったのは、チャペックの内部をスキャンしたのだろう。ハガネの爪が、軍用なみのぶ厚い装甲を貫き、引き抜かれたときは、エンジンをまるごとつかみ出した。文字通り、チャペックは立ち往生していた。ピエロはとっくに逃げていた。

「とんだとばっちりね。この間の武装警察といい、隣のお嬢さんは、

なんて人騒がせなのかしら」
　いつの間にかドアの横に、二葉がもたれていた。両腕をさすりつつ、思いきり眉をひそめているのは、藻状ワームの死骸を見たからだろう。
「こう考えるのが妥当かしら。愉快なピエロの宅配屋さんは、お嬢さんを殺すために放たれた刺客である。もしお嬢さんがいれば、遠慮なくチェーンソーで切り刻んだし、留守の場合は、飼い慣らした藻状ワームがやってくれる。いずれにせよ、早急に始末する必要にせまられていた、と」
「しかし、曲がりなりにも人類刷新会議は、政府当局だぞ。ここまであからさまな暗殺をやらかすと思うか？」
　武装警察の指揮官、コードネーム「カヲリ」の姿が思い起こされた。バイザーを持ち上げたときの、赤い唇……彼女があんなピエロに化けたなんて、考えるだけでナンセンスだ。ワームをけしかけたり、三重チェーンソーを振り回したり。刷新の肩を持つ気はさらさらないが、あまりにもスマートさに欠ける。
「エイジさんだって、刷新会議のしわざとは、はなから考えてないんじゃない？」
「だが、ほかにどんな勢力がレイチェルを殺す必要があるのか、皆目見当がつかない。首長の残党どうしの内輪もめか？」
「あり得ないとは言えないでしょう。レイチェルさんが、首長の血族だという仮設にしたがえば……アマリリスちゃん」
　呼ばれて少女は振り向いた。左手は元に戻っているが、袖口が見事にぼろぼろだ。
「そのチャペックのエプロンを外してみて」
　うなずいて運搬用チャペックに歩み寄り、上半分が焦げたエプロンを丁寧に外した。胸部にぽっかりと開いた穴から、金属臭のする煙を吹いていた。その下の黒いボディーは磨きあげられたような光沢があり、白いラインでくっきりと、Ａの字を逆さにしたマークが入っていた。おれは目を見張り、さすがに二葉も口に手をあてた。

「ツァラトゥストラ教……！」

19

19

レイチェルの部屋の合鍵は、とっくに八幡兄弟がこしらえていた。ふだんは施錠してあり、この日も当然、閉まったまま。鍵を開けて調べてみたが、誰もいないし、いた形跡もみとめられなかった。

二葉の連絡を受けて、一彦が運搬用チャペックを引き取りに来た。

「それにしても驚きましたね。エンジンだけを抜き取るなんて、まるで手品ですよ。このまま売りに出せるくらい」

電気で動く家事用と違って、運搬用にはガスディーゼルエンジンが使用されているため、へたをすると大爆発につながりかねない。このタイプがよくテロに使われるのは、さんざん暴れたあと爆発すれば、さらに死傷者を増やせるからだ。ほぼ完全な形を残したまま動きを止めるなど、たしかにマジックだ。

「カードさえ解析してくれたら、あとは売るなり部品をとるなり、好きにしていいよ。ただ例のマークは忘れずに消しておいてくれよ」

Aの字を逆さにした、ツァラトゥストラ教の紋章……

しかも攻撃性から考えれば、ジークムント旅団である可能性が高い。かれらがワームを兵器として使用する研究を、密かに行っているという噂がある。もちろん南京議定書に違反するが、テロリストにルールは通用しない。

「面倒なことになったわね」

二葉に言われなくてもわかっていた。逃げたピエロは、教団に報告するだろう。アマリリスが藻状ワームを一刀両断にし、鉄筋コンクリートの柱も切り倒す三重チェーンソーを片手で受け止め、チャペックのエンジンを引きずり出したことを。さすがに彼女が、イミテーションボディだとは気づくまいが、確実に目をつけられた。

では、あの場で箱の中身を処分しないほうがよかったのか、それ

は何ともいえない。即座に箱を放り出さなければ、藻状ワームが先に飛び出して、まずおれたちを屠り、腹ごしらえした後で、レイチェルの帰りをじっくり待つつもりだったのかもしれない。

「引っ越したほうがいいんじゃない？　隣の空き部屋には、魑魅魍魎が引き寄せられて来るみたいだし。このままじゃ、身がもたないでしょう」

毛布にくるまれた置き土産を、一彦と作業用チャペックが運び出した。アマリリスはきりきりと眉を吊り上げ、腕まくりして、さっきからモップがけに余念がない。立ったまま紅茶を口に運びつつ、二葉が語を継いだ。

「なんなら、うちに来ない？」

考えておくという返事に、彼女は苦笑いしてみせた。相崎博士とおれの仲睦まじさを思えば、無理があると悟ったのだろう。ただいたい片づいたのは、すでに夕方近く。

「すぐに夕食をお作りします。三十七分後には食べられるように致しますが、それでよろしいですか」

藻状ワームを生ゴミの袋に詰めて外に出し、階段を駆け上がってきた勢いで、少女の声は弾んでいた。ヘッドドレスが斜めに傾き、エプロンはぼろぼろ。おれはくすりと肩をすくめて席を離れ、ハンカチで鼻の頭についた汚れを拭いてやった。少女は始終、目をぱちぱちさせていた。

「飯の支度なら、ゆっくりでいいから。その前にシャワーを浴びておいで。今日はよくやったね」

机に向かっていると、やがてシャワーの音が聞こえてきた。鼻歌がそれに混じるが、いつもの『タンホイザー』序曲ではなく、聞いたこともない、けれどどこか懐かしい奇麗なメロディーだった。アジア的で、子守唄をおもわせる……それはとっくの昔に忘れ去られた歌が、カプセルで眠る少女の記憶の中で、ひっそりと息づいていたのかもしれない。

なんという歌なのか、あとで尋ねてみようか。そう考えながら机

の上に目を戻したとき、視界が、ぼっとかすんだ。涙が一筋、頬を伝うのが意識された。

夕食後、ひとっ風呂浴びてから、おれはまた机に齧りついた。とんだ邪魔が入ったおかげで、今夜は徹夜してでも、ミッションの予定を組まなければならない。プロジェクト名は「人食い私道事件」とした。ファイルをめくりながら、会社に提出する計画書を記入しつつ、個人的な覚書を作成した。

昨夜の下見のおかげで、余計な回り道はしなくて済みそうだ。基本的に、おれとアマリリスでやっつけるしかないのだから、計画もごくシンプルなものとなる。むしろ問題は、確実に化け物を引きずり出せるかどうかだ。私道をうろついても太鼓を叩いても、無視されては手も足も出ない。

「なあ、アマリリス。どうすればいいだろう」

こんな時こそ、二葉がいれば頼もしいのだが。仕方がないので少女に話を振ると、こちらにお尻を突き出した姿勢のまま、ジグソーパズルの上から、きょとんとした顔を上げた。

「処分する対象は、ワームと定義してよろしいのですね」

「ああ。一度に多くて二人しか狙わないという、グルメなやつさ。青少年が好物みたいだしな」

そこがまた問題なのである。おれなんか食ったところで、ゴムを噛むように味気なかろうし、最初から食指も動かないだろう。

「わたしはワームの感覚器から、生体反応を消すことができます。よってマスターはもう一人、オトリを私道に連れて入ることが可能です。二葉さんが適任でしょう」

おれは目をまるくした。

20（1）

20

ミッション決行まで、三日のブランクを置いた。

その間に犠牲者が出ては寝覚めがよくないので、警備員を雇い、二十四時間体勢で、私道の両側を監視させた。費用をケチるのは事故の元だ。成果は期待できないにしても、一応、スキャナーにも依頼を入れた。

どんよりとした曇り空のもと、私道の南側の入り口で待ち合わせると、装甲車と見紛うばかりの、ごつい軽量型バンがあらわれた。降り立った男は、むかし、初めて月面を踏んだ宇宙飛行士のような、しかも金ピカのスーツを着ていた。異様に背が低いのは、この業者の職業病のひとつ。

「竹本商事さんですね。このたびは、お世話になります」

シールドが上げられると、ヘルメットの中に皺くちゃの笑顔が埋めこまれていた。みょうにひずんだ声は、胸元のスピーカーから聞こえた。年齢不詳。体毛が全くなく、瞳の中で金色の虹彩が、絶えず収縮を繰り返す。かれらは人体の七十パーセント以上を改造されていた。

膨大な報酬と引き換えに、旧首長連合に肉体を提供したのが、かれら「スキャナー」だ。当時は公務員扱いで、処理班の頃は、おれも仕事をともにした。人類刷新会議は、医療目的以外の人体改造を禁止し、スキャナー班は解散。ただ、民間の業者として平和的に活動するぶんには、今のところ黙認されていた。

むろん、かれらは徹底的にマークされており、もしちょっとでも反対勢力に与するような動きを見せたら、即座に消される。実際、そんな話は腐るほど耳にした。

「そちらのお嬢さんも、どうぞよろしく」

相変わらず異星人じみた笑顔で、スキャナーはアマリリスに向き直り、握手を求めた。コイルを巻いたような奇怪な指を、少女はおっかなびっくり握り返す。宇宙開発技術の応用、もしくは悪用の産物であるスキャナーの握力は、たしかに岩石を粉砕する。が、おまえが怖がるなという話で。

外で立ちあうだけのなので、アマリリスを連れて来る必要はなかったのだが、現場を見せておくよい機会と考えた。ベレー帽を被り、濃紺のコートをふっさりと着たところは、童話の主人公みたいで、なかなか絵になる。スキャナーと並ぶと、そのまま『オズの魔法使い』の舞台に出られそうだ。

「可愛らしい娘さんですな」

「歳の離れた妹です」

ひょっ、ひょっ、ひょ、とかれは笑い、準備にとりかかった。バンのハッチを開け、無数のコードを引きずり出して、自身の体のあっちこっちに接続してゆく。そのまま門扉にかけた梯子を乗り越え、私道に入った。ヘルメットやバックパックから、いくつもアンテナがにょきにょきと伸びた。

わかってはいるが、複合カウンターも何も持たないのは、やはり驚異だ。ひょこひょこと、ゼンマイで動くブリキの人形みたいに歩き回るだけで、「スキャン」しているのだ。しだいに遠ざかる後ろに姿に向かって、おれは叫んだ。

「危険を感じたら、すぐに知らせてください。発光弾を使う許可はとってありますので」

むろん、最初に護衛を申し出たけれど、ノイズが入るという理由で断られた。かれは背を向けたまま、片手をあげてサムアップ。まあ、おれがワームだったら、好んで食いたいとは思わないが。

かれが視界から消えたあとは、少しずつ伸びて行くコードを、腕組みをしてぼんやりと眺めていた。交通量が少なく、路上駐車の車ばかり目立つ。午前十時を過ぎているため、学生の行き来も途絶えて、閑散としている。住宅密集地とは思えない静けさ。

ここへ来る前に、ワットに計画書を提出してきた。
「お電話頂ければ、受け取りに参りましたのに」
茨城麗子がおれの顔を見るなり、赤い唇で微笑んだ。ワットは留守らしく、茶でも飲んで行けと言うが、一秒でも長く事務所には居たくない。スキャナーとの約束を口実に、おっぱいだけを拝んで、そそくさと階段を降りた。その足で駅へ向かい、柱の陰に例のイーズラック人を探したけれど、場所替えしたのかパクられたのか、どこにも見当たらなかった。
かれらの大半が、住所不定の不法入国者である。けれど、あまりにも神出鬼没なため、当局でもなかなか尻尾をつかめない。ワームに汚染されて、封鎖されたビルや住宅に住んでいるという話も聞く。となると、雇用促進住宅の下の階の空き部屋に、何人か身を潜めていても不思議じゃない。
ひょっとすると、レイチェルも……？
「マスター、終わったようです」
バンの中で自動巻取り機が作動して、コードをたぐり寄せていた。以前、サルベージ班で語られていた厭な実話を思い出し、思わず眉をひそめた。巻き取られたコードの先がちぎれていたのでは、洒落にならない。が、ひょこひょこ歩きのスキャナーは、手を振りながら無事に戻ってきた。月面を歩いて帰還するように。

20（2）

「どんな具合です？」

「いや、ひどいもんです。わたしの叔母がフォックス教の巫女をやっておるんですが、彼女の話を思い出しましたよ。除霊……というんですか。悪魔祓いみたいな仕事を頼まれたそうでしてね。とある古いお屋敷に入ったところ、そこいらじゅう、顔だらけというんですな」

アマリリスがおれの外套の裾を、ぎゅっと握った。お化け屋敷に入った女の子のように。スキャナーは笑顔で語を継いだ。

「もちろんそれらは、叔母にしか見えないのです。彼女に言わせれば、その家には霊が『集まってくる』のだとか。建っている場所とか間取りとか、様々な条件が重なって、そんな現象が起きるらしいのですが。厄介なことに、こうなると森に木の枝を隠すようなもので、もともと家にとり憑いている『主』がどれなのか、見分けがつかないそうでしてね」

おれは幽霊を信じないが、例え話としてはわかりやすい。かれの叔母は幽霊を探知する有能な「スキャナー」であり、それゆえに、古屋敷に巣食うありとあらゆる亡霊どもを、いちいちスキャンしてしまうのだろう。性能がよすぎるのも、時には仇となる。

「できるだけのことはやりましたが、そんなわけで、お役に立てたかどうか。とりあえず、データはお渡ししておきます」

かれの金ピカスーツのみぞおちあたりに、小さなつまみが三つ並んでいた。カリカリと、旧式金庫の要領で、みずから番号を合わせると、長方形の隙間があらわれ、モーターの音を響かせながら前方に押し出された。いわば、お腹が引き出しになっているようなもので、中にぎっしり詰まっている機械は、かれの臓器にほかならない。

おれの戸惑い顔に、かれはニヤリと笑ってみせ、引き出しの側面に指を触れた。蟹の脚をおもわせる、細長いマニュピレーターが横

から伸びて、内臓から異物を摘出する手術機械のように、一枚の金属のカードを取り出した。ぽたぽたと滴る油が、いかにも生々しいが、機密の保存場所としては、考えうる限り最も安全なのだろう。

「C型の解析機はお持ちですね。最近は、対応する機種が減ってこまります。あと十年もすれば、わたしたちはただのポンコツ扱いですよ」

指先から水を出してカードを洗浄し、プラスチックのケースに入れて渡してくれた。伝票にサインをもらい、バンに乗り込むと、片手をひらひらさせながら去って行った。かれは十年後を心配していたが、そこまで生きられるかどうか疑問である。車が視界から消えたところで、煙草に火をつけた。歩き出そうとすると、外套が、ぎゅっと後ろに引かれた。

アマリリスがまだ握っていたのだ。

「そんなに怖かったのかい？」

苦笑しつつ尋ねたが、少女はじっと私道の方に顔を向けたまま。うつろな眼差しを覗きこめば、瞳の色素が薄くなっており、虹彩が収縮を繰り返していた。いやでもスキャナーの目を思い出す光景だ。

「ミチ、ノ……マシタ、二、イ、マス……」

「え？」

「……ヘビ、ノ、アタマ、ハ、サソリ……デ、ス、ジット……ジット、コッチ、ヲ、ミテ……イ、マス」

車に乗って五分も走る頃には、少女のバグも治まっていた。さっきの状態が一種のバグなのか、それはわからないが。スキャナーの話ではないが、フォックス教の巫女が「御宣託」とやらをくだす時のトランス状態にも似て、自身が何を口走ったのか、もはや覚えていないという。

アマリリスにスキャンする機能があることは、運搬用チャペックを破壊した時に確認済みだ。けれど全身、一つの機能に特化したスキャナーとは比べようもない、あくまで付随的なもの。彼女の汎用

性の高さを示す好例ではあるが、スキャナーもてこずるあの私道に用いたところで、当然オーバーワークを引き起こす……といった解釈が、最も妥当なところか。

「疲れただろう。ちょうどいい時間だし、飯にするか」

相変わらず無表情に「はい」と答えるが、嬉しがっていることは、ここ数日のつきあいでわかるようになっていた。チャペックと一戦交えたあとは、前より調子もよさそうである。その理由は考えたくなかったので、あえて頭から締め出しつつ、おれはレストランの駐車場へハンドルを切った。

ウエイトレスに案内されて席に向かう間、周囲の視線を痛いほど感じた。それほど少女は可愛らしく映るらしい。同時におれのあやしさが強調され、子供にも妹にも見えない、いたいけな少女を連れまわす誘拐犯か変質者の類いだと、疑われているのは確実だった。彼女がニコリともしないのだから、なおさらだろう。

だからというわけではないが、あまり食欲がなかった。反対にアマリリスは、目覚めた当初より、よく食べるようになっていた。環境に適応し始めているのだろう。

「旨い？」

「はい。とっても」

ここでにっこり笑ってくれると絵になるのだが。考えてみれば、彼女が笑うところを、まだ一度しか見ていない気がする。あれは相崎博士の実験室。ＣＮＣ溶液の中で、おれを「マスター」と認識したとき、アマリリスはたしかに笑ったのだ。

眠っている少女に弾丸を放ったおれなのに。

21（1）

21

八幡ブラザースによれば、二葉は学校だという。珍しく、創立記念日ではなかったらしい。

「で、例の件なんだが……」

ガレージの中では、古めかしい「泥炭」ストーブが焚かれていた。炭化した植物から成る本物の泥炭ではなく、産業廃棄物のクズをそう呼ぶのだ。例によって当局はこれを禁じたが、採集が容易なので、現在も盛んに闇取引されている。独特の臭いに慣れてしまえば、安価でよく燃える、いい燃料である。一彦が言う。

「予期されていたとは思いますが、二重三重どころか、十重二十重にロックされていました。ぼくも二葉もお手上げというわけで……」

「変態博士に回ったわけだ」

一彦は肩をすくめ、油の染みたツナギのポケットから、プラスチックのケースを無造作に取り出した。中におさめられた銀色のカードの表面には「逆さA」の紋章が大きく入り、かたくなな沈黙を象徴するような、冷たい光を浮かべていた。

「会われてみてはどうでしょう。アマリリスさんのメンテナンスも兼ねて」

少女は「泥炭」が上げる緑色の炎を見つめていた。その肩がぴくりと震え、次にこちらに向けられた眼差しからは、けれど何の意志も読みとれなかった。おれは席を立ち、メモリーカードをケースごとポケットにおさめ、少女の肩を軽く叩いた。

「気が進まなければ、ここで待っていていいよ」

「問題ありません、マスター」

真っ赤に錆びた階段は、一歩ごとにぐらぐら揺れた。仰々しい鉄の扉の前に、紐のついたガラスのベル。まだ真昼だというのに、玄

関灯が蒼白くともっている。ベルの余韻が消えないうちに、ドアのノブが裏側から回された。先刻から、監視カメラに映っていたのだろう。

助手の黒木は相変わらず「看護婦」をおもわせる恰好で、相変わらずニコリともせず、おれたちを一瞥したあと、くるりと背を向けた。さらに三つのドアを彼女が開けば、例の、悪趣味を絵に描いた部屋に通された。ガレージの二階の主は、ソファの上で片手をあげた。

「そろそろ来る頃と思っておったよ」

いつになくくつろいだ様子で、珍しく小奇麗。髪を奇麗に後ろに撫でつけ、遊び心たっぷりにネクタイを結び、チェックのスラックスの上から、ワインレッドのVネックセーターを小粋にまとった。似合ってはいるが、狂人科学者らしさは少しも緩和さないどころか、むしろ強調されていた。

ソファの前では、箱型のテレヴィジョンがつけっ放しで、四隅のまるい画面には、極めて不鮮明な、それでいて御伽話の挿絵をおもわせる映像が、映し出されていた。政権が変わって間もないため、電波系のメディアはまだ情報統制下にあり、娯楽番組など望むべくもない。ゆえにこれは、海賊版のヴィデオカードか何かだろう。

「まあかけたまえ。黒木くん、客人にコーヒーを頼む……おっと。エイジくんは、器にこだわるデリケートな男だったな」

皮肉を無視して、指されたソファに腰をおろした。

アマリリスを呼ぼうとすると、テレヴィジョンの画面に見入っている様子。つられて目を遣れば、赤い三角帽子に、星をちりばめた緑のマントという、中世の占星術師のようないでたちで、十人くらいの人物が動き回っているところ。舞台は洞窟の中なのか、いかにも作り物くさい岩に、赤や緑のコケが張りつき、金属的な光を発しながら、ゆるやかに明滅していた。

三角帽子たちは、黒い、長方形の物体を、懸命に運び出そうとしていた。形は棺に似て、その何倍も大きい。ロープで引き、梃子を

使って動かそうとするのだが、とてつもなく重いのか、ほとんど進まないうちにロープが切れて、梃子が外れ、人々はオーバーアクションで跳ね飛ばされてしまう。

音質の低い管弦楽が始終鳴っているが、それ以外は全くの無言劇だ。

「あれを、盗むのですね……」

どこか憑かれたように、アマリリスがつぶやいた。三角帽子たちが盗賊だという意見には、おれも賛成だ。やつらは明らかに焦っており、しかも追っ手に怯えているようだ……そう思った矢先に、画面全体がぐらぐら揺れて、盗賊どもは大わらわ。大きな岩が光りながらごろごろと転がり、やがて背後にぽっかりと巨大な穴が口を開けた。

リアリティのカケラもない、ばかばかしい映像なのに、おれはゾッと身震いした。ある意味、大金を投じた怪奇映画より恐ろしい光景だった。

穴の中からは、二階家ほどの怪物があらわれ、真っ黒い、無数の脚を蠢かせながら、這い出してきた。三対の長大な顎を、牡牛の角のように振りたてて、一人の盗賊を捕らえると、手足をじたばたさせている間、思うさま振り回し、ちょうどカメラのある方へ向かって放り投げた。哀れな盗賊がたちまち大写しになり、おれは思わず叫び声を上げた。

一瞬のことだった。けれど、盗賊のマントの裏地いっぱいに染め上げられた「逆さA」の紋章を、たしかに見たのだ。

21（2）

画面がふっつりと途切れ、サンドストームがあらわれた。狂騒的な管弦楽曲も、ザーッというノイズに呑まれた。

「いったい……？」

博士はリモコンを持ち上げ、テレヴィジョンの電源を切った。ブン、と、電気的な音が響き、真横に光の線が走ると、画面が沈黙した。自身が腰を浮かせていることに、ようやく気づいたとき、黒木がコーヒーを運んできた。濃厚な香りがおれの鼻面を引いて、現世に連れ戻した。

いつものあやしげなビーカーではなく、小奇麗なカップに淹れてあるが、なぜか一人ぶんしかない。アマリリスが「普通に」飲み食いできることは、二人とも承知している筈。抗議しようと睨みつけところで、博士の不気味なウインクに機先を制された。

「これでいいのだよ。メンテナンスの準備は済んでいるからね。風呂は熱いうちに入るものだ」

「みょうな実験をしようなんて、考えてないでしょうね」

「残念ながら、吾輩は先にひとっ風呂浴びて、あとは休むばかりさ。代わりに黒木くんがやってくれる」

どうやらこの男、真昼から夕方にかけて寝るつもりらしい。ネクタイを締めたまま棺桶にでも入れば、さぞかし絵になるだろう。いや、洒落になっていないところが恐ろしい……アマリリスが黒木とともに、奥の実験室に入るのを待って、おれは切り出した。

「さっきの映像は何です？　どう考えたって、ただのヴィデオカードじゃない」

「根拠は？」

「最後にあらわれた怪物は、間違いなくイミテーションボディでした。この目で何十体も見てきたから、よくわかるんですよ。とても作り物とは思えませんね」

「あの映像自体も？」
返答に詰まった。赤い三角帽子に、星をちりばめた緑色のマントの盗賊たち……あれがリアルな映像に見えたら、おれは間違いなく狂人だ。
眉間に皺を寄せたまま、だいぶ冷めたコーヒーを飲むと、その間に博士は、どこに繋がっているのかわからない、透明な管のついた煙管をふかし始めた。有名な童話の有名な挿絵の一場面が、否応なく想起された。キノコのてっぺんに座って、イーズラック人みたいな芋虫が、水煙草をふかしている。女の子がうんと背伸びをして、それを眺めている。
（一日の間に、こんなにたくさんの背丈になっちゃうんですもの。頭がこんぐらがりますわ）
まるで童話のとんちんかんな問答と、おれたちの会話は大差ない。むさくるしいおれの代わりに、アマリリスがここに座っていたら、そのまま挿絵が出来上がるだろう。そう考えたところで、ハッと顔を上げた。
「夢……なんですか、あれは、夢なんですね？」
我ながら、みょうに丁寧な口調になった。香料の効いた煙を盛大に吐き出し、相崎博士は意味ありげに口の端を歪めた。
「さよう。きみたちを襲った運搬用ロボットのメモリーカードから、抽出したイメージだ」
「趣味のよくない冗談です。電子頭脳が電気羊の夢を見るなんて、大昔の駄洒落を引っ張り出すつもりですか。チャペック……いえ、ロボットは決して夢なんか見ませんよ。夢を見たりしたら、その時点でロボットとは呼べなくなる」
「いわゆるロボット三原則には、そんな禁則事項はなかったと思うが。まあ、きみの言い分は間違ってはおらんよ。ロボットは電気羊の夢を見ない。くだんの運搬用も含めてね」
水煙草の煙のせいか、頭が少々ぼんやりして、博士の言葉が、スキャナーの声のようにひずんで聞こえた。

「ただし、夢というものは、現実を湾曲して再生する特徴がある。昼飯にクロック鳥の目玉焼きを舌なめずりして食っておれば、夜の夢の中では、皿の上で親鳥がフォックストロットを踊りながら、金の卵を産んでみせる、という具合にな。そういった夢が生成されるプロセスと、非常に似た現象が起きてしまったのだよ」

ここにきてピルトダウン人なみに鈍い頭にも、ようやく理解できた。すなわち、運搬用チャペックの「十重二十重に」ロックされたメモリーカードを解析するに及んで、どうしても現実に体験された記憶を、そのまま抽出することができなかった。ゆえに、ああいった「湾曲」された映像が取り出されたのだ。

あまりにも夢に似た映像が。

「どう解釈したらいいんでしょうね」

ポケットからオリジナルのメモリーカードを取り出し、ひねり回しながら尋ねた。夢はここから抽出され、博士のヴィデオカードに記憶された。

「精神分析は専門外だよ。おっと、そう睨まないでくれたまえ。ここまでしぼり出すだけでも、けっこう骨が折れたのだ。あまり手荒なハッキングを繰り返せば、オシャカになってしまうからね。かといって、指をくわえていたら何も語ってくれはせん。そんなところは、人間の脳味噌とよく似ておる」

「哲学を語りに来たんじゃありませんよ」

博士はニヤリと笑い、水煙管を手にしたまま、ソファから立ち上がった。眠くなったらしく、大きく伸びをする姿は、それこそピルトダウン原人をおもわせた。

「カードは置いて行きたまえ。もう少し調べてみよう。だけどきみ、哲学なき科学は、一生眠らない人間のようなものだよ。ココロに夢がない」

22

22

「あ、エイジさん。スキャナーのデータを解析機にかけたぶんが、あがってきてますよ」

いささかやつれ気味にガレージに戻ったところで、一彦に呼びとめられた。そういえば、来た当初は兄の一朗もいた気がするが、仕入れにでも出たのか、ずっと姿が見えない。

「助かる。見せてくれるか」

かれの案内で、売り場とはカーテンで仕切られたスペースに通された。暗めの照明のもと、いくつものモニターが明滅するさまは、昼間の光景とは思えない。

アマリリスのメンテナンスは、まだ小一時間はかかるという。博士はナイトキャップを被って寝室に引き上げるし、鹿の生首の飾ってある部屋で待つのも厭なので、独りで下りてきたのだ。

四つのモニターを交互に眺めつつ、プリントアウトされたデータと見比べながら、おれ唖然とし、かつ凍りついた。低熱源・高周波体の氾濫……といえば少しはスマートに聞こえるが、要するに、百鬼夜行。どんな切り口から眺めても、あやしげなプラズマの妖怪変化どもが、所せましとぶちまけられていた。

「まあ、スキャナー本人が予想したとおりではあるな……」

二つの首のうち、ひとつが人面の虎がのし歩くさまを眺めながら、おれはつぶやいた。するうちに、私道の真ん中を少し過ぎた辺りに、目が引き寄せられた。ロータリーをおもわせて、ちょうど少し膨らんでいる所で、常夜灯やベンチがぽつぽつと置いてある。

むろんその辺りにも、コウモリの羽をつけたトカゲが飛び交い、本体のない人間の影法師が四つん這いで這い回り、サイは頭足類の腕足を蠢かせているが。石畳の上に目を凝らせば、巨大な意匠を思

わせる複雑な影が浮き出ているのだ。その部分をモニター上で拡大すると、最初首をかしげていた一彦も顔を近寄せた。

「何に見える？」

「甲殻類に似ていますね。蟹……いや、サソリかな……」

……ヘビ、ノ、アタマ、ハ、サソリ……デ、ス。

耳もとで囁かれたように、アマリリスの声が脳裏で響いた。こわれた機械をおもわせる、それでいて歌うような。予言詩にも似た少女の言葉を、もしあらかじめ聞いていなければ、影の存在に気づいたかどうか疑わしい。それは敵が隠れ潜んでいる位置を、正確に指摘した言葉ではあるまいか。

「大きいですね」

一彦の声は、いつになく恐怖の色を帯びた。

さっきから根を詰めっ放しだったので、コーヒーが欲しくなった。率直に催促すると、ガレージ内のいつものポジションに収まったところで、濃いコーヒーを淹れてくれた。合成豆だというが、ブラックで充分いけた。

「いっそ掘っちまったほうが早いんじゃないかと、迷っていたんだが」

「許可がとれたんですか？」

首を振った。公道でさえ、たった二メートルの掘削を行うのに二十枚の書類がいる。上下水をはじめ、各種配管は九十九パーセントが剥き出しのまま、地上を渡されている。最近では、いにしえの「電柱」の復活がいちじるしい。それほど地下は禁断の領域なのだ。いわんや私道をや。しかも直下には、重度に汚染された動物園が埋まっているのだから。

こんな状況下で掘り起こしたりすれば、対テロリストの武装警察が飛んで来るだろう。

「だがその必要もなさそうだ。当初の計画どおり、お転婆姫はお借りするよ。未成年を巻きこむのは、主義じゃないんだが」

「今さら外されても、妹は承知しないでしょうね」

泥炭マッチを摺って煙草に火をつけた。煙を吐くついでに何気なく振り返ると、死霊のような男が立っていた。顔は蒼ざめ、頬はこけ、落ちくぼんだ眼窩の中で、ぎらぎらと目だけが光っていた。一瞬、一彦がズヌビーになったのかと疑ったが、本人は隣にいるし、帽子を前向きに被っているから、死霊は兄のほうである。

変わり果てた姿の由来を問えば、生ける屍と化して復活したのではなく、ここ三日の間、ほとんど寝ていないし、食べた記憶もないという。山ポッドの整備に夢中で寝食を忘れていたらしい。

「あれをもう一度動かそうなんて、本気で考えちゃいないだろうね」

一朗は何やらぶつぶつ呟き、おれを手招きした。ガラクタの山を抜けて、ガレージの裏側の整備工場に出た。修理中の車やチャペックが居並ぶ奥に、工業用マニュピレーターが集中している一角があらわれた。かれは光る目であれを見ろと促した。防酸布にすっぽりと覆われた上に、軍用チャペックの頭部が露出していた。

黒い、艶やかな光沢を宿している、それは明らかに、山田式ポッド三型……おれのよく知る相棒の頭部だった。

イミテーションボディによって叩き潰される前の、懐かしい顔がそこにあった。

23（1）

23

「人食い私道事件」、ミッション決行の日。おれは当然のように、昼ごろまで寝ていた。

一応言い訳をすれば、前日までけっこう忙しかったのだ。打ち合わせをしたり、書類を作ったり提出したり。それらを昨日の夕方までに片付けておいて、アマリリスとこざっぱりしたレストランに入った。ちょっと旨いものを食い、合成ではないワインを飲んだ。おれなりの、士気を高めるための儀式だ。

当日は、現場に入るまでとくにすることがない。ちょうど舞台の初日をむかえた役者と似ているかもしれない。稽古もやった。衣装や小道具も揃った。ゆっくり寝て鋭気もやしなった。あとは本番まで緊張のあまりのたうちまわろうと、ふてぶてしくあぐらをかいていようと、各人の自由。おれは明らかに後者だが。

本番は夕方四時半スタート。この季節、ちょうど日が暮れかかる頃。道行く人の顔もわからなくなり、「誰そ彼？」と尋ねたくなるタソガレ時。もしかしたらそれは人ではなく、魔物かもしれないので、「逢魔が刻」と昔の人が名づけたのは、言い得て妙であった。

まさにおれたちは魔物に逢いに行く。青表紙のファイルを熟読した結果、最も多く人が食われているのが、その刻限と推定された。

「マスター、二葉さまがお見えです」

シャワーを浴びて出てきたところで、アマリリスが告げた。まあ、来るだろうとは思っていたので、たいして驚きはしない。どうせ今日も創立記念日なのだろう。と、苦笑しながら、少女が手わたした寝覚めの合成ビールを片手に、上機嫌でリビングに入った。

「そろそろ起きてる頃かと思って」

紅茶のカップをソーサーごと手にしている立ち姿は、いつもどお

り。だが、しかし、おれの顎は胸に届くほどあんぐりと開き、合成ビールの缶は床に転がり落ちた。

「なんだその恰好は！」

「失礼ね。一生懸命お洒落してきた女の子に対して、今のは一番言ってはならないセリフよ」

「お洒落だと……」

いつものセーラー服にお下げ髪というスタイルとは、どこへ吹き飛んだのか。一週間ぶんの寝癖をつけたような頭に、武装警官のゴーグルみたいなサングラスをちょこんと載せ。青々とアイシャドウを入れて、口紅をきりきりと塗った。

ラッパ状の袖以外は、体にぴっちりと纏いつく、黒のジャケット。大きく開いた襟ぐりに、たっぷりとした、真紅のリボンを結んだまでは許せるとして、タイトスカートの短さは尋常ではない。黒のストッキングは膝上までだから、赤いガーターベルトがまる見え。白いブーツは異様にヒールが高く、歩くと盛大な音をたてた。

これでは八幡兄弟に申し訳が立たない。と、なぜか第一に考えた。田舎の街区から都市区の大学に入った姪っ子を任されたのに、みすみすグレさせてしまった「おじさん」の心境がわかる気がした。二葉はアイシャドウの下から、おれを睨んだ。

「エイジさんが何を考えてるか、だいたいわかるんだけど。わたしたちが今日、恋人どうしを演じるんだということ、忘れたわけじゃないでしょう。その上でセーラー服のほうがよかったと言うんなら、すぐに着替えてくるけど」

それはこまる。別の意味で逮捕されかねない。しかし考えて見れば、最初はアマリリスと二人で潜入する予定だったのだ。そうして青表紙のファイルを一瞥すれば、私道の怪物が二人の侵入者を襲う場合、カップルの割合が圧倒的に高いことは一目瞭然。必然的に誰と入ろうと、恋人どうしを演じることになっただろう。

じつは、この人選に関して、ひと悶着あったのだ。

アマリリスは二葉を推薦したけれど、当然気が進まなかった。ワ

ットに電話して、適当な相手を探してくれるよう頼んだ。すると即座に折り返し電話がかかり、茨城麗子がみずから行くと申し出た。ばかを言え。あんたはたしかに有能な秘書だが、武器の扱いに関しては素人だ。危険すぎると言って断ると、すかさずワットが電話を横からひったくり、

（では、ぼくがお相手しましょうか。こう見えても、女の子の恰好をすれば、十人中十人は信じるでしょう）

ここにおいて、おれはサジを投げた。十一歳の女装美少年と腕を組むよりは、見た目は女子中学生のアマリリスのほうが、千倍ましである。けれど、敵の感覚器に捕まらない少女には、ぜひ伏兵となってもらいたい。となると……

「言っておくけど、今さらわたしを外そうなんて思わないことね。銃なら三歳の頃から玩具がわりに扱っているし。ダガーつき拳銃の達人、栗林小五郎先生には五歳の頃から師事しているわ。アマリリスちゃんは、伊達にわたしを指名したわけじゃないのよ」

「そのスカートは、なんとかならんのか」

「大日本おっぱい党員に対抗するには、美脚で勝負するしかないでしょう。だいじょうぶ、下には護身体育用のブルマーを穿いているもの。見る？」

「いや見せなくていい！」

23（2）

何がだいじょうぶなのか。なぜ勝負する必要があるのか。そもそも、誰と勝負するつもりでいるのか。様々な疑問の渦に呑まれながら、「これくらいが一番動きやすいの」という一言に、かろうじてしがみついた。

「ならば、よし」

今日の昼食もまた、当然のように三人ぶん用意された。相変わらずレタスを折りたたんで齧りながら、二葉が言う。

「わたしがあらためて言う必要もないと思うけど、今回のミッションにおける最大の問題点は、敵が出てきてくれるかどうかよね。確率的には、どんなものなの？」

「数値化しようがないね。様々な面で、可能性が高いほうを選択したという意味では、百に近いとも言えるし。しょせん運任せである点は、ゼロに賭けているようなものだ」

「ゼロに賭けろ、か。エイジさん、時々、顔に似合わずブンガク的なことを言うわね」

「顔は関係ないだろう。いくら頭をひねって計画を練っても、賽の目だけは操れない。最終的には、出たとこ勝負がものをいうんだ」

兵士にギャンブラーに営業屋。かれら、最も過酷な人生の最前線に立たされている者たちは、最後は運がモノを言うことを知っている。ちっぽけな人間にはどうすることもできない、巨大で気まぐれな力の作用を、身辺にひしひしと感じながら生きている。兵士ではなかったが、おれもまた、悪運の強さゆえに生きのびた。

そうして悪運の強さゆえに、大切なものが失われるのを、目の当たりにしなければならなかった。

「ふぅーん」

「なんだよ」

「エイジさんて、時々、ものすごく悲しそうな目をするよね。主人

をなくした犬みたいに」
　どうせおれは野良犬である。けっこう的を射ているので、思わず吹き出した。
「ひとつ忘れていたんだが、アマリリスにはどんな恰好で参加してもらおうか」
　二葉に問いかけつつ、少女の顔をうかがった。急に話を振られたせいか、どぎまぎしたように頬を染めている。ファッション雑誌の成果か、彼女は外出着なども、あたりまえに自分で選べるようになっていた。先日の童話から抜け出したようなコート姿も、彼女自身のコーディネート。元がいいから何でも似合うが、「センス」もなかなかのものだ。
　そこまで考えて、失言に気づいた。ふだんはそうでもないが、今日の恰好からして、張りきったときの二葉のセンスは常軌を逸している。現に、いたずらっぽく指を舐めると、得物を前にした猫科の肉食獣の目つきで、アマリリスを眺め回している。
　現場にはワットや麗子をはじめ、けっこうな人数が待機するのだ。そこへ、仮装舞踏会に招かれたような少女を二人もエスコートして乗りこむ気には、ちょっとなれない。
「このままでいいんじゃない」
「は？」
「べつに本多平八郎忠勝みたいな恰好をさせる必要はないでしょう。アマリリスちゃんはどう思う？」
　生真面目な表情で、少女はこくりとうなずいた。そういえば、最初は違和感を覚えていた、新東亜ホテルの客室係の制服に、おれはすっかり馴染んでいた。けれど、このまま外出させたことは、もちろん一度もない。逆にいえば、仮装舞踏会的状況は回避されないことになる。異を唱えようと口を開きかけたところへ、二葉は人さし指を突きつけた。
「もちろん、エイジさんには拒否権があるわよ。マスターなんだから。でも過半数を超えて決議されたものをくつがえすのは、暴君の

所業ではなくて？」

もしおれが暴君だったら、とっくに世界征服しているという話で。

食後の茶をゆっくり飲んでから、鞄ひとつさげて車に乗り込んだ。助手席には少女メイド。バックシートに、何とも形容しがたいゴーグル娘を乗せて。私道の南口に到着すると、趣味のよくない赤い車が、いやでも目についた。おれたちが降り立つのを待ってドアが開き、紫のストッキングに包まれた脚が、すらりと路上にあらわれた。

茨城麗子はこちらに軽く会釈しつつ、後ろのドアを開けた。どうやらここにも一人、創立記念日で休んでいる小学生がいるようだ。

「ご苦労さま。もう少しゆっくりして来られるかと思っていたのですが、ちょうどよかった」

赤いダブルのジャケットに、チェックの半ズボン。黒いハイソックスとニッカーボッカー。こんな珍妙な恰好がサマになるのは、この男くらいだろう。しかも不可解な威厳があり、親善大使のように手を広げると、アマリリスはともかく、二葉まで深々とお辞儀している。眉をひそめて、おれは尋ねた。

「ちょうどよかったとは？」

大昔の漫画雑誌から切り抜いたような少年は、意味ありげに笑い、私道のほうを指さした。見れば門柱にもたれて、線の細い、影法師のような人物が腕を組んでいた。わずかに持ち上げた黒いバイザーの下に、薄く微笑んだ赤い唇が覗く……人類刷新会議の武装警官。コードネーム「カヲリ」だ。

「エイジさんに、お客さまです」

23（3）

ワットを睨みつけたが、薄笑いを浮かべるばかりで埒があかない。思うに、もしミッションそのものにケチをつけに来たのなら、責任者がいる以上、おれを待ついわれはない。ではワットの言葉どおり、おれの個人的な客であり、武装警察としてではなく、「カヲリ」として話があるということか。

私道へ向かって歩きながら、おれはアマリリスに目配せし、指でサインを送った。何が起きても手を出すな、という意味の。

「治安課にも交通課にも書類は出してますよ。もちろん、許可証も持っている。見せましょうか」

「いや、管轄が違うからな」

姿勢をまったく変えぬまま、赤い唇だけが蠢いた。ハスキーがかった、温度の低い声。もし、バーのカウンターで出会っていたら、ぜひお話ししたいタイプなのだが。

「見学はご遠慮願いますよ。これでも配置には気をつかっているんです。そんな目立つ恰好で門の前に立たれたら、計画が狂いかねません」

「ご挨拶だな。わたしもいろいろと目をつぶっているのだということを、忘れてもらってはこまる」

「ああ、なるほど……でも、あれは正当防衛でしたよ。撃たなければ、こっちがオシャカになっていた」

なかばカマをかけた形だが、唇がにーっと横に広がるのを見て、的を射たのだと確信した。ぞくぞくするような、ハスキーボイスが言う。

「化学鑑定の結果、炭化したアーマードワームの組織、および、重炉心弾の使用が確認された。その弾を所持している者を見つけ次第、わたしには射殺する権限がある」

おれは道化らしく、両手を広げてみせた。脇腹のホルスターには、

すでにパイソンがおさまっており、グリップの一部が覗いた。あえて今日は、二発の弾薬しか用意していなかった。言うまでもなく、イーズラック人から買った残りの二発で、一発はすでに装填してあり、もう一発はジーンズのポケットにおさまっている。

カヲリはもたれていた門柱を離れ、目の前に立った。甘く危険な香水の香り。今にも銃を心臓に突きつけられるかと思えば、右手をあげて自身のヘルメットに軽く触れた。モーターがうなり、ゆっくりと、バイザーが上まで持ち上がった。

角度的に、彼女の素顔はおれにしか見えていない筈。唇だけ見て予感したとおりの、いやそれを上回る、いい女……だが、しかし、武装警官が素顔を一般人にさらすなど、まず考えられない。いわば、黒衣の天使がいよいよ大鎌を振り下ろす際、顔を覆っていた黒い頭巾を脱ぎ捨てるに等しい行為だ。

「わたしはおまえに俄然、興味が湧いた」

「光栄の至りです、セニョリータ」

「ふん、これがどういう宣告か、もちろんわかっているのだろう、コードネーム『エイジ』。おまえを殺すかもしれない相手の顔くらいは、知っておいてほしくてな」

再びバイザーが下りて、彼女の素顔を黒い鏡面で覆い隠した。ただその後ろで、素早く動く彼女の視線が、はっきりと感じられた。どこへ注がれているのかも。

「またあの少女を連れているのか」

詰問されるのかと思えば、カヲリは警察官らしい機敏な動作で、くるりと背を向けた。そのまま一度も振り返らず、路肩に停められた１０００ＣＣのバイクにまたがり、轟音をとどろかせた。兇暴な海棲哺乳類をおもわせる、漆黒の車体が消える頃、おれは道化師のポーズを取り続けていたことに、ようやく気づいた……

茨城麗子と少し打ち合わせて、自分の車に戻った。ワットの言うとおり、早く来すぎたかもしれない。窓から眺める間に、ようやく数台の車が到着して、警備員や無線技師が下りてくる。応対に出た

麗子のおっぱいを目の当たりにして、かれらは一様に驚嘆している。
「クローズドサークル、か」
なかば無意識につぶやくと、小動物のように、アマリリスは助手席で首をかしげた。
「はい？」
「孤島だとか吹雪の中の山荘だとかね。閉ざされた環境をあらわす、ミステリー用語さ。私道の中では、驚くほど完璧なクローズドサークルが形成されている。一旦、その気で踏み込んだが最後、事件が決着するまで、周囲からは中の様子がまったくわからない」
スキャナーのデータに映っていた、黒いサソリのポイントは、どこからも完全な死角。監視カメラの設置なら、とっくに二葉が試していたが、何度仕掛けても、プラズマの亡霊によって瞬時に破壊された。強力な無線機にせよ、周りのスタッフのために用意したもので、中では役に立たない。
あとは、閃光弾を使うのが関の山だが、持つだけ無意味だろう。応援を呼んだ時点で、おれたちはとっくにオダブツなのだから。
「やはり、二葉を巻き込みたくなかったな」
誰に言うともなしにつぶやいて、煙草に火をつけた。
窓の外に目をやると、二葉は門扉の前で、いつぞやの少年二人と話しこんでいた。時折、彼女の澄んだ笑い声がここまで届く。二人のうち、背の高い不良少年のほうが色々な意味で硬くなっており、二葉の「美脚」をちらちらと盗み見ては、蒸気を吹き出しそうな反応をみせた。

24（1）

24

そろそろ時間だ。

声に出してつぶやいたのかもしれず、心の声を聞いただけかもしれないが。窓の外はすっかり「タソガレ」ていた。

カーラジオから、すり切れたような音質で、クラシック曲が流れていた。刷新会議の統制下にある味も素っ気もない国営放送は、気象情報やワーム警報以外、一日じゅうこの調子。今流れているのは、ブラームスの二番あたりか。こんなときこそ、ジギー・バンデル・ルーデンの新曲でテンションを上げたいところだが、今は望むべくもない。

かれは最近、ニューアルバムを出したという噂で、しかもかなりの問題作であるらしい。闇市にカードが流れていないか、今度探してみよう。もし生きて戻れたら……口の端を歪めて笑い、煙草を揉み消した。計器類の灯りだけがともる薄闇の中で、無線機の回線を開いた。

「エイジだ。一朗かカズ、とれるか？」

「はい。八幡です」

割れた声だけ聞いても、兄か弟かさっぱりわからない。かれらは北口近くに、路上駐車を装って待機している筈である。むろん、いつでも神社を吹き飛ばして、踏みこめる準備をして。肩越しに、二葉に目配せすると、真顔でうなずいて無線機を受け取った。

「あ、カズ兄さん、二葉です。ちょっと行ってくるから」

「気をつけろよ」

「オッケー」

再び無線機が手渡されたところで、ばりばりとノイズ混じりに女の声が響く。

「茨城です。エイジさんどうぞ」
「ミッションスタートだ。あとはよろしく頼む」
「了解しました。ご武運を」
悪運の強さにだけは自信があるよ。そう胸の内でつぶやきつつ、無線機を切って、計器のくぼみに放りこんだ。私道の中に入れば無用の長物。持っていても仕方がない。
外はシュールな心象風景をおもわせる、不安定な明るさ。まばらな街灯がともり、路面には闇が貼りついているが、空はまだ残照をとどめたまま。ちらちらと瞬く星の下を、黒い紙をちぎったような雲が走る。おれたちが「星」と呼んでいるもののいくつかは、旧世界の測位衛生なのだけれど。
野次馬を避けるために、入口の周りは、一見、無人のようだ。今夜は警備員のみならず、無数の目がここに注がれているのだが。門扉の前で立ち止まり、誰にともなく手をあげた。蔓草の下に巧妙に隠された梯子に足をかけ、ひょいと乗り越えた。アマリリスと二葉は、ともに細い体を鉄格子の間からすべりこませた。
「無性にオムレツが食いたくなった。帰ったら作ってくれるか」
中に入ったとたん、濃い闇につつまれ、温度が三、四度低くなった気がした。それでもこの距離だと、まだ少女の表情が確認できた。相変わらずの無表情であるが、こちらを向いたとき、大きく瞬きするのがわかった。
「はい、マスター」
「たのんだよ」
石畳の小道を先に歩いて行く、少女の背中でひらひらと揺れるリボンが、闇に呑まれるまで見送っていた。ほっそりとした、二葉の腕が回されるのを意識した。歩き始めたおれたちの姿は、ワームの棲息地にわざと一人か二人ずつ侵入して証拠の品を取ってくる、肝試しというゲームに似ていただろう。実際にここでそれをやって、消えた男女が案外多いのだ。
「優しいんだから。あの子にだけは」

これほど体を密着させても、肘に乳房の感触が伝わらない。化粧をしたり、ませた服を着てみても、やはり子供なんだと思えば、少々痛ましい。もしかすると二葉は、おれのケチくさい感傷を忘れさせようとして、わざとぶっ飛んだ恰好をしてきたのではあるまいか。

「おれに似てるからかもしれないな」

「アマリリスちゃん？」

「ああ。きみはおれが飼い主をなくした犬のようだと言ったが、アマリリスにもどこか、そんなところがある。あくまで印象なんだが。一度捨てられた経験があるんじゃないかって、思うときがあるんだ。もちろん彼女は顔に出さないし、実際、記憶もないんだけど……ときどき、胸をしめつけられるような目をしている」

黒々と私道を覆う常緑樹のざわめきが、会話を途切れさせた。ぎゅっと腕にしがみつきながら、二葉が囁いた。

「さっそくお出ましみたい」

24（2）

十メートルほど先の闇の中に「鬼火」が二つあらわれた。

プラズマの蒼い炎。ひとつは、そのまま粘土のように形を変えて、双頭の犬と化した。山猫のように大きく、爬虫類じみた顔をして、四つの眼窩の中にも鬼火が詰まっていた。もう一つの炎は卵のように、中に女の子の形を宿した。十歳くらいで、肩のふくらんだ青いワンピースを着て、リボンのついた帽子をかぶり……赤い靴を履いていた。

双頭の犬はめらめらと揺れながら、威嚇するように身を低くした。地響きめいた唸り声が聞こえ、炎の涎がしたたると、石畳の上で、蝋をたらしたように燃えるのだ。しっ、と声を上げて、少女は犬をたしなめた。笛を吹いたような、うつろな声。揺れる炎の中にいるせいか、とても人形には見えない。

次に少女はこちらに向き直り、つ、と右手を差し出して、おいでをした。炎の切れ端が何匹もの蒼いチョウと化して、彼女たちの周りを飛び交った。幻惑だ。一種の電気催眠術だと理解してはいるが、頭の奥がじんとしびれ、甘い唾液が分泌された。炎の中から、少女はにっこりと微笑みかけた。

「だいじょうぶか？」

二葉の顔を覗きこむと、見開かれた目の中で、虹彩が収縮を繰り返している。よくない兆候だ。軽く頬を叩くと、びくんと肩が震えた。大きく目をしばたたいた。

「ショーの前座に、つい見とれちゃったわ。行きましょう。真打の所へ案内してくれるみたいだから」

バレリーナの動作で、赤い靴の少女はくるりと背中を向け、先に立って歩き始めた。双頭の犬はぐにゃりと溶けて、巨大なアメーバーと化してうずくまると、そのままずるずると少女の背に従った。

ひと気のない深夜の待合室に、振り子の音だけが鳴っているように、

少女の靴音がコッチコッチと響いた。
アメーバーは這いながら、プラズマの蝶を一面にばらまいた。また炎の一部はトカゲと化して走りまわり、時おり蝶を捕らえては、貪欲に呑みこんだ。中には背中から団扇状の羽が生えたやつがいて、こいつらは木から木へと飛び移りながら、空中で蝶を襲うのだ……ぱん、と頬に刺激が走った。
「ほら、目が泳いでる。ジャンキーはとっくに卒業したんでしょう」
「そのネタ、どこで仕入れたんだ?」
頬を押さえたまま小声で尋ねたが、二葉は片目を閉じただけ。たしかにおれは処理班を辞めたあと、重度の薬物依存症におちいった時期がある。それをことさら吹聴した覚えはないが。ともあれ今の一発で、だいぶ頭がすっきりした。プラズマが捏ね上げた蒼い悪夢の洪水も、あの極彩色の幻覚には及ぶまい。
徐々に、ポイントに近づきつつあった。
噴水は陰火を噴き上げ、常夜灯が明滅し、メリーゴーランドは音もなく回っていた。今や蝶にかわって、髪の毛状の触手を地面に引きずりながら、アンドンクラゲが浮遊し、水盤からは、脚の生えた魚が這い出してきた。靴底で陸棲の貝がぐちゃりと潰され、割れた殻の中で蛸に似た生き物がもがいた。
極力それらを無視しながら進むうちに、先を歩く少女が足を止めた。闇にこだまを返していた靴音が消えると、耳鳴りに似た静寂につつまれた。壊れたベンチ。梯子の取り外された滑り台。ジャングルジムには中が見えないほど蔓草が絡みつき、シーソーは永遠に傾いたまま……不意に、少女の姿が見えなくなったので、あわてて視線をさまよわせた。
背の高い常夜灯が、広場の中央でぽつんとともり、その下のぶらんこを照らした。すっかり錆びた鉄柱の間に、二つ並んだぶらんこのうち、ひとつは片方の鎖が外れていた。少女は、もう一方に腰をかけ、赤い靴を路面につけたまま、軽くぶらんこを揺らした。
キイ、という音がかん高く響いた。おれは神経を掻きむしられる

思いがした。

少女までの距離は、もはや五メートルにも満たない。にもかかわらず、彼女は数日前の夜に見た等身大のビスクドールではなく、明らかに生身の女の子だった。相変わらず彼女の全身から、鬼火が放出されているが、そのせいで生じた錯覚とは思えない。

言葉にならない呻き声が、おのずと洩れた。暗雲のようなどす黒い憂鬱が胸から湧き出して、体じゅうに広がる一方で、頭の中が真っ白に染められてゆく。パニックだと知りながら、どうすることもできない。視界が白くかすみ、やがて霧の中にひとつの顔があらわれた。

妻の顔だった。

これ以上は不可能なほど見開かれた目には、苦痛と非難の色が交互にうつろった。彼女は血まみれの手を差し伸ばした。救いを求めるように。あるいは、抗議するように……

（な……ぜ、撃った、の……？）

頬に火がついたような感触がまた走った。いつの間に、石畳の上にひざまずいていたのだろう。二葉がおれを固く胸に抱きしめた状態で揺さぶっていた。

「エイジさん、聞こえる？　あれは『擬人』なんかじゃない！　ただのお人形よ！」

「しかし……」

「もう、お願いだからしっかりしてよ。プラズマの炎の中にいるから、あんな芸当ができるんでしょう。でもしょせん、ただの幻惑よ。絶対に『擬人』とは違う。あのお人形は、決してエイジさんの心の中に入り込むことはできないわ」

24（3）

十七歳の小娘に励まされて、おれはようやく我に返った。ゆっくりと立ち上がり、彼女の肩に手を置いて、ささやいた。

「恩に着る。もうだいじょうぶだ」

赤い靴の少女は、依然、ぶらんこに腰かけていた。キイと音をたてて、時おり軽く揺らすばかり。漕ぎだす意志はないらしい。二葉を背後に残したまま、一人でぶらんこに近づいた。影が重なるほど接近したところで、少女は顔を上げた。栗色の巻き毛。泣いた後のような、腫れぼったい目もと。黒い瞳はどこまでもうつろで、ふくよかな唇は、きゅっと結ばれたまま。

あの夜、木馬に乗っていた人形とは、細かい特徴が異なっているが、それでいて紛れもなく同じ少女なのだ。あたかもこの子が死んだあと、嘆き悲しんだ親が、遺影から人形を作らせたように。

「きみは一人なのか」

自然にふるまったつもりが、見事に声が震えた。燐光の中で、少女は大きく瞬きをしたきり。再び前を向いた拍子に、ぶらんこがキイと鳴った。

「いけないなあ。こんなに暗くなってから、一人で遊んでいたのでは。ご両親が心配するだろう。家はどこなの？」

小さな右手が鎖を離れ、ある一点を指さした。赤い靴の少し先。蒼い火影を映している、石畳の上を。おれは背中に水を浴びせられた気がしたが、つとめて明るい声で、次の質問を発した。

「そんな所を指されても、かなわないなあ。お父さんはどこにいるの？」

じっと前を向いたまま、同様に右手が突き出され、すっ、とまた地面を指さした。もとは愛らしい手の影が、炎によってグロテスクな虫の形にゆがめられた。

口の中がからからにかわいていた。本能は恐怖の仮面をつけて、

すさまじい力でおれの襟首をとらえ、後ろに引き戻そうとする。下がれ。そしてそのまま走り去れ。間違っても、最後の質問を口に出してはいけない……心の声とは裏腹に、呪縛されたように口が開き、寒風に転がる枯葉のような音をたてた。

「じゃあ、お母さんは？」

地面を指さしたまま、少女はいきなり顔を上げた。何も見ていない目でおれを見つめ、真横に口を引きつらせた。これほどおぞましい笑顔が存在するだろうか。思わず後退りしかけたとき、大きく地面が揺れた。まるで蛇の背のように、のたうった。

ウロコをおもわせて、石畳がばらばらに弾き飛ばされ、少女の足もとを中心に、巨大な亀裂が八方に走った。足をすくわれず飛び退いたのが奇跡のようだ。

石畳を割ってまず突き出されたのは、巨大な球根をおもわせる「口」だった。真横にぱっくりと割れて、無数の細長い棘のような牙を剥き出しにし、燐光を放つ唾液をしたたらせた。その両側から三対の脚が飛び出し、太い爪状の先端を石畳に食い入らせて地面を踏みしめると、ばらばらと瓦礫を吐き出しながら、漆黒の本体を持ち上げた。

多脚ワーム！

まさに漆黒のサソリに似ていながら、悪夢の中で何十倍も醜悪に歪めたような姿をしていた。細長い口吻の両脇に、いやに太い、先端が肉質の触覚があり、脚の上下には枝状の副肢が無数に蠢いていた。硬い瘤を並べた背中には、縦に四つの巨大な「目」が並び、それらはあまりにも人間の目とそっくりなのだ。

サソリ同様、尾は弓なりに反り返り、先端の「口」を大きく広げて、うねうねと蠢く牙を露出させた。おれを頭から丸齧りと、しゃれ込むつもりだろう。

「伏せろ、二葉！」

叫ぶと同時に、片膝をついた。いろいろと盛りだくさんの趣向だったが、結局まんまと出てきてくれたわけだ。笑みを浮かべる余裕

すら、取り戻していた。パイソンを抜いて、六インチの銃身を向け、前から二番めの、最も大きな「目」に狙いを定めた。

引きがねをひいた。ガチッ、という不吉な音が手の先で響いた。不発弾だ。

「くそっ！」

多脚ワームは歓喜するように脚を踏み鳴らし、瓦礫をさらに弾きながら前進した。図体がでかいわりに、動きの速さはアーマードワームの比ではない。シリンダーを抜いて不発弾を捨てたが、ポケットの中の最後の一発を装填する時間は、とてもなさそうだった。

逃げろと叫ぶつもりで振り向いたとたん、信じられない光景が飛び込んできた。二葉が、猛然と突っこんでくるのだ。

「うわあああああっ！」

突き出された多脚ワームの「口」は、おれの頭上を越えて二葉にせまった。彼女の靴底から火花がほとばしり、地面に激突する「口」とは入れ違いに、細い体を宙に躍らせた。弾き出された二つのスプリングが、空薬莢のように降ってくる。二葉は空中で右腕を怪物に向かって真っすぐ突き出し、もう片方の手を添えた。

「お祈りを済ませておくことね、ベイビー」

24（4）－25（1）

どこに隠し持っていたのか、彼女の手には、ドライヤーを二回りほど大きくしたような、見たこともない銃が握られていた。ぼん！と音がして、閃光も煙も火薬の臭いもない代わりに、衝撃波のようなものが、多脚ワームを直撃した。空砲だ。もともと子供の玩具だが、とんでもなく兇悪に改造されている。

石畳を爪で引っ掻く、気が狂いそうになる音を発しながら、漆黒のサソリは約一メートル後退した。全身を波打たせ、グギギグゲエッ、と、二度と聞きたくないような悲鳴を上げた。

発射の反動で、二葉は後方に吹き飛ばされ、茂みの中に突っ込んだ。キャッ！　という悲鳴を聞く限り、お尻をぶつけた程度だろう。無理な体勢から無理してキメぜりふを吐いたわりに、相手にたいしたダメージは与えていないが、少なくとも、おれが第三の弾薬を装填する時間はかせいだ。

さて、

一発めはアタリ、二発めはハズレ。となると、この弾が生きている確率は五十パーセントだが、悪運の強さを加味すれば、七三パーセントくらいの自信はあった。二葉にならって、キメぜりふを吐かなければいけないような気がしたが、それも彼女が与えてくれた余裕にほかならない。

「お寝んねの時間だぜ、ベイビー」

引きがねをひいた。

不発弾ではなかった。

25

反動で吹き飛ばされ、三回転して顔を上げると、目の前に、炎の柱が出現していた。

天をも焦がすかと思われた、灼熱する火柱の中で、世にもおぞましい断末魔が地を揺らした。いつのまにかそばに立っていた二葉の肩を、自然に抱いた。火勢は見る間に弱まり、生き物の焼ける臭いを残して、円形に穿たれた穴の中に吸いこまれた。

がさがさと、耳障りな音が鳴っていることに気づいた。巨大なアリジゴクの巣をおもわせる穴の中を、赤い靴の少女が四つん這いで這い回っているのだった。等身大の人形の姿をあらわし、焼け焦げた服から、球体関節が露出していた。少女は突然動きを止めて、こちらを見上げた。

ガラスの眼玉は真円形に見開かれ、口は耳まで裂けて、ノコギリの牙を剥き出しにして、ニタニタ笑うのだ。

「そういうこと……」

二葉がつぶやいて、ぎゅっと身を寄せた。断片的な言葉の意味が、いやになるくらいわかる気がした。間もなく地面が揺れ始め、穴の中から、先端の尖った、細長い脚がいくつも突き出された。少女人形は再び這いながら、ずるずると螺旋を描いて穴の中心へ下りてゆくと、下半身をすっぽりと埋めた状態で、狂ったように両腕を振り回した。

この世のものとは思えない笑い声が鳴り響いた。人形の目が青く燃えた。

その頃には、私道全体が脈打っていた。脈動は蠕動にかわり、波のように揺れて、瓦礫と化した石畳を吐き出しながら、巨大な節足動物の黒光りする体をあらわした。おれたちはとうに立っていられなくなり、常緑樹の茂みに弾き飛ばされていた。ひざまずき、二葉の体を抱いたまま、穴の中央からせり上がってくる化け物の本体を見つめた。

……ヘビ、ノ、アタマ、ハ、サソリ……デ、ス。

そういうことか。

と、遅ればせながら、心の中でつぶやいた。本体は首のないムカデだった。いや、さっき吹き飛ばした「アタマ」の代わりに、真紅

の、ペンシル状の器官の先端に、少女人形の上半身が、そっくり嵌まりこんでいた。巨大ムカデの脚は細長く、一つの節に二対ずつついており、またご丁寧にも、腹部には一つずつ、「目」が嵌めこまれていた。

けれど、何よりもおれを驚かせたのは、最先端の真紅の節の腹部に白く刻印された紋章だった。「逆さA」の紋章！

「なんなの……こいつ」

腕の中で、二葉の震えが伝わってくる。あるいはおれ自身、震えていたのかもしれない。気のせいではなく、明らかに耳を聾するような賛美歌が、どこからともなく鳴り響いていた。化け物の頭上には真っ黒な雲が渦巻き、幻燈のように、少女人形の恐ろしい顔を、でかでかと映し出していた。

こいつは多脚ワームに違いない。けれど、賛美歌といい、幻燈といい、ワームごときにできる芸当ではない。三十パーセント。いや、ともすると半分くらいは、イミテーションボディ化しているに違いない。

ギチギチと狂喜するような声を発し、私道全体が変じた化け物は、無数の「目」でおれたちを見下ろした。口の所在は明らかでないが、まあ、ミンチにすればどこからでも食えるだろう。化け物の姿を見せまいとして、おれは二葉を背中でかばい……

待っていた。

伏兵は、先にあらわれたほうが負けである。

「はあああああああっ！」

25（2）

声のしたほうを振り向いて、おれはまたしても、信じがたい光景を目の当たりにした。

石畳はほとんど掘り返され、代わりにどこまでも続く多脚ワームの胴体が、低く高く波打っている。その上を、アマリリスはエプロンごとスカートをつまんだ恰好で、振り落とされることなく、猛スピードで駆けて来るのだ。まるで、十二時の鐘の音を聞いたサンドリヨンのように。

次の瞬間、たん！　と、少女はワームの背を蹴り、逆さに宙に舞った。

不思議な舞踏のように、両脚を空ざまに突き出した姿勢のまま、背中から突っ込み、ワームの頭部に近い体節にぶち当たる直前で、半回転して正面を向いた。そのときすでに、彼女の左手はハガネの爪と化しており、高々と振り上げた状態から、おもむろに化け物の胸に切りつけた。

ガキッ！　という、硬いものどうしがぶつかりあい、かつ砕ける音が鳴り響いた。ワームの悲鳴が空を裂き、バランスを崩したクレーンから何本もの鉄骨が降ってくるように、化け物の脚がばら撒かれた。その中を、逆さまのアマリリスが飛んできたかと思うと、くるりと背を向けて、おれたちの面前に着地した。

ハガネの爪からワームの青い体液がしたたっている。化け物は、折られた脚を振り回し、「目」のひとつから体液を噴き出しながら、直立した上体をのたうちまわらせた。頭上に映し出されていた人形の顔は消え、もはや賛美歌も聞こえなかった。

少女は間合いを保ったまま、なかなか踏み込まない。獣じみた唸り声を上げて、ワームは赤い三角帽子のような頭部の下を、たちまちコブラの首の形にふくらませた。さらに翼が生えるように、その両側から、巨大な鎌に似た腕が三対出現した。それらが体の全面で

噛みあうとき、ギチギチと音をたてて、蒼い火花を飛び散らせた。
「アマリリス……」
思わず声をかけると、少女は必要最小限の角度で振り向いた。目礼するようにうなずき、また前を向いたとたん、怪物に向かってダッシュした。
「はあああああっ！」
土煙を引きながら高く飛び上がると、両腕を面前でクロスさせ、あろうことか、六本の巨大な鎌が待ち受けている怪物の胸に、まともに飛び込んだ。おれは眉をひそめた。腕の中で、二葉が身を硬くするのがわかった。大鎌が少女を抱きすくめるのを目の当たりにしたとたん、怪物の上体は、はるか後方へ吹き飛ばされた。
長い長い尾が、ずるずると引きずられてゆく。おれと二葉は顔を見合わせ、すぐに後を追った。多脚ワームの絶叫に混じって、行く手から聞こえる、ぐちゃぐちゃとものを砕くような音が、しだいに大きくなる。前方の闇を見つめて走りながら、おれは無意識のうちに、少女の名を呼び続けていた。
ワームの大鎌は、明らかにＩＢ化した部分だ。いくら少女自身がイミテーションボディだといっても、真にそうである部分は左手首から先に過ぎない。あの大鎌とまともに張り合ったのでは、勝敗は目に見えている……足を止めた。おれの爪先には、女の子の首がひとつ転がっていた。
それはノコギリ状の歯を剥き出しにした、ビスクドールの首だった。切断面から臓腑のようなコード類が食み出し、ガラスの目玉はしきりに蠢いているが、チャペックとしての機能は完全に停止していた。
ワームの絶叫は続いていた。それはしだいに苦痛のトーンを増してゆくようだ。釘打たれたように背を地面につけて、ワームはすでにぴくぴくと痙攣していた。六つの大鎌のうち、あるものはへし折れ、あるものは砕け、あるものは自身の「目」を貫いていた。上に乗ったアマリリスが何度も爪を突き立てるたびに、体液が飛び散り、

絶叫がほとばしった。
さらに少女はワームの腹部へ深々と爪を突き立てると、縦に裂きながら後退し、引き抜いたところで振り返った、瞳が真紅に燃えていた。我知らず身震いするおれを尻目に、左手を振り上げ、今度はずばりと真横に薙いだ。おぞましい断面もあらわに、多脚ワームの体は二つに切断された。
断末魔とともに、体液が滝のようにあふれた。
「アマリリス……アマリリス。もういい、充分だ……！」
声がおのずと震えた。少女は、けれどさらに断面に肩まで左手を突っ込み、臓物をつかんで引きずり出した。それを地面に叩きつけては、また突き刺し、殺戮を止めようとしなかった。二葉がつぶやいた。
「暴走……？」
「マスター」
繰り返される動作とは裏腹に、あまりにも哀しげな声が、おれをたじろかせた。灼熱する瞳からあふれる涙が、はっきりと見えた。
「お願い、です……わたしを……見ないで」
分断された多脚ワームは、すでに声を発しておらず、痙攣する肉塊と化しつつあった。
燐光を発する体液が少女のエプロンを青く染め、頬に点々と飛び散って、涙のあとを掻き消した。

26－27（1）

26

２８日午前2時ごろ、第１１１街区において、営業職、足立良文容疑者（２９）が民間人宅へ侵入し、一家四人を惨殺、およそ１５分後に突入した武装警察によって射殺された。殺されたのは、金物店自営業、高松光男さん（５９）、妻律江さん（５４）、長男定正さん（３２）、次男光正さん（２７）。

区殺人捜査課の調べによると、足立容疑者は会社の同僚と酒を飲んで泥酔し、三人に支えられながら帰宅中、突然暴れだした。同僚らの制止をふりきり、金物店のシャッターをこじ開けると、ガラスを割って押し入り、犯行に及んだ。

高松さん一家は４人ともすでに2階で就寝していたが、もの音を聞きつけて、１階に降りたところを襲われた。光正さんらが肉切包丁を持って抵抗したものの、首の骨を折られるなどして即死。止めようとした同僚2人も2週間のけが。また、武装警官2名がおよそ３ヶ月の重体を負った。

武装警察が駆けつけたとき、足立容疑者はすでに胸など3箇所に肉切包丁が刺さっており、全身に銃弾を浴びながら、５分間暴れ続けたという。

２８日に金物店自営業、高松光男さんら家族４人が殺害された事件で、司法解剖の結果、営業職、足立良文容疑者の遺体から大量のＫｒ－１３が検出された。Ｋｒ－１３は通称「クラーケン」といわれる、第二次百年戦争時に開発された合成麻薬。麻薬禁止法の最重要取締り案件に指定されている。

捜査当局はＫｒ－１３と犯行の関連性を調べるとともに、入手経路の割り出しを急いでいる。

27

茨城麗子は窮屈なエレベーターを出て、狭いホールに降り立った。配管が剥き出しの壁に、模造樫材のドア。看板も何もなく、向こう側からかすかに音楽が洩れてくるばかり。反射的に腕時計に目をやると、約束の十二時まであと二分。ノブをつかもうとして、一瞬ためらったあと、彼女はドアを引き開けた。

「いらっしゃい」

バーテンダーがカウンターの中で、酒を作りながらつぶやいた。男に凝視されなかったことなど、ここ十年の間に何度あっただろうか。思わず眉をひそめたほど、店内は極めて暗く、衝立や観葉植物が巧みに配されているため、この位置からでは客の顔がまったく見えない。

相変わらず見向きもしないバーテンダーの前を通り過ぎ、中へ進んだ。思ったよりフロアは広く、テーブルはほぼ満席。オールディーズのライブ音源に低い話し声の混じるさまは、宗教的秘密結社の会合をおもわせた。

最も奥まった位置にある二人がけのテーブル席に、待ち合わせの相手はすでに座っていた。気泡を上げる青いカクテルのグラスの前で、軽く頬杖をつき、麗子を見上げると片手をあげた。

「ひさしぶりだな」

温度の低い、ハスキーな声。赤い唇が、月の形を描いて微笑んだ。しばし、椅子にかけるのも忘れて、麗子は相手を見つめた。ほっそりした体を包む、黒いパンツスーツ。ブラウスもまた黒く、ネクタイだけがワインレッドだ。思いきったショートヘアだが、男のように短くはない。禁欲的な髪型は、むしろ彼女のなまめかしさを強めているようだ。

「ちょうど一年ぶりかしら」

「五日前に逢っているがな」

「そうだったわね。あなたは少しも変わってないわ……」
ある名前を口にしようとして、手で制された。しなやかな指をひるがえし、向かい側の椅子をさしながら、女は言う。
「昔の名で呼べば、親友のおまえといえども、命はない。とにかく座ったらどうだ、麗子」
椅子にかけて初めて、背中の冷たい汗を意識した。少しも変わってないという言葉は、早くも撤回しなければなるまいと麗子は思う。少なくとも、今の獣じみた殺気は、昔の「親友」にはなかったものだ。
バーテンダーが注文をとりにきた。やはり客の顔を見ようともせず、始終壁の辺りを眺めていた。ドライマティーニを運んできた時も同様で、去ってゆくかれの背中を見送り、麗子はささやいた。
「変な人ね」
「おまえの胸を見ない男が、同性愛者以外にいるのかという言いぐさだな。やつの性癖など知るよしもないが、少なくともここでは客の顔を見ないよう、訓練されている」
ちょっと肩をすくめて、グラスを持ち上げた。たいして驚きもしなかった。
「乾杯したいんだけど。あなたのこと、これからどう呼んだらいいのかしら」
女もグラスを手にした。気泡を上げる青い液体の上で、薄い笑みを保ったまま、赤い唇がこう告げた。
「カヲリ、とでも呼んでくれ」

27（2）

お互いの健康を祝して、グラスが触れ合わされた。一口飲んだあと、麗子はしばらく無言で、カクテルグラスの中身を見つめていた。訊きたいことは山ほどある。現在の自分は九割がた、疑問符で構成されていると感じるほどだ。けれどそれゆえに、どう切り出せばよいのかわからない。

相手が笑う気配を感じて顔を上げた。

「相変わらずで安心したよ。口紅の跡をつけずに飲むところも、昔と変わっていない」

笑みを返して、またグラスを傾けた。今の仕事の半分は、喫茶店のウエイトレスと変わらないが、女性客のカップに残った口紅の跡を見るたび、眉をひそめてしまう。女の「本性」がそこに刻印されているようで、身につまされる。

唇をつけてもなお透明なグラスの縁を、軽く指で弾いた。麗子は学生時代、この技術を習得するのに、半年を費やした。「カヲリ」と知り合ったのも、ちょうどその頃だ。

学部は違っていたが、同じ区立大学の二年生だった。短い冬が始まろうとしていた。そのせいか、珍しく学食は満席に近く、テーブルの端の席を確保した彼女は、賭けてもいいが、目の前の空いた席には、軽薄な男子学生が座るだろうと考えた。

（じゃまでなければ、かけさせてもらうぞ）

予想はあらゆる面で裏切られたと言っていい。カレーライスを黙々と口へ運んでいた彼女の耳に、まず飛び込んできたのは、軽薄さからは程遠い、落ち着いた口調。次に顔を上げると、薄笑いを浮かべた男ではなく、目の覚めるような美しい女子学生が、上品に微笑んでいた。

当時のカヲリは長い真っ直ぐな髪を、頭の後ろで一つに結んでいた。弓道部にでも入っているのかと考えたほど、背筋をしゃんと伸

ばした姿勢のよさに目をひかれた。
（わたしの顔に、聖なるしるしでも見つけたのか？）
（いえ、ごめんなさい。あんまり奇麗だったもので）
声をたてて、カヲリは笑った。話しぶりとは裏腹な、高く澄んだ声。半径三メートル以内にいた学生たちが、いっせいに振り向いた。
（じつはレズビアンだ、などという安直な展開は勘弁してもらいたい。もし本当にそうなら、心から謝るが）
そうではないかと直感したとおり、カヲリは富豪の娘だった。当時すでに富の大半は、首長の血族に集中していたので、彼女の実家もまた無関係だった筈はない。今も昔も、仕事以外では、あまり他人の生い立ちを詮索しない麗子だが、カヲリと付き合うようになってから、竜門寺家の影がいやでもちらつくようになった。
ただ、姓が異なっていたし、血族会議に招かれるほど濃い繋がりはなかったらしい。むしろカヲリの父親は凄腕の実業家で、新東亜ホテルに関する何らかの権益を独占し、莫大な富を築いたという噂だ。
麗子とは、気が合ったという以外にない。
お互いに淡白で、べたべたした付き合いは好まないほうだが、それでもお互いが「親友」であることに疑問の余地はなかった。大学を出てからも、当然のように二人の関係は続いた。麗子は大手商社に勤め、カヲリはただぶらぶらしていた。
（どういうわけか、わたしには勤労意欲というものが皆無だ。おかげさまで、何もしなくても食べてゆける身分だからな。せいぜいありがたく利用させてもらうよ）
実際には、彼女が言うほど気楽な身分でないことは、よくわかっていた。彼女の父親は金銭だけを信じる男だった。美しい娘を政略結婚に使わない手はなく、相手候補の筆頭には、またしても竜門寺の名が挙がっていた。ゆえに何年もの間、彼女が父親の圧力をかわし続けてこれたのは、奇跡と呼ぶに値した。
やがて人類刷新会議の猛攻が始まり、都市地区を中心に、内戦状

態に突入した。ただし、歴史家たちはこれを「戦争」とは呼ばず、クーデターと位置づけている。それほど電光石火の勢いで政権交代が行われ、首長連合は速やかに瓦解したのだ。

混乱の中で麗子は職を失い、カヲリの行方はわからなくなった……五日前、人類刷新会議の武装警官となった彼女に、再会するまでは。

「わたしだと気付いていたのか？」

「平静を保つのがやっとだった。でも、あなただとわかったからこそ、エイジさんを撃たないと確信できた」

「ふん、見くびられたものだな」

そう言った声に不機嫌な調子はなく、ただもの憂げな表情でグラスを傾けた。一年の歳月の中で彼女の身についた、麗子の知らない表情だ。

カヲリの行方がわからなくなっている間も、麗子は月に一度ほど絵葉書を出し続けた。彼女の実家は刷新会議に接収され、両親もまた行方知れずだが、読まれる確率はゼロではないと考えて。あえて封書にせず、自身の簡単な近況だけを添えた。

「葉書はすべて読んだよ。寝てもいい男がいると書いてあったが、それがあいつなのか」

あやうくドライマティーニを吹きそうになり、麗子はおもうさま噎せた。

27（3）

「図星か。あんな、くたびれた男が好みだったとはな。何でも知っているつもりでいたが、意外な一面を見る気がするぞ」
「肯定していないでしょう」
「この期に及んで言い募るか。だが、もしあの男を殺せば、麗子はわたしを恨むだろうな」
いきなり核心に触れられて、息を呑んだ。じっと注がれる冷たい眼差しの前で、唇をかんだまま、しばらくは何も言葉が浮かばなかった。
呼び出しを受けたのは、今日の午後二時ごろ。外部から会社にかかってきた電話を何気なくとると、忘れられる筈もない、「親友」の声が囁いた。
（麗子か。頼みたい用件がある。今夜十二時、旧第5街区の芦原ビルに来てくれ。五階の店の奥にいる）
それだけで切れたので、動揺をあらわす暇さえなかった。けれども気がつけば、少年社長、竹本ワットの視線が、じっと彼女に注がれていた。
（間違い電話ですか）
（え、ええ。一方的に出前を頼んで、切れてしまいました）
（遅い昼食なんですね）
ワットはそう言ったきり、とくに追及はしなかった。が、これまでの経験上、何を嗅ぎつけたか知れたものではない。彼女の十倍頭がよく、完璧なサディストで、どこまでも底意地が悪い。それでも秘書を続けてこれたのは、無職の時に拾われた恩もあるが、かれの経営者としての天才的な能力に感服している部分が大きかった。
いきなりの呼び出しには、むろん、飛び上がるほど驚いた。
どんないきさつがあったのか知る由もないが、武装警官となった以上、素性は隠したがる筈。間違っても、向こうからコンタクトを

とってくるとは、予想していなかった。他言するなと釘を刺すつもりなのか。あるいは……

（いっそ、わたしを消すつもりか）

いずれにせよ、何としてでも行く必要があった。人類刷新会議の武装警官として、「親友」はエイジをつけ狙っている。殺すとさえ宣告している。頼みこんで、誤解を解こうというのではない。そんな甘い夢を見るほど、お互い子供ではないが、あの、レイチェルの一件に端を発する、武装警察の一連の行動の意味を知りたかった。

ワットに話すべきかどうか、これは最後まで決めかねた。性格はよくないが、かれの圧倒的な頭脳は頼りになる。相手に気づかれず護衛をつけるくらい、かれなら朝飯前だろう。とうとう話さなかった理由は、麗子自身にもよくわからない。きわめて感傷的な何かが、踏みとどまらせたとしか。

（少し疲れが溜まっているようですね）

十時半を回っていた。間の悪いことに、今夜は夜勤の現場を五件もかかえていた。ワームの駆除ではなく、破損した配管の補修ばかり。この地区でもご多分に洩れず、あらゆる配管が剥き出しのまま、ビルの壁や道路わきを走っているので、ちょっとしたアクシデントですぐ破裂する。とても政府の手に負えず、結局、なんでも屋に回ってくる。

立ち会うほどのことはない、簡単な現場だ。それでも五つ重なれば、秘書がハイさようならと帰るわけにはいかない。頭痛を訴えようか。親類に危篤状態になってもらうか。考えあぐねていたところ、少年社長はいつになく優しい声で、そう言ったのだ。

（もうあがっていいですよ。だいたいうちは、配管は扱わないと言ってあるんですが、親父の代からの付き合いがありましてね。古い職人を、簡単にクビにするわけにはいかない。なに、どれも報告書にハンコを押すだけで済む話ですから、明日の朝で構いませんよ）

声は不気味なまでに優しいが、目つきは最も兇悪なサディストのそれだった。かれの言葉は鞭のように鋭く、彼女の背を叩いた。

（「人食い私道事件」の事後処理も、なんとかひと段落つきましたし。たまにはお友達とバーにでも寄って、憂さを晴らしては如何？）

いつのまにか、バーテンダーがかたわらに立っていた。白い袖がひるがえり、空になった二つのグラスを取りのけ、新しいカクテルをテーブルにのせた。いっさい手もとを見ずに……かれが去ると同時に、カヲリは笑った。昔と変わらない、澄んだ声が響いた。

「そう硬くなるな。今夜はプライベートだ。麗子から何か聞きだして、やつのもとへ踏み込もうなどと、考えているわけではない」

ちょっとグラスをかかげて言う。応じて麗子も二杯めのドライマティーニを手にした。決して弱いほうではないのに、先の一杯がけっこう効いていた。

「よかったら、先に用件を聞かせてくれない？　頼みたいことがあると、電話で言っていたでしょう。つのる話は、それからということで」

努めて快活な声を出そうとして、語尾が震えた。カヲリは、何もかも見透かしたような目つきを送った。青い液体の前で、唇が赤い月の形を描いた。

「麗子の会社は、いわゆるなんでも屋というやつだろう」

「ええ」

「ならば、建て前上は、客のあらゆる依頼を引き受けてくれるのだな」

27（4）

建て前上はね。そう返してから、麗子はきゅっと眉根を寄せた。思えば、じつに微妙な質問である。なんでも屋を名乗る以上、なんでもやるのが建て前だ。たとえ暗殺の依頼を受けても、引き受けなければ看板にもとる。けれども逆に、民間企業である以上、なんでもやれば後ろに手が回る。「建て前上は」法律を遵守しなければならない。

例えばワームを駆除するために、禁制の重炉心弾を使ったり、さらにはイミテーションボディまで投入したり……当局に提出する書類に、むろんそんなことは一行も書かれていない。

どっちなのだろうと麗子は思う。看板どおり、何でもやってくれることを期待してるのか。それとも、目的のためには手段を選ばぬ、ゴロツキ企業を、ひとつ駆除したいだけなのか。

「今夜はプライベートだと言っただろう」

またしても、彼女の心を読んだようにカヲリは言い、青い酒を口へ運んだ。背景に流れる、はるか昔に録音されたライブ演奏は、電子楽器で単調なフレーズを延々と掻き鳴らしていた。神経症的な、それでいてどこか落ち着くような。こんな音楽に共感できる自身もまた、病んでいるのかもしれないが……カヲリは続けた。

「まあ仕事柄、全く切り離すことは不可能だが。麗子とこうして会っていることも、これから頼むことも、人類刷新会議の指示では決してない。わたしの個人的な意思だと思ってほしい」

「竹本商事にあなたが……カヲリが個人的に依頼を？」

「そうだ。じつはここ二ヶ月ほど、この地区に潜入している麻薬密売組織を追っているのだが、どうしても尻尾がつかめない。多くの犠牲を払って、アジトまで突き止めたんだがね。決定的な証拠がない限り、武装警察といえども、そうそう手荒なマネはできないのさ」

「エイジさんの部屋には、遠慮なく踏み込んだじゃない」

それにプライベートと言いながら、結局仕事の話ではないか。酔いも手伝って、憤然と言い放ったあと、思わず口に手をあてた。カヲリは、けれど気にした様子はなく、薄い笑みの前で指を組んだ。
「なにしろ相手は麗子の想い人のような、一匹狼ではないからな。下手に手を出せば、当局の存亡にかかわりかねない」
「相当な資金力と組織力が背景にある？」
「さすが、呑みこみが早いな。すでに察していると思うが、問題はどんな組織がウラについているのか、全く見えてこないことだ。たしかに大金が流れ込むのに、行く先は五里霧中でね」
「アジトまでつかんでおきながら？　まさか、そこに潜入して証拠を探して来いなんて、ばかなことは言わないでしょうね」
「その、まさかだよ」
相手は眉ひとつ動かさない。美しい指をひるがえしてグラスの縁をもてあそび、次に中から砂糖漬けのチェリーをつまみ上げた。麗子の声は、おのずとかすれた。
「民間人の出る幕じゃないと思うけど。刷新会議には諜報部員が一人もいないなんて、言わせないわよ」
「十九人だ」
「えっ？」
「ある者は客になりすまし、ある者は仲間に化け、ある者はひたすら姿を隠して潜入したが、一人も生きて帰らなかった。ただ切り取られた体の一部ばかりが、当局宛に送られてきたよ」
赤い唇がチェリーをくわえるさまを、眉をひそめて眺めた。
「麻薬の密売となると、当然、イーズラック人が絡んでいるのでしょう。アジトというのもまた、かれらの巣窟になるのかしら」
「鋭いね。やはり麗子に話してよかった。かれらが絡んでいるからこそ、話が霧の彼方に紛れてしまうんだ。かれらは富を軽蔑している。生活のために武器や麻薬を横流ししても、必要以上に儲けることは、かれらの信条に反する。貧者として生きるというのが、長い放浪生活の中で、かれらなりに身につけた生きるための知恵なんだ

ね」

富めば人間は必ず堕落する。嫉妬が生じ、盗みや争いの元になる。イーズラック人たちは貧しさを誇りとし、富の分配を最大の美徳と考える。多く儲けた者は、持たない仲間に分け与えるし、そうしなければ、もはやイーズラック人として認められない。我々同様、堕落した人種とみなされ、集団から追われなければならない。

「よって当然、密売による莫大なカネは、かれらのもとには留まらない。ウラで吸い上げている組織が必ず存在する筈なんだ」

「それが……首長連合の残党だとにらんでいるのね」

もの凄いような笑みをカヲリは浮かべ、麗子の背筋を、冷たい稲妻が何度も貫いた。ここにきてようやく、彼女の考えが理解できた。

エイジをぶつけるつもりなのだ。彼女は明らかに、かれと旧首長連合の関係を疑っている。この一件にエイジをぶつけることによって、かれを試し、かつ、麻薬密売組織の解明にも役立てるつもりなのだ。

「あなたは、恐ろしい人だわ。でも、いったい……それほどの利益を生み出す麻薬とは、どんなものなの？」

チェリーをくわえたまま、彼女の唇が蠢いた。全く発音されなかったにもかかわらず、麗子の脳裏に、その単語は恐ろしい力で絡みついてきた。

『クラーケン』

28（1）

28

電話が鳴っていた。

布団を引っかぶったまま、ううと唸って体を縮めた。ベルの音は頭の奥で頭痛と共鳴し、気の触れた二重奏を掻き鳴らすようだ。おれはほとんど、ベッドから転げ落ちる恰好。ふらつく足取りで電話機の方へ向かった。どこのどいつか知らないが、問答無用で叩き切ってやるつもりで。

足の裏で、合成ビールの空き缶がぐしゃりとつぶれた。ラックにもたれ、鉄アレイのように重く感じる受話器を持ち上げた。

「よかった、いらっしゃったんですね。八幡です」

口調から察するに、一彦のほうと思われる。そうとわかれば叩き切るわけにもいかず、阿呆みたく、ぼりぼりと頭を掻いた。今何時ごろなのか。そもそも、昼か夜かさえ判然としない。カーテンは閉めきられており、部屋の中は薄暗いが、つけっぱなしのキッチンの灯りが洩れてくる……急に寒々しい気分に襲われて、痙攣的に肩を震わせた。

よくないな、と思う。ウツの兆しが始まっている。

「エイジさん？」

「ああ、すまない。今起きたところだ」

我ながらぎょっとするほど、疲れきった声。さすがに一彦も驚いたのか、息を呑むような間が生じた。いささか話しにくそうに、かれは言う。

「お休みのところを、申し訳ありません。じつは先ほど、相崎博士から連絡がありまして。アマリリスさんが、面会可能になったそうです」

受話器を握りしめた。危うく博士に換われと叫びそうになり、懸

命に呼吸をととのえた。
「カズは、もう会ったのか？」
「いえ、先にエイジさんに連絡しておこうと思いまして。もしこれから来られるのでしたら、一緒に立ち会うつもりです」
「わかった。二十分で行く」
受話器を置いて、うなだれたまま溜め息をついた。二日酔いだか三日酔いだか知らないが、あれほど執拗な頭痛が奇麗さっぱり消えている。かわりに全身を浸しているのは、圧倒的な悲哀だ。こいつから逃れたいばかりに、みずから酒に溺れたのではなかったか。悲哀に溺れるのが恐ろしいばかりに。
振り返ると、ゴミに占領されている床の一角に、作りかけのジグソーパズルが、まだ残っていた。湖と、その周りの花畑の一部が、どうにかこうにか組み上げられている。ここ数日、極力視界に入れないようにしてきたのだが。かといって崩すわけにもいかず、そのままにしてあった。
よろよろと外套を拾い上げ、鍵もかけずに部屋を出た。外はすでに夜らしい。上の空でハンドルを握り、十三分後には八幡商店の駐車スペースに車を入れた。シャッターの前に、一彦がぽつんと立っていた。
「二葉は？」
いるとばかり思っていたのだ。たしかミッション以来、彼女とは一度しか顔を合わせていない。
「まだ図書館だと思います。期末試験が近いとかで、珍しく猛勉強中なんですよ。日頃サボってるぶんのツケが溜まっているんでしょうね。何か用事でも？」
「いや……」
むしろ、あの男の子たちに勉強を教えているのではあるまいか。どこの高校も試験日は同じなのだから。二人の「ボーイフレンド」ができたのは大いに結構だし、そのぶんつき纏われなくなって、なおさらよしとすべきところ。おれ自身、淋しがっているのだとした

ら、気弱になったと言わざるを得ない。
ガレージの二階を訪ねると、相崎博士が髪を振り乱した白衣姿で、直々に出迎えた。その様子から、かなりハードな作業を、直前までこなしていたことが察せられた。黒木のほうは、実験室につきっきりなのだろう。
「ようやく持ち直したわい。一時は凍結も止むを得んかと考えたほど、浸蝕が進んだが……あの子は、じつに強いよ」
おれは眉をひそめたまま黙っていた。博士は苦笑したきり、珍しく皮肉を言わずに背を向けた。先に立って案内する後姿には、疲労の跡がありありと浮かんでいた。常に年齢不相応な精力をみなぎらせているこの男には、ついぞなかったことだ。
カプセルが置かれていたのとは、別の部屋に通された。壁や天井を機材が埋め尽くし、床にはコードやチューブが隙間なく走り、そして無数のモニターが明滅していた。
中心に、古代ローマの臥床をおもわせる奇怪なシートが据えられ、アマリリスが全身を黒いベルトで固定されていた。左手は元に戻っているが、時おり、発作的に指が鉤型に折り曲げられた。そのたびに、少女は目を閉じたまま、苦しげに呻いた。

28（2）

「アマリリス……！」

思わず駆け寄ろうとしたとき、数台のモニターが火花を吹いて破裂した。計器類は赤く染まり、何種類もの警報が鳴り始め、いかにも不穏な調子で部屋全体が明滅した。

頭部と両肩をのぞく少女の全身は、ゴムをおもわせる素材でぴっちりと覆われていた。一種の拘束衣だろう。至る所から細長いチューブが突き出し、臥床に繋がれているさまは痛々しい……少女の唇が震え、つぶやいた。

「マスター……ですか」

「わかるのか？」

「オム、レ……を……つく、り……」

「えっ？」

「オム、レ……はや、く……オム、レ……」

また次々とモニターが吹き飛んだ。少女の煩悶は激しさを増し、テスラコイルをフル回転させたように、臥床の周りでコロナ放電が生じた。無数の蒼い蛇と化して踊り狂った。

「まずいぞ！　エイジくん、きみは何か彼女に命令したままだろう。そいつが解除されておらん！」

見たこともないほど取り乱して、博士が叫ぶ。髪がほつれ、汗ばんだ額に貼りついている。少女がどんな「命令」を実行したがっているのか、とっくにわかっていた。わかっていたからこそ、咄嗟に言うべき言葉をなくした。

（無性にオムレツが食いたくなった。帰ったら作ってくれるか）

覚えていたというのか。あのとき、なかば冗談でつぶやいた一言を。血みどろの殺戮を演じたあとも。これほどの後遺症に苦しみながら、ずっと……そのことだけを思いつめていたのか。

（はい、マスター）

（たのんだよ）

飛び散る火花をくぐって、おれは少女に駆け寄った。黒木が目を見張り、何か叫んで止めようとした博士の手を振りほどいて。そして彼女の左手を、人間の憎悪が生み出したイミテーションボディーそのものである部分を、両手で握りしめた。それは氷のように冷たく、怯えた小動物のように震えていた。

「アマリリス、聞こえるか？　予定変更だ。オムレツは今はいらない。きみがすっかりよくなって、家に帰ってからでいい。そのときに二人ぶん作ってくれればいい。一緒に食うのだから」

うっすらと、少女の目が開かれた。熱病に苦悶する表情の中に、かすかな安らぎがよぎるのを見た。放電がおさまり、警報が次々と鳴り止んだ。放心したように黒木がひざまずき、相崎博士はゆっくりと髪を掻き上げた。

十分後、おれたちは鹿の首のかけられた居間に戻った。黒木が運んできたコーヒーに手をつけぬまま、湯気ごしに博士を睨みつけていた。よく見ると白衣は焦げ跡だらけで、両目の下に、べったりと隈が貼りついていた。足を組むと、靴の先がぱっくりと割れて親指がのぞいた。

「コーヒーでも飲んで、少しは落ち着いてはどうかね。もはや峠は越えた。あとは快復を待つばかりだよ」

「楽観的な言い訳は聞き飽きました」

「そう睨みなさんな。言いたいことはわかっておるが、なにせ彼女が運びこまれてこのかた、吾輩にも余裕がなかった。こうしてソファの上でコーヒーを飲むなんざ、一週間ぶりだからな」

と、なかば目を閉じて旨そうに啜るのだ。おれはくしゃくしゃの箱から煙草を一本抜いたきり、火をつける気になれぬまま、指先で苛々ともてあそんだ。

「なぜ、あの子は暴走したんです？」

「約束が違う、と言いたいのだろう」

「ええ。彼女の本体はＩＢのコピーだけれど、左手だけは違う。Ｉ

Bそのものであるゆえに、あくまで殺戮を望んでいる。もしその欲求を無理に押さえ込めば、いずれ本体を浸蝕する恐れがある……そう仰言いましたよね」

「いかにも」

博士はカップを小テーブルに戻し、膝の上で指を組んだ。年齢を考えれば当然なのだが、それにしても皺くちゃな指だ。天才的な芸術家の指には、皺が多いと聞いた覚えがある。事実、学生時代に知り合ったピアノ弾きは、二十歳そこそこで老人のような指をしていた。科学者にもこの定義が当て嵌まるのか、それはわからないが。

「計算ミスは素直に認めるよ、エイジくん。だからこそ、修理、いや治療と言うべきかな。アフターケアに全力を注いだのだ。これほど遮二無二働いたのは、何十年ぶりか知れない」

28（3）

何十年ぶり、という一言が自嘲の色をおびた。驚いて目を向けたが、伏目がちな表情の中に、手がかりになるものは何も読みとれなかった。何十年か前に、かれはこれと似たケースに直面したことがあるのではないか。そんな疑問がわだかまるほど、その声は悔恨に満ちていた。

次に顔を上げた博士は、いつもの傲岸不遜な面がまえに戻っていたが。

「しかしながら吾輩は、見解を変えるつもりはないのだよ」

「彼女の左手は戦闘を必要としている、と？」

「負け惜しみを言うのではないぞ。今回の一件にしたところで、いわばワクチンが効きすぎたようなもの。事前に接種していなければ、もっと取り返しのつかぬ事態を招いたことだろう。ベストとは言わぬ。だが、これでよかったと考えるべきだな」

思わず、どんとテーブルを叩いた。手をつけぬままのコーヒーが受け皿にこぼれた。

「ワクチンというより、麻薬ではないですか。戦闘という麻薬を与え続けることにより、かろうじて禁断症状から逃れ続けるだけでしょう。何の解決にもならないどころか、彼女の中のＩＢをますます図に乗らせるだけじゃないか」

「忘れてもらってはこまるね、エイジくん。彼女自身が、イミテーションボディであることを」

挑発的な眼差しから顔をそむけた。頭を抱えるようにして髪を掻きむしり、わからないと何度もつぶやいた……わからない。おれは主人面をしながら、アマリリスのことを何一つわかっちゃいない。そもそもイミテーションボディとは何者か、その答えがいったい誰にわかるというのか。

「混乱させてしまったのなら謝ろう。じつを言うと、このところ吾

輩も驚きの連続なのだよ。彼女は変わりつつある。そしてこれからどう変わっていくのか、吾輩にとっても未知数だ。ただ一つだけ言えるのは、エイジくん、きみが彼女を変えているということだ」

「おれが？」

「むしろこう言うべきだったかな。彼女がきみを選ぶことによって、進化を始めたのだと」

混乱を増したばかりで、研究所を出た。

これから部屋に戻ったあとの自分の行動は、三文小説の次のページをめくるように、見え透いていた。ゆえに、一彦から飲みに誘われた時には、むしろ途方に暮れたのだ。目をまるくしていると、照れたように小鼻を掻きながら、かれは言う。

「この近くで面白い屋台を見つけたんです。イーズラック人がやってるんですが、商売はまっとうですよ」

ちょっと支度をと言い置いて、一彦はガレージの奥へ消えた。イーズラック人が「まっとうな」商売をするいわれはないが、ニュアンスは伝わらないでもない。酒や料理の出所がどこであれ、客が満足できればそれで上等。だいいち一彦にせよおれにせよ、かれら同様、アウトサイダーに違いないのだから。

かれを待つ間、ガレージのいつものテーブルで煙草に火をつけた。二葉はもう帰ったのだろうか。例の「監視カメラ」でおれを見つけて、不機嫌そうな顔を出すことを期待したが、薄闇に煙が棚引くばかり。静まり返った中に、ただ奥のほうから、鉄槌を打つような音が、断続的に聞こえていた。まだ一朗が作業場にいるのだろう。

やがて戻ってきた一彦は、赤いキャップはそのままに、ツナギを脱いで、若者らしい小ざっぱりした恰好をしていた。

「兄貴を誘ったんですが……」

意味ありげに奥へ目を遣り、肩をすくめた。外は少し風が出ていた。並んで歩きながら、二人とも外套のポケットに手をつっこみ、できるだけ首を縮めた。

この辺りは闇市にペンキを塗ったような商店街で、何度歩いても

おれには迷路としか思えない。ごちゃごちゃと建ち並ぶ小店の群れには、来るたび目新しい何軒かが混じり、かわりに何軒もの店が消えていた。夜ともなれば迷宮的混乱は深まる一方で、路地の角を三つも曲がれば、西も東もわからなくなる。

「よく刷新が見逃しているな。ちょっと『幽霊船』を思い出したよ」

「なんですか？」

「旧第九街区の俗称だといえば、カズもわかるだろう」

「ああ、あそこ……」

戦時中に要塞があった地点である。軍事施設は戦後解体されたが、あやしげな連中が移り住んでスラム化。殺人犯、窃盗犯、政治犯、麻薬常習者、変質者、不法入国者などの楽園になったと伝えられる。

「幽霊船」の名は、要塞の構造を利用したスラム街の佇まいが、老朽化した帆船に似ているところからついたのだろう。

「幽霊船の中はミノタウロスも蒼ざめる大迷宮だとか。一度足を踏み入れたら二度と出られないとか、いろいろ取り沙汰されているが。実際のところ、恐ろしげな噂が一人歩きした部分は大きいんじゃないかな。住人の大半は、至極『まっとう』だろうし、またそうでなければシャバは成り立たないからね」

28（4）

「お詳しいんですね」
「じつは若気の至りで、しばらく住んだことがあるんだ。ほんの半年程度だがね。兵役を解除されてすぐの頃だから、もう七年くらいたつのかな」
　立ち止まって煙草をくわえた。手で覆い、何度マッチをすっても、風に火をさらわれてしまう。肩を叩かれて振り返ると、一彦は銀色のライターをかざし、小型の火炎放射器なみの火柱を寒空に噴き上げてみせた。眉毛を焦がさないよう注意しながら、顔を近づけた。
「ありがとう」
「でもいったいどうして『幽霊船』に？」
「悩み多き年頃だったからね。雇い主があっさりと首長連合に降伏したのをきっかけに、兵隊稼業にも嫌気がさしていた。まあ、雇い主は敗残の兵にも給付金をくれるという、粋なはからいを見せてくれたので、少しばかりカネはある。ほとぼりを冷ます時間もいるので、しばらくの間、スラム街に身を隠すことにしたのさ」
　噂に聞く犯罪者の楽園とはどんな所か、一度見たい気もした。それになんといっても当時は若く、エネルギーを持て余していた。ちょっとした鬼退治の心境でも手伝ったのだろう。
「ところが、いざ乗り込んでみれば、ずいぶんイメージと違っていてね。無法地帯は無法地帯なりの秩序が保たれていた。鬼のかわりに気のいいおじさんやおばさんがいて、薄暗い路地を子供たちがボールを追って駆け回り、若い娘たちがシーツを干しながら無駄話をしているといった具合だ」
　電気工事店の中年夫婦が、二つ返事で下宿させてくれた。駆け出しの新聞記者だと名乗ったが、まったく疑われなかった。エイジという「偽名」も、じつはこのとき初めて用いたのだ。
　夫婦はカノウさんいい、いつも忙しく立ち働き、それなりに儲け

ていたようだ。「幽霊船」で使用される電力の三十パーセントが、掘り起こされた旧世界の電線から引かれ、三十パーセントが独自の風力発電による。残りは地区の電線から盗んでくる。いずれにせよ供給は不安定なので、技師の存在は貴重だった。

かれらには十六になる娘がおり、「幽霊船」の中の学校に通っていた。学校といっても、かなりいい加減なもので、国家の指導要領など完全に無視。それこそ相崎博士を彷彿させる自称「学者」たちが、気ままに偏った知識を吹き込み、おかげで九九も満足に暗唱できない子供が、相対性理論については、かなり正確に理解していたりする。

（試験なんかないわよ。受けたい授業を受けに行くだけ。サボるってどういうこと？　勉強は面白いわよ。だって、知りたいことを教えてもらえるんだもの）

髪を真紅に染めて、意想外な場所にピアスをつけることを好んだ。色白でそばかすが目立ち、美人ではないが、よく動くドングリ目が可愛らしい。ここの良家の子女は常識として護身術を身につけているが、彼女はナイフを生き物のように操った。名前は、マキといったっけ。もし生きていれば、今頃はいい女に育っていることだろう。

「けっきょく『幽霊船』本来のコアな部分は、ほとんど覗かせてもらえなかった。新顔の自称新聞記者が半年住んだくらいでは、無理な相談だろう。正直、なかなか居心地よかったんだが、拍子抜けしたのも事実さ。また訪ねたいとは思いながら、おれも何かと忙しくなって、それっきりになっちまったが。あのスラム街は、今も昔のままなのだろうか」

一彦が口を開きかけたとき、暗がりから娼婦がふわりと飛び出し、おれの腕をとらえた。外套の下の体は驚くほど柔らかく、上品な顔をしていた。

「お兄さん、だいじょうぶ。だいじょうぶ」

中国系の訛りがあるが、案外「イーズラック」なのかもしれない。たとえ西方砂漠地帯の出身でなくとも、かれらの集団に属し、かれ

らの信条を実践していれば、イーズラック人とみなされる。かれらは富をたくわえること以外の悪徳を、悪徳と考えない。合意の上での商取引が成立すれば、何を売っても問題視しない。

もし魂が高値で売れるのなら、かれらは迷わず売るだろう。売った金を「イーズラック」の貧者にほどこすだろう……おれは思わず訊き返した。

「何がだいじょうぶなんだい？」

「お兄さん、わたし、慰める。わたし、お兄さん、慰める。だからだいじょうぶ。一万でいいよ」

そいつは魅力的だが。と、おれは素直な感想を述べた。あいにく今日は連れがいてね。これからあんたのお仲間の屋台で飲むつもりだ。あんたは奇麗だから、もし別の日に会っていたら、迷わず寝ただろうよ。おれもちょっとばかり残念だがな。そう言うと、彼女はあっさりと腕を外した。抱いていた水鳥が飛び立ったような、一抹の空虚さ。

「それなら、だいじょうぶ。縁があればまた会えるよ」

再び歩き始めると、一彦がくすくす笑いながら「いいんですか？」と訊く。

「いいんだよ。大仕事の後の一万くらい、ポンと出せるんだが、金を押し付けるのも失礼かと思ってね。それにもしあの女がイーズラックの信徒なら、信徒以外からのほどこしは受けまい。それよりカズは、『幽霊船』のその後について、何か知ってるんじゃないか。さっき言いかけただろう」

「ええ。旧第九街区といえば、最近かなりモメているんですよ。例によって刷新が街区の全住民に立ち退きを命じ、住民のほうは断固、篭城の構えをみせておりまして。包囲中の武装警察と睨み合っている恰好です」

「武装警察か……」

おまえを殺すかもしれない相手の顔くらい、知っておいてほしくてな。そう言ったコードネーム「カヲリ」の赤い唇が、まがまがし

く脳裏をよぎった。

29（1）

29

屋台というより、廃材で組んだ「小屋と」呼ぶほうが相応しいかもしれない。

このての小屋を作ることにかけて、イーズラック人は天才的である。長い放浪の歴史の中でつちかわれた、様々なノウハウを心得ている。砂漠の遊牧民に一脈通じるものがあるし、大昔はそうだったのだろう。けれど、かれらが放浪するのは砂漠ではなく、都市だ。その場の状況に応じて、変幻自在なキャンプを形成する。

使えるものは何でも使い、住居の様式にはまったくこだわらない。ただ、ひとつだけ根底に流れるポリシーは、定住しないこと。いつでも住居を捨てて旅立てるライフスタイルを、かれらは堅持してきた。

なぜなら、かれらにとって、定住は堕落の始まりだから。定住が富への執着を生み、富めば人はどうしようもなく堕落するのだと、かれらはかたくなに信じてきた。

「エイジさんは、占いはお好きですか」

小屋の前にたどり着いたところで、一彦が尋ねた。

そこは薄い鉄板で完全に覆われ、窓はなく、出入り口にだけ、廃材のドアが嵌めこまれている。ドアの上には細長い木製の看板が、リベットで止められている。三日月の上で、猫がヴァイオリンを弾いている童話的な絵柄。イーズラック文字は読めないが、おそらく店名は「黒猫」だろう。

「好きか嫌いかという問いには、嫌いだと答えるね。ただし、信じないという意味ではなく」

「そうですか。この店のお抱え占い師は、当たるという評判ですよ。常連客の半分は、彼女目当てに来ているほどです」

店の中から、哀切でプリミティブな音楽が、低く洩れてくる。なるほど、最も由緒正しいイーズラック人は、密売ではなく、芸能で身を立てるのだと聞く。音楽やダンスと並んで、占術はかれらが最も尊ぶ「アート」なのである。

おれが占いを好まないのは、自身、験をかつぐほうだから。これまで見てきた限り、ガンスリンガーは迷信家か合理主義者か、どちらかに偏る傾向がある。予測不可能な要素が生死を左右する場面に、いやでも直面させられるのが原因だ。ある者はその要素を「運」とみなし、ある者は「確率」と考える。前者は護符を身につけ、後者は徹底的に計算を繰り返す。

つきあったことはないが、コードネーム「カヲリ」は明らかに後者のにおいがする。運、などという得体の知れない化け物の存在など、決して認めないし許さないだろう。対しておれは、どうしようもなくそいつを肯定している。認めたくはないが、認めざるを得ない。

そいつの存在を、いやというほど思い知らされた経験があるからだ。

未来を予知したいという願望は、人間として最も自然な欲求だと思う。この恐るべき不確定さに満ちた世界で、生きるための技術として、占いが発達したのも当然だろう。ただ、自身の実感として「運」の力は強大だ。星の運行を誰にも止められないように、予知したところで運命は変わらないと感じている。

変えられない運命を、あらかじめ知ったところで、どうしようもないではないか……そう考えるがゆえに、おれは占いが恐ろしい。

「じゃあ、入りますよ」

一彦がドアを開けた。

音楽と紫煙と談笑が、温められた空気ごと吐き出された。細長いカウンターと、壁に寄せられたいくつかのテーブル席。なるほど一彦が「屋台」と表現したとおり、中の光景は箱の中のそれである。立錐の余地もなく居並ぶ客たちの背中は、新たな闖入者に対し、無

関心という甲羅をまとい続けている。

「ザー・ラ・ドベルカ」

いらっしゃい、という意味のイーズラック語だ。カウンターの中から、毛織の四角い帽子を被った男が、じっとおれたちに目を注いでいた。駅で弾薬を売っていた男同様、年齢が判別し難い。日に焼けた皺くちゃの顔。無精ひげには白いものが混じっているが、目つきは猛禽類のように鋭い。そしてかれの瞳もまた、白に近い灰色だった。

店主はにこりともせずに、カウンターの奥を指し示した。ちょうど二人の男がのっそりと席を立ち、勘定を払って出て行った。並んで腰かけると、何も頼んでいないうちにグラスが置かれ、コルクを抜いた陶製の瓶から、乳白色の酒がなみなみと注がれた。あくまで無愛想に、店主がつぶやく。

「腹が減っているか」

「ええ。エイジさんも夕食はまだでしょう」

おれが曖昧にうなずくと、何も言わずに店主は背を向け、鍋の蓋を開けた。湯気がたちのぼり、スパイスの効いた、どこか郷愁を誘うにおいがした。そういえば、朝から何も食べていなかった。というより、前に固形物を口に入れたのがいつのなのかさえ、思い出せそうにない。一彦が耳打ちした。

「料理も酒も、一種類ずつしかないんですよ。もっとも、料理のほうは日替わりですけどね。味はぼくが保障しますよ」

29（2）

酒には獣脂をおもわせるにおいがあり、どろりと粘ついたが、口当たりは驚くほどよかった。それでいてかなり強い酒らしく、ひと口飲んだだけで、もう全身が火照ってくるようだ。その間に亭主は、陶器の皿に入れた料理を目の前に置いた。豆と肉を煮た上にスパイスとネギが散らしてある。

いかにも原始的な料理だが、ほろ酔い気分も手伝って、急に空腹をおぼえた。それに煮豆は好物である。大きな木の匙ですくうと、半透明なスープの中で、肉がどろりと煮崩れた。いかにも無骨な味がしたが、旨かった。昨今の、やたらと合成甘味料でごまかした料理と違い、骨をじっくり煮込んだときに初めて生じる、本来の旨みが染みていた。

ありありと顔に出ていたのだろう。一彦はいたずらっぽく瞬きした。

「保障したとおりでしょう」

ずっと流れている音楽は、砂漠地帯の舞曲とおぼしい。ヴァイオリンとパーカッションのみで構成され、テンポは速いが、いかにも牧歌的だ。ざらざらとノイズまじりなのは、黄ばんだスピーカーが原因ではなく、コピーにコピーを重ねた磁器テープのせいだろう。演奏をじかに吹き込んだものかもしれない。

いつのまにか料理を半分平らげ、コップは空になっていた。亭主が無言で酒をつぎ足した。

「例の占い師は？」

「まだ来ていませんね。いつも十時頃にならないとあらわれません」

「流し、なのか」

「そういうわけでもないようです。ここに一、二時間いるだけで、彼女が食うにこまらないほどの稼ぎはあるのでしょう。やはり気になりますか」

肩をすくめた。かれの言うとおり、無意識に気になっているとしたら、おれは何を占ってもらいたいのだろう。夢も希望もない、自分の行く末などどうでもいい。こう言うとペシミスティックに響くが、さほど苦しい心境ではない。夢や希望こそが、人を苦しめるのではあるまいか。究極的には、

人を愛することが。

「気になるといえば、アマリリスの容体に尽きるだろう。博士はあれで持ち直したというんだから、先が思いやられる」

グラスをあおり、半分飲みほした。煙草の箱を取り出して、一つくわえたところで、一彦がライターを差し出した。炎が上がる前に慌てて手で制し、マッチを摺った。かれは言う。

「あの戦闘で、思いがけないところまで、能力が引き出されたのですね。それでバランスを崩してしまった」

「予想以上に、相手が強力だったというわけか。しかし、あの化け物はいったい何なんだ。ＩＢ化した多脚ワームなら、そう珍しくはないが、あそこまでひねくれたやつは初めてだ。へたなイミテーションボディよりよほどタチがよくない。それに……」

「『逆さＡ』の紋章ですね」

うなずきながら、記憶とともによみがえる戦慄を意識した。化け物の体に、くっきりと刻印されていた「逆さＡ」の紋章。あれは決してワームの体の模様が、たまたまそう見えたのではない。悪意にも似た暗いエネルギーを、ひしひしと感じた。しかも、用意周到な二葉が、赤外線カメラで撮影した写真にも、人工的なその文字が、鮮明に写っていた。

「ツァラトゥストラ教徒の過激派が、ワームを戦闘用に飼い慣らそうとしている。と、そこまでは噂に聞いていたが、どうしてあんな所で、あんな化け物が『逆さＡ』の紋章を身につけていたのか。考えれば考えるほど、混乱するばかりだ」

あの私道は、旧首長連合のナンバーツー、竜門寺家の別邸だったというではないか。そして街区の地下には、ルナパークがまるごと

埋もれていた。煙を吐いて、おれは続けた。
「化け物が人を食うために、あの場所に巣食っていた単純な理由ならわかる。地下から負のエネルギーを吸い上げて、プラズマの亡霊を現出させるには、もってこいの場所だ。亡霊は人形にもとり憑き、生きもののように動かして、犠牲者をどこかの穴に誘い込む。やつは地下に横たわったまま、ただ口を開けているだけでよかった」
「典型的な、トラップを形成するタイプのワーム……」
「そう。だが通常のワームに、人形を使うような芸当はとてもできない。やつの体が半分以上、ＩＢ化していたからこそ、可能になったのだろう。口にするのもおぞましいが、間違いなく、『擬人』の応用だよ」
しかし、ここではたと壁に突き当たる。やつの動きは単純な捕食行動に過ぎず、何もウラはないように見える。私道に巣食っていたのも、単に立地条件がよさが原因ではないか……どうもまだ、パズルのピースが足りない気がする。アマリリスほどではないが、おれもジグソーパズルは得意ではない。
入り口が開く気配がした。わずかに流れこんできた外気が、火照った顔に心地よく触れた。思わず顔を向けたところで、一彦がささやいた。
「彼女が来ましたよ。今夜は少し早いようです」
ほっそりとした娘だ。
漆黒の髪を頭の後ろで一つに結び、柘榴石だろうか、細い鎖で額の真ん中にとり付けられていた。褐色の肌。外套も着ずに、白いワンピースだけをゆったりと身につけて、胸に一匹の黒猫を抱いていた。金色のイアリングの輪を揺らし、にこやかに会釈しながら、ゆっくりと近づいてきた。

29（3）

「ザー・ラ・ドベルカ」

薔薇をおもわせる香水、というよりも、香木を焚きしめたような匂いがした。それがはっきりと感じられるほど間近で、おれと目を合わせたまま、彼女は立ち止まり、小首をかしげて微笑んだ。やはり瞳の色は白に近いが、亭主のように濁っておらず、青みすら帯びて透きとおるようだ。

体つきから、最初は十五にも満たない少女に見えたが、ハタチは過ぎているとおぼしい。おれが驚きの眼差しを引き剥がせなかったのは、彼女が醸す雰囲気が、アマリリスにとてもよく似ていたからだ。瞳の色をそのまま移したような声で、彼女は尋ねた。

「どこかでお会いしましたかしら？」

少しアクセントに訛りがあるが、充分に流暢な喋りかた。あるいは日本人の血が混じっているのかもしれない。知り合いに似ていたのだと、むしろおれのほうが、しどろもどろで答えた。

真後ろのテーブル席で、どっと笑い声がわいた。下手な口説き文句と受け取ったのだろう。見れば山賊じみた、あまりガラのよくない連中が陣取っている。占い師はおれに会釈しながら、すまなそうに眉をひそめた。山賊どもはしきりに彼女を手招きし、下っ端の一人を立たせて代わりに座らせた。大将とおもわれる肥った男が、細い肩に手を回した。

「いつもあの調子なのか」

カウンターに向き直り、多少の非難をこめてつぶやいた。けれども亭主は無言のまま、代わりに一彦が答えた。

「今夜はたまたま、変な連中が来ていますね。不法ギルド系の土地のブローカーあたりでしょう」

不法ギルドは旧首長連合と癒着して、おおいに幅を利かせていたが、政権交代後、一応は権力との繋がりを絶たれたことになってい

る。とはいえ、いつの時代、どんな場所でもかれらが撲滅された話など、聞いたためしがない。ヒトの作り上げた社会はどんな形態をとろうとも、必ずどこか歪んでおり、そこには必ず、不法ギルドを必要とする者たちが生じる。

現在かれらは、かつて首長たちが所有していた土地を切り取り、転がす事業に血眼になっている。刷新会議による接収が追いついていないことは、人食い私道の例からも明らかである。いわば旧恩のある首長に掌を返し、かれらの遺産に食らいついて、骨までしゃぶり尽くそうという構えだ。

コツン、と何かが足首にぶつかった。

床に目をやると、黒猫が緑色の瞳で、じっとおれを見上げていた。占い師が抱いていた猫だ。夜そのもののように、つややかな毛並み。ピンと尻尾を立て、前足を揃えた立ち姿は、いかにも姿勢がいい。もともと奇麗な上に、手入れが行き届いている。決して動物愛好家でないおれが嘆息するほど、美しい猫だ。

亭主にもう一つ匙をもらい、皿から肉を選んで、小さな肉食獣の鼻先に差し出した。猫はにおいをかいだあと、敏捷に小さな牙を剥いて塊をくわえ、床に落としてから食べ始めた。匙の中まで奇麗に舐めてしまうと、おれを見上げて、可愛らしい声でニャアと鳴いた。

「名前は何だろうな」

「猫ですか。それとも、飼い主のほう？」

両方知りたいね。一彦にそう答えると、意外な方角から声が聞こえた。日本語がほとんど通じないのかと思い始めていた、亭主が口を開いたのだ。

「名前はプルートゥ。美しく勇敢な男だ。占い師は、アリーシャ」

どこに冥王のような男がいるのか、思わず辺りを見回したところ、また足もとで猫が鳴いた。どうやらかれの名前らしく、まるで飼い主のほうが付属物みたいな言い方である。そういえば、店の名も「黒猫」というくらいだし、亭主はよほどの猫好きなのか。かたくなに沈黙を守っていた口が緩むのをみて、おれは話しかけた。

「あんたがあの子を雇ったのかい」
「そうだ。たとえ敬虔なイーズラックでも、よそ者は雇わない。アリーシャはおれと同じトーテムの生まれだ」
トーテムとは、守護神といった意味だろうか。かれらのうちでも最も伝統的な「イーズラック」は、おのれの血筋をさかのぼれば、力の強い動物や植物に行き着くと信じている。鹿なら鹿、狼なら狼、樫の木なら樫の木が自分たちの先祖であり、血族はそれらの精霊に守られていると考える。
亭主とアリーシャのトーテムは「猫」なのだろう。なるほど、しなやかな占い師の肢体は、月を背景に四つん這いになれば、猫と見紛うばかり。ずんぐりむっくりした亭主もまた、どこかずんぐりむっくりした猫を連想させた。
「あんたがここに店を出したのは最近だろう。以前から、彼女とは一緒だったのか」
亭主は首を横に振った。猫の話題にしか興味が湧かないのか、また口を硬く閉ざそうとしていた。ぶつぶつ言う声が、かろうじて聞き分けられたが、それによると、かれはアリーシャの素性をほとんど知らないらしい。
ここに店を出すようになって間もなく、彼女はふらりとあらわれた。一見して占い師であることが知れた。彼女が抱いていた猫、プルートゥが気に入ったので、うちで働かないかともちかけた。今でもアリーシャがどこから来てどこへ行くのか知らないし、興味もないといったところか。

29（4）

（呆れたもんだな）

おれは溜め息をついた。よその者は雇わないと亭主は言ったが、履歴はおろか、現住所すら知らないというのだ。それでもかれが彼女を「身内」と考えるのは、同じ守護精霊をもつ「トーテム」に属しているからにほかならない。

背もたれに肘をかけ、肩越しに目を向けた。ならず者たちが占めるテーブル席では、酒や料理が隅に追いやられ、空いたスペースにアリーシャが一枚ずつ、裏返したカードを並べてゆくところ。首領の肥満漢は、もはや彼女の肩に手を回しておらず、精一杯縮こまった姿勢で、カードの行方を凝視していた。

なるほど、カードを使うときの彼女は、一種近寄りがたい神秘的なオーラに包まれていた。背筋をしゃんと立てたまま、つややかな黒髪の光沢だけが揺れる。長い睫毛が、伏目がちな瞳に青い影を添え、生真面目に結ばれた唇はあでやか。

どうしてもその横顔は、ジグソーパズルに熱中しているアマリリスを連想させた。

けれど何よりも目を惹いたのは、あまりにもしなやかな彼女の指と、その動きだ。まるで未知の楽器を演奏するようで、音楽が聞こえてこないのが不思議なくらい……幾何学的な形にカードを並べ終えると、アリーシャは手を止めた。テーブル席の周りだけ時間が静止した。

「未来をご覧になりたいですか。後悔なさいませんね？」

目を伏せたまま、彼女はつぶやいた。古代の鈴が鳴り響いた気がした。山賊の首領は身を縮めたまま、こくりとうなずいた。ここからは見えないが、神秘に気おされて、瞠目しているに違いない。生唾を飲みこむ音が、たしかに聞こえた。

「わかりました。では、未来をお見せします」

褐色の手がひるがえるとき、未知の美しい蝶が飛ぶさまを見る思いがした。中心に近い位置から、カードは一つずつ、確実に表に返されてゆく。妻が一デッキ所持していたので、タロットカードの絵柄は知っていたが、それとは似て非なるものらしい。緻密な彩色がほどこされた中世ふうの絵柄は、一枚一枚が美術品と呼べるレベルだ。

一枚を除いて、すべて表に返されたあと、アリーシャはテーブルの端に軽く手をかけ、静かにカードを「読み」始めた。並んでいるカードは十枚で、残りは手前に重ねられている。やがて彼女は口を開いた。囁くような声だが、おれの耳までよく響いた。

「これは不正な取り引きです」

「わかりきったことを言うんじゃねえ」

腺条ワームのように痩せた男が、彼女の向かい側でニヤリと口の端をゆがめた。骨ばった手で弄ぶナイフの光が目障りだ。アリーシャはけれど、まったく気にかけず語を継いだ。

「あなたがたが手を出すには、相手は大きすぎます。行く手に待ち受けているのは、あまりにも巨大な憎悪です。あなたがたはデビルフィッシュに憑かれ、悲惨な死をむかえるでしょう」

椅子を蹴倒す音を響かせ、腺条ワームが立ち上がった。真っ青な顔をして、口の端から泡を吹きながら、紙のように白い唇を震わせている。典型的なヤク中である。今にも踊りかかろうとしたところ、よせと叫んで、首領が肉厚の手を広げて制した。次にゆっくりと席を立った肉厚の顔に、ナマズをおもわせる不快な笑みを浮かべて。

「あんまり舐めたことを言うなよ、ねえさん。それ以上減らず口を叩くと、次はこいつのナイフが、間違いなくあんたの咽をえぐるぜ。おれたちにはウラがあるってことを、忘れねえでほしいもんだな。イーズラック人を一人どうこうしたところで、何とでも言い逃れできるんだ。しかもこいつは、小娘をなぶり殺しにするのが三度の飯より好きときていてね」

「約束どおり、未来をお見せしただけです。三千サークルいただき

ます」
　アリーシャの声は少しも震えておらず、必要最小限の角度で肥満漢を見上げた。硬質な無表情に憤ったのか、首領はかん高い声を張り上げた。
「ふざけるな！　おれたちの命は、たったの三千サークルぽっちか。いったいどこのどいつが、おれたちを殺っちまおうってんだ？」
　こいつは内心、占いの結果に動揺していたらしい。アリーシャは小さくうなずくと、しなやかな右手をひるがえし、残り一枚のカードを表に返した。
「三つ首のドラゴンです」
「それがどうした」
「あなたがたを殺す者」
　テーブルがひっくり返った。花びらのようにカードが宙を舞い、ぎらぎらとナイフをふりかざし、奇怪な両棲類のような恰好で腺条ワームが飛びかかった。Ｍ３６を抜こうとしたおれの手を、とっさに一彦が制した。同時に、黒い影が目の前をよぎり、次の瞬間、怪鳥じみた悲鳴が響きわたる。
　鋭い爪で引っ掻かれた顔から血しぶきを上げながら、腺条ワームは背後にもんどりうった。倒れたテーブルの縁に飛びのると、プルートゥは優雅に尻尾を立てたまま、アリーシャのほうを振り返り、小さな声で鳴いた。猫がウインクすると、緑色の火花がぱちりと弾けた。

30（1）

30

いざこざに顔をつっこむのは主義じゃない。それでもつい手を出してしまったのは、おそらく彼女がアマリリスと似ていたからだろう。

黒猫がヤク中男の額を引っ掻いたあと、一瞬、店内の時間が止まった。おれはポケットのM36から指を放し、かわりに外套の中に手を入れて、パイソンを抜いた。ゆうらりと立ち上がり、ぶよぶよした首領の頬に迷わず銃口をのめりこませた。

店内の空気にも温められることなく、銃口はきんきんに冷えている筈である。案の定、首領は「ひっ」と声を洩らし、体を硬直させた。瞳だけ動かして銃を見、次におれへ視線を移した。もちろん床を転げ回っているヤク中以外の連中にも、兇悪な六インチのパイソンがよく見えたことだろう。

「ヤクはあるかい？」

最近の不摂生が幸いして、おれの顔は蒼く頬はこけ、目の下に隈ができていた。髪はぼさぼさで、眼光だけが鋭く、実際カタギではなし、やばそうなにおいがぷんぷん漂っていただろう。すみやかに相手を怖がらせるには、狂人を演じるに限る。しかも過去に中毒していた経験上、禁断症状の演技はお手のもの。

文字どおり「頭」を押さえているので、仲間は手をだせない。むしろ相手がカタギでないほうが話は早い。おれがどんな種類の人間か、黒光りするパイソンが何よりも雄弁に物語ってくれる。首領は頬をぴくぴくと痙攣させ、からからに乾いた声を発した。

「何が欲しいんだ。ド・クインシーか？　それともコクトオ？」

「けっ。古臭え、しけたやつしかねんだな」

と一蹴したものの、両銘柄とも、宇宙の果てまでぶっ飛ばされる

薬であることは体験済み。ジャンキー特有の腕と体を斜めにクロスさせた姿勢を保ち、口の端から涎を垂らしながら、薄笑いを浮かべた。むかし、おれの薄笑いほど不気味なものはないと、妻にからかわれたことがある。

「まあいいさあ。何でも結構だから、ありったけ置いて行きなよ、ベイビー」

今はこれしかないと言いながら、首領は下っ端の一人へ目配せした。おれは左手でＭ３６を抜いて、下っ端の方へ向けた。けれど「下手な真似」をする気は毛頭ないらしく、内ポケットから煙草の箱を一つ取り出し、震える手で差し出した。不法ギルドを笠に着ているが、所詮中身はシロウト。ただのブローカーに過ぎない。

「けっ。そんなものより、酒のほうが百万倍ましだぜ。いいか、ベイビー、一度しか言わねえからよく聞けよ。目障りだからとっとと失せろ。さもねえと、てめえのぶよぶよしたほっぺに、とびっきりのご馳走を食らわすぜえ」

痙攣的に笑いつつ、舌なめずりする音をたっぷり聞かせてから、おれはやつの臭い耳に顔を近寄せ、囁いた。

「重炉心弾をな」

こけつまろびつ、といった古い言い回しもそのままに、連中が店を去るまで、それから三分もかからなかっただろう。腺条ワームは目を回して額から血を流しつつ、両脇を下っ端に支えられながら退場した。あれほど威勢がよかったわりに、猫に引っ掻かれたくらいで情けないやつである。

ついでに客が一人もいなくなったことは言うまでもない。

「すまなかったな、親爺さん」

「いや、おかげで店を壊されずにすんだ」

おれは肩をすくめた。酔狂で下手くそな芸を披露してしまったような、ばつの悪さを感じていた。礼を言われても非難されてもこまるで、アリーシャのほうはわざと見ないようにした。それでも彼女がカードを一枚一枚、大事そうに拾い集めていたことは知っていた

し、店を出るとき、じっと背中に注がれる視線にも気づいていた。
「飲みなおしますか」
空き地にさしかかったところで、一彦が尋ねた。すでに風はなかった。立ち回りを演じたせいか、酔いが回ったのか、ほとんど寒さを感じない。おれは廃材にもたれ、蔦のからまる常夜灯の下で、ポケットに手を入れた。取り出した煙草の箱は、さっき下っ端が落としていったもの。どさくさに紛れて拾っておいたのだ。
「それよりカズ、こんな銘柄を見たことがあるか」
光にかざすと、箱の表面には海の中から帆船に触腕をからめた、巨大な蛸の絵が描かれていた。頭部は大型帆船の三倍はある。あの状況下で、下っ端がニセモノを差し出す余裕はなかった筈。だとすると、これは煙草に偽装したクスリだと考えて、まず間違いないだろう。
一彦は「さあ」と首をひねった。封を切って、一本取り出した外見は、やはり煙草と変わらない。上のほうを揉みほぐすと、最初は掌の上に茶色い草がこぼれたが、やがてさらさらと白い粉が流れ出た。指先につけて舐めてみたところ、阿片に似ているが、どうやら合成ものとおぼしい。たいていの麻薬は試したおれも、こいつはたぶんキメたことがない。
もとどおり粉の上に草を詰めて、箱に戻した。足もとで猫の声がした。

30（2）

黒猫は相変わらず優雅に尻尾を立て、笑顔ともとれる表情でおれを見上げていた。思わず周囲に目を走らせたが、飼い主らしき姿はない。一人で、いや一匹で散歩しているのだろうか。かれの前にしゃがみ、指で軽く顎の下を撫でると、気持ちよさそうに目を細めた。

「すっかりなついていますね。ぼくには近寄ろうとさえしなかったのに」

そう言って身をかがめた一彦は、軽く驚きの声をあげた。どうしたのか尋ねると、「首輪」、とだけ答えた。

なるほど、プルートゥは赤い金属製の首輪をつけていた。ありふれた首輪なので気にもとめずにいたが、表面をよく見れば、細かい模様がびっしりと彫りこまれていた。古代遺跡の彫刻をおもわせる、凝った幾何学模様である。一彦がつぶやいた。

「電子回路みたいですね……まるで最新式の読み取り機だ」

「読み取り機？」

言われてみれば、幾何学模様は精密機械のようでもある。やはりメカマンだなと感心しつつも、かれの例えには、シュールな違和感を覚えた。何故に読み取り機？

「ええ。レンズ式に代わって、最近、より暗号性の高いロジック・ストーム型が出回り始めているんです。旧式に比べれば、例えばメモリーカードを改ざんされたり、盗み見られたりする可能性が、八十パーセント以上も低くなります。あまりの性能に、かえって刷新が規制をかけてきたくらいですよ」

まるでかれの話に相槌をうつように、プルートゥは小さく鳴いた。技術的なことは珍粉漢粉だけれど、それにつけて思い合わされるのが、例のツァラトゥストラ教の紋章が入った運搬用チャペックだ。やつのメモリーカードの解析に、稀代の変態ハッカー、相崎博士でさえてこずっていた。

しゃん、という鈴の音が頭上で響いた。
気の迷いではなく、小さな鈴をいくつも連ねた音に違いない。驚いて見上げると、いつのまにか空はすっかり晴れわたり、スモッグによって拡大された月が君臨していた。ほぼ満月に近く、クレーターの形まで確認できそうだ。そうして、まるでたった今その天体から降りて来たように、ほっそりとした女のシルエットが映えていた。
きめ細かな長い髪が、微風に揺れていた。どうやって登ったのか、うずたかく積まれた廃材の上で、アリーシャは猫のように小首をかしげ、おれに微笑みかけたように思えた。彼女が身動きすれば、しゃん、と、また鈴の音が響く。おれは何度も目をしばたたかせた挙句、彼女の左の手首と右の足首に、いくつかの鈴がリボンで結びつけられていることを確認した。
「先程のお礼を」
彼女はたしかにそう言ったようだ。やがて細い両腕が翼のように広げられ、頭上高く持ち上げられると、クロスするときに鋭く鈴が鳴る。その音を、ゆっくりと上昇する右足の鈴が、さらさらと装飾する……不思議な舞踏だった。水の中を漂うような、ゆるやかな動きに身をまかせながら、静止するときは、一枚の絵と化したような、言い知れぬ緊張をはらんだ。
手足もさることながら、首の動きがアクセントとなり、時には優美に、時には野蛮なまでに、異国ふうのダンスを際立たせた。水のように風のように彼女は踊った。鳥のように獣のように、あるいは奔放に、あるいは思慮深く彼女は踊った。この壊れた世界、薄汚れた都市にありながら、彼女の本来の体は、どこまでも続く青い草原の中にいるようだった。
おれは目を見開いた。踊るアリーシャの周りには、アマリリスが作ろうとしていたジグソーパズルそのままの、天国のような風景が見えたのだ。
叫び声を上げそうになったとき、不意にダンスが終わった。巨大な月を背景に、軽業師のように彼女の体が宙を舞ったかと思えば、

おれの目の前に、ふわりと降り立つ。エキゾチックな衣装がひるがえり、薔薇の香りがたちこめた。

「逃げてください」

「え？」

「憎悪の塊があなたを追って来ました。よみがえりし死者。それはデビルフィッシュの呪いなのです」

アリーシャが何を言っているのか、もちろんさっぱりわからない。正気を疑ったほどだ。けれど、正面からおれを見つめた、ほとんど銀色に近い瞳は、決して夢に溺れていない。真摯な危惧が読みとれた。間もなく闇の中から、ぜいぜいと喘ぐような声が近づいてきた。荒い息づかい。にもかかわらず、その呼吸には明らかに生命の存在が感じられなかった。

地の底へ通じる暗い穴から吹き上げる、風の音にも似て……一歩ずつ、つまずくような足音がそれに混じった。振り返ると、奇怪な人影がふらふらと揺れていた。そいつがさっきのブローカーの仲間、腺条ワームをおもわせるヤク中男だとわかるまで、五秒ほどかかった。

首は不自然な角度に折れ曲がり、膝の関節は壊れたよう。だらりと垂らした両腕が振り子のように揺れていた。額にこびりついた、どす黒い血。完全に白目を剥いており、横に開いた口はニタニタと笑っているようで、異様に長い舌が食み出していた。口や目尻や鼻から垂れてくる粘液は、膿のようで得体が知れない。

報復に来たのだろうか。それにしても、この男の姿は尋常ではない。もし犬に寄生するサミダレムシの突然変異体があらわれて、人間の体を乗っ取ったとすれば、ちょうどこんなふうだろう。いや、その可能性がなきにしもあらずなので、おれは身震いした。さっきアリーシャが口にした、「よみがえりし死者」という一言が、みょうに引っかかっていた。

ヤク中は突然両腕を前に突き出すと、この世のものとは思えない咆哮を上げて、突っ込んできた。

30（3）

言い知れぬ不快感が、酸を舐めたように口の中に広がる。思いがけない動きの速さにも驚かされ、瞬時、退くべきか、応戦すべきか判断に迷った。ぐっと手首を強く引かれ、そのままアリーシャと横に跳んだ。地面に転がると、ぐわんという音とともに、やつは廃材に突っ込んだらしい。

砂煙が、夜目にも白くたちのぼった。がらがらと崩れてくるパイプや鉄骨を肩に浴びながら、ヤク中は倒れないどころか、痛みを感じる気配すらない。背をまるめ、顔を前方に突き出し、おれたちを見て歯を剥いた。真円形に見開かれた白眼に、視覚があるのかどうか、それはわからないが。

咆哮。

ヤク中は先の曲がった鉄骨を一本抜き取ると、狂人が操るマリオネットのような動きで襲いかかった。まだ倒れているアリーシャを肩でかばい、おれはＭ３６を抜いた。弾はあやまたず右肩を撃ち抜き、やつはびくりと後退りし、叫び声を上げた。それでも右手に鉄パイプを握ったまま、まったく倒れないのだ。

「どうなってる？」

銃口を下方へ修正し、さらに二連射。二発とも両方の太腿にのめりこんだが、それでも倒れようとしない。ねばねばと腐ったような血を吹き出し、全身を痙攣させながら歩み寄り、鉄骨を高々と振り上げた。四発めが男の眉間に命中した。打ち抜かれた姿勢のまま、動きが止まったかと思えば、嘲るように首をかしげ、歯を剥いて笑った。

おれは地面を蹴って男の胸に体当たりした。相手はよろめき、鉄骨があらぬ方向へ振り下ろされ、深々と地をえぐった。ゼロ距離から最後の一発を心臓に撃ちこんだとき、腹を丸太で殴られたような衝撃が走った。やつの膝蹴りをまともに食らい、おれは風に舞うぼ

ろ布のように弾き飛ばされた。
地上で何回転したのかわからない。まったく呼吸ができず、うずくまったまま呻き声を上げるのがやっとだった。なぜ倒れない？五発の弾丸のうち二発を急所に浴びながら、なぜ生きていられる？
いくつもの疑問符が苦痛とからみあう。嘘せながらようやく顔を上げると、一彦が高周波カッターを振りかざし、ヤク中に突進する光景が目に飛びこんだ。
それは一彦が護身用に携帯している工具で、二十センチほどの筒状のグリップから、電気の刃が短剣の形に放電される。鉄骨が振り下ろされるのを待ち構えて、かれは身をかわし、電気の刃をそれに当てた。たちまち蒼白い電流が無数の蛇のように這い上がり、男の全身に絡みついた。激しい痙攣と絶叫。
まともな人間なら即座に感電死するところ、またしても男が不気味に笑うのを見た。鉄骨が振り回され、高周波カッターが弾き飛ばされた。一彦は腕を押さえたまま、後方の瓦礫の山に、もんどりうって倒れた。
「カズ！」
駆け寄りながらパイソンを抜いた。片膝をついて男に銃口を向けたとき、華奢な影にさえぎられた。
「アリーシャ……？」
長い髪が微風に揺れた。薔薇の香りが、ふうわりと漂った。彼女は僅かに振り向いて、目の端でおれをとらえると、小さくうなずいた。そのしぐさはどうしようもなく、アマリリスをおもわせた。運搬用チャペックにとどめをさす前に、少女もちょうどこんなふうに振り向いた。
不死の男が、だらりと垂らした両腕に鉄骨を握ったまま、ゆっくりと近づいてくる。ぼろぼろに焼け焦げ、全身から血を滴らせた姿は、この世のものとは思えない。アリーシャは正面を向いた。彼女の左手に、一揃いのカードが握られていることに気づいた。
優美で魔術的な円を描きながら、右手が一枚のカードを抜きとっ

た。人差し指と中指の間にはさんで、差し上げられたカードは、月光をたくわえて青く輝くようだ。そこには一振りの剣が描かれていた。祭具のように不思議な形をしており、絡みあう二匹の蛇が、唾と柄を形づくっていた。

「プルートゥ」

鋭く囁くと、黒い影が走り、彼女の足もとに舞い降りた。アリーシャは右手をひるがえし、しなやかな黒猫の背にそって、カードをさっと滑らせた。その瞬間、灼熱するように首輪が赤く発光した。

（電子回路みたいですね……まるで最新式の読み取り機だ）

おれは目を見張った。プルートゥの全身は、まるで一度素粒子に解体され、再構築されたようだった。かれはすでに猫ではなく、一本の不思議な形をした剣と化して、地面に突き立っていた。絡みあう二匹の蛇が、唾と柄を形づくっていた。驚愕したように、不死の男が動きを止めたとき、蛇の剣を取ってアリーシャが踏みこんだ。

「はあっ！」

それはダンスの続きだった。

実際には数秒間の出来事だったろう。けれど、水の中を漂うように、彼女が剣を振りかざし、突き出された鉄骨を足がかりに乗り越え、空に浮かぶ月の中から、不死の男の頭上に舞い降りるまで、おれはゆるやかな舞踏の続きを見る思いがした。

まっぷたつに切断された男の体は、まるで鬼火のように、めらめらと燃え上がった。

31（1）

31

三日後に扉がノックされた。まる二日間、ほとんどベッドから出られなかった。

さいわい骨は折れていなかったが、蹴られた腹がステキに痛んだ。目覚めている間は呻き続け、断続的な眠りにおちては悪夢にうなされた。寝ても覚めても、不死の男の幻影に追いまわされた。

ワームやＩＢではなく、曲がりなりにも、おれは人を撃ったのだ。人間の心臓に弾を撃ちこんだのは、あれ以来だった。あのとき、銃口の先には妻がいた。

理論上、おれが撃った相手は「人間」ではなかったと言える。そう何度も自分に言い聞かせてきたけれど、やはり妻を撃ったという事実は揺るがない。そう、理論上、あれは一種の夢にほかなるまい。けれど夢と違って、おれは硝煙のにおいを嗅ぎ、熱い返り血を浴びた。目の前で、妻は血に染まった手を差しのばした。

（な……ぜ、撃った、の……？）

跳ね起きた。電話が鳴っていた。

汗にまみれて、荒い息をついている間に、ベルの音は途切れた。雨が降っていることに初めて気づいた。

布団から這い出し、ベッドに腰かけた。つぶれた箱の中に、煙草が一本だけ残っていた。雨の音を聞きながら、しばらく煙をふかしているうちに、刺すような空腹を覚えた。気がつけば熱は下がっているし、筋肉の隙間に十本のナイフを刺し込まれるような腹部の痛みは遠のき、鈍いうずきに変わっていた。

よろよろと立ち上がり、ごみを掻き分けながら、台所に入った。戸棚に缶詰はなく、冷蔵庫は空っぽ。未練がましく手を突っ込むと、合成ビールの缶が一本だけ、奇跡的にサルベージされた。貪るよう

に飲みほしたところで、ノックの音が五臓六腑に響いた。
「お電話したんですが」
紙袋から食み出したバケットとネギ。茨城麗子は控えめな笑みを浮かべて、玄関に立っていた。
「お加減はいかがですか」
「なぜ寝込んでいたことを知っている？」
「失礼します」
質問を無視したまま、彼女はハイヒールを脱いで上がりこんだ。リビングを見渡して眉をひそめ、次に何の断りもなくダイニングまで進んだあげく、溜め息までもらした。
いい加減、闖入者には慣れていたけれど、曲がりなりにもここはプライベートな空間である。多少臭かろうがキノコが生えようが、第三種以上のワームでも湧かない限り、報告する義務はない。まして、ワットの秘書に溜め息をつかれる筋合いはない。
「シャワーを浴びて来られては？　その間に食事をご用意しますわ」
抗議しようと口を開きかけたところで、彼女は買い物袋をテーブルにのせた。外套を脱いで椅子の背にかけ、頭の後ろに両手を回して髪を束ねた。必然的に、圧倒的な胸の隆起が、目に飛び込んできた。おれは打ちのめされたように、すごすごと浴室へ退散した。
赤錆くさい湯を頭から浴びると、久々に生きた心地がした。汗と一緒に、どろどろの悪夢が流されてゆくようだ。けれどもやがて、足もとがぐらぐらするような、不安定な感覚にみまわれた。酔いが回ったのではない。むしろ頭は冴えてゆき、冴えるにつれて、当たり前の疑問が、むくむくと頭をもたげてきた。
茨城麗子が、今、おれの部屋にいる？　のみならず、夕食を作っている？
（なぜだ？）
そもそも、麗子がこの部屋に入ったことなど、思い出す限り一度もない。仕事の打ち合わせなら、会社で済ませたし、急ぎの資料を届けるときは、喫茶店で待ち合わせた。むろん、麗子は資料を受け

取れば、さっさと席を立った。二人ぶんの代金を支払って。飲みかけのカップに、口紅の跡も残さずに……

（あり得ない）

混乱する頭をタオルで拭きながらダイニングに戻った。デニム地のエプロンを身につけた彼女は、レードルを片手に、おれの姿をみとめると、マニュアル的な角度で頭を下げた。

「いきなり押しかけてしまって、申し訳ございません」

おれは言葉をなくした。シャワーを浴びていたのは、せいぜい二十分かそこいらだ。その間に彼女は驚異的な早さでダイニングを片付け、あまつさえ、雑誌の口絵を切り抜いたような料理を、テーブルいっぱい並べていた。

「お座りになって。まる二日ほど、何も口に入れていらっしゃらないのでしょう」

椅子を引きながら、麗子は嫣然と微笑んだ。

31（2）

「すごいな、これは。短時間でこれだけのレベル……物理的に可能なのかと考えてしまうよ」
「物理的に不可能なこととは？」
「魔術だ」
相変わらず彼女は微笑んでいる。いっさい謙遜しないところが彼女らしくもある。おれが席につくと、麗子は向かい側ではなく、テーブルの側面に位置を占めた。目の前に、ぴかぴかに磨かれたワイングラスがあることに気づいた時には、彼女が瓶を傾けるところ。
「あまりよいものとは言えませんが」
「合成でないだけでも貴重品だよ」
唇に赤い三日月をつくって、彼女は酒をついだ。ロゼだった。自身のグラスにも注ぎ、ちょっと持ち上げてみせた。何に乾杯するのか尋ねると、
「魔術に」
グラスの触れ合う音が、神経を痺れさせた。
女は誰もが魔法使いの素質をもっている。中でも超一流の使い手たちが、最近、おれの周りに続々と引き寄せられてくるようだ。よれよれのガンスリンガーと美しき魔術師たちによる、ちょっとした冒険譚。そんな三文小説を書いてあぶく銭を稼ぎ、あとは寝て暮らせたらどんなにいいだろう。
「考え事でも？」
「うん。姫はだれだろうと」
「姫？」
レイチェルの姿が、いやに鮮明に脳裏をよぎった。おれは首を振りながら、グラスを傾けた。ほどよく冷えており、上品な味がした。ワインなら赤と決めているが、美女に振る舞われるのなら、ロゼもいい。もちろんその予算は、ワットの懐あたりから出ているに違い

ないが。茨城麗子が個人的な興味から訪ねて来たと考えるほど、おれはナルシストではない。

料理も旨かった。が、いったい何を食ったのか、じつはよく覚えていない。アマリリスが作ったものなら、いちいち思い出せるのに。

「最近、秘書型チャペックが売れていることをご存知ですか」

と、茨城麗子は世間話を始めた。一気に本丸を攻め落とそうとせず、外堀から埋めて行くつもりらしい。彼女の真意はまったくわからないが、何か面倒な問題を持ち込んできたことは、見え透いていた。間違いなく、「人食い私道事件」以上の。

「知らないね。だいたいそんなものに、きみが職を追われる心配はないだろう」

何気なく彼女のグラスに目を遣れば、ワインがまだ半分ほど残っており、相変わらず口紅の跡はみとめられなかった。彼女の唇は、最初から真紅に染まっているのだろうか。彼女は就職活動中の女子大生が着るようなスーツを着ていた。開襟シャツの白い胸元が、グラスの後ろに君臨していた。

顔が火照るのを意識しつつ、おれは目を逸らした。そんな反応を予期していたようなタイミングで、彼女は言う。

「それがそうでもないのです。最新式の秘書型チャペックは、顔の部分が１４インチ。胸に１９インチのモニターをそなえていて、社長のスケジュールから最新のニュースまで、必要に応じてたちどころに表示させます。おまけに頭部のモニターには、通常、とびっきりの笑顔を浮かべる美女の顔が映し出されているのですから」

「顔を見飽きたら、取り替えればオーケーってわけか」

相崎博士が聞いたら、真っ赤になって怒るだろう。はん、交換可能というテクノロジーの常識こそが、諸悪の根源だよ。平等のふりをした我欲に過ぎん。とかなんとか。

「ワットが購入を検討しているのか」

「まさか。社長はスタイリストですから。独裁者の多くがそうであったように」

「やつのことだから、今の発言もどこかで聞いているかもよ。なるほど、やつにとって秘書は、陰口を叩くくらいがちょうどいいのかもしれない。スケジュールやニュースなら、言われるまでもなく頭に入っているだろうし」

そうかもしれません。と、やけに素直な言い方をして、麗子は肩をすくめた。めったに見せない子供じみた仕ぐさがなまめかしくて、みょうにどぎまぎさせられた。酒のせいで赤くなっているのだと、受けとめてくれればいいが。このままでは着々と籠絡されそうで恐ろしく、おれは率直に切り出してみた。

「何か面倒な依頼でも舞いこんだんだろう」

「はい」

「断るという選択肢は？」

「たぶん、ありません」

31（3）

そんなことだろうと思ったが、それにしても彼女が直接、部屋に乗り込んできた理由は謎のまま。面倒であれ何であれ、依頼は依頼。まずは事務所に呼び出すのが筋だろうし、選択の余地がないのなら、なおさらである。人を丸めこむ腕前は、麗子よりワットのほうが百倍上なのだから。

「お察しのとおり、この依頼には私的な要素が含まれます」

おそらく顔に書いてあったのだろう。どうも根が単純ばかなものだから、容易に考えを読まれてしまう。思わず乾いた声が出た。

「きみの個人的な依頼なのか？」

「正確には、わたしの親友からの」

「きみの友達の頼みを、おれが断れない理由があるとは思えないが」

共通の友人はいない筈である。そもそも彼女の口から「親友」という言葉が出たこと自体、驚きだった。日頃、プライベートなにおいをまったく感じさせない点において、彼女は秘書型チャペック以上かもしれない。尾篭な例ではあるが、面談中、彼女がトイレに立ったところを一度も見たことがないほどに。

唇を湿すように、麗子はワインをひと口飲んだ。それから姿勢を正して、側面からおれを真っ直ぐ見つめた。

「親友の名は言えません。言ったところで、エイジさんは存じていらっしゃらないでしょう。むしろコードネーム『カヲリ』と申したほうが、よくご存知かと思います」

黒ずくめの武装警官の姿がフラッシュバックされた。ラバーをおもわせる生地のスーツ。漆黒のバイザーのついたヘルメット。軽く腕を組んで壁にもたれ、夜を貼りつけたようなバイザーの下で、赤い月の形に、唇が薄く微笑んでいる。

（おまえを殺すかもしれない相手の顔くらいは、知っておいてほしくてな）

すなわち、いよいよ抹殺にかかってきたわけだ。おれはほとんど無意識に、煙草に火をつけた。呆けたように煙を吐く男の前で、麗子は「カヲリ」と親友になった経緯から、淡々と語り始めた。学生時代に知り合ったこと。富豪の娘らしい身の上。末流とはいえ、竜門寺家の血筋であること。政略結婚を断り続けるうちに、クーデターの渦中に呑まれて……

そして「人食い私道事件」ミッションの当日、突然彼女が麗子の前にあらわれたこと。

「電話で呼び出されたのは、ミッションの五日後でした。どうして人類刷新会議の武装警官になったのか。どのような任務を帯びているのか、そのへんの情報は全く得られませんでした。プライベートで呼び出したのだと彼女は言いました。親友として、この件を依頼するという意味でしょう」

彼女は口ごもり、ためらうように視線を逸らした。ワインのせいか、頬をほんのりと赤く染めて。煙草を揉み消して、おれは指を組んだ。

「よくわからないんだが。カヲリと名のる女は、組織の一員としてではなく、あくまで個人の意志で、おれを何らかの事件に引きずり込もうとしているんだろう。おれときみが顔見知りだとわかったから、生き延びるチャンスを与える、ということかな」

「そうなりますね」

「きみにしては歯切れのよくない。勝手に民間の組織に情報を流すことは、その、カヲリにとっても相当なリスクをともなう筈だ。きみとカヲリが親友だから？　それはわかるが、おれを助ける理由にはならない。どうして、きみが秘書をつとめる会社の一契約社員に過ぎないおれを、彼女が庇う必要がある？」

茨城麗子が狼狽するさまを、おれは初めて目の当たりにした。上気したように頬を染め、目をしばたたかせ、喘ぐように残りのワインをひと息に飲みほした。おれが瓶を傾けて注ぎ足すと、消え入りそうな声で「すみません」と言い、胸に手を当てて呼吸を整えた。

いずれにせよ、不可解なリアクションである。

「すみません……たしかにこれで彼女が有無を言わさずエイジさんを抹殺する可能性は、ほとんどなくなりました。ただし、この依頼は形を変えた死刑宣告とも言えるのです」

「興味深いね。依頼の内容を聞かせてくれ」

新しい煙草に火をつけた。けれど、それを吸うこともほとんど忘れるほど、彼女の語る内容は驚愕に満ちていた。複雑な話ではない。人類刷新会議は、イーズラック人によって大規模な麻薬の密売が行われているという情報をキャッチした。巨利につながる組織的な商売を嫌うかれらとしては、例外的な行動である。ゆえになかなか発覚しなかった。

売られていた麻薬は、Ｋｒ－１３。第二次百年戦争中に開発された合成麻薬で、通称「クラーケン」と呼ばれる。神経に強力に作用するうえ、極めて危険な副作用を引き起こすといわれ、戦後を通じて徹底的に規制されてきた。現在も、少量の所持が発覚しただけで、少なくとも十年は出てこられない。まして売買にたずさわろうものなら、銃殺刑は必至である。

「クラーケン」の副作用については謎が多い。当局が緘口令をしいているため、巷間では様々な憶測が飛び交っている。

諜報部員たちは、暗躍するイーズラック人の密売者を追ううちに、ようやくアジトと思われる場所を特定した。それがここＢＢ－３３地区の東の郊外に位置する、旧第九街区……俗に「幽霊船」と呼ばれる所だ。当然、諜報部員たちが潜入したものの、次々と送り込まれた十九名のうち、誰一人生きては戻らなかった。

「つまり栄光ある二十人めの犠牲者に選ばれたのが、このおれであると？」

31（4）

皮肉をこめたつもりはない。これまでも、そしてこれからも、おれは流されるままに生きてきたし、生きてゆく。流れ着いた先に待ち受けているものが死ならば、それはそれで受け入れるしかあるまい。こんな商売を続けながら、今まで生きてこられただけでも、奇跡に等しいのだから。

麗子は頭を下げ、何度めかの「すみません」を発した。おれは笑って手を振る。

「恐縮する必要はないよ。『幽霊船』なら、ちょうど行ってみたいと思っていたところだ」

「えっ」

「七年ほど前、そこに半年間、身を隠していた。しかし、おれがいた頃にはイーズラック人の姿はまったく見かけなかったな。商売敵として、あの界隈では嫌われていたから」

「当局がアジトの特定にてこずった理由のひとつも、そこにあるようです。いつの間にイーズラック人が『幽霊船』に住みつき、元の住民とどのように折り合いをつけたのか……潜入した諜報部員が次々と消される現状では、多くは霧の中なのですが。わかっている限りの情報は、後ほどカヲリから提供されると思います」

また会うことになるのだろうか。ほっそりとした、黒い鳥をおもわせるシルエットが再び脳裏に浮かんだ。ああなるほどとおれは思う。彼女がカヲリと名のるのは、カフカ鳥を意識したのだろう。人の死を予言するといわれる黒い鳥。そのすぐれた嗅覚が、時空を越えて死の「香り」をかぎつけるのだという。

「彼女はレイチェルについて、何か話したか？」

「いいえ。とても尋ねる雰囲気ではありませんでしたし」

「この件を、会社には通してあるんだろう。おれが『なんでも屋』であるためには、曲がりなりにも竹本商事の社員であることが前提

となる。きみのことだから、そのへんは抜かりないだろう。もちろん、皮肉ではなく」

麗子がうなずくのをみとめて、ゆっくりと煙草の火を消した。

「あとはおれの返事を待つばかり、か。いや、先に選択の余地はないと聞いているし、おれもそう思う。ただし、じたばたしようと思えば、できないことはないんだ。きみは忘れているようだが、その気になれば、おれは人類刷新会議を壊滅させることだってできる」

むろん、アマリリスのことを言っているのだ。相崎博士の研究室に乱入し、命令するだけでいい。もっとも、今のアマリリスなら刷新会議どころか、人類そのものを滅ぼしかねないが……唖然としている麗子に、おれは道化師のポーズで笑ってみせた。

「冗談を真に受けられると立つ瀬がない。まだあの子を『解放』する時期でないことくらい、承知しているさ。苦しむのをわかっていて、みすみす『本物の』ＩＢにしてしまうようなことはしないよ。きみが直々に来たということは、この依頼をおれに受けてほしいという、きみの意志の表明と解釈していいのかな」

真顔で、彼女はうなずいた。

「わたしの意志で、あなたを死の危険にさらすのですから。何一つリスクを負わないとは申しません」

音を立てずに椅子を引いて席を離れ、おれの目の前に立った。百合の花束の匂いがした。ちょっと腕を伸ばすだけで、彼女の腰を抱けるだろう。圧倒的な乳房を支えるには細すぎるような、その腰をサテュロスのように荒々しく持ち上げて、ベッドまで運んで行けるだろう。

ゆっくりと、麗子は両腕を頭の後ろに回し、結んでいた髪をほどいた。その動作から、おれはアリーシャの舞踏を思い出していた。

「依頼は受けるよ。でもこれは、一生後悔するような選択じゃない。次の選択に比べたらね」

席を立ち、彼女の前にひざまずいた。赤いマニキュアで武装された指先は、ひんやりと細かった。ドン・キホーテの口吻けを手の甲

に受けるとき、電気を帯びたような彼女のおののきが伝わってきた。ここにおいて一つだけ悟ったのだ。紳士とは、痩せ我慢の文化的帰結であると。

彼女が帰ったあと、テーブルの上からは魔法のようにすべてが消えていた。

呆けたように煙草をふかしている間も、勃起がなかなか治まらずこまった。死ぬか生きるかの取り引きをしておきながら、未練たらたら。寄せては返す波のような後悔に責め苛まれた。後悔するくらいなら、なぜ抱かなかった。おまえはそれでも大日本おっぱい党員か。

（やれやれ）

吸殻の山の中に煙草を放り込み、リビングに戻って、書きもの机の引き出しを開けた。黒光りするパイソンの隣に、煙草の箱がひとつ。パッケージには、帆船の真下から絡みつく、巨大な蛸の絵が刷られていた。イーズラック人の酒場、黒猫亭で不法ギルドの連中が所持していた。煙草に偽装した麻薬である。

忘れていたわけではないが、麗子にはとうとう話さなかった。すでに一本一彦に渡して、成分の分析を頼んである。が、結果を待つまでもないだろう。おそらくは、こいつが「クラーケン」に違いあるまい。

月の中で踊るアリーシャの姿を、また思い浮かべた。間もなく再会する運命にあるとは、予想もせずに。

32（1）

32

ワットからは何の音沙汰もなかった。ふだんはしつこいくらいの男が、四日の間、うんともすんとも言ってこないのだ。

この一件をやつが重々承知していることは、麗子の口から確認済みである。やつなりに動いているのも確かだろう。依頼主のカヲリは富豪の娘だと聞く。首長の血族とはいえ、政治犯として全てを没収されるほど、濃い繋がりはなかったらしい。クーデター後も、それなりの資金力を保っていると考えるのが妥当だろう。

そして竹本ワットが、金のにおいのする話に飛びつかないわけがない。解凍遺伝子の魚を前にした猫のように。

麗子があらわれた夜のできごとは、すべておれの妄想ではなかったかと、考えるときがある。麻薬密売組織も、「幽霊船」も、カヲリによる間接的な死刑宣告も。酔ったおれの頭がこしらえた、一場の夢に過ぎないのではないか。このまま放っておけば、おれとの接点をもたぬまま、すべては時の流れの彼方に押し流されてしまうのではないか、と。

（わかっている限りの情報は、後ほどカヲリから提供されると思います）

それに尽きるのかもしれない。ワットとしては、表向きは感知しない態度をとり続ける必要がある。それくらいやばいネタなのだ。ゆえにこちらから連絡しても、知らぬ存ぜぬで通すだろうし、ばかみたいな話、窓口となる茨城麗子と話すのが気恥ずかしくもあった。

（何一つリスクを負わないとは申しません）

頭を掻きむしり、煙草を揉み消した。四日の間、ほとんど家から出ておらず、一日じゅう煙草をふかしては、思い出したようにぼそぼそと缶詰を食べた。このままおれは世間から消えてしまうのでは

あるまいか。他者に認識されない存在は存在しているとは言えないと、大昔の物理学者が言ってなかったか。

それもまたよしと考えていたところで、電話が鳴り始めた。情けない話、びくりと体が震えた。看守の足音に怯える死刑囚の気分が、少しわかる気がした。消えることはおろか半透明にもなれないまま、いかにも重い受話器を持ち上げた。

「ハロー、お久しぶり。このあいだ分けてもらった蛸の切り身なんだけど。いかにも遺伝子解凍に失敗して、中毒起こしそうなやつ。あれの成分解析が済んでるから、うちに来てよ」

相槌をうつ暇もなく電話がきれて、ノイズだらけの不通音が鳴っていた。言うまでもなく、二葉は例の麻薬のことを暗示したのだ。万が一の盗聴を警戒したのだろう。そのことからして、あれが何であったのか、行かなくてもわかるというもの。

とはいえ、このまま部屋にいてもキノコが生えそうなので、出かけることにした。アマリリスを見舞い、車のボンベも交換したい。

「やあやあ。ちょっと顔を見ない間に、前にも増してくたびれた感じだね、エイジさん」

八幡商店のガレージの中。いつものスペースに座ると、コーヒーの香りとともに二葉があらわれた。ダンガリーシャツにジーンズ。ピンクのマフラーを巻いたまま、よほど気に入ったのか、いつぞやのゴーグルを頭にのせていた。

「創立記念日か？」

「ノンノン。今日は日曜日。いつも頭の中が日曜日な人には関係ないでしょうけど。誰かさんが部屋で頭からキノコを生やしている間も、世の中は動いているのよ」

一朗と一彦は、揃って朝から出かけているという。

先に二階を訪ねたのだが、珍しく博士は不在で、かわりに黒木に案内された。アマリリスはＣＮＣ溶液の中で眠っていた。時おり痛みを感じたように眉をひそめるものの、おおむね安らかな寝顔を見て、快復に向かっていることを知った。それにしても、八幡ブラザ

ースといい変態博士といい、日曜日に出かける者の多いことだ。
　コーヒーをすする間、二葉は机がわりの鉄板に両手で頬杖をついて、ゴロタウロムシでも見るようにおれを眺めている。このワームは人畜無害で小犬とカブト虫を合わせたようなユーモラスな形状をしているため、ペットにする物好きもいるほどだ。問わず語りに彼女は語る。
「最近忙しくてさ。家でゆっくりするのも、けっこう久しぶりなんだ」
「ボーイフレンドと勉強してたんだろう」
「期末試験ならとっくに終わってる。ボーイフレンドって、タミーくんたちのこと？　最近忙しかったのは、バイトのせいなんだけど」
「新東亜ホテルの？」
　おれは首をかしげた。一彦の言っていたことと、微妙に食い違う。
「そうそう。いきなり別館のほうに回されちゃったのね。何で学生アルバイトのわたしが行かされるのか、よくわからないんだけど。ほら、別館といえば変な噂が絶えない所じゃない。幽霊館だのロンドン塔だの。壁なんかも蔦が這い放題だし、いかにも陰気な感じ。泊り客がいたこと自体、驚きだったわ」
「首長連合の時代から、あそこはいろいろと言われているな。竜門寺家が危険視する首長を、表向きは接待の名目であそこに招き、その実幽閉して、密かに殺していたとか」
「へえ。だからロンドン塔なんだ」
「あくまで噂だけどね」

32（2）

刷新会議に接収されたあとも、長いこと別館のほうは封印されていたのではなかったか。表向きの理由は、民間の利害が複雑に絡んでいるとかで、あながちでたらめでもあるまい。あのホテル自体、首長連合の病的な側面を象徴しているようなところがあった。スキャンダルの坩堝であり、言語道断な宴が、夜な夜な行われていたとも聞く。

頬杖をついたまま、二葉は溜め息をもらした。

「さすがのわたしも、正直、疲れちゃったのよね。たしかに新任ということで、ずっと掃除ばかりやらされたけどさ。それとは別な意味で。あそこ、絶対変よ」

「出るのかい」

「出るのよ。使われていない部屋がほとんどなのに、中から変なもの音が聞こえるなんて、しょっちゅう。まるでこれから仮装舞踏会に出席するような、奇抜な恰好をした人物と廊下でたびたびすれ違ったし。振り向いたらもう消えているし。現に、泊り客や従業員が、たびたび消えてしまうみたいだし」

「消える？　そいつはまるで……」

「ね。人食い私道を彷彿させるでしょう」

鋭い視線を向けて、すばしっこく唇をなめた。

「ま、明日あたり、ようやく掃除地獄からは解放されそうだから。客室につくようになれば、少しは楽になるし。もうちょっと続けてみようと思うの」

「危険はないのか」

「わたしの実力は、例の私道で確認済みでしょう。それに泊まり客に関して、いろいろと引っかかることがあってさ」

「どんなふうに？」

彼女は答えずに席を離れ、背中を向けて伸びをした。その姿勢の

まま、くつろいだポーズとは裏腹な声を出した。
「新東亜ホテルの別館には、とんでもない客が泊まっているかもしれない」
おれが突っ込んで尋ねる前に、二葉はくるりと振り返り、「そうそう」と言いながらポケットを探りはじめた。そこに無造作に突っ込まれていたのは、小さなチャックつきポリ袋に入れられた白い粉。休日の高校生のジーンズのポケットから出てくるには、あまりにも場違いなシロモノである。
「これに関しては、エイジさんのほうでも、ある程度の予想はついているんでしょう」
「Ｋｒ－１３。通称、『クラーケン』」
「ハイ正解。そこまでわかっているのなら、わたしが兄貴や博士の受け売りを、くどくど並べる必要はないわね。ただでさえ、化学はちょっと苦手なんだから」
「博士だって化学は専門外だろう。しかし、やつ、いや、かれに回されたってことは、分析するのによほどてこずったのか」
「何を言っているのやら。この麻薬の正体は、刷新会議の科学班にだって、突き止められていない筈よ。人体実験こそ最良の手段なんだが。と、博士は言ったわ」
変態博士の顔が目に浮かぶようで、おれは眉をひそめた。合成麻薬Ｋｒ－１３の故郷もやはり、消滅した武装国家、イズラウンだと伝えられる。ＩＢの誕生、ひいては第二次百年戦争の勃発に密接に関連しており、またその精製技術は、今では完全に失われているという。ゆえにこの麻薬を「新たに」作り出すことは不可能なのだ。
不可能でなければならないのだ。
「人体実験ができぬ以上は、何とも言えんのだが。と、博士が言うには。ほら、エイジさんとカズ兄さんを襲った男がいたでしょう。あの男こそ、クラーケンに中毒していたんじゃないかと……」
「ちょっと待ってくれ。じゃああれは、クラーケンの副作用だったというのか？」

「そういうことになるわね。しかも驚きなのは、博士の意見によると、襲ってきた時点で、あの男はすでに死んでいた可能性が高いらしいの」

「あり得ない……！」

混乱のあまり、頭を掻きむしった。鉄骨を手にした血まみれの男の姿が、ありありと浮かんだ。首は不自然な角度にねじ曲がり、目は白濁し、口の端からだらりと舌を垂らしていた。全身からたちこめる厭な臭いは、明らかに腐臭をおもわせた。

それでもやつは、もの凄い力で鉄骨を振り回した。五発の弾丸にも倒れず、高圧電流を浴びてもなお、襲いかかってきた。あの時点で……男は死んでいたというのか。ではいったい、どうやって動いたのだ？　武器を持った大の男が二人がかりで取り押さえられないほど、すさまじい力がふるえたのだ？

蒼古たる伝説にのみ聞く、夜歩く生ける屍のように。

電話が鳴っていた。ずっと遠くで鳴っているように思えたが、ガラクタの棚に二葉が手を伸ばし、受話器を持ち上げると同時に、ベルの音は途絶えた。短い応対のあと、彼女は送話口を手で押さえ、おれに告げた。

「ワットくんから」

32（3）

胸の中で、いきなり心臓が跳ね上がる気がした。寿命が縮む思いとは、まさにこのこと。やつと付き合っていたら、決して長生きはできまい。耳に当てた受話器が飛び上がるほど冷たかったのは、室温のせいか、それともワットの声のせいなのか。例によって、温かみのカケラもない声で、やつは言う。

「突然お電話して申し訳ございません。家にかけてもお出にならないので、こちらかと思いまして」

おれは黙っていた。体は心底冷えているのに、額が汗ばむのを意識した。

「折り入ってお願いがあるのです。簡単な依頼を引き受けていただけますか?」

「簡単な、だと?」

刷新の諜報部員が十九人も消されている事件の、どこが「簡単」なのか。皮肉なのかと考えたが、それにしては一本調子な口調が気になった。

政権が変わってこのかた、電話がひどく混線するようになった。無数の亡霊が苦しげに喘ぐようなノイズの向こうから、嫌味なくらいよく通る声がこたえた。

「ええ、極めて簡単な。エイジさんの手を煩わせるまでもない、ちょっとしたワームの駆除なのですが。偶然現場が重なってしまい、人出が足りないのですよ」

「ちょっとしたワームとは?」

「おそらく蠕動ワームQ5型、通称ゴクツブシとおもわれます。依頼主と電話で話しただけで、事前調査は行っていないのですが、まあ必要ないだろうと判断しました。もちろん現時点で、けが人は全く出ておりません」

こういった場合のやつの判断は、まず信用していい。ゴクツブシ

だと聞いて行ってみたら多脚ワームがあらわれたとか、そんなミスは決してしない男だ。それにしても、茨城麗子がうちに来たことも、彼女からの依頼をおれが承諾したことも、とっくに知っている筈なのに。よくもまあいけしゃあしゃあと、ゴクツブシの駆除なんか頼めるものだ。

おれの都合を確かめもせず、やつは続けた。

「そこからでしたら、ちょうど二つ隣の街区になります。急な話で申し訳ないのですが、これから行ってもらえますか。概要をお伝えしますので、メモをご用意ください」

どうもおれという男は、強引なアプローチにとことん弱い。断るのが苦手である。思わず二葉にゼスチュアで示すと、彼女は三秒でメモと鉛筆をテーブルの上に滑りこませた。依頼主の住所を書き終えたところで「ではお願いしますね」と言ったきり、電話は途切れた。不通音に舌打ちして受話器を戻す間に、二葉はメモを光にかざした。

「へえ。ここって、親孝行横丁じゃない」

「善人の見本市みたいな所なのか」

「逆よ。パラダイスと名のつく所は、たいてい賭博場か売春宿でしょう。どんなに意志の堅固な若者も、この通りに一歩足を踏み入れたが最後、たちまち堕落してしまう。そんな皮肉を込めてつけられた名前を、通りの店主たちが面白がって、アーチにでかでかとかかげちゃったのね」

兄貴たちによろしくとことづけて、車に乗り込んだ。二葉は一緒に行きたそうだったが、健全な青少年を不道徳な界隈にともなうわけにはいかない。新しいボンベを積んだ車は、快調にガレージから滑り出した。政権が変わって基本的に何一ついいことはなかったが、ガスの質は向上しているようだ。もっとも、それだけ値段も上向いたわけだが。

急に「簡単な」依頼が回ってきたのは、むろん初めてではない。危険を冒さずに小遣いが稼げる、オイシイ仕事なのだが、今回ばか

りは素直に喜べなかった。今さらオイシイ仕事を回されても、「幽霊船」で命を落とせば元も子もない。皮肉にしてはブラックがきつすぎるし、ウラがあるにしては繋がりが読めない。

（あの野郎、何を考えてる？）

たいして遠くないわりに、街路が入り組んでいたため、現場に着くまでに二十分以上要した。片側が三車線ある、無駄に広い道路に車を止めた。うち2・5車線は潰れており、スクラップや、廃材を利用した住居や、露店で占められていた。よくある光景だが、そのうちここも当局の手が入るだろう。

相変わらずの曇り空。日没にはまだ間があるが、すでに飲食店の屋台が出没し、灯をともし始めている。汚れた空気に、動物の骨でダシをとるにおいが混じる。横丁の入り口を見上げれば、なるほど二葉が言ったとおり、親孝行横丁の文字が、これ見よがしにかかげられている。

おれは車のハッチを開けて、駆除用の道具を用意した。めったにないが、このての仕事のために、一応は常備しているのだ。ゴクツブシが相手なら、防護服は必要あるまい。もっとも、慣れていなければ、頭からドラム缶いっぱいのトマトケチャップをかぶることになるだろうが。社名の入ったツナギを着て器具を背負い、殊勝な名前の通りに足を踏み入れた。

人食い私道とはまた違った意味で、アーチをくぐったとたん、たちまち空気が変わるのがわかった。

あそこはこの世ならぬもの……すなわち死霊の妖気に満ちていたが、ここでは生きた人間の欲望が、濃厚な臭気をかもしていた。極彩色の欲望。路上で交わされる金と欲の駆け引き。ありふれた商店街の外観の裏から、隠しおおせることのできない腐臭が臭いたつようである。

さすがにこの恰好をしていると、街娼は寄って来ない。彼女たちは連れでも待っているふうを装って立っているが、猫科の肉食獣をおもわせる目つきで、すぐにそれとわかる。一見、つつましやかな

服を着ているが、座ったりすれば、脚や胸元があらわになる仕組み。以前はいかにも娼婦らしい恰好をしていたが、最近急に厳しくなった手入れへの対抗策である。

彼女たちはまるでワームを見たように眉をひそめ、ぷいと顔をそむけた。

33（1）

33

オキシジェン・テントの看板はすぐに見つかった。下半身が犬の男女が、異様に痩せた裸の上半身を絡めあっていた。ガレージ芝居の宣伝かと見紛うほど、けばけばしい絵柄。路地に入りこむと、すぐビルの壁にぶつかる。目指す映画館は袋小路の右の側面にあり、周囲の壁といわず電柱といわず、ポスターが所狭しと貼りつけられていた。

視線を感じて振り返ると、数人の娼婦が、素早く身を隠した。おれの美貌に引き寄せられたのでは、決してあるまい。この界隈で虫が湧いたとなると、彼女たちにとっては、死活問題につながる。彼女たちとワームの縄張りが、ぴったりと重なるからだ。双方とも闇を必要とし、闇から養分を吸って生きている。

おれはツナギのポケットに手を突っ込んで、看板を見上げた。通りに出ていたのと同じ絵柄だが、犬男の股間には怒張する男根が露骨に描かれていた。当局に見つかれば、強制撤去は間違いなしだ。ペンキ絵の上からは、赤色のスプレーで「Ｏｘｙｇｅｎ Ｔｅｎｔ」と殴り書きされていた。

映画館というより、掘っ立て小屋に近い。チケットブースは、よくこの中に人が入れるものだと感心するほど狭い。その隣で鉄扉が閉ざされ、やはり表面を覆い尽くすほどポスターが貼ってある。これでは現在、何が上映されているのか、さっぱりわからない。

（ポルノ映画館と聞いていたが）

たしかにほとんどのポスターの中で、女たちは乳房を露出し、ぬめぬめとした唇を半開きにして喘いでいた。けれどもそれらは、他人のセックスを見て楽しむという、通常のポルノ映画の趣旨からは明らかに外れた、異様な雰囲気をかもしていた。

例えば『瓶詰』というタイトルのポスターを見れば、文字どおり、大きなガラス瓶の中に全裸の女が、窮屈そうに体を折り曲げ、逆さに詰め込まれているのだ。瓶は女を閉じ籠めたまま、茫洋たる海原を漂うようだ。海中から蛸が蝕腕をガラスに絡みつかせ、どこから侵入したのか、海蛇が女の肌の上を這い回っていた。

特殊な性癖を満足させるための映画なのか。しかしいったい、瓶詰めの女にしか興奮しない男が何人いるというのか。あるいは犬男と犬女の性交を、何者が好んで観に来るのか……おれは首をひねりつつ、チケットブースに近づいた。ガラスには黒いフィルムが貼ってあり、四角い小窓の向こうは覗けない仕組み。

「竹本商事の者です。害虫の駆除に参りました。支配人の方に取り次いでいただけますか」

棒読みでそう言うと、ガラスの後ろで人の動く気配があった。無人ではないかと半分思いかけていたので、少々ぎょっとさせられた。若いのか年寄りなのかわからない、女の声がぼそぼそと答えた。

「キノは映写機についております。館内奥ですから、そちらへお回りください」

ワットの口からも、依頼主は「キノ」と聞いていた。普通に「木野」と書くのか。技師を雇う金がなくて、支配人みずから映写機を回しているのか。まあ、駆除料は区が払ってくれるのだろうけれど。そうでなければ、ワットが引き受けるわけがない。

ポスターだらけの鉄扉を押した。通路も何もなく、つい鼻の先に、もう一枚の、館内に通じているらしい鉄扉が立ちふさがっていた。上映中らしく、扉の向こうから声が洩れてくる。喘ぎ声ではないようだ。

扉を開けると、後方側面から入る恰好。中はきわめて狭く、五十人も座れるかどうか疑わしい。気の毒なほどがらがらな席に、ほんの数人が座っていた。おそるおそる、スクリーンに目を向けた。映っていたのは、けれど瓶詰めの女ではなく、タイツで全身をぴっちりと覆われた人々だった。

スパンコールと羽飾り。サーカス芸人かと思えば、どうやら異星人であるらしい。かれらが着ている薄手のタイツは、血管をおもわせるグロテスクな模様で彩られ、乳房や男根の形を、自慢げに浮き上がらせていた。顔にはピエロをおもわせる奇怪なメイクをほどこし、体の倍はある用途不明の機械を背負っていた。

背景は室内なのか屋外なのかわからない。クラシックな椅子や蓄音機があるかと思えば、うしろに空想科学的な尖塔が林立し、二重の輪をもつ蒼い惑星が夜空に浮かんでいた。アングルが変わり、若い男女とおぼしい異星人が映し出された。背後の機械に操られるマリオネットのような動作で会話を始めた。

（もしも惑星の磁場のから逃れることができたら、ねえあなた。宇宙はわたしの体に、すっぽりとおさまるでしょう）

（けれどきみ、宇宙が一つでなければならない道理はない）

（もう一つの宇宙は、いったいどこに隠れていますの？）

（それを調べるために、象牙の塔から派遣された）

と、さっぱり意味がわからない。柱にもたれて首をひねりつつ、それでも画面から目を離せずにいたのは、これと似た雰囲気の映像を、最近見た記憶があるからだ。とはいえ、おれはとくに映画好きではないし、まして、このような難解な映画を好きこのんで観たりはしない。

考えあぐねているうちに、何者かが後ろで咳払いした。そんな所に突っ立っていては見えないという抗議か。それほど熱心に、昼間からこんな映画を観ているのはどんな人種か。興味を抱きつつ振りかえると、映写機の後ろから手招きする人影がある。

33（2）

「竹本商事の者です。支配人の方ですか」
シルエットに近づき、軽く頭を下げた。見れば黒ずくめの痩せた男で、腕まくりしたシャツの先で、手袋だけが白かった。
「キノです。よろしく」
かすれた声。三十代なかばといったところか。げっそりとこけた頬。高い鼻の下に髭をたくわえていた。顔が青く見えるのは、映写機が放つ光のせいばかりとは思えない。この男、少なくとも昼間は、映画館の暗がりから一歩も出ずに暮らしているのではあるまいか。
キノ氏は立ち上がり、自身がかけていたのと同じパイプ椅子を開いて、おれに勧めた。器具をおろして腰かけると、ぎちぎちと鳴り、錆のにおいがした。おれは事務的に切り出した。
「弊社の推定によれば、そちらに発生したのは蠕動ワームQ5型、ゴクツブシかと思われます。規模にもよりますが、さほど時間はかかりません。さっそく駆除に入りたいので、案内していただけますか」
聞こえなかったのかと疑うほどの間があった。じっと画面に目を注いだまま、キノ氏はひょろ長い足を組みかえた。椅子の下には、ビールの空き缶やポップコーンの紙袋が、うずたかく溜まっていた。もう一度繰り返そうとしたとき、かれは口の端を歪める笑いかたをした。
「虫なら、きっとこの部屋のどこかにいるでしょう。だがご覧のとおり上演中でしてね。灯りをつけるわけにはいかんのです」
「ならば改めて出直しますよ。何時ごろ伺えば、都合がよろしいですか」
声にいらいらが出ないよう、注意しながらそう言った。またおとずれた沈黙の中、かれはスクリーンから目を離さない。小刻みに蠢く瞳に、蒼白い光が映っていた。

「あいにく当館はエンドレスで上映しておるのです。ご存知かと思いますが、この界隈は昼夜を通して往来が絶えません。ちょっとした連絡場所に、当館を利用するお客もいますのでね。もちろん、純粋に映画を楽しまれるお客のほうが、わたくしは好きなのですが。運営上、そうも言っておられません」

なるほど、ある種の受け渡しや、ある種の取り引きのための、「ちょっとした」暗がりを提供しているというわけだ。映画の料金とは別に、不法ギルドあたりから、場所代としていくらか受け取っているのかもしれない。となると……

「ひょっとして、今回の依頼は狂言ですか」

「狂言とは？」

「ワームなど最初から発生していないということです。駆除のために区が金を出しますからね。もちろん、業者側で報告書を書かなければ金は下りませんが。書類一枚で金を得られるので、引き受ける業者も多いのです。降りた補助金は折半するのが相場のようです」

「ほお。そんなこともなさるのですか」

「弊社に関しては、ご想像にお任せします。ただ、もしそのような契約でしたら、事前にご連絡いただくのが原則です。自分のような作業員ではなく、事務の者の伺う形となりますから」

キノ氏は感心したように瞬きすると、身をかがめて缶を一つ拾い上げた。栓を開け、すっかりぬるくなっているのか、盛大に吹き出す泡を器用にすすった。

「虫がいるのは本当ですよ。おっしゃるとおり、ゴクツブシでしょうな。すでに数人の客がトマトソース浸けにされておりますから。駆除してもらいたいと切実に願っておりますよ。ただし、映画を止めることはできない。継ぎ目にも場内を明るくできない理由は、さっき申し上げたとおりです」

おれは唸った。どこが「簡単な」仕事なのか。ワットの野郎は、わかった上で、おれに振ったに違いない。この時期に人出が足りないというのも、もちろん大嘘だろう。方法はひとつしかない。時間

はかかるが、懐中電灯で端から端まで、しらみつぶしに椅子の下を照らしていくしかないだろう。

スクリーンの中では、まだ異星人の男女が、哲学的にシュールな会話を続けていた。こんな映画を撮るやつも撮るやつだが、好んで上演するやつも確実に頭がイカレている。おれは憤然と席を立ち、器具を背負った。後ろから一列ずつ調べることにして、椅子の下に用心深く光を当てた。さっそく一発めで、ぞろりと動く影をとらえた。

（けっこう大物じゃないか、おい）

たかだかゴクツブシといえども、闇の中に潜むワームには、ある種の凄味がある。体側に並ぶ無数の目が、光を浴びて赤く輝く。おれは懐中電灯を持ち替えて、背中の器具からノズルを外した。先端をワームに向け、トリガーを引くと、鑓の穂先状の蒼い炎が伸びて、たちまちワームを貫いた。

貫く場所をあやまてば、一メートル四方に体液を飛び散らせることになる。が、ギッ、という断末魔とともに、ゴクツブシは油で揚げたように跳ね上がり、引っくり返ったままぴくぴくと痙攣するばかり。もう一度、今度は弁を緩めて炎を浴びせれば、めらめらと燃え上がり、跡には虫の形をした黒い灰だけが残った。

もちろん、あまり気持ちのいい仕事ではない。これでまたしばらくの間は、遺伝子解凍した甲殻類が食えなくなる。

五席に二匹という、驚くべき確立で、ゴクツブシは潜んでいた。そのうえどいつもこいつも丸々と肥えていた。いったいこんな所で、何を食ってこんなに太ったのやら。とりあえず考えないようにしながら、黙々と作業をこなした。一人の客にわけを話して立ってもらえば、その下にもいた。ゴクツブシが燃え尽きるのを見届けたあと、かれは無言で映画館を出た。

33（3）

念のため二周したあと、映写機のもとに戻った。キノ氏は大きなポップコーンの袋を片手に、相変わらず缶ビールを飲んでいた。

「とりあえず、二十三匹処分しました。異常発生ですよ。一度ここを閉めきって、バルーム酸で徹底的に消毒なさることをお勧めしますね」

館内には異臭がたちこめ、さすがに客は一人もいなくなっていた。こんなことなら、最初から灯りをつけろという話である。

「また出てきますかな」

「さあ。成虫はすべて焼き払ったと思いますが。いったいどこから湧いてきたのか、それが気になります。ひょっとして、古い下水管を使われていたりしませんか」

よくあるケースだ。下水管は比較的浅い所を通っているし、埋め立てられないまま見過ごされているマンホールが、まだ多く残っていた。その中へ汚水をどんどん流し込めば、地上の管と違って維持費がかからず、格段に安上がりだ。ただし、古い菅はワームの通路でもあるという、諸刃の剣。まるごとワームに乗っ取られた建物を、何十棟も目にしてきた。

「そのような事実はありませんし、皆目見当がつきませんな。とりあえず、お掛けになってはいかが？」

パイプ椅子に腰をおろし、キノ氏にことわって煙草に火をつけた。煙を吐くと同時に、どっと疲労感にひたされた。思えば二時間近く、ずっと小腰を屈めてうろうろしていたのだから、無理もない。もう若くない証拠でもあるけれど。

奇怪な異星人の出てくる映画はとっくに終わっていた。スクリーンでは、ベラスケスの絵から抜け出したような少女が、延々と縄跳びをしていた。体つきは十歳くらいなのに、アップになった顔を見れば、三十路はとっくに過ぎている様子。リボンだらけの髪。白塗

りの顔に、真紅の唇。異国の言葉で、跳んだ数を延々と数え続けているのだ。

（……トレントゥーノ、トレンタドゥーエ、トレンタトーレ、トレンタクワットロ、トレンタチンクエ、トレンタセーイ……）

頭がおかしくなりそうなので、おれは目を逸らした。くしゃりと、キノ氏はポップコーンの袋に手をつっこんだ。

「お気に召しませんか」

「自分にはどうも、難しすぎるようです」

「所詮映画ですよ。わたくしの趣味でね、いかがわしいものしか上映しません。ありきたりのポルノを観に来たお客は、がっかりなさるでしょうが。持論を述べれば、セックス映画は少しも猥雑ではない。むしろ、最も健康的、かつ現実的な類いのものでしょう。そしてわたくし自身、健康的、かつ現実的な映画には、まったく興味がない」

おれはちらりと画面に目を遣り、まだ縄跳びが続いているのを確認して、密かに溜め息をついた。

「つまり、病的な映画にしかご興味がない、と」

「そうなりますかな。病んだ映像であればそれだけ夢に近づきます。そして夢とは元来、猥雑であるべきものです。わたくしはここに座って延々と夢を見続けます。眠っては夢見、醒めてまた夢を見るのです。これは復讐なんですよ」

「何に対する？」

「言うまでもないでしょう」

キノ氏は大量のポップコーンを口に放りこみ、ニヤリと笑った。業務報告書に署名をもらって、おれは席を立った。出口へ向かいながら、ここにゴクツブシが異常発生した理由が、おぼろげながらわかる気がした。地下へも通じておらず、餌が豊富なわけでもないのに、なぜワームが殖えたのか……やつらは闇から湧いたのではあるまいか。

闇そのものから湧いて、夢の残滓を食らっていたのではあるまい

か。

（……ノヴァンタクワットロ、ノヴァンタチンクエ、ノヴァンタセーイ、ノヴァンタセッテ、ノヴァントット、ノヴァンタノーヴェ……）

鉄扉を閉めて映画館を出た。外はすっかり暗くなっていた。ようやく悪夢から逃れた思いで、大きく伸びをした。雲の間をふらふらと横切る人工衛星が見えた。足もとで、猫が鳴いた。

驚いて見下ろしたが、近くにろくな灯りがないため、辺りにはべったりと闇が貼りついていた。目を凝らすと、地面すれすれに小さな緑色の光がふたつ、蛍火のように浮いていた。黒猫の目玉に違いなかった。

「プルートゥ、なのか？」

問いに答えるように小さく鳴いて、猫は身をひるがえしたらしい。もしプルートゥなら、当然、近くにアリーシャがいるとおぼしい。なぜかおれになついているこの猫は、においでも嗅ぎつけて、主人のもとから、ひとっ走り寄ってきたのかもしれない。が、なぜ悪名高い親孝行横丁なんかに、彼女が来ているのだろう。

黒猫亭のある界隈から、距離的にはさほど離れていないが、心理的な距離というものがある。たしかに娼婦になるイーズラック人は多いけれど、彼女は占いで充分、身を立てられる筈。そもそもこの界隈は、いかにも地域人の結束が固そうで、よそ者の業者を締め出そうとする雰囲気が濃厚なのは、ここへ来たときの街娼の態度からも歴然としている。

キノ氏のような人物は、例外中の例外と思われる。

34（1）

34

目の前で黒猫が一振りの長大な剣に変化した光景を、忘れたわけではない。夢でも幻影でもない証拠に、一彦もまたそれを見たと証言した。おれたちの目撃談は完全に一致した。あれはいったい何だったのか、当然おれは一彦に尋ねた。物理的な法則を、完全に超えているではないか、と。

物理的に説明のつかない現象は、魔術にほかならないのではないか。

一彦は言う。

（例えばぼくたちは経験的に、鉄を堅牢な物質と考えています。鉄壁の防御、などと例えます。けれども、ちょっと熱を加えるだけで、この堅牢な物質は簡単に形を変えます。熱膨張なんか顕著な例でしょう）

（なるほど、こんな硬いものが、熱によってぐにゃぐにゃと形を変えて、剣にもなれば、フライパンにもなる。昔の人は、それこそ魔術を見る思いがしただろうな）

（実際に製鉄は、神の技とみなされたようですね。さらに突き詰めれば、あらゆる物質は震える原子から成ります。どんなにぶ厚い鉄の板も、原子、さらには素粒子の集合体に過ぎません。思うに、強力な磁場の中で、猫という集合体が一旦ばらばらに解体され、剣という集合体に再構築されたのではないか。と、今はそれくらいのことしかわかりません。あたかも……）

カード占いのように。

運命が時には猫となり、時には剣と化すように。

（ならば、あの黒猫は機械なのか？　実際に触れてみた限りでは、柔らかかったし体温もあった。眼が奇妙な光りかたをするとは思っ

たが、とくに変わった要素は見当たらなかった）

（例えばアマリリスさんは、柔らかいし体温もあるでしょう）

（……）

（そういうことではないでしょうか）

アリーシャの持つカードが鍵になっているのは確実である。彼女は「剣」のカードを一枚抜き取り、プルートゥの首輪の上を滑らせた。剣が描かれているほうを、ほぼ水平に接触させた。首輪の模様を指して「読みとり機」のようだと言った、一彦の直感は当たっていたことになる。

では、ほかのカードを接触させれば、プルートゥはまた異なる変貌を遂げるのだろうか。例えば、黒猫亭でちんぴらたちを激怒させたカードの絵柄が、双頭のドラゴンだった。もしあのカードを赤い首輪に読み込ませれば、プルートゥはどんな姿をあらわし、どれほどの破壊力をふるうのだろう。

あの生ける屍を、弾丸も電気カッターも通用しなかった怪物を、それは一刀両断にした。たちまち焼き尽くした。ある意味それはアマリリスの左手を……すなわち、イミテーションボディを連想させずにはいられなかった。

パイプだらけの壁の間を猫は走り、路地を抜けた。がちゃがちゃと背中の器具を鳴らしながら、おれは小走りに追いかけた。漆黒の小動物は、眼玉が緑色の光を放たなければ、影と区別がつかない。鼓動は徐々にボリュームを上げてゆく。プリミティブな打楽器のように、不穏なリズムでおれの胸を叩く。走っているせいばかりではない。それは不吉な予言と化して、何事かを囁き続ける。イーズラック語なのか。さらに古くて根源的な言語なのか、わからないけれど。

通りの空気は、ぴりぴりと神経を掻き毟るような緊張をはらんでいた。闇に乗じて取り引きされる、欲望と快楽がかもす空気とは、明らかに異質な……やがて血の色をした回転灯が闇を薙ぎ、まとも

におれの目を射た。ポリスカーに改造された背の高い装甲車が、何台も停まっていた。捕り物だ。

野次馬が通りを塞いでいた。猫の姿はとっくに見失っていた。ただ不穏なリズムに導かれるまま、憑かれたように人垣を掻き分けた。娼婦のきつい香水のにおいや、怒号を遠くに感じながら、最前列に割り込んだ。

（よほどの兇悪犯か……？）

四台の装甲車が、通りの両側を塞いでいる。その前に陣取って、武器をかまえた十数名の武装警官が包囲しているのは、たった一人の男である。最初、ぶかぶかの赤い服を着ているのかと思ったが、鮮血に染まっていることがすぐに知れた。もとはコックコートであったらしく、丈の高い帽子にもまた、血の斑紋が、まがまがしい模様のように飛び散っていた。

見世物レスラーのように体格のいい男だ。極端な猫背で、両腕をだらりと垂らし、痙攣的に肩を揺らしていた。不自然な角度でねじ曲がった首。どろりと白濁した眼。歯を剥いて、奇怪な薄笑いを浮かべた口の端から舌を垂らし、腐ったような粘液を吐き続けていた。右手の先で銀色に光るのは、肉切り包丁のようだ。

（襲ってきた時点で、あの男はすでに死んでいた可能性が高いらしいの）

おれは否応なしに、あの麻薬中毒者を連想せずにはいられなかった。

34（2）

「撃て！」

号令とともに、前後の武装警官が一斉に発砲した。強烈な電流を浴びたように、地面から数センチ浮いた状態で、血染めのコックの全身が踊った。無数の穴からどろりと吐き出された血は、粘り気があって赤黒かった。

弾が撃ち尽くされた。それでもコックは倒れず、うなだれた姿勢で動きを止めた。立ち往生したのか。警官たちが前進しようとしたとき、いきなり男の肩が震え、丈の高い帽子ごと頭が持ち上げられた。男は笑っていた。ぐうと両棲類めいた唸り声を発しながら、膨れあがった舌を、歯の間から垂らして。

指揮官らしい男が、また何か叫んだ。カヲリのような軽装ではなく、かれもまたガスマスクを被った完全武装である。装甲車の間から三つの人影が進み出た。重々しいシルエット。ぎくしゃくとした動き。最初、チャペックのように見えたが、装甲服をまとった警官であるらしい。かれらのバックパックから、太いパイプが車の中まで伸びていた。

「まずいな……あの程度の武装では」

我知らずつぶやいた。麻薬中毒の男と実際に組み合った実感から、あまりに心もとない気がしたのだ。

「やはりそう思うか」

まさか言葉を返されるとは思わなかったので、驚いて目を向けた。野次馬に混じって、黒ずくめの女が腕を組んでいた。極端なショートヘアだが、女性らしさを失わない、ぎりぎりのラインは保っている。サングラスの下で、赤い唇が月の形に歪む。私服の彼女を見るのは初めてだが、何者であるか、考えるまでもなかった。

「やつは無能だ。部下を捨て駒くらいにしか考えていない、冷酷な臆病者だ」

前方に目を向けたまま、吐き捨てるようにそう言った。あの指揮官を評したのだろう。装甲服の三名は、じわじわと前進しながら、ジュラルミンの盾を片手に、黒い警棒を構えた。といっても、通常の警棒の五倍はあり、バックパックとパイプで繋がっている。急襲すれば、小型の戦車くらい破壊できるシロモノである。

狂気の笑いを浮かべたまま、コックが跳んだ。ガラスにへばりついたヤモリのような姿勢で一回転し、左端の装甲服の上に降ってきた。警官の全身を怯えと驚きが貫くさまが、はっきりと見えた。それでもよく訓練された動作で、コックを警棒で叩き落とした。たちまちべちゃりと、コックは地面に這いつくばった。その姿勢がまたヤモリのようなのだ。

ぶぅーんと電圧がかかる音とともに、さらに警棒が振り下ろされた。同時にコックはバネ仕掛けのように跳ね上がった。「く」の字にへし折られた警棒が、くるくると宙を舞った。警官は後ろに数歩よろめき、どすんと尻餅をついた。すかさずコックが飛びつき、逆手に肉切り包丁を持った右手を、高々と振り上げた。火花が飛び散り、金属の焼ける臭いがした。

装甲車の中のスピーカーから、この警官のものらしい絶叫がほとばしった。

「どうなっている？　なぜあんなもので、装甲服を切り裂けるんだ？」

「知るものか。ひとつだけはっきりしているのは、即座に退却しなければ、隊が全滅することだけだ」

いまいましげに、カヲリは唇を震わせた。

助けに入ろうとした体勢のまま、残り二名の装甲服は凍りついていた。機械油とも血ともつかないものでどろどろになった顔をコックが上げたとき、二人とも完全なパニックに陥り、腕を振り回しながら逃げ出した。が、中世の重い鎧を着ているよりもなお、その足は遅い。しかもバックパックから、パイプを切り離すことさえ忘れているのだ。

銃撃の音が響きわたる中、なだれをうって逃げ始めた野次馬に逆らって、カヲリが不意に駆け出した。指揮官のもとへ一直線に走り寄り、飛びかかるようにして叫んだ。

「援護射撃をやめさせろ！　一般人がいるのが見えないか！」

たちこめる硝煙。交叉するサーチライトの光が二つの輪を描き、死のような沈黙に震えていた。一つの輪は、当然、血染めのコックを捉えたまま。ぶすぶすと煙を吹き、血膿をしたたらせながら、うなだれたような姿勢で立ち尽くしていた。もう一つの輪は、横転した三輪トラックの上にあった。幻灯のように、その上にたたずむ人影を映し出した。

おれはオキシジェン・テントで上映されていた、奇妙な映画の続きを観る思いがした。微風になびく長い髪。ふぅわりとワンピースに包まれた、少女らしいシルエット。作りもののように細い踝のかたわらには、しゃんと尻尾を立てた影ような猫……

猫の緑色の瞳から、小さな火花が散った。

「アリーシャ！」

血染めのコックは獲物を追うのをあきらめ、彼女の方へ向き直った。ぐるぐると唸り、でこぼこに変形した肉切り包丁を握ったまま、バネをたわめるように四つん這いになった。

いつのまにか、彼女の背後には月が出ていた。以前見たときよりも欠けていたが、スモッグに拡大されて、彼女の影をすっぽりと包み込んでいた。踊るように、あるいは未知の楽器を奏でるように、彼女は月の中でカードを繰った。細い指がひるがえると、束ねられたカードの中から、一枚を抜き出し、頭上にかざした。

（カラスの聖杯）

まるで月から降ってきたような、澄んだ声が響いた。

34（3）

この位置からでは、もちろん絵柄は確認できない。タロットカード同様、剣や聖杯の出る確率が高いのかもしれない。

アリーシャは片膝をついて、そっと猫の背を撫でるように、首輪の上にカードを滑らせた。赤い光がひらめき、緑色の火花が散った。猫の体が細かい粒子に分解されたところまでは、前に見たとおりだが、きらめきながら螺旋を描き、粒子がアリーシャの体に纏わりつく情景は初めて目にした。

翼の音が高々と響いた。彼女の背に、漆黒の翼が広がっていた。巨大な、カラスの羽だ。

血染めのコックは怒り狂ったように呻くと、装甲服が捨てていった警棒を拾い、彼女に向かって突進した。前回の麻薬中毒者と比べて、破壊力の違いは歴然としていた。コックは走りながら警棒を振り上げ、憎悪をこめて振り下ろした。轟音とともに、三輪トラックはまっぷたつに粉砕された。

黒い天使のように、アリーシャは宙を舞った。まるで死を予言するかのように、無数の黒い羽根が男の上に降りそそいだ。彼女は大きな金細工の聖杯を手にしていた。中空でホバーリングしながら、それを振った。大きな金の鈴を振りながら、踊るようにも見えた。真っ青に輝く液体があふれ、死神の大鎌と化して、空からコックを急襲した。

男の右肩を含む上半身が切り離された。ひとたび左手で宙を掻き、残った体は仰けざまに倒れた。人蝋のように、またしてもそれらは燃え上がり、二つの火柱と化した。

彼女が着地すると、翼と聖杯は粒子に解体され、彼女の腕の中で一匹の猫の姿に戻った。おれは反射的に叫んだ。

「アリーシャ、逃げろ！」

すでに彼女は、猫を抱いた一人の少女と変わらない。コックを攻

撃していた一隊はすでに機能を停止していたが、カヲリは決して見逃さなかった。

「少し話を聞く必要があるかもしれない。面白い武器を持っているようだが、この距離だ。弾丸を止められる念動能力者でもない限り、わたしの指示に従ったほうが賢明だということは、理解していただきたい」

背に銃口をあてられたまま、彼女はわずかにうなずいたようだ。身をかがめて猫をそっと降ろし、両手を上げた。カヲリの背後から二人の武装警官が進み出て、アリーシャの腕を両側からとらえた。どこに身を潜めていたのか知らないが、いつぞや、おれの部屋に踏み込んできた、彼女の直属の部下とおぼしい。

アリーシャは腕を後ろに回され、三重の枷を嵌められた。強化人間をとらえるための手錠だ。ロックされる音が響き、アリーシャは小さく呻いて、眉根を寄せた。アマリリスなら簡単に引きちぎるだろうが、彼女自身はあくまで生身だ。プルートゥを用いない限り、戦闘力はゼロに等しい。

しかし、カヲリがプルートゥを見逃したということは、「魔術」のカラクリに気づいていない可能性が強い。不法ギルドの連中に絡まれた時と違い、猫は武装警官を攻撃しようとはせず、拘束された主人をおとなしく見上げていた。ゆっくりと、カヲリが近づいてきた。

「一応、殺人の現行犯ということになる」

「正当防衛だろう。無能な警察の代わりに、体を張って被害を食い止めたのは、彼女じゃないか。それとも、善良な市民に強化人間用の手錠をかけるのが、刷新のやりかたなのか」

「市民に蛇蝎のように嫌われるのもまた、国家権力の役目さ。ところで貴様は、あの女とは知り合いのようだが」

お得意の道化師のポーズで答えた。彼女は赤い唇を歪めて微笑んだ。銃口を向けたまま、ぐっと体を寄せ、耳朶に触れるほど唇を近づけて囁いた。

「どっち道、貴様には話があったのだ。連行させてもらうぞ」
「任意同行じゃないのか？」
「公務執行妨害の現行犯だ。お望みなら、銃刀法違反と擾乱罪を加えてもいい」
罪状というものは、向こうがその気になれば、いくらでも付け加えられる。そもそも、罪を犯さずに生きられる人間なんて、一人もいやしない。再び道化師と化したおれの腕を、舞踏に誘うには少々乱暴な手つきでカヲリはとらえ、音を鳴らして手錠をかけた。残念ながら、こちらは強化人間用ではなかったが。
間もなく小型の装甲車が横付けされ、おれとアリーシャは後部座席に押し籠められた。二人のガスマスクが両側を占めた。三人めのガスマスクが運転席に座っており、カヲリはというと、いつぞやの黒い大型バイクに乗り込むさまが見えた。彼女の先導で、車が走り出した。もはやプルートゥは、どこにいるかわからない。
アリーシャは手枷のほかに、三つの金属の輪で体を固定され、銀色のマスクで口を塞がれていた。片方の肩が剥きだしになったさまが痛々しい。おれと彼女の間は、透明な板でなかば仕切られていた。それでも彼女が身じろぎするたびに、薔薇の香りが匂い立つようだ。
「苦しくないか？」
小声で囁くと、彼女は目顔でうなずいた。たちまち隣のガスマスクに銃口で脇腹を小突かれ、おれは肩をすくめた。それにしても、この物々しさは何なのだろう。武装警察の分隊をまるごと壊滅させた、その男を彼女は一瞬で屠ったのだ。当然と言えば当然なのだが、引っかかるものを感じた。やつらはいったい、何をそこまで警戒するのだろう。
（弾丸を止められる念動能力者でもない限り）
郊外の闇を抜けて、装甲車は区の拘置所のゲートを潜った。留置場をすっ飛ばしてここへ直行したところからして、ＶＩＰ的扱いと言えた。

35（1）

35

窓のない部屋に拘留されて四日が過ぎた。

広さは八スペースほどか。鉄格子に面しておらず、軟質素材の白い壁で四方を囲まれていた。ユニット式のバス・トイレが別についており、ベッドは独りで寝るには広すぎるほど。机と椅子はもちろんのこと、本棚があり、ソファまである。室内はそれなりに清潔で、窓のないことを除けば、おれが住むボロマンションより、よほど快適なくらいだ。

飯は三度三度、食わせてくれる。俗にいう「臭い飯」ではなく、仕出し弁当ほどには旨い。しかし何よりありがたかったのは、煙草が自由に吸えることだ。こいつさえあれば、あとは水とイワシの頭でも生きていける。

警察の宿の世話になった経験なら再三あるけれど、ここまでのＶＩＰ待遇は初めてだ。逮捕したものの、ぞんざいには扱えない囚人を入れておく部屋なのかもしれない。しかしそういった人物は、ほとんど顔の売れた有名人であって、おれみたいな闇商人は、手っ取り早く、「豚箱」にでも押し籠めておけばよさそうなものだが。

四日の間、アリーシャはおろか、カヲリともまったく接触できていない。拘置所に連れて来られるとすぐ、おれはガスマスクに目隠しされ、この部屋に閉じ籠められて、それっきり完全に隔離された。ここにいる限り、外部のもの音さえまったく聞こえない。むろん、脱走など望むべくもなかった。

食事の盆は、ドアの下部にある数センチの隙間から差し入れられた。肌着が二揃い用意されていたので、洗いながら使い回せばいい。二挺の銃と害虫駆除の器具と発信機、および社名の入ったツナギは取り上げられていた。シーツには野戦用の抗菌布が使われているら

しく、ほとんど汚れない。床の埃はある程度自動的に吸い取られる。
　要するに、四日の間、一度も部屋のドアは開けられていないのだ。唯一、運ばれてくる食事だけで外界と繋がっていると言えた。どんなやつが運んでくるのか、指一本見えないし、話しかけたところで、もちろんノーリプライ。この隙間からでは、猫も入れまい。
　なんとか脱走できないものか、自分なりに考えてみたし、調べもしたが、お手上げの状態。隙だらけのようで隙がない。柔らかい壁は殴っても蹴っても、衝撃を吸収するばかり。逆にドアは、地獄の門のように頑丈である。
（この門を潜る者はいっさいの望みを捨てよ、か）
　おれの不審な行動は当然、逐一監視カメラに撮られている筈。なのにどんなに暴れてもまったく警告されないのは、檻の中の猿と同じ扱いである。カメラ越しにカヲリを挑発することも考えた。依頼の件は彼女の弱みでもあるのだが、うまくしたもので、アリーシャを人質にとられている以上、下手なことは言えない。
　今頃アリーシャがどんな仕打ちを受けているのか、それは考えないようにした。ここから出られない以上、考えるだけ無駄だから。カヲリが仕切っているからには、非人道的な拷問には及ばないという期待もあった。むろん、あのカフカ鳥のような女を信用するつもりはないが、少なくとも、スマートさに欠けることはやらないタイプと見ていた。
　逆に言えば、スマートな拷問ならやりかねないことになるが。
（この電極は、ずいぶん神経に響くだろうね）
　赤い唇が歪む。指一本動かせないまま、アリーシャの目が見開かれる……おれはソファに身を沈め、妄想とともに煙を吐いた。朝食時に一箱ずつ支給されていたので、節約すればまず一日はもつ。考えまいと思うことを考えずに済めば、それだけで、この世界はずいぶん住みやすくなるだろう。人は想像力によって苦しめられる。
　古風な本棚には隙間なく本が詰まっていた。どうせ俳句か教育原理学の本だろうと思えば、韓非子、マキャベリ、ヒットラー、ゲバ

ラ、マルクスなどの著作が並んでいて、思わずのけぞった。なるほど、ここに閉じ籠められるのは政治犯が多いのだろう。退屈責めの挙句、どの本を熱心に読み出すか、チェックするというわけか。

腰を落ち着けて読書する心境でもなかったが、かといって、ほかにすることもない。政治的な主義主張もとくにない、大日本おっぱい党員に過ぎないおれは、古典は敬遠しつつ、昨今の過激派について書かれた本を何冊か引っこ抜いた。

中でも『武装国家』という本を面白く読んだ。第二次百年戦争を引き起こしたといわれる、イズラウンの研究書だ。

この国に関しては、あまりにも謎が多い。無理に語ろうとすれば、歴史という学問的分野を踏み越えて、オカルトの領域に片足を突っ込んでしまう。イズラウンは徹底的な秘密主義を貫き、戦時中もひたすら暗躍した。いくつかの言語道断な兵器の開発にたずさわり、イミテーションボディによって滅ぼされた。

イズラウンが何者によって支配されていたのか、それすら諸説入り混じり、はっきりとわかっていない。宗教的指導者たちによる合議制だったことが、わずかに知られている。そしてこの本の著者によれば、現在のツァラトゥストラ教こそ、イズラウンを支配していた謎の宗教の末裔だというのだ。

おれは眉に唾をつけたい衝動に駆られた。それがどんなものかは知らないが、明らかに「神」を信仰していたイズラウン人と、神の存在を否定するツァラトゥストラ教との接点が見出せない。別モノに思える。半信半疑でページをめくると、こんな謎めいた一節が目に飛び込んできた。

……イズラウンの最も秘された神殿において、イミテーションボディは誕生した。その生成の秘密は、第一の試験体ＩＢとともに、ツァラトゥストラ教団に受け継がれたのである。……

35（2）

（まるでオカルトだ）

第一の試験体ＩＢについて語れば、なおさらそれに近づく。俗に「バルブ」と呼ばれるこの伝説のＩＢは、神秘主義的なベールを幾重もまとって、巷間に語り継がれてきた。この本に書かれているのも、そんな巷説のひとつに過ぎまい。

『武装国家』の著者によれば、もともとバルブは、殺戮兵器として生み出されたものではなかったという。教団の最高指導者たちによって取り出された、「神の一部」なのだという。ところが、指導者の一人に「悪魔に憑かれた者」がおり、おのれの権力欲を満たすためにバルブを複製した。これが後に人類を滅亡寸前まで追い込んだ、イミテーションボディにほかならない。

オリジナルのバルブの行方は、杳として知れない。この著者は、ツァラトゥストラ教団こそバルブの継承者だと主張するが、それが「物理的に」継承されたのか、それともあくまで精神的に受け継がれたのか、わざと明記していない。

宗教の常として、ツァラトゥストラ教にも諸派がある。諸派どうしが、おのれこそ正統だと主張し、対立している。穏健派もあれば、例のジークムント旅団のようにテロリスト化した過激派も存在する。ただ根幹の部分で共通しているのが「超人」待望の思想であり、著者によれば、それこそがバルブだというのである。

何らかの方法で地上に取り出された「神の一部」こそが、かれらが待望する「超人」にあたるというわけだ。

（やれやれだぜ）

少々頭痛を覚えて、おれは本から目をはなし、背もたれに身を沈めた。短くなった煙草をさらに深々と吸い、溜め息とともに吐き出した。渦を巻く紫煙の中に、アマリリスの面影を見る思いがした。

もしもこの本の説が正しければ、イミテーションボディとは、バ

ルブのコピーにほかならない。ただし、コピーする段階で夾雑物、あるいは邪念が混じったため、ひたすら人類への憎悪に突き動かされた恐るべき殺戮兵器が生み出されてしまった……となると、鏡像の鏡像はオリジナルということにならないか？

（そうですね……ちょうどアルファベットのAを逆さにしたような）

黄金色のカプセルを発見した経緯を語る、一朗だか一彦だかの声を頭から追い払いつつ、もはや指で挟んでいるのが耐えがたくなった煙草を揉み消した。ドアのほうで音がしたのは、そのときだ。

食事の時間にはまだ早い。となると、ドアが開けられようとしているに違いない。ごく小さな音だったが、いつかこの瞬間が来ることを待ち構えていたおれの耳には、千人のオーケストラが掻き鳴らす『運命』の第一楽章に聞こえた。背もたれを乗り越え、素早く、かつ音をたてずに、ドアの横に貼りついた。

当然、このての扉は内側に開く。看守の側からすれば、破りやすい反面、致命的な死角が生じる。息を潜めて待っていると、予期したとおり金具の外れる音がして、地獄の門は開いた。一人がやっと通れるくらいの隙間を作った。すかさずおれは死角から飛び出した。体をたわめ、看守に一発お見舞いしようと身構えて、そのまま凍りついた。

目の前で、つぶらな目が瞬きをするさまが、いやにゆっくりと感じられた。

「……アリーシャ？」

背後から突き飛ばされたらしく、彼女は数歩よろめいた。体がぶつかったところで、反射的に抱きとめた。薔薇の香りと、しっとりとした重み。面食らっている間にドアは閉まり、ロックされる音が重々しく響いた。どうやらおれの思惑は、しっかり読まれていたらしい。

アリーシャは依然、後ろ手に強化人間用の手錠で拘束されていた。四日前と同じ、黒いワンピース姿で、多少憔悴しているが、一瞥した限りでは、傷ついているようには見えない。間もなく手錠から電

子音が聞こえ、ロックの外れる音がした。後ろに回って力を加えると、容易にそれは外れた。タイマーで鍵が外れる仕組みらしい。

「だいじょうぶか？　ケガは？」

彼女は首を振った。さらさらと髪が揺れた。自身で手首をさするために腕をまくると、滑らかな褐色の肌に、締め付けられた跡が赤く浮いていた。

「でも少し疲れました。シャワーを浴びてもいいですか」

「それは構わないが……」

かすかに微笑むと、アリーシャは首飾りを外すような動作で、背中に手を回した。そのまま一番上のボタンを外し、次に腕を下から回すと、無数のボタンを上から器用に外していった。ふっさりと、ワンピースが床に落ちるまで、おれはただ呆然と眺めていた。

ずっとアマリリスに似ているように感じてきたが、黒い下着だけを残した彼女の裸身は、成熟した女性らしいラインを描いていた。背にかかる漆黒の髪は艶やかで、腰は妖しくくびれ、充実した臀部を引き立てつつ、舞踏家らしい、見事な脚の線へと続いた。圧倒的な薔薇の香りが、めまいを覚えるほどたちこめた。

「できれば、後ろを向いていてもらえますか。下着を脱ぎたいのです」

「あ、ああ。すまなかった」

35（3）

ようやく混乱がおさまる頃には、シャワーの音が聞こえてきた。温かい雨のように、その音は心に染みた。すっかり感電したようになったまま、どさりとソファに腰をおろした。実際に、指先がまだぴりぴりするようだから、ある種の電流を本当に浴びたのかもしれない。

煙草に火をつけて、垂直にたちのぼる煙をぼんやりと眺め、それから入り口のほうへ目を向けた。アリーシャを押し込んだきり、依然、ドアは閉ざされたまま。床には強化人間用の手錠が、グロテスクなワームの屍骸のように転がっていた。

おれは眉をひそめ、ぼんやりと天上を見上げると、また温かい雨の音に耳をかたむけた。褐色の肌の上を、水がなめらかに伝うさまが浮かぶようだ。が、しかし、

（カヲリは何を考えている？）

「話がある」から、おれを連行したのではなかったのか。この部屋に放置したきり、四日の間、一度も姿をあらわさなかった挙句、今度はアリーシャと二人きりで閉じ籠めておくつもりか。

カヲリがアリーシャにどんな訊問を行ったのか、今のところわからない。後ろから見た限り、目立つ傷は確認できなかったが、拷問されていないとは言いきれまい。彼女がどこまで話したかにもよるが、次におれとの会話を盗聴して、新たな事実を引き出そうとしているのは明白だろう。

頭を掻きむしり、たて続けに煙を吐いた。とにかく謎だらけで、何から考えるべきか、皆目見当がつかない。浴室に目を向けると、磨りガラスに彼女の裸身が、夢のようにぼんやりと浮かんでいた。

「アリーシャ、ちょっと質問していいか」

「はい」

「きみを取り調べていたのは、カヲリ……あのサングラスをかけて

いた女か。まあ、一人ではないと思うが、その女が常に指揮をとっていたのだろうか」

「そのようです」

彼女の声の調子は、どこかフォックス教の巫女をおもわせた。巫女たちは死者の霊魂を自身の体に乗り移らせ、死者の言葉を語る。トリックかどうか問うつもりはないが、そのとき彼女たちの声にはエコーがかかり、遠くで響いているように聞こえるのだ。

ともあれ、おれたちがまだカヲリの監視下にあることは、先に確かめておく必要があった。担当が替わっていたのでは、話がややこしくなる。いや、通常なら上司に引き渡すのが筋だろう。この部屋を勝手に使うだけでも、一武装警官の権限を明らかに越えている。となると、彼女は上に強力なコネクションを持っているのだろうか。

竜門寺家に連なる家柄でありながら、血族とは距離を置いて栄えた大富豪の娘。クーデターの混乱の中で姿を消したあと、新政権の武装警官として、突如姿をあらわした……彼女もまた、あまりに謎が多い。

いつのまにか、雨の音は止んでいた。ドアが開き、薔薇の香りのする湯気があふれた。おれは慌てて目を逸らした。

「腹は減ってないか。といっても、何もおもてなしできないが。あと二時間も待てば飯が配達されるだろう」

声が上ずっている。我ながらくだらない質問だと思いつつ、子供じみた照れ隠しをしてしまう。思えば、同棲期間も含めて妻と暮らしていたのは、ほんの二年足らずであり、それ以外は基本的に女気のない人生を送ってきた。アマリリスは論外として、裸の女と一つの部屋にいるなど、非常事態にほかならぬ。少し間を置いて、彼女は答えた。

「お腹は空いていません。でも食事は楽しみです」

ふぅわりと、微笑むさまが見えるようだ。訛りのあるアクセントが、妖しく耳をくすぐる。そういえば、アマリリスもちょっとアクセントがおかしいのだ。二人の声の質は、どこか似ているようだ。

「念のため先に言っておくが、この部屋は監視されている。カメラが仕掛けられているし、当然、おれたちの会話は筒抜けだ。警察に聞かれたくないことは、うかつに喋らないほうがいい」
「わかりました、マスター」
「えっ」
思わず振り向いた。下着を身につけただけの、裸の背中がそこにあった。濡れた髪。肌はしっとりと潤って、内側から光を放つようだ。けれどおれが目を見張ったのは、その肌の上にあらわれた、いくつもの赤い線に対してだ。あるものは短く、あるものは長く、あらゆる方向に背中を這いまわっていた。
入浴する前にはまったく気づかなかった痕だ。湯を浴びて、肌が熱を帯びることにより、浮き出たものに違いない。それも昨今ついた痕ではなく、何年も前に刻印されたものと思われた。アリーシャは恥じ入るように身をかがめた。
「ごめんなさい。かつてそう呼んでいた方の声と、とてもよく似ていたもので」
「そいつはきみを、ずいぶん痛いめにあわせたんじゃないか」
彼女が小さくうなずくのを確認して、おれは唇を噛んだ。

36（1）

36

服を身につけたあと、彼女はさっきまでおれが読んでいた本を、指先でぱらぱらとめくっていた。何を話せばよいのかわからないまま、おれはぼんやりと煙草をふかしていた。いよいよ本日最後の一本になるが、火をつけずにはいられなかった。

「カードを」

思い出したようにつぶやいた。アリーシャは顔を上げて小首をかしげた。

「はい？」

「返してもらったのか。あれはその……大事な商売道具だろう」

微妙な表情で、盗聴されているのだと念を押した。彼女は微笑んで、ワンピースの腰の辺りに手を添えた。布地が厚くなっている部分が折り返され、例の不思議なカードがワンデッキ、掌の上に落ちた。ちょっとしたホルスターといったところか。

やはり、カヲリはカードの秘密に気づいていないようだ。たまたま見なかったのか、位置によるものか。いずれにせよ、もし目撃していれば、すんなりと返したりするまい。しかるべき機関に送られ、時間をかけて解析を試みるだろう。同様に、プルートゥの「変化」にも気づかなかった様子だが……

（もしかして計算に入れていたのか？）

おれは弾かれたように立ち上がった。不法ギルドの男を倒した時と違い、プルートゥを自身の体に纏う形をとったのは、「読み取り機」のカラクリを第三者の目からくらませるための策略ではなかったか。

そう大声で質問しそうになり、慌てて言葉を呑みこんだ。微笑を浮かべたまま、アリーシャはかすかにうなずいた。慣れた手つきで、

カードをカットしながら言う。
「例えばここから一枚抜き出したとします。それが何のカードか、もちろん見るまではわかりません」
心を読まれたとしか思えないほど、絶妙な答えだ。しかも動作とあいまって、監視者の目にも不自然に映るまい。どうやら「カラスの聖杯」のカードは偶然に引かれたものらしい。
「偶然は存在しない、と、わたしたち占者は考えています。問いかければ、カードはしかるべき答えを与えてくれます。本来は必ずしもカードである必要はないのです。例えば空に問いかければ、必ず何らかのカタチがあらわれるのですけれど、読みとるのは至難の技です。カードの中には、この世界で起こる全ての現象が、象徴として網羅されています」
カードを切りながら、訥々と話す声を聞いていると、気持ちが安らぐようだ。話の内容は、なかなかラディカルなものがあるが。
「するときみは、例えばおれが一生の間にどんなことをして、どんな死に方をするか、生れた時から決まっているというのかい」
「あるいはそうかもしれません」
「しかし陳腐な言い回しだが、人生は選択の集積じゃないか。右へ行くべきか左へ曲がるべきか。何の気なしに左を選んだばっかりに、人生がガラリと変わってしまう場合だってある。それもまた偶然ではなかった、と？」
「おそらくは。ただしカードでは、人間の一生を俯瞰的に見ることは難しいのです」
「得意分野でない？」
「はい。比較的近い未来の限定された出来事であれば、手に取るようにわかるのですが」
彼女は手をとめて、どこか放心したような表情を見せた。唇が半開きになり、うつろな視線があらぬところを彷徨った。
「疲れてるんじゃないか。四日間、みっちり聴取を受けたんだろう」
カヲリに聞かせるつもりで、口調に皮肉を込めた。おそらく彼女

は、アリーシャが本当に強化人間か、もしくはサイキックだと疑ったに違いない。どうも後者を念頭に置いていた感がある。当然「医学的な」検査が徹底的に行われただろうし、その過程で強化人間の疑いは晴れるだろうが、サイキックの検出は極めて困難だ。よって自白に頼るしかなくなる。

過去にはサイキックの被疑者に対する凄惨な拷問の実態を、いろいろと耳にした。首長連合はどういうわけか、かれらを目の敵にしていたフシがある。けれど、最も危険視されていたのはパイロキネシスをもつ不満分子などであり、アリーシャが見せたような、人体そのものを変化させるサイキックなど聞いた試しがない。

カヲリほど聡明な女が、荒唐無稽な妄想を追うとはどうしても考えられない。疑いを抱くからには、必ず何らかの根拠がある筈だ。

「取り調べはすぐに済みました。あとはほとんど、眠っていたようです。一度目を覚ました気がしますが、夢だったのかもしれません。蒼いダイオードの灯りの中で、裸にされて横たわっているようでした。ごぼごぼと何かが泡立つ音が聞こえ、どこかでしきりに意見を言い合っていました。体は少しも動きませんでした」

「そのあと自白を強要されなかったか？」

静かに首を振った。目を覚ますとすぐに、ここへ連れて来られたという。次の質問は監視カメラの手前、口に出すべきかどうか迷ったあげく、率直に切り出した。

「最初に聴取したのはサングラスの女だろう。きみは何を話したんだい」

36（2）

「伝統的な奇術のようなものです、とだけ。事実ですから」

「あとは黙秘を？」

彼女がうなずくのを見て、おれは眉をひそめた。取調室という名の密室では、黙秘権などないに等しいのだ。たいていは、「割り屋」と呼ばれる自白させるための専門家が呼ばれ、精神的に、必要とあらば遠慮会釈なく肉体的に追いつめて、しかるべき調書を取る。善良な老人がいとも簡単に少女連続殺人鬼にまつりあげられる。

けれどカヲリはそれ以上追求せず、ありきたりの職務質問に移ったらしい。

もちろん慈悲深さではなく、いかにも彼女らしい合理主義のあらわれだ。あれほどの力を有するアリーシャが、簡単に自白するわけがない。さっさと「検体」として「鑑識」に回したほうが手っ取り早いし、あとはここに放り込んで、じっくりと間接的に情報を得るのが得策だ、といったところだろう。

「考えてみれば、おれもきみのことを全く知らないし、きみもまた、おれの名前すら知らないんじゃないか」

煙草は燃え尽きかけていた。またソファに座り直し、名残惜しげにそれを揉み消した。アリーシャは手慰みするようにカードを軽くカットし、一枚抜いた。

「時間、に関するお名前でしょう。ご本名ではなさそうですが」

「エイジだ。なるほど、よく当たる」

「自分のことを話すのは苦手です。カードと猫は、祖母から伝えられました。一族の女に代々受け継がれるのです。住所は不定です。信教は一般的なイーズラック人に準じます」

淡々と、歌うように彼女はそう言った。時おり悪戯っぽく天井を見上げる仕草は、カメラはちゃんと意識しているという合図だろう。じつにシンプルな自己紹介だが、もともと人間のプロフィールなん

て、そんなものかもしれないし、おれも根掘り葉掘り尋ねるのは苦手だ。自分が放っておかれたいほうだから。

イーズラック人の故郷は、イズラウンを含む砂漠地帯だと言われる。ただし、かれらのライフスタイルを受け入れ、「イーズラック」を自称しさえすれば仲間と認められるし、血はさほど重んじられない。ひとつ不思議なのは、砂漠地帯の民族とは全く血の繋がりのない、例えばおれみたいな男がイーズラック人の仲間になっても、目の色が変わってくることだ。

比喩ではなく、実際に色素が薄くなり、瞳が白色に近づいてくる。これまで見た中でも、アリーシャの目はことさら美しく、青みがかった白銀だ。

かれらもまた、消滅した武装国家イズラウンとの繋がりが指摘されている。もはや入手は不可能と言われていた重炉心弾が、イーズラック人によって、駅で無造作に売られていたように。イズラウンで失われた技術の一部が継承されているらしいのだ。ということは、「猫とカード」もまた、そこにルーツを求められるのではあるまいか。

『武装国家』によれば、ＩＢの失われた製造技術をツァラトゥストラ教徒が密かに受け継いだという。かれらとはまた別のルートで、イーズラック人たちはほとんど無意識に、禁断の技術を集団の内に温存しているといえる。ちょうどばらばらになったカードの一部を、ただ絵柄の美しさに惹かれて、たいせつに取っておくように。

そういう意味では、ツァラトゥストラ教徒と比べて、イーズラック人は無邪気だ。ある意味、前者が正統派で後者が異端ともいえる。意識的な前者と異なり、あまりにも無意識的である。無意識的であるがゆえに、夢や魔術の領域にぐっと接近する。

「さっききみは、比較的近い未来の限定された出来事であれば、手に取るようにわかると、たしかそう言ったね」

「正確にそう言いました」

彼女は微笑んだ。やはり、アマリリスとよく似ている。もっとも

少女は、ほとんど笑わなかったが。
「未来は変えられるのかな」
「わかりません」
「でもきみは、偶然は存在しないとも言った。まあ、それはよしとして、例えば占って、ごく近い未来におれは石に蹴つまずいて鼻の頭を擦り剥くと出たとする。そこで下ばかり見て歩けば、転ばずに済むのかな。それとも、カフカ鳥が頭に糞を落として驚いている間につまずくとかして、どうあがいても転ぶのだろうか。運命は変えられないのかな」
「難しい問題ですけど。基本的には、変えられないことを前提に、わたしたちはお話しします」
基本的には、ね。そうつぶやいて、無意識に煙草の箱に手を伸ばし、苦笑して握り潰した。彼女は言う。
「何か問題を抱えていらっしゃるのですね」
「ああ。この状況事態が大問題なのだが。とにかくおれは近い将来、どうあがいても死ぬ運命にあるらしい」
「占い者がそう告げたのですか」
「いや、状況的にさ。例えば一週間絶食させた獰猛な多脚ワームと同じ檻に入れられたら、どうあがいてもおれは食われるだろう。ほかに選択肢がない状況だ」
「でも腕のいい占い者が告げたのでなければ、当てにならないと思います」
彼女にしては強い自己主張に、おれは目を見張った。スカートの裾をふわりと広げて、彼女は近づいてきた。ソファに座り、正面からおれを見つめた。とん、と、小テーブルの上でカードを揃える音が響いた。
「わたしが、あなたの未来を変えてさしあげます」

37（1）

37

腹の底に響くような震動。

地面が揺れて、部屋の中のモノが次々と落下する音が響いた。前方に放り出されたアリーシャが、危うく小テーブルに激突する寸前で、どうにか受けとめた。二人抱き合ったまま、床の上をごろごろと転がり、止まったところで、ぎゅっと彼女を抱きしめた。

次の衝撃にそなえた。案の定、第二波が来た。

おれの背中に、得体の知れない資材がばらばらと降り注ぐ。明らかに地震による揺れではない。どう考えても砲撃だ。何者かが、強力な火力を用いて、拘置所を襲撃しているのだ。おそらく小型の戦車か自走砲の類いだろう。

さらに衝撃がたて続けに走ったが、今度はだいぶ離れた地点に着弾した様子。彼女の無事を確認すべく、顔を上げて腕の力を緩めた。長い髪が解き放たれ、ぐったりと目を閉じたままの、彼女の周りにあふれた。

「アリーシャ、だいじょうぶか」

軽く頬を叩く。薄い瞼が震えて、白銀の瞳が開かれた。ジグソーパズルの中の湖を、おれは不意に思い出した。驚いた表情が、痛々しいほど幼く思えた。

「カードを……」

「そこにじっとしていろ。ちゃんと拾ってくるから」

彼女を壁際に落ち着かせると、大きめの衝撃が部屋を揺らした。よろめきながら倒れた小テーブルに近づき、カードを拾い集めた。さいわい、たいして散乱しておらず、一分と待たせずに手渡すことができた。また、続けざまに衝撃が走る。一度部屋が真っ暗になり、赤っぽい非常灯に切り替わった。

「クーデターが起こるなんて聞いてねえぞ」
ただの愉快犯ではあるまい。政治的な意図があっての襲撃だろう。政権交代後、間もない昨今だ。旧政権の重要人物たちがまだまだ裁判中で、ここに拘留されている。亡命中とされる竜門寺家の大ボスなんかも、じつはこの中にいるのではないかという噂さえある。ゆえにどう考えても、襲っているのは旧首長連合系の過激派に違いあるまい。
着弾がまた遠くなった。警報機らしい、ブザーの音がかすかに聞こえた。それにしても奇妙な戦車だ。発射される間隔からして、一台か、多くて二台で来ているのは明白。なのに、これほど撃ちまくりながら、一向に弾が尽きないのはなぜだろう。
「火車です」
アリーシャがつぶやいた。カシャ、などという兵器は聞いたことがない。見れば、彼女は一枚のカードを、こちらへ向けて差し出していた。二つの、炎上する車輪が描かれていた。古い大砲に用いるような鉄製の大きな車輪が、血の色をした炎をめらめらと身に纏う。おぞましいことに、それぞれの中心には、蒼ざめた男の顔が嵌めこまれているのだ。
「こいつらが襲っているというのか？」
「本質的には、デビルフィッシュに呪われた男たちと同じ者です。ただし、その者たちの血は燃えます」
何のことやら今ひとつわからない。わからないなりに、血染めのコックや不法ギルドの麻薬中毒者と同様のやつが来ているらしいことは、何となく理解できた。今度は戦車で乗り込んできたのか。しかもこれまでと異なり、明確な政治的意図をもって……
かなり近い着弾があった。大時化の中の船のように部屋が揺れ、容赦なく資材が降り注いだ。
「くそっ。このままじゃ、生き埋めにされちまう」
彼女の手を引いて、ドアに駆け寄った。が、蹴っても体当たりしてもびくともしない。叩きつけた椅子ばかりが粉々に砕け、呻くほ

ど手が痺れた。次に書き物机を振り上げたとき、聞き覚えのある女の声が響いた。

「無駄だ。今開けるから待っていろ」

ドアの上部にあるスピーカーから聞こえてくるらしい。間もなくエアロックの外れる音がして、バネ仕掛けのようにドアが開いた。砲撃は続いていたが、爆発は遠ざかっていた。震えるドアにもたれて、いやにゆっくりと、カヲリはサングラスを外した。アイシャドウが細く引かれた目で、おれたちを一瞥して言う。

「条件つきで逃がしてやってもいい」

「そのセリフ、言う順番を間違ってないか」

「あるいはな。だが、わたしは最初から取り引きに応じてもらうつもりでいる。貴様にだって、猿より少しは進化した脳味噌があると見込んだ上でだ」

ピルトダウン人、という単語を、おれは懸命に打ち消した。

37（2）

「取り引きの条件は？」

「愚問だな。打ち上げ花火でもやっていると思ったか？　拘置所の警備だけではとてもあいつは倒せぬ。救援は間に合いそうにない。見たところ、ここを壊滅させるまで止まってくれそうにないしな。つまり襲撃者を倒さなければ、どっちみちおまえたちは死ぬということだ」

轟音とともに地面が揺れた。赤い非常灯が不穏に明滅した。ドアにもたれたまま、カヲリは表情一つ変えない。揺れがおさまると、片手をあげて合図し、後ろにひかえていたらしい、ガスマスクの一人から何かを受け取った。パイソンの入ったホルスターと、Ｍ３６だった。

今度は少し離れたところで爆発が起きた。ホルスターを身につけながら、皮肉を言わずにはいられない。

「断っておくが、本日は通常の弾丸しか持ち合わせがないぜ。戦車だかなんだか知らないが、こんな豆鉄砲で太刀打ちできると思うか？」

「誰も貴様の戦闘力になぞ期待していない」

カヲリはアリーシャを目の端で一瞥した。軽く拳を握って立っている彼女からは、何も感情は読みとれなかった。ただ月のように冷たく澄んだ瞳をしばたたかせ、承諾の意志をあらわしただけで……カヲリは語を継いだ。

「それに相手は丸腰だよ」

「ああそうかい。火車とかいう化け物なんだろう？　双子の火の車だ」

「なんだと？」

目が見開かれた。この女の驚いた顔を見るのは初めてだろう。これまでさんざん振り回されてきたので、胸のすく思いであるが、そ

んな子供じみた勝利感に酔っている場合ではない。
「イーズラック流の占いをちょっとばかし伝授してもらったのさ。そのうち恋の悩みでもできたら、彼女に頼むことだな。案内してくれ。化け物の居場所へ」
ドアの向こうは鉄板で覆われた通路だった。床に資材がばら撒かれ、焦げ臭い煙がたちこめていた。窓と監房が見当たらないところからして、どうやらおれたちは地下の特殊な「離れ」に閉じ籠められていたとおぼしい。そうでなければ、今頃とっくにおシャカだったかもしれない。
カヲリを先頭に通路を駆け抜けた。シンガリには二人のガスマスクが続いた。その間にも次々と着弾があり、この世の終わりがきたような揺れに見舞われた。途中、一人のガスマスクが待っており、カヲリの姿を確認すると素早く敬礼し、壁についているハンドルを力をこめて回した。潜水艦のハッチをおもわせるドアになっているらしい。
身をかがめてドアを潜ると、さらに狭い通路が続いていた。頭を上げてはとても通れず、オレンジ色の非常灯が並ぶ先は、モグラの穴のように曲がりくねっていた。乱れる足音がこだまを返し、うつろな重低音と化した。ここへ来て、印象よりカヲリが小柄であることに初めて気づいた。敏捷に駆け抜ける彼女に、ともすれば引き離されそうになる。
「これから敵の背後に回りこむ。言うまでもないが、地上に出たら気づかれないよう注意しろ。別働隊を側面から当てて、やつの注意を引きつけるから、それまで待て」
通路は行き止まりになり、上方へ通じる金属の梯子が、壁に嵌めこまれていた。ガスマスクの一人が先に上り、続いてカヲリが梯子に手をかけると、振り向きもせずにそう言ったのだ。
「了解した。アリーシャ」
「はい」
彼女の声は澄んでいて、これほど走ったにもかかわらず、まった

く息を切らしていない。振り返ると、小首をかしげてかすかに微笑んだ。それを見て、おれはしようと思っていた質問を引っ込めた。どうやらプルートゥは、ちゃんと上で待っているらしい。

ガスマスクは頭上のハンドルを回し、マンホールの蓋をぶ厚くしたようなハッチを開いた。地上は夜だった。ぱらぱらと小雨が降っており、意想外な静けさに浸されていた。激しい爆撃にさらされたように、あたり一面瓦礫の原で、血をおもわせる硝煙の臭いがたちこめていた。

百メートルは離れていまい。クレーター状にえぐられた地面の中心。巨大なサーチライトが交叉する所に、二つの人影がくっきりと照らし出されていた。

子供をグロテスクにデフォルメした人形が並んでいるようだった。二メートル近くありそうなほど、でかい図体のわりに、体形は子供のまま。異様に大きな頭に、犬の毛をおもわせる赤毛が、しょぼしょぼと生えていた。ボーダーの長袖シャツに、ぶかぶかのオーバーオールといった服装がまた、狂気じみた印象を強調するようだ。

二人とも極端な猫背で、両腕はだらりと前に垂れていた。コピーしたように、体形から服装から姿勢までまったく同じだった。横にほんの少しずれた位置に並んでいる、後方の一人の顔の前で、真紅の光が炸裂した。

(撃たれた?)

エネルギー砲が顔面にヒットしたように見えたのだ。けれど次の瞬間、爆発を起こしたのはオーバーオールではなく、前方の獄舎だった。火柱が上がり、地響きが伝わった。いつぞやの重炉心弾以上の破壊力だ。瓦礫にしがみついたまま、おれは生唾を呑みこんだ。

パイロキネシス! それも見たことがないほど、ド級のやつだ。

37（3）

「あり得ない……」

思わずつぶやいた。警備隊は壊滅したのか、もはや一発の銃弾も撃ち返してこない。前方には溶岩を流したような赤い光が、グロテスクな模様を描き、半壊した建物のシルエットを黒々と浮かび上がらせていた。

おれは独房の中で、襲撃者には政治的な意図があると考えた。旧政権の要人を逃がすのが目的なのだ、と。しかし、これではただの殺戮だ。無差別テロだ。政治犯からこそ泥まで、獄舎にいた者の大半はすでに死んでいるに違いない。

ならばこいつらは、ただ殺すのが楽しくて、わざわざこんな所を襲ったのか。血に飢えた愉快犯に過ぎないのか。あるいは、犯罪者は全て抹殺すべきだという、狂信的な思想の持ち主か。いや、いや、かれらがモノを考えているようには見えない。明らかに、背後にいる何者かが二人を操り、ピンポイントでここを襲ったのだ。

けれどそもそもこの奇怪な双子は何者なんだ？

「ほんの半月前だよ。とある施設が襲撃されたのは」

心の声を読んだように、カヲリがささやいた。いつかおれに話があると言ったとき同様、唇を耳朶に触れそうなほど近寄せて。

「それは当局が旧政権から引き継ぎ、極秘裏に運営していた施設で、わざわざ汚染地帯に分散して建てられていた。もちろん常にＩＢの餌食になる危険性と背中合わせだが、区内に持ってくるより、はるかにリスクが小さいといえた。なぜなら、こんなことが起こらないとも限らないから」

「サイキックを隔離するための施設か」

「そういうことだ。かれら兄弟は極めておとなしかったと聞く。洗脳によって自身の能力に関する記憶を消され、静かに暮らしていたようだ。襲撃者は職員を皆殺しにし、かれらを奪った。言うまでも

なく、武器にするために」
　おれは小型ワームの卵を噛み潰したような顔をしただろう。また赤い光が走り、見れば、今度は斜め前方にいる男の顔からそれは放たれた。こいつが兄なのだろうか。ぼんやりとそう考えたとたん、獄舎の一部が火柱と化した。
「いったい、何者のしわざなんだ？」
「カラマーゾフ」
「なに？」
「ご多分にもれず、旧政権系の過激派だという。当局の調べによれば、竜門寺一門との濃厚な関係が指摘されている。首謀者が誰なのか、それもご多分にもれず、謎に包まれているが……来たようだ」
　機関銃の音が鳴り響いた。クレーターの両側に大型の軍用チャペックが三機ずつ居並び、両手に装着したガトリング砲を一斉に撃ち放ったところだ。
　雨のような銃弾の中で、兄弟の体は激しく痙攣した。たちまちオーバーオールがボロ布と化し、数箇所からどす黒い血が吹き出した。けれど、通常なら二秒で五体がばらばらになるほどの攻撃にさらされながら、それ以上のダメージは見られないのだ。否が応でも、血染めのコックや麻薬中毒者が思い合わされた。
「生物学的には、とっくに死んでいる筈なんだがな」
　忌々しげにカヲリがつぶやいた。銃撃が止んだとき、兄弟はがっくりとうなだれて、類人猿をおもわせる姿勢になった。両者とも全く同じ姿勢なのが気に食わなかった。そうしてまったく同じ動作、同じ速さで、ゆっくりと身を起こした。兄が左を向けば弟もそっちを向いていた。光が走り、三機の大型チャペックが消し飛んだ。
　右側のチャペックが散開しつつ、突入を開始した。同時にアリーシャが駆け出した。おれは慌てて後を追った。
　当然、兄弟はチャペックに気をとられている。二人とも右を向き、一機に狙いを定めて、弟の顔面が光を放った。それを予期していたように、チャペックは横に跳んで避けた。どうやらカヲリの部下の

手で、遠隔操作されているとおぼしい。爆発に巻き込まれた勢いを利用して、みずから一個の砲弾と化して兄弟に突っ込んだ。

宙からガトリング砲が乱射された。砲撃は手前にいる弟に集中したにもかかわらず、兄の体もまったく同じように踊るのだ。踊りながらかれは光の矢を放ち、チャペックがぶつかる寸前に撃破した。爆風によろめきながら、かれらは依然として倒れない。残り二機のチャペックはさらに機銃を連射しながら、じぐざぐ走行で兄弟にせまる。

この戦闘の間に、おれたちはかなりの距離をかせいだ。逃げるが勝ちを座右の銘としているおれは、脚力にだけは自信があったが、アリーシャの足にはとても追いつけない。いつの間にかプルートゥが瓦礫の中から飛び出して、彼女の左側を伴走していた。

走りながら彼女は、ポケットから一枚のカードを抜いた。指の間にはさみ、真横に高くかざした。どういうわけか、おれは何のカードが抜かれたのか、目の当たりにしたように、はっきりとわかった。力、あるいは女力士。タロットカード八番めの大アルカナと、ほぼ同様の絵柄だ。

黒猫がジャンプした。頂点でカードに首輪が触れて、真紅の光を放った。

37（4）

黒猫の全身が粒子に解体され、灼熱しながら膨張した。いわゆる質量保存の法則が、ここでどのように書き換えられているのか、おれにはわからない。宇宙を構成する物質のほとんどが、まったく解明されていないという。いわゆる暗黒物質を呼び寄せて、かれは膨張するのかもしれない。

目には目を。炎には炎をというわけか。火炎が生き物のように渦を巻き、凝縮した。四肢があらわれ、耳まで避けた口が空を呑むほど開かれた。野獣の咆哮。それはまだ想像上の動物であった頃の獅子をおもわせる、爬虫類じみた姿をしていた。尖った耳。たてがみは燃える炎で、全身もまた灼熱した金属のようだ。

ただ眼ばかりが、象嵌されたサファイアのように冷たく燃えていた。

これまでの剣や聖杯のカードとは、明らかに規模が異なる。巨大な燃える獅子が着地したところへ、アリーシャは駆け寄り、背中に飛び乗った。燃え盛るたてがみに、なかば上半身をうずめた姿勢で身構えた。おれはカードの中の「女力士」を、目の当たりにする思いがした。

「プルートゥ！」

彼女が鋭く叫んだ。猫の名前は攻撃的な呪文のように響いた。咆哮。燃える獅子が後ろ足で地を蹴ると、そこから炎が巻き上がった。真紅の尾を引きながら、真っ直ぐに突進するさまは、地上の彗星をおもわせた。

前方で爆発が起きた。残り二台のチャペックが屠られたのだ。結果的にかれらの犠牲は、プルートゥが「変身」する時間を与えた。血の色に揺れる巨大な壁を背景に、兄弟は同時に振り返った。真円形に見開かれた眼は完全に白濁して、もはや生命の痕跡を留めていない。それでも二人の表情には、驚愕の色がありありと浮かんだ。

兄弟の顔面が一斉に輝いた。まるで頭部が爆弾と化して破裂したように見えた。強烈なハロゲンライトなみの光量があり、おれは銃を持つ手を思わず面前にかざした。次に襲うであろう爆風を予想して、前方に身を投げ出し、地面に伏せた。

轟音と震動。そいつは予想以上にすさまじく、もしあと一秒でも長く突っ立っていたら、奇麗なローストチキンができあがっていただろう。味は保障の限りではないけれど。

おれは子供の頃、人工衛星の発射実験を一度だけ見たことがあるが、プルートゥの飛び上がるさまは、ちょうどあれと似ていた。煙こそ吐かなかったが、すさまじい火花を上げながら、ほぼ垂直に舞い上がり、たちまち一点の星と化した。対して、落下してくる速度は、優雅なまでに遅く感じられた。

古人が想像した幻獣のように。宙を駆るような動作で、斜めに駆け下りてくるのだった。

兄弟は砲台と化した首の角度を上方に修正した。頭部が交互に閃光を発した。そのほかの動きは全く同じなのに、発射するタイミングだけは自在にずらせるのだ。真紅の魔弾が、ほとんど間隔を開けずに獅子を襲った。螺旋を描くように回避しながら迫る間も、連続攻撃は一向におさまらない。

（こいつらのエネルギーは、無尽蔵なのか？）

一発がプルートゥの側面に命中した。赤い火花が弾け、咆哮とアリーシャの悲鳴が響いた。炎に包まれて落下した獅子のもとへ、おれは駆け寄った。けれどプルートゥは身を低くして衝撃に耐え、汗馬のように胴震いすると、まとわりつく炎を弾き飛ばした。通常なら軍用チャペック同様、木っ端微塵になっているところ、一種のエネルギーシールドを発生させたらしい。

アリーシャは燃えるたてがみの中に、ぐったりと身を伏せていた。おれは熱くて近寄ることさえできないのに、彼女が火傷ひとつ負っていないのは、プルートゥと超時空的にリンクしているからかもしれない。血染めのコックを倒したとき、黒い翼をみずからの背にま

とったように。
「アリーシャ、だいじょうぶか？」
眠りから呼び覚まされたように彼女は顔を上げ、かすかに微笑んだ。それでもまだどこかうつろな眼差しでこう言った。
「足は速いほうでしたね、マスター」
「あ、ああ。人生そのものから遁走を続けているほどに」
「頼もしいです。右、半分、左、でお願いします」
「了解した」
燃える幻獣の背の上で、アリーシャはゆっくりと身を起こした。髪の毛が真紅の炎と化しているように見えた。目で合図を交わし、左右に分かれて同時に駆け出した。この間に兄弟が攻撃しなかったのは、やはりエネルギーを溜める必要があったのだろう。おれは両手に銃を持ち、けれど撃鉄はまだ起こさなかった。
兄弟の頭部が輝いた。おれは左側へおもいきりダイブした。頭上を獅子が逆方向へジャンプするのが意識された。銃を握りしめたまま、クレーターの斜面を前方へ転げ落ち、推進力が止まったところで、左側にいる兄の足を狙って、わき目もふらずに銃を撃ちまくった。
相手の足が踊った。兄弟は連帯を乱されて、プルートゥへの連続攻撃をことごとく外した。燃える獅子は、まず弟の上に覆いかぶさった。野獣が肉体を粉砕する音が響いた。弟が屠られている間、兄はただ呆然と立ち尽くしていた。やがて目の中の蒼白い光が消え、がっくりとひざまずくと、真紅に炎上した。
おれはプルートゥのほうをかえりみた。幻獣の背の上から、アリーシャは燃え上がるサイキックの残骸を無表情に凝視していた。
彼女は泣いていた。

38（1）

38

新聞におれたちのことは何ひとつ載っていなかった。おれたちのことはおろか、あのサイキックの双子に関しても、だ。さすがに拘置所が壊滅したことは隠し通せないので、一面に出ていたが、原因は目下調査中、などとまあ、いけしゃあしゃあと書かれていた。

そんなお粗末な記事にさえ、市民が納得してしまう要因は確かにあった。ワットではないが、何が起こるかわからないのが、この現代。この世界だ。いつのまにかアパートの隣の四畳半にＩＢが引っ越してきても。ある朝、胸騒ぎのする夢から覚めると、一匹の多脚ワームになっていたとしても、不思議ではない。起こりうる原因が現実の中に必ず見つかるのだ。

先の戦争によって、夢と現実の境界が破られてしまった感がある。アフリカのある場所で誕生した人類が、やがて世界じゅうに拡散したように。イズラウンで生れた禁断のテクノロジーは地上を焼き尽くし、狂おしい夢の断片をまき散らした。燠火のように、それらは今も灰燼に帰した世界のどこかに埋もれ、赤々と息づいている。

アマリリス。

そして、アリーシャ。

彼女たちこそ最も強烈な燠火であり、火の娘たちであり、夢を継ぐ者たちであろう。

あのあと、コードネーム”カヲリ”は約束どおり、おれたちを解放した。といっても、アリーシャはすでにその場にいなかったのだが。麻薬中毒者と血染めのコックを倒した時もまた、彼女はいつのまにか姿を消していた。「掻き消すように」という、古い怪談の常套句がぴったりの消えかたで。哀しみに満ちた眼差しの余韻をのこして。

娑婆に復帰して二日経ったが、何者も連絡してこない。おれ一人が文字どおり蒸発したところで、たい勢に影響はなく、ひょっとすると人一人の存在感なんて、こんなものかもしれない。派手に走り回ったせいで体の節々が痛く、アマリリスを見舞いたかったが、とても出歩く気になれなかった。

部屋でぼんやりと煙草をふかしながら、なぜかレイチェルのことをよく考えた。

周りが静かなせいで、よけい隣室が気になるのかもしれない。世の中から数日で忘れ去られるおれと違い、いなくなって日が経つにつれて、彼女の存在感は増すようだ。昼も夜も、亡霊のように、彼女の気配ばかりが、壁を抜けてこの部屋をうろつきまわる。耳もとに息吹を感じて、ハッとうたた寝から覚めることもある。

そんなときは心なしか、部屋の中に甘い香りが漂っている。

二葉が浴室等に仕掛けたモニターを覗くのも、いつのまにか日課になっていた。情けない話だが、映像を呼び出すたびに、おれの胸は高鳴るのだ。シャワーの音が聞こえた気がして、這うように駆け寄り、スイッチを入れたことも再三ある。むろん、期待したものは何も映っていなかったけれど。

すでに真夜中を回っているのだろう。雨がぱらぱらと窓を打ち、やがて通りすぎた。

目覚めなければならない理由があるのだが、それが何かわからない。意識の底のほうでもがくばかりで、体は闇に沈んだまま、眠りを貪り続けることを欲していた。

温かい闇。

低血圧のおれには不似合いなほど温かい、そしてどこか懐かしい闇の中に、ずっと沈んでいたかった。こんな闇から抜け出して、おれは何が悲しくて銃を振り回し、血を啜って生きてきたのだろう。他者を壊し、自分を壊しながら、いったいどこへ向かうつもりだったのだろう。ひたすら無意味な欲望に引きずられて……

「ずいぶんうなされているな。おかげで、考え事に集中できない」

カヲリの声。ということは、二段重ねの夢を見ているとおぼしい。眠りから覚めたつもりが、それもまた夢であったという。おれはつぶやいた。

「だいぶ前からだ。見る夢の九割は悪夢ときている。自分の悲鳴で目が覚めたり。何者かをぶん殴ろうとして、ベッドから落ちそうになったり」

「ならば、わたしも貴様の夢に登場する資格があるな」

「こんなふうにね」

「なるほど。よい夢を続けて見れるまで、枕を取り替えたらどうか」

「本気で言っているのか？　きみにしては、不合理な提案じゃないか」

ねっとりと、闇は囁き声を通じて皮膚に絡みつき、すべての毛穴から侵入して、神経を麻痺させる。気配の濃さに比べれば、意外に感じるほど匂いは薄い。けれども存在と分かち難い匂いが、かすかに、だが確実に闇の底に居座っている。もしもガラスに香りがあれば、ちょうどこんなふうだろうか。

おれは痛いほど勃起していた。

「コストと結果が見合っていれば、試す価値はあると思うが。時に人は、夢に食い殺される場合がある」

仰向きに横たわったまま、全身麻酔にかけられたように体が動かない。ずきずきと脈動する男根ばかりが、闇の中で唯一血を通わせ、息づいているようだ。ほかのすべては気配だけの亡霊にすぎない。おれもカヲリも、とっくの昔に死んだ人間であり、ただの形骸なのかもしれない。

38（2）

すぐ隣で、しなやかな肉体が寝返りをうつ、濃厚な気配が感じられた。気配が凝縮されて、肉体と化したようだった。かちりという音が鳴り、瞼の裏側に、淡いオレンジ色の火影が映じた。何者かが、枕もとの読書灯をともしたらしい。気配はささやく。

「むかしの作家がうまいことを言った。科学は人間の感覚機能を超えられない、と。量子力学が取り沙汰される、百年も前にそう書いた。なんなら、科学を現実と置き換えてもいい。わたしが見ているものと、貴様が見ているものが同じだという、客観的な保障はどこにもない」

「我おもう、ゆえに何とか、か？」

「違うな。貴様の感覚器が認識することによって、初めてわたしが存在する。存在したことになる。気障ったらしく言えば、きみおもう、ゆえに我あり、だ」

おれは誰と話しているのだろう。

亡霊か？　生霊か？　夢か？　それとも実体か？　少なくとも彼女が、そんな混乱を見透かして、皮肉っているのは明らかだろう。夢も現実も、所詮はおのれの感覚の中のできごとに過ぎない。が、しかし……何十年も閉ざされ、錆びついたシャッターをこじ開けるときの力をこめて、重い瞼を持ち上げた。

ぎりぎりと音がしなかったのが不思議なくらい。瞼の隙間から入りこんできた光は、けれど思ったほど眩しくなかった。近頃では燃料不足を理由に、夜中の送電が露骨に制限されている。読書灯はあるかなきかの電気を拾い、蝋燭よりもほの暗く、頼りない光を投げかけている。

「きみは考え事をするのに、いちいち他人のベッドを使わなければいけないのか」

カヲリはうつぶせに寝ていた。少し乱れた髪。重ねた手の甲に顎

をのせ、至近距離から、皮肉まじりの視線をこちらへ向けていた。布団からはみ出した肩に、黒いブラジャーの紐が、しどけなく引っかかっていた。

むろんおれは驚いたが、体はなかば麻痺したまま。跳ね起きることはおろか、首を五度ばかり傾けるのがやっとの状態。眠っている間に、ある種の麻酔を打たれたのかもしれず、彼女ならそれくらいやりかねない。けれど、そうまでしておれの隣に寝ていなければならない理由が、皆目わからない。

となると、やはり夢なのだろうか。夢だと解釈するのが、最も自然ではあるまいか。肉体と脳の覚醒が不均衡におとずれたとき、生々しい夢を見るという。「科学的に」説明される、亡霊出現のプロセスと同じ理屈だ。

（きみおもう、ゆえに我あり）

これほどリアルな夢があればの話だが……彼女は言う。

「わたしが大富豪の娘だとか、麗子から吹き込まれているのだろう。彼女と子供らしい付き合いをしていた頃は、確かにそうとも言えたが。どうも麗子は、わたしという人間を買いかぶりすぎている」

「少なくとも、得体の知れない男のベッドにみずから潜りこむ奇癖があるとは、夢にも思っていない」

「そういうことだ」

小刻みに肩を揺らし、くっくっと彼女は笑う。圧倒的な虚脱感に浸されることで、かえって皮肉を言う余裕すら生じている自分に気づく。精神も肉体も、余計な力が入らなければ、ずいぶん消耗を免れるのかもしれない。それほど日頃のおれは力みまくって、余計なことばかり考え、余計なことばかりしているのだろう。

なるようにしか、ならないのに。

「わたしはとことんまで地に堕ちた女だ。もちろん原因は金以外にない。例のクーデターのどさくさの中で、父親は殺され、かれの遺産はすべてわたしに受け渡された。負の形でね」

「新東亜ホテルの利権は、きみの家が握っているんじゃなかったの

か」

「旧政権が機能してこその利権だろう。たしかにあそこの権利問題は迷路のように複雑で、新政権も匙を投げかけている。接収しようにも接収しきれず、潰したくても潰しようがない。経済あっての世の中だからね。軍事力も権力も、経済という化け物の前では蛇に睨まれた何とかみたいに身をすくめる。うかつに手を出せば、潰されるのはそっちだからね」

「資産家にとっては、有利な条件だろう」

「父親は資産家だったが、わたしはそうではなかった。家畜のように金を殖やすトリックはおろか、計算機にさえ触れたことがない。わたしにとって、金とは使うものでしかなかった。まさに、赤子の手を何とやらさ。資産は凍結され、わたしは文字どおり丸裸にされた」

「文字どおり？」

彼女はまたおれに目を向け、凍りつくような笑みを浮かべた。

「わたしのような女にも興味を持つ物好きがいてね。厄介なことに、そいつが新政権の主要人物の一人だったという、よくある話さ。あとは言わなくてもわかるだろう。わたしはそいつの要求を受け入れ、おめおめと生きながらえた。新政権の飼い犬に成り下がった。麗子が夢見ているほど、高潔な女では決してない」

38（3）

彼女は言葉を切ると、読書灯の方へ片腕を伸ばした。細い、けれど圧倒的な肉の存在。灯りを消すのかと思えば、おれの煙草の箱をまさぐり、よれた一本を抜き取った。

「不正規品か。まあ、大目にみよう」

口にくわえてマッチを擦った。煙を吐いて眉をひそめた。不味かったのだろう。フィルターのない吸い口に残された口紅の跡が、いやに鮮明に見えた。彼女はその煙草を、隣でばかみたいに横たわっているおれの口へ、子供が悪戯でもするように、くわえさせた。心なしか、甘い味がした。

彼女は訊いた。

「アリーシャとかいったな。あの女とは、どこで知り合った？」

「イーズラック人の酒場に雇われて、客を占っていた。それ以外の素性は、まったくわからない」

「そのわりには、なかなかどうして、十年来の知友でも、ああまで息の合った芸当はできまい。それとも、行きずりの女と瞬時に気脈を通じるのが、貴様の才能なのか」

「授かりたい才能だね。だが現状は、トラブルに巻き込まれているだけの話さ」

「サイレント映画の喜劇役者のように、か」

肩をすくめたつもりだが、実際に動いたかどうか心もとない。相変わらず手足は麻痺したように、ぴくりともしない。カヲリはおれの口から煙草を抜いて、灰皿に灰を落とし、次に自分でくわえた。なかば目を閉じて煙を吸い込み、吐いた。独り言のようにつぶやいた。

「あの女は、サイキックではなかった」

「おれもそう思う。あのとんでもないパイロキネシスを有する双子と違って」

「気の毒な双子さ」
「かれらは汚染地帯の施設から盗み出されて、あの麻薬……クラーケンを投与されたのだろう。それも親孝行横丁で暴れたコックと違い、明らかに政治的な意図において」
彼女は答えない。同じ布団にもぐりこみながら、次元を異にしているような感覚は消えない。ただ煙草の吸い口だけを通して、二つの肉体は触れ合っていた。
おれは語を継いだ。
「ピルトダウン人なみのおれの頭にも、おおよその見当はつくよ。あれはクラーケンの副作用というより、真の姿だ。服用した者には、死と引き換えに不死身の肉体と、恐るべき力が宿る。三流の恐怖映画に出てくる、ゾンビや吸血鬼みたいなものさ。もしそいつが統御できたら、不死身のモンスター軍団を手に入れたことになるものな」
「だが結局クラーケンは不完全なまま、イズラウン人たちは開発を打ち切った。クラーケンを服用した者が、必ずリビングデッド化するとは限らない。確率的には百分の一程度だといわれている。また、たとえリビングデッド化したとしても、暴走あるのみで制御がまったくきかなくなる。だから……」
言葉を切り、彼女が煙草を揉み消す間、おれの背筋を冷たい戦慄が走った。おのずと声が震えた。
「サイキックをリビングデッド化させ、砲台として用いたというのか。悪魔の所業だ。とても人間の考えることじゃない」
常人でも、一人で武装警察の分隊を壊滅させるほどの力を引き出せるのだ。サイキックをリビングデッド化させれば、それだけでとんでもない殺戮兵器ができあがる。二本めの煙草に火をつけながら、カヲリはつぶやいた。
「悪魔より悪霊と呼ぶほうが適切かもしれない」
「カラマーゾフとかいったな。旧首長連合系の過激派の名は。そいつらが気の毒な双子を使って拘置所を襲わせたのは、何のためだ。仲間の政治犯ごと焼き殺して何になる？　それとも、双子の破壊力

が予想以上であったため、計画が失敗したのか」
「いや、見事に成功している」
問いただそうとしたおれの口は、煙草の吸い口でふさがれた。彼女は片手を頬にあて、まるで夜伽するようにこちらを向いた。美しい鎖骨と、闇の中で息づいている乳房の谷間がのぞいた。
「襲撃の翌日、極秘裏に拘置されていた、旧政権の重要人物の死体が確認された。内蔵まで焼け焦げていたが、遺伝子鑑定によって本人であることが判明した。誰だと思う？」
煙草が抜かれた。理屈ではとても信じられない名前が、口をついて出た。
「竜門寺真一郎」
「そのとおり」
「ますます訳がわからない。カラマーゾフは竜門寺の息がかかった過激派だと、きみ自身言わなかったか。それとも竜門寺家の大ボスは、自殺でも望んでいたのか」
「まさか。あの男なら、オオサンショウウオのように八つ裂きにされても、生き延びようとするだろう。考え得る可能性はひとつしかない。早い話が邪魔だったのさ。竜門寺真一郎は、明らかに政治的な意図で、何者かによって暗殺されたのだ。竜門寺家再興の名において」

39（1）

39

放課後になった。

全校集会が早く終わったため、バイトへ行くにはまだ間がある。久しぶりに「千里眼」を訪ねてみてもよいだろうと、八幡二葉は考えた。

校舎は煉瓦づくりで時計塔があり、ツタの葉が絡みついていた。ツタといっても、紅葉して冬には枯れてしまう、従来のツタとは別種で、常に青々と葉を茂らせ、寒くなっても旺盛な成長を続けた。今では学校の悩みの種で、根もとを切断されても枯れず、煉瓦の隙間に食い入って、いずれは校舎をばらばらにするのではないかと危ぶまれた。

屋上には天体望遠鏡のドームがあった。ここもツタに蹂躙され、とっくの昔に開閉できなくなったまま、うち捨てられていた。「千里眼」はドームの中に住みついていた。

「やあ、そろそろ来る頃じゃないかと思っていたよ」

スプリングの飛び出た黒い回転椅子に身をしずめ、足を組んだ姿勢で、かれは左手を上げた。女のように細い手首に、ばかでかい腕時計を三つも巻きつけていた。

千里眼が何歳くらいなのか、二葉にはわからない。同い年くらいにも見えるし、中年を過ぎていると言われても信じたろう。なにしろゴーグル状の眼鏡と、巨大なヘッドホンで顔の半分が隠れているため、年齢はおろか、人間かどうかさえ定かでない。趣味のよくないチャペックではないかと、たまに思うくらいである。

ヘッドホンからはみ出した蓬髪。サスペンダーで吊った、ぶかぶかの黒いコーデュロイのズボン。冬でも上着を着ず、白いシャツの袖を無造作に腕まくりしている。ヒゲはなく、卵のようにつるりと

した顎。大きな頭に比べて、小石を投げればポキリと折れてしまいそうな、異様に華奢な体形は、デフォルメされたマリオネットをおもわせた。

「お茶は出ないのかしら」

「ためしに押してごらんよ」

かれは指さした。所狭しと並べられたガラクタの中に、自動販売機が埋もれていた。見本には、とっくに製造中止になった銘柄が並んでいた。二葉は眉をひそめ、ボタンを押した。ゴトンと音がして、割れたカバーの間から缶が勢いよく飛び出した。持ち前の運動神経を発揮して、彼女はあやうく受け止めた。

「あっ、つー」

お手玉させたあげく、プルタブを引いた。レモンティーの甘い匂いがした。味もまあまあだ。

ドームがいつ閉鎖されたのかわからないが、ガラクタ置き場と化して久しいらしく、テレビジョンからチャペックまで、彼女の兄たちが見たら涎を垂らしそうな、年代ものの機械が積み上げられていた。見上げればドームの天井を覆うほど、様々なアンテナが吊るされていた。

機械どうしはコードでつなげられ、最終的には二本のコードに集約されていた。一方はアンテナに。もう一方はかれのヘッドホンに接続されているのだった。ヘッドホンはゴーグル状の眼鏡と一体化されているらしく、要するに、無数のアンテナが拾ってくる電波が、かれの視聴覚に絶えず流れ込んでくる仕組みだ。

これでよく他人と会話できるものだと、二葉は感心する。

千里眼がドームに住みついたのは、政権交代直後だ。それまでは、こんな所を訪れるのは彼女くらいしかいなかった。初対面していきなり、かれは彼女の名前を言い当てた。のみならず、家族構成や略歴からスリーサイズまで、ほぼ言い当てた。バストを一センチだけ多く言われたことが彼女の気に入った。

もし少なかったら、この変態野郎と叫びながら、迷わずカカト落

しをお見舞いしていただろう。今にして思えば、そこまで見透かされていたわけである。

（そいつはたぶん「千里眼」だろう。情報屋としての腕前は、スキャナー以上と言われているが、なにしろめったに仕事をしないやつでね）

特徴を話すと、兄たちはそう口を揃えた。かれらによれば、べつに女の子が目当てで女子高に住みついたわけではないらしい。新政権の追求を逃れて来たのだ。なるほどこの中なら超小型偵察機「ソフトボール」も入り込めない。隣の男子校では、トイレの中でも頻繁に見かけるらしいが。おちおち煙草も吸えないぜと、イシカワはぼやいていたっけ。

かれがどうやって生活しているのか、ひとつの謎である。ごく少数の顧客がいるのではないかと、兄たちは推測している。たしかに、食うにこまっているようには見えないが、ドームの中で客らしい人物と出くわしたことはない。いつもかれは黒い回転椅子の中にうずくまり、独り、得体の知れない電波を視聴していた。

「ときにきみは恋をしているね？」

「相手はどんな人かしら」

「ぱっとしない男さ。だがきみは、その男の目つきに惹かれている。どこを見ているのかわからない、ふらふらと不安定な目つきだ。麻薬中毒者にありがちだが、そいつはキメているわけじゃない。なぜだかきみは、悲しそうな目だと考えてしまう。そう考えるたびに、きみの胸の奥が不可解なうずきかたをする。ちなみに一センチ増えたね」

「余計なお世話」

彼女は頬をふくらませ、手ごろなガラクタに腰かけた。金庫か小型冷蔵庫のような箱型の廃品は、ひんやりとするお尻の下で、ぶーんと微弱な震動を伝えた。

39（2）

「このあいだの、通学路にお化けが出るという悩みは、解決したのかい」

卵型の顎をつるりと撫でて、千里眼はたずねた。声や身振りに呼応して、スクラップたちの計器類が明滅する。電気的なビブラートがかかった声といい、まるでかれ自身が、廃棄されたジャンク品のひとつであるかのようだ。自慢の脚を颯爽と組んで、二葉は答えた。

「ええ、おかげさまで。本当に報酬はいらなかったの？」

「仕事をした覚えはないし、これからも基本的に仕事はしない。もしボクのタワゴトがきみの利益につながったとしても、とくに意見をもたない」

「わたしに話しかけられるのは、迷惑？」

「むしろ楽しんでいると言っておこう。きみはとても、ユニークだから」

「乙女に対する褒め言葉じゃないわね」

「参考にしておく。時に、また乙女の悩み事かい？」

彼女は脚を組みかえた。箱が震動しているせいで、どうしてもお尻がむずむずする。移動しようかと辺りを見回したが、ほかに無難なガラクタはなさそうだ。

「バイト先でいろいろあって」

「悩んでいるわけだ。青春だねえ」

かれの笑い声はとても人間のものとは思えない。エレキヴィオラを幼児が掻き鳴らしているような音が響き、ぴりぴりと、箱が刺激を伝えた。彼女は少し頬を染め、落ち着かない様子で、また脚を組みかえた。

「竜門寺チルドレンについて知りたいんだけど」

「きみはアルバイト先で、壮大な悩みを抱えてるんだねえ」

「わざと茶化してるでしょう。わたしのバイト先は新東亜ホテルな

んだから。かつてあの場所を牛耳っていた竜門寺家に興味をもつのは、自然な成り行きじゃないかしら」

「自然、ねえ」

笑みを浮かべ、千里眼は無言劇の役者のように、指を蠢かせた。奇怪なゴーグルがなければ、それは爽やかな笑みと呼べたかもしれない。また顔の表情が読みにくいぶん、かれの指は能弁に動くのだ。

「言っておくけど、ボクが知り得ている情報は、すでに新聞に書かれたことばかりだよ。あらためて、きみに話すまでもない」

「構わないわ。ちょっと頭を整理したいの」

「どうだか。情報とは迷路だからねえ。深入りすればするほど、帰り道がわからなくなる。が、まあお望みとあらば、つまらない話を一席ぶちましょうか。一年ばかり前、竜門寺家でちょっとしたお家騒動が持ち上がったことは知っているね」

「後継者争いね」

「さよう。竜門寺真一郎はまだ六二歳。気力活力ともに少しも衰えていないどころか、鼻息はますます荒く。大日本連邦の支配者となるべく、あのてこのての権謀術策。並み居る首長を次々と蹴落としては、着実に地歩を固めていった。あと二千年くらいは後継者なんか必要なさそうな勢いさ」

大日本連邦とは、なんと滑稽な名称であるかと二葉は思う。たしかに第二次百年戦争初期までは、他国の政治的混乱につけ入って、アジアに侵出。複雑怪奇な経済操作で縛りつけ、広大な領土の実質的な支配権を得ていた。それが今では北海道さえ「北政権」に奪われたうえ、国土の七十パーセントが汚染地帯と化しているのだから。

千里眼は続けた。

「ゆえに、いきなり後継者問題が浮上した時には、誰もかれもが驚いた。いったいいかなる心境の変化か。宗教にでも入れ込んで謙虚になったのか、などと様々に取り沙汰されたが、なあに真相は単純明快。竜門寺真一郎の体は不治の病に蝕まれていたのさ。きみもかれの姿をテレビジョンか写真で見ただろう」

「鼻が高くて、目がぎょろりと鋭くて、白髪をなびかせて。あとはげっそりと肉がそぎ落とされて、ミイラか骸骨が服を着ているようだった」

「ずっとあんな風貌だったからね。病気になったかどうか、外見からはなかなかわからない。ともあれ、後継者はもちろんのこと、かれの三人の息子たちの中から選ばれる。いわゆる、竜門寺チルドレンだね」

「そこのところがよくわからないのよね」

「というと？」

「どうして世襲でなければいけないのかってこと。聞くところによると、竜門寺真一郎は、ずっと息子たちを遠ざけてきたそうじゃない。愛するどころか、むしろ疎ましがっていた」

39（3）

そう言って彼女はまたレモンティーを飲んだ。少しぬるくなって甘みが増し、なにやら淫靡な味がした。千里眼のゴーグルの表面に、シグナルめいた光が明滅した。口の端を歪める笑みを浮べたまま、パントマイムのように指を動かしつつ、かれは言う。

「後継者争いというものは古今東西、本人どうしの闘争というより、かれらを裏で持ち上げる者たちによる、勢力争いにほかならないのさ。Aの勢力が長男を持ち上げれば、Bの勢力は次男を担ぎ出す。世襲という伝統的なルールにのっとってね。では、長男のプロフィールからはじめようか」

「竜門寺慎二郎ね」

「さよう。三兄弟のうち、かれだけ母親が異なる。真一郎の最初の奥さんの子供だ。後に真一郎は好色漢として名を馳せるが、若い頃はそうでもない。かれと彼女は苦楽をともにした仲で、当初は模範的なカップルといえた。死滅した言葉を使えば、彼女はヤマトナデシコさ。生き馬の目を抜く政界に乗り出した真一郎を、陰でしっかり支えていた」

「ところが、産まれてきた慎二郎は性格破綻者だった」

「よく調べてるじゃないか。舞踏狂と引っかけて、舞踏卿の異名をもつ。踊りながら産まれてきたとか、這い這いしながらブレークダンスを踊ったとか、立ち上がった瞬間ステップを踏み始めたとか。そんな与太話がまことしやかに語られるほどのダンスきちがい。いっそ本職のダンサーにでもなれば、本人も周りも幸福だったのだろうが」

「野心家で金遣いが荒くて好色漢という、真一郎の負の側面をすべて受け継いでしまった」

「そういうことさ。ことあるごとにダンスパーティーを開いては、カネを湯水のように撒き散らす。娼婦だろうがやんごとなき奥方だ

ろうが、誰かれかまわずベッドに誘う。生きていれば現在二十六歳。軍服のよく似合う、なかなかの男前だものね。要人の奥方を寝取っては大問題を引き起こし、何度も父親を窮地におちいらせている。さて、次男はなんといったかな」

「竜門寺武留」

「ボクに言わせれば、兄の舞踏卿と比べて面白みの少ない青年さ。絵に描いたような四角四面の学者肌。そのくせ政治的野心はしっかり持ち合わせている」

「かれの母親について知りたいわ」

「そうだった。真一郎の後妻となる、彼女は当時、中部地方全域を牛耳っていた有力者の娘だよ。言うまでもなく、政略結婚だ。これを期に、無名の青二才に過ぎなかった真一郎は、めきめきと頭角をあらわしてくる」

「先妻はどうなったのかしら」

「大昔の小説に『ひかげの女』というのがあるが、悲劇だよね。ヤマトナデシコらしく、あっさりと身を引いた。舞踏卿がまだ二歳の頃の話さ。けれども理念どうりにはいかないのが、人間の心ってやつだろう。離婚した半年後には亡くなっている。病死とされているが、自殺その他の説もある」

「もし彼女が生きて慎二郎を育てていたら、あそこまで性格が歪まなかったかもしれないわね」

「たしかに。舞踏卿は彼女の死後、あっちこっちたらい回しにされている。それも決して良家とは限らなかったようだよ。支持するつもりはないが、踊り狂いたくもなるだろうさ。さて、後妻について話を戻せば、明らかに悪妻の部類に入った。手袋みたいに先妻をくるりと裏返したような女だった」

「お嬢さま育ちで、高慢で、意地悪で、しかもめっぽう美人という。まるでわたしみたいな」

「最後の一言は記憶から削除しておくよ。実際、彼女が先妻を毒殺したという噂もあるほど、呂后や西太后みたいなスゴイ女さ。まあ、

政治的野心はなかったようだがね。そのかわり、ツァラトゥストラ教の熱心な信者で、ほとんど狂信者と呼べるレベル。どんどん深みにはまって、五年後にはとうとう家を出た。文字どおりの、出家だねえ」

「籍は？」

「残したままさ。逆にこれが真一郎にとって好都合となった。猛烈な悪妻が、頼みもしないのに向こうから出て行ってくれたわけだからねえ。彼女の実家もかれに負い目を感じこそすれ、非難はできない。幼い二人の息子をとっととよそへ預けて、あとはやりたい放題さ。ちなみに人類刷新会議によるクーデター後、彼女の行方は杳として知れない」

「何か知っていそうな雰囲気だけど、まあいいわ。竜門寺武留のプロフィールを聞かせて」

「武留と書いてタケルと読む。が、名前に相違して典型的な文人だ。弟とは別々の家庭に預けられた。裕福な学者の家だったらしく、ま、三兄弟の中では、最も恵まれた少年期を過ごしたと言えるだろう。弱冠十八歳で第三大学を卒業。大学院に在籍し、物理学から文化人類学までオールマイティーにこなす。若き有望な学者として、マスコミの寵児となる」

マスコミを通じて、かれの顔なら二葉もよく知っていた。眼鏡をかけた、いかにも生真面目そうな面立ち。美男には相違ないが、父親ゆずりの陰鬱なかげりが、拭いようもなく貼りついていた。生きていれば、二十二歳になっているだろう。千里眼は続けた。

「頭のよさもさることながら、品行方正。物静かで落ち着き払っていて、年齢からは考えられない老成ぶりだよ。貞女の鏡のような先妻から舞踏卿が生まれ、絵に描いた悪妻の胎からこんな男が出てくるんだから、わからないものだね。さて、竜門寺チルドレン最後の一人は？」

竜門寺亜理栖。

39（4）

「亜理栖と書いてアリスと読む。夢見る少女みたいな名前だが、歴とした男である、といわれている」
「歯切れのよくない言い回しね」
「きみは三男の顔写真を見たことがあるかい」
二葉は首をふった。
「そうだろう。亜理栖が育てられたのは、お世辞にも金持ちとは言えないが、敬虔な慈善家の家庭だった。またかれ自身、天使のような性格だという評判だよ」
「天使、ねえ」
「顔を引きつらせているね。亜理栖は少年時代、友人を助けようとして、氷の張った貯水槽に飛び込んだとか、小遣いをもらっても全部寄付してしまうとか。そのての逸話には事欠かない」
「気に入らないわ。ならばどうして、マスコミに顔写真のひとつも撮らせてあげないのよ」
「竜門寺の血族であるという理由で、特別扱いされたくないから。名もなき一人の人間として生きたいから。といったことを、きらきら光る目で訴えられると、さしもの鉄面皮のマスコミも、恥じ入ってフラッシュを焚けなかったのだとか。もし宗教家だったら、確実にカリスマ教祖になれる器だねえ。実際に線の細い美青年らしいよ。生きていれば現在、十九歳」
「大学生？」
「いや、働いていたらしい。それも竜門寺の傘下とはまったく関係ない、小さな工場で。身分を隠してね」
「気に入らないわね。あまりにもできすぎているところが、かえって胡散くさい」
「乙女の嗅覚ってやつかい？」
「なんかこう、腑に落ちないのよね。徹底的にマスコミへの露出を

避けたことも、来たるべきクーデターを予見した行動に思えてしまう」

「それこそまさに『千里眼』だ。宗教家というより、魔術師の部類に入ってしまうねえ」

かれが笑うとドームじゅうのガラクタが震えた。お尻の下で、箱が、ぴりぴりと電気を帯びた。ストッキングまで帯電するようで、なかば飛び上がりつつ、彼女はまた脚を組みかえた。

「で、後継者争いでは、誰がリードしていたの？」

「まず舞踏卿だが、これは論外だ。たしかに長男ではあるし、真一郎と苦楽をともにした最初の妻の息子という点では、おおいに評価できるのだが。なにしろ、本人の性格に問題があり過ぎる。かれ自身、父親を激しく憎んでいたようだね。ある四流雑誌に寄せたコラムには、殺すという言葉が十三回使われていたというよ」

「苦楽をともにした母親を虐待し、忘れ形見の面倒をみるどころか、裸同然で放り出したから？」

「そうなるね。我こそは竜門寺家の正統な後継者であり、親父は悪辣なやりかたで、おのれの受け取ってしかるべき財産を剥奪したのだ、と息巻いた。あまりガラのよくない連中をバックに従え、見かけ上は、最も積極的にレースに乗り出した」

「あわよくば利権にありつきたい、不法ギルド系の親分連中が味方についたのね。でも、一族の幹部や、傘下の首長たちからは総スカンを食らったのでしょう」

「舞踏卿が跡を継いだら、竜門寺家は一晩で破産する。誰もがそう考えていたし、ボクも同意せざるを得ない。ところで、次男の竜門寺武留センセイなんだが」

「どう見ても、かれを選ぶのがベストよね。慎二郎が竜門寺の財産を一晩で飲んでしまうなら、三男、亜理栖は一晩で寄付してしまいそうな勢いなんでしょう。武留はすでに、政治や経済の論文で名を知られていたのだし、なにかとソツがない。最も安全なカードだわ」

「事実、真一郎も最もかれを贔屓にしていた。ほかの二人と異なり、

武留は学費と称して豊富な費用を与えられていたし、真一郎自身、たびたびかれと面談している」

「ほかの二人とは全く会っていないの？　というか、そもそも三兄弟の間に付き合いはなかったの？」

「舞踏卿は金をせびるために、あの手この手でつついてくる。茶話をする雰囲気ではないにせよ、いやでも顔を合わせただろうね。逆に亜理栖は、みずから父親との面会を避けていた。ゆくゆくは、竜門寺との関係を完全に絶つつもりだったのだろう。けれどもかれは同腹の兄、武留とは定期的に会っているね。特別仲良しではないにせよ」

「それで、尋ねるまでもないことだけど。竜門寺真一郎が選んだ後継者とは？」

「亜理栖だよ」

三度目をしばたたかせ、残りのレモンティーを飲みほしてから、二葉は口を開いた。

「なんで？」

「ボクに訊かれてもこまる。幹部の中には真一郎の精神鑑定を提案した者もいたくらいだが。肉体は病んでも、かれの頭脳は少しも衰えていなかった」

「かれほどの男が、ただ天使のような性格に惚れこんで、後継者に指名したりしないということね。時に、竜門寺真一郎は今、どこにいるのかしら」

「死んだよ」

千里眼は口の端を吊り上げた。

40（1）

40

七年ぶりに見る「幽霊船」の外観は、驚くほど変わっていなかった。

「さて。鬼が出るか、蛇が出るか」

我ながら古くさい言い回しだ。鬼や大蛇なんて、ＩＢや多脚ワームに比べれば、ペットみたいなもの。けれども、この世で最も恐ろしいものは何かと問えば、それらを生み出した人間であると、誰もが口を揃えるだろう。そして今回の相手は麻薬密売組織……まさに、人間なのだった。

錆の臭いのする風が吹いていた。乱れる髪を気にしながら、茨城麗子が言う。

「お渡しした見取り図の精度は、七十パーセント程度です。けれどこういった場所は、案外変化に乏しいので、七年前に潜入された時の感覚が通用するかと存じますわ」

郊外もここまで来ると、空気がとても汚れている。さすがに彼女も防酸コートを着ているので、ステキなおっぱいを拝むことができない。もしもあの時寝ていたら、という浅ましい未練が、むくむくと頭をもたげそうになる。

「カンのほうが当てになるというわけだ。せいぜい、鼻をひくつかせることにするよ」

「お話ししましたとおり、Ｃ５番の入り口で情報屋が待っています。コードネームは、『アルチュール・ランボー』。合言葉を兼ねていますので、くれぐれもお忘れなく」

「覚えた覚えた。アル中の乱暴者とは、おれみたいなやつだ」

麗子は、くすりと肩をすくめた。ずっと顔を引きつらせていた、本日初めて見せる笑顔だった。それを恥じるかのように、深々と頭

を下げた。
「本当に申し訳ございません。わたしの不注意で、危険に巻き込んでしまって」
「なに、とっくに巻き込まれていたさ。あの子を引き取った時点でね。きみのせいじゃない」
煙草を口の端にくわえ、火をつけずに彼女と向き合った。書類入れを胸に抱いたまま、茨城麗子はまっすぐにおれを見上げた。その目は、心なしか潤んでいるように見えたが、酸をおびた空気のせいだろうと解釈した。
「ご武運を」
片手を上げて応え、車に乗り込んだ。ポンコツのエンジンを始動させ、我慢していた煙草に火をつけた。フロントガラスの中には、一枚の絵のように、不気味な「幽霊船」の全景が嵌めこまれていた。煙を吐きながら、おれはつぶやいた。
「やれやれ」
どこかの新聞記者が「幽霊船」を評して、ガウディふうだと書いていた。ガウディが何かは知らないが、もし建築家だとしたら、よほどの変人に違いあるまい。用途不明な細長い塔が、高々と何本も突き出し、無数の風車が取り付けられていた。下部は建て増しに建て増しが繰り返されたコンクリートの丘で、大小無数の窓が、ごちゃごちゃと覗いていた。
都市地区と汚染地帯を隔てるフェンスが、ぎりぎりまでせまっているが、塔の高さは超えていない。パラシュートを背負ってひょいと飛べば、すぐに汚染地帯に降りられるだろう。もっとも、ＩＢどものうろつく領域を、好きこのんで散歩したがる者がいればの話だが。
辺りは何十年も舗装されていないので、砂塵がひどい。発車させると、バックミラーの中の麗子の姿は、夢のように掻き消された。
「幽霊船」の周囲は茶色い荒地で、ぽつぽつと建っている家も、七年前と変わらず廃屋ばかり。道なき道を突っ切って、おおよそ見当

をつけておいた場所に乗りつけるのに、二分とはかからなかった。
車を降りて、ずだ袋を肩にさげた。真下から見上げると、もはや「船」の面影はなく、ただのスクラップの塊である。塀やバリケードの類いがないのも昔のまま。コンクリートの壁面に無造作に開けられた穴が入り口となる。出口があるかどうかは別として……C5番はすぐに見つかった。
「アルチュール・ランボー」
「お待ちしておりました」
まだ暗がりに目が慣れないうちに、声が返ってきた。アル中かどうかは知る由もないが、美少年ではなさそうだ。
狭くてカビくさい、コンクリートの通路。奥から洩れるかすかな灯りを背に、ランボー氏は、ひょいと身をかがめてお辞儀をした。よれよれのスーツを着た痩身の中年男。やはりよれよれの中折れ帽をかぶり、顎ヒゲをたくわえたところは、情報屋を漫画に描いて切り抜いたようである。
茨城麗子によれば、ランボー氏のように、ガイド役を買って出る情報屋が、「幽霊船」の中にはけっこう住んでいるらしい。かつて単身、飛び込んだ時には存在すら知らなかったが。麗子が選んだからには、間違いなくかれは有能なのだろう。が、しかし、
「余計なお世話だとは思うが、その……だいじょうぶなのかい」
おれの思惑を瞬時に察したらしく、ランボー氏はちょっと帽子を持ち上げた。唾から覗いた片目が、針のように鋭い光をおびた。

40（2）

「立ち話もなんですから、昼飯でも食いませんか。まだお済みでなければ」

「悪くないね。ちょうど腹が減ってきたところだ」

ランボー氏は口笛をひとつ鳴らし、両手を帽子の後ろに組んで、背中を向けた。おれがガンスリンガーであることは、麗子から聞いている筈だから、撃ちたければどうぞという意味であろう。数秒後、かれはバッハの無伴奏パルティータらしき曲を吹きながら、先に立って歩き始めた。

通路はうねうねと曲がりつつ、時々、何方向かへ分岐している。まるでコンクリートの迷宮だ。じっとりと湿った壁には、何度もポスターを剥がしたり貼ったりした跡がある。その上からスプレーで落書きされている。ちょっとしたモダンアートふうの壁画に見えなくもない。

ここで生まれ、ここで死んでゆく者たちがいるのだ。かれら、迷路荘の住人たちは、目をつぶって歩いても迷わず目的地へ辿り着けるという。けれど、半年ばかり住んだ程度のおれは一パーセント把握しているかどうかさえ、心もとない。

少しも迷う様子がないランボー氏もまた、筋金入りの迷宮人なのだろうか。俗に、事件が未解決に終わることを迷宮入りと言うが、実際にここへ雲隠れする犯罪者は数多いと聞く。迷宮が迷宮を呼び、闇が闇を呑む。その最深部には、恐るべきミノタウロスが息づく……

口笛が不意にとぎれた。

それで堰が切れたように、雑踏の音が入りこんできた。横丁のまた横丁くらいの通路に、ぽつぽつと灯りがともり、人がひしめきあっていた。まだ正午近くだという事実を忘れてしまいそうな、夜の裏町をおもわせる光景。肉が焼かれ、酒が酌み交わされ、断続的な笑い声が沸き起こる。

おれはまだ平衡感覚を失ったまま、ぼんやりと立ち尽くしていた。夢の巷に立っているような気がした。目に映る光景は、いちじるしく現実味を欠いて、幻燈か何かに映し出されているように思えた。

軽く肩を押された。

ランボー氏はまたちょっと帽子を持ち上げ、針の眼差しを向けた。おれは小さくうなずき、かれの背に続いて古中華ふうの居酒屋らしい、店のひとつに入った。そういえば、ランボー氏の話し方には僅かに訛りがあったので、かれもまた中国系なのかもしれない。

これも旧政権の頃、とある事件が起きて、都市地区ごとに栄えていたチャイナタウンが、一瞬にして消滅した。けばけばしくも色あせた内装や、円卓が人であふれている眺めは、ゆえにどこか懐かしさをともなった。

緋色のチャイナドレスを着た娘が出迎え、人込みを縫って、おれたちを奥へ案内した。入り口の狭苦しいわりに、店の中は案外広いのだ。客たちのざわめきを差し引いても、ひどい音色の音楽が途切れがちに聞こえてくる。お約束のオペラ、『トゥーランドット』であるらしい。

小さめの円卓に、差し向かいで腰かけた。予約でも入れていたのか、中央にはすでに料理が盛られていた。緋色の娘が紹興酒を注いだ。おれはグラスを鼻に近づけた。

「本物かい？」

ランボー氏は軽く口の端を吊り上げた。もし本物だとしたら、ここへ運ばれて来るまでに、少なくとも数人ぶんの血が流されているだろう。そう考えると、あまりよい気分ではないが、好意は好意として受け取っておくに限りる。乾杯代わりに、お互いグラスをかかげて、口にふくんだ。なるほどこの酒の味は、どこか血をおもわせる。かれは切り出す。

「先程の件ですが」

「ああ。失礼だとは思ったが、おれは単純な男でね。腹の探りあいは苦手なんだ」

「つまり、わたしが例の組織の下請けを兼ねているのではないか、と？」

思わず周囲をうかがった。談笑が飽和して、中には誰を殺すの殺さないのと声高に「密談」している者もいる。こういった場所では、声をひそめないほうが自然なのかもしれない。

「それもあるし、まあいろいろだよ。刷新の密偵が、例の組織とやらに十九人も殺されたって話は、麗子……会社の秘書から聞いているだろう。あるいは、その前から知っていた可能性のほうが高そうだが」

「買いかぶって頂き、光栄の至りですよ。いえ、誤魔化すつもりはありません。こう見えてもわたしは生粋の『幽霊船』育ちですからね。正直申し上げて、連中には義憤、みたいなものを感じておりました。ですから、このたびお声がかかったのは、渡りに舟だったのですよ。信じて頂けるかどうかは、保留にされて構いませんが」

「信じなければ話が先に進まない。とりあえず、『幽霊船』の現状が知りたい。おれが潜り込んだ頃と、どう変わったのか」

かれはうなずき、目で促して料理を勧めた。じつはあまり食欲がなかったが、適当に皿に取り分けて、箸をつけた。どろりとしたその料理が何かはわからないが、久しぶりの古中華は、懐かしく舌を刺激した。今度、アマリリスに作ってもらおうと、ぼんやりと考えるうちに、ランボー氏が口を開いた。

「あなたが滞在なさったのは、七年前でしたか。それから二年後の五年前に、左翼にあたる東側で汚染が始まりまして、今では端から三十パーセントが閉鎖されております」

「ワーム？　それとも……」

「いえいえ、ＩＢではありませんよ。少なくとも第二種未満だと発表されております。すでにお察しのとおり、この閉鎖領域にイーズラックが住み着いたのです」

40（3）

リスのような素早さで行き交う、緋色の娘たち。あれでよく盆を落とさないものだと感心する。体の線を這うドレスの中で、臀部の肉が左右に揺れる。

「真相は、じつにシンプルなものだな。ここの住人とイーズラック人が、折り合えるわけがないと思っていたが」

思い出したように煙草に火をつけて、溜め息まじりに煙を吐いた。一向に料理に手をつけぬまま、ランボー氏は顎ヒゲを指でしごいた。かれの容貌は、どちらかというと見る者に不快感を与えるが、愛嬌のある仕ぐさに救われている。

「やつらは、ウィルスもちのワームなみにタチがよくありません。神出鬼没でとらえどころがない。影のように『幽霊船』の中をうろつきまわり、隙あらば何でも掠め盗ろうと、あの色素の薄い目を、猫のように光らせている。中でも最も忌まわしい点は、やつらが感染力を持つことですね」

皮肉っぽく笑うと、かれの顔は皺だらけになる。あたかも本来の顔の上に、他人の顔の皮膚を貼りつけているように。

「ちょっと待ってくれ。イーズラック人は、密売はやらかすが、基本的に盗みはしない」

「おっと、これはわたしの言い方がよくなかった。やつらが掠め盗るのは、なんというか、もっと抽象的なものなんですよ」

「抽象的な？」

「魂だか精気だか、何というのか知りませんが、そういった目には見えないが、自身が自身であるために必要な何かを、ごっそりと抜き取ってしまうんです。抜き取られた者は、しだいに瞳の色素が薄くなった挙句、やつらの仲間にされるんです。閉鎖ブロックの壁の向こうに、吸収されちまうんですよ」

おれはさっきよりも盛大に、溜め息をついた。

「あんた詩人だね」
「お褒めにあずかり光栄です。じつは若気の至りで、一冊だけ詩集なんぞを出した過去がありまして。本家本元のランボー殿下には、及びもつきませんがね」
本当に詩を書いていたとは。どんなものを書いていたのか。どこでどう間違ったのか。おおいに興味はあったけれど、あえて無視した。
「まるで古めかしい怪奇映画だよ。親孝行横丁の映画館でこっそり上映されているような。それにどうも、おれが思い描いているイーズラック人のイメージとは、だいぶかけ離れている」
「ええ。わたしもたまには穴倉の外へ這い出しますからね。ここのイーズラックどもが、極めて『特殊』であることは、承知しております」
「住民との仲は？」
「言うまでもなく、最悪に土星の輪をかけた状態ですよ。血なまぐさい争いが絶えません。ショバの問題もさることながら、プライドを傷つけられるんでしょうなあ」
詩の次は三文小説的な心理描写か。そう考えながら、おれは煙を吐き、耳を傾けた。
「ここの連中は、まあわたしも含めてなんですが、社会からはみ出した人間としての自覚と誇りを持っておりまして。文字どおり、『壁』の外にはみ出して住まう代わりに、税金を拒否し、治外法権を維持することで、やくたいもない政権抗争に明け暮れる権力の亡者どもを嘲笑っておったわけです。ところが、イーズラックどもの侵入によって……」
「お株を奪われた」
「そうなりますかな。我々やくざ者の集まりが、それなりに秩序を保って暮らしてまいりましたのは、権力に近づかないという、暗黙のルールがあってこそです。都市地区をのし歩く不法ギルドの連中とは、そこが根本的に異なるわけですよ。首長だろうが刷新だろう

が権力は権力。我々の敵であることに変わりはないのです」
「つまり、共通の敵をもつことで、一つになっていた」
「あまり褒められた感情じゃありませんがね。ところが、ここの『特殊な』イーズラックどもは、それこそ権力の亡者の手先となって働いているらしい。お株を奪うだけならまだしも、我々のアイデンティティーに泥を塗る恰好ですよ。『幽霊船』の存在を根底からおびやかす、腐食性ワームよりも恐ろしい病根となっているわけです」
節だらけの指を組み、かれは関節を鳴らした。始終、感情をおし殺して話すこの男の、心に秘めた唸り声を聞く思いがした。おれは煙草を揉み消した。
「時に、カノウさんという一家を知らないか。七年前に世話になったんだ。主人の名前は忘れちまったが、当時は電気工事店をやっていて、マキという娘が一人いた」
ランボー氏は初めて紹興酒のグラスを持ち上げ、ちょっと口をつけて顔をしかめた。アル中どころか、酒はいけない口らしい。いずれにせよ、かれがこれからあまり言いたくない事実を告げるであろうことは、予想できた。
「夫婦はすでに亡くなっておりますよ。三年前でしたか」
「二人ともかい？　まだまだバリバリ働ける年齢の筈だが」
「ここが汚染地帯に食い込んでいることをお忘れなく。少なく見積もっても、平均寿命は都市地区より十歳は下回ります。とはいえ、夫婦の死に限って言えば、謎に包まれておりましてね。娘が帰宅してみると、家の中はめちゃくちゃで、おまけに血の海だったそうです。死体は二つとも、ついに出ませんでしたね」

41（1）

41

店を出て、アルチュール・ランボー氏とは一旦、別れた。カノウさんたちが住んでいた所を、訪ねてみるつもりだった。

かれらは「幽霊船」の南方、下部に住んでいた。都市地区から見れば裏側にあたり、要するに、「壁」の出っ張りに沿って、汚染地帯に食い入っている部分だ。しかも今ではワームだか、特殊なイーズラック人だかに占拠されている、左翼の閉鎖ブロックとほぼ隣接していた。

居住区としては、最悪に土星の輪をかけてひどい環境である。

当時から、この辺りは「幽霊船」の中のスラム街として知られていたが、カノウさんたちに関して言えば、決して貧しくはなかった。かといって、お高くとまっていたわけではなく、停電が日常茶飯事に起こるこの辺りの住民に、何かと重宝がられていた。カノウ氏は貧民からは金を受け取らず、気安く修理を頼まれていた。

そこにカノウ氏の思惑があったことは、言うまでもない。現代社会における技師とは、なかなかヤバい職業なのである。大昔の日本人は、希少な水を自分の田に引くために、血刀を振り回して争ったというが、現代では電力の供給に関する諍いが絶えない。血を見ることもしばしばであり、技師が巻き添えを食う可能性もあり過ぎるほどある。

カノウ氏は貧民たちを味方につけることで、おのれの身を守っていたのだろう。

では「幽霊船」における高級住宅街はどこかというと、やはり最上部ということになる。ただし、「シャングリ・ラ」と呼ばれるこの部分は、ずっと無人のままだった。

「幽霊船」の本体は、ツァラトゥストラ教徒が作る誕生ケーキに似

た、上へ行くほど細い円筒形である。長大な蝋燭のような、七本の塔を突き立てたところなんかも、例のケーキとそっくりだ。シャングリ・ラは塔と内壁に囲まれて、外側からはほとんど見えない。

「幽霊船」の他の部分が、コンクリートで固められているのに対し、シャングリ・ラには、煉瓦塀と樹木に囲まれた瀟洒な邸宅が、静かに並んでいるという。外側の人間は、よほどの事情通でない限り、シャングリ・ラの存在を知らない。現に、麗子がくれた地図においても、最上部は空白になっている。

なぜシャングリ・ラは無人なのか？

それはここが「幽霊船」の安全弁になっているためだろう。

珍しいことに、この無法者たちの巨大な共同住宅であり、街でもある「幽霊船」には、ボスがいない。役員会らしきものさえ存在しない。それほどまでに、権力を厭っているのだ。そうして、ボスや議会を抜きにして、秩序を維持するために考え出されたのが、ほかでもない、シャングリ・ラだった。

美しいシャングリ・ラをあえて無人にしておくことが、「幽霊船」における唯一の法律であり、住人たちのアイデンティティーの象徴なのだった。

シャングリ・ラは当番制で管理された。ランダムに回される札を受け取った者たちが、毎週土曜日の午後にここに集まり、掃除をし、修理をし、その美しさに溜め息をついた。どの家の入り口にも鍵はかかっておらず、一切の警備も廃されていたが、当番以外で入り込む者は、まずいなかった。おれはカノウ氏に尋ねたことがある。

（しかし、おれみたいなよそ者が、何も知らずに、ふらふらと入り込む場合だってあるでしょう。「幽霊船」自体、出入り自由なんですからね）

氏は笑ってこう答えた。

（その人は、よほど不運だったとあきらめるしかないね。確実に消されるよ）

今も昔も、おれには上昇志向というものが、まるでない。なるべ

く楽に生きたいが、偉くなりたいとはさらさら思わない。明るい天上を目指すよりは、ゴクツブシのように暗い所を這い回りたがる、そんな性質が幸いして、当時のおれは命拾いをしたらしい。

店を出るとき、ランボー氏に地図を見せて現在地を教えてもらい、あとはなんとか自力で行けそうだった。スラム街へ一人で行くと言うと、かれは顔をしかめたが。

（土星の輪をかけて、昔よりひどくなっていますよ）

ガイドと一緒に行動したほうが賢明であることは、むろんわかりきっていた。よく今までこの世界で生きてこられたと自分でも感心するくらい、お人好しなおれは、ランボー氏を疑ってもいなかった。が、どうしても、かつて一人で訪れた所を、今度も一人でたずねたかったのだ。ランボー氏は苦笑しつつ、かれへのアクセス方法を何パターンか告げて別れた。

まさかこれが最後の別れになろうとは、夢にも考えなかったけれど。

スラム街は蟻の巣をおもわせた。

曲がりくねった路地を歩くと、猫の額ほどの広場に行き当たり、そこからまた八方へと路地が伸びていた。迷路の中の迷路といった様相だが、さすがに半年這い回ったこの辺りは、だいたいの位置関係を把握していた。多少路地が増えているようだが、基本的には昔のままだ。

地面はコンクリートだったり模造舗石だったりしたが、じっとりと濡れていることに変わりはなかった。壁から配線や配管が露出していた。おおっぴらにスパークしている電線もあった。真昼の常夜灯がぼんやりと照らす中、いくつかの人影が闇からあらわれて、闇へと消えた。

41（2）

カノウさんの家は、すぐに見つかった。

家、といっても、むろん一般的な一軒家とは異なる。家が家として独立しているのは、「幽霊船」の中ではシャングリ・ラだけなのだから。かといって、マンションやアパートのように、整然と部屋が並んでいるわけでもない。家屋のレリーフ、とでも呼ぶべきか。コンクリートの壁面に半分浮き彫りにされた住居が、何の法則性もなく連なっているのだ。

カノウ電気工事店と書かれた看板も健在だった。入り口の前に、ごちゃごちゃと資材が積み上げられているところも、昔のまま。とくに破損している様子はないが、ただ、家庭の存在感が決定的に欠けていた。

おれは頭陀袋を、どさりと降ろし、ドアに手をかけた。まったく予期に反して、取っ手を回すと金具が外れる手ごたえがあった。

（さっそくこれだよ）

眉をひそめた。別人が堂々と移り住んでいるのであれば、看板をそのままにしておく筈がない。浮浪者か、あるいはもっと面倒なヤカラが住みついている可能性が高い。反射的に辺りを見わたすと、隣近所は鳴りをひそめたまま。常夜灯の照らす範囲内に、人影はまったくない。おれはジーンズのポケットから、Ｍ３６を音もなく抜いた。

ドアを通り抜けた。落ちていた木片を引っかけて、外の明かりを入れるため、細めに開いたままにしておいた。饐えたような、空家特有のにおいが鼻をつく。両側は作りつけの棚で、工具類がぎっしりと詰めこまれていた。どれも厚い埃をかぶっており、一度も触れられなかった歳月の長さがしのばれた。

二つめのドアは中途半端に開いていた。かすかに、中から蒼い灯りが洩れてくることに気づき、一驚した。

ガンスリンガーに最も不必要なものは想像力である。起こりうる現実的な可能性を最小限に予測する以外、これを使ってはならない。撃つ相手の立場を一瞬でも想像すれば、こちらが撃たれる。そうしてよくこの仕事を続けてこられたものだと我ながら感心するくらい、おれの想像力は過剰だ。

おれはカノウさん夫婦の亡霊を想像した。それこそプラズマの亡霊のように蒼く光りながら、日常生活を営んでいるところを。死んだことにすら気づいておらず、おれが入って行けば、血まみれの笑顔で出迎えてくれるのではあるまいか……

首をふった。ここの淀んだ空気の中には、妄想の種子がうようよしている。

ドアの後ろに張りついて、中を覗きこんだ。タイル貼りのダイニング。楕円形のテーブルを、空の椅子が三つ囲んでいる。テーブルの上には、ティーカップとポットが、今にもお茶を始められるように整然と並んでいる。よく磨かれた磁器の光沢がおれの目を射る。

工具と異なり、明らかにごく最近、何者かによって磨かれたものだ。部屋の眺めはむかしと変わらぬまま、掃除がゆきとどき、整頓されている。カノウ夫人の飾らない几帳面さが、隅々まであらわれた恰好である。が、しかしランボー氏の話では、家の中はめちゃくちゃに破壊されていたのではなかったか。そのうえ血の海だったというではないか。

蒼い光は隣室から、磨りガラスを通して洩れてくる様子。ドアの隙間からダイニングに入ると、覚えず身震いするほどの寒気にみまわれた。こころなしか、血のにおいがした。隣室からもの音は全く聞こえず、ガラスに映る者の影もない。三つ数えてから、おれはガラス戸を引き明け、膝をついて銃を構えた。

八スペースほどの、部屋の中は無人だった。

（やれやれ）

銃をポケットに仕舞い、立ち上がって眺めた。色あせた壁紙。旧式のテレヴィジョンに円卓。染みだらけの天井からぶら下がった電

灯はともっておらず、光源は隅のスチールデスクの上に置かれた、ダイオードのランタンである。これはイオン電池式なので、家の電気そのものは止まっているのか、あるいは故意に使用していないのだろう。

スチールデスクに近寄り、片手をついた。ここにも埃は積もっていなかった。大人が座るにはやや小ぶりなのは、娘のマキが幼い頃から勉強用に使っていたものだから。机の本棚には、童話から幾何学の本まで、無秩序に並んでいた。母親と異なる、マキの性格をあらわす光景で、七年前とまったく変わっていなかった。

おれは身震いした。ランボー氏が嘘をつく理由はない。また茨城麗子が指名したほどのガイドが、誤情報をもたらしたとも思えない。惨劇はここで確かに行われたのだ。夫婦が惨殺され、死体は消えた。かれらがまだ生きて、ここで生活しているなんてことは、まず絶対にあり得ない。

犯人はついにわからなかったという。無法者たちの集団は、ある意味、一般人よりも秩序を重んじる。自分たちのテリトリーのど真中で、愛すべき夫婦がこれほど派手に殺されたとあっては、周囲が黙ってはいない。けれど、血眼の捜査にもかかわらず、犯人はおろか、死体さえ発見されなかった。

必然的に、イーズラック人の犯行ということで周囲の意見は一致した。動機がまったく不明であるにかかわらず、かれら以外に考えようがなかった。善良な夫婦が個人的な恨みを買う筈はなかったが、職業上、何らかのトラブルに巻きこまれたのであろうと予想された。

犯行にはワームが使われたという噂である。あくまで噂だが、かれらが第二種以上のワームを「飼い慣らしている」のだと、まことしやかに囁かれていた。想像するだにおぞましい話だが、ゆえに死体が見つからなかったというのだ。なるほどここは、イーズラック人とワームの巣窟である、東の閉鎖ブロックにほど近い。

娘のマキはショックのあまり気を失い、医者のもとへ運ばれた。しばらくは命も危ぶまれるほど、精神が錯乱していたという。どう

にかベッドを離れられるようになる頃、忽然と消えた。今も彼女の行方は杳として知れないのだ。

41（3）

記憶の底から、マキの姿を引っ張り出そうとこころみる。真っ赤に染めたセミロング。肌がきめ細かで色が白く、それだけにそばかすが痛々しかったが、本人はまったく気にしない様子。スカートを穿いたところなど見たことがなく、いつもざっくりとジーンズを着こなしていた。

ピアス狂で、鼻梁その他、意想外なところにくっつけては、おれを驚かせた。瞳に入れようという計画は、さすがに友達に阻止されたと言って笑った。もし生きているならば、現在は二十四か五だ。話を聞いた限り、その可能性は少なそうだが。

（ピアスはセックスの象徴なんだって。香川先生が言ってたけど、でもぜったい別モノだとわたしは思うよ。だって直接触られるより、ピアスをちょっと舐められたほうが感じるんだもの。だからわたしは、セックスよりもキスが好きだし、キスよりピアスを舐められるのほうが好き）

机の引き出しに手をかけた。写真でも入っていないかと考えて。一番上の引き出しは、けれど指の力に抗して開かなかった。鍵がかかっているのだろうか。いや、おれの知っているマキならばかけないと考え直し、一度下へスライドさせてから引いてみた。抵抗がなくなり、引き出しはすんなりと開いた。ずいぶん軽く感じられた。

（ねえ記者さん、こういうの、変態っていうのかな）

そこには一冊の日記帳が、ぽつんとおさまっていた。市販されている少女趣味的なもので、クマのぬいぐるみのイラストが、ピンクの表紙に描かれていた。少なくとも、おれがいた頃は、彼女が日記をつけている姿など見たことがない。もっともこういうものは、おおっぴらに人前では開かないのだろうけれど。

手にしてみると、意外に厚手で、重かった。多少の罪悪感を覚えながらも、当てずっぽうに項を開いてみた。下の文字がまったく読

めないほど、紙が血に染まっていた。眉をひそめ、さらにめくったが、どの項も同じように血染めだった。かなり時間がたっているらしく、茶色に変色し、すっかり乾ききっていた。けれど部分的には、鮮血の赤さを生々しく保っていた。

背後に恐ろしい気配を感じた。

気配とは電流のようなものだ。受信した直後に動かなければ、まずやられている。おれは振り向きざま、閉じた日記帳を盾にした。痺れるような衝撃が指に伝わり、止んだ。幸運だった。日記帳の表紙には、刃渡り二十センチはありそうなナイフが、垂直に突き立っていた。

第二波が来る様子はなかった。ポケットのＭ３６に指を添えたまま、ダイニングに通じる入り口を注視した。ほっそりとした人影が、くぐもった、けれど魅力的な声を発した。

「抜かないの？」

「おれは強盗じゃないんでね」

軽い溜め息が聞こえた。薄闇の中で、ほぅ、とうつろに谺をかえした。

「あんたよそ者だね。イーズラックでもなさそうだけど。船の人間なら、まずこの家の敷居はまたげない。連中は案外、迷信深いからね」

船とはもちろん「幽霊船」を指す。イーズラックと言うときだけ、吐き捨てるような語調になった。薄手のコートにジーンズ。フルフェイスのヘルメットのようなものをかぶり、豊かな髪が、そこから背中にあふれている。

「幽霊が出るというのかい。気の毒な夫婦の」

「あんた、何者？」

闇を震わせて、驚きが伝わる。暗がりから、一歩、彼女は歩み出た。ダイオードのランタンにその頭部が照らされたとき、おれは覚えず息を呑んだ。それはヘルメットというより、ジュラルミン製の仮面だった。中世の西洋兜をいやでも想起する形状で、無数のリベ

ットが打たれていた。
　目の前に立つ女がマキであることは、わかりきっていた。たしかに声はぐっとハスキーになり、かつ落ち着いているし、引きしまった体の線からも、当時の少女らしさは失われている。異様な仮面の効果もあいまって、全身からかもされる雰囲気は、あくまで厳しい。が、それでも七年前のお転婆娘の面影は、ぬぐいようがなかった。
　おれは黙っていた。彼女が思い出せないのなら、それでもいい。むしろそのほうがいい気がした。思い出すことで七年前の、おそらく彼女が最も幸福だった頃の記憶を呼び覚ませば、彼女は傷つくだろう。優しい記憶はたちまち氷のナイフと化して、心臓を貫くだろう……けれども彼女は気づいたらしい。
「記者さん？」
　異様な仮面から、思いがけず、あどけない声が洩れた。
　初めから嘘だと気づいていたと思うが、一家はおれの滞在中、記者ということにしてくれていた。素性に関しては何も訊かれなかった。利発なマキは、おれが傭兵だったことを何となく見抜いていたようだ。それでも記者さんと呼んでは、いたずらっぽく微笑んだりした。
「今はしがない何でも屋だよ。もっとも、記事なんて一度も書いたことはないけどね」
　道化のように両手をあげてみせた。彼女の肩から力が抜けるのがわかった。ひさしぶりだね、マキ。そう口にしようとしたとき、彼女の全身に殺気がみなぎり、腰を落として身構えた。指の部分だけ切り抜かれた革の手袋。そこに握られたナイフが、まがまがしい光をおびた。
「出て行って。今もそう名のっているかどうか知らないけど、エイジ。ここはあなたが来てはいけないところ」

41（4）

おれは両手を上げたまま、奇怪な鉄仮面を覗きこんだ。視線は痛いほど感じるものの、当然、表情はまったく読みとれない。もしかしたら、今にも泣きそうな顔をしているのではないかと、ちょっと考えた。

彼女がなぜ鉄仮面をかぶっているのかという、単純な疑問が今さらながらわいた。ただ顔を隠すには大げさすぎるし、秘密裏に行動する上でも、何かと邪魔だろう。では、顔をいちじるしく傷つけているのか。だからどうしても見られたくないのか。おそらく、それが最も妥当な理由だろうから、がさつなおれといえども、触れるのは憚られた。

「なぜそう思うんだ？」

ナイフによる威嚇を無視して、そう訊いた。

プロのガンスリンガーに太刀打ちできると考えるほど、マキはばかではない。それでも意思表示するように、ナイフの先端を向けたまま、仮面の中で小さな溜め息をもらした。

「エイジ、あなたは人類刷新会議に雇われている」

「いい嗅覚だ。犬のにおいがしたんだな」

「わたしが言う必要もないでしょうけど、刷新の密偵が船の中で次々と消されているわ」

言葉づかいが、以前より柔らかくなっている。少女の頃にはなかった艶が含まれている。彼女の声は、この場にそぐわない官能をも引き起こすかのようだ。

「おれも消されると思うか？」

「よそ者は、ここでは裸で歩いているようなものよ。どんなに巧みに潜入したつもりになっても、同じことだわ。たちまち、やつらに嗅ぎつけられるでしょう」

「その『やつら』について知りたいんだがね。イーズラック人なの

か」

「わたしより、むしろあなたのほうが詳しいんじゃない？　船で生まれ育ったわたしでさえ、いまだにわけがわからないんだから。あのいまわしい、寄生型ワームのようなやつら。いつの間にか船に棲みついて、疫病のように蝕んでゆく、白い眼をしたやつら……」

ナイフが放たれた。冷たい風がおれの頬をかすめ、背後で壁に突き立つ音が聞こえた。マキはその場にしゃがみこみ、仮面を両手で覆った。揺れる髪。震える肩。指の間をつたう涙は、けれど確認できなかった。

「教えてよ、エイジ。やつらはいったい何者なの？」

彼女に歩み寄り、肩に手をかけた。コートの粗い生地の下で、痛々しいほど細い肩が、囚われた小鳥のようにおののいていた。

「それを知るために？」

「ええ。誰一人、仲間も作らなかった。誰も信用できないと思った。生粋の船中人で、やつらを忌み嫌っていた者でさえ、いつやつらの仲間に取り込まれるかわからないものね」

「賢いマキのことだ。それでも何か突き止めたんだろう。親父さんたちの死因について」

顔が持ち上がる。勢いで、おれの手は払いのけられた。冷たい鉄仮面と、間近で見つめあう恰好だが、無理もない。ナイフを突きつけられなかっただけでも、僥倖とすべきだろう。

「おれを信用してほしい。なんて、間の抜けたことは言わないよ。先にひとつ訊きたいんだが、きみが刷新をも忌み嫌うのは、この『幽霊船』を取り壊そうとしているからなのか」

仮面が左右に振られた。

「違う。それもあるかもしれないけど、人類刷新会議が、表立ってかかげているイメージほど、クリーンではないと感じるからよ」

「クリーンではない？」

「政治家なんてみんな似たり寄ったりだ、といったレベルの愚痴ではないの。こんな船の中に閉じ籠もって、何がわかるのかと思うか

もしれないけれど。暗がりから覗いてこそ、よく見える世界だってあるわ。それにここは、裏情報の吹き溜まりみたいな場所だから。エイジ、そもそもどうして『人類刷新会議』なんていう、大げさな名前がついていると思う？」

次はおれが首を振る番だった。正直、考えたこともなかった。仰々しく名のったほうが、何かとお得なのだろう、くらいにしか。彼女は語を継いだ。

「神様がいるのかどうか、わたしにはわからないけど。でも、人類を『刷新』する資格があるのは、神様くらいじゃないかしら。どう思う？　かれらがもしも本気で、その名を名のっているのだとしたら」

「当局の理念は、極めてツァラトゥストラ教に近くなる、か」

自身、口にしながら戦慄を禁じ得なかった。思い当たるフシがあったのだ。身を乗り出して、マキはささやく。

「もちろん、当局の首脳がツァラトゥストラ教徒だと疑っているわけじゃない。むしろかれらを排除しようとしているように見えるわ。二つは相容れない水と油のようなもの。だけど、根幹の部分では繋がっていると感じるの。ツァラトゥストラ教の過激派が、イミテーションボディを飼い慣らそうとしているように」

42（1）

42

マキの肩が、びくりと上下した。同時に、すさまじい殺気が、おれのこめかみを貫いた。戸の外に、何かが潜んでいる。

耳を澄ませた。カタリという、正体のわからない音を残して、気配はふっつりと消えた。鉄仮面の、耳とおぼしきあたりに口を寄せ、おれは囁いた。

「裏口はまだ生きているか」

「ええ。逃げ込むまで、こっちが生きていられたらの話だけど」

上等だ。とおれはつぶやいた。減らず口が叩けるうちは、人はそう簡単に死にはしない。とはいえ、

「おれが巻き込んじまった恰好かな。まさかこんなに早く追っ手がかかるとは」

マキはこたえず、軽く首を振った。鉄仮面から延びた髪が揺れて、甘い香りが漂う。風呂に入るときは仮面をとるのだろうか、と、この場にそぐわぬ考えがよぎったが、修羅場ではよくあること。神経が極度の緊張に達すると、逃げ場を求め始めるのだ。

耳をつんざくほどの、破裂音が戸口で響いた。身を伏せた頭上を、ダイニングへ通じる扉がすっ飛んでいった。ぎちぎちと、巨大な蟻が歯ぎしりするような音が聞こえた。いやでもＩＢを連想させる音だが、それはあり得ない。あり得ないのだと自分に言い聞かせ、這いつくばった姿勢のまま、パイソンを抜いた。

煙の向こうに、武装警官の盾をおもわせる金属板が、二つ並んでいた。覗き窓の上に、センサーらしい赤いランプが点灯していた。だとすると、これは盾ではない。

「掃討車か……！」

前後に二つずつ連ねた盾は、甲殻類の脚に似た、四本の移動装置

を覆うカバーだ。間に三角形を成す本体が隠れている筈で、むろんそこには弾薬をしこたま装填した機銃が乗っかっているだろう。

掃討車は旧首長連合が開発した、無人の対人用殺戮兵器である。四本の「脚」を使ってどこまでも入り込み、目標を蜂の巣にするまで止まることがない。とくに小型の暗殺用は精巧で、顔写真一枚あれば、目標がインプットされる。あとは赤いボタンを一つ押すだけ。すさまじい嗅覚で目標の足取りをたどり、追いつめて蜂の巣にしてくれるスグレモノだ。

新政権はこれを禁じ、徹底的に廃棄したが、成果はこの有様。

敵はじっと動かない。赤いセンサーが、まがまがしく明滅し、ぎちぎちという音が、盾の間から断続的に洩れた。息をひそめたまま、おれは待っていた。機会は一瞬。やつが機銃を撃つために盾を開いたとき、動物でいえば首筋にあたる、配線が集中している部分を狙えばいい。うまく命中すれば、やつの動きは一発で止まる。

それにしても、不可解なのは、あのみょうな音だ。掃討車は何度も目にしているが、こんな、いわば生物的な音は聞いたことがない。掃討車に限らず、機械がたてる音とは思えない。不安との協奏曲を奏でつつ、奇異の念が膨らみ、ついに破裂する一歩手前で、胴震いするように掃討車が揺れた。

モーター音とともに、四本の脚部が広がると、必然的に盾の間から本体が覗いた。

眼玉だ。

地面すれすれに突き出した、いわば顔に相当する部分には、闘牛のそれの十倍はありそうな、巨大な眼玉が嵌めこまれ、きろきろと蠢いていた。そして眼玉の下には、蜘蛛とそっくりな顎があり、上下するたびに、ぎちぎちという、例の音が洩れてくるのだった。何よりもおぞましいのは、顎いちめん、天鵞絨のような毛で覆われていたことだ。

おれは叫んだ。叫ばなければ、狂気に呑まれそうだったから。叫びながらパイソンを連射した。

こんな体験は初めてではない。ＩＢを相手にしていれば、しょっちゅう起こることだし、実際に精神のバランスを崩した仲間を、何人も見てきた。かくいうおれも、処理班を辞めるきっかけになった戦闘の後、しばらくは廃人同様だった。妻を亡くした事実もひっくるめて、ＩＢという存在そのものに、いわば汚染されたのだろう。

が、しかし、目の前のこいつはＩＢではない。ＩＢであるわけがない。弾は確実に命中し、電球を割るように、巨大な眼玉が弾け飛んだ。顎が大きく開かれ、獣じみた、あまりにも生物的な叫び声がほとばしった。口の中から腐った血のような、どす黒い液体があふれた。

サソリの毒針をおもわせて、後方から弓なりに突き出された機銃が火を吹いた。けれど、すでにメインセンサーを潰されているので、闇雲に部屋を破壊するばかり。おれはマキの手をとり、後ろの壁に突進した。そこに取り付けられている、みょうに大きなダストシュートに飛び込んだ。

彼女が言ったとおり、「裏口」は健在だった。当時も話に聞いていたばかりで、飛び込むのは初めてなのだが。筒状のトンネルは、二人が体をくっつけて滑り降りる、いや、滑り落ちるのがやっとの広さ。壁面は油を塗ったブリキで覆われているらしい。

おれの頬には冷たい仮面が押しつけられ、反対に、かたく抱きあっている体のほうは、猫科の肉食獣をおもわせる、しなやかさな肉の存在と、温かい体温を感じとっていた。

42（2）

この抜け穴がどこに通じてるのか、おれは知らない。よほどの緊急事態でない限り、使用すべきでないようなことを、カノウ氏が言っていたかと記憶する。おれがマキにそうしたように、おそらく襲撃を受けたとき、カノウ氏は夫人の手を引いて、ここに飛び込みたかったのだろう。

だが、「襲撃者」はそれを許さなかった。

落下する速度は、みょうに緩慢に感じられた。ときおり、マキの鉄仮面が壁に擦れて、緑色の火花を放った。すでにまったくの闇に包まれて、自分が目を開けているかどうかさえ、心もとない。トンネルが微妙に曲がりくねっているせいで、速度は一定に保たれているが、これほど長い間落ちて行った先に何があるのか、考える気はとっくに失せていた。

ロング・アンド・ワインディング・ロードを、たっぷり一曲ぶん聴き終える頃、不意に中空へ放り出された。

マキの体をしっかり抱いたまま、背中から落下した。もし真下で剥き出しの鉄骨が穂先を揃えていたら、串刺し人間の奇怪なオブジェができあがるだろう。けれど、悪運の強さは相変わらずで、落下したのは細かく粉砕された瓦礫の山だった。

「きゃっ！」

意外に娘らしい悲鳴を聞くと同時に、彼女の全体重がおれを圧した。おそらく薄笑いを浮かべたまま、意識がぐんと遠のいた。

「エイジ……エイジ」

闇の向こうから、だれかが呼んでいた。少しハスキーな、耳をくすぐるような声。からからに乾いた、こちらはおそらくおれ自身の声が、間抜けな返事をしていた。

「ああ」

「生きているんならいいけど。痛む？」

「骨がばらばらになったみたいだ。だが、それこそ生きているアカシだからなあ」

薄目を開けた。にぶい光を放つ、鉄仮面が覗きこんでいた。硬い床に直接敷いたマットの上に、寝かされているらしい。黴のにおいのする、薄っぺらな毛布がかけられていた。

「撃たれては、いないみたいだけど」

「あたりまえだ。目をつぶってマシンガンをぶっ放したって、そう当たるもんじゃない。マキは？」

「だいじょうぶ」

ぶーん、という重低音に混じって、かすかな震動が背に伝わる。どこからか、しきりに水の滴る音が聞こえる。

ゆっくりと半身を起こすと、全身の関節がきりきりと軋んだ。唸りつつ、辺りを見まわす。赤錆びた鉄板に囲まれた、箱のような部屋だ。無数の、得体の知れない配管が、壁をうねうねと這い、天井から電灯がひとつ、ぶら下がっている。ブリキの傘の下から、弱いオレンジ色の光を投げかけているのは、ダイオードではなく、白熱球らしい。

「ここは？」

答える前に、マキに水差しを手渡された。急に渇きを覚えて、むさぼるように飲んだ。鉄の味がしたが、不純物も少なく、充分飲めるレベル。むろん、水筒を持参する余裕はなかったので、ここで調達したものだろう。彼女は言う。

「見てのとおりよ。お父さんが用意してくれていたの。わたしも実際に来るのは初めてだけど。ダストシュートに飛び込んだ時は、ここに隠れるよう、教えられていたから」

「地球を突き抜けちまうくらい、落下した気がするが」

「幽霊船の基部にあたるわ。人間が生きていられる、ぎりぎりのラインかしら」

「これ以上潜ると、どうなる？」

「レッドゾーンの汚染地帯に匹敵する環境に突入する。あと一メー

トル、コンクリートに穴を開ければ、そこは地獄よ」
　ポケットをまさぐり、すっかり潰れた煙草の箱を取り出した。火をつけていいか、目顔で尋ねると、マキはうなずいた。電灯がついているくらいだから、問題ないとは思うが、変なガスが充満していては、ミもフタもない。おれは煙を吐いた。例えここが地獄でも、こいつさえあれば、何とかやっていけそうな気がした。
「幽霊船」の最下部は、巨大な動力室になっていると聞いた覚えがある。ここが要塞だった頃の名残で、むろん今では機能しておらず、地下水に浸されているとか。水の中には未確認のＩＢが、うようよと泳いでいるとか。そんな環境が、おれが横たわっている、ほんの百センチ下に芒洋と広がっているのだ。
　そう考えると、さすがに体が震えた。
「寒い？」
「いや、汗をかくほどだよ。まあ、地獄の窯の上にあるんだから、蒸されるのは当然か」
　マキは肩をすくめた。おれはつぶやいた。
「なあ、マキ。気を失っている間に、なぜおれを始末しなかった？」

42（3）

しばらく思案しているさまが、仮面の下にうかがえた。身動きしないまま、視線がすっと外されたのがわかった。沈黙を数えてから、おれは語を継いだ。

「おれがここで嗅ぎまわっている限り、マキに累が及ぶのは確実だ。一緒にいるところを掃討車に見られちまったからな。本体を破壊したところで、データはとっくに送られている。かくなる上は、おれの寝首を掻いて、いかにも監視カメラに映りそうな所に置いてくれば、少なくとも仲間だという誤解は解けるだろう」

視線が戻され、溜め息まじりの笑い声が、鉄の仮面からこぼれた。

「兵法の初歩的な引っかけ問題みたい。わたし、そこまでばかじゃないわよ。かくなる上は、あなたを生かしておいて、利用したほうが有利に決まっている。首を置いてくるなんて、自殺行為もいいところだわ」

「よれよれのガンスリンガーに、利用価値なんてあるかな」

「エイジが追っている連中は、わたしが探している者たちと、少なくとも、とても近い可能性がある。それに」

髪を掻き上げた。それが緋色ではなく、現在は明るい金色に染められていることを、今さら認識した。甘い香りが漂い、彼女の人さし指が、鼻先に突きつけられた。

「寝顔があまりにも間抜けだったから。殺すに忍びなかったの」

口の端を歪めつつ、毛布の上にあぐらをかいた。部屋の広さは十スペースほどか。ほぼ立方体で、家具らしいものは何もない。奥にキッチンがあり、形ばかりのシャワールームまで確認したときは、奇跡を見る思いがした。

「水が出るのか」

「何はなくとも、水だけは確保しておくのが基本でしょう。籠城にせよ潜伏にせよ」

おれは肩をすくめた。こんな場所を用意していたくらいだ。カノウ氏は考えていた以上に、ヤバイ立場にあったとおぼしい。そんなおれの思惑を見抜いたように、マキがつぶやく。

「お父さんね、きっと見てはいけないものを見たんだと思う」

「見てはいけないもの？」

オウム返しに尋ねると、マキはうなずいた。真剣な表情が想像された。そういえば、最初、おれに向かって彼女はこう言った。ここはあなたが来てはいけないところだと。

「つまり、合成麻薬の製造工場を突き止めたということか」

電気工事の技師は、配線を伝って、迷路のような「幽霊船」の至る所に入り込む。裏口や抜け穴や、忘れ去られた通路を知っている。人類刷新会議のエージェントたちが、どうしても発見できなかった証拠を。禁じられた合成麻薬の工場を、偶然発見する可能性はありすぎるほどだろう。

が、おれの言葉にマキは首を振った。仮面の縁からあふれる金色の髪が、さらさらと揺れた。

「襲撃される、ちょうど一週間前よ。いつもより遅く仕事から帰ったあと、お父さんの様子が変だったの。食事にほとんど手をつけないし、大好きなお酒も、ほんのひと口飲んだだけ。ぼんやりしているかと思えば、何でもない音に驚いて飛び上がったり。わたしたちが理由を尋ねても、口をつぐむばかり。今思えば、何があっても話すわけにはいかなかったのね」

次の日から、カノウ氏は病気と称して仕事を全て断った。けれど、一時もじっとしておらず、行き先を告げずに出かけては、戻ることを繰り返した。この「最後の隠れ家」にも、たびたび出入りしていることをマキは察知した。通路や隠れ家を修理・補強して、食料や武器を運びこんでいるらしいのだ。

氏が「幽霊船」からしばらく出ることを提案した次の日に、カノウ夫妻は大量の血を残して消滅した。つらければ答えなくてもいいが、と断った上で、おれは尋ねた。

「カノウ氏は、その『見てはいけないもの』に関して、何か手がかりになるようなことを言ったのか」
「積極的には、何も。ただ、夜ごとひどくうなされてね。うわ言の中に、一定の単語が混じることに気づいたの」
「何と？」
彼女は少し上を向いて、球根。と、つぶやいた。おれは思わず叫んだ。
「まさか……！」
「わかるのね。エイジ、わたしはその意味を調べるために、ずいぶん回り道をしたわ。球根。これだけでは、あまりにも曖昧で、それこそ雲をつかむようだったから。だいいち、一介の電気技師の娘なんかに、そう簡単にわかる筈もなかった。これが、イミテーションボディに関わる重大な単語だなんて」
球根……すなわち、「バルブ」だ。
しかしそんなことはあり得ない。この「幽霊船」の中にイミテーションボディの原型が……バルブが持ち込まれているなんて、考えるだけでナンセンスだ。狂気の沙汰だ。そもそもバルブの存在そのものが、伝説と未分化なものではなかったか。狂った夢の象徴に過ぎないのではないか。

42（4）

カノウ氏がバルブをあえて「球根」と呼んだのはなぜか。かれは電気技師であり、バルブは「弁」のほかに「電球」をも意味する。ゆえに氏にとって最も馴染みの薄い、球根の呼称が用いられたのだろう。そう考えるのが自然なのだろう。けれど、おれにはそこに、もっとおぞましい意味が籠められているような気がして仕方がなかった。

球根。

まるで根のように、無数のコードやシールドが、うねうねと張りめぐらされ、奇形の球体がその上で息づいている。眼球をおもわせるコア。心臓のように、そいつは脈動している……マキはささやく。

「わたしもちょっとはお勉強したから、エイジの言いたいことはよくわかる。お父さんが見たものが、バルブそのものだったとは、さすがにわたしにも考えられない。ただ」

「ただ？」

「どんなに奇怪な伝説に彩られていても、所詮、バルブは人間が作り出したものでしょう。ＩＢが、純粋な神様の創造物でないのと同じように」

そうだ。ＩＢは「純粋な」生命体ではない。たしかにかれらは遺伝子を有し、みずから増殖する能力さえ持っている。便宜上、機械生命体と呼ばれてはいるが、はっきり「生命」と断定することは、躊躇せざるを得ない。マキの言うとおり、かれらは明らかに、神ならぬ人の手によって生み出されたのだから。

「つまり、バルブのコピーを……」

「わからないわ。考えたくないというのが、正直な気持ちかしら。そもそもそんな仮説が成り立つかどうかさえ、だれにもわからないんでしょう」

もしここに相崎博士がいれば、興味深い話が聞けたかもしれない。

いかにもマッドサイエンティスト然とした、かれの顔を思い出すと、なぜかわずかに気持ちが安らいだ。日頃、ぜったいに顔を合わせたくない男なのに、みょうな心理である。

「やめましょう、こんな話。お茶を淹れるわね」

衣擦れの音を鳴らして、マキは立ち上がった。男にとってひとつの幸福とは、女が茶を淹れてくれる状況だろう。こんな地獄の入り口で、それが望めるとは思いもよらなかったが。

部屋の隅に置かれた頭陀袋の一つから、マキはコーヒーの缶を取り出し、キッチンへ向かった。コンロの燃料は圧縮泥炭とおぼしい。産業廃棄物の燃える独特な臭気が、やがてコーヒーの香りと入れ替わった。

鉄仮面の上から、マキはどうやって飲むのだろうかと興味があったが、運ばれてきたのは、おれのぶんだけ。

「外はどうなっているんだろう」

金属製のカップを傾けながら、おれは尋ねた。

「ひと息ついたら、散歩してみましょうか。防護服を着なくても、出歩けないほどじゃないから。とてもピクニックする気にはなれないでしょうけど」

「だいたい想像できるよ。要するに、ワームの巣みたいなもんだ」

「イーズラックがいないだけ、まだましよ」

吐き捨てるように、彼女は言った。おれは話題を変えるため、自分の近況を問わず語りに話した。

七年前にここを出て、いろいろあって、処理班にいたことは意図的に飛ばし、現在の何でも屋稼業のことを、自嘲的に。喜劇的などたばたのあげく、ここへ来ることになった経緯には、彼女も驚いた様子。ずっとおれを刷新の諜報部員と思いこんでいたようだ。

話し終える頃には、カップは空になっていた。ここ十年ほど、西の砂漠地帯の政変が続いており、コーヒー豆の価格が高騰していた。それも、よほどの金持ちでない限り口にできず、一般人の手に入るのは、密輸された粗悪品ばかり。ゆえに、これほど質の悪い豆から、

これほど旨いコーヒーを淹れる彼女の手並みは、魔術に等しかった。
「お腹空いてない？　簡単なものなら作れるけど」
「ありがたいね」
彼女は小首をかしげた。鈍い光沢が仮面を撫でた。おそらく微笑んだのだろう。おれが当局とは無関係だと知って、少しは気を許したのかもしれない。依然、おれが厄介な存在であることに、変わりはないだろうけれど。生かしておいたほうが有利なのだと彼女は言った。追っている対象が非常に近いのだとも。
空のカップをもって彼女が奥へ去ると、無精にも、おれはもう一度横になった。床の上に、古いカストリ雑誌が転がっていることに気づいた。おれが目を回している間、マキが読んでいたのだろうか。振り返ると、彼女はすでにキッチンに向かい、材料を洗っている。おれは毛布をかぶり、その雑誌を引き寄せた。
雑誌は閉じられていたが、粗悪な紙の折れ具合から、マキが直前まで読んでいたページは、だいたい見当がついた。そこを開くと、載っているのはＩＢに関する記事だった。この手の雑誌が書き散らす、いわゆる「ＩＢネタ」は、ほとんど怪談の類いである。ここでもご多分に洩れず、眉をひそめたくなるような見出しが、けばけばしく刷られていた。
いわく、
『イミテーションボディと人間の混血児は実在した！？』
ふだんなら一笑に付すところだが、マキが読んでいたことを考えると、なぜか見過ごせない気がして、おれは記事を読み始めた。

43（1）

43

それにしても、ひどい印刷物だ。紙質の純度は極めて低く、インクのにおいは腐臭に等しい。

ＩＢが人間の男女を、「殺害以外の」目的で拉致するという。このての与太話なら、いやというほど耳にしてきた。当てずっぽうにカストリ雑誌を三、四冊買ってくれば、かならず一誌には特集が組まれているであろう、ありふれた怪異譚である。

そう、これはただの怪談話。

昔話や伝説に出てくる鬼だとか山男・山姥だとかを、そっくりＩＢに置き換えたに過ぎない。ただ、大昔から繰り返し語られてきたパターンというものは、人の心の奥深い部分に訴える、なんらかのパワーがあるのだろう。だからこんな荒唐無稽な与太話を貪り読む者が、あとを絶たないのだろう。

こんな記事を、マキが一生懸命読んでいるところを想像すると、苦笑を禁じ得ない。

昔の彼女はリアリストだったし、その部分は現在も変わっていないと感じる。くだらない雑誌を読む暇があれば、ナイフの手入れをしているような娘だ。が、しかし……

おれはキッチンスペースを盗み見た。すでによい香りが漂い、甲斐甲斐しく料理する彼女の腰で、エプロンのリボン結びが揺れていた。ジーンズの粗い生地に包まれていながら、彼女の臀部が、少女時代よりずっと充実していることに、あらためて気づいた。

早い話が、いい尻をしていた。

おれは尻から視線を剥がし、けばけばしい雑誌の挿絵に目を落とした。アナクロニズム全開の絵柄。いかにも兇悪な姿形のＩＢらしきものに半裸の女が拘束され、髪を振り乱し、目を見開いて身悶え

ていた。そのまま親孝行横丁の映画館のポスターに混じっていても、何の違和感もないだろう。記事の内容も挿絵そのままだ。

おれは男なので、女性の感覚は想像もつかない。性欲がどんなふうに訪れ、どんなふうに去ってゆくのか、さっぱりわからない。わからないなりに、性欲がちゃんと存在していることは知っているし、クールなマキといえども例外ではないだろう。現に、少女時代の彼女はピアシングという行為に性的な興奮を覚えると告白した。

（ピアス、か）

鉄仮面の下に、彼女は今もピアスをつけているのだろうか。あるいは、まさかとは思うが、あの仮面がピアスと同じ意味をもつのだろうか。そうしてＩＢに犯されるというおぞましくも扇情的な与太話が、彼女のなんらかの琴線に触れたというのか。

後半はＩＢと人間の混血児に関する記事で、よくもまあここまで不気味な想像ができたものだと感心するくらい、怪物趣味にあふれていた。ページのよれ具合から、明らかにマキは前半を繰り返し読んでいたが、おれはむしろ後半に惹かれた。昆虫人間や全身からダクトが突き出た人間などに混じって、可憐な少女が描かれていたからだ。

挿絵画家は、少女のヌードが描きたかっただけかもしれない。おそらくそうだろう。百鬼夜行のような怪物ばかり描いていると、飽き飽きしてくるのも当然だ。だからこれは単なる画家の思いつきであって、現実的な根拠などあろう筈がない。そう思いながら、おれはどうしてもその絵を凝視せずにはいられなかった。

少女は十二、三だろうか。この年代特有の、憂いを含んだような目もと。幼さと艶めかしさが共存し、せめぎあう四肢。いかにも画家の理想と情念をぶつけたような、均整のとれた真っ白な裸身。その左手首から先だけが、おぞましい鎌状の爪を無数に植えこんだ殺戮機械と化していた。

マキが悲鳴を張り上げたのは、そのときだ。

もう追っ手がかかったのか。それとも多脚ワームか。いずれにせ

よ、ただ事では済みそうにない悲鳴だった。こんな場所にいながら、おれは油断しすぎたようだ。後悔が引き起こそうとするパニックを懸命におさえつけ、飛び起きた。同時にパイソンを手に取り、キッチンへ向けて身構えた。

「マキ！」

彼女はこちらを向いて立っていた。頭から足の先まで血まみれだった。だらりと垂らした両手の指先から、鮮血はぽたぽたと床にこぼれた。マキの両親を襲ったという、得体の知れないものの影を懸命に探したが、せまい箱の中に、侵入者の姿はどこにも見当たらなかった。

「マキ……」

「生きてるわ」

かすれた声が仮面から洩れた。仮面から？　そういえば、体はともかく、鉄仮面まで血に染まっているのは理屈にあわない。立ち尽くしたまま、彼女はつぶやく。

「虫みたいなものを踏んづけちゃったの。船の中には、こんなやついなかったわ。エイジ、あなた専門家でしょう。なによこれ」

ゴクツブシだ。そうつぶやいて、おれは吹き出した。

「うっかり一匹踏んだだけでも、バケツ一杯ぶんのトマトソースをかぶったくらいにはなる。まあ、やつの体液は無害だから安心しな」

「そんなに笑わなくてもいいでしょう。いくら無害といったって、こんなひどい臭いのするソースなんか使えない。おかげで料理が台無しよ」

おれが笑い終えるまで、たっぷり一分は必要だった。その間じゅう、マキは憮然と腕を組んでいた。

43（2）

彼女は言う。

「しばらく席を外してくれない？　シャワー浴びたいんだけど」

「外は危険とワームがいっぱいなんだろう」

「三十秒以内に出て行かないと、ゴクツブシのチリソースを作るわよ」

「それだけは勘弁してくれ」

肩をすくめて、きびすを返した。

倉庫の入り口をおもわせる、鋲の打たれた鉄扉の前で振り返ると、仮面のレディはまだじっとこちらを見ていた。裸体に対するガードは、アリーシャよりもはるかに堅い。おれは再び肩を上下させ、扉を押して外に出た。

真っ暗かと思いきや、意外にも黄昏時くらいの明るさ。腕時計を見れば、ちょうど日が暮れる時刻だが、これが自然光であるわけがない。一帯は不気味な赤い光に覆われ、しかも緩い呼吸のリズムで明滅していた。

辺りは一面、瓦礫の原である。広大なゴミ捨て場と呼んでもいい。建造物の残骸にさえぎられて、遠くはどうなっているかわからない。巨大な天井まで二十メートルはあるだろうか。腐ったような、穴だらけのコンクリートから、鉄骨やパイプやコードや、その他、正体の知れない廃棄物がはみ出していた。あの辺りにも、愉快なワームたちが大勢棲みついているに違いない。

我らが隠れ家は、黒ずんだ鉄の箱にほかならなかった。おそらく、大昔の軍用コンテナであろう。腐食が進み、瓦礫に埋もれかけたさまは、ワームの巣窟にしか見えない。まさか今頃、いい尻をした仮面のレディがシャワーを浴びているとは、誰も思うまい。いや、さすがに入浴中は、彼女もそれを外すだろう。重い鉄の塊を持ち上げるとき、豊かな髪があふれるだろう。緋色だった七年前と変わ

って、薄い金色に染められた髪。その毛先がなめらかな背中を撫で下ろし、充実した臀部の上で揺れるだろう。

（ガンスリンガーに最も不必要なもの。それは想像力だ）

自身を戒めつつ、再び周囲に気をくばった。

よからぬ妄想を愉しんでいる間に、異様なもの音が生じていることに気づいた。ここへ来たときからずっと鳴り続けている、ぶぅーんという重低音とは明らかに異なる。がりがりと瓦礫を引っ掻くような音。しかもその音は、明らかにこちらへ接近していた。

（巨大なワームか。それとも……）

最悪の可能性を胸の内で揉み消しつつ、小動物のように耳を済ませた。異音はもはや疑う余地もないほど、高らかに瓦礫を引っ掻いていた。時速二十キロくらいは出ているようだ。けれど、瓦礫にさえぎられて、その姿をなかなか確認できない。やがて三十メートルほど先に土煙が立ち、ひどい油の臭いがした。となると、

機械だ。

おれはパイソンを抜いた。

接近物に対して、板状のコンクリート塊を盾に身構えた。耳障りな音が響き、視線の先で瓦礫が弾けた。破片が盾に次々とぶつかり、砂埃が視界を圧した。ほんの数メートル先でアイドリングしているらしい、エンジン音と油の臭い。

砂埃にまみれて、おれは舌打ちした。こんなことなら、二葉にゴーグルを借りてくるべきだった。目をしばたたかせながら、盾の間から覗きこむと、そこには鉄のモグラがいた。

（なんだこいつは？）

戦闘用でないことは一目でわかった。かといって、乗用にしては奇怪すぎる。建機に近い気もするが、こんな用途不明な車両は見たことがない。そもそもこいつは車両と呼べるのか。なにしろ、うんと突き出たフェンダーの左右の、本来前輪のあるべきところには、太い鉄の爪が三本ずつ、にゅっと伸びているのだから。

あたかも、モグラの前脚のように。

運転席は剥き出しで、一人の小男が座っていた。工事用のヘルメットを後ろ向きに被り、ゴーグルのような眼鏡をかけ、鼻の下に白いヒゲをたくわえていた。この変な爺さんが着ているのは、旧首長連合傭兵部隊の軍服である。闇市場に流れたものだろうが、おれは眉をひそめた。

爺さんが適当にレバーを動かすと、爪がうねうねと蠢き、ボンネットの上で、二つの赤い光が明滅した。ライトではない。投光機なら、運転席の横にくくり付けられているではないか。カバーの中で、縦に並んだ円い光源からは、一種の「視線」が発せられているように思えて仕方がなかった。

おれたちを襲った掃討車の「眼玉」のように。

43（3）

爺さんの頭を撃ち抜くのは簡単だ。距離は近いし、障害物はない。しかしだからといって、今のところは、ぶっ放す理由もないのである。

おれはパイソンをホルスターにおさめて、コンクリートの陰から姿をあらわした。モグラの赤い眼が、警戒を示すように、ちかちかと瞬いた。爺さんは運転席から身を乗り出して、ぶ厚い眼鏡の縁に手をかけ、こちらを凝視した。おれは片手を上げた。

「景気はどうだい」

「はん、退化猿人ではなさそうだな」

「猿人だと？」

むっとした。なんでこんな地の底で、こんな老いぼれにまで、ピルトダウン人呼ばわりされなくてはならないのか。

「知らんのか。スローミュータントとも呼ばれる、赤い眼をした緑色のサルだよ。もっとも、本当にサルの一種なら、まだ可愛げがあったのだが」

爺さんの金切り声はよく通る。怒鳴っているわけでもないのに、よどんだ空気をつんざくようだ。誰かに口調が似ている気がするが、誰なのか思い出せない。とりあえず、おれがサル呼ばわりされたわけではないらしく、またさしあたっては、爺さんに害意はないとおぼしい。

おれはモグラに歩み寄り、その奇態なボディをあらためて眺めた。見れば見るほど、変てこなクルマだ。

爪の後ろ、腕の付け根にあたるカバーの下には、太い車輪が仕込まれている。後輪の代わりにキャタピラがついている。運転席の後ろに積載スペースがあり、荷を覆うシートが膨らんでいる。テールに折りたたまれているのは、ジャッキをおもわせる一本のアームである。

視線に気づいて目を向けると、ボンネットの上で、二つの赤い光がすぅーっと消えた。ちょうど視線を逸らすような具合に。

「いい車に乗ってるね」

「自信作だよ」

「あんたが作ったのか？」

呆れ果てたリアクションを、感嘆していると解釈したのか。爺さんは運転席の上でふんぞり返り、まんざらでもなさそうにヒゲをひねった。

「ここは材料には事欠かない。都市のジャンク屋どもが涎を垂らしそうな宝の山さ。もっとも、退化猿人どもとご対面する気になれればの話だがね」

爺さんが一帯に住みついているのは明らかだろう。モグラがネグラというわけだ。マキの口ぶりでは、頑丈な隠れ家に籠もるならともかく、身軽に野宿できる環境ではなさそうだったが。しかもワームのみならず、爺さんの言う退化猿人とやらが跋扈しているとすれば、なおさらのこと。

そもそも、どうやって食い物を得ているのか。確かにレアなガラクタには事欠かないだろうが、雑草ひとつ見当たらない不毛の荒野だ。追い剥ぎでもしない限り、生きるスベはないのではないか。

（追い剥ぎ、ね）

なるほど、とぼけた外見に騙されがちだが、その可能性はおおいにある。「幽霊船」は「わけあり」人間の集まりだとされているが、案外、内部での結束は固く、排他的である。外部から逃げこんできた「わけあり」人間は、よそ者とみなされ、たちまち居場所に窮してしまう。こんな地の果てまでも、落ちてくる者は案外多いかもしれないのだ。

もはや後戻りはできない、かれらの行き着く先は、封鎖された壁の中か、もしくは、「地獄」しかない。いや他人事ではなく、ここに典型的な見本がいるではないか。

となると、モグラには人の臭いを嗅ぎつける、ある種のセンサー

があるのかもしれない。偶然をよそおって獲物に近づき、とぼけたキャラクターで油断させ、寝込みを襲う……黙りこんでいるおれの頭上から、爺さんの声が降ってきた。

「はん、お前さんが考えていることくらい、だいたいわかるわい。お察しのとおり、お前さんの姿は、とっくにこの子の鼻が捕捉しておった」

爺さんはモグラを「この子」と呼んだ。愛しそうに、灰色のボディを軽く叩いた。

「ただ奇妙なのは、お前さんの影が、まるで降ってわいたように、忽然とあらわれた点だよ。。サイキックの中には、ごく稀に、瞬間移動能力を持つ者がいるようだが、お前さんの顔を眺めておると、どうしてもそんなふうには見えんのだ」

おれは苦笑した。そんな便利な力があれば、今ごろ地の底を這いずり回ってなんかいない。

爺さんは軍服の胸ポケットをまさぐり、皺くちゃになった煙草の箱を取り出した。瞬時、視力が十倍になったように、箱の絵柄が目に飛び込んできた。そこでは巨大な蛸の化け物が、海の底から蝕腕を伸ばし、帆船をからめとっていた。

クラーケン！

43（4）

たちまち蒼ざめたおれを尻目に、爺さんは悠々と一本取り出し、カチリと火をつけた。旨そうに煙を吸いこみ、長々と吐き出した。

声が震えた。

「ちょっと待て」

じろりと、ぶ厚い眼鏡の後ろで、視線が移るのがわかった。

いったい、「変化」はいつ、あらわれるだろうか。万人が凶暴化するわけではないと、カヲリは言っていたが……おれはいつでも爺さんの心臓を撃ち抜けるよう、ポケットに手をかけた。実際に「変化」がおとずれてからでは、遅すぎるのだけれど。

恐るべき煙草を口の端にくわえたまま、かさかさの唇がニヤリとゆがんだ。

「ほお、こいつに反応しおったか」

「なに？」

「残念ながら、こいつはダミーだよ。何かが売れれば、必ず贋物や、まがい物を作るヤカラが出てくる。市場原理の基本じゃないかね」

「あんたも含めて、かい？」

「話が早くて何よりだよ、お若いの」

半分だけ警戒を解いた。

「一本試させてくれないか」

「煙草をたかるのが上手いのう、お若いの」

マキのナイフ投げに匹敵する正確さで、煙草が一本だけ飛んできた。さすがに点火するのがためらわれたが、冷ややかな視線を感じて、バンジージャンプする思いでマッチを擦った。吸い慣れた、合成煙草の味しかしなかった。

こいつが単なる地底の浮浪者ではなく、闇煙草、というか贋麻薬作りも兼ねているのなら、追い剥ぎなどしなくても、食っていけるのは道理だ。むろん、ブローカーが一枚噛んでいるのは間違いない。

爺さんは仲介者から原料を受け取り、加工して手渡す。そのための機械くらい、簡単に自作できるだろう。

が、しかし、

「なあ、爺さん。そいつはずいぶん危険な商売じゃないのかい。古めかしい経済用語を使えば、リスクがでかすぎるってもんだ」

当然そんなことをすれば、船内の自治団はおろか、麻薬密売組織側からも睨まれる。いずれ地底まで追手がたどり着くのは、時間の問題だろう。なのに命を懸けるほど、金になる商売とはとても思えない。

「なんでこんな、ややこしい真似をするんだ」

「愉快だからさ」

片方だけ、眉が吊り上がるのがわかった。こいつならやりかねないと思う反面、どうも誑かされているような気がして仕方がない。たちまち舌を出してトンボ返りすれば、爺さんはキツネに、モグラは岩にドロンと変わるのではないか。

そうこうするうちに、周囲がだいぶ暗くなっていることに気づいた。モグラは影法師と化しつつあり、赤い「眼」だけが輝きを増すようだ。間違いなく人工光であるのに、暮れてゆくのはどういうわけだ？　おれの戸惑いを察したように、爺さんはカラカラと笑った。

「地獄にも昼夜はあるよ。ここの明かりは要塞だった頃の残留太陽電池に因っておるのだが、いかんせん供給量が少なくての。日が暮れると、自動的にほとんどカットされてしまうのさ。時にお若いの、モノは相談なのだが、ワガハイをお前さんの家に、一晩泊めてもらえんだろうか」

黙秘権を行使していると、爺さんはさらにまくし立てた。

「なに、忽然とレーダーに影が現れたのだから。お前さんがサイキックでなければ、あとは、よほど気の効いた隠れ家から出てきた可能性しか残されておらん。ワガハイ、今の暮らしにこれといって不足は感じぬが、人間の習性というやつでな。たまには、屋根のある所で寝たくなる」

「屋根なら、頭の上に最初から、ばかでかいやつがついているだろう。雨が降るわけでもあるまい」

「雨ならたまに降ってくるわい。排水とオイル混じりのやつがな。排気口の向き次第では風も吹く。夏は熱風、冬は寒風が三日三晩吹き止まない。さすがにそんなときは、汚染地帯で野宿したほうがマシだと嘆きたくなるよ。それに……」

レンズの奥で、爺さんの目がキラリと光った気がした。急に箱ごと投げて寄こした煙草は、数本を宙にばらまきながら、弧を描いておれの手に収まった。蝕腕を伸ばした蛸の化け物は、薄闇の中で息づいているようだった。

「ワガハイと懇意になったほうが、お前さんにとっても、何かとお得なんじゃなかろうか。詳しい事情はわからんが、こいつの出所を追っているんだろう」

44（1）

44

「マキ、おれだ。風呂は済んだか？」

ノックしつつ声をかけた。おれの隣では、よれよれの大きな鞄を一つ提げて、爺さんがもの珍しそうに、錆の浮いた鉄扉を眺めていた。背後には、太古の怪物のように、モグラが黒々と横たわっている。

「ほほお、気の効いた隠れ家だわい。まったく、遺棄されたコンテナが転がっているようにしか見えんて」

しきりに感心する小男の隣で、おれは溜め息をついた。じつに爺さんは、頭二つぶんくらいは小さい。こんな得体の知れない小怪物を、中に入れてしまってよいものか、まだ心の隅で迷っていた。マキの意向次第では、追い返そうと思案するうちに、中から声が応えた。

「済んでるわ。さっきちょっと部屋が揺れたけど。だいじょうぶなの？」

「まあな。ところで、お客さんを連れて来たんだが」

「は？」

彼女は絶句した様子。爺さんとの経緯を説明すると、少し考えてから、「直接話させて」と言う。目顔で合図したところ、爺さんは親指を立てた。ドア越しに、マキが尋ねた。

「あなたの名前は？」

「久しく呼ばれておらんから、思い出すのに苦労するわい。たしかトリベノといったかの。ファーストネームは忘れた」

やはりどこかで聞いた覚えがあるが、思い出せないまま。

「船の人間？」

「例えるなら、船倉に忍びこんだ密航者といったところだよ」

「わかりやすい例えね」
「しかも幽霊船の船倉だからのう。化け物の宝庫であり、どこへ行き着くアテもなし」
マキは少し笑ったようだ。この爺さん、見かけによらず、女の子の機嫌をとるのが巧みだ。そう考えながら目を向けると、またしても親指を立てやがった。マキは言う。
「オーケー。エイジ、入ってもらって」
おおいに不満ではあったが、ロックが外される音を確認して扉を開けた。マキは何事もなかったように仮面を被り、同じ服を身につけていた。洗ったあと、速乾粉をまぶして絞ったのだろう。多少、香水がきついのは、ゴクツブシの体液の臭いまで、消せなかったものとおぼしい。
トリベノは彼女の姿をみとめると、オペラ歌手のようなお辞儀をした。レードルを片手に、マキはくすぐったそうに肩をすくめた。
「ちょうど夕食を作りすぎたところ。三人前はあるけど、よかったらご一緒にいかが？」
「願ってもない。セニョリータの手料理なら、例えゴクツブシのチリソースでも、喜んで」
苦虫を噛み潰しているおれの隣で、爺さんはまた貴族的に腰をかがめた。二十分後には組み立て式の食卓を三人で囲んでいた。トリベノの白髪には、ヘルメットの跡がぺったりとついていた。ぶ厚い眼鏡はかけたまま、よほど腹が減っていたのか、旨い旨いと騒ぐかたわら、道化芝居のように料理を詰めこむ。
ちなみにマキは、仮面の可動部分をわずかに持ち上げ、食べ物をスプーンで器用に口へ運んでいる。あまりにも自然な光景なので、おれは瞬時、それが仮面であることを忘れかけた。そういえばトリベノも、最初から彼女の仮面など存在しないように振る舞っていた。おれは尋ねた。
「あんたの見立てじゃ、この隠れ家はどれくらい安全なのだろう」
「いや、実際、驚いたわい。カモフラージュは完璧。強度もちょっ

としたシェルターに匹敵する。お前さんさえ、のこのこ出て来なければ、きっとワガハイもあの子も、見過ごしておったろうて」

あの子？　と首をかしげるマキに、モグラだよとおれは答えた。膨張パンを頬張ったまま、爺さんは真っ赤になって青筋を立てた。

「あの子をモグラ呼ばわりせんでほしい。ジュリエットという立派な名前がついておる。まあ、お嬢さんには、夜が明けてからご紹介しようかの」

食卓が整うのを待つ間、爺さんはもう一度外に出て、モグラ……いや、ジュリエットを瓦礫の間に隠し、シートをかぶせたのだ。どこも操作しないのに、赤い「眼」が薄くともり、ゆっくりと消えるのをおれは見た。まるで眠くて仕方がないといったふうに。

「一晩、無事に明かせればの話だが」

「おいおい、縁起でもないことを言うな。さっきあんた自身が、太鼓判を捺したばかりじゃないか」

44（2）

ニヤリと笑った口の端に、爺さんは煙草を挿しこんだ。かさかさの手の中で、パッケージの毒々しい絵柄が映えた。今にも蝕碗を蠢かせそうな怪物を眺めながら、無意識に眉をひそめた。やはり、こいつを中に入れたのは間違いだったのだろうか。

煙を吐き出して、トリベノはつぶやく。

「お嬢さん、退化猿人をご存知かな」

「名前だけなら」

「ほお、どこで耳にされた？」

「父が言っていたわ。死ぬ前の父は、脈略のないことを口走るようになっていたけど。なんでも、そいつが急に殖えはじめたせいで、地下でなく、船外へ脱出することにしたとか……」

無言でうなずいて、トリベノは煙草を揉み消した。かたわらの鞄を引き寄せると、右腕を突っ込んで、掻き回しはじめた。みょうなものを出したら、ぶっ放す気でいると、やがて帆布の切れ端に包まれたかたまりをサルベージした。

テーブルにスペースを作り、油の染みた帆布を載せた。果実の皮を剥くように包みが解かれると、オレンジ大の、白くかわいたものがあらわれた。

「サルの頭蓋か？」

にゅっと突き出た二本の犬歯が、まず目をひいた。下顎は欠いている。眼窩が大きくえぐられ、頭は後方にひしゃげている。人間の頭蓋の面影を留めてはいるが、ずっと野性的かつ攻撃的な印象。頭蓋そのものが、ひとつの鋭利な兇器をおもわせた。

しかしいったい、この骨から発せられる、異様にまがまがしいインパクトは何なのだろう。古来、原始人類の化石を追う学者に変死者が多いと聞く。もしこいつがただのサルではなく、人類に繋がる進化の枝に属するものならば、それもわかる気がする。見てはいけ

ないもの、あってはならないものを、目の当たりにしているようなのだ。

牙を剥いた頭蓋は、あまりにも背徳的な人類誕生の秘密を、今にも語りはじめそうである。存在のまがまがしさにおいては、ＩＢをはるかにしのぐ「人類」がなぜ生み出されたのか……

「あまり凝視するのは危険だよ。骨になってもなお、こいつは見る者を悪夢へ引きずり込むよ」

ハッとして顔を上げた。おれと目を合わせて、トリベノはまたニヤリと笑い、白い骨の上に手をかざした。手品師のようにもったいをつけたあと、くるりと骨を裏返した。マキが小さな叫び声を上げ、おれも咽の奥でうなった。サルの頭蓋の裏側は、顎はおろか、頭骨の裏側にいたるまで、尖った歯でびっしりと覆われていた。

「とても尋常な生物とは思えない」

「厳密に生物と呼べるかどうか、ワガハイにも心もとない。いかんせん、専門外なのでな」

「生物でなければ何だというんだ。現に頭蓋骨を遺しているじゃないか。機械生命体なら、外骨格の筈だろう。内部骨格をもつＩＢなんて、聞いたことがない」

そう。アマリリスを除いては……

「誰もＩＢだとは言うておらん。なるほど、現実と悪夢に片足ずつかけて、またがっているようなところは、ＩＢと似ているかもわからん。実際こいつを手に入れた当初、ここまで多くの歯は生えておらんかった。どうやらこいつは、骨になってもなお、現実を浸蝕する能力を有するらしい」

「いったいこれは？」

「退化猿人だよ」

部屋の温度が一気に下がった気がした。トリベノは怪物の頭蓋を、再び帆布で覆った。帆布が発するひどい油の臭いが、怪物の封印に役立っているのかもしれない。鞄に仕舞われると、ホッとせずにはいられなかった。トリベノはまた煙草に火をつけた。

「なぜこんなものが出現したのか。北方の都市では、人型のワームがあらわれたと聞くが、どうもワームやＩＢとは、発生の系列が異なっているようだ。ワームが人工生生命体の退化した存在だと仮定すれば、こいつは文字どおり、退化した人間だよ」

そんなばかな話があるだろうか。遺伝子の流動性が高い機械生命体と違って、人間の「進化」は気の遠くなるような時間を経たものだ。そうそう短い間に、遡行できるものではないだろう。たしかにクロック鳥のような、短期間で大増殖した突然変異体はよく見かけるが、かれらは決して「退化」したわけではない。

うわ言のように、それらの疑問を口にすると、爺さんにしては珍しく、気難しそうにうなずいた。

「生物ならばな、そういう理屈も当て嵌まるかもしれんが。少なくとも退化猿人に関しては、古典的な進化論は通用しない。ダーウィンを飛び越えて、ユングの領域に足を突っ込んでいるのだよ。その点もＩＢと似ておるかの。いずれにせよ……」

「物理的な障壁がどれほど役にたつか、保障の限りではない」

マキが言葉を受けて、そうつぶやいた。隠れ家の鉄壁も、アテにならないというわけだ。トリベノはまたうなずき、天井へ向けて煙を吐いた。贋麻薬の煙の中で、電灯の光がにじんだ。

45（1）

45

もの音を聞いたのは真夜中頃だろうか。

夜気に浸されて、電灯の明かりが心なしか暗くなったように感じた。

マキとトリベノは、毛布にくるまり、思い思いに横たわっていた。仮面の中に、マキの寝顔は確認できないが、軽い寝息が夢の中にあることを示していた。爺さんのほうは、折れ釘のように腰を折り曲げ、周期的にイビキをかいては、静まることを繰り返した。さっきイビキが止んで数分後に、例のもの音が響いたのだ。

カリカリと、入り口のドアを、外から爪で引っ掻くような音である。

おれは壁に寄りかかったまま、本から顔を上げた。虫食いだらけのこの本は、『電気技術の歴史』という、カノウ氏が無聊をなぐさめる目的で持ち込んだものとおぼしい。専門書かと思いきや、なかなか楽しい読みもので、とくに天才的変態科学者、ニコラ・テスラに割かれた章は、そのへんの三文小説よりもはるかに面白かった。

音は続いていた。

ともすると、常に響いている重低音に掻き消されるほど、かすかな音だ。けれど確実に、ドアの下から四十センチほどの部分を、恨みがましく、執拗に引っ掻いていた。

う、ん、とマキがうなって、寝返りをうった。おれは肩にかけた毛布の下で、脇のホルスターに手をしのばせた。パイソンのグリップは兇器特有の冷たさを維持しており、不安を静めるのに役立った。

十五分ほどして、音はぱたりと止んだ。かわりに、ククッ、という、含み笑いするような、気味の悪い声が聞こえた。しかも爪の音と異なり、明らかに部屋の中から聞こえたのだから……

（やれやれ）

おれは右手の位置をずらし、ジーンズのポケットからＭ３６を抜いた。

本を片手で支えた体勢のまま、室内に視線を走らせた。マキがまた苦しげな声を上げた。反射的にそちらへ目をやったとき、叫び声をおし殺すのに、すさまじい労力を要した。なかば毛布をはだけて、うんと仰け反った彼女の胸の上に、得体の知れない怪物が鎮座していたのだ。

大きさは人間の赤ん坊くらい。尖った耳。落ちくぼんだ眼窩。陰々と、赤く光る目。剥き出しの鼻孔。その下で、ものすごい笑みを浮べる口からは、白い二本の牙がにゅっと飛び出していた。ミイラ化した両棲類のような皮膚は、ぬめぬめと粘液に覆われた緑色だ。いちいちトリベノの挙げた特徴と一致する。退化猿人に間違いない。

膝を抱えるような姿勢でうずくまったまま、化け物は再び、ククッと鳴いた。いや、笑ったというべきか。こんなにも「黒い」笑みが存在するのかと思うほど、化け物の声は暗く、牙を剥いた顔はあまりにも陰惨である。

撃つべきか撃たざるべきか。

むろんこの距離からなら、Ｍ３６でも、抜き撃ちに頭を吹き飛ばす自信はある。一刻も早く殺すべき相手だということは、本能が理解している。ただし、こいつのスキルがわからない。スキルという語は不適切かもしれないが、新種のワームや未確認ＩＢは突然変異によって、次々と新たな身体機能を身につけてゆく。まるでスキルアップするように。

つまり頭を吹き飛ばしたところで、それがいわゆる本当に「頭」なのかどうか、経験によるデータがない以上、わからないということだ。事実、頭部がまるごと別個の寄生虫というワームが存在する。

寄生虫は感覚機能を請け負うかわりに、本体から栄養をもらっている。もしも頭部、すなわち寄生虫が損なわれても、別の虫とすげ替えればよいわけで、余裕があれば、二つ、三つと「予備」を飼う

ことだってできる。ほとんど悪夢に等しい生態だが、ワットの言いぐさを借用すれば、何が起きても不思議ではないのが、現代世界だ。

もしも何らかの理由で、やつが頭部を撃ち抜かれても死ななければ、次の瞬間、マキの心臓がえぐられる恐れがある。現に、彼女の乳房をつかんでいる化け物の指先には、太く鋭い爪が見え隠れしている。どうやら伸縮自在らしく、伸ばせば一本一本が軍用ナイフなみの兇器と化すだろう。

「やはり来おったか」

「なに？」

「あの娘が、そこまで大きな闇を抱えておったとはな。なに、いかにも夢見の悪そうな、お前さんが寝ずの番についたもんでな。やり過ごせるかとも考えたが、やはり人間が三人も集まっておればなあ。静かに寝かせてはくれなんだ」

見れば爺さんは依然として被皮ワーム、通称モンタムシのように毛布にくるまったまま、もごもごと口だけを動かしている。けれど、寝言にして筋が通りすぎている、というより、寝言だと考えるほうがナンセンスである。おれは唇だけわずかに動かし、小声で尋ねた。

「どうすればいい？」

45（2）

モンタムシはこたえた。

「簡単だよ。頭を吹き飛ばせばいい」

「しかし……」

「いいか、お若いの。お前さんは、弾が効かなかった場合のことを恐れておるようだが、プロのガンスリンガーにあるまじき妄想だわい。なるほど、例えばリビングデッド化した人間であれば、何発弾を撃ちこんでも倒れんだろう。が、人間と退化猿人とでは、ウエイトが桁外れだろうに」

絶句した。

トリベノの言うとおり、我ながらプロにあるまじき固定観念に囚われていた。いくらマキを盾にとられて取り乱していたとはいえ、これほどの判断ミスはかつてなかった。堰を切って押し寄せる根本的な疑惑に答えるように、トリベノは語を継いだ。

「つまりそれがやつの力の一部なのだよ。不安や恐怖心を経由して、人の心をハッキングするのさ。だから何も考えるな。そうして、目を狙うことだ」

これ以上、躊躇する暇を自身に与えないために、迷わず銃口を前に突き出し、引きがねをひいた。あやまたず、目を撃ち抜く手ごたえを感じた。予期したとおり、緑色の怪物はマキの胸の上から吹き飛ばされ、扉の上部の合板に叩きつけられた。断末魔の両棲類をおもわせる、不気味きわまりない悲鳴を張り上げながら。

悪夢から急に覚めた動作そのままに、マキがびくりと跳ね起きた。と、爺さんが意外な素早さで横っ飛びに跳んで、彼女の腕をつかみ、激しく揺さぶった。

「どうしたというの!?」

「退化猿人に侵入されたわい。なるべく扉から離れなされ」

もはや彼女は寝ぼけてはいかなかった。素早く状況を理解すると、

爺さんとともにジュードーの受け身の要領で転がって、壁まで後退した。銃を構えたまま一歩進んで、おれは二人を背中にかばう恰好。見れば、化け物は逆さまに扉の上に張り付いたまま、血まみれの顔におぞましい笑みを浮べていた。

ククッ、ククッという痙攣的な笑い声が、蠢く咽から発せられた。

「くそっ。まだ、生きているのか」

うしろから、銀の光がまっすぐ飛んで、扉の上で、どすんと音をたてた。マキの投げたナイフで腹部を串刺しにされて、退化猿人は四肢をばたつかせ、また狂気じみた悲鳴を上げた。続けておれが残り四発を撃ちこむと、腐ったズクロアの実のように頭部が弾けた。長い腕がだらりと垂れ下がり、血をしたたらせながら、ぶらぶら揺れた。

最初、頭部をえぐられた跡から、内臓が垂れ下がってきたのかと思われた。けれど、腸のように見えた一本一本が、幼体ワームをおもわせて蠕動をはじめ、ナイフに絡みつくと、自身の体ごと、合板から引き抜こうともがき始めた。そのさまは、頭足類の蝕碗にほかならなかった。

蝕碗のうちの一本は先端が異様に膨れていた。やがて膿みただれたように裂けて、中から赤い眼球があらわれた。背中でマキの短い悲鳴を聞いた。

「何なの、こいつ」

「さて、こうなると厄介だわい」

もう一本投げつけようとした彼女を、トリベノが制するのが、気配でわかった。怪物の蝕碗は蠢き続けている。その動きは、壁の染みを凝視するうちに、生き物じみてくるさまと、どこか共通するようだ。こちらの頭は、はっきりしているつもりでも、幻覚を見ているような感じが抜けないのだ。

怪物は頭部を失いながら、またしても、ククッと笑い声を発した。まるで呼応するように、別の一角から、ケケッ、と鳴く声が聞こえた。

視線を移すと同時に、新たに弾を装填し終えたM３６の銃口を向けた。天井に近い壁際に赤い目が二つ、不吉な星のように、陰々と並んでいた。次の瞬間、影のかたまりが飛翔した。太古に滅んだ大蛙のような声を張り上げて、ムササビかコウモリをおもわせる、手と足の間の皮膜を広げて。

意想外な行動であったため、トリガーをひくタイミングを逃した。二匹めの退化猿人は電灯に激突し、唯一の照明を叩き壊した。まずい！　おれは爺さんとマキの体を引き寄せ、ともにぶっ倒れるように、床に伏せた。頭上すれすれを、おぞましい叫びとともに、カミソリのような翼が通過した。鋭い足の爪がマキの鉄仮面をかすめ、火花を散らした。

「痛いわね、こん畜……！」

彼女は絶句したようだ。見上げると、闇と化した室内の至る所に、赤い光点が浮いていた。背筋を冷たいものが何度も走った。少なく見積もっても三十匹はいるだろう。

「なあ爺さん、ここでおれたちが惨殺されたら、密室殺人の成立だな。死体を発見する者がいればの話だが」

「この期に及んで、笑えないパーティージョークだわい。ワガハイも気づかなんだが、どうやら最初からこの隠れ家は『汚染』されておったようだ。やつらにとっては、通り道も同然の」

「ゴタクはいいから、解決策があれば教えてくれ」

45（3）

「とりあえず、二人とも下手に動いてはならぬ。武器は厳禁。とにかく、ちょっと待っておれ」

とても対策とは呼びがたい意見だが、従うほかに、どうしようもなかった。

退化猿人どもの眼光は熱をもつのか、闇がねっとりと、肌に纏いつくようだ。何かがぞろぞろと蠢く、おぞましい気配が大気を満たし、奇怪な含み笑いや、わけのわからない話し声がそれに混じった。この中でじっとしているのは、なかなか至難の技である。

マキの細い肩が、かすかに震えているのがわかる。常人ならヒステリックに叫びだしているところ、仮面の下で唇を噛んでいるのか、懸命に沈黙を守っている。そのことが、彼女がこれまで耐えてきたプレッシャーのすさまじさを想起させた。

ここで忘れずに明記しておかねばならないのは、トリベノが何らかの装置を操作した形跡が全くなかったことだ。むろん、大昔のニンジャ小説のように、呪文を唱えたり、印を結んだりもしなかった。ただ小声で「伏せろ」と言ったばかりである。

轟音と頭上をすっ飛んで行くドアは、掃討車による襲撃の再現といえた。怪物どもはかん高い警戒音を張り上げ、翼を広げて飛び回った。しかしいったいあの頑丈な鉄扉を、何者がスッ飛ばしたのか。顔を上げて見れば、土煙にかすんで、上下に二つ並んだシグナル状の赤い光が、闇の向こうから覗いていた。

モグラだ。

「ジュリエットだと言うに」

何も言っていないおれの頭を、トリベノはポカリと殴った。それを合図に、おれはマキの手を引いて駆け出した。このあたりも昨日の体験そのままだが、今回は走る方向が反対だ。信じがたい素早さで、爺さんはとっくに先頭を駆けていた。ヘルメットの上から怪物

に蹴られて、痛てっ、などと間の抜けた声を上げる。おれは頭上に毛布をかざし、彼女ごと包む恰好。

ここだここだ、と言わんばかりに、モグラは赤い「眼」を明滅させた。まっ先に飛び出した爺さんは、巨大な爪を足がかりにボンネットを踏み越え、運転席に転がりこんだ。この爪が、扉をぶち壊したのに違いない。おれたちも跡に続くと、すでにレバーを握ったトリベノが、顎で後ろを指した。運転席と荷棚の間に隙間があり、二人くらいはなんとか納まりそうである。

「しっかりつかまっておれ！」

いったい何につかまればいいのかと突っ込む間もなく、トリベノはレバーを、めいっぱい後ろに引いた。ぎゅるぎゅると、キャタピラが空転する恐るべき音が響いた。さすがにマキが悲鳴を上げた。振り落とされなかったのは奇跡である。背後で瓦礫を粉砕しながら、モグラは猛然と後進した。

星が見えたような気がする。けれどもそれは、おれの目から飛び出た星だったのかもしれない。

「エイジ、撃って！」

マキの声で我に返った。いつの間にかモグラは頭を前にして、すさまじい土煙を生み出しながら進んでいた。土煙の中に赤い星が揺らめいた。こんなに赤く輝く人工衛星は見たことがない。ぼんやりとそう考えたとたん、憎悪をぎゅっと凝縮したような顔が面前で牙を剥いた。

ギィィィーーーーッ。

額を撃ち抜いた。トリベノの頭にとまった一匹を、マキがナイフで両断した。血や臓物が飛び散り、蛾とも鞘翅類ともつかない昆虫と化して逃げ去った。Ｍ３６を撃ち尽くし、パイソンを抜こうとした手をマキが留めた。周囲から、不吉な星々はすでに消えていた。

やがて熱病じみた光が、徐々に闇を溶かしはじめた。地底におけ

る夜明け。ようやく発電機が息を吹き返したらしく、少なくとも、闇を棲みかとする化け物どもの襲撃からは、一旦逃れられたことを意味する。壁だけ残った建物の脇でモグラが止まり、トリベノの背中が大きく伸びをした。

「ケガはないかね？」

「安全運転のおかげでね。盛大にたんこぶをこしらえた程度さ」

「お前さんの脳細胞は、ちょっと刺激を与えたほうがよいかもしれんよ。一服するかね」

肩越しに投げてよこした箱を、あやうくキャッチした。どうやら爺さん、隠れ家に持ち込んだ頭陀袋を、しっかりつかんで逃げたらしい。しかめ面を浮べて、贋麻薬の封を切った。火を探してポケットをまさぐっていると、隣からマキがマッチを差し出した。彼女もまた、リュックを持ち出すことを忘れなかったようだ。

おれはというと、毛布を一枚、引っつかむのがやっとの有様。しかもそいつは、怪物どもの空襲にさらされて、見るも無残に裂かれていた。煙を吐きながら苦笑いを浮かべ、毛布を外に放り出した。その下から、例の『電気技術の歴史』があらわれたときは、我ながら呆れた。

こんな役にもたたない古本を、後生大事に抱えて逃げたらしい。

46（1）

46

モグラはゆっくりと走っていた。時速五キロも出ていないだろう。マキは荷物の上に座り、おれの肩の辺りで、足をぶらぶらさせている。トリベノは頭の後ろで指を組んで、呑気そうに煙草をふかしている。アクセルを踏んでいるのは確かだが、あとは手放し運転。たまに瓦礫を避けてカーブするとき、どうやっているのか、さっぱりわからない。

そろそろ正午くらいだろうか。

相変わらず、瓦礫の荒野が続いていた。永遠の黄昏をおもわせる、赤い光に照らされた世界は、文明の滅びた未知の惑星といったところか。

「おい爺さん、行くアテでもあるのかい」

目の前で、傷だらけのヘルメットが横に振られた。今さらながら、おれは呆れた。

「アテもなく走っていたのか。あんたにだって、一応、仕事があるだろう」

「働くのは趣味じゃないんでね。よほど食うにこまらん限り、こうしてぶらぶらしておるよ。まあ、定住するよりは、常に動いていたほうが安全という面もある。そのことは、お前さんたちも夕べ思い知ったばかりだろうて」

「ね、トリベノさん。あなたは何を探しているの？」

マキの声に反応したように、モグラが前進を止めた。どっ、どっ、と、しゃくり上げるようなエンジンの音。真っ黒な排ガスのにおいは、明らかにガソリンとは異なる。燃えるものなら何でも燃料にしてしまう、八幡ブラザースの車を連想させた。短くなった煙草を、トリベノは、ぷっと吹いて捨てた。

前を向いたまま、かれが乾いた声でつぶやくまで、十二秒ほど要した。

「探しても仕方のないものを、だよ」

「わたしの父も探していたわ。というより、偶然、探し当ててしまったと言うべきかしら。決してそこにあってはならないものを」

トリベノの肩が、痙攣的に震えるのがわかった。次に振り返り、肩越しに彼女を見上げたが、ぶ厚いレンズのせいで、目の表情は読み取れない。沈黙のあと、かれは溜め息をついた。

「飯にしよう。ワガハイの腹時計が、正午の時報を鳴らしておる」

エンジンが切られ、震動が止まった。マキはけれど、それ以上追及しようとしなかった。

車から降りると、細かい瓦礫が、防酸靴の下で、ぱりぱりと踏み潰された。周囲にはとくに障害物はなく、見晴らしがいい。昼飯を食うには比較的安全な場所といえるだろう。マキは持参したリュックの中から、缶詰をいくつか取り出した。トリベノが荷台にもぐりこみ、加熱器やら食器やらを引っ張り出してきた。

おれはやることがないので、コンクリート塊にもたれて、『電気技術の歴史』を開いた。泥炭の燃えるにおいを嗅いでいるうちに、うとうとして本を取り落とした。

「少し眠ったら？　昨夜は一睡もしてないんでしょう」

彼女の声には笑いが混じっていた。目から星を出している間に、一睡くらいはしたかもしれないが。苦笑しながら本を取り上げ、何気なく眺めて首をかしげた。乱丁本らしく、中ほどのページが白紙になっている。一枚めくると、そこも白紙。さらに一枚めくったところで、思わず咽の奥から唸り声が洩れた。

急いで顔を上げると、二人は食事の準備に夢中で、こちらは見ていない様子。本に鼻をくっつけるようにして、もう一度目を落とした。両側の白いページには、同じものを描いたらしい、いくつかのスケッチが描きこまれていた。お世辞にも上手いとは言えず、急いで描いたような、簡単なスケッチだったものの、おれの心臓を瞬時

に凍りつかせるには充分だった。

（こいつは……）

中心に「眼」が嵌めこまれたタマネギ型の機械。根にあたる部分には、無数のケーブルが接続され、八方に分岐している。芽の部分は上部で水平にカットされているが、省略した表現なのか、それとも本来こうなっていたのか、わからない。

とにかくこの簡単なスケッチの全体から醸されるおぞましさは、言い表しようがない。まるで狂気のビジョンを、そのまま描き写したようである。ひとつの巨大な「眼」をもつことから、オディロン・ルドンの悪夢的な版画を連想させるが、背徳的なまがまがしさは比べものにならない。

震える指でページをめくった。これ以上見ていたくないという思いに駆られて。そこにも鉛筆で描いたらしい、略図がかき込まれていた。一種の立体的な地図というべきか。これこそカノウ氏が見た「ここにあってはならないもの」の位置を示した地図に違いあるまい。

さらに一枚めくった。これまで文字は確認されなかったが、そこには一ページに一文字ずつ、二文字が見開きいっぱいに書きなぐられていた。

球根！

46（2）

カノウ氏の書き込みはそこで終わっていた。

本を閉じて、無意識に膝の上に押しつけた。おそらくまっ蒼になっているだろう、顔を上げると、やはり二人ともこちらを見てはいない。マキはともかく、とくにトリベノにこのことを告げてよいものか。もしも彼女が睨んだとおり、かれが球根を……いや、

バルブを追い求めているのだとしたら。

「エイジ、まだ寝ぼけてる？」

びくりと肩が上下した。首筋を伝う、冷たい汗の感触。強いて微笑んでみたが、笑顔に見えたかどうか心もとない。極力さりげなく本を上着の中に押し込み、かれらに近づいた。

加熱器の上に鍋がかけられ、缶詰の青菜と肉が煮えていた。大きなスプーンで、マキが食器に取り分けているところ。

飯を食う気分ではなかったが、胃は温かい食事を喜んでいるようだ。あらためて、自身の貪欲なまでの生命力には呆れてしまう。狂乱の果てに朽ち果てようとしている、この世界を目の当たりにしながら、なおもおれの体は食い物を求め、生きようと欲している。呆れるほど図太い神経に支えられて。

とある学者の統計によれば、現代人はおよそ五百年前の人間と比べて、放射能への耐性が二十倍以上高いのだとか。五百年前といえば、限定的民主主義の時代か。もしもかれらをタイムマシンにむりやり乗せて、この世界に連れて来れば、一週間を待たずに死を迎えるだろうとその学者は述べていた。

「ここでほかに人を見たことがある？　もちろん、煙草屋とわたしたちを除いて」

金属のカップにあやしげな紅茶を注ぎながら、マキが尋ねていた。爺さんは口の端に煙草を挿しこんだ。

「人、という定義にもよるがの。ヒトのカタチをしたものなら、案

外よく見かけるよ」
「みょうな言いまわしだな」
おのずと眉をひそめた。ヒトのカタチをしたヒトでないものといえば、どうしても「擬人」を思い浮かべてしまう。あるいはヒトの成れの果てであるという、退化猿人をも。
おれはついに、カノウ氏の書き込みについて話さなかった。本はさりげなく丸めて、ホルスターの脇に突っ込んでおいた。さいわい、マキも爺さんも本の行方には無関心で、追及する気は全くないようだ。トリベノは言う。
「生粋の船の人間で、ここへ落ちて来る者は極めて少ない。その点は、お嬢さんも心当たりがあるだろう」
マキはうなずいた。カノウ氏がここに隠れ家を作ったのも、おそらくは船の人間の目から逃れるためだった。
「逆に幽霊船の船底といえば、ある意志をもった外部の者たちの間では、けっこうな名所でな」
「ある意志とは？」
「みずから命を絶つための、さ」
「いわゆる、象の墓場か」
「なかなかの詩人だね、お若いの。たしかに、象の墓場というのは、人の願望が生み出した詩なのかもしれん。なぜ絶望した多くの人間が、こんな所に死に場所を求めてやって来るのか、なぜ社会に背を向けたあと、世界の果てを目指すのか。ひとつの文化人類学的謎としか言いようがない。中でもこの場所は、生と死の境界が限りなく曖昧な所での」
眉間にシワを寄せて、トリベノは煙を吐いた。永遠の黄昏を背景に、煙は奇態な頭足類のように身をくねらせた。かれは続けた。
「例えば、瓦礫がちょっと小高くなった辺りに人影が見えたとする。五人以上が一列になって歩いていたとする。お揃いの白っぽい服を着ているのかと思って、近づいてみれば、皆、三メートルを超える背丈で、全身がぼうっと光っておるのだよ。顔の特徴もわからない

のっぺらぼうでな。瓦礫の丘を越えたところで追いついてみると、跡形もなく消えておるのだよ」

「とんだ怪談話だな」

「さよう、このての話には事欠かんよ。水溜りの中に、何だかわからないものがいるのを見たこともある。深さ五メートルばかり溜まった汚染水の中を、そいつは這っておるのさ。やはり白っぽい全身がのっぺりしておって、太い尻尾のようなものが、生えかけておったな」

マキに目を遣ると、仮面の口もとを手で覆っていた。話題の方向性を変える必要がありそうだ。

「もしかすると、あんたの煙草には少しばかりホンモノが混ざっているんじゃないか。おれたちが知りたいのは、そんな幽霊の類いではなく、より素性のはっきりした連中についてだ。例えば……」

「イーズラックのような」

言葉を継いだマキへ、トリベノは鋭い視線を向けた。これまで見たことのない眼光が宿っていた。かれが何か言おうとしたとき、かたわらで猫が鳴いた。

猫が？

47（1）

47

泥炭のほの暗い炎が、異物のように居座っていた。

繰り返しになるが、現在、デイタンという単語は本来の意味をとっくに失っており、可燃性の汚染物質くらいのニュアンスで用いられる。むろん、多少なりとも放射性物質を含んでいると考えられるが、気にする者はあまりいない。気にしていては、この断末魔のような世界では生きていけない。

地上が日没を迎えると同時に電気の供給がカットされ、地底は再び闇につつまれた。おれとマキは、ここへ来て二度めの夜を迎えた。歓迎する気などさらさらなくとも、この黒マントの影法師は必ずやって来る。ほとんどが夜行性であるワームどもや、あのおぞましい退化猿人を引き連れて。

もとは何の施設だったかわからない、ドーム状の壁の内側に、おれたちは身をひそめていた。壁の割れめからモグラを引き込んでも、半分ほど余るスペース。トーチカに似ており、現に、銃眼をおもわせる小さな窓がいくつか開いていた。

缶詰を温めた夕飯のあと、おれたちは泥炭のまわりにうずくまり、ぼんやりと赤黒い炎を見つめていた。長い間、口をきく者はだれもいなかった。

当面、懸念されるのは、退化猿人の再襲来である。怪物どもは明らかに知能らしきものを有している。行動の根底には、まるでＩＢのような人間への憎悪がうかがえる。復讐にあらわれないと考えるほうが不自然だろう。

とはいうものの、おれの頭は、何度も膝の上からすべり落ちそうになった。ごく短い夢が断続的に、あらわれては消えた。要するに、こくりこくりと、なかば居眠りしている状態。いつ化け物が襲って

きても不思議ではない状況にありながら、あまりにも甘美な睡魔の誘惑に屈しかけていた。

泥炭の向こうで、爺さんはあぐらをかいて座り、しきりに猫の背を撫でていた。漆黒の、つややかな毛並みの上を、骨ばった手がすべると、静電気なのか何なのか、細かな緑色の火花がこぼれた。黒猫は糸のように目を細くし、ときおり咽の奥から、ごろごろと声を洩らした。

トリベノの視線は、けれど、猫の赤い首輪の上に、じっと注がれていた。注視するだけで触れようとはしなかったが、少なくともジャンク屋の一彦が言ったことと、同じ事実に気づいているのは確実だろう。

モグラはシルエットと化したまま、沈黙を守っていた。「眼」の光も消えて、爪を揃えてうずくまった姿は、眠れる異獣そのものだった。マキはナイフの手入れに余念がなかった。ずいぶん減りもし、退化猿人の血で汚れたりしたナイフたちを磨き、帆布の上に一本ずつ並べてゆく。おれはまだ、例の絵地図のことを切り出せずにいた。

引き潮のように、また意識が遠退いてゆくのがわかった。

声のしたほうを振り返ると、瓦礫の間の暗がりで、ちかちかと瞬く緑色の星が二つ見えた。もう一度可愛らしい声がして、それが生きた猫の目にほかならないことを確信させた。

ある意味、ＩＢと出くわすより驚きは大きかった。こんな場所に、小型の哺乳類が単独で棲息できるイワレはない。なんらかの理由で「落ちて」きたのだとしても、五秒を待たずにワームの餌食になっているだろう。武装した人間ならともかくも、ここで生きた猫にばったり出会う確率は限りなくゼロに近い。

マキがむしろ周囲に目を配ったのは、おれと同じ考えを抱いたからだろう。必ず近くに「飼い主」がいなければならぬと踏んだのだ。

こいつがチェシャー州出身の猫でない限り。

けれど少なくとも半径百メートル以内は、ブルドーザーで慣らさ

れたような瓦礫の原で、猫ならともかく、人が隠れるスペースなどまったくない。ならばやはり奇跡的に生きのびた幸運な猫だと考えるよりほかにない……と、トリベノがおれたちを追い抜き、緑の星の前にしゃがんで、チッチッチと奇妙な音を鳴らした。

今どき、それではクロック鳥もおびき寄せられまい。そう考えた矢先に、緑の星はゆっくりと瓦礫の下から這い出してきた。すらりと均整のとれた肢体。夜の闇そのものを身に纏っているような、つややかな毛並み。ぴんと尻尾を立てたまま、この小動物は後ろからトリベノの足もとに回りこみ、胴をすりつけた。

すりつけるとき、緑色の火花が散った。首に巻かれた赤い、不可思議な金属の輪。そこに浮き彫りにされた、古代装飾めいた模様は、見違えようがなかった。

プルートゥ！

驚愕に目を見開いたおれを無邪気に見上げて、猫はまた可愛らしく鳴いた。

「夢でも見たのかね」

「いや、現実は夢よりも奇なり、ってね。夢の演出家がどれほど奇想を凝らしても、たちまち現実に追い抜かれちまう。商売上がったりというわけで、路頭に迷ったかれらは、売れない詩人たちと場末の酒場でクダを巻いているのさ」

「きみこそ詩人だねえ、エイジくんとやら。時に、ワガハイに何か言いたいことがあるんじゃなかろうか」

「察しがいいね。しばらく彼女と二人きりにさせてくれないか」

銀色の刃の上から、マキが視線をこちらへ移すのがわかった。

47（2）

トリベノは何も言わず猫を膝からおろした。おれが差し出したM36を、片手を上げて断り、代わりにマキのナイフを一本拝借して、口笛を吹きながらトーチカの外に出た。

「奇麗な猫ね。まるで純血種みたい」

寄ってきた猫の背に手を触れて、彼女は言う。軽く撫でると、やはり指先から緑色の星が、ちかちかとこぼれた。彼女は何気なく「純血種」と口にしたが、じつに逆説的な単語である。遺伝子操作によって愛玩用に改造された小動物は、むしろ人工種と呼ぶべきではあるまいか。

ただし、この猫に限っては、必ずしも愛玩用に改造されたわけではなさそうだが。

「プルートゥという名だ」

「冥府の王、か。トリベノさんじゃないけど、エイジは詩人ね」

「おれがつけたわけじゃない」

猫を撫でる手が止まる。うつむき加減のまま、マキはつぶやく。

「いったい何が起きているのかしら。わたしが詩、みたいなことをつぶやいても似合わないけど。あなたが現れてからというもの、世界は魔法にかけられたようだわ」

「どんな魔術にもトリックはある。たとえ神の手によるものだとしても。タネが見えるか見えないかの違いに過ぎない」

「トリベノさんに席を外させたのは、わたしにタネ明かしをしてくれるため？」

マキの印象がいつもより柔らかく感じられた。相変わらず硬い仮面に隠されているが、むしろそれゆえに、秘められたたおやかさが引き立つようだ。少々どぎまぎしながら、おれは上着に手を突っ込んだ。次の瞬間、差し出された『電気技術の歴史』を、彼女はためらいがちに受け取った。

「これは？」
「端が折れているページを開いてみてくれ」
立ったまま、カノウ氏の書き込みに彼女が目を通し終わるまで、煙草をゆっくりと一本吸った。旨いものではなかった。靴で火を揉み消しながら、彼女の溜め息を聞いた。
「やれやれという感じね。タネ明かしどころか、余計に混乱が増すばかり」
泣きだすかと身構えていたところ、意想外な声の明るさに、ずいぶん救われた気がした。たとえ好意を寄せている相手であれ、愁嘆場はごめんこうむりたいという、おれは冷酷非情な人間だ。新しい煙草に火をつけ、同情のカケラもない質問をするくらいしか能がないのだ。
「絵地図に示されている場所がわかるか？」
「ええ。このての地図を、父は多くファイリングしていたわ。いわば、『幽霊船』の裏技リストってとこかしら。ただ眺めているだけでも楽しくて、子供の頃からよく覗いていたの」
「そいつはステキだ。ならばこの地図の断片も……」
「当然わたしの頭の中の絵地図に、嵌めこむことができる」
唸りながら、彼女の隣に立ち、開かれたままのページを覗きこんだ。悪夢的な線の集積から、一つ目の球根がおれを睨み返した。
ピルトダウン人なみの頭をどんなにひねったところで、こんな所に忽然とバルブが出現した理由など、わかるわけがない。またこの化け物が合成麻薬「クラーケン」とどう関わっているのか、知るよしもない。あるいは全く無関係なのかもしれない。が、何か引っかかる。錆びついた思考力の底で、何者かが叫んでいる。
おれは煙草を捨てて、彼女を抱き寄せた。
「エイジ……？」
瞬時、彼女の細い体に、肉食獣めいた緊張がみなぎった。だがすぐに真意を察したらしく、すっと力が抜けるのがわかった。腕の中には、ただしなやかな肉体だけが残った。唇が、仮面の耳もとにひ

んやりと触れた。
「あの爺さんをどこまで信用していいかわからないが、必要な情報を握っているのは確かだろう。なんとか地図が示す場所まで、やつを引っ張って行きたいんだ」
「わかった。でも、わたしも詳しいわけじゃないんだけど、バルブを収納するためには、少なくとも原子炉なみの設備が必要なんでしょう。こんなゴミ溜めみたいな場所に、ぽんと放り込んでおけるようなシロモノではない筈よ」
「実際、そのてのミッシングリンクだらけさ。だからこそ、欠けたパズルのピースを埋めるためにも、あの男が必要な気がする」
咳払いが聞こえた。振り返ると、モグラに片手でもたれて、トリベノが立っていた。もう片方の手に引っ提げたナイフには、多脚ワームの幼生が一匹、貫かれていた。なおも蠢く脚を眺めて、おれは眉をひそめた。
「こんなチビ助でも、襲われればたちまち骨にされてしまうからのう。そろそろお邪魔させていただくよ、ドン・ジュアン君」
「ドン・キホーテの間違いだろう」
トリベノは口の端を吊り上げた。その後ろで、モグラの赤い眼が、すーっと光を消した。

48（1）

48

ものの三分で交渉は終わった。

「プランは最良の安定剤だからのう。少なくともそいつが進行している間は、ひたすら闇雲な人生と向き合わなくてすむ」

トリベノはみょうな皮肉を言うばかりで、具体的な「プラン」への質問はいっさい寄こさず、そこが不気味といえば不気味だが、ゆえに話は早かったのだ。何を考えているのかわからない点を除けば、かれは協力的といえた。自作とおぼしい「船底」の図面を広げて、彼女との打ち合わせに余念がなかった。

横目で二人を眺めながら、夜明け前に少し眠った。マキと踊る夢を見た。

ブリューゲルだか誰だかの絵に、中世期の農民たちのダンスを描いたものがあった。絵の中で、女と組んで踊る農夫たちは、コドピースと呼ばれる股袋をつけ、勃起した男根を、これ見よがしに誇示していた。

数年前、酔狂な業者がこのコドピースを復活させて売り出したところ、旧政権時代のデカダンス趣味と合致してか、大いに流行した。乳房と異なり、千年にわたって抑圧を余儀なくされてきた男根は、ここにおいて、復権したかに見えた。流行が一年で終息し、再び公けの場における居場所を失うまで。

夢の中で、おれはそのコドピースを装着していた。猫の仮面をつけた楽師が、ポンコツのヴァイオリンでジーグを掻き鳴らしていた。農夫の恰好をしたおれと異なり、彼女は鉄仮面の下に、バロック期の貴婦人のようなドレスを身につけていた。

くるくると回るたび、ストッキングに包まれた脚が、腿の付け根まで露わになった。

音楽のテンポが落とされると、おれたちは体をぴったりとくっつ合って踊っていた。コドピースがコルセットに食い入った。彼女が身をすべらせる動作も、舞踏の続きのように自然でなめらか。おれの腰を抱くかたちにひざまずき、カチリと音をさせて仮面の庇を少し持ち上げた。唇が、コドピースを呑みこんだ。

舌がからめられた。

「顔を洗いたいんだが」

「汚染水でよければ、ほれ、いくらでも溜まっておろう」

「わかったよ。ちゃんと飲むから、水を一杯くれ」

モグラの荷台の後部には給水タンクが設置されていて、少なくとも五十リットルは入るようだ。隠れ家でも補給していたので、まだ満タンに近い筈だが、こと水に関する限り、爺さんはものすごくケチになる。きっと渇きで死にかけた経験があるのだろう。

朝飯を食う間、なかなかマキを正視できなかった。やわらかな唇の感触が、まだ股間にまとわりついてた。彼女は相変わらず鉄仮面の庇を少し持ち上げ、長めのスプーンを起用に動かしていた。その先にある見えない唇が、かえってリアルに思い起こされるようで、おれはまた目をそらした。

「もともと猫はあまり好きじゃないんだけど」

昨夜以来、プルートゥはすっかり彼女になついた様子で、缶詰の分け前を一瞬で平らげたあと、彼女の膝の上で目を細くしていた。爪楊枝を使いながら、トリベノが尋ねた。

「犬のほうがお好きかの？」

「飼ったことはないけど、たぶんね。かれらの行動は単純明快だし、狩りや護身に役立つ。でも猫は……」

「甘えるだけの愛玩物に過ぎない、か」

そう言っておれは疑問混じりの煙を吐いた。なるほど、犬を好む性格はいかにも彼女らしい。合理的なシンプルさを好み、不合理な暗い情念を切り捨てようとする。そうすることで、狂気じみた世界

の混沌から身を守っているようにも見える。だが果たして本当に猫は、ただの愛玩物として取り入れられたのか。

「何を考えているの？」

「太古の魔法使いについてさ。そいつはきっと女で、一匹の黒猫を連れている」

午後から「雨」が降り始めた。降るさまは地上の雨と変わらないが、赤い色をしていた。鮮血の赤ではなく、錆びた鉄の色。

おれは荷台の上に防水シートを広げ、猫を抱いたマキとともに、その下に潜りこんだ。トリベノは悠然と運転席で煙草をふかしながら、かたわらにくくりつけてあるコウモリ傘を開いた。

「はん、この程度では雨のうちに入らんよ」

それでも高濃度の汚染水を浴び続けるのは、気分のいいものではない。雨の中を二時間ほど走っただろうか。シートの隙間から覗いていると、前方に建造物の黒々とした影があらわれた。古城をおもわせる真っ黒な塔で、先端はしきりに水を滴らせている「天井」まで達していた。

48（2）

「何だあれは」

なにしろ歩いたほうがましな速度で走っているうえ、雨に煙っているため実体がつかみ難い。強いて例えるならば、気の触れた芸術家が溶鉱炉をお伽話のお城に仕立てたような建造物、とでもいおうか。もし純粋にマテリアルな産物だとしたら、悪意が売りものの芸術家たちは、あまねく首をくくらねばなるまい。

「支柱でしょうね、おそらく」

マキがつぶやいた。カノウ氏の書き残した地点、バルブの所在地まで行くために、まず「支柱」の内部を通って「船底」を脱出する計画なら聞いていた。が、

「ただの支柱にしては、ものすごく趣味が良すぎないか」

「様々な装置の複合体でもあるのでしょう。せっかく上部と連結しているんだから、ついでに多くの回路をバイパスさせることを、わたしだって考える」

技師の娘らしい意見である。

塔をめざして、もどかしい速度でモグラは接近した。とっくに機能が停止しているのかと思えば、内部からオレンジ色の灯りが、かすかに洩れているのがわかった。雨の中で、てらてらと光沢を帯びた鉄の肌。銃眼のような小窓から光がこぼれるさまは、鬼の棲む城にほかならない。副塔の円錐屋根に似た部分は、ゆっくりと回転していた。

あっ、とマキが声を洩らした。彼女の視線を追って天井を見上げ、おれもまた唸った。塔の先端は「天井」に嵌めこまれた巨大な顔の口へ呑みこまれていたのだ。いにしえのロックバンド、キングクリムゾンの有名なジャケットのような顔に。

「まったく、いい趣味じゃないか。顔みたいに見えるのは偶然なんだろうが。ご丁寧に、ちょうど両目と口の部分が光ってやがる」

もとからこのような意匠だったのではなく、破損と風化が生み出した光景なのだろうが。現実は、ますます悪夢と見分け難くなってくる。奇怪なアニミズムの世界へと退行してゆく。

胃に響く、重低音と震動。

中は意外にがらんどうで、オレンジ色の薄明かりに照らされたさまは、ツァラトゥストラ教の礼拝堂を、数十倍拡大したような印象。完全に吹き抜きになっているとおぼしい塔の先端は、けれど中途から闇に包まれて、覗くことができない。

爺さんはモグラの荷台からガラクタをいくつか引きずり出すと、地面にあぐらをかいて、何やら組み立て始めた。ハンドキャノンに似ているが、ぽっかり穴が開いているだけで、弾丸を込める仕掛けと場所が見当たらない。首をかしげている間に、みょうにサマになる手つきでそいつを構えてみせた。

「風砲だよ」

例の「人食い私道」で二葉が使った武器ではないか。ブラザースの話では、空気を撃ち出す装置としては、二葉が用いたサイズが限界だと言っていたが、爺さんのは優に三倍はある。さらにかれは、筒の先にアダプターのようなものを取り付け、そのままモグラのテールに潜りこんだ。顔に油をくっつけて出てきたとき、ようやく意図が読めた。

テールのボタンを操作すると、ジャッキに似たアームが、ピンと持ち上がった。モグラが尻尾を立てた恰好である。その下にウインチがあり、トリベノはワイヤーを手で引き伸ばすと、先端の鉤を風砲のアダプターにセットした。

ぼん、と腹に響く音がして、ウインチがガラガラと空転した。ワイヤーの尾を引きながら、フックははるか頭上の闇の中へ消え、鉄の壁に食い入る音をたてた。力を込めてワイヤーを引き、鉤が外れないことを確認すると、端にくわえた煙草ごと、爺さんは満足げな笑みを浮べた。

「ちょっと待て。まさかとは思うが……」
「そのまさかだよ」

ウインチは、けれど安全帯に過ぎなかったようだ。鉄の円筒の内部を、モグラがクライミングする姿は、おれの想像をはるかに絶していた。

トリベノは運転席の前部に後ろ向きに腰かけ、レバーを操っていた。当然、モグラもまたテールを前にした恰好。ジャッキ状のアームの先端を壁に突き立てつつ、ずり落ちないよう、六本の爪でしがみつきながら、垂直方向に登攀して行くのだ。最も生きた心地がしなかったのは、荷台にしがみついている、おれとマキであることは言うまでもない。

「おい爺さん、壁を這うモグラなんて聞いたことがないぞ。ヤモリか蛙にモデルチェンジしたほうがいいんじゃないか」

「ジュリエットをモグラやヤモリと一緒にするでない。汎用性は掃討車の比ではないわい」

掃討車、という単語に胸を突かれた気がした。考えてみれば、おれたちがここへ「落ちて」くるきっかけを作ったのが、掃討車にほかならない。しかもそいつは、これまで見たことがないような「眼」を有していた。

今のところ、モグラの武装は確認されていないが、トリベノの言うとおり、それなりの装備を加えれば、掃討車を軽く上まわる兵器ができあがるのではないか。刷新にとっても旧勢力にとっても、トリベノの技術は、どんな犠牲を払っても確保するに足るものではあるまいか。

48（3）

「爺さん、あんた……」

「減らず口を叩いている暇があったら、援護射撃くらいしてほしいものだわい」

言われて目を凝らすと、頭上の闇の中に浮かぶ、いくつもの赤い光点に気づいた。火の粉にしてはじっと動かない。かといって、星が見えるわけがない。もとから、あの辺りだけべったりと闇に包まれているのが不思議だったが、まがまがしい光点を見て、たちまち疑問は氷解した。

「冗談じゃない。退化猿人の巣を突破する気か？」

「ほかにルートがないからのう。それに今は昼だ。サルどものパワーも半分くらい衰えておる」

半分もあれば腹いっぱいである。気休めにもならない気休めを聞き流しつつ、荷台を盾に、パイソンを抜いた。

トリベノやマキと違い、生活力に乏しいおれは、掃討車に襲われたとき、まんまと頭陀袋を置き忘れたが、銃弾だけは肌身離さず身につけていた。タマがなければ、ガンスリンガーはゴクツブシの抜け殻より役に立たない。

モグラはじつにのんびりした速度で、地獄の生き物たちの巣窟へ近づいて行く。聞き覚えのある、悪意に満ち満ちた含み笑いが降ってくる。まったく、昨夜は奇跡的にこいつらの襲撃を避けられたというのに、ホッとしたのも束の間、みずから災厄の中へ飛び込んで行くなんて……

フォックス教といっても様々な流派があるらしいが、顔見知りの巫女の婆さんが言うには、災厄は繰り返すものだとか。例えば多脚ワームに襲われて、命からがら助かった者は、もう一度、同じワームとばったり出くわす可能性が高いのだとか。カルマ、とかなんとか婆さんは呼んでいたが、そいつは片方の燃える車輪のようなもの

であるらしい。
　繰り返し繰り返し、巡ってくる性質があるらしい。
（うんざりだぜ）
　闇はモグラの悠長さにしびれを切らしたのか、それ自体が巨大な漆黒の軟体動物と化したように、円筒形の壁をぬらぬらと這い降りてきた。その言語道断なおぞましさ。今すぐぶっ放したい気持ちを懸命におさえつつ、わざとゆっくりとハンマーを起こした。カチリという音を聞いて、いくらか落ち着く思いがした。
「マキはなるべく伏せていろ。もしおれの体に直接食いつくやつがいたら、そいつだけ斬ってくれればいい。あと、プルートゥを……」
　しっかり抱いていてくれ。そう言おうとした矢先に、敏捷な黒猫はひょいと彼女の腕をすり抜け、荷物の上に上半身を乗り出しているおれの隣に、トンとしがみついた。足の裏に磁石でもついているのかと疑うほど、平然と立っているのだ。
　ミャア、と呑気な声で鳴く。猫にだけ聞こえるよう、おれは囁いた。
「おまえがどんな超兵器でも、ご主人様がいなけりゃただの猫だろう。ネズミじゃないんだから、退化猿人なんか食ったって、きっと不味いだけだぞ」
　それとも、イーズラックの占い師、アリーシャは近くまで来ているのだろうか。これまでもそうだったように。プルートゥは彼女の影のように行動しているのだろうか。
（わたしが、あなたの未来を変えてさしあげます）
　彼女の面影を、目をしばたたかせて払いのけた。今はなるべく、余計なことは考えないほうがいい。頭の中のビジョンを、夢を食う、退化猿人につけ込まれてはかなわない。プルートゥには好きにさせておくとして、フロントサイトの向こうへ視線をこらした。粘液質の闇が、無数の凶星を浮べたまま、覆いかぶさるようにせまっていた。
　全身汗みずくになり、しかも体は芯まで冷えきっていた。それで

もトリガーに指を添えたまま、じっと待った。
闇に完全に呑まれるのを見極めて、おれはすかさずぶっ放した。
そのまま息もつかせず撃って撃って撃ちまくり、弾がなくなると、ほっかほっかのシリンダーをスライドさせると、薬莢を落とし、銃ごとマキに手わたした。彼女がパイソンに弾を込める間、Ｍ３６が火を吹いていたことは言うまでもない。
轟音と叫喚。化石油の闇の中、飛び散る血の色ばかりが、いやに鮮やかに映えた。地獄にほかならない光景に溺れそうになりながら、火薬のにおいを気つけ薬代わりに、手わたされたパイソンのグリップにしがみついた。
それは血ではなかった。
闇の奥で揺らめくのは、血の色をしているが、凝り固まった炎のようだった。
撃つことも忘れて、魅されたように炎を凝視した。めらめらと揺らめきながら、真の闇を背景に、炎はひとつの生き物じみた形へと変化した。茸をおもわせる、ずんぐりとした胴体のわりに、いやにひょろ長い手足が生えている。首がない代わりに、腹がぱっくりと裂けて、櫛の歯のような数限りない牙があらわれた。焔はタテガミと化してぞわぞわと揺れた。
そうして化け物の胴といわず肘といわず爪先といわず、無数の、きろきろと蠢く「眼」が埋め込まれているのだった。
自身が絶叫していることにさえ気づかなかった。

49（1）

49

漆黒の塔を登りきったところ、クリムゾンキングの顔の中は、要塞時代の動力室の一部であったようだ。

「当然、閉鎖ブロックなんだろうね」

「しかも、開かずの間と言われている場所よ」

「聞いたことがあるな。どこからも入り込めないブロックが、船の中には何箇所かあると」

尻もちをついたまま、辺りを見わたした。十三、四メートル四方の部屋の壁には、機械やパイプ類がぎっしりと詰めこまれている。ぶぅうーーんという重低音と微震なら、相変わらず続いているが、さっきまでの狂気じみた喧騒と比べれば、小川のせせらぎのように心地よい。

壁の計器類などから光が洩れて、夕暮れ時程度の明るさはある。モグラの爪にもたれたまま、マキが無言で水筒を差し出した。咽を鳴らして飲み終えたとき、やっと生きた心地がした。ほぼ間違いなく、ここはワームの巣窟だろうが、あいつらと比べれば可愛いものだとさえ思う。袖で口もとをぬぐうおれを、猫がじっと見上げていた。

「咽が渇いたのか」

「ミャア」

掌に水をためて、鼻先に差し出した。かれは目を細め、赤い舌を出して水を舐めた。まるで灼熱する鉄を浸したように、じゅっと音をたてて、蒸気が上がった。

「熱っ！」

覚えず手を引くと、水がこぼれた。すっかり湯と化した水たまりと、おれの顔を交互に見比べ、猫は不思議そうに首をかしげた。爺

さんの笑い声が降ってきた。見上げると、運転席に半ば潜りこんだ姿勢のまま、トリベノはアクロバットな体勢でこちらを見下ろし、しきりにヒゲを揺すっていた。

「わっはっは。やはり規格外では多少、無理があったようだわい。よく持ちこたえてくれたよ」

舌打ちをひとつ返して、猫の背に、そっと指を這わせてみた。たちまち静電気が弾けたような音をたてて、緑色の火花が散ったが、指は少しも痛まなかった。かれはくすぐったそうに、ミャアと鳴いた。

トリベノは再びシートの先に顔を突っ込んで、かちゃかちゃと工具を鳴らしている。おれは尋ねた。

「あんなものを、いつの間にこしらえたんだ」

「理論的なベースなら、ずっと前から頭の中にでき上がっていたからのう。あとは『現物』を見ながら、ちょいちょいと修正するだけでよかった。もっとも、ぶっつけ本番で使うことになるとは思いもよらなかったがのう」

また脳天気な笑い声が響き、おれは苦虫を噛みつぶした。トリベノは続けた。

「もちろん、システムを一から築くとなれば、気の遠くなるような時間と費用を要するだろう。ワガハイが一生をかけても、果たして完成したものかどうか心もとない。しかし今回は、システムの九十八パーセントは目の前にぶら下がっておったわけで。ワガハイの仕事は鍵を偽造するだけだったからのう。ハッキングならお手のものだよ」

猫がもの欲しげな顔で、おれを見上げていた。念のために今度は水筒のキャップに水を移した。けれど、赤い舌が触れても湯気はたたず、軽く音を鳴らして猫は水を舐めた。それから、前脚を揃えて背伸びをすると、緑の眼が電気的に明滅し、背中で火花がぱちぱちと弾けた。

トリベノの言うとおり、プルートゥの体に、かなり負担がかかっ

たことを物語るようだった。

「お若いの、これを使え！」

爺さんのかん高い声に射られたように、おれは何割かの正気を取り戻した。

振り返ると、ボンネット上にへばりついたまま、かれはちょうど何かを投げつけたところ。くるくると回転しながら飛んできたそれを、面前でかろうじてキャッチした。見れば、携帯用の辞書くらいの鉄の箱で、一面だけ電子回路が露出し、複雑怪奇な模様を描いていた。

いったい何のつもりか、尋ねる前に、トリベノが叫んでいた。

「若い頃はカード遊びに熱中したものでな。まだまだ指さばきも衰えちゃおらんが、いかんせん技術が足りなかった。そいつをペラッペラに薄くするには、この先何十年かかるか知れたものではないわい」

「カードって、おい。まさか爺さん。これは……」

「その、まさかさ」

49（2）

瞬時、洒落にならない状況を忘れて、電子回路を見つめた。陸棲の貝が無数に這い回ったような模様の中に、時おり緑色の光が走り、そのパターンは、明らかにプルートゥの首輪と共鳴するものがあった。

嵐の夜にも似た咆哮が前方から聞こえてきた。

赤い化け物は胴体が裂けた口から無数の舌を出し、退化した爬虫類のように蠢かせた。存在しない首の辺りでざわめく毛髪の中にも、いくつもの眼球が出現した。あのぶよぶよと揺れ動く退化猿人の群体の中へ、何の土産もなく突っ込む気にはとてもなれそうになかった。

トリベノは何を思ったか、モグラの速度をフルに上げたようだ。あらゆる関節が悲鳴を上げ、怒号するエンジンが真っ黒い煙を吐いた。いつまでも迷っている暇はなさそうだ。見れば黒猫は相変わらず目の前におり、置物のような姿勢で前を向いていた。

「プルートゥ、ご主人に無断で力を借りるぞ」

振り返らずに猫はミャアと鳴き、おれは勝手にイエスと解釈した。金属の箱をつき出したが、なにせぶ厚いので、アリーシャの華麗なポーズとは程遠い。首輪となるべく水平になるよう気をつけながら、カード詐欺師の心境で箱を滑らせると、覚えず腕を引っ込めかけたほど、ぶうーんという、強い電気的な震動が伝わった。

スパークしたかと思うと、ぼん、と音をたてて金属の箱が破裂した。さいわい、回路側が弾けたので、手首ごと吹き飛ばされずにすんだ。煙を吐く箱を放り出しながら、猫の首輪が真紅の光を放つのを見た。認証されたのだ。テレヴィジョンの電波が乱れるように猫の体が揺れたあと、むくむくと黒い影と化して、見る間に膨張をはじめた。

「うわあああああっ！？」

おれの叫びは、多分に疑問符を含んでいた。

もちろん「偽造カード」はアリーシャの「純正の」カードとは、わけが違う。何も描かれてないのだから、プルートゥが何に変化するのか、鬼が出るかヤブから蛇が出てくるか、まったく予測不可能である。ただ叫びながら、呆然と影法師が何らかの形を描くまで、見守っているしかなかった。

固体の影は三次元的な幅を保ちつつ、前方へぐんぐん細長く伸びた。やはり純正品でなかったためか、アリーシャの時より時間がかかる。造型に苦しんでいるように見える。それでも影が懸命に描こうとしているのは、まったく未知の物体ではない。むしろおれにとって、馴染みの深い形に思えてくる。

「機関銃？　いや、違う……」

ガトリング砲ではないか！

それも博物館でさえお目にかかれないような、最高に古いタイプだ。レトロ銃器愛好家のおれでさえ、呆れて二の句が告げないほどに……前面が蓮の実を描く複数の砲身から成るのは、ガトリング砲だからまあ当然だ。問題は背面だ。そこにはルナパークのピエロが掻き鳴らす手回しオルガンについているような、ハンドルが取りつけられていた。

（猫のしっぽが化けたのかな）

この期に及んでそんなことを考えつつ、機関砲の脚がモグラのボディーにしっかり食い入っていることを確認して、おれはハンドルをつかんだ。それはひんやりと、金属的な冷たさを保っていた。もやは前は見なかった。咆哮と腐臭。それ以上に圧倒的な、まがまがしい気配の塊が間近にせまっていた。

ハンドルを回した。

轟音と火花。そして薬莢があとからあとから弾け飛んだ。あれも猫の体の一部かと思えば、少々心配になるが、とっくに質量保存の法則など超越している。耳を覆いたくなるような化け物どもの叫喚の中、飛び散る臓物をさらに粉砕しながら、確かな手ごたえを感じ

た……

「ガトリング砲になることは、最初からわかっていたのか」
煙草に火をつけて、おれは尋ねた。運転席から盛大にリベットをまき散らしながら、トリベノは言う。
「いいや。鬼が出るかヤブからツチノコが出てくるかは、まったく未知数だったよ」
「何の脈略もなく、ガトリング砲に変化したというのか。ちょっと不条理すぎないか」
「お前さんも理屈が好きだのう。ミャクラクならあるよ」
そう言ってトリベノは顔を持ち上げ、異様に柄の長い複合ドライバーの先をこちらへ向けた。
「え？」
「さよう。偽造カードをお前さんが用いれば、何らかの銃器になるだろうとは思っておった。もしお嬢さんが用いていれば、おそらく刀剣と化したようにね」
煙にむせていると、マキと目が合う。仮面ごしに、驚愕の色がうかがえるようだ。おれはうなった。
「ガンスリンガーとしての……いわばあれは、おれの夢が具象化された姿だったのか」

50（1）

50

鉄の通路を行く。生き残っている非常灯や、露出した機械からスパークする火花などで、そこそこの明かりはある。

マキとトリベノは、時おり立ち止まっては、絵地図を広げて、何事か囁きあう。少し遅れて行くおれは、M36を片手に、いかにもワームが潜んでいそうな隅々に目を光らせている。

洞窟をおもわせる、こういう場所で最も注意しなければならないのは、吸血ワームNB309、アオゴウヤだ。ぶよぶよとしたゼリー状のヒョウタン型で、天井から何十匹も垂れ下がっては身体に貼りつき、服の中に潜りこまれたら最後。浸透圧を変化させて皮膚に癒着し、あくまで血を食らう。

じっとりと湿度が高く、少し歩くだけで汗ばむほど。微妙な明るさといい、いかにもやつらが好みそうな環境であるが、実際は、第五、六種の、取るに足らないワームがコンクリートに齧りついているばかり。おれは首をかしげた。

「まるでAL－3を使ったみたいだな」

「えっ」

マキが振り向いた。重たげな仮面をかぶっているわりに、彼女はじつに耳ざとい。さすがに暑いのか、上着を腰に巻いており、薄手のシャツが描く体のラインがなまめかしい。

アル・スリーとは強力な殺虫剤で、大量の白煙を吹き上げて広範囲のワームを殲滅する。ひところ盛んに閉鎖ブロックに投げ込まれていたが、隣接する居住区で深刻な集団中毒を招いたため、とっくに御禁制になっている。もっとも、闇市には出回っているし、モグリの同業者は遠慮なく使っているが。

「とても閉鎖ブロックとは思えないってことさ。かれこれ一時間近

く歩いているが、まだ一発もぶっ放していないんだぜ。むしろ下手な居住区より住みやすそうじゃないか」

言いながらトリベノに目を据えていたが、ちょっと口の端を歪めただけで、知らん顔して歩き始めた。

爺さんは頭陀袋とは別に、博物館行きの無線機のようなものを背負っていた。モグラの運転席の底から大汗をかいて取り外したもので、いったいこんなガラクタが何の役にたつのか、さっぱりわからない。というより、あれほど愛着をもって接していたモグラを、かれがあっさりと乗り捨てたのが驚きだった。

トリベノの背中で、得体の知れない機械は、しきりに計器の針を蠢かせ、無数のランプを明滅させていた。そのさまは人工臓器を連想させ、またモグラが発していたと同様の「視線」が感じられるのだった。おれは何度も機械に目をやっては、また逸らすことを繰り返した。

プルートゥはおれと並んで歩いていた。ピンと尻尾を立て、バレリーナのように無駄のない足どりで。

やがて通路の先に光があらわれた。やはり人工的な明かりに違いないが、地底よりもかなり強い。そこから、カタッ、カタッ、と一定の間隔で響く機械の音は、プリミティブな太鼓をおもわせた。人食い族が打ち鳴らす太鼓を。

トンネルの向こうは「街」だった。

街には音楽が流れていた。

低く、単調な旋律で、機械の太鼓と奇妙なセッションを奏でる、ワルツの三拍子。それはルナパークや博覧会のＢＧＭをおもわせて、そういえば、この風変わりな光景もまた、街というより古風な博覧会のテーマパークに似ているかもしれない。

街のたたずまいは、写真でしか知らない、第二次百年戦争前の商店街に似ているかもしれない。狭い通りの両脇に二階家が並び、それぞれの看板と飾り窓で、道行く者の気を惹こうとしていた。どの店にも、入り口が存在しないことを除けば。

（入り口がない？）

今さらのように驚いて、一軒の帽子店の前で足を止めた。ショウウインドウ越しに、灯りをともした店の中を覗いた。婦人用、紳士用、子供用、と、およそ人間の想像力が及ぶ限りの、様々な形をした帽子に囲まれて、値札のついたシルクハットを被った男が一人、飾り窓の外へ向かって、しきりにお辞儀をしていた。

「人形だよ」

「えっ」

「ここに並んでおるのは『店』ではないよ。実体のない広告なんだな。中身はそっくり立体映像さ」

喋っているのは、シルクハットの男ではなかった。ヒゲをひねっているトリベノを、目をしばたたかせて眺めた。ワームの巣窟だとばかり思っていたところ、あまりにもかけ離れた光景に幻惑されて、瞬時、かれらと歩いていたことさえ忘れかけていた。

隣の「店」はペットショップだった。ショウウインドウはお伽の国の子供部屋のように飾りたてられ、服を着た三匹の仔犬が閉じ籠められていた。犬たちは最初、お互いにじゃれあっていたが、おれの姿をみとめると、ころころと尻尾を振りながらガラスに近寄り、鼻の頭をくっつけたり、立ち上がって前脚で引っ掻いたりした。

店の奥には無数の檻が並び、様々な毛の色をした小動物たちが入れられていた。白衣の女が一人、毛の塊のような仔犬にブラシをかけながら、時々こちらへ顔を向けては、魅力的な微笑を振りまいていた。

50（2）

「これも映像なのか」

「あまり長いこと見つめないほうがよい。光学的催眠術が仕掛けられておるからの。ものの五分も見ておれば、お前さんは仔犬が欲しくてたまらなくなるだろう」

慌てて視線をショウウインドウから引き剥がした。

「そのての技術はロストテクノロジーに属するって、学校で習ったぜ」

「学校では存在すら教えておらんよ」

「なんでそんなものが、こんな所に……？」

「ワガハイに訊かれてもな。ひとつだけはっきりしておるのは、こいつが対侵入者用の、手の込んだトラップだってことさ。カタギの人間なら、二、三軒覗いただけで気が触れておる」

げんなりする思いで、「商店街」を見わたした。

天井が二階家のすぐ上までせまっている。あれでは屋上で洗濯物も干せないし、視界もさえぎられる。そもそも、どの二階にも窓がなく、コンクリートで塗りつぶされた上に、巨大な看板をかかげているのだ。二階の脇から、人が潜れるくらいの巨大なパイプが突き出して、隣の二階と連結されている。

あるいは、あの中に人の住むスペースはなく、機械がぎっしり詰まっているのではあるまいか。ゼンマイ仕掛けの自動人形の台座のように。

おれたちとプルートゥを除けば、通りには猫の子一匹歩いておらず、神経質な自動清掃車に掃き清められたように、紙くずひとつ落ちていない。どの「店」も真新しくはないが、看板といいガラスといい、執拗なまでに磨きこまれている。少なくとも、ここを管理している何者かがいることは、明らかである。

ただひとつだけ、辺りの秩序を崩している存在に気づいた。普通、

どの居住区でも、壁はおろか電柱やパイプから窓に至るまで、貼り紙やポスターの類いに埋め尽くされているものだ。今となっては懐かしくさえある、アルチュール・ランボー氏に案内された「幽霊船」の中といえど例外ではなかった。

ところが、この「街」にはそれがない。金属とコンクリートが半々に入り混じった壁は全て露出しており、ごく最近、磨かれた形跡さえある。にもかかわらず、目の前の店の壁には、ショウウインドウにはみ出すほどべったりと、真新しい真紅のポスターが貼られていた。

顔を近づけた。めまいを覚えるほどの、真新しいインクのにおい。けれど、おれが呆然と立ちつくしたのは、においのせいではない。半紙サイズの、光沢のある、チャイニーズレッドのコート紙には、書きなぐったような黒いインクで、逆さAの紋章が刷られていたからだ。

ツァラトゥストラ教！

紋章のほかには、文字も数字も刷られていない。ポスターはその店に一枚、次の店に二枚、向かい側に一枚、と、無造作に、無差別に貼りつけたようである。それはどこか、奇怪な音楽と相まって、超小型偵察機ソフトボールの目を盗んで、ロックコンサートのビラを貼ってまわる、街の悪ガキどもの足どりをおもわせた。

「エイジ、あれ」

囁き声とともに、軽く肩をたたかれた。マキが顔を向けた行く手へ、おれも視線を走らせた。路地にぽつんと、一人の少年がこちらを向いて立っていた。小脇にぶ厚い紙の束を抱えて、しなやかな草食獣のように、じっとおれたちを凝視しながら。

（……ワット？）

とっさになぜそう感じたのだろう。

少年は竹本ワットよりも明らかに年かさで、十二、三歳くらい。背はずっと高いし、髪も普通に短い。白いシャツに、ぶかぶかの黒い吊りズボン。左腕には赤い腕章を嵌めており、この距離からでは

確認できないが、おそらく逆さAの紋章が、黒々と染め抜かれているに違いない。

無言の睨みあいが続いた。十五メートル近く離れているだろうか。それでも少年の顔が、非人間的なまでに整っているのがわかる。白い肌、切れ長の目、美しい鼻筋。少女のような唇は妖しげに赤く、どうやらかれは薄化粧をほどこしているらしい。そうして少年の瞳の色は、白金色に輝いて見えた。マキがナイフを抜く気配を感じた。

「よせ、子供だぞ」

彼女の前に肩を割り入れたとき、少年は踵を返して駆け出した。

「おい、待てよ！　聞きたいことがあるだけだ」

白い背中は、たちまち先の角を左に曲がって消えた。振り返ると、彼女は鉄仮面を軽く左右に振って、ナイフをベルトの鞘におさめた。もういる筈もなかったが、少年の足どりを追いかけておれたちも角を曲がった。トリベノとプルートゥは、黙って後からついてきた。

同じ規模の店が並ぶ、同じような路地が続いていた。ここは一種の迷路であはるまいか。トリベノはトラップだと言ったが、侵入者を延々とさまよわせれば効果は倍だろう。赤いポスターはこの通りにも貼りつけてあるが、途中の楽器店を最後に、ふっつりと途絶えていた。

50（3）

あまり見たくはなかったが、その店の飾り窓を覗かずにはいられなかった。

意外にありふれた眺めで、いかにも宝物然としたピカピカの楽器に囲まれて、店員が背の高い痩せた男に三重ネックのエレキギターを売り込んでいた。客は外国人のようだ。うなずいてギターを受け取り、ストラップを肩にかけると、何気ない調子で試し弾きを始めた。左手の指が見えないほどの超絶テク。

ガラスに鼻をこすりつけんばかり、目を凝らした。見違えようがない。その外人は、おれが涎を垂らして新作を待ちわびているメタルスター、ジギー・バンデル・ルーデンではないか。あり得ない。あり得ないと呪文のようにつぶやきながら顔をそむけた。トリベノのイヤミな笑い顔がそこにあった。

「何が見えたかわからんが、お若いの。よほどそいつのファンなんだな」

「冗談じゃない。ここの立体映像は、見る者の精神をハッキングして作り出されるのか」

「潜在的無意識を実体化させてしまう、スローミュータントと比べたら可愛いものだろう。まあやつらのような化け物があらわれたのも、戦争の遺物に引き寄せられてのことだろうが」

もう一度窓の中を横目で覗いた。店内はひどく暗くなっており、ジギーも店員も、跡かたもなく消失していた。代わりにそこに立っていたのは、ポスターの束を小脇にかかえた、吊りズボンの美少年だった。おれは溜め息をついた。

「あいつもおれの夢なのかい。それとも、チェスの王様の夢なのかい？」

童話の女の子のセリフをもじって、似合わないジョークを吐いても、トリベノは笑わなかった。少年の整った顔に、表情らしいもの

は何も浮かんでいなかった。プラチナの眼差しで、じっと窓の外を見つめていた。自身が凝視されているようでもあり、どこも見ていないようでもある。かれの赤い唇が、花のようにほころんだ。

（挑発してやがる？）

無言で銃を抜き、真っ直ぐ腕を伸ばした。ガラスの向こうで、少年は平然と突っ立ったまま、愛玩動物のように小首をかしげた。ハンマーを起こし、トリガーを引いた。すべてのガラスが、なだれをうって崩れた。

店の中は、まっ黒い箱のようで、天井から垂れ下がる複数の映写機が、突然夢を覚まされてうろたえるのか、きょろきょろとレンズをさまよわせていた。

「映像じゃなかった……？」

マキがつぶやき、おれもうなずいた。奥の壁には、真新しい一枚のポスターが貼りつけられていた。

真紅の地に、まっ黒い逆さＡの紋章。べっとりと刷られたインクのにおいが鼻をつく。壁と同じ色だからわかりにくいが、ポスターが貼られている周囲には長方形の切れ目があり、ドアであることが知れた。Ｍ３６ではガラスを壊すのがやっとなので、少年は傷ひとつ負わず、ここから逃げたに違いない。

ドアは難なく開いた。いかにも舞台裏という感じの路地に出た。両側にせまる壁は黒ずみ、錆びつき、無数のパイプが露出していた。その上にまた一枚。先へ目をやると、さらに一枚、もう一枚と、真紅のポスターが列を成していた。まるでおれたちをいざなうかのように。

トリベノはぼろぼろの絵地図を広げ、ゴーグル眼鏡の上で眉根を寄せた。うーんと唸っている、かれが次に何を言い出すか、聞く前からわかる気がした。

「あやつ、ご丁寧にも、我々をバルブの存在する地点まで、案内しているようだわい」

もともとそこへ向かっていたのだから、追いかけることに異存は

ない。美少年はお世辞にも友好的とは言えないが。けっきょくのところ、物事はなるようにしかならない。おれはミッションを遂行するために。マキは両親の死の原因を突き止めるために。トリベノが何を目的としているのかわからないが、ほかに選択肢がないことだけは確かだ。

路地を抜けると、視界が開けた。そこには立体映像ではない、本物の街が広がっていた。店頭には商品があふれ、実際に手で触れることができる。路地を覗けば、洗濯物が所せましと干してある。人っ子一人いないことを除けば、どこの都市地区にもありふれた街並である。

いや、奇妙な点はそればかりではない。さっきの「商店街」と同様、ここの建物も全て二階建てで、上階に窓がなく、太いパイプで隣家と繋がれているのも同じだった。もしも俯瞰すれば、蜘蛛の巣状に繋がっている様子が見られるのではないか。

フカンすれば？

見上げると天井ははるかに高く、湾曲しており、まるでばかでかいカプセルに封じこまれているような印象を与えた。ゆえに天井にはばまれることなく、街の中心にそびえ立つ建造物の存在を許していた。赤銅色の巨大なドーム。それは否が応でも、ツァラトゥストラ教の礼拝堂を連想させた。爺さんがつぶやいた。

「あそこが蜘蛛の巣の中心というわけだな。さてさて、中にはどんな蜘蛛が住んでおるのやら」

かれもまた、この街を蜘蛛の巣に例えていたようだ。

街路には相変わらず人影がない。ほとんどの商店が開いており、ぐつぐつとスープが茹だっている店先もあるというのに、住人ばかりが、まるで伝説の中性子爆弾を用いたように、奇麗さっぱり消えているのだ。何者かに襲撃された形跡など、まったく見られないままに。

51（1）

51

蜘蛛の巣の街、という歌があった。

おれが敬愛する、ジギー・バンデル・ルーデンの名曲である。もちろん詞も、かれ自身の手になる。が、まあ、かれが書く、たいていの詞は意味がわからないし、その曲も例に洩れず、歌詞だけ追えば、何がなんだかわからない。

火星には蜘蛛の巣の街があり、現在は廃墟と化して、赤い土に埋もれている。一人の歌手が街にたたずみ、ぼろぼろのギターをつま弾きながら、独りで歌い続けている。風化した骨や、凍りついた機械たちだけが、もの言わぬ聴衆である。

地球には「核の冬」がおとずれて、大半の人類が死滅した後である。厚いスモッグで大気は歪み、昼間でも太陽はあらわれず、ただ火星の赤い光だけが、異様に輝いて見える。

汚れた街角。殺人ロボットのスクラップの上で、ぼろを纏った一人の少年が、じっと耳を傾けている。かれにだけは、蜘蛛の巣の街で歌う、男の歌声が聞こえるのだ…・といった内容で、やっぱり意味がわからないが、この歌詞をジギーがアコースティックギター一本で、切々と歌うのを聞けば、込み上げてくる悲哀を抑えることができない。

おれはこのバラードを何千回も再生し、何千回涙を流したか知れない。今もメロディを思い出すだけで、泣きそうになる。

「おまえさんが感傷にひたるのは、勝手だがの」

見れば、トリベノが皮肉らしくヒゲをひねっていた。それから、中心にそびえる赤銅色のドームに向かって、街路をに指を突きつけた。

「あれを見れば、もう後には引けんことが、わかるだろうて」

点々と続く真紅の光沢が目に入った。例のポスターは、明らかにドームへ向かって続いているとおぼしい。

わかっているのだ。急におとずれた感傷も、煮え切らないおれの心が、逃げ場を求めている証拠に過ぎない。おれは先へ進むのが怖いのだ。夕映えのような過去の感傷に、逃げこみたかっただけなのだ。取り返しのつかない破局を恐れて……

コツン、と足首に硬いものがぶつかり、見ればプルートゥが、目を細めて見上げていた。おれは口の端を歪めて笑い、歩を進めた。追いつきながら、マキが言う。

「ね、エイジ。思い出したんだけど、本の挿絵で見た覚えがあるのよ」

ポスターを貼って回っている美少年の服装に、見覚えがあるという。

おれも、どこか引っかかるものを感じていたが、彼女に指摘されて、ようやく気づいた。白シャツに、ぶかぶかの吊りズボン。逆さAの紋章が入った赤い腕章。そのうえ薄化粧をほどこしたところも含めて、ツァラトゥストラ教の聖歌隊の制服に違いなさそうだ。

「……って、ことは。いや、そんなはずは……」

「ジークムント旅団かの」

言下に指摘され、おれは覚えず唸った。ツァラトゥストラ教の過激派、ジークムント旅団は、少年兵を用いることで有名である。

かれらは、産まれ落ちるとすぐ組織に引き取られ、ひたすら兵士としての教育を受ける。かれらは戦場でも聖歌隊の服装に身をつつみ、ヘルメットその他の防具をつけない。死をまったく恐れず、撃たれても撃たれても、恍惚とした表情で前進する。少年たちには、特殊な麻薬が用いられているのだと噂された。

（麻薬が……まさか？）

目を見張った。

少年がこれ見よがしに貼りつけるポスターが、逆さAの紋章であること。明らかな生活の痕跡だけを残して、街から人が消えている

こと。それらを思い合わせれば、ツァラトゥストラ教の過激派あたりに急襲されたものと考えるのが、妥当かと思われた。が、果たしてそうだろうか。

「クラーケンは、ここで合成されていた」

おれはつぶやいた。爺さんが鼻を鳴らすのを背中で聞いた。

「はん。やっと気づいたようだの、お若いの」

「しかも、麻薬の製造にたずさわっていたのは、イーズラック人じゃない。おそらくは、ジークムント旅団だ」

まるで応答するように、足もとで猫が鳴いた。そうだ。ここでイズラウンの禁断の技術が用いられた。人類刷新会議の拘置所を、哀れなサイキックの双子に襲わせたのも、この街の住人であった、かれら、ジークムント旅団に違いない。しかしそうすると、必然的に、さらに大きな疑問にぶつかることになる。すなわち、

かれらをこの街から追ったのは、いったい何者か？

51（2）

ポスターを追って歩く間も、街路には相変わらず人影がなかった。マキの両親は、大量の血を残して消えたというが、ここの住人は涙一滴こぼさず、消滅したのではあるまいか。

けれど、街並自体は、こんな地の底にありながら、むしろ美しいのだった。背の低い二階家が整然と並び、ゴミや落書きは全く見当たらない。さすがに街路樹はないけれど、道の脇には水路が流れ、透明な水をたたえていた。もっとも、透明だからといって、毒でないとは限らないが。いずれにしても、麻薬の密造・密売といったイメージからは、程遠いのである。

「エイジは、かれらがイーズラックではないと考えるのね。じゃあどうして、かれらの瞳は、色が違ったのかしら」

驚くほど思いつめたような声で、マキが尋ねた。無理もない。ずっとイーズラック人を親の仇とみなし、追い続けてきたのだから。

「イーズラック人の瞳の色がなぜ変わるのか、科学的には解明されていないんだよ。おれがあえて言うまでもないことだけど。ジークムント旅団の場合、麻薬の副作用とも考えられる」

「洗脳されていたというのね。微量のクラーケンを与えて、麻薬の製造に従事させていた、と。エイジは、クラーケンに侵された人を見たんでしょう」

「ああ。でも、リビングデッド化した者たちの瞳がどうなっていたか、ちょっと思い出せないな。瞳孔が開いて、腐敗も始まっていたから、やはり色素が飛んで、どろりと濁って……」

電気的な信号に、こめかみを貫かれ、覚えず足を止めた。振り返ると、同様にマキも立ち止まり、通り過ぎたばかりの建物を、かえりみていた。爺さんがニヤニヤ笑いながら、腰に手をあてた。

「プルートゥのほうが、コンマ五秒早かったわい」

ひとつの建物のガラス張りの入り口が、三分の一ほど開いたまま

になっていた。ミラーグラスになっているのか、風景を反射するばかりで、中の様子は覗けない。また開いている部分は、濃い闇で塗りつぶされていた。

あやうく声を上げかけたのは、そこに人影を見たような気がしたからだ。ポスターの少年ではない。その証拠に、貼ったばかりのポスターが、まだ先まで続いている。それにおれが見た人影は、たしかに女だった。腰まで届くほどの、長い髪。そしておそらくは、猫のように光る瞳を見た。

明らかに、マキは戸惑っている様子だ。ナイフを抜いて踏み込むべきか。その点はおれも同じで、もし街の住人が残っているのなら、クラーケンに関する情報を引き出したい思いはある。場合によっては、銃にモノを言わせて……おれはマキの肩に手をおいた。

「引き返すという選択肢もあるだろう。招待に応じてからでも、遅くはないさ」

近づくにつれて、赤銅色のドームは、奇怪なディテールでおれの目を圧倒した。居住区の中心に位置するため、あたかも大聖堂のような印象だが、細部に組みこまれた機械類やパイプによって、こいつがばかでかい一つの装置であることが知れるのだ。

建物群が急に途切れた。目の前に横たわるのは広場ではなく、並々と水をたたえたプールだった。ここからドームの入り口まで、唯一の、細長い橋がわたされている。

「それで……どの建物も二階の窓がなかったのか」

おれがつぶやくのを聞いて、トリベノがまた鼻を鳴らした。ピルトダウン人なみの頭脳が、ようやく追いついたようだな、とでも言いたいのだろう。つまり、この街そのものが、ドームを中心としたひとつの装置だったのだ。今は居住スペースと化している一階部分は、もともと存在せず、支柱が立っていただけなのだろう。

そうしてどの家の二階にも、ぎっしりと機械が詰まっているに違いない。おそらくは、冷却装置が。

橋には欄干も何もない。やっと一人がわたれる幅の金属板は、全

長二十メートルを越えるだろう。プールは深く、水は異様に青くて、天井から落下したとおぼしい瓦礫が、ごろごろと沈んでいた。瓦礫の間を、太古の甲殻類じみた生きものが、這うように泳いでいるが、水棲のワームとおぼしく、ＩＢではなさそうだ。

一応銃を抜いて、そいつを警戒しながら、厭な揺れかたをする橋をわたった。向こう岸も錆びついた金属板で、無数のリベットで補強されていた。顔を上げると、ドームの表面には、やや唐突な感じで、ドアが嵌めこまれていた。

むろん、童話的な樫の一枚板などではない。ハンドル式の取っ手のついた、ドアというより、ハッチと呼びたくなるシロモノ。そいつの表面には、例の赤いポスターが一枚、べったりと貼られていた。

ハンドルを回すと、金具が外れる手応えを感じた。懸念されたような、鍵はかかっていなかったが、重い扉を開けるのに、猫の手ならぬ、爺さんの力を借りなければならなかった。錆と薬品の入り混じった異臭。覚えず鼻を覆ったとき、また電気的な信号がぴりぴりと脳を突き刺した。

「たぶんいると思ったんだ！」

悪態をつきながら、逆噴射するように扉から離れた。がちゃがちゃという、まがまがしい機械音が、中の暗がりで響いた。やがて這い出してきたものは、けれど、予期していたような掃討車ではなかった。ぼろぼろに錆びた救命カプセルを縦にして、昆虫じみた六本の脚で支えたような……軍用チャペックだ。

それもどえらく旧式なやつ。ひょっとすると、第二次百年戦争の遺物かもしれない。そいつが二体、一個の目玉をおもわせるセンサーをぎょろつかせながら、這い出してきたのである。

51（3）

たしかこのタイプは搭乗型と遠隔操作型の二種があり、外見上の区別はない。両腕にあたる部分が小型のガトリングガンになっており、弾帯をぶら下げた姿は、いかにもおぞましい。

鉢合わせの戦闘に、火力の違いはさほどモノをいわない。何百年前だか知らないが、荒野にガンスリンガーが誕生した時代と同じである。より早く、より的確に、弾を撃ち込んだ者の勝ち。おれは片膝をつき、右側のやつの「眼玉」を、あやまたず撃ち抜いた。

眼窩が火を吹き、斜めに傾いだチャペックは、あっちこっちの継ぎ目から火花を吐き出しながら、ガトリングガンを乱射した。マキはすでに身を伏せ、トリベノはリュックを盾に、うずくまっていた。抜け目のない爺さんだ。流れ弾を食らって、相棒の片腕が吹き飛んだ。打ち尽くしたところで、前のめりに倒れ、そのまま動かなくなった。

その頃には、二体めの眼玉が吹き飛んでいた。念のため、おれは同じポイントにもう一発撃ちこんだ。そいつは一発も撃つことなく、文字どおり立ち往生したようだ。ざっとこんなものだと自賛したいところだが、こんな玩具にやられていては、処理班なんか勤まらない。

ウンともスンとも言わないのを確かめてから、おれはチャペックに近づいた。ぐるりと一周してみたが、首をかしげるばかり。

「首を捻挫でもしたかの、お若いの」

「見てのとおりさ。胴体を開く仕掛けも見当たらなければ、アンテナらしきものもない」

搭乗者もおらず、かといって操られている形跡もない。おのずと答えは一つに絞られる。すなわち、こいつはみずからの「意志」で動いていた、という。

意味ありげに笑うばかりで、相変わらず爺さんは何も教えてくれ

ない。が、ピルトダウン人なみのおれの頭脳も、幽霊船に来た当初から付きまとう符合に、さすがに気づいていた。眼玉だ。旧式にせよ、あんな眼玉のついた軍用チャペックなんか、見たことがない。そしてそれは、最初に襲ってきた掃討車と、明らかに同種の仕掛けである。

「問題なければ、先へ進もうかの」

大ありなんだが。あえて黙っていると、トリベノはリュックを背負い、マキも立ち上がって、膝を払ったりしている。口答えしても仕方がなさそうなので、おれはまた先に立ち、ドアを潜った。

真の闇ではなかった。中には薄明かりがあり、面前にそびえる、赤く錆びた金属の壁を、ぼうっと浮かび上がらせていた。どうやら壁が二重になっているようなのだ。ただ、内部の壁には屋根がなく、第一の壁の天井付近で切れいてた。支柱だろうか、円筒形の巨大な棒を囲むように、無数のパイプが絡みつき、天井の中心に潜りこんでいた。

襲撃者があらわれる気配はなく、壁にはドアもハッチもない。そのまま壁に沿って、反時計回りに歩を進めると、赤いポスターがまたひとつ見つかった。ただし、これには光沢がなく、薄汚れて、所々、腐食したような穴が開いていた。明らかに、かなり以前に貼ったものとおぼしい。

「エイジ」

マキの目線を追うと、壁の上に金属のステップが打ちこまれていた。一人が登れるくらいの幅で、上方の切れ目まで続いている様子だ。

できれば御免こうむりたかったが、ほかに方法はなさそうだ。おれは火をつけた煙草をくわえて、ステップに手をかけた。乱暴に揺すってみたが、しっかり壁に食いついて、びくともしない。おれの下にマキが続き、トリベノがシンガリをつとめた。プルートゥは爺さんのリュックに飛び乗り、あくびをしているから呑気なものだ。

こんなところを背中から狙い撃ちされては、ジ・エンドである。

眼玉つきチャペックたちに、もうちょっと知恵があれば。そう考えると、ゾッとしない。しかも、さっきから何やら視線を感じて仕方がないのだ。動きを止めて辺りを見回し、トリベノの皮肉らしい視線とぶつかって、また登り始める。これを何度も繰り返した。

「五、六階建てのビルくらいはあるな」

落ちたらお陀仏だ。と言う代わりに、煙草を吐き捨てた。あやうく唇を焼くほど、すっかり短くなっていた。赤い小さな点が、壁にぶつかって火の粉を散らしながら、はるか下方の闇に消えた。

ようやくステップを登りつめた。もはや下を見る気力もない。ありがたいことにと言うべきか、壁の上辺は意外に厚く、ちょっとした通路ほどの幅がある。中心の円柱に向かって、四方から橋がかかっている。いや、これも支柱に過ぎないのか、街路からドームへ至る橋と似たような、ただの細長い金属板なのだ。

足元の五メートルほど下まで、壁の内側には、なみなみと水がたたえられていた。こんな薄暗がりの中でも、その異様な青さが目についた。もし水の中に光源がなければ、こうは映らないだろう。現に、いくつかの弱い光点と、ひときわ強い一つの光が、青い水の中に確認できた。数匹の水棲ワームが、光の上を横ぎった。

マキは仮面の上から口もとに手をあてていた。まるでほとばしる悲鳴か、もしくは吐き気をこらえるように。トリベノを見れば、四つん這いになって縁から身を乗り出し、じっと水槽の中を覗きこんでいた。日頃の皮肉屋はどこへ行ったのか、ううと苦悶するような声を洩らした。

「こいつが……バルブなのか」

51（4）

だれに訊くともなく、おれはつぶやいた。情けないくらい、声が震えていた。

形状は、ほぼカノウ氏が遺したラフスケッチどおり。インクで染めたような青い水の底に沈む、巨大なタマネギ。その最もふくらんだ部分に、船形の「眼」が一つ。内部で何を燃やすのか、そこで緩やかな強弱を繰り返す光が、円筒形のプールをとおして、ドーム全体を照らす主な光源になっていた。

ぶ厚い壁をとおして伝わる振動。禁断の経典「クル・アル・ル・アーン」を読み上げる断食僧の声のように、震動は低い唸り声と化して、薄闇を呪いの言葉で満たすようだ。

バルブに関するおれの知識は、通り一遍等でしかない。実在すら疑われる、ＩＢに関するおびただしい伝説の一つといった認識だった。だから、タマネギの化け物の中身が、どういった構造なのか。キュクロプスのような一つ眼が何を意味するのか、まったくわからない。伝説によると、ＩＢを新たに建造するために、バルブが必要不可欠であるという。

子宮のように、あのタマネギの中で何かが生まれつつあるというのか。胎動し、薄く眼を開け、震える腕を差し伸ばそうとしているのか。一部の気の触れた連中にとって、ＩＢを飼い慣らすことは、最大の宿願である。もはや手の施しようがない荒野のＩＢどもと異なり、みずからの手で新たに生みだせば、狂気の宿願はより成就されやすくなる。

見てはいけないもの。ここにあってはいけないもの。

（マスターがそれを望まれるのでしたら、ご命令どおり致します）

呆然と、おれは目を見開いていたに違いない。アマリリス……きみもバルブの中で生まれたのか？

「なに、単なるレプリカだよ。オリジナルでもなければ、たいして

珍しいものでもない」
いつの間にかトリベノが立ち上がり、錆びたパイプにもたれていた。ようやく減らず口を叩ける余裕を取り戻した、といったところか。
「煙草を一本くれぬか」
「闇煙草屋にたかられるとはな。珍しくない、とはどういう意味だ」
よれた煙草を指で伸ばし、トリベノはライターをともした。炎に浮かぶ顔は蒼白で、十歳も老けたように感じられた。
「不思議だと思わんかね？　なぜ我々は、ＩＢに駆逐されておらん？　通常兵器をはるかに陵駕し、人間への憎悪に駆られた連中が、荒野にごろごろしているというのに」
むろん、そのことは、おれも考えないではなかった。普通考えずにはいられないだろう。都市地区なんて、荒野に浮かぶ離れ小島のようなもの。そして荒野は、かれらの領域である。集団で都市を囲み、一つずつ潰していけば、ひとたまりもあるまい。
けれど、かれらがほとんど集団行動をとらないことは、処理班時代の経験から、知悉していた。群れてもせいぜい、二、三体がいいところ。共闘する知能がないわけではあるまい。プログラムによる抑制など、様々な説が唱えられたが、統率者の不在が、最も有力な説として、これまで信じられてきた。
「ボスがいないせいだと、聞いているがね。これも伝説といえばそうなんだが。第二次百年戦争末期に、人類に反逆をくわだてた、そもそもの大もとであるボスが破壊されたとか」
「いわゆる、総統ＩＢというやつだな。そいつに関しては、ワガハイも一家言持っておるが、ここでは触れまい。やつらが骨抜きにされた状態に甘んじておるのは、バルブのせいだという噂があっての。むろん、オリジナルのバルブは一つしかないが、こういったレプリカが複数建造され、世界各地に散らばっているというのさ」
極秘裏にな。そう付け足して、トリベノはゴーグルの上で眉根を寄せた。おれはぞくりと肩を震わせた。

「何のために？　ＩＢを新造する以外の、どんな使い道があるというんだ？」

「逆にＩＢへの抑止力になっているというのだよ。よくある話じゃないか。人間という、どうしようもなく愚かな生きものは、核兵器をちらつかされるまで、世界戦争をやめなかった。しかしそいつがマガイ物の平和であったことは、核からＩＢへ至る歴史が証明しておる。核のお次が、バルブだったのさ」

「あんたの文明批判なんか、聞きたくもないね。世界を引き締めるためのバルブ……弁があるだなんて、まるでお伽話じゃないか。弁をことごとく緩めれば、世界はばらばらになっちまうと言いたいのかい。いったい誰が、いつの間にそんな大掛かりな仕掛けを作ったんだ？」

トリベノは無言で煙を吐き出した。足もとで水の音が聞こえ、あやうく飛び上がりかけた。水面に大きな波紋が広がり、甲殻類じみた黒い影が沈んでゆく。水棲ワームが跳ねたらしい。トリベノは言う。

「少なくとも、今言えることは、ここにバルブのレプリカを発掘して、何事かを仕出かそうとしている連中がいる。もしくは、いたということさ。行きますかな」

最後の一言は、マキに向かって発せられた。彼女は身を起こし、わずかにうなずいた様子。おれの意向を無視して、話が進んでいることは気に入らなかったが、かといって、ここで茶飲み話に興じている暇はない。

「わかったよ。行けばいんだろう」

おれはプールの上にわたされた、いかにも危なげな橋に足をかけた。

52（1）

52

どうにか橋をわたりきると、鉄板で組まれた足場にたどり着いた。黄色と黒の縞模様のペンキが、剥げかかっていた。見上げると、バルブの中心から垂直に伸びた円柱は、天井のくぼみへ達し、勢いよく伸びた球根の芽のように、さらに上まで貫いていた。

コードやパイプに隠れて見えづらいが、円柱にはステップがついている様子。よく見ると、バルブの表面にもそれは打ちこまれているけれど、追ってゆけばすぐにプールに潜る恰好となる。

「さすがに潜水服は用意してないぜ」

たとえあったとしても、水棲ワームがうようよいる中に、潜る気になどなれない。トリベノはそっぽを向いて、口笛を吹き始めた。上を向いて歩こう。

「球根の芽を追うのか」

「登るしかあるまいて。聖歌隊の少年に歌ってほしければの」

「さっきの曲でも、リクエストする気かい」

掌を返してみせる爺さんのうしろで、マキは無言のままたたずんでいた。疲れているのかもしれないが、ドームに入ってこのかた、めっきり口数が減ってしまった。カノウ氏を、さらには、彼女の幸福な家庭を破滅させた因縁の場所なのだから、無理もないけれど。冷たい仮面に隔てられ、マキの表情は読めない。

円柱のステップにしがみつき、またしても上を目指す。

天井のくぼみに達すると、極端に暗くなったが、周囲の壁がタービンのように螺旋を描いているのはわかる。金属製の黒い螺旋は、ゆるやかに回転している。もしもこれがトラップで、いきなり高速回転しながら輪を縮めれば、新鮮なミンチのご馳走に、水棲ワームどもは舌鼓を打つだろう。

十メートル近く登っただろうか。

行き止まりかと思えば、頭上を覆う鉄板に、人一人ぶんの隙間がある。縁起でもない仕掛けのことを、考えないでもなかったが、おれは強いて無造作に顔を突っ込み、体を持ち上げた。意外に大きな空間があり、鉄板の上に転がり出た。

そこは、工場に無理やりこしらえた事務室、といった風情。リベットだらけの鉄板にかこまれた、二十スペースほどの密室である。天井と床を、剥き出しの鉄骨が何本も貫いている。木製の事務机や棚、ボール箱などが、乱雑に置かれている。

「みょうな所に出ちまったな……」

天井からぶら下がる裸電球が一個。おそらくタングステンの本物ではなく、再生ダイオードのまがい物だろうが。何の飾り気もないブリキのシェードの下で、今にも息絶えそうな光を発していた。そのせいか、全体的にイビツに見える部屋の光景は、ピカソの暗い『ゲルニカ』をおもわせた。

「あれは、エレベーターじゃないかしら」

マキが指さして言う。

奥の壁に、なるほどスライド式のドアがあり、数字のついたパネルが、上方に嵌めこまれている。何百年も昔から、この装置ばかりは代わり映えがしない。よもや生きているとは思えないが、かといって、ほかに出口らしい出口は見当たらない。場合によってはドアをこじ開け、ワイヤーをよじ登る羽目になるかもしれない。

ドアに近づき、パネルを眺める。数字はゼロが最上階らしく、Ｂ１、Ｂ２と下降し、Ｂ１３まで続いている。ここはＢ９階であるらしく、Ｂ１３の文字に光が入っている。パネルが正常に機能しているならば、ゴンドラは最下階で止まっているとおぼしい。故障して落ちていると考えるのが、自然かもしれない。

トリベノは何を思ったか、事務机の引き出しを、手当たりしだい掻き回している。落ちた書類を一枚拾い上げてみたが、ありふれた伝票だった。戦争でネットワークがずたずたに分断され、その後も

内戦続きのため、仮想ストレージの信用は失墜したまま。どこの事務所も、こういった粗悪な合成紙に埋もれている現状である。

「エイジ……！」

いかにも只事でない、マキの声に振り返った。反射的にパイソンを抜きかけたまま、けれどおれは動きを止めて、パネルの上を凝視した。

たしかにさっきまでは、Ｂ１３の部分がともっているだけだった。その光が点滅を始め、間もなくＢ１２に移動した。しかもＢ９には光が入っているのだ。

点滅は、Ｂ１１へ移った。耳に意識を集中すると、のろのろと這い上がってくる、ゴンドラの音が聞こえてくるようだ。

Ｂ１０が点滅し始めた。

おれはゆっくりと、銃口を扉に向けた。

52（2）

汗がこめかみを這いおりた。ゴンドラに乗っているのは何者か、それが疑問だった。

感覚的に、Ｂ１３階といえば、幽霊船の最下層。退化猿人どもがうろつく、どん底を連想させた。あそこから、何者かが乗り込んだのか。あるいは、おれが住む雇用促進住宅の幽霊エレベーターのように、機械がいかれちまっているのか。

あるいはまた、例の薄化粧の少年が乗っているとか。

パネルの点滅はＢ９へと移動した。ごとん、と音がして、いやにゆっくりと、扉が開いた。

少年ではなかった。髪の長い女だ。異国の民族衣装をおもわせる黒い服は、ゆったりとしていながら、しなやかな体の線を隠さない。褐色に近い肌。瞳の色は、青みがかった銀色だ。

（わたしが、あなたの未来を変えてさしあげます）

おれは構えていた銃を、呆然と下ろした。ゆるやかに踊るような足どりで、女は……アリーシャはゴンドラから歩み出た。きめ細かな髪が揺れ、薔薇の薫香がただよった。

「イーズラック！」

憎悪に満ちた叫び声とともに、飛びかかるマキを留める暇はなかった。彼女の両手にはすでにダガーが握られ、銀色のヤイバが閃光と化して空気を切り裂いた。

身を低くして、アリーシャはナイフをかわした。やはり踊るような動作だった。切断された髪の毛が舞う中、マキはヤイバをひるがえし、切っ先を下に打ち下ろした。ぎん、という剣戟の音。アリーシャは広げた腕の先で、ナイフを受け止めた。その指先には、一枚ずつカードが挟まれていた。

「マキ、やめろ！　彼女は船の外の人間だ」

おれの声など耳に入らぬ様子で、マキは次々とナイフを繰り出し

た。仮面の隙間から、怒りに燃える瞳が覗けるようだった。アリーシャは身をひるがえし、攻撃を指先のカードで受け止めながら、後退りしてゆく。ナイフとカードが触れ合うときは、剣戟の音とともに、銀色の火花が散った。

勢いよく打ち込まれた一撃に、アリーシャはよろめいた。見る間に劣勢になり、壁際まで追いつめられた。とどめをさすべく身構えたマキの両手で、くるくるとナイフが回る。黒猫が走り、宙を舞って主人の前に着地した。右手のカードを、アリーシャはかざした。

「よせ……アリーシャ！」

おれが叫んだ時にはすでに、カードは赤い首輪の上を滑っていた。小動物の体から発せられたとは思えない、金属的な音。灼熱するように首輪が光を放ち、猫の目が輝いた。

リビングデッド化した者を相手に行われた、いくつかの戦闘がフラッシュバックされた。最初の戦闘で、プルートゥは長大な剣と化し、不法ギルドの中毒者を一刀両断にした。親孝行横丁でコック服の中毒者を倒した時、猫はアリーシャの翼となり、聖杯と化した。そしてサイキックの兄弟との戦いにおいては、燃える獅子の姿をあらわした。

ガトリング砲となって、あの退化猿人どもを粉砕したのは、ほんの数時間前のどきごとだ。

いずれにせよ、変化したプルートゥの前では、敵はひとたまりもなく屠られている。しかもマキはリビングデッド化しているわけではない。多少ナイフを使う以外は、ただの生身の女性に過ぎない。瞬く間に殺されるのがオチではないか。が……

（消えた？）

猫の姿は、すでにどこにもなかった。

マキの右手からナイフが放たれた。それは壁際にたたずむアリーシャの胸の手前で、硬いものにぶつかるような音を立て、十字形の光を出現させるとともに、弾き飛ばされた。おれの足もとまで飛んできたナイフは、まっぷたつに折れていた。左手が投げたナイフも、

同様の運命をたどった。

エネルギー・シールドか？

二つあらわれた十字形の光は、彼女の前で消えずに残っていた。マキは髪を揺らし、新たに二本のナイフを抜いて、今度は投げずに突進した。走りながら、手の中でくるりと回し、逆手に持ちかえて、ふりかざした。そのまま首の両側へ突きたてる勢いだったが、またしても音をたてて弾き返された。十字形の光が四つに増えていた。

マキは反動で後退りし、かろうじて転倒に耐えた。そこへ片腕をまっすぐに伸ばしたアリーシャの指が突きつけられると、四つの十字形の光が回転しながら、マキの周りを乱舞した。すでに折れていた二つのナイフが跳ね飛ばされ、ぎりぎりと仮面が切り裂かれる音が響いた。

「あああああっ！」

たまらずにマキは床に倒れた。アリーシャは腕をひるがえして、四つの十字形の光を後退させた。光は一つにまとまり、ひときわ強く輝いたかと思うと、いつの間にか一匹の黒猫の姿に戻っていた。

マキは床に座り込んだ姿勢で、両手で顔を覆っていた。泣きじゃくるように、震える肩。かたわらには、真っ二つに割られた鉄仮面が転がっているのだった。

52（3）

「あなたにはもう、必要のないものです。こんなものを被り続けたところで、あなたがつらいだけではありませんか」

アリーシャの静かな声が、沈黙に呑まれた。どうすることもできないまま、おれは呆然と立っていた。トリベノを見れば、散乱した書類の中、机に腰かけて、あらぬ方を向いていた。マキは顔を覆ったままだ。

もし衣服を裂かれたのなら、上着をかけてあげられるのだが、仮面の代わりなど持ち合わせていない。しかもトリベノみたいに顔をそむける機会さえ、逸してしまった。

「『幽霊船』の中にはね、名医が多いのよ」

くぐもった声。依然として顔を両手で隠し、どうやらおれに話しかけているらしい。

「ああ、聞いた覚えがあるよ。ロストテクノロジーの一部が解明されたとか何とか、たまに新聞に載っているが、待てど暮らせど実用化されたためしがない。ところがここには、禁断の医療を駆使する凄腕たちが多くいて、密かに船外から訪ねて来る、悩める者たちを診ているとか」

「そんなところね。父が顔が広かったおかげで、わたしもそういった医師たちを何人か知っている。頭部さえ残っていれば体を再生させられると、豪語する医師もいる。そんなかれらでさえ、わたしを診たときは匙を投げたのよ」

「……」

「もちろん、色素を注入するなどして、一時的にはごまかせはしたでしょう。でもすぐに元に戻ってしまうのは、明らかだった。かれらは口を揃えてこう言うのよ。こればかりは、どうにもならない。科学的にまったく原因のわからない。一種の呪いのようなものだって……」

「呪い？」
掌の下で、マキは自嘲的に微笑んだようだ。
「ええ。科学技術の権化みたいな人たちが、そんな言葉を口にするのだから、滑稽なんだけど。でもわたしにとっては、あまりにもリアルな一言だった」
顔を覆ったまま、彼女は立ち上がった。おれに背を向けると、金色に染めた髪の結び目を解き、ふっさりと、両手で背中にさばいた。
「エイジ、見て」
彼女はこちらを向いた。髪が揺れて広がり、また肩の上に流れ落ちるまで、おれは息をつめて見まもっていた。
七年前の、あどけない少女の顔が、たちまち重ね合わされた。現在の彼女は、もちろんぐっと大人びて、目つきは凛としている。間違いなく、イイ女の部類に入るだろう。その顔に傷らしい傷はまったく見当たらなかったが、何を見ても顔色を変えまいと決めていたおれを驚愕させたのは、その瞳の色だった。
アリーシャと同じだった。マキの瞳の色は、ほとんど銀色に近い白なのだ。
七年前は、濃い栗色だった。ハシバミの実のような艶があり、好奇心たっぷりに、くるくるとよく動いた。それが今では、幻の湖水のように冷たく、瞑想的なまでに静まっていた。そう、アマリリスが組んでいたジグソーパズルの湖水のように。
「きっとわたしは、わたし自身が許せなかったんだと思う。両親を助けてあげられなかった自分が。あるいは、両親とともに逝けなかったわたしが。気が狂う寸前まで、さんざん自分を責めて責めて責め続けたあと、瞳の色が変わったときは、だからむしろ納得できたの。わたしの本当の敵は、わたしなんだって」
おれは相変わらず、ばかみたいに突っ立っていた。マキは身をかがめ、割れた仮面の片方を拾い上げた。
「これを被るようになったのは、瞳の色を隠すためじゃない。わたしが敵だということを思い知るためよ。何をしても、どんなに犯人

を追及しても、両親は戻らない。過ぎ去った時は、取り返しがつかない。わたしが本当に許せなかったのは、きっとそのことなの。ね、アリーシャ」

「はい」

「あなたも、元から白い瞳をしていたわけじゃないでしょう。どうして色が変わったの？　何かきっかけがあったの？　イーズラックとは、いったい何なの？」

床に落ちる仮面の音が響いた。マキの瞳から、涙がこぼれ落ちるのを見た。あまり多く泣きすぎたため、瞳から色素が抜けてしまったのではないか。彼女にとって仮面を被ることは、涙との決別をも意味したのではないか。なすすべもない男は、ぼんやりとそう考えた。

アリーシャは、かすかに首をふった。

「わたしにもわかりません。それを呪いと呼ぶのなら、わたしもまた、イーズラックの呪いにかけられているのでしょう。運命という名の呪いを背負ったまま、わたしは生きてゆくのでしょう。でもマキさん。もしあなたが、あなた自身を責め続けるのだとしたら」

「なに？」

「それは間違っています」

53

53

エレベーターのドアは、すでに閉ざされていた。ボタンを押したが、反応なし。蹴っても叩いても、びくともしない。パネルの光はB9の文字の上なので、ゴンドラは一応、この階で止まっているらしいのだが。

アリーシャに、どうやって乗ったのか尋ねたところ、

「わたしは何のボタンにも触れませんでした」

つまり、雇用促進住宅の幽霊エレベーター同様、いかれているということか。

「それにしても、よくおれたちと合流できたものだな」

「カードが導くままに行動したまでです。マスターとまた巡り会えることは、常にカードに示されていました」

奇術師のように、一枚のカードを指先に現出させ、くるりと表に返した。そこには、バロック期の衣服を身につけた夫婦と子供が描かれていた。夫婦は一人の子の肩を抱いて寄り添い、その子は手にした一輪の薔薇の香りを、うっとりと楽しんでいるようだ。

なぜこのカードが、おれたちの再会を意味するのか。多少はカード占いをやった妻も、驚くべきイマジネーションとインスピレーションで、絵柄と事象を結びつけて解釈したものだが、これは易しい部類かもしれない。この絵柄を見て、別れや失望と結びつける者は、まずおるまい。もし恋占いの答えとして出たなら、質問者を狂喜させたことだろう。

「待つしかないかの。上へ行くためには、時にはいやになるくらい、待たされる場合がある」

トリベノが呑気らしく、床の上であぐらをかいて言う。

「占いといえば、イーチンという古い占いがあっての。そのテキス

トは何千年も昔にできた、神と人間の競作だというが、森羅万象を全て網羅した回答が書かれているという。その中のひとつに、こんな答えが載っておるよ。飯でも食いながら待っておれ、とな」

「要するに、あんた、腹が減ったんだな」

考えてみれば、どん底からここへ来るまで波乱の連続で、飯はおろか、休息らしい休息をとっていなかった。マキのリュックの中に、缶詰がいくぶん残っているし、見たところ、ワームの類いも貼りついていない様子。ここで少し休むのも、悪くないだろう。

煮炊きはできないものの、マキが金属の皿に缶詰を取り分けて、それらしい見栄えにしてくれた。髪をまたひとつにまとめ、シャツの腕をまくって、かいがいしく働くさまは、意外にヤマトナデシコ的である。ずっと一緒だったというのに、鉄仮面を脱いだとたん、急に女らしさが意識されるようで、おれはいささか緊張した。

対して、アリーシャは始終ぼんやりしていた。どうやら典型的な、家事をこなせないタイプらしい。酒場に雇われていたものの、あくまで占い師としてであり、厨房の処理は親爺が一人で切り盛りしていたものだ。しかも彼女は、基本的に菜食主義者らしく、一人だけ豆の缶詰に塩を振って食べていた。

食事の席で、多少の意見交換がなされた。自分の頭を整理するつもりで、おれは言った。

「ドームを中心とした街並。おそらくは、あれがまるごと麻薬密造者の街だった。バルブはクラーケンの合成に必要な装置だったのではないか。イーズラック人を装っていた住民の正体は、ツァラトゥストラ教過激派、ジークムント旅団の一員と考えられる。では、まるで中性子爆弾を用いたように、住民だけが忽然と消えてしまったのはなぜか」

「その理由はわからない、かね？」

例のモグラから取り外した装置を手入れしながら、トリベノがイヤミな言いかたをした。一つ眼チャペックに襲われた時は、盾にしたくせに。今度はいやに入念に油をさし、磨きをかけている。おれ

は腹を立てる気にもならず、「そういうことだ」と答えておいた。
ニヤリと笑って爺さんは言う。
「旅団の連中が少量のクラーケンか、それに順ずる麻薬を投与されていたことは、お前さんも考えたことだろうて。何のために？　言うまでもなく、アイデンティティーを消すためさ。リビングデッドのような力こそ持たないが、右を向けと命令されれば右を向き、前進を命じられれば、ひたすら前へ進む。例え行く手が多脚ワームの巣であろうと、決して止まらずに」
「まさか……」
「そういうことだよ、お若いの。かれらが死体はおろか、髪の毛一本残さずに消えた理由が、それなのさ。コントローラーを何者かに奪われてしまったんだな。では、奪ったのはいったい誰か？」
もったいぶって言葉を切ると、爺さんは煙草に火をつけた。挑発的な笑みを浮べた口の端にそれをくわえ、おれたちを順ぐりに眺めた。
「ま、そいつを確かめるために、こうして気まぐれなエレベーターが開くを待っておるのだからの。果報は寝て待つことにしようではないか、お若いの。お美しいお嬢さんがたも」
旨そうに煙を吐いて、片目を閉じるのだ。

54

54

どれくらい眠ったろうか。星も太陽も見えない『幽霊船』で三日も暮らせば、昼夜の感覚が完全に狂ってしまう。

身を起こしてみれば、マキとトリベノが書類を枕に、ぐっすりと眠っていた。やはり疲れたのか。屋外で野宿するのと異なり、帆布ひとつ身に纏えば汗ばむほど、温かいことだけが身上である。

アリーシャとプルートゥの姿は、どこにも見当たらなかった。覚えずエレベーターのほうに目をやったが、眠る前と、とくに変わった様子はない。ゴンドラが開くときは、かなり音が響くから、さすがに起きられる自信があった。つまりアリーシャと黒猫は、エレベーターに乗って消えたわけではないことになる。

ならば、煙のように消えたのか？

「アリーシャ」

はい。という返事がすぐに帰ってきた。この風変わりな事務室の隅。エレベーターとは反対側の柱の陰から。プルートゥが顔を出し、こちらを向いて小さく鳴いた。おれは苦笑しつつ、帆布を押しのけて立ち上がる。

「眠っておかなくていいのか」

不思議な匂いに気づいた。それは彼女がいつも漂わせている薔薇の薫香に似ているが、それよりもずっと強く、湿った香りだった。歩み寄り、柱の陰を覗いたまま、おれは石化した。蛇髪の妖女に見つめられたのではない。アリーシャは片膝を立て、もう一方の脚をまっすぐ投げ出していた。何も身につけていなかった。

目を逸らそうにも、石化してしまったのだから、見つめ続ける以外にない。彼女は立てた膝から腿の両側へ、なめらかに両の掌をすべらせていた。ゆるやかに踊るように。掌が行き来した跡には、引

き締まった褐色の肌が、なまめかしい光沢をおびた。
彼女のかたわらには、平たい缶が開かれていた。中に詰まった油脂を、塗りこんでいるらしい。香油、という単語が脳裏をよぎる。魔女が空を飛ぶ前に、それを全身に塗りこむという秘薬……おれに凝視されながら、彼女は手の動きを止めなければ、裸身を隠そうともしない。
そうして彼女の全身には、無数の赤い筋が浮き上がっていた。
「体が火照るのです」
「えっ」
「プルートゥを使ったあとは、どうしても。今回は弱いカードでしたから、油を塗るだけで事足りるのですが。強いカードを用いたあとは、ひと晩じゅう、のたうちまわることもあります」
赤い筋からは、不思議と、醜さもおぞましさも感じられなかった。うすらと、みずから発光する模様のように見えた。古代の異郷の戦士たちが、神々の加護を得るために、肌に刻んだ模様のように。
「どうしても背中に手が届きません。塗っていただけますか、マスター」
アリーシャの声は魔術的な音楽と化して、おれの脳裏で共鳴した。頭の奥が、じんと痺れた。幻惑されたように、おれは彼女の背後にひざまずいた。全身を薔薇の香油に浸された気がした。
体が火照ると彼女は言ったが、指をすべらせると、背中はひんやりしていた。硬質な中に、みずみずしい弾力があり、内側から掌を押し返されるようだ。彼女は立てた両膝に、乳房を押しあてた。ぐったりと傾いた背中に、時おり痙攣的な震えが走った。
「好い気持ちです」
おれは彼女の肩の上で手を休め、上腕に添って上下させた。背にもたれるようにして、細い首筋に軽く唇をあてた。
「こんなに苦しんでまで、カードを使う必要があるのか。アリーシャ」
「わたしの意志では、どうにもならないのです」

「きみは、カードに囚われているんじゃないだろうか。マキがみずからの意志で、仮面の中に囚われたように。きみのカードがよく未来を予言することは、おれも目の当たりにしたけれど。予言された未来は、過去と同じではないのか」

「あるいは、そうかもしれません」

彼女の手が、おれの手の上に重ねられた。ためらいがちに、そのまま乳房へと導いてゆくのだった。

「ですが、マスター。過去と未来の間には、今があることを、わたしは知っているつもりです。今だけは、今のわたしだけは、過去にも未来にも囚われず、自由にふるまえます。それが瞬きをするよりも早く過ぎてゆくのだとしても。マスター、わたしは自由です。今のわたしは、とても自由です」

55（1）

55

エレベーターが開いたのは、それからおよそ二時間後。四人も乗りこめば、すし詰めに近い。トリベノが一番上のゼロ階のボタンを押すと、ドアが閉まり、ゴンドラは上昇を開始した。

「ゼロ階には何がある？　おれたちは、だれに会いに行こうとしているんだ？」

「もしかして……」

おれの質問を継いだのは、マキだ。小柄な爺さんの肩が、ひこひこと揺れるのがわかった。笑っているらしい。

「そのとおりだよ、お嬢さん。こいつは地獄から天国までの直通便さ」

天国といえば、考えられる場所はひとつしかない。「幽霊船」の最高階に位置する街。夢のように美しいが、人っ子一人いないという……

シャングリ・ラだ。

「そこに麻薬密売組織の首領が隠れている、と？」

「いかにも」

「しかし、あそこは『幽霊船』の聖域であり、アイデンティティーそのものだろう。無人のまま美しく保っておくことで、こう言っちゃマキに申し訳ないが、ならず者の集まりであるこの場所を丸く治めている。いわばシャングリ・ラは、船に住む者たちの共通の夢だ」

ゆえに船の住人の誇りをかけて、聖域は厳重に管理されている。最下層に身を潜めるのとは、わけが違う。無数の監視カメラが目を光らせているし、不埒な侵入者を蜂の巣にする仕掛けには事欠かない。そのうえ掃除と称して、箒の代わりに銃をかついだ集団による、定期的な巡察まで行われているのだから。

トリベノは鼻を鳴らした。
「はん。ワガハイとて、伊達にどん底を這い回っておったわけではないわい」
闇煙草を売りながら、情報収集に努めていたことは知っている。闇のブローカーたちは、スパイ業者を兼ねていたに違いない。かれは語を継いだ。
「じわじわと輪を絞りこんでいった先が、あそこだったのさ。地獄の主人が天国に住んでいるというのは、なかなか気の利いたブラックユーモアじゃないかね。だが、どうしても入り口が見つからなかった」
「シャングリ・ラからは入れないのか？」
「そりゃ入れるさ。蜂の巣になっても生きておられたら」
返す言葉もなかった。迎撃システムを逆手にとって、潜り込んでいたわけだ。入り口が地下にしかないことも、それならうなずける。
殻つきワームが這うように、ゴンドラの上昇速度はきわめて遅い。この狂ったエレベーターを、首領が使っていたのだろうか。あるいは地下の街を放てきする際に壊すつもりが、不完全なまま生かしてしまったのかもしれない。トリベノは言う。
「むろんその入り口は、麻薬密造の拠点と繋がっていなければならない。必然的に、バルブを追う恰好となったのさ」
「単純な疑問だが、クラーケンを合成するのに、なぜバルブが必要なんだ？　ＩＢを生み出すための装置ではなかったのか」
「それで合っておるよ。クラーケンは、いわば副産物だわい。火を燃やせば、二酸化炭素が生じるようなものだ。逆に言えば、ＩＢの根本的な秘密に触れるひとつの鍵が、クラーケンに隠されておるのだろうて。金儲けばかりが、連中の目的ではないよ」
「目的、か……」
そうつぶやいた口の中に、厭な味が広がる気がした。トリベノに訊くまでもなく、自身の中である程度の答えは出ていた。それは「人食い私道事件」にも繋がる答えだ。あの多脚ワームの化け物に刻

印されていた、逆さAの紋章と。
おれはけれど、その答えを意識に上らせたくなかった。はっきり意識したとたん、正気を失いそうな気がした。ゴンドラはゆっくりと、けれど確実に上昇してゆく。そこに待ち受けている者が、ただの金に目が眩んだ麻薬屋でないことは、いやになるほどわかりきっていた。
やはりゴンドラの外で待ち受けている運命のカードは、「死」なのかもしれない。大鎌を持った骸骨。刈りとられる無数の首。妻が所有していたカードには、たしかそんな恐ろしい絵が描かれていた……と、アリーシャの指が、おれの手の甲に触れるのがわかった。
「死は、決して恐ろしいカードではありません。物事の終わりは、もうひとつの物事の始まり。それは再生を意味します」
ゼロ階に着いた。ゼロに賭けろと言った昔の文豪は誰だっけか。
ドアが開くまでに少し間があった。マキがナイフを抜くのを感じながら、おれはホルスターから銃を浮かせた。

55（2）

前方は闇である。

おれはトリベノを押しのけて、銃を抜かずに一歩踏み出した。奈落ではなく、硬い床が体重を受け止めた。手を突き出しても、触れるものはない。数歩歩いたところで、背後でゴンドラの閉まる音を聞いた。そしてまた、沈黙。

闇よりも、静かすぎることが、おれの神経を参らせた。考えてみれば、地下では常に響いている重低音をはじめ、何かしら機械の音が鳴っていた。それにこの芳香。機械油や、朽ちた金属のにおいに慣れきった鼻には、むしろおぞましいものに感じられた。

闇と静けさと芳香。そこから連想されるのは、死以外の何ものでもない。

かちりと小さな音がして、赤い光に闇が溶かされた。トリベノが一インチほどの小型ライトをかざしていた。周囲を照らすのを目で追えば、ここは十二スペースほどの小部屋であるらしい。多少の家具があり、壁に絵がかかり、鏡があり、床はシュールレアリスムの画家が好んで描くような、市松模様である。

猫脚のサイドテーブルの上に大きな青磁の花瓶が置かれ、薔薇の花がたっぷりと生けられていた。芳香の正体はこれだった。

いたって無粋なおれだが、薔薇が高級品であることくらい知っている。切り花一本ぶんで、デートに締めて行けそうなネクタイが買える。しかるに、この部屋はたしかに調度も贅沢だが、すべてにおいて小ぢんまりとしており、いかにも「控えの間」といった風情。何万サークルもする薔薇を飾るに相応しい場所とは思えない。

「まるで、おれたちのために用意された楽屋みたいだな」

そうつぶやいたとたん、灯りがともった。天井の模造燭台が投げかける、やわらかな光。壁紙が薄いグリーンであることを、初めて知った。というより、無数の色彩が存在することを、忘れかけてい

た。

振り返ると、エレベーターが存在した痕跡はまったくなく、どんなカラクリなのか、そこも奇麗に壁紙で覆われていた。中世ふうにデザインされたヒナギク模様。継ぎ目はどこにも見当たらず、ご丁寧に、庭園を描いた八号ほどの油絵までかけられていた。現在はどこにも存在しない、緑あふれる幸福な庭。

「開かないみたい」

マキが言う。向かい側にドアがあり、彼女はノブに手をかけて、皮肉らしく小首をかしげていた。古い木材の軋む音をたてて、トリベノが椅子に座った。

「舞台の用意が調うまで、しばらく待っておれ、ということではないかの」

「舞台だと？」

尋ね返したおれを、爺さんは口の端をゆがめて受け流した。そこにはもう、火のついた煙草がくわえられているのだった。アリーシャもプルートゥを抱いて、ほかの椅子に腰をおろした。部屋に点々と据えられている椅子は、偶然なのか何なのか、ちょうど人数ぶんである。おれは肩をすくめた。

「そのうち、メイドが茶でも運んで来るんじゃないか」

そう言ったとたん、がたんと音がして、部屋が少し揺れた。見れば側面の壁に四角い穴が開き、いかにも旧式のチャペックが入ってくるところだった。家事用とおぼしく、無骨な体にエプロンを巻きつけ、両手にささげた盆の上では、白磁のカップが四つ。甘い香りのする湯気をたてていた。カラクリが多すぎるこの部屋は、あまり心臓に宜しくない。

一瞬後にはチャペックの背後の穴が閉ざされ、まっさらな壁に戻っていた。ぎこちない二足歩行でチャペックは四歩進み、足を止めたところで小腰を屈めた。礼をしたらしい。それでも盆だけは水平に保たれ、紅茶は一滴もこぼれていない様子。喜々として近寄ろうとしたトリベノを、おれは手で制した。

「うかつだぞ。刺客だったらどうする」
軍用を家事用に偽装するのは、使い古された手だが、充分有効だ。あるいはリミッターを外せば、家事用でも銃くらい撃てる。近頃では技術が向上して、八幡兄弟ほどの腕がなければ、外せなくなっているが、旧式ならば事は簡単。
それにこいつのセンサーは、おれたちを襲った掃討車や軍用チャペック同様、眼玉をおもわせる形状ではないか。爺さんはけれど、鼻を鳴らしたばかりで、
「シカクもサンカクもあるものか。茶の一杯くらい、飲めなくてどうする」
意味のわからないことを言いつつ、カップを受け取った。首の付け根から細い隠し腕があらわれたときは、ぎょっとしたが、マニピュレーターの先にあるのは、灰皿だった。トリベノがそれで煙草を揉み消すと、チャペックはまた礼をし、おれの横を素通りして、マキの前で止まった。レディーファーストというわけだ。
最後におれに歩み寄り、カップを取りやすいよう、小腰をかがめた。至近距離で眼玉と見つめ合うのは、あまり気持ちのいいものではない。
「質問に答えられるか？」
「ロボット三原則、ニ、ノットッテ。タダシ、限定的、ニ」
喋りながら眼球がうごめき、いくつかの小ランプが点滅した。無機質な声といい、いかにも大昔のＳＦ映画に出てきそうな「ロボット」である。

55（3）

限定的に、ね。

「まあいいだろう。ロボット三原則にのっとって、おまえの名前を知りたい」

「型番ハ、ＢＳＳ６３ｂ。通称ハ、タウロス二号、デス」

おそらくミノタウロスからとったのだろう。なるほど、天地に連なる迷宮のような、こんな場所で行き逢うには相応しい気もするが、家事用チャペックとしては、物騒な名だと思わざるを得ない。おれはカップを受け取り、タウロスは両手をおろした。ソーサーに、スプーンと二つの角砂糖がのっていた。

何も加えず、ひと口飲んだ。いたって無粋なおれだが、代用茶葉がいっさい使われていないのはわかる。

「旨いね。おれの名はエイジだ。コードネームだけどな。限定的で構わないから、ここがどこなのか教えてくれないか」

近くで爺さんが鼻を鳴らすのが聞こえた。言いたいことはわかっている。

例え女がいる酒場に入っても、おれは給仕のチャペックを相手に呑んでいる場合が多い。女嫌いでないことは、ご承知のとおりだが、なぜか機械を相手にしているほうが、ずっとくつろいだ気分になれた。女たちに変態呼ばわりされながら。

機械に優しくしたところで、無意味なのは承知の上だが。それでも処理班時代の相棒、サンポッドは、自身を盾にしておれを助けてくれた。そんなプログラムは一切されていないにもかかわらず、だ。

タウロスは答えた。

「シャングリ・ラ」

「なるほどな。おまえは……こう言っちゃアレだが、ここを不法に占拠している主人に従っているのか。それとも、この家の備品なのか」

「以前、ノ、マスター、ハ、船、ノ、管理組合、デシタ。アタラシイ、マスター、ニヨッテ、改造強化、サレタノ、デス」
「よくわかるよ。当然、リミッターは外されているのだろう」
「ハイ」
「現在のおまえの主人の名は？」
「守秘義務、ヲ、遂行シ、マス」
やはり、そうきたか。もとから期待していなかったので、おれはちょっと肩をすくめて、質問を変えた。
「何のために、おれたちはここへ招待された。もし招かれていればの話だが」
「タシカ、ニ、ゴ招待、イタ、シ、マシタ。マスター、ノ、リョウシン、ニ、ヨッテ」
リョウシンとは、両親ではなく良心に違いない。文脈としてはどちらもアリだが、良心だと直感した。それもどうやら、おれたちにとって、あまりありがたくない良心のように思われる。時に良心は、悪意の何十倍も恐ろしい悲劇を生む。純真な心で遂行される暴力ほど、恐ろしいものはない。
不意にタウロスのランプが一斉に点滅し、小さくブザーが鳴った。なぜか叱責されている印象を受けた。そそくさとタウロスは小腰を屈め、空のカップを集め始めた。盆を小テーブルに置いて、大型の洋服箪笥に歩み寄ると、扉を左右に開いた。
「皆様ニハ、コレニ着替エテ、イタダキタク、ゾンジマス」
襞をたっぷりとった布地の塊が吊るされていた。どうやら二着のイブニングドレスとおぼしく、ついでに二着のタキシードが、ぶら下がっているのを見た。
興味をそそられたのか、マキが箪笥に近づき、一着を胸の前にかざした。黒いドレスは、襞が多いわりにシャープな印象。大きく開いた襟ぐりの胸の部分に、黒薔薇のコサージュが縫いつけられていた。
「これはアリーシャに合いそう」

もう一着はワインレッドで、スカートがふわりと広がっていた。至る所につけられたリボンからして、いかにも少女趣味である。が、マキの様子から、意外にも気に入ったらしいことがうかがえた。

「可愛いわ……」

「ゴ婦人ガタ、ニハ、コチラ、デ、着替エテ、イタダケ、マス、ヨウ。簡便、デハ、ゴザイ、マス、ガ、シャワー、モ、ゴ用意、イタシテ、オリ、マス」

すでにタウロスは、数枚の衝立を部屋の隅に立て回し、ちょっとしたプライベートルームをこしらえていた。どこから引き出したのか、シャワーのノズルが、壁にかかっているのが見えた。マキとアリーシャは顔を見合わせ、それぞれのドレスを手に、衝立の後ろに隠れた。

プルートゥは牡猫としての自覚があるのか、我々とともに残った。

55（4）

仕切りがあるとはいえ、ご婦人がたの肩から上は何となく見えている。彼女たちは、脱いだ服を衝立の上に引っかけ、順番にシャワーを浴びている。

「着替えんのかね」

見れば、爺さんはすでにタキシード姿で、指で蝶ネクタイをぴんと張っていた。みょうに似合ってはいるが、一旦演奏が始まれば、狂ったようにタクトを振り回す老指揮者といった風情。おれは片手をあげた。

「遠慮しておく。死に化粧みたいで気に食わない」

トリベノは皮肉のひとつでも返そうとしたようだが、鼻を鳴らしたばかり。この男、上流階級の集まりに、場慣れしているのではないか。

首長連合の時代、議会よりも幅を利かせていたのが、社交界である。首長たちのサロンには、着飾った魑魅魍魎のごときヤカラが集い、目配せや指の合図ひとつで、大金や法令や人事が、右から左へと動いた。サロンで首長の気を引いた者が成功者となり、寵を失うことは、すべてをなくすことを意味した。

明らかに、トリベノは旧政権のサロンに出入りしてたフシがある。着替えを終えてあらわれた女性二人には、目を見張らずにいられなかった。マキはお伽話の妖精のようで、アリーシャは神話の精霊をおもわせた。もともと神秘的なアリーシャはともかく、マキの変貌ぶりには驚かされた。昨日まで鉄仮面をかぶり、ジーンズ姿でナイフを振り回していた娘とは、とても思えない。

「エイジは着替えないの？」

「ああ。ピエロの衣装でもあれば、着たいんだがね」

肩をすくめているマキの横を、ぎちぎちと音を鳴らして、タウロス二号が通り過ぎた。小ランプを明滅させながら言う。

「ソレデ、ハ、ゴ案内、イタシ、マス」
大仰な浮き彫りのあるドアの取っ手に手をかけた。いかにももったいぶった、蝶つがいの軋む音。あふれる光。開かれたドアの後ろには、もう一体のチャペックが立っていた。
タウロス二号と瓜二つだが、エプロンはつけておらず、代わりに胸に描かれた逆さAの紋章が、逆光の中にありながら、鮮明におれの目を射た。おそらくあれが、タウロス一号に違いない。
一号は、これも二号と瓜二つの、ぎこちない会釈をすると、片手の指をそろえて、ドアの向こう側を指し示した。
「オマタセ、イタシ、マシタ。ドウゾ、オ入リ、クダサイ。マスター、ガ、オマチシ、テ、オリ、マス」
ドアをくぐるとき、あまりの眩さに、覚えず目を細めた。そこは舞踏会が開けそうなほど広い部屋で、実際に、十九世紀末ウィーンあたりの邸宅のレプリカかもしれない。床は控え室同様、磨きこまれた市松模様で、無数の模造燭台の灯りを、ぎらぎらと反射させていた。
所々に小テーブルが置かれ、古い静物画のように、様々な果実が盛られているテーブルもあれば、別のテーブルには、血で染めたような薔薇の花が、たっぷりと生けられていた。
部屋の奥には、玉座をおもわせる、大仰な肘掛け椅子がひとつ。ほとんど寝そべるような恰好で、一人の男が座っていた。この男が、主人なのだろう。
まるまると肥えた肥満体は、二人はゆうに寝そべれそうな椅子さえも、窮屈に見せていた。いかにも上質なタキシードの布地。その上からマントを羽織り、赤い裏地を覗かせながら、波紋をおもわせる襞を床になびかせている。男の髪は黒々として、髪油に輝き、肩に届くほど伸ばされている。
おれたちは、部屋の中ほどまで進んだ。
主人とおぼしい男は寝そべった姿勢のまま、指一本動かさなかった。その蒼白な顔を見て、覚えず足を止めたのだ。ひっ、とマキが

息を呑む声が聞こえた。主人の顔は、眼の部分だけがくり抜かれた、のっぺりとした仮面なのである。尖った鼻の下に白いヒゲをたくわえ、薄笑いを浮かべていた。

けれど、おれをゾッとさせたのは、不気味な仮面よりも、その二つの穴から覗く眼のほうだ。大きく見開かれたまま、瞬き一つせず、おれたちを凝視している。灰色の瞳は、ほとんど白に近いほど、色素が失われていた。

玉座のかたわらには、一人の少年が仕えるように立っていた。ポスターの束こそ持っておらぬが、バルブのあるドームへおれたちを導いた、あの少年に違いなかった。冷たい無表情が、調った顔立ちを、いっそう仮面じみて見せた。

玉座の背後には、部屋を横断するかたちで、巨大な幕が張られていた。亜麻色の幕の中央に、シンボリックに描かれているのは、羽と脚を大きく左右に広げた、猛禽類らしい鳥である。そうして鳥の絵の上には、逆さAの紋章が重ねて染め抜かれていた。震える声で、おれはつぶやいた。

「この星は……」

逆さAに対して、猛禽が広げた羽と脚の線が重なることで、一つの巨大な星が浮き彫りにされているのだ。正三角形と逆三角形を重ね合わせた、魔術的なシンボル……

ダビデの星だった。

56（1）

56

この星は古代宗教のシンボルとして有名だが、民間の呪術者たちは、ソロモンの星と並び、これを封印として広く用いていた。

そう……これは封印に違いない。あの幕の後ろに、何かが封印されている。

呪われた、何かが。

仮面の主人は依然として微動だにしない。美食と怠惰に浸されて、骨の髄まで腐ってしまったのか。肘掛けにもたれた左手には、ワイングラスを持っており、どす黒い血をおもわせる液体が、三分の一ほど減っているのがわかった。

タウロス一号と二号は、おれたちを両側から挟みこむ恰好で立っていた。給仕しているようにも見えるが、監視しているともとれる。

少年が身をかがめ、主人の耳に何事か囁いた。次にかれは椅子のそばを離れ、やはり小テーブルに載せられた木製の箱に近づいた。箱からは、奇態なユリ科の花のような、真鍮の筒が突き出ており、その下に黒い円盤が載っていた。

箱の側面に取り付けられたハンドルを回せば、円盤が回転を始めた。かたわらのアームを円盤の上に移動させ、先端を落とすと、真鍮の筒から、夜想曲とおぼし音楽が流れ始めた。その音は、磨き抜かれた市松模様の床に反響し、部屋じゅうに響きわたるのだ。あたかも部屋ぜんたいが、共鳴板と化したように。

再び少年は主人のかたわらに戻ると、今度は自身が、耳を蒼白な仮面の前に近寄せた。むろん、声はおろか、唇が動いたかどうかさえわからない。次に、我々に向かって少年は言うのだ。

「シャングリ・ラへようこそ。今宵はささやかな宴を用意しておりますので、どうかお楽しみくださいますよう」

まず驚かされたのは、少年の声である。声変わりさえ疑わしい外見とは裏腹な、太く響くバリトン。そもそも聖歌隊に属する以上は、ボーイソプラノでなければならないはずだ。しかも喋る時のかれの動作は、これまでの小動物的な敏捷さをすっかり失って、のろのろと重々しかった。まるで、脂肪の檻の中でもがいているように。

少年の変貌ぶりは、有無をいわさず、フォックス教の巫女を連想させた。死人のタマシイを呼び出し、おのれの肉体に乗り移らせることで、あたかも死んだ人物のように振る舞う。その人物と巫女が未知の間柄でも、死人の親族が見れば、まさにその人物を目の当たりにしているようだという。

ならばこの男は、もはや生きてはいないのか。目を見開き、うなだれることなく、ワイングラスを手にしたまま、こと切れているのか。そうして男のタマシイが少年に乗り移り、かれの意志を伝えているというのか。

それとも仮面の男は生きており、肥満によって動けなくなった自身の代役を、少年に一任しているのか。たぶんそうだろう。タマシイがどうのこうのと考えるより、そのほうが百倍合理的ではないか。

「相変わらず、もったいぶった演出がお好きなようだの。その点は、案外、あんたの兄貴とそっくりなのかもしれんて」

トリベノがそう言った。少年は痙攣的に頬をゆがめ、調った顔を皺だらけにして微笑した。

「お久しぶりですね、ドクター」

「ワガハイだけではない。ジュリエットにも挨拶してほしいものだな」

少年の顔に、瞬時、驚きが宿るのをおれは見逃さなかった。ジュリエットとは、爺さんがモグラ型マシンにつけていた愛称だ。かれはモグラの心臓部を取り外し、リュックに詰めて、今もタキシードの上から背負っている。そいつがなぜ少年を、いや、少年の体を借りているとおぼしい、仮面の主人を驚かすのか。

「急ごしらえの宴なもので、何かと不行届きで。どうかご容赦願い

たい。タウロス、お客様におもてなしを」
　ぎちぎちと足音が近づいてきた。タウロス二号の手した盆には、四つのワイングラスが載っていた。どれも執拗なまでに磨き上げられ、中に燭光を浮べていた。四人とも、受けとることを拒まなかった。次に一号が、ワインの瓶を持って歩み寄った。グラスに注がれたのは、仮面の男が手にしているのと同じ、どす黒いほど濃い赤だ。
　いつの間にか少年の手にも、同様のグラスが握られていた。仰々しい動作でかかげるさまは、かれの年若さを忘れるほど、貫禄に満ちていた。
「諸君の未来を祝福して」
「はん。過去の間違いではないのかね」
　そう言いながら、トリベノはひと息にグラスの中身をあおった。半ば毒ではないかと疑っていたおれは、少なからず慌てた。けれどかれの体に異変が生じる様子はなく、また注ぎ足されたワインを飲みながら、平気で果実をつまんで食っている。
「こんな時にこそ、栄養をとっておいたほうがいいぞ、お若いの。なに、余興が始まるまで、やつらは我々を殺したりはせんよ。余興まではな」

56（2）

余興、という言葉から、おれは剣闘士の試合を連想した。古代ローマの宴席における血みどろの余興。どちらかが死ぬまでそれは続けられ、宴席の床を薔薇色に染めた。そういえば、仮面の主人の風貌は、どこか暴君ネロをおもわせる。

この妄想があながち遠くなかったことを、あとで思い知らされるのだが。

呆然とグラスを手にしたまま、再びおれの目は、猛禽と逆さAの紋章が描く、巨大な星に吸い寄せられていた。この感じ……骨の髄まで凍りつくようで、それでいて額に脂汗が浮くといった、この感じには、いやになるほど覚えがあった。

星の裏側に封印されているのは、あいつなのか？

だが、もしそうだとしても、いったいあれを押し籠めておく、どんな方法があるのだろう。アンチシェルターを築くならともかく、あんな狭い空間に、余興とやらが始まるまで、ずっと閉じ籠めておくなど、果たして可能だろうか。並大抵の拘束具など、ものの役にたたない。意図的に眠らせる方法もない。いや……

あれを用いたのか？

眠らせるための……だから、大量に……

夜想曲がいつの間にか途切れ、代わりに少年の哄笑が響きわたっていた。笑うときだけは、ボーイソプラノに戻るのである。

「食事はお気に召しませんか」

かれと目が合う。ついで、銀や透明な器に盛りつけられた果実へ視線を移した。遺伝子操作のまがい物ではない。葡萄の一粒一粒が、薔薇の花一輪に匹敵する超高級品である。それは認めるが、なぜかセザンヌの絵を眺めているように、食欲がわかない。次々と口へ放りこみ、噛み潰しているのはトリベノだけだ。

おれはちょっと肩をすくめて、グラスをテーブルに戻した。この

ワインにしても、瓶一本でビルが建つほどの値打ちものだろう。胸の前に右手を添えて、少年は言う。

「不行き届きな宴席となったことを、心よりお詫び申し上げます。仮面舞踏会としてお招きしたかったのですが。仮面はおろか、楽師さえご用意できませんでした。本来はタウロスが四重奏団として演奏いたしますところ、あいにく二体壊れておりますので、それも叶いません」

旧政権時代、首長や金持ちたちは、必ずといってよいほど、自前の四重奏団を持っていた。才能ある音楽家をスカウトする場合もあれば、チャペックを仕込んで用いる者もいた。あるいは生身の人間の音感を改造強化するという、非倫理的なことも平気で行われていたようだ。

もともとシャングリ・ラの備品だったタウロスたちは、掃除や調理から演奏まで、オールマイティーにこなすのだろう。そしてリミッターを外された現在は、刺客の技をも。

「代わりに、とは申しませんが。珍しいレコードを手に入れましたので」

再び少年は、真鍮の筒のある箱に近づいた。写真でしか見たことがないが、蓄音機というのではなかったか。かれは箱の上の円盤を外し、別のものと取り替えた。おそらくあれが、レコードというのだろう。音波が刻みつけられた、最も原始的な記憶媒体。

さっきと同様な操作でアームが下ろされ、ワルツとおぼしい、音楽が鳴りはじめた。ベルリオーズの『幻想交響曲』第二楽章のワルツだ。おれが知っているくらいだから、とくに珍しい曲ではない。演奏家の顔ぶれが変わっているのか、演奏そのものが珍奇なのか、どちらかだろう。

なるほど、蓄音機が奏でるワルツは、記憶チップが再生するのと異なり、まるで別の曲に聴こえる。狂おしくも明るい曲だったのが、うつろな反響のせいか、狂おしさばかりが倍増し、限りなく陰惨に響く。まさに、サバトの席上で鳴り響くにふさわしく。

仮面の主人に目を遣れば、相変わらず椅子に寝そべったまま。手にしたワインは少しも減っていなかった。見開かれた目は、依然としてこちらに注がれ、あたかもこの宴席が、かれの凝視する一幕の夢であるかのように錯覚させた。見ればアリーシャがおれの前に立ち、こころもち微笑んでいた。

「踊りましょう。マスター」

酔っているのではない。彼女はワイングラスに、一度も口をつけてはいない。断ろうとして思いなおしたのは、何か意図があるかもしれないと考えたからだ。とくに心得もないが、適当にやるしかない。おれは「シ（はい）」とこたえ、架空の帽子を脱いでひざまずく恰好。彼女は足首を交叉させ、両手でスカートをちょっと持ち上げた。

今さら気づいたのだが、彼女の足首は、よくこれで体重が支えられると感心するほど、細いのだった。

おれたちは手を取り合った。床にいくつも円を描きながら、見れば、トリベノは片手で小テーブルにもたれ、鼻の頭を赤くして、自棄になったようにワインを飲み続けていた。マキはわき目もふらずに、仮面の男と少年がひかえる、奥へ向かって歩いていた。

（え……？）

玉座の前で立ち止まると、彼女はスカートをつまんで身をかがめた。

56（3）

「踊っていただけるかしら？」

マキがそう言っているのが聞こえた。アリーシャと顔を合わせた、おれの目は不安に満ちていただろう。彼女は小さく首を振った。介入するな、と言いたいらしい。

仮面の男はやはり指一本動かさない。バルブを発見したカノウ氏を「消した」張本人が、あの男であることは間違いない。今にもナイフが抜かれるのではないか。憎悪に我を忘れて、襲いかかるのではないか。そう考えると気が気ではなかった。

男のそばには、例の少年がいる。二体のタウロスも控えている。かれらが武装していることは間違いないし、いずれにせよ、感情的な行動にうったえた瞬間、彼女の命は消し飛ぶに違いない。

主人の代わりに、少年が礼を返した。

「わたくしでよろしければ」

二人は踊り始めた。危機的な状況をしばし忘れるほど、それはおれの目を見張らせた。

ダンスは旧政権のサロンに出入りするための必須科目で、有象無象のダンス教師たちがはびこる温床となった。ある者は、ルイ十五世時代の秘伝のステップなどと称して、サロンにへばりつき、他の者は流行を売りものにして、シンデレラに憧れる少女たちから、小遣いを巻き上げた。

むろん、マキが旧政権の社交界に憧れていたとは思えないが、サロンを追われて「幽霊船」まで落ちてきたダンスの名人は少なくなかったろう。しかもかれらは、巷のあやしげな教師たちとは格の違う、本物の「社交ダンス」を伝授したことだろう。

マキの踊りが奇麗なのは、肉体を感じさせないからだ。アリーシャのプリミティブな踊りとは好対照である。アリーシャの場合、ダンスが白熱するにつれて、裸体が強調される。どんな重いドレスを

身につけていても、肉体の存在感に圧倒される。
　対してマキのダンスは、衣装がいかに美しく映えるかが計算し尽くされた、いわば貴族的な洗練の極みだ。踊りの激しさが増すほど、衣装そのものがふわふわと舞っているようにさえ見える。そうして、舞い踊るワインレッドのドレスから、剥き出しの背中や、しなやかな脚が稲妻のように仄見えるとき、常に新鮮で強烈な印象を与えるのだった。
「マスターは、何だと思われますか」
　アリーシャの声で視線を戻した。彼女は仮面の主人を睨んでいた。いや、主人の背後に描かれた巨大な猛禽を。
「封印だな。あくまでカンに過ぎないが、あの裏にこそ、宴の本当の主人が居座っているのだろう」
「わたしもそう感じます」
「正直言って、どうやらおれは怖気づいているようだ。頭の中で、答えはとっくに出ているはずなんだが、考えたくない。意識の上にのぼらせることを拒否する何かが、自分の中にある」
　マキと少年は、いつの間にかホールの中央に至り、おれたちのすぐ近くで踊った。二人の会話が、耳に飛びこんできた。
「わたしの父をご存知？」
「いいえ。どのようなお方ですか」
「しがない電気工事屋よ。偶然バルブを発見し、母ともども殺された。あなたたちのしわざよね」
「お気の毒なことをしました」
「教えて。あなたを殺せば、わたしの復讐は果たせるのかしら」
　仮面の男ではなく、なぜマキは少年を問いつめるのだろう。今やかれの声は少女のような美声に変わり、動作も少年らしい機敏さを取り戻していた。挑発的な笑みを洩らして、かれは言う。
「おそらくそうはならないでしょう。報復の連鎖は不毛だと、ツァラトゥストラの教えにあります。どちらかが勇気をもって連鎖を断ち切らない限り、苦しみの種は決して尽きません」

「奇麗事を。苦しみの種を育て、世界にばらまくのは、あなたたち狂信者でしょう」
「そうかもしれません」
「今さらそんなことを言っても始まらないけど。要するに、最後に倒すべき相手は、あなたではないということね」
ワルツは狂おしさを増し、二人の動きが激しくなって、声が掻き消された。アリーシャはささやく。
「わたしはそのために、ここへ来ました」
「えっ」
「マスターの恐れを取り除くために。だから仰ってください。あそこに封印されている、呪われたものの名を……」
不意に、音楽が止んだ。

57（1）

57

時が凍りつき、すべての動きが止まった。

アリーシャと手を取りあったまま、おれの視線は、まずトリベノをとらえた。かれは白髪を振り乱して、ほとんど倒れそうな姿勢でテーブルによりかかっていた。

だらしなくくつろげた襟元。はみ出したシャツの裾。ラッパ飲みしていたであろうボトルを片手に提げ、ダビデの星を見つめる顔は、これほど酔っているにもかかわらず、蒼白だった。紫色の唇が、虫のようにわなわなと震えた。

「余興が……始まる」

ひどくかすれた声。これまでの、気丈で皮肉屋だった爺さんは、どこへ行ったのか。おそらく精神が崩壊するぎりぎりのところで、正気を保っているのだろう。その気持ちは、けれど痛いほどわかるのだ。

おれがそうだったから。

マキと少年は、バロック絵画のような、劇的にねじれたポーズで静止していた。今にも離れようとする彼女の指先を、少年の指がかろうじて繋ぎとめていた。少年の顔に酷薄な笑みが浮かび、マキは目を見開いた。残酷に指が振りほどかれても、彼女は一個の人形と化したように、片足で立ち尽くしたまま。

少年は彼女に背を向けて、部屋の奥へ歩み寄った。玉座の横を素通りしても、まだ振り返らなかった。仮面の男は、最初に目にした時点から、少しも姿勢を変えていない。ただ、手にしたままのワイングラスが、ぐらりと傾いたかと思うと、スローモーションで床に落ちて砕けた。

その音は、まるで世界の崩壊を告げるかのように、異様に大きな

こだまを返した。
肩越しに、少年が振り向いた。薄く貼りついたままの笑みは、仮面よりも無機質に感じられた。
「何かと至らない宴でありましたことを、ご容赦願えますよう。これより余興に移りたいと思います。どうぞ、心ゆくまでお愉しみくださいませ」
いきなり片手でつかまれた幕には、急に年老いたような無数の皺が刻まれた。巨大な星をかたどる猛禽の姿が、グロテスクにゆがんだ。力を籠めて、少年は右手を引き下ろした。上部の金具が次々と悲鳴を上げて、文字通り、それは切って落とされた。
ぶ厚い布地が宙に踊り、床に横たわるまでの時間が、とても長く感じられた。幕の裏側は五メートルほど奥まっており、剥き出しのコンクリートの壁が覗いた。
大小無数の配管。途中で切断され、垂れ下がったコード。得体の知れないメーターなど、どこの都市地区でもありふれた壁だが、古典的な部屋とのコントラストが異様で、美しいお伽劇の舞台がいきなり崩壊したような、おぞましさに打たれた。

壁の前に、そいつはいた。

闇を捏ねた呪いの人形……たしかにそいつは、ネオ・ヴードゥーの司祭たちがこしらえる、呪いの人形をおもわせた。
身の丈は大柄の男くらい。頭部に相当する部分が存在せず、太い肩から矮小な手にかけて、逆U字型に、だらりと垂れ下がっている。極端な猫背で、ごつごつとした肋を浮かせて腹部はくぼみ、短い脚は両棲類をおもわせる。こころもち開いた股の間から、先細りの尻尾らしいものが覗き、背後の壁に繋がっていた。
逆U字型の中心、頭部があるべきところには、大きなひとつの眼が据えられていた。
掃討車やタウロスたちと同じ、人工の眼玉だが、異様に大きく、

すさまじい視線が発せられていた。見つめる者をたちまち破滅させるという邪眼……エビル・アイのように。

怪物はしきりに眼玉を蠢かせ、矮小な腕の先にある三本の爪をわななかせた。間違いない……

目の当たりにすることで、おれはかたくなに拒否し続けていたそいつの名を、まざまざと意識せずにはいられなかった。

イミテーションボディ！

むろん、こんな人型タイプは見たことがない。ＩＢの形状のほとんどは昆虫をおもわせ、変り種がいても、せいぜい魚類か爬虫類に近かった。ＩＢから発生したといわれるワームが、そうであるように。

ただし、遺伝子改造などによって、人工的に生み出されたものだとすれば、人型もあり得るかもしれない。もともと人の手によって造りだされたＩＢなのだから、人工的というものナンセンスかもしれないが。イズラウンのテクノロジーはとうに失われ、ＩＢは独自の進化を遂げて、もはや人の手に余る存在と化しているのだから。

57（2）

「もうしばらくは動かんよ」
いつの間にか、トリベノがかたわらに立っていた。鼻の頭を赤くして、上体がふらふらと揺れていた。
「だが、こちらから下手に仕掛ければ、やつの思う壺だ。やつらは何よりも、憎悪や攻撃欲が大好物だからな。しっかり取り込まれて、自己のエネルギーに変換される。ま、もと専門家のお前さんに注意をうながすのも、おこがましいがの」
「やはり、やつはＩＢなのか？」
「カンでそれがわかったのなら、お前さんもたいしたものだ。ちょっと失礼するよ」
後の一言は、玉座のほうを向いて発せられた。見れば、主人はやはり姿勢を変えておらず、かたわらに少年が控えるさまも、最初に目にした構図のまま。
頭の鈍いおれだが、いい加減、仮面の男の生存を疑い始めていた。床で砕けたワイングラスはおろか、背後で目をぎょろつかせている化け物すら、一顧だにせず、同じ姿勢を保ち続けているのだから。ただ、微動だにしないかれの体からは、いまだに生気を感じるのだ。殺気に近いほどの、すさまじい念のようなものを。
トリベノはリュックから、例のモグラの心臓を取り出し、眼玉の部分を部屋の奥へ向けた。ロックを外すと、機械の背面は蓋状になっており、モニターとキーボードらしきものがあらわれた。
「ふん、情報がだだ洩れだわい。鍵をかけるよう、あれほど進言しておいたのにな」
モニターを覗きこむと、ポリゴンから成る怪物の全身が映し出され、その横に様々なグラフや数値が表示された。波状を描くひとつのグラフが、オレンジから濃い赤へと変化している。処理班時代に、これと似たセンサーをおれも持たされていた。ワームなら緑。グラ

フが赤へ偏ったら、対象がＩＢである証拠だ。
ジギー・バンデル・ルーデンの超絶テクなみのハヤワザで、トリベノはキーボードを叩き始めた。これほど速く叩ける人間は、変態博士の助手、黒木しか覚えがない。数値がすさまじく変化し、グラフがブレークダンスを踊り、怪物のポリゴンがスキャンされてゆく。トリベノの額に汗が浮いた。
「五分だ」
「なに？」
「やつが仕掛けてきたら、まっ先に尻尾を切れ。それから五分で、やつの駆動能力の限界がくる。バルブと繋がっていなければ、まだまだ長時間の活動はできぬと見える。もっとも、ＩＢを五分も操れたら、都市地区の一つくらい、軽く制圧できるがね」
「つまり、拳銃二丁で五分持ちこたえろと？」
爺さんは何も答えず、ニヤリと口の端をゆがめた。
処理班の場合、およそ十人前後のパーティーを組む。さらに一人に一体ずつ、軍用チャペックの相棒がつく。対ＩＢ用に特化されたスグレモノで、おれのサンポッドをはじめ、むしろかれらが主力といえる。このチームで、一体か、せいぜい二体のＩＢを狩るわけだが、それでも毎回、とんでもなく苦労するし、必ずと言ってよいほど犠牲者が出た。
サンポッドや、おれの妻のような……
考えてみれば、おれはあの悪夢の戦闘以来、一度もＩＢと闘ったことはなかった。ワームの駆除屋になり下がり、台所に住みついたゴクツブシやカンザシムシを、せっせと殺しては、エプロン姿の奥さんに礼を言われ、どうにか食えるだけの金にありついた。夢も希望もないかわりに、廃人同様の自分には相応しい暮らしだった。
それなのに、なんで今さら、ＩＢなんかと闘わなければならない？　しかもこいつは、これまでに一度も見たことのないタイプだ。擬人とも違う。ＩＢそのものが二本足で立っている姿ほど、おぞましいものがほかにあるだろうか。

「あいつが……お父さんを？」
マキの声で振り向いた。蒼ざめた顔。色素の薄い目を見開き、唇を震わせていた。ぐらりと揺れた彼女の体を、おれはかろうじて抱きとめた。百万本の花束を抱いたような気がした。
「おそらくな。なに、五分でケリをつけてやる」
親指を立て、せいぜい不敵に笑ってみせた。もし、ばかの世界選手権があれば、上位入賞間違いなしだ。かすかな微笑が返ってくるのをみとめ、花束をトリベノにあずけた。立ち上がると、アリーシャの肩が、すっと寄り添う。彼女の足もとには、尻尾をぴんと立てたプルートゥがひかえていた。
「おれが陽動する。やつの尻尾を切れるか」
「やってみます」
アリーシャがカードを一枚抜いた。背後でトリベノの声を聞いた。
「そろそろ動くぞ、お若いの。向かって左へ、およそ四五度。高速だから気をつけろ」

57（3）

おれはパイソンを抜き、だらりと脇に垂らしたまま、闇の塊に目をこらした。飛び出してくるからには、何らかのアクションがあるだろう。人のカタチをしているのだから、膝を曲げるとか身をかがめるとか、何かするだろう。そう考えたのが間違いのもとで、そいつは眼玉をぐるりと動かしたばかり。

まるで背中に見えないジェットでもつけているような、謎の推進力で、そいつは飛び出してきた。暗黒の彗星のように尾を引きながら、トリベノの予告どおり、四十五度の方向へ。テーブルを粉砕し、潰れた果実を臓物のようにばら撒いた床の上に、両棲類をおもわせる厭な姿勢で、へばりついた。

おそらくおれの度肝を抜いたあと、そこからさらに飛びかかるつもりだったのだろう。事実、トリベノの予告がなければ、数秒後には無残に屠られていただろう。けれど、おれはすでに銃口を向け、正確にやつの眼玉を狙って弾を放つことができた。

弾は命中したが、掃討車やチャペックとは、わけがちがう。まさかこの程度で仕留められるとは考えていないし、あらぬ方角へ弾丸は弾かれたけれど、多少は相手を驚かせたようだ。退化猿人の悲鳴にも似た、粘液質の奇声を上げながら、ＩＢは両手を存在しない顔の前で振り回した。

「ＧＯだ！」

促すまでもなく、彼女は駆け出していた。同時にジャンプしたプルートゥの首輪にカードをすべらせた。速い！　宙に身を躍らせ、すでに彼女は長大な銀色の剣を振りかざしていた。不法ギルドの中毒者を倒した、蛇の剣だ。

黒い尾が、ざくりと切断された。緑色の溶液がほとばしり、神経のようにコードが踊り、蒼い火花がスパークした。怪物は床をごろごろと転げ回り、さらにいくつかの小テーブルを、めちゃくちゃに

した。

あと五分。

ただし、彼女の「武器」が、ＩＢにどれほどの効力を発揮するのかは、未知数である。リビングデッドには通用しても、果たして対ＩＢ用の武器となり得るのか。しかもこの怪物が、どんな能力を持つのか、まったく得体が知れない。インセクトタイプ以外との交戦は、おれも初めてなのだから。

剣の切っ先を向けて、アリーシャが突っ込んだ。おれは片膝をついて援護射撃を行う。パイソンに動きを止められた怪物の肩に、蛇の剣が食い入った。噴出する溶液と、おぞましい悲鳴。時には慈悲をかなぐり捨てて闘う女神のように、彼女は剣を引き抜き、高々とふりかざした。

切り飛ばされた怪物の上腕が、蒼い火花を吐き出しながら床の上を滑走して視界から消えた。チャンスだ。けれど彼女はそれ以上踏み込まず、後ろに飛び退いて猫のように身を低くした。どこから吐き出したのか、一瞬前まで彼女のいた場所には、いくつもの黒い爪状の塊が、深々と床をえぐっていた。

「おい、冗談だろう」

怪物の右腕が見る間に再生するのを、おれは見た。しかもその部分は、灰色の礫を敷き並べたような装甲に覆われ、まがまがしくも長大な三本の爪を有していた。それは否応なく、ＩＢ化したアマリリスの左手を思い起こさせた。まだあと四分以上残っている。

爪を振りかざして、ＩＢはアリーシャに突進した。おれは新たに装填した弾を側面から放ったが、思ったとおり、急所に当てなければ弾き返されるばかり。彼女は剣で防御しながら、瞬く間に追い込まれてゆく。剣戟の音が響き、火花が散る。彼女の背が、どんと壁にぶつかる。すかさず咆哮を発しながら、怪物が踏み込んだ。

瀟洒な壁紙がえぐられ、大きなコンクリート塊と化して砕けた。倒れ込みながら、アリーシャはかろうじて横へ逃れ、床を転がって、テーブルの脚にぶつかった。血しぶきのように、赤い花びらが舞う。

「アリーシャ！」

怪物はゆうらりと向きを変え、倒れている彼女に歩み寄った。なぶり殺しにする悦びを、舌なめずりしながら味わっているように見えた。打ちどころが悪かったのか、横転したまま彼女は動かない。おれは怪物の正面に回りこみ、シリンダーが空になるまでパイソンを撃った。

すべて眼玉に命中した。にもかかわらず、それは数センチ手前で、閃光とともに弾かれるのだった。エナジー・シールド？　一種の保護膜を形成させ、急所を守っているのだ。おれは新たに弾を籠めるのも忘れて、呆然と立ち尽くした。冗談じゃない。

（こいつは……進化するというのか……）

機械生命体イミテーションボディの遺伝子は、もともと不安定なため、突然変異を起こしやすい。進化が突然変異の異名であるのなら、ＩＢは自身の特性にのっとって進化してきた。わずか百年の間に、様々な変種を発生させたことは驚異的であった。けれど、ものの一分足らずで、固体において進化するＩＢなど見たことも聞いたこともない。

反射的にトリベノに目をやると、白髪を振り乱し、気の触れたピアニストのようにキーボードを叩きまくっていた。いや比喩ではなく、あれは本当に気が触れてしまっているようにしか見えない。怪物の笑い声を聞いたのは、そのとき。

58（1）

58

プルートゥが猫の姿に戻り、赤い小さな舌でアリーシャの頬を舐めていた。

おれは身をかがめ、トリベノに近づいた。かたわらには、投げ出された花束のように、マキが横たわっていた。ドレスの裾に手を忍ばせると、思ったとおり、太腿の辺りで硬いものに触れた。そこからナイフを二本拝借して、両手に持ち、怪物に突進した。

むろん肉弾戦は得意ではないが、傭兵をやっていた頃から、ひととおりの訓練は受けている。案の定、ばかの一つ覚えで、怪物は爪のある右手を繰り出してきた。こいつをどうにかかわし、一本めのナイフを投げつけると、眼玉に当たる直前で、エナジー・シールドに跳ね返された。が、これも計算どおり。

おれは二本めのナイフを両手で逆さに持ち換えると、渾身の力で怪物の眼玉に突き立てた。

「南無八幡大菩薩っ！」

エナジー・シールドは発生せず、確かな、けれどもおぞましい手応えを感じた。幸いなことに、おれを跳ね飛ばしたのは、進化していないほうの手だった。床にしこたま背中を打ちつけながら、見ればナイフの切っ先は、意外にもしっかりと怪物の眼玉に突き立っていた。手を振り回しながら、怪物は二度と聞きたくないような叫び声を上げた。

自身の力とは到底思えない。妻から教わった呪文が効いたのか、それとも、ナイフにマキの想いが宿っていたのか……

「恩に着ます、マスター」

アリーシャはすでに身を起こし、新たなカードを手にしていた。プルートゥの首輪の上を滑らせると、猫とともに彼女自身の体も光

に包まれた。翼の音がホールに反響し、彼女は黄金の聖杯を手にする、黒い天使と化した。血染めのコックを倒した時に用いたカード、「カラスの聖杯」だ。

彼女の体が浮遊した。

漆黒の翼が大きく羽ばたくと、十枚足らずの羽根がこぼれ落ち、大型の鞘翅類と化したように、宙を飛び交い始めた。血染めのコック戦では、この技は見なかった。アリーシャは右手の人さし指を伸ばし、高々とかかげると、次にそれを怪物に向けて振り下ろした。

燐光を発しながら、羽根は怪物に八方から襲いかかった。一枚一枚が鋭いナイフと化して、ＩＢの肉をえぐるのだ。

ＩＢの皮膚や筋肉は、タンパク質に非情に近い、未知の高分子化合物から成る。複雑怪奇に折りたたまれているため、現代の技術では、最新のコンピューターを駆使しても、立体的に解析できないといわれる。ゴムの柔軟性と金属の硬度を兼ねそろえ、驚異的な再生能力を有する。

ゆえにあらゆる方向から、羽根のナイフで絶え間なく切り裂くという攻撃は、相手の再生能力を封じる上で、最も合理的な方法といえるだろう。アリーシャはこれを頭で考えるかわりに、いわばカードの意志に委ねたのだ。

全身から溶液を噴出させながら、怪物は空をつかんでもがいた。地の底から響くような、くぐもった呻き声。眼玉に突き刺さったままのナイフが、蒼い炎を吹いた。アリーシャは、さらに高く舞い上がり、金色の聖杯をかざした。秘薬を作る儀式のような、静謐な動作でその口を逆さに返した。

杯の中身は三日月の形を描き、青く輝く大鎌となって、真っ向から怪物に突進した。とっさに振り上げられた爪とつぶかり、金属が切り裂かれる、ぎん、という音を響かせた。怪物の右手が、長大な爪ごと、ぐしゃりと潰れた。次の瞬間、青い大鎌は、眼玉を真っ二つにする恰好で、肩と肩の間に深々と食い入っていた。

悲鳴。怪物はよろめき、数歩後退りすると、空をつかんだ姿勢で

動きを止めた。

青い光が消えて、大鎌が見えなくなった。あとには、ざくりとえぐられた亀裂が残った。溶液がどくどくと溢れ、見る間に床に溜まる。傷口から覗く切断された筋肉や、血管、神経のようなものが、虫のようにぴくぴくと蠢いた。

「処理したのか……？」

見上げると、彼女が堕天使のように落下してくるところだった。翼の抵抗力があるとはいえ、とても腕では受け止められない。おれは身を伏せて、彼女をどうにか背の上で弾ませた。床に転がると同時に、翼がまた粒子に解体され、収束して、黒猫の姿に戻った。

ドレスはぼろぼろになり、髪は乱れ、眉間に苦悶の皺が刻まれていた。それでもアリーシャはかろうじて身を起こし、荒い息を吐いた。たて続けにカードを用いたため、ダメージも大きいのだろう。おれはばかみたいに、さっきと同じセリフをつぶやいた。

「いいえ、マスター。まだ死んではいません」

58（2）

おれはＭ３６をＩＢの傷口に向けた。五発放ったが、すべてエナジー・シールドに阻まれた。なるほど、生きてやがる。

拍手の音。薄化粧の少年が笑っていた。

「素晴らしい余興です。ここまで素晴らしい舞踏を披露していただけるとは、失礼ながら、思いもよりませんでした。わたしたちも、待った甲斐があったというものです」

高く澄んだ声が響く。かれに聖歌を歌ってもらえば、神様もさぞかし、ご満悦だろう。ツァラトゥストラ教では、神は死んだと教えるらしいが。ならば、かれらは死んでしまった神に代わって、不死の存在を祭り上げようというのか。

人工的な神を。

「いずれにせよ、あと二分だ。その間にこいつが再び動きださなければ、それで終わりだ」

いったいおれは、誰に向かって喋っているのだろう。アリーシャか、少年か、それとも、神様にすがりつきたいのだろうか。

「お若いの、よい知らせと悪い知らせがあるのだが。どちらから聞きたいかの？」

トリベノはキーボードを打つ手を止めていた。すべての指を鉤型に曲げたまま、モニターを睨んでそう言った。

マキや二葉ならよいほう選ぶだろうが、どんな場合もおれは後者だ。先に最悪の事態を想定し、少しはマシな抜け道を探る。食い物でも、わざと不味そうなところから口へ運ぶ。その結果、旨いものにありつく前に、食欲をなくしているという、絵にかいたような貧乏性。

「よい知らせから聞かせてくれ」

「やつの背中の中心に、もう一つ、赤い眼玉がある。そいつが本来のＣＯＥだ」

「ＣＯＥとは？」
「コア・オブ・エデン。眼玉をかたどった人型ＩＢの中枢だよ。もちろん、そこが弱点でもある」
「で、よくないほうは？」
微動だにしないトリベノのゴーグル眼鏡に、モニターの光が映り、ちらちらと踊っていた。やがて口の端が、泣き笑いするようにゆがめられた。
「五分と言ったのは取り消さねばならない。現在のやつの駆動時間は、未知数だ」
「それを早く言え！」
「よい知らせから聞きたがったのは、お前さんだろうて」
おれは再びパイソンを抜いて床に身を投げ出し、怪物の背後に回りこんだ。赤い眼玉、らしきものは見当たらなかったが、背中の中心にピラミッド型の突起がある。ＣＯＥとやらは、おそらくこの下に格納されているのだろう。撃ち放った弾丸は、けれど閃光とともに粉みじんに砕かれた。さっきよりも、シールドの強度が上がっている？
「どうなっているんだ！」
「喜んでおるのだろう。殺戮マシンとしての遺伝子が。戦闘の快楽に酔いしれ、血みどろの寛喜に震えておるのさ。気をつけなされ、お若いの。メタモルフォーゼが始まる」
メタモルフォーゼ？　芋虫が蝶に変わるような、変態のことか。たしかに、インセクトタイプのＩＢには、これをやらかすやつが稀にいた。変態する直前は一定期間動きが止まるので、やつらは身を守るため、ドーム型の装甲を形成し、その中に閉じ籠もった。まさに、サナギと化したように。殻を破って再び動き出した姿は、思い出したくもない、絵にかいた悪夢そのものだった。
おれは残り五発の弾丸を怪物の様々な箇所に撃ちこんだが、どこでも弾を粉砕するほどのエナジー・シールドが発生した。これでは装甲を形成するかわりに、強力なエナジー・シールドで全身を固め

ているに等しいではないか。いわば、透明なサナギだ。
ほとんど無意識に、後退りしていた。大きく脈打つように、怪物の肩がびくんと震えた。
（血みどろの寛喜に震えておるのさ）
メタモルフォーゼはＣＯＥの周辺から始まった。ピラミッド型の突起が背中で何倍にも膨れ上がりつつ隆起すると、両手が床に着くほど体が二つに折り畳まれた。ピラミッドが四方に根を張るように、礫状の装甲が広がり、たちまち全身を覆うと、さらに各所で変化を始めた。
両肩には最も幅広い、豆の鞘をおもわせる装甲が形成された。そこからごつごつと角が突き出し、巨大な眼玉の模様がひとつずつ生じた。蝶の翅との類似が、正視に耐えなかった。長大な爪が再生し、しかも今度は両手に及んだ。吸盤に変わって、足の指にもまた鋏をばらしたような爪を三本ずつ発生させた。
怪物はむくりと身を起こした。

58（3）

傷口はすっかり塞がっていた。ただ眼玉が胸部の中心に移り、そこにだけ縦の亀裂が残っていた。頭部に相当する部分には舟形の穴が開き、赤く発光する何かが生えようとしていた。

もうひとつの眼玉か？　それとも、「顔」が出てくるというのか。

赤い何かは、けれど脈動するばかりで、それ以上の変化を示さなかった。けっきょく頭部を欠いたまま、ごつごつと進化した姿はあくまでグロテスクで、そして限りなく不完全な印象を与えた。ともあれ、メタモルフォーゼは完了したらしい。

怪物が一歩踏み出すと、爪で床がえぐられた。くぐもった唸り声は、含み笑いしているように聞こえた。左腕を持ち上げたかと思うと、長大な爪が、たちまち前方へ飛び出した。奇怪なゴムのように、腕が際限なく伸びるのだ。

「避けろ、アリーシャ！」

小テーブルがばらばらになり、果実の成れの果てが、床にぶちまかれた。軽やかに宙を舞って避けた彼女が着地する地点を狙って、もう片方の腕が伸張した。次に爪がとらえたのは、コリント式を模した支柱だった。力が籠められると、一抱えでは済まない柱をたちまち粉砕した。部屋全体が揺れて、コンクリート片が降り注いだ。

かろうじて立っていられるほどの揺れが、長く続いた。このままでは天井が落下し、おれたちは残らず圧し潰されるのではないか。大きな瓦礫が落ちてきて、タウロス一号の肩を直撃した。片腕をもぎ取られ、火花を吹きながらも、一号はじっと立ち尽くしているのだった。

玉座を見れば、相変わらず仮面の男が寝そべり、無言でこちらへ目を注いでいた。少年もまた揺れをものともせず、玉座のかたわらに姿勢よく控えていた。

やつらは、ＩＢと心中する気なのか？

いくらか揺れがおさまる頃、肩に軽く指が触れた。いつの間にかアリーシャがそばにいて、かすかに微笑んでみせた。おれは驚きに目を見張った。

「よせ。これ以上使ったら、次こそ体がもたない」

「構いません」

一枚のカードをかざしてみせた。天使だろうか。羽根の生えた少女たちは双子とおぼしく、捧げものをするように、大きな花綵をかかげていた。彼女たちの周囲には四本の支柱が立ち、花づながそれに絡まって、葡萄棚のような屋根を形作っていた。

妻が所持していたオーソドックスなタロットカードにも、似た図柄があったかと記憶する。「蛇の剣」や「カラスの聖杯」と異なり、どこか心安らぐカードだ。

上体をひねって、ＩＢが振り向いた。

爪で床を引っ掻きながら、蛇のようにのたうつ腕を元の長さに縮めた。完全に向き直ったやつの身長は、ゆうに二メートルを越えていた。左右に張り出した両肩の上で、偽りの眼球がおれたちを見据えた。赤い頭部が不吉な光をおびた。来る。

とっさに銃を乱射したが、例によって謎の推進器で突っ込んでくるやつを止めようがない。アリーシャにカードを使わせないための先制攻撃であることは、明白である。瞬く間にせまってきたＩＢの前に、そのとき、大きな影が立ちふさがった。

（タウロス二号？）

金属どうしがぶつかる音が、ホールに響きわたる。踵から火花を散らしながら、二号はＩＢを抱きとめた恰好で、二メートルほど後ろに押し返された。そのまま締めつけようとしたチャペックの腕から逃れて、ＩＢは飛び退いた。装甲に覆われているが、両棲類的な動きは変わらぬまま。ほとんど四つん這いの姿勢で対峙した。憎悪に満ちた呻き声。

なぜ、タウロス二号は「裏切った」のだろう。

おれと友達になったからだなんて、童話的な理由は考えられない。

さっきコリント式の柱を、ＩＢが破壊したからではあるまいか。もともとタウロスたちは、シャングリ・ラの備品だった。命令が上書きされているとはいえ、旧来の使命が完全に消されてはいなかったのではないか。シャングリ・ラを壊すものは、すなわちかれの敵なのだ。

タウロスが自身のエプロンを引き剥がすと、一号と異なり、そこには四インチはありそうな砲口が埋めこまれていた。グレネードランチャーか。ずん、と腹に響く音のあと、ＩＢの頭部で弾が炸裂した。怪物の足が宙に浮き、煙を吹き上げる肩の間を、ぐしゃりと床にのめり込ませた。

耳をつんざくような音に気づけば、どういう仕掛けになっていたのか、タウロスの右手が特大サイズの三重チェーンソーと化していた。そいつをＩＢの上に叩きつけるように振り下ろし、左手でがっちりロックしたから、たまったものではない。聞くに堪えない音が響き、怪物の両脚が断末魔の水棲ワームのように、びくびくと跳ね踊った。

吹き上がる火花と溶液を浴びながら、タウロスの一つ眼は表情もなく下方に固定されたまま。昨今の軍用チャペックより、はるかに恐ろしい。兇悪なまでの武装を、いったい何者が、この罪のない家事用チャペックに仕込んだのか。

ＩＢの右手の爪が腕を引きずりながら、蜘蛛のように這うのを見た。たちまちそれは、タウロス二号の左足をつかんだ。

58（4）

ＩＢの爪が灼熱して、タウロス二号の金属を溶かした。異臭がたちこめ、耐え難い熱を孕んだ蒸気が吹き上げた。足首は、チャペックのどうしようもないウィークポイントである。いや、神の被造物（それとも失敗作か）である人間にしたところで、二足歩行をするために、かなり無理をしている。

タウロスはたちまちバランスを崩し、引き倒された。代わってＩＢが、やはりどこの筋肉を用いているのかわからない、異様に柔軟な動きで跳ね起きた。

のしかかってきたＩＢに、タウロスは三重チェーンソーを突き立てて対抗した。恐るべき回転を怪物は両手の爪で易々と受け止め、たちまちぐにゃりとひん曲げた。チェーンがもつれ、モーターが悲鳴を上げた。あとは目を覆いたくなるような、屠殺ばかりが残された。

哀れなチャペックが粉砕されるまで、三十秒とかからなかったろう。最後に抉り出された眼玉が爪の先で潰される音を聞いて、おれはようやく茫然自失から呼び覚まされた。

立ちはだかる怪物の足もとに、内臓をおもわせる機械がぶちまけられていた。流れ出たオイルは血だまりにしか見えなかった。情念がくすぶるように、蒼いスパークが這いずり、片手の指が、まだ痙攣的に蠢いていた。

一号は肩から火花を吐きながら、じっとこの光景を見下ろしていた。中枢がいかれたわけではないことは、眼玉を見ればわかったが、相棒の死に対してココロを動かされはしなかったようだ。あるいは動かされたとしても、プログラムが作動しなければ行動には移せない。

また部屋が揺れた。いやな地響きの音がした。まるでタウロス二号が、この部屋を支える重要な支柱の一つであったかのように。

怪物はよたよたと、おれたちの方へ向き直った。また笑っていた。表情をあらわす顔は存在しないのだが、嬉々として体を震わせ、地獄で悪魔が笑ったような不気味な声を発するのだ。

「この子はわたしが倒します。これ以上、苦しませないためにも」

囁くように、アリーシャはそう言うのだ。苦しむ？　どう見ても、殺戮の寛喜を全身にみなぎらせているとしか思えないが。なぜ彼女は、この化け物が苦しんでいると考えるのか。

「下がっていてください、マスター」

「どうしても、カードを使うつもりか」

「はい。そのために、わたしは来たのですから」

「オムレツを……」

「え？」

「約束してくれ、アリーシャ。どんなに不味くても構わないから、このひどい余興が終わったら、きみの手作りのオムレツを食わせてくれ」

ばかなことを口走っている自覚はあったが、ほかに言葉が見つからなかった。瞬時、彼女は目をまるくしたが、これまで見たことがないほど、花のように唇をほころばせた。

「了解しました、マスター」

おれはうなずいて、彼女の言葉に従った。カードをかざし、片膝を立てて彼女は身をかがめた。足もとに控えていたプルートゥの首輪の上に、それをすべらせた。例の、花綵をもつ双子の天使が描かれたカードだ。

猫の姿が瞬く間に解体されて消えた。床が揺れたかと思うと、四本の柱が出現し、対峙しているアリーシャとＩＢを七メートル四方の空間に取り囲んだ。次に芽をふくように、一本の柱から太い蔓が伸び、絡みあい、葉を茂らせ、色とりどりの花をつけながら、柱と柱の間を横断した。リングだ。

それは、花づなに囲まれたリングにほかならなかった。そしてアリーシャはというと、いつの間にか二人に増えているのだった。

錯覚ではない。ばかみたいに何度も目をこすったが、花綵のリングの中に、やはり彼女は二人いる。立ち姿からドレスの破れ具合まで、鏡に映したようで、どちらが本物か見分けがつかない。もっとも、真贋といった概念が通用すればの話だが。

二人のアリーシャは、まったく同じ動きで、苦悶するように背をまるめた。出現した翼は、フラ・アンジェリコの描く天使のように、極彩色を帯びていた。それぞれの右手と左手に、まるで太い鞭のように、花綵を一本づつ手にしていた。

怪物が吠えた。瞬く間に、例の予断を許さない動きで突進した。二人は素早く左右に分かれ、中空から双方向に腕を伸ばして放たれた爪の一撃をかわした。同時に着地した二人の顔半分が、乱れた髪の毛で覆われていた。一方が右目を、もう一方が左目だけを、髪の間から覗かせているのだ。

二人が花綵をふるい、ＩＢをしたたか鞭打った。火花が散り、無数の花びらが舞った。後方に弾き飛ばされたＩＢは、ロープ代わりの花綵に激突した。たちまち無数の太い蛇のような閃光に絡められ、怪物は苦悶の咆哮を上げながら痙攣した。

（これは……）

電流デスマッチではないか！

59（1）

59

旧政権時代には、このての格闘技がえらく流行した。もの好きな金持ちが主催する場合もあったが、基本的には、場末のガレージで娯楽に飢えた労働階級の熱狂を集めた。リングは金網と有刺鉄線と電流に囲まれた。公然と行われる兇器攻撃。ガレージの中では喧騒、悲鳴、血しぶき、そして札束が飛び交った。

当然、命を落とす格闘家も多くいた。むしろ客たちは、それを見に来ているのかもしれなかった。ロックバンドとのセッションもたびたび行われ、観衆の狂騒をさらにあおった。そのまま暴動に繋がる場合もあったが、ガレージを一歩出れば、強大な私兵に守られた首長たちの君臨する世界が、厳然とそびえていた。

首長たちが、違法行為にあたるデスマッチの取り締まりをおざなりにしていたのは、暴動の鎮圧に名を借りた屠殺を楽しむためだったともいわれる。

ロープ代わりの花づなから弾き出される恰好で、怪物はリングの中央へよろめき出た。二人のアリーシャは、花綵に添ってゆっくりと怪物の周りを回り、じわじわと距離を縮めた。次に合図すら交わさず、二人同時にダッシュした。舞踏靴が床を蹴ると、ほっそりとした二つの影が宙に舞った。

鞭のようだった花づなが、風変わりな剣の形に変化した。螺旋を描く刀身に蔓草がからみ、みずみずしい花々を、ほしいままに咲かせていた。彼女たちがジャンプし、怪物の両側から剣を振りおろすとき、花びらが虹をおもわせる弧を描いた。

両手をあげて、怪物はそれぞれの一撃を受け止めた。爪と剣のぶつかる音が、ぎん、と響いた。閃光のように、極彩色の花弁が弾ける。二人は攻撃の手を休めず、次々と打ちこんでゆく。まるでボッ

ティチェルリの描く女神のように、無数の花弁をまき散らしながら。
正直なところ、おれは見惚れていた。時には左右の位置を変え、ときには交互に、あるいは同時に、彼女たちは乱舞した。艶やかな黒髪がベールのようにひるがえり、ぼろぼろのドレスでさえ、エキゾチックかつエロチックな舞姫の衣装をおもわせた。
剣戟の音。彼女たちが気合をかける声。舞踏靴の鳴る音。怪物の低い唸り声さえも、混じりあってリズムを形作り、音楽となって鳴り響いた。陶然となりながらも、おれは絶え間ない戦慄に貫かれていた。美しすぎるのだ。ドームの外側の、汚染地帯から眺める夕映えのように。
美とは、滅びの前奏曲ではあるまいか。
怪物の爪の強烈な一撃が、一方のアリーシャを襲った。刀身でかろうじて受けとめたが、そのまま花綵のロープまで弾き飛ばされた。瞬く間に、蒼ざめた無数の蛇が彼女に絡みつき、全身を舐めた。彼女の絶叫は、ヴァイオリンの悲鳴をおもわせた。
「……アリーシャ！」
エラーではあるまい。
彼女のカードに呼び出されたにもかかわらず、リングは中で闘う者たちを平等に傷つけるよう、最初から設定されていたのだろう。ようやく花綵の責めから解放されると、彼女はうつ伏せに倒れた。剣の柄を片手で握りしめたまま、もう片方の手の指が、しなやかに鍵盤を弾くように、痙攣するのを見た。
もう一人のアリーシャは、攻撃の手を弛めなかった。けれども戦闘力が半減したことで、劣勢が明らかになり、何度か悲鳴を上げ、何度もひざまずいては、床を這いながら爪を逃れた。わざと反撃の手をゆるめて、怪物は楽しんでいるように見えた。さんざん玩んだあと、背後から彼女を捕らえ、見せしめるように高くかかげた。
今にも爪の中で潰されるのではないかと思ったが、ぐったりとした彼女を捕らえたまま、怪物はゆっくりと花綵に歩み寄った。髪に隠れていないほうの、彼女の目が見開かれたとき、華奢な体が容赦

なく、花綵に押しつけられた。

弦を掻き鳴らすような、アリーシャの悲鳴。だが怪物とて感電せずにはいられまい。覚えず彼女を解放し、地団太を踏むように後退りした。そこへ背後から、ちょうどＣＯＥが内蔵されているピラミッドの真上へ、一撃を加えた者があった。もう一人のアリーシャが立ち上がったのだ。怪物はのけ反り、背中に火がついたように、腕を背に回してもがき苦しんだ。

彼女をなぶることに気をとられていたため、エナジーシールドが発生しなかったようだ。ピラミッドにヒビが入り、そこから鮮血のような光がこぼれた。エデンのコアと名づけられたその部分は、真紅なのだろう。アリーシャが、ヒビに剣を突きたてようとしたが、これはシールドに弾かれた。意外な素早さで怪物は半回転し、狂ったように反撃に出た。

反撃は、けれどやたらと腕が振り回されるばかりで、これまでの悪魔的な正確さに欠けていた。花づなの間際まで追いつめられながらも、彼女は高く舞い、怪物の頭上を越えて逆サイドに着地した。舞踏靴の音が消えやらぬうちに、もう一人のアリーシャが身を起こした。二人とも片膝を立て、床すれすれに剣を構えて、まったく同じ姿勢で前後に並んだ。

怪物が振り向いた。二人は前後に連なったまま、前の一人が床を蹴ると、わずかに遅らせて、後ろの一人が駆けだした。時間差攻撃！　最初の一撃を怪物は跳ね除けたが、次の一刀は、まともに浴びなければならなかった。むろん、これならエナジーシールドも封印されてしまう。

もともとマキのナイフが突き立っていた怪物の眼玉が、ぐしゃりと潰れるのを見た。斜めに傾いだ怪物の上で、アリーシャは足を開いて踏みとどまると、剣を深々と突き刺し、えぐるように掻き回して引き抜いた。彼女がそこを逃れると、ほとんど爆発と呼べる火花が、大量の溶液とともに吐き出された。

59（2）

そして奇妙な沈黙がおとずれた。

ＩＢは、両手を宙に突き出した恰好で静止し、代わりに傷口からの放電だけが、生命を得たように踊っていた。二人のアリーシャは着地した姿勢で、こちらもじっと動かない。花づなから絶え間なくこぼれる花弁が、火の粉とともに舞うさまは、鱗粉を散らして飛ぶ蝶をおもわせた。部屋の奥から、声が響いた。

「見事です」

少年はいつのまにか黒いマントを羽織っており、そこに仮面の主人がいることも忘れたように、片手で椅子にもたれていた。

「楽しませていただきましたよ。想像以上に、楽しませていただきました。けれどわたしたちは、そろそろお暇しなければなりません。またお会いできるかどうかは、わかりませんが」

銃声が、かれの言葉を掻き消した。むろん、おれが撃ったのではない。驚いて目をやると、トリベノの手に、２５オートを改造したとおぼしい、小型の拳銃が握られていた。銃口からたちのぼる、ひと筋の煙。

肩を撃ち抜かれたとおぼしく、少年の白いシャツが見る間に赤く染まってゆく。それでもかれは姿勢を変えず、唇にただ皮肉な笑みを浮べた。かすれた声で、トリベノは言う。

「最後まで見届けないのか。まだこいつは生きておる」

「無意味ですよ」

また銃声が響き、おれは覚えず眉をひそめた。次に赤く染まったのは、左胸の辺りだった。にもかかわらず、少年は倒れないどころか、苦痛の表情ひとつみせない。肩を小刻みに震わせているのは、笑いをこらえているためとしか思えなかった。

（どうなっている？）

銃で心臓を撃ち抜かれて、死なない人間などいるわけがない。リ

ビングデッドという言葉が浮かんだが、とてもそうは見えない。歪んだ赤い唇を呆然と眺めながら、今さらのように湧き上がってくる、根本的な疑問に圧倒されるようだ。いったいあの少年は何者か、という。

「そうやってまた放り出すつもりか。ジュリエットにしたように。振り向きもせずに去って行けば、それでいいのか」

トリベノは絶叫していた。

かれが残り五発の弾を乱射するのと、少年がマントをひるがえすのが、ほぼ同時だった。弾丸はマントに穴を開けたが、少年はそのままダビデの星の幕を踏みつけ、背後の壁へ向かった。配管だらけのコンクリートが揺れて、ぎりぎりときしみ、強大な動力で一部がこじ開けられた。配管が断ち切られ、腐ったガスや液体が溢れた。

壁の裏に出現した小空間へ、少年は駆けこんだ。内壁が血の色をしたヒナギクの壁紙で覆われているのがわかった。エレベーターだ。少年はこちらへ振り返り、貴公子のように一礼した。扉も何も閉ざさぬまま、たちまちゴンドラが上昇すると、垂れ下がるワイヤーが覗いた。

シャングリ・ラは「幽霊船」の最上層にあるのだから、さらに建物の上階へ向かったか。あるいは、ここはまだ「シャングリ・ラの地下」に位置するのだろうか。

仮面の男は置き去りにされたまま、床で砕けたワイングラスを支えた姿勢で、こちらを凝視していた。趣味のよくない退廃派の詩と化したように。

少年の姿が消えると、まるでそのことを嘆くように、怪物が吠えた。

二人のアリーシャが顔を上げた。髪がなびいて、両目ともあらわれているが、隠れていたほうの瞳の色は、どちらも緑色だった。カードをたて続けに使ったうえに、花綵の電流を浴びて、相当なダメージを受けているはずだ。現に彼女たちは、身を起こそうとして、危うく倒れかけた。剣を杖がわりにどうにか立ち上がると、銀と緑

の瞳をお互いに見交わした。
「よせ……」
おれは言葉を呑んだ。とどめなんか刺さなくたって、放っておけばそいつは死ぬ。きみたちは勝ったんだ。これ以上の攻撃は、きみ自身を取り返しのつかないほど傷つけるだけだ。そう言いたかったのだが、口に出せなかったのは、おれ自身、その言葉を信じていなかったからだ。
ＩＢを処理するには、必ずとどめを刺さなければならない。
二人のアリーシャが歩み寄ると、磁場が発生したように、繭の形をした光に包まれた。花綵のロープがざわめき、次々と新芽を吹いては、花であふれさせた。なぜ彼女がリングを出現させたのか、今ではわかりすぎるほどわかっていた。二人はさらに正面から接近すると、ひときわ強い光とともに、ひとつに融合した。
彼女が手にする剣は二匹の蛇が絡みあうような二重螺旋を描き、長さも二倍になっていた。極彩色の花弁が絶え間なく吐き出され、ひと振りすれば軌跡が虹を描いた。あまりにも美しい、虹を描いた。
天使。

59（3）

とめなければ。嘘でもいい。何でもいいから叫んで、彼女を留めなければ。

さもないと。

でも。

彼女は美しかった。虹色の翼がはばたいた。降りしきる花弁の中で、彼女は振り向いた。

「アリーシャ……」

「覚えています、マスター。約束したこと、決して忘れません」

「よせ、アリーシャ、アリーシャ……アリーシャ！」

翼の上で、なめらかな黒髪が揺れた。おれは前にも一度、こんなふうに女の名前を叫び続けたことがあった。何度も何度も、叫び続けたことがあった。

彼女は剣を腰のあたりに構え、正面からＩＢに突っ込んだ。おれはどうすることもできず、呆然とそれを見ていた。舞い散る花弁。白光を放ちながら、二重螺旋の剣が、ＩＢの体の中心を貫いた。そのまま胴から背へ貫通し、ピラミッドの内部を破壊して、切っ先をあらわした。

怪物の体に無数の亀裂が走り、血の色をした光があふれた。破壊されたＣＯＥが膨張し、ＩＢの体を内部から引き裂くのだろう。おれは反射的に横に跳んで、立ち尽くしているトリベノに体当たりした。かれと一緒に床に伏せたとき、すさまじい閃光が一本の巨大な柱と化して立ちのぼるのを見た。

轟音と爆風。

小テーブルが吹き飛ばされ、花瓶や酒器もろとも、砕け散る音が随所で響いた。ようやく目を開いて顔を上げたとき、あれほど飾りつけられていた広間は、完全に廃墟と化していた。

それでも、花綵のリングが果たした役割は明白だった。花づなに

囲われていた部分だけ、床がごっそりと掘り返され、深々と穴が開いていた。もしもCOEの爆発がリングの外で起きていたら、おれもトリベノもマキも、とっくに粉砕されていただろう。

「アリーシャ……」

おれは身を起こし、這いずるように穴に近づいた。吹き上がる黒い煙は、雷雲のように蒼い放電を含んでいた。穴の周りは飛び上がるほど熱を帯びていたが、構わずに這い進んだ。煙と熱を避けながら見下ろすと、中は焦げたコンクリート塊で覆われ、アリーシャはおろか、IBの破片さえ見当たらなかった。

ふと、指先が何かに触れた。穴の縁に、一枚のカードがかろうじて引っかかっていた。

拾い上げて見れば、果実や花に囲まれて、三人の人物が杯をかたむけている絵が描かれていた。三人とも古代ふうの衣装を身につけており、うち二人は女で、もう一人は後姿で衣装も異なるが、男なのかもしれない。男の表情はわからないが、女たちは髪を花輪で飾り、楽しそうに笑っている。

何を意味するカードなのか、おれにわかるはずもないが、つくづく眺めたあと、それをポケットに忍ばせた。ほかに彼女の痕跡は、何ひとつ見つからなかったから。

おれは玉座をかえりみた。椅子はなぎ倒され、置き去りにされた主人が、うつ伏せに横たわっていた。仮面が外れて、床の上でまっぷたつに割れていた。そのかたわらにトリベノが立ち、じっと男を見下ろしていた。例の機械を赤子のように抱いて、硬い表情のまま、火のついた煙草をくわえていた。

「そいつはいったい何者なんだ?」

トリベノはこちらを見て、また視線を男の上に戻した。自分で確かめろというのだろう。おれは近づいて身をかがめ、男の顔の向きを変えた。見覚えのある顔だった。もっとも、おれが知っている顔はずっと痩せていたし、瞳の色も違っているが。目もとや鼻の形などは、いかにも父親と似ていた。

間違いない。そいつは竜門寺武留だった。

竜門寺真一郎の次男。一時は竜門寺家の最も有力な後継者とみなされていた男。若くして様々な学位をほしいままにした天才的な学者であり、政治家としても頭角をあらわしつつあった。クーデターのあと、人類刷新会議による血眼の捜査にもかかわらず、杳として行方の知れなかった人物の一人だ。

（なぜこの男が……こんな所に？）

不自然な突起に気づいて、かれの背からマントを払いのけた。背中の中心にナイフが深々と刺さり、すでに血が凝固していた。あの少年に、殺されたということか？

「おい、爺さん、これはいったいどういうことだ。あんた最初からわかっていたのか？　こいつがここにいることを、知っていたのか？　知っていながら、おれたちを連れてきたのか？　おい、何か言ったらどうだ！」

トリベノは答えず、代わりに世界が揺れ始めた。コンクリートや資材が次々と降り注ぎ、鈍い音をたてて転がった。揺れは一向におさまらず、いよいよ今度こそ危ないらしい。おれは走ってマキの体を抱き上げ、視線をめぐらした。タウロス一号と「目が」合った。

「オカエリデゴザイマスカ」

59（4）

爆風をまともに浴びながら、それでもじっと立っていたらしい。タウロス一号は文字どおり満身創痍で、あらゆる関節から煙を吐き、蛇の舌のような放電に全身を舐められていた。ぎちぎちと体の向きを変えて、残った片腕で一点を指さした。壁の中に、たしかにこれまでなかったドアが出現していた。

「恩に着る。おい、爺さん。急がないか！」

降りしきる資材の中にたたずんで、トリベノは「ジュリエット」を抱いたまま、ぼんやりとこちらを見ていた。

「何をやってる？　死にたいのか！」

思わずそう叫んで、胸を突かれた気がした。原因はわからないが、それでもトリベノの気持ちが、痛いほど伝わってきた。爺さんはあの時のおれであり、今のおれでもあった。もしもマキを抱いていなかったら、おれは同じ態度をとっていたかもしれない。あの時が、そうだったように……

トリベノは敬礼していた。

おれは眉根を寄せ、うなずくことしかできなかった。チャペックはドアを指さした姿勢のまま、機能が停止したのか、すでに「眼」の光が消えていた。ドアに向かって駆け出すと、それはひとりでに開いた。向こう側は廊下らしく、広間より目の細かい市松模様が、ぼんやりと浮かんで見えた。ドアを抜けると同時に、背後ですさまじい音が響いた。

巨大な瓦礫の塊に広間が埋め尽くされたのはわかりきっていたが、おれは振り向かなかった。やけに細長い廊下をひたすら駆けた。両側に油絵がかかっているようだが、何を描いたものかわからない。確かめる余裕もなければ、それほど明るくもないのだった。ただ床にうっすらと貼りついている光沢だけを頼りに先を急いだ。

頭の中で、ジギー・バンデル・ルーデンがビートルズをカバーし

た、『ロング・アンド・ワインディング・ロード』が鳴り響いていた。

震動が激しくなり、油絵が次々と床に落ちて砕けた。廊下は何度も角に突き当たり、右か左へ直角に折れた。けれど迷路と違って袋小路もなく、進む方向が一つしかないのは、単細胞なおれにはありがたい。すでに腕が抜けそうに重く、震動に何度も足を掬われそうになった。

やがて前方に光があらわれた。こめかみが張り裂けそうなほど脈打ち、汗が目に入って視界がかすんだ。もう少し気づくのが遅かったら、見事に転倒していただろう。廊下が突然途切れて、コンクリートの階段に変わっていた。光は階段の上から射してくるのである。

「くそったれ！」

ほとんど立ち止まらず、おれは階段に足をかけた。もし立ち止まれば、その場にへたり込んでしまったろう。ほとんど感覚をなくした足で、階段に食いついた。靴音が虚ろに響き、はっ、はっ、と、どこかで誰かが、おれの声で喘いでいる。いやになるほど、長い階段だった。

真っ白になった頭の中に、拾い上げたカードの絵柄が浮かんだ。髪に花輪を飾り、祝杯をかかげた二人の女。幸福そうな笑顔。絵の中の男のように、どうしておれは、おれというやつは、いつも女たちを幸福にしてやれないのだろう。失っては後悔し、失ってはまた後悔することの繰り返しではないか。

アリーシャ、アマリリス、そして……

（な……ぜ、撃った、の……？）

階段が終わっていた。

ドアは開いていた。目がくらむほどの光の中へ、おれはよろよろと進み出た。地球をシェイカーにぶちこんだような振動から解放されたかわりに、腹の底に響く地鳴りを感じた。石畳を踏みながら、光の中を懸命に進んだ。ネイルワームと競争しても負けたかもしれないが、一歩でも多く前に進むことしか頭になかった。

ゴールした長距離走者のように、無数の拍手で迎えられる幻を見た。や、ありがとう、ありがとう。おかげさまで完走できましたよ。またしても大切なものを失ったけれど、おめおめと完走しましたよ。ありがとう、ありがとう……ぐしゃぐしゃに泣いていることに初めて気づいた。

がっくりと膝をついた。マキの体を地面に下ろし、ひたすら喘いだ。ここは、広くて明るい場所だ。そしてとりあえずは、安全な所だ。地鳴りがひときわ高鳴った。振り返ると、大量の土煙を吐き出しながら、二階建ての瀟洒な洋館が、地下へ沈むように崩れ落ちるのを目の当たりにした。

崩壊する音の中で、おれはアリーシャの名を叫んだ。

地鳴りがおさまると、代わって何事もなかったような静寂が訪れた。涼しげな水の音が聞こえた。石畳の広場。噴水があり、花壇があり、樹木が枝を広げている。蝶が飛び、鳥の声が聞こえる。周囲は美しい家に囲まれているが、おれたち以外に人影はない。

おれは噴水に近づき、水盤に顔を近づけて、獣のように水を飲んだ。それから少し手ですくって、マキの唇に数滴、したたらせた。つややかな唇がわななき、吐息がこぼれた。

「エイジ……」

彼女は目を開いた。その瞳には、ハシバミの実のような色と艶が戻っていた。

60（1）

60

八幡二葉に新しい友達ができたのは、冬休みに入る直前だった。

半年以上、同じクラスにいながら、その少女とは、ほとんど話したことがなかった。だから放課後、密かに屋上へ向かうつもりで教室を出たあと、階段の踊り場で呼び止められた時には、さすがの彼女も、少しばかり飛び上がりかけた。

（わたしに気配を感じさせずに、あとを追うなんて……）

しかし考えてみれば、その少女は教室にいるときも、極めて影が薄いのだ。もともと気配が希薄な子なのだから仕方がない、と、彼女は自身を納得させたものだ。

「びっくりしたあ。わたし、また呼び出し食らっちゃったかしら」

教師からの言伝を頼まれたのだと考えたのだ。それ以外に、この名前すら思い出せない子に呼び止められる理由は、思いつかない。

事実、無断欠席の常習犯である彼女は、職員室の常連客でもあった。ほとんどの教師が二葉の顔を見知っており、彼女が入ってゆくと、かれらのほとんどが好意的な眼差しを向けた。担任でさえ、たてまえ上、苦虫を噛み潰してみせるに過ぎなかった。

なんといっても、彼女は成績がよい。学費もきちんと納めている。常に身なりも整っているし、はきはきとものを言う。兄たちが自宅で、少々いかがわしい商売をしているという噂だが、両親を亡くしているらしいので、情状酌量の余地がある。だいたい今のご時世、いかがわしくない商売を探すほうが困難である。

（しかしきみは、一度も遅刻したことがないんだよなあ）

思わず担任が感嘆の声を上げたものだ。無断欠席は度々すれど、登校する以上は必ず間に合った。それも毎回、かなり際どい時間をついて。

一応名門で通っている、この学校の女生徒たちは、本人が考えている以上に、厳しい監視下に置かれていたが、どうやら彼女のほうが何枚かウワテであるらしい。鵜の目鷹の目の教師たちの穿鑿をくぐり抜けて、かなり好き放題やっていた。

「そうじゃないんです。どうしても、八幡さんに頼みたいことがあって……」

消え入りそうな調子で、クラスメイトは言うのだった。実際には、二葉より拳ひとつ半ぶん背が高く、体格もよい。古風なセーラー服が気の毒に思えるほど、胸も大きい。二葉はちょっと、眉をひそめた。

「そんな言い方されたら、鎮守のお社になったみたい。二葉でいいわ。あなたは……」

「鳥辺野です。鳥辺野霞美」

体格だけ眺めていると、カスミとなって消えそうにはとても見えない。顔立ちといい物腰といい、ずっと二葉より大人びている。私服なら二十代には見えるだろう。それでも名は体を何とやらで、やはり今にも消え入りそうな印象を、よくあらわしていた。

「ごめんなさいね。無欠の常習者だから、いまだにクラスの子の顔と名前が一致しないのよ。ちょっと珍しい苗字だし」

他人のことを言えた義理ではなかった。けれど、トリベノ、という響きには、なんとなく記憶の底に引っかかるものを感じた。ほかに同姓の知り合いでもいたっけ？

二葉は階段に腰をおろした。話を聞こうじゃないの、という意思表示のつもりで。これより上は、封鎖された屋上へ続くだけなので、わざわざ足を運ぶ生徒はまずいない。二葉はというと、天体望遠鏡のドームに棲みついている情報屋、「千里眼」を久しぶりに訪ねてみようという魂胆があった。

じつは彼女自身、いろいろと悩みを抱えていたので、相談する相手が欲しかったのだが。途中で鳥辺野霞美に、呼び止められてしまったのだ。律儀らしく突っ立ったまま、霞美は言う。

「アルバイトを探しているんです」
「ふうん」
「ちょっとお金にこまってて……」
明り取りの窓から血の色をした夕陽が入り込み、薄汚れた壁に映えていた。音楽室で思い思いに管楽器を吹き鳴らす音が、空調の震動を掻き消し、狂想曲じみて響いた。うつむいている霞美の顔が赤いのは、夕陽のせいばかりではないのだろう。
学校でアルバイトは禁止されており、ごく一部の職種に限って例外が認められるものの、迷路のように煩雑な手続きを必要とした。よほどの事情がない限り、許可されないと考えたほうが早い。もし無断で働いているところを見つかれば、即刻の退学が待っていた。
もちろん、新東亜ホテルにおける二葉のアルバイトは、まったくのモグリである。

60（2）

「本当にこまっているのなら、学校に書類を出せば？　わたしがとやかく言える問題じゃないでしょう」

警戒心が芽生えるのを感じた。

なぜ、よりによって自分に、しかも人目を忍ぶような恰好で相談に来たのか。学校にさえバレていないアルバイトを、この内気そうな娘が嗅ぎつけたのか。さらに勘繰れば、これをネタに、交換条件を突きつけてくるのではあるまいか。金にこまっている、というのは揺すりたかりの常套的な切り口上である。

が、あらためて目の前の少女を眺めると、そんな疑惑を覚えたことさえ、ばかばかしくなってくる。今にも泣きそうな顔。消えてしまいたいのに消えてしまえないことを嘆くように、真っ赤になって身悶えている。さすがに二葉は気の毒になった。

「ま、たしかに学校が許可しているバイトじゃ、ろくに稼げないけどね」

学費自体が高額なのだし、この学校に通う以上は、ある程度裕福なことが前提になっている。

「でもどうしてわたしに？　無欠の常習犯は、バイトに明け暮れていると考えたの？」

ありそうな話だ。名簿を見れば、二葉がいわゆるスラム街に住んでいることは一目瞭然である。クラスはおろか学校全体を見わたしても、裏町から通ってくる生徒は、彼女くらいしかいない。

相変わらず煩悶しながら、ミリサイズの鞘翅類がささやくような声で、霞美は言う。

「こんなこと、八幡さ……いえ、二葉さんのほかに、相談できそうな人がいなくて」

「すごく、説得力があるわね」

いずれにせよ、新東亜ホテルで働いているところを、見られたわ

けではないらしい。裏口から出入りしていたし、よほどのことがない限り、ロビーにメイドは顔を出さない。とくにアルバイトの彼女は、シーツの交換ばかりやっていたから、泊り客ともめったに顔を合わせなかった。それがいきなり、別館への「大抜擢」となるのだが……

「もしかして、疑ってる？」

「はい？」

「わたし、三角街や親孝行横丁では稼がない主義だよ」

霞美は目をしばたたかせた。理解が追いつかなかったらしい。二葉は皮肉らしく肩をすくめ、歌うようにまくしたてた。

「でも、あなたが本当にお金にこまっているのなら、手っ取り早く、しかも確実に稼げる方法はそれだよね。学生は高く売れるし、名門校生となると、なおさら付加価値がつく。問題は、しかるべきモトジメを見つけられるかどうか。いきなり街娼に立つなんて論外よ。彼女たちには縄張りがあるし、もちろん目ぼしい所はすべて、不法ギルドが取り仕切っている」

「ガイショウ……？」

「へたなモトジメに捕まると、ぼろぼろにされちゃうけど、中にはほどよく稼がせてくれる連中もいるわ。名門校生をウリにするからには、相応しいお客を選んでくれるし。刷新会議の監視下で危ない橋をわたる以上、頭のいい連中に限って無茶はやらないのね。でも、今一番お勧めなのは、変態を専門にしているモトジメの店かしら」

「ヘンタ……？　あの、何の話をなさっているんですか？」

「変態というと恐ろしげなイメージだけど、血を好むようなサディストって案外少ないの。中には添い寝するだけの店もあって、お客は老人ばかりなんだけど、布団の中で一晩、じっと眠ったふりをしているだけでいいの。審査の厳しい会員制でね。入会できる老人は、すでに性交が不能になっていることが条件なのよ」

ようやく小さな悲鳴を上げて、霞美は顔を覆った。ずいぶん手加減して話してもこれなのだから、やはりどこかのお嬢さまなのだろ

うと思う。こんな初心なお嬢さまが、どこをどう間違って、校則違反を冒してまでアルバイトを探すほど、困窮してしまったのか。

「で、どれくらいお金が必要なの？」

ハッとしたように、霞美は掌の仮面を外した。草食動物の目をしている、と二葉は考えた。小さいけれどつぶらな目を、一生懸命見開いたさまは、可憐であり、ちょっと苛めてやりたい気分にもさせられる。

「冬休みじゅうに、百五十万サークルほど」

「本気で言ってるの？　冬休みの間、一睡もせずに働いたって不可能でしょう」

「百万でも、せめて五十万でも構いませんから。なんとかなりませんか」

唸りつつ腕を組んだ。なんとかならないか、と言われてもこまる。アルバイトごときでは、とても稼げない金額だ。しかも政権交代直後の混乱で、世の中は不景気の真っ只中。身を売ったところで、ぽんと百五十も手に入れるのは難しい。あとは借りるか、盗むかだ。

60（3）

しかし千五百万ならともかく、百五十万程度であれば、オトナが工面できない金額ではあるまい。おそらく二葉が泣きつけば、兄たちはポンと出してくれるだろう。いわんやお嬢さまにおいてをや。

「いっそ、パパに頼んじゃえば？　自分でなんとかしようなんて、考えるだけ時間の無駄だと思うよ」

口に出してから、悔やむ気持ちがわいた。霞美の「家庭の事情」について、彼女は何も知らないのだ。高級住宅地に住んでいるからといって、大金持ちとは限らない。現に、霞美が見る間にしおれるのが、手にとるようにわかった。

「悪いこと言っちゃった？」

「いえ。わたしのほうこそ、相談しておきながら、こんなことを言うのも失礼なんですけど。今はまだ詳しい理由は話せないんです」

唇を噛んだ。それでもひたむきな眼差しが、じっとこちらへ注がれていた。さっきまでの印象と異なる、意外に気丈な一面を覗いた気がした。

「事情は人それぞれでしょうから、別にいいよ。ただ、情報が多いほうが、対策をよりたてやすくなることは、わかっているよね」

溜め息まじりにそう言った。恐縮するかと思えば、霞美の顔が、喜悦に輝いた。

「相談にのってくださるのですか？」

「無意識にやっているのだとしたら、あなた、天然の策士だわ」

「そんなつもりは……」

二葉は立ち上がった。ぽんと埃を払うついでに、スカートの皺を直した。

「ちょっとこれから用事があるの。話の続きは後日ということで。あと、もしわたしのほうで、勝手にあなたの秘密とやらを知ってしまったとしても、恨みっこなしにしてもらえる？」

まるで金を工面できたかのように、何度も礼を言って立ち去る霞美を見送ったあと、彼女は二つめの溜め息をもらした。両手を軽く広げて、肩をすくめた恰好。
「いやね。だれかみたいで」

千里眼は相変わらずそこにいた。
権力者たちの目を逃れて、こんな所に巣食っている男だ。ある日突然姿を消しても、何の不思議もない。少しホッとしながら、ガラクタ山の頂上に陣取っている異様な男を見上げた。
「やあ。レモンティーはいかがかな」
「いただくわ」
廃棄物としか思えない自販機のボタンを押す。ごとりと音がして、熱いレモンティーの缶が転がり出た。やはり現存しない銘柄だが、このまえ飲んだものとはまたデザインが違う。プルタブを引きながら、「いつもの席」についた。用途の不明な金属の箱で、わずかに帯電しているが、腰をおろすにはおあつらえ向き。
「話はすべて聞かせてもらったよ」
甘酸っぱい液体を口に含みながら、ちょっと肩をすくめた。今さら驚く気にもなれない。
大きなヘッドホンとゴーグルで、かれの顔半分は覆われている。幅広のヘッドバンドから、蓬髪が食み出している。顔の下半分は卵のようにのっぺりとして、始終浮べている笑みは、皮肉らしく歪むのだ。二葉は訊いた。
「あの子、何者なの？」
ゴーグルの表面が光を浮べ、砂状のノイズがちらちらと揺れた。マイクらしきものはどこにも見当たらないが、かれの声は電気的に処理されているような、ひずみをおびた。
「鳥辺野霞美。戸籍との一致を確認。各種ワクチンの接種更新済み。身長１７２センチ。体重５１キロ。バストは……」
「興味ない。どうせわたしの１．５倍くらいでしょう」

「せいぜい１．２４倍さ。住所はＲ８ｃ－ＭＢ４５－ＴＹＦ６３２。おっと、これは当局の監視用データだった。俗にいう、コトホギ坂だね。そこそこに裕福な家が建つ区画だ。家族構成は両親と使用人二名。家事用チャペックが二体に、犬が一匹」

「そこそこに、幸福そうだわ」

「父親の鳥辺野博嗣は第三大学の教授だよ。専門は機械遺伝学……おや、眉をひそめたね。お察しのとおり、研究するだけでしょっ引かれそうな、禁断の学問さ。ただ博嗣氏は、敬虔な学徒で通っており、当局のお目こぼしにあずかっている。人徳というやつだね」

某所の二階の変態博士とは正反対の人物像を、思い浮かべればよさそうだった。

60（4）

「それって、当局に目をつけられているというのと同じじゃない」
「反体制派に利用されてはコトだからね。四六時中見張られていると考えていいだろう。教授は穏やかな性格で、荒事を好まない紳士だから、頼みもしない護衛とはいえ、むしろかれにとって有益なのだろう。静かに研究に打ち込めるというものさ」
「紳士なら、言語道断な研究なんかやらず、哲学者にでもなればよかったのに」
「ひとつは、かれの一族が理系の学者を多く輩出しているという環境にもよるだろうね。でもきみの言うとおり、教授の学説は哲学的と称されているよ。ボクに言わせれば、常人なら研究室を飛び出して汚染地帯の世捨て人になりそうな分野を、よくまあ科学の領域に踏み留まってコツコツやっていけるものだと、逆に感心させられるけどね」
　その点は、相崎博士と同類といえる。性格が地味か、派手かの違いで。
「ちなみに、その鳥辺野教授って、お年寄り？」
「主観にもよるが、四十七歳を年寄りと呼ぶかどうか。どうしてそんなことを聞くんだい？」
「なんとなく……学者一家なんですって？」
　よく耳にする何々一家は、たいてい芸術家か学者である。ジャンク屋一家なんて聞いたことがないし、泥棒一家といえばニュアンスが異なる。けれど兄たちを見ていると、ジャンク屋も一種の学者であり、きわどいところで芸術家と呼べなくはない気がする。
「博嗣氏の父親は古風な物理学者だった。そのまた親父は、世が騒がしかった当時、学位こそ持たなかったものの、ロストテクノロジーのひとつ、量子コンピューターの伝承者だよ」
「キナ臭いわね。つまり、祖父がアブナイ研究をしていた反動で、

父親は古典の世界に閉じ籠もった。その息子である教授に至って、父親の堅実さと、祖父のキナ臭さを継承した」

「ユニークな考察だ。ちなみに博嗣氏には十一歳年長の兄がいて、ひところは、こちらのほうが機械遺伝学者として名高かった。名を鳥辺野秋嗣という」

「ちょうど旧政権時代に活躍した恰好かしら。現在はどこにいるの？」

「行方不明」

「ふぅん」

レモンティーはだいぶぬるくなっていた。飲みくだす音が、みょうに大きく響く気がした。白い手袋をはめた手で、千里眼は自身の顎をつるりと撫でた。

「タキシードを着て竜門寺家のサロンに出入りするほど、一時は幅を利かせていた。掃討車やソフトボールの基礎的な理論も、かれがうちたてた。きみの所の相崎博士とは、ある意味ライバルどうしだったといえる」

「ある意味、ねえ。いずれにせよ、刷新会議にとっては、A級戦犯なみよね。当局に消されたの？」

「いいや。鳥辺野秋嗣が姿を消したのは、クーデターが起こる二年以上前だよ。竜門寺家に拘束されているのだと、巷でもっぱらの噂だったし、それが事実だろうねえ」

「まさか社交ダンスの途中で令嬢の足を踏んずけたのが原因じゃないでしょう」

「残念ながら、ずっと野暮な理由で捕まっちまった。父親から禁断の技術を伝授されていることが、バレてしまったんだね」

「量子コンピューター？」

「それもあるし、もっと凄惨な技術の数々も含まれていただろう」

一缶飲みほしたばかりだというのに、すでに咽が渇いていた。童話じみたイメージだとは思いながら、虫食いだらけの魔法書を、脳裏に描かずにはいられなかった。痩せさらばえ、実年齢より十歳も

老けこんだ男が、泥炭ランプをひとつともして、ぶ厚い本のページをめくっている。岩窟の壁に映る男の影には、巨大なコウモリの羽が生えている……

我知らず、二葉は身震いした。

「けっきょく見つからずじまいなのね。でも、竜門寺が、秋嗣博士を殺している可能性は薄いのでしょう。情報を引き出したいわけだし。クーデターで竜門寺真一郎が拘束されたことを考えれば、どさくさに消す余裕もなかったんじゃないかしら」

「鳥辺野秋嗣は生きている。と、きみは考えるわけだ」

「なんだか含みのある言いかたね……あれ？　もしかして……」

顎に指をあてた。尻に敷いている金属の箱がぴりぴりするのも気にせず、考えこんだ。予定調和ではないけれど、千里眼と交わしたとりとめもない会話が、ここで輪を閉じるのではないか。

「もしかして鳥辺野霞美は、秋嗣博士に関する情報を買うつもりじゃないかしら」

百五十万サークル。多少法外だが、情報料としてなら、あり得る数字だ。

61（1）

61

目が覚めたあとも、しばらくは、ここがどこだかわからなくなる。まだ「幽霊船」の底にいるような気がする。

暴走した非常用電源が、火星の夕焼けをおもわせる赤光で辺りを覆う。コンクリートも汗ばむほどの不穏な熱。一帯を巣窟としているワームどもが、餌を求めて蠢く気配。

退化猿人どもが、ほくそ笑む声。

かたくなに目を閉じたまま、寝返りをうつ。錆びだらけのベッドがきしむ、耳慣れた音が、おれを「幽霊船」の底から連れ戻す。老朽化した雇用促進住宅の十一階がおれの安住の地だとは思いたくないが、少なくともあそこと比べれば、いきなり一つ目の掃討車に踏み込まれる可能性は低い。

ぱらぱらと、水の音が聞こえる。人工降雨の音ではない。浴室のシャワーが出しっ放しになっているのだろうか。

みすぼらしい獣のように、くるまっていた毛布から顔を出すと、蒼い灯りが、ぼんやりと視界を照らす。都市地区の地上にいる限り、真の闇は訪れない。殺風景な部屋。まだろくに散らかっていないところが、余計に寒々しい印象を強める。

あれから何日経ったのだろう。

ずいぶん迷ったのだが、部屋に戻る前に、生きて帰ってきたことだけ、電話で茨城麗子に告げた。会社にかければ、抜け目のないワットに感づかれるので、彼女の自宅に。

（ご無事で何よりです）

深夜にもかかわらず、ワンコールで出ると、相変わらず抑揚のない声で、彼女は言ったものだ。

（報告は、後ほどあらためてさせてもらう。今はだれにも逢いたく

ない。どうせ依頼主も生きて帰るとは思っていないだろうから、二、三日遅れたって構わないだろう）

（了解しました。ゆっくり休まれてください。それと……）

（どうした）

声が上ずるなんて、麗子らしくもない。やはり彼女らしからぬ沈黙のあと、ひどい混線をぬって、緊迫した声が響いた。

（エイジさんの留守中、ご自宅の近くで不審な人物を目撃しました）

（ジークムント旅団か）

（わかりかねます）

（ありがとう。せいぜい気をつけるよ）

骨董電話の受話器が、ちん、と間抜けな音をたてた。

ワットのさしがねか、彼女個人の意志によるのかわからないが、麗子は日に数回、ここまで車を回していたのだろう。美しい足で、運転席からすらりと降りて、雇用促進住宅を見上げる彼女の姿が、目に浮かぶようだ。けれどいつ来ても、十一階の片隅の窓に変化はない。立ち去る前に、彼女は少し眉根を寄せたかもしれない。

アマリリスが宅配業者を偽装したツァラトゥストラ教徒の過激派と、派手な立ち回りを演じたのは、いつのことだろう。「幽霊船」に潜入する前のできごとが、ずいぶん遠く感じられる。当初、やつらは隣に住む謎の女子大生、レイチェルを消しに来たとおぼしいが、あの一件で、おれたちに目をつけなかったわけがない。

そして「幽霊船」から帰還した今では、やつらがジークムント旅団に違いないと確信している。

逆さAの紋章と、翼と脚を広げた猛禽類。この二つが組み合わされたとき、魔術的な星の形が浮かび上がる。およそ六百年前に世界戦争を引き起こした男も、あの星から逃れられずに自滅したのではなかったか。第二次百年戦争の火種となった武装国家、イズラウンもまた、あの星との深い因縁に繋がれていた……

水の音は、もう聞こえなかった。一種の耳鳴りだったのだろうか。おれはベッドから這い出し、灯りもともさずに台所に向かった。

冷蔵庫を開け、合成ビールを取り出した。プルタブをひねると、泡が指まであふれたが、構わずに半分ほど飲み干した。一日半、これしか口に入れていないので、さすがに舌が拒否反応を示し、錆の浮いた汚水の味がした。

（こんなとき、気の効いたドラッグでもあればな……）

缶を放り投げて寝室に戻ると、机の上で、ノート型コンピューターのモニターが、蒼くともっているのが目に入った。出かける前から、つけっ放しだったのかもしれない。近寄るとセンサーがおれを感知して、待機画面からプログラムの画面へと切り替わる。ことそっくりな、殺風景な部屋の一角が、天井から見下ろす角度で映し出される。

おれはハッと胸を突かれた気がした。

水の音！

61（2）

（覚えておいてね、エイジさん。女が隠れて何かするときは、必ず浴室を使うものよ）

モニターに映しだされているのは、隣の寝室である。いつぞや、二葉が仕掛けた監視カメラは、まだ生きているらしい。映像は極めて不鮮明だが、赤外線によって、ものの形は見分けがつく。借り手のつかない倉庫のように、がらんとしていて、空っぽのベッドに人が寝た形跡はみとめられない。

水の音はもう聞こえない。

やはり幻聴だったのだろうか。だいいち、隣でシャワーを使う音が、ここまで聞こえたためしはない。

モルモットに添えた手が、少し震えていることに気づいた。アイコンをクリックして、カメラを切り替えた。

闇。

故障しているのだろうか。それとも、何者かが、向こうから掌でレンズを押さえているのか。戦慄が背筋を貫く。やがて月蝕が終わるように、闇は少しずつ、蒼みがかったグレーに溶かされてゆく。

白い、大量の火花が盛んに吹き上げている。工業用カッターに似た円盤が回転している。どこかの古びた工場だろうか。そもそも、隣の浴室に仕掛けられているはずのカメラが、なぜこんな映像を送ってくるのか。

それとも、すべておれの幻覚か。

甲殻類の脚に似た、無数のマニュピレーターが天井から垂れ下がり、餌を漁るように蠢いている。何を作っているのだろう？　解剖台とベルトコンベアーを組み合わせたような台の上に、何かが載っているが、火花がひどくてなかなか確認できない。不条理を忘れて、おれは考えこむ。本当に何かを「作って」いるのだろうか。

火花がいっそう激しくなり、ハレーションを起こしたように、モ

ニターの中が真っ白になる。再び画面がグレーに蝕まれてゆくと、解剖台の上に横たわるものの形が、今度はおぼろげにわかる。女だ。すらりと均整のとれた、白い肢体。よく見れば無数の金具が、彼女をリベットで台の上に拘束している。

ベルベットのように広がる、長い黒髪。彼女は、眠っているのだろうか。瞼は閉ざされたまま、身じろぎひとつしない。粒子が粗いためなかなか確認しづらいが、おれは彼女を知っている気がする。

一瞬火花が止んだのは、円盤を取り替えていたためらしい。さらに大きな円盤が、さらに高速で回転しながら下りてゆき、彼女の肩の上で火花を吹き上げる。「作って」いるのではない。解体、もしくは破壊しようとしているのだ。彼女は目を見開き、音のない世界で絶叫した。

（レイチェル……まさか！）

砂状のノイズが画面を覆っていた。

あとはどれほどモルモットをクリックしても、キーを叩いても、映像はあらわれなかった。おれはコンピューターの電源を落とし、煙草に火をつけた。

偶然に無関係な電波を拾ったのだと考えるのが、最も妥当な解釈だろう。親孝行横丁で上演されていたような、いかがわしい映画のたぐいを。テレビジョンはまだ刷新会議によって封印されたままだが、モグリの個人放送局がいくつもあると聞く。それとも、やはりおれの頭がいかれちまったのか。

長く、煙を吐いた。狂気がみせた映像にせよ、何にせよ、不鮮明な画面の中の女を、なぜおれはレイチェルだと思ったのだろう。監視カメラで彼女の部屋を覗いているという先入観はあったものの、見たとたん強く確信した理由がわからない。

彼女の肌は、工業用カッターで切りつけられても破れなかった……

煙草を揉み消し、机の引き出しを漁った。八幡兄弟がこしらえた隣の合鍵は、まだそこにあった。結果から先に言えば、レイチェルはおろか、隣にはだれもいなかったのだ。荒らされた形跡もなく、

残り香さえ感じられない。浴室は乾ききっており、うっすらと埃が積もっていた。

部屋に戻ると電話が鳴っていた。

そこでようやく時計を確認する気になった。午前四時十二分。友好的な電話をかけてくるのに、常識的な時間とは呼べない。思案している間も、ベルは止まない。さっきの奇怪な映像のこともあるので、おれはそっと受話器を持ち上げ、耳にあてた。レイチェルではなかった。

「ごきげんよう」

瞬時、瓦礫の下に埋もれているであろう、ある男の顔が浮かんだ。血まみれのかれが電話をかけているという、三流怪奇映画的な絵が。

「やはり帰っておったようだな。ちょうどいい。夜が明けてからでも構わんから、ワガハイのところに来てくれたまえ」

「相崎……博士？」

「はん。よくご存知の変態博士だよ。ワガハイ同様、きみには夜も昼もなかろうからな、さっそく報告させてもらった次第だ。先ほど、アマリリスの調整が完了した」

62（1）

62

ときどき二葉は思うのだ。

ゴーグルとヘッドフォンをつけた、のっぺりした顎の男……あれは必ずしも、情報屋「千里眼」の実体ではないのではないか、と。

廃された天体望遠鏡のドーム。中にうずたかく積み上げられたガラクタも含めて、あの場所全体が「千里眼」なのではあるまいか。だから、ガラクタ山の頂上に陣どり、マリオネットめいた身振りで話す男が、あるいは本当に操り人形……チャペックであったとしても、二葉はさほど驚かないだろう。

となると、権力者から逃れるために、たびたび場所を変えているという、かれの移動を助けているのは何者だろう。あれだけの「装置」を人知れず運び込むのは、容易ではあるまい。やはり何らかの組織が絡んでいるのか。

出入りの業者を装って、黙々とボール箱を運びこむ男たち……が、しかし、一度もそれらしき人物と、ドーム内で出くわさないのは、どういうわけか。

ドームを出たあと、彼女はいつも軽い疲労を覚えた。どちらかというと、心地よい疲労に属する。全身の気怠さの中心に、懐かしいような快感の芯がある。それもちょっと人に話すことが憚られるような、うしろめたさを含んだ快感が。

二葉の指定席。あのわずかに帯電している箱のせいだろうか。千里眼の語るリズムにあわせて強弱をつけながら、箱はぴりぴりと刺激を送る。けれど、そういった直接的で局部的な刺激が原因ではなく、ドーム全体が超高周波の電気を帯びており、内部にいる彼女の身体に作用するのではあるまいか。

ちなみに千里眼を訪ねたあとは、いつも肩こりや便秘の症状が、

驚くほど改善されていた。

鳥辺野霞美の話題を振ってしまったため、尋ねるつもりだったことを訊きそびれてしまった。アルバイトがあるので、長居もできないし、また千里眼自身、長時間人と話すことは不得手のようだ。限界が近づくと、話しながらうたた寝をはじめ、眠りネズミのように、わけのわからないことを口走り始める。

校門を出ると、外はすっかり暗くなっていた。珍しく大気が澄んでいるのか、少しばかり「本物の」星が見えた。残留人工衛星が、その間を迷い魚のように、ふらふらと泳いでわたった。

「いけない、遅刻遅刻」

童話の白兎のようなセリフを口にしながら、カカトをとん、と、路面に打ちつけ、靴底に仕込まれた車輪を出した。鞄を小脇にかかえ、そのまま路上を滑走してゆく。冷たい夜気が頬にぶつかり、髪をなぶる。二葉はこの短い冬が嫌いではない。むしろ一年のうちで一番好きな季節かもしれない。

気温が下がるおかげで、どの都市地区にも宿命的につきまとうオイル臭が、いくらか緩和される。ワームの活動が鈍り、長い夏に比べれば、テロリストや犯罪者たちもおとなしく、街は静かである。死の季節の中で、ひっそりと身を潜めて暮らす人々の息づかいが、温かく感じられる。

（なんてセンチメンタルな……）

自嘲しながら、まんざらでもない笑みを浮べた。風の心地よさにこれほど強い幸福感が得られるのも、若さゆえの特権、なのかもしれない。

いくつか知っている近道の一つをたどる。塀の隙間から入って、封鎖されたマンションの敷地を横ぎり、植え込みを抜けて遊歩道をわたる。立ち入り禁止のロープを飛び越え、ひと気のない公園の石畳を蹴った。整理区画に指定されたまま、ここも長いこと手がつけられていない。

花壇の残骸を尻目に、淀んだ水をたたえた噴水の脇を通り抜けよ

うとしたところで、人影に囲まれた。
（もう……ついてないなあ）
何かと今日は、じゃまが入る。ざっと見わたしたところ、相手は五名。ゴムのような光沢のある黒ずくめで、顔はガスマスクですっぽりと覆われている。瞬時に包囲する手際のよさといい、武装警官かと考えたが、コスチュームが異なるし、そもそも雰囲気が違う。明らかに反体制側。アウトサイダーのにおいを、ぷんぷんさせていた。
単なる無法者か。バイクが見当たらないので、ボーン・トゥ・ランの一味ではなさそうだ。最もあしらいやすいのが性的な欲望を抱いた変質者であり、一番厄介なのは、何らかの思想を共有するテロリストたちだ。しかしこの季節、こんな場所で、どんなテロリストたちが好んで集会を開くというのか。二葉は軽く鞄を叩いた。
「よろしければ、道を開けてくださらない？　先を急いでいますの」
ガスマスクたちは微動だにしない。
ユーモアを解せない野暮天どもめ、と、二葉は心の中で悪態をついた。五人とも何も得物を手にしていないが、どこからナイフや拳銃が飛び出すか、わかったものではない。こちらから仕掛けるのは、明らかに不利だ。せめて相手の魂胆と、戦闘能力を探らなければ。
「それとも、率直に、わたしをどうかなさりたいの？」
彼女の正面にいたガスマスクが、肩をすくめるのがわかった。しゅうしゅうという音に混じって、くぐもった声が聞こえてきた。
「八幡二葉だな」

62（2）

「さあ、どうしてそう思ったの？」

強いて冷静に返しながら、こめかみを伝う冷たい汗を意識した。非情に、よくない。

出会い頭に名を言い当てる行為は、かなり有効的な先制攻撃といえる。こんな場合、「質問には質問で返せ」と教えてくれたのは、どこかのしがない何でも屋だっけ。

質問に質問を返され、多少なりとも、ガスマスクたちはひるんだようだ。動揺が無数の翅音をおもわせるざわめきとなって、冷えた空気を震わせた。マスクの排気孔から、白い息がしゅうしゅうと洩れた。

「鳥辺野霞美から何を頼まれた？」

「あなたたち、あの子の知り合い？　とてもお友達には見えないけど」

金属的な、まがまがしい音が響いた。ゴム状の手袋に覆われていた、ガスマスクたちの指がすべて二倍に伸張し、鋭い円錐形に変化していた。見覚えのない武器だ。

かれらは類人猿のように腰を曲げ、爪の先が石畳に接するほど低く身構えた。キッ、と音が鳴り、火花が弾けた。これもよくない。銃口を向けられるより、ずっとタチがよくない。思うにかれらは、一種の隠密行為を専門に行うスパイではあるまいか。盗聴、盗撮、窃盗、破壊、放火、暗殺などをもっぱらとする、スパイの中でも最もラディカルな集団。

そんなものは、世界的にも事例が少ない。日本の伝説におけるニンジャをのぞけば、ツァラトゥストラ教過激派の親衛隊くらいか……

「ちょっと待ってよ。だれも答えないとは言ってないでしょう。お金のことで相談されただけ」

「金だと？」

「そう。百万だか百五十万だか、どうにかならないかって。もちろん、どうにもならないと答えたわよ。それだけ」

通らせてもらうという意思表示のつもりで、一歩踏み出した。石畳を引っ掻く、鋭い不協和音が鳴り響き、二葉は動きを止められた。やはり、プロだ。

「なによ。もう用はないはずよ」

「これ以上、鳥辺野霞美と接触してはならない。おまえたちが、常に見張られていることを忘れるな」

「ふぅん。皆さん、女の子を覗き見するのが趣味なんだ。べつにいいんじゃない？　男として当然の欲求だと思うわ。知らない間に覗かれるだけなら、こっちは痛くも痒くもないし。でもね、わたしが誰とお喋りしようと、そんなのは、わたしの勝手！」

再び無言の威嚇。そう来ると身構えていたので、今度は彼女はひるまなかった。別のガスマスクが言う。

「従う以外の選択肢は与えられない」

最初に口を開いた男よりかん高い、どこか外国訛りのある声だ。もっとも昨今では、どこからどこまでが「日本人」なのか、だれにもわからなくなっているが。鞄の取っ手に力を籠めながら、二葉は皮肉らしく口の端をゆがめた。

「ノーと言ったら？」

「従うことを、体で覚えてもらう」

「このド変態！」

取っ手を握り込んだ。スイッチが入る、確かな手応え。古風な学生鞄がたちまち解体され、立体パズルのように細分化された。革張りの表面が裏返ると、黒い金属があらわになった。取っ手は握られたまま引き鉄へ続くグリップと化し、その上に太くて短い筒状の砲身となってパズルが再構築された。

いつぞや「人食い私道」で彼女が用いた、風砲である。

トリガーを引く前に、拡散レバーを最強に引き上げておくことを、彼女は忘れなかった。

「ニンジャごっこは終わりよ、ベイビイ！」

前方にいた三人のガスマスクが、たちまち吹き飛ばされた。最初に口をきいた男は、爪で地面にしがみつこうとしたが、石畳ごともぎ離された。新東亜ホテル別館への移動が決まってから、なぜか一朗が大急ぎで作ってくれた新型だが、思わぬところで役にたった。

あまりにも想定外のできごとに、背後の二人はさすがに、瞬時、我を忘れたようだ。かれらが体勢を立て直す前に、二葉の靴底からは、何本かの強力なバネが排出されていた。むろん彼女の体はすでに高く舞い、人工衛星の泳ぐ夜空の下でシルエットを描きながら、三名のガスマスクの頭上を跳び越えた。

街路を滑走し、人通りのあるところへたどり着くまで、三分もかからなかった。ローラーをおさめ、自販機にもたれてひと息ついた。見れば、靴はぼろぼろに焦げて、黒い煙を吹いていた。レモンティーのプルタブを引き開けながら、彼女はつぶやいた。

「鳥辺野霞美……か。俄然、興味が湧いてきたんだけど」

63

63

合成ビールが意想外に効いたのか、明け方近くに少し眠り、気がつけば九時に近かった。

しゃっくりするようなシャワーを使い、久しぶりにカーテンを開けた。相変わらず空はスモッグで覆われているが、慌ててカーテンを半分閉めたほど、闇に慣れた体に、陽光は耐えがたかった。

闇を食むワームどもが蠢く「幽霊船」の地底より、明るい朝のほうがつらいのは、どういうわけだ。ワーム殺しの仕事をしているうちに、おれの体質はかれらに似てきたのかもしれない。あえて古くさい言い回しをすれば、ワームどもの呪いによって。

無精ヒゲには頓着しないが、それらがあからさまにヒゲらしい存在感をおびてくると、我慢ならなくなる。けれど、いつになく入念に剃刀をあてている自分に気づいたときは、曇った鏡の前で苦笑せずにはいられなかった。鼻歌まで歌っていたのである。

アマリリスがよく口ずさんでいた、ワーグナーの『タンホイザー』序曲を。

半地下の駐車場へおもむき、廃車の列を抜ける。オイル臭の淀んだ闇が、奇妙な安堵感と繋がっている。

（レイチェルは、車を持っていたのだろうか）

ふとそんな考えが浮かんだ。ぶつけない腕か、ぶつけても気にしない心臓さえあれば、どこへ停めるのも勝手次第。管理人など見たこともない。レイチェルがここに車を乗り入れ、同じ車で去って行ったとしても、鉢合わせでもしない限り、知るよしもないのだ。もっとも、彼女がネオ・メルセデスのピカピカ光る装甲つきを乗り回していたのなら、話は別だが。

スクラップ同然の愛車は、まず盗まれる心配がない。また、廃車

のほとんどからエンジンを抜かれているが、愛車はガスで走るうえ、八幡ブラザースのオリジナリティあふれる細工がほどこされているため、よほどの専門家でない限り、どこにエンジンがあるのかわかるまい。

冷たいシートに身を割りこませ、キーを差し込んだ。動くか動かざるか、それが疑問だった。

走るスクラップ。と、いつか二葉が言っていたっけ。動いているだけで驚嘆に値するという彼女の意見は、珍しくおれの見解と一致していた。

さてお祈りでもすべきか。なにしろ、汚染地帯に隣接する「幽霊船」の近くで、数日路上駐車していたのだから、奇跡的に乗って帰れたものの、もう一度エンジンがかかる確率は依然、限りなくゼロに近い。

おれはシートに沈みこみ、煙草に火をつけた。ライターの火をともしたまま、箱に描かれたタコの化け物を照らし、舌打ちして火を消した。アリーシャのことは思い出したくなかった。忘却こそが、神が人間に与えた最大の恩恵である。昔の作家が、そんなことを言っていた気がするが、忘却に頼らなければ耐え難い記憶が、あまりにも多い。

薄闇に漂う煙を、ぼんやりと見つめていた。記憶をむりやり封じこめたあとの、ヘビイな倦怠に身をまかせて。

(やっぱりわたし、船に残るから)

別れぎわ、カノウ・マキはそう言った。

父母の思い出の染みこんだ船とともに、朽ちてゆくのだという。おれには何も言えなかった。過去に生きることが正しくないと誰に言える? 記憶を風化させる以外、なす術もなかった、腑抜けた男に何が言える?

(これでもだいぶ迷ったのよ。エイジについて行きたい。この朽ちかけた怪物の腹から逃げだしたい……もちろん、逃げることを否定するつもりはない。時に逃げるためには、踏みとどまるより多くの

勇気が要るわ。でもね、エイジ。わたしはたぶん、船の一部なのよ。わたしの父と母が、そうであったように)

船から切り離されては生きられない、と彼女は言った。

唇が触れ合う程度の、軽いキスを交わした。七年前の少女そのままの、はにかんだ笑顔がそこにあった。お互いに「さようなら」は言わなかった。

バイク便の黒竜が手紙を届けたのは、船から生還した翌々日だったか。

差出人のない、粗悪な再生紙の封筒をやぶくと、うって変わって真っ白なレポート用紙があらわれた。ミッションの初日以来、ついに顔を合わせなかった、アルチュール・ランボー氏からの報告書だった。詩人になりそこなったわりに、几帳面な男だ。

当然といえば当然の話だが、「幽霊船」に巣食う麻薬密売組織は、忽然と消滅したらしい。「イーズラック人」の姿は、船内にまったく見られなくなり、死体は今のところ一体も発見されていない。また、かれらが消える直前に起きた原因不明の地震と、シャングリ・ラにおける奇怪な地盤沈下のことを、ランボー氏は書き添えていた。

バルブついては、一言も触れられていなかった。

ジークムント旅団および竜門寺武留に関する報告もない。地震と、それにともなう地盤沈下によって、おぞましい秘密は瓦礫に埋もれてしまったのだろう。トリベノの爺さんと黒猫のプルートゥ、そして……

アリーシャとともに。

64（1）

64

「ちょうどよかったよ。最終的なチェックに手間取っていてね」

鹿の首が壁にかけてある、あのお世辞にも趣味のよくない部屋で、相崎博士は言うのだった。

「そんな情けない顔をする必要はない。念には念を入れてというやつだ。それもほとんどコンピューターがやってくれておる。我々はただ座して待つのみさ」

「もし異常が見つかったら？」

「ブザーが鳴るかわりに、第九の第一楽章が聞こえてくるだろう」

とてもよい趣味とは言えない。

たった今、助手の黒木がコーヒーを置いていったところだ。今回はまともなカップに入っており、よい香りのする湯気をたてていた。

彼女は相変わらず「看護婦」をおもわせる恰好をしており、相変わらず一言も喋らなかった。ともあれ、黒木まで給仕にあらわれたのだから、さほど重大なチェックではないという、博士の言葉を信じてもよさそうだった。

八幡兄弟のガレージを素通りして、二階に居候している博士の研究室へ来たのは、初めてかもしれない。かれは長身を斜めにソファに折りたたみ、ひょろ長い足を、窮屈そうに組みかえた。チェックのベストに蝶ネクタイ。パイプをくゆらせるさまも、白衣が肩に引っかかっていなければ、某麻薬常習者の名探偵そのままである。

おれはカップを持ち上げた。むろん、純度百パーセントではなかったが、身に染みるうまさ。思えばアマリリスが去ってから、まともなコーヒーを飲んでいなかった。

「ちょうどよかったといえば、おれもあなたに、尋ねたいことがあったかもしれません」

「はん」
博士の口から、紫煙が盛大に吐き出された。やはり、似ている。皮肉っぽい動作も、芝居がかった口調も。「幽霊船」の底では、まだ二人を結びつけるには至らなかったのだが。
「先日までぼくがどこで何をしていたか、おおよそのところはご存知ですね」
日頃、ワットが押しつけてくる大仕事は、八幡兄弟のバックアップなしではとてもこなせない。八幡兄弟はまた、相崎博士の頭脳から恩恵を得ている。この言語道断な変人に、二階をまるごと提供してかくまっているのは、かれらが共存共栄の間柄だからだ。あたかも、縞入りワームと蝕虫の関係のように。
ゆえにおれの行動は、八幡ブラザースを通して、まず博士に筒抜けと考えてよい。案の定、かれはパイプをくわえた辺りを、ニヤリとゆがめた。おれは尋ねた。
「トリベノ、という男をご存知ですね」
「よく知っておるよ」
煙を吐きながら、心なしか博士の表情が苦痛をおびたように映った。かれは語を継いだ。なぜ唐突に、おれがトリベノの名を持ち出したのか、尋ねようともせずに。
「きみが鳥辺野秋嗣のことを言っているのだと仮定してだが、旧友というやつだな。学友、もしくは悪友と言い換えてもいいが。学生時代の同期だよ」
かれの学生時代の世の中がどんなふうだったのか、すぐにはイメージできない。首長連合が比較的安定した統治を確立するまで、かなり長い昏迷が続いており、その間を「シュトルム・ウント・ドランク」などと呼んで、ひとくくりにする場合が多い。疾風怒濤の時代、といった意味あいか。
当時の大学もまた、ひとつの排他的な政治勢力だったといわれる。大学そのものが、小さな独立国と化していたのだ。魑魅魍魎のごときＯＢや院生が塔の上に巣食い、理事や教授連をマリオネットにし

て、自治権をほしいままにしていた。そんな大学ごとに、方言とも呼べる独特な話しかたが生じた。

トリベノ……いや、鳥辺野秋嗣と相崎博士の身ぶりや話しかたが似ているのも、そのせいであるらしい。

「若すぎたんだなあ。こう言うと、きみは笑うかもしれんが、我々は若すぎた。若すぎるがゆえに、道を誤ってしまう。しかしきみ、何ゆえに神は、若者に分別ではなく、血気を与えたもうたのだろう。道を誤ることは目に見えていながら、なぜあえてそう進ませようとしたまうのだろう」

「あなたの口から、神の名が飛び出すとは思いもよりませんでしたよ」

「神すらも、実験室で造りだそうとする男……きみの目に、ワガハイはそう映っておるのだろうな。たしかに、宇宙のマリオネットたらんよりは、宇宙をも操る人形つかいになりたい。多かれ少なかれ、科学者どもの頭の中には、そんな不埒な考えが巣食っておるよ」

「とくにあなたの頭の中には、でしょう？」

博士は苦く笑いながら、パイプを灰皿の上で逆さにした。火皿を打ちつける音が二度、硬く響いた。

「その傾向が強かったのは、ワガハイよりむしろ、鳥辺野秋嗣のほうだろう。我々がタモトを分かった原因もそこにある」

64（2）

おれは「幽霊船」での体験を簡単に話した。

注意深く見ていると、博士が三度、眉をひそめるのがわかった。一度めは、鳥辺野がモグラの心臓を「ジュリエット」と呼んでいたくだりで。二度めは、これは当然であるが、バルブの発見に関して。そうして三度めは、鳥辺野の最期で。

アリーシャの「魔法」や、人型ＩＢ。ジークムント旅団および、竜門寺武留に関するエピソードには、眉毛ひとつ動かさなかった。ただ、聖歌隊の制服を着た少年について話したときだけ、ぴくりと瞼を震わせた。

ちなみにおれは今のところ、これらの情報をありのまま人類刷新会議の武装警官、カヲリに報告するつもりはない。麻薬密売組織の正体は、ジークムント旅団であった。不可解な地震とともに跡形もなく消え失せた。これで充分だろう。かといって、相崎博士を信頼しているわけではないが、少なくともかれは、おれと同様、アウトサイダーに属する。

当局の人間と比べれば、まだ変態博士のほうが百倍信用できるというものだ。問わず語りに、かれは言う。

「鳥辺野の研究は多岐にわたるが、おおまかに二つの柱から成っておる。ひとつはＩＢの進化だ。むろん、今も汚染地帯のどこかで、やつらは猛烈な進化を続けておるが。突然変異による種の枝分かれではなく、ダーウィンの大樹をまっすぐに登るような進化を、しかも人為的に促進できないものかと、鳥辺野は考えておった」

どうしても脳裏にちらつくアマリリスの影を追い払いながら、おれは尋ねた。

「なんのために？」

「対ＩＢ兵器の創出だよ。タテマエ上は、な」

「つまり、ＩＢに人間なみの知能をもたせようというのですか。良

心が芽生えるほどの」

博士は鼻を鳴らした。

「はん。良心だとか理性だとか、とっくに滅亡した言葉を、きみはよく知っておるな。最終的にはＩＢとの対話によって、世界平和を実現しようというのか。そう思うのは勝手だし、鳥辺野もそんなタテマエを吹聴しておった。が、やつの本音はさっき言ったとおりさ」

実験室における、神の創造。

熱くもないのに、こめかみを冷たい汗が伝った。

沈黙をぬって、柱時計の振り子の音が硬く響いた。ドアの向こうの実験室で、アマリリスはまだ、培養液の中で眠っているのだろうか……おれは煙草に火をつけた。

「向こうでは、あの爺さんにさんざんコケにされたものですがね。おれの鈍い頭でも、シナリオの骨子がわかりかけた気がしますよ。竜門寺武留のウラには、ジークムント旅団がついていた。なるほど、竜門寺家の後継者として否の打ちどころのなかったかれが、突如、候補から外された理由も、そこにあったのでしょう」

武留の野望を、竜門寺真一郎は恐れたのだ。稀代の学者にして、政治的野心の塊でもあった。武留はツァラトゥストラ教徒の過激派が、ＩＢを統御する実験を繰り返していた、長年の技術の蓄積に目をつけたのだろう。人食い私道に封印されていた化け物も、実験による失敗作のひとつに違いあるまい。

しかしなぜ、旅団と組んで人型ＩＢの創造にまでこぎつけながら、武留は破滅したのだろう。側近らしい少年はなぜ、武留を刺したのだろう。

少年が武留の秘書的な役目を果たしていたとみて、まず間違いないだろう。それもワットと麗子のようなドライな関係では、決してない。滅びた言葉を使うなら、小姓のような存在ではなかったか。女狂いの長兄、舞踏卿こと竜門寺慎二郎と異なり、武留はカタブツで通っていたが、男色の噂が囁かれてもいた。

少年と武留の愛憎劇を想像するのはたやすいが、そこに旅団が絡

み、さらに麻薬密売組織の消滅を思い合わせると、問題はそう単純ではなくなってくる。

（まるで自身の悪夢を分析しているようだな）

溜め息とともに、煙を吐いた。なるほどおれは、「幽霊船」における悪夢じみた体験の解釈を欲しがっている。目の前にふんぞり返っている白衣の男を、統合分析派の精神科医に見立てて。分析よって、傷を癒そうとするかのように。

（そうやってまた放り出すつもりか。ジュリエットにしたように。振り向きもせずに去って行けば、それでいいのか）

鳥辺野義秋の叫び声が、脳裏に生々しくよみがえった。

かれは武留および少年を憎んでいた。ある意味、かれらを抹殺するために、おれやアリーシャを巻きこんだといえる。いや、かれらばかりでなく、人型ＩＢも含めてだ。が、しかし、それとモグラに名づけていた「ジュリエット」との間に、どういう関係が成り立つのだろうか。

相崎博士に尋ねると、いつになくかれは苦しげな表情を隠さなかった。

「かれにとってジュリエットは、ワガハイにおける黒木くんのようなものだったよ。ただワガハイと違って、鳥辺野は正常な性欲の持ち主だった。そういうことだよ」

64（3）

沈黙の中で、鹿の首を見つめている自分にようやく気づいた。しかしなんというわかりやすい例えだろう。たしかにおれは、黒木と相崎博士が愛人関係にあると疑ったことなど、これまで一度もなかった。

「鳥辺野の口ぶりでは、そのジュリエットという人は、竜門寺武留に殺されたかどうかしたようですが」

「歯切れがよくないね」

「単に殺害されたのなら、爺さんだって、あんな言い回しはしないでしょう」

相崎博士は答えず、すっかり冷めたコーヒーに角砂糖を三つも放り込んだ。スプーンで掻き回す手つきさえ、かれがやると邪悪な実験のように思えてくる。

答えを待ちながら、心のどこかに、聞くことを拒否したがっている部分があった。かれが口を開いたとたん、思わず耳を覆ってしまいそうなほどに。

「もうひとつの柱については、訊かなくてよいのかね」

「柱……？　ああ、ＩＢの進化論だけでも、うんざりなんですがね。そいつに匹敵するほどの悪魔的な研究が、ほかにまだあるというんですか」

話を逸らされたが、癪にさわるどころか、情けないほど安堵していた。博士は目を伏せたまま、溶け残った砂糖を確かめ、口もとにゾッとするような冷笑を浮べた。

「キュノポリスの噂を聞いたことがあるかね」

うなずく代わりに瞼が震えた。イズラウンの廃墟に眠る伝説のひとつだ。壁が話しかけ、椅子が歌い、電灯が笑う。麻薬中毒者の幻覚か、ブルトン前派の絵画作品と代わりがない。あるいは狂った吟遊詩人あたりが広めたであろう、戯言に過ぎない。

生きている都市の伝説。

「まさかあの爺さん、そんなものを本気で研究していたのですか？」

うなずく代わりに、博士は爪でカップの縁を軽く弾いた。神経にこたえるような音が響いた。

「冗談じゃない。狂気の沙汰だ。変わり者だとは思っていたが、本物の狂人だったとは！」

「きみがそう信じたいだけじゃないのかね。鳥辺野は民俗学者さながらに、イーズラック人と接触していたよ。かれらがイズラウンのロストテクノロジーを部分的に継承しているのは、ご存知のとおりだ。ついでに言うと」

「なんです？」

「ジュリエットもまた、イーズラック人だった」

「……それで、まさかとは思うが、キュノポリスが実在した証拠を得ていたなんて言わないでしょうね」

博士はうなずいた。

どちらともとれるが、この場合、肯定を意味するのは明らかだろう。精神科医に悪夢の解説を頼むつもりが、ますます暗い深みへ引きずり込まれてしまうとは。頭を掻きむしりたい思いで顔を上げると、いつのまにか博士のかたわらに、黒木が立っていた。

足音どころか、気配すら感じなかった。亡霊に行き逢ったようにのけ反るおれを、冷たく見下ろしたまま、相変わらず彼女は一言も発しない。

「アマリリスの調整が終わったよ。安心したまえ。交響曲は聴こえなかった」

博士はそう言うと、カップを持ち上げ、ざらざらする液体をひと息に飲み干した。やはり変態である。

「すぐ行きます」

「まあ落ち着きたまえ。彼女はまだ裸だ。培養液にまみれた体で、きみに対面したくはないだろう」

これまで何度も、培養液の中で苦悶する少女を見舞っているのだ

が。おれは口ごたえせず、再び腰を落ち着けた。黒木が立ち去り、残された二人の男は、黙々と煙草をふかした。たちこめる紫煙の中で、柱時計の振り子が何往復しただろうか。

「やはりうれしいかね？」

「まあ、保護者のようなものですから」

「彼女は少し成長したよ。むしろ、進化と呼ぶべきかもしれんが」

「その言葉は……」

背後でドアが開く音がした。思わず言葉を呑んで、顔を向けた。黒木の後ろから、少女が部屋に入ってきた。

新東亜ホテルのメイドの恰好をして、小さな二つの拳で、自身のスカートをぎゅっと握っていた。

65（1）

65

博士は「成長した」というが、おれの目にはむしろ幼く映った。それはもしかすると、どこかアマリリスの面影を宿したアリーシャと、行動をともにしていたせいかもしれない。

少女はすっかり伸びた髪をもて余し気味に、両耳の脇で束ねていた。硬い表情。きゅっと結んだ唇。上目づかいにおれを見る瞳が、涙を溜めているように潤んでいた。まるで飼い主に捨てられた小動物が、人を慕って寄って来たときの目とそっくりで、おれはいたたまれない気持ちにさせられた。

「調子はどうだ？」

「問題ありません、マスター」

「帰ろう。ジグソーパズルは、そのままにしてあるよ」

少女はこくりとうなずいた。

博士に目をやると、ソファにふんぞり返ったまま、あらぬほうを見つめていた。どうやらこれ以上、かれの口から新たな情報を引き出すのは不可能らしい。世話になったと礼を言うのも変なので、黒木に軽く会釈して、研究室をあとにした。

八幡商店のガレージはまだ閉まっていた。営業時間は完全に不規則なので、珍しいことではない。兄弟揃って仕入れに出たか、籠もって何か作っているのか。お転婆娘なら、とっくに学校に行っている時間である。

（そういえば、しばらく二葉の顔を見ないな）

親孝行横丁で、血染めのコックと戦った日以来だろうか。出かける前に二葉が訪ねて来たのは覚えているが、何の用事だったろう。それほど前の話でもないのに、ずいぶん時が経ったように感じる。寄って行こうかとも考えたが、思いなおして、閉じたシャッターの

前を素通りした。
　両手を上着のポケットに突っ込んで歩く後ろから、少女はついてくる様子。どこか危なっかしい足音が、久しぶりの外出を示すようだ。煙草屋の前で立ち止まり、小窓を覗いた。いつものおばちゃんは、いつもどおり不在である。銘柄を選ぶふりをして、少女に小声で話しかけた。
「何人いる？」
　きちんと前を向いたまま、アマリリスは答えた。
「一人です」
「武器を持っているか？」
「拳銃以外には、確認できません」
　尾行者は、すぐに襲うつもりはないらしい。そなえ付けのベルを鳴らすと、一分近く待たされたあと、アフロヘアのおばちゃんが面倒くさそうに顔を出した。
「あんたか。昼間からうろついているなんて、珍しいやね」
　無感動な眼差しをちらりと少女に向けたが、何か言う代わりに大あくびした。歯が欠けているので、どうしても河馬をおもわせる。もっとも、河馬の実物を見たことはないが。
「蝙蝠印は入っているかい」
「あいにくだったね。ヤミが欲しけりゃ、ほかをあたりな。一週間ばかり切らしたまんまさ。最近は監視が厳しいやね。ゴロツキを見かけない日はないときている」
　超小型無人偵察機ソフトボールのことを、アフロのおばちゃんはゴロツキと呼んでいる。
「それとも素直に、税率９３パーセントの煙草を買うかね。きっと旨いよ」
　大笑する河馬に手を振って、店先を離れた。尾行者もまた、それにつれて移動を始めた様子。刷新かとも考えたが、カヲリはこそこそとつけ回すようなタイプじゃない。用があるなら、どこへでも乗り込んでくるだろう。

ではやはり、ツァラトゥストラ教徒か。聖歌隊の制服を着た少年の姿が脳裏をよぎる。かれはシャングリ・ラの二階家が崩壊する前に、脱出している可能性が高い。

（しかし、なぜ……）

死ななかったのだろう。鳥辺野の銃で心臓を撃ち抜かれながら、死なないどころか、痛みすら感じた痕跡がなかった。もし、あんな化け物につけ回されているのだとしたら、かなり厄介なことになる。またその可能性は、決して低くない。

愛車は撤去屋に捕まることなく、路上でちゃんと待っていてくれた。手狭な助手席に難なくおさまったアマリリスを見て、あらためて少女だと感じる。さいわい、エンジンは機嫌がよかった。

65（2）

むしろ、機嫌がよすぎるのが気になった。キーを回しつつ空ぶかしするタイミングにコツが要るし、アクセルを踏む角度も、微調整が必要だ。これまで一発でエンジンがかかったタメシなど、果たしてあっただろうか。あったとしたら、ケーキを買って祝福するほどの奇跡にほかならない。

おれは奇跡を目の前にして、しばし呆然とした。時に奇跡は、不吉な予感と区別がつかない。

「つけてくる車はあるか？」

街路に出て少し走り、バリケードの隙間から広い道に入り込んだ。少女は依然、奇麗な姿勢で前を向いたまま。

「今のところ確認できません」

「あきらめてくれたか。そんなはずはないと思うが」

のろのろ運転をしながら、煙草に火をつけた。あっちこっちで道路が掘り返され、発光コーンで囲われているが、作業員らしい人影は見当たらない。錆びたバックフォーが、二本の腕をむなしく振り上げたまま、道路の真ん中で固まっていたりするから、いちいちハンドルをきるのが面倒くさい。

案の定、バックフォーのエンジンカバーはこじ開けられ、目ぼしい部品は、ごっそり抜きとられているもよう。それでも八幡兄弟に教えてやれば、大喜びで深夜、トラックを回すだろう。かれらにとって、使えない部品はない。ビス一本残さず解体するのに、一時間はかかるまい。

「左前方４８度。照準が向けられました。対戦車砲と思われます」

アマリリスが何歳なのか知るよしもないが、見た目は若い娘である。対戦車砲、という死滅した言葉を発するには、違和感がぬぐえなかった。なるほどそこに管理用の脇道があり、１０トン積みの箱型トラックが、鼻づらをこちらへ向けて停まっていた。運転席側の

窓を開けて、奇抜な恰好をした男が身を乗り出していた。
赤いキャップに真紅のアフロヘア。真っ白な顔に口紅をべったりと塗ったさまは、いつぞやの、物騒な宅配業者に違いあるまい。地獄の道化師は、砲身の先に巨大な球根をくっつけたような、まがまがしい武器を肩に構えていた。
「パンツァーファウストだと？　あんなものがまだ作られていたとはね！」
おれはハンドルを、大きく右にきった。
球根はひょろひょろと左のミラーすれすれを飛んで、背後のバックフォーを直撃した。予期してはいたものの、すさまじい爆風のあおりを食って、配管だらけのフェンスに右のミラーとライトを根こそぎ削り取られた。板金が強化されていなければ、今ごろおれの右半分も存在しなかったろう。サイドウインドウが粉々に砕け、ブレーキが悲鳴を上げた。
「くそったれめが！」
弾丸レーサーなみの超絶テクで体勢を立て直し、どうにかこうにか停車させた。人間、意外な特技があるもので、我ながらじつに運転がうまい。などと、自画自賛している暇もなく、まったく動じていないアマリリスの声を聞いた。
「追ってまいります」
「むかし、そんな映画があったよな、こんちくしょう」
ミラーで確認すると、煙突みたいな排気管から黒煙を吐きながら、トラックは路肩へ食み出しつつ、むりやりこちらへ鼻づらを向けようとしていた。でかい図体のわりに、驚異的な小回り。アームつきサスペンションをそなえた強化タイヤで、放置車両をばりばりと粉砕しつつ、怒声のようなクラクションを響かせた。
明らかに、トラックに偽装した軍用車両だ。それも汚染地帯から掘り出してきたような、戦時中のやつがベースになっている。重炉心弾でもぶち込むならともかく、ただの拳銃ではお話にならない。だいたいあんな化け物が公然と走っているのに、刷新は何をやって

いるんだと言いたい。お世辞にも、おれは善良な地区民とは言えないにしてもだ。

「頼むぜ、愛車！」

鳥辺野の爺さんみたく、車に名前をつけておくべきだった。さまにならないセリフを叫びつつ、ギアをマニュアルに切り替え、おもいきりアクセルを踏み込んだ。漫画みたいに車体がたわみ、ぎゃん、と、タイヤを鳴らして、愛車は前方へ弾き出された。

それにしても、ひどい道路だ。そこそこに広く、対向車がないのはいいが、路面はでこぼこであっちこっち穴が開き、しかも道の真ん中に工事帯はある、放置車両はある、木まで生えているという。まあ、封鎖中の道を近道にしているおれに問題があるのだが。

それら障害物を避けながら走るものだから、どうしても遅くなる。対して、暴走トラックは何でもかんでも踏み潰しながら、真っ直ぐ突っ込んでくる。たちまち距離が縮まり、バックミラーいっぱいに、トラックの顔面が映し出された。スパイクつきのワイパーが、ぐっと迫り出すのを見た。

おれはギアをトップに突っ込んだまま、アマリリスの腕に軽く触れた。

「それを使う必要はない。まだ病み上がりのおまえに、それは使わせない」

65（3）

「はい、マスター」
煙草を口の端にくわえたまま、ニヤリとサムアップしてみせた。
たちまち背後で不穏な音が響き、バンパーその他がもって行かれた模様。リアウインドウが砕け散る音を聞きながら、いやというほどハンドルに額をぶつけた。おまけに吐き出した煙草がズボンを焦がすという踏んだり蹴ったり。ちょっとカッコつけたとたん、すぐこうなるのだ。
「何度このセリフを言わせるんだ、くそったれ！」
衝撃を緩和しつつ、前方の障害物をすれすれでかわす。これほど悲鳴を上げながら、八幡兄弟特性のタイヤは、まだまだ路面に食いついてくれる。
「後ろから第二波、きます」
「解説ありがとう。わかっちゃいるけど、よけられないってね」
屋根が奇麗にすっ飛んで行った。とっさに首を縮めなければ、怪奇・首なしドライバーができあがるところ。オープンカーと化した車内に、風がすごい勢いで吹き込んでくる。こんなことなら、鳥辺野爺さんの飛行帽とゴーグルを、形見にもらっておくのだった。
アマリリスは相変わらずきちんと前を向いたまま、風が髪をなぶるにまかせていた。対面した当初は幼く感じたが、髪が伸びたせいか、その横顔はどこかおとなびて見えた。
「マスター、前を」
封鎖された道路の終わりを告げるバリケードが、面前にせまっていた。
「うわあああああっ！」
いつもなら、わずかな隙間を徐行してすり抜けるところ、めちゃくちゃにカッ飛ばしながら、あらぬ角度で突っ込んでゆく。ボタンひとつで翼が生えるとか、せめて二葉の靴みたいなバネ仕掛けが

あればよいのだが。アマリリスに伏せるよう促し、アクセルを全開にする以外、どうすることもできなかった。

フロントグラスが粉々になり、ドアごと側面の板金を剥がされた。それでも奇跡的に突破できたが、たちまち市街地の中へ放り込まれ、今度は電柱や街路樹や対向車が、めまぐるしく入れ替わりながらせまってきた。

「本日三度めの、くそったれ！」

ブレーキは完全にイカレていた。イカレ車は猛スピードで通行人を踊らせ、露店に山積みの果実をぶちまけ、クロック鳥の群れを飛び上がらせた。こんな所で人を殺したくないので、公園に突っ込んだ。さいわいにも閑散としており、たった一人で遊んでいた五歳くらいの男の子が、滑り台の上から、ニコニコと手を振った。

アマリリスが無表情のまま、小さく手を振り返した。

公園を駆け抜けると有刺鉄線をつき破り、酸素供給用の緑地帯へ突入した。ガキの頃熱中したアーケードゲームの画面のように、太い幹が次から次へと立ちふさがる。幹をよければ潅木があらわれ、生い茂る葉の中へ顔を突っ込む恰好。そこをねぐらにしている鳥たちが驚いて羽ばたき、おれの鼻をくすぐった。

おかげでだいぶスピードが弱まったので、ハンドルを放棄して、アマリリスの上に覆いかぶさった。十トントラックと正面衝突しても無事かもしれない、超兵器をかばうのもナンセンスだが、少女はされるにまかせていた。コケに覆われた鱗状の太い幹がせまるのが、目の端にちらりと映った。

派手な音がしたわりに、たいした衝撃はなかった。小枝がばらばらと降りそそぎ、それが止むと静かになった。エンジンは完全に停止しており、爆発の危険はなさそうだ。おれたちは身を起こし、顔を見合わせた。たちまちアマリリスがくるくると目をまるくして、おれの頭を指さした。

アフロヘアになっていても不思議はない。探ってみると、何か軽いものが手の甲に飛び乗る感触。腕をおろして見れば、小型の齧歯

類と鉢合わせになった。ハシバミの実のような瞳でおれを見上げ、キッ、と小さく鳴いて、身軽に逃げ去った。おれが声を上げて笑ったのは、そいつの顔がさっきのアマリリスの表情とそっくりだったからだ。

シートにもたれ、煙草に火をつけた。静かだ。鳥の鳴き声が梢をわたり、木の実が朽ち葉の上に落ちるたびに、小人の足音のような音をたてた。

「ピエロはまだ追って来ているか」

「確認できません」

当然だろう。あれで市街地まで乗り込めば、さすがに当局が黙ってはいまい。ちなみに人類刷新会議は軍隊をもたない。有能な武装警察が代わりをつとめている。首長たちの強大な私兵でさえ、クーデターの折にはまったく役にたたなかった。それは軍事力という旧来の概念の衰滅をも、意味するのかもしれない。

愛車はハンドルとタイヤとシートと、それに剥き出しのエンジンだけの姿となり、見事な立ち往生をとげていた。今日はみょうに機嫌がよかったのは、いわゆる、ともし火が消える直前の輝きだったのだろうか。おれはハンドルに手を触れて、名前をつけておかなかったことを、また軽く後悔した。

66

66

「このＢＢ－３３地区で治外法権がまかりとおるのは、『幽霊船』とこのホテルくらいのものだ」

きびすを反しながら、桑原光三郎は忌々しげにつぶやいた。

四六歳。痩せた体躯を一点の隙もない高級スーツで包み、靴は光源が仕込まれているのかと疑われるほど、ピカピカに磨き上げられていた。刈り込んだ頭髪の前髪を少しばかり、わざと残して額に垂らし、よくこれで用をなしていると感心するほど細いフレームの眼鏡をかけていた。

シャープな口ひげ。尖り気味の鼻。演劇的に洗練された一挙手一投足は、三文小説から切り抜いた「総支配人」の挿絵そのまま。

「きもはそう思わんかね？」

床に硬い靴音を響かせながら、定規で引いたような直線で十五歩。再びきびすを反したあと、五十嵐冬美をかえりみた。エグゼクティブ・ハウスキーパー。三六歳。年齢が機械的に加算されることが何としても許しがたく、自身ばかりは二九歳で時間が止まっているのだと、半ば本気で信じていた。

その信念が功を奏してか、彼女はたしかに若くみられた。数多いメイドたちの総指揮者ともなれば、スーツの着用が許されるのだが、彼女が頑なにアルバイトが着るのと同じメイド服にこだわるのは、これが最も自身を若くみせることを知っているからである。

メイドたちは影で五十嵐冬美を長たらしい肩書きを略した「ＥＨ」、もしくは「メイド長」と呼んでいた。

「そう思いますわ」

つとめて無感動に答えたつもりが、皮肉な調子が加わった。口もとに皺が出たのではないかと思うと、そちらのほうが悔やまれた。

桑原は目を細め、神経的に微笑した。まるで口もとの皺を笑われた気がして、冬美はひそかに眉をひそめた。

「やつの肩書きを知っているだろう」

「夜間支配人です」

「さよう。副支配人ですらない。たかだか夜の番犬に過ぎないわけだ。いや番犬ならまだ可愛げがあるが、やつはならず者だ。本来なら、とっくに銃殺されていてもおかしくない。そんな極悪人がだよ、総支配人であるわたしを差し置いて、我が物顔でのさばり歩いているのだからな。これを治外法権と呼ばずして何であろう」

この男は、いったいわたしにどんなリアクションを求めているのだろう。

五十嵐冬美は、硬い表情のまま思案した。ある意味、なぐさめてほしいのは確かだろう。けれど、ここで月並みに笑ってお世辞を言ったところで、この気難しい男は不貞腐れるだけ。かえって、ばかにされたと考えるだろう。複雑なこの男の気質が読めればこそ、今の地位までのぼり詰めた彼女である。

「あの一角だけ、ずっと夜なのではありませんか」

桑原は、七歩あるいて足を止めた。機械的な往復を止められたことが不本意であるかのように、視線をけわしくし、演技的に眼鏡を持ち上げた。

「きみは何を言っている?」

「表からも、わざと見えないように建てられております。本館からも、基本的に入れません。ただでさえ少ないどの窓も、厚いカーテンがおりて、中にいる者は塔の中に幽閉されているようです。新東亜ホテル別館は、闇に閉ざされた塔。永久に夜が続く塔なのです」

さすがに桑原は面食らった様子。今度は演技ではなしに眼鏡を持ち上げて、目を三度、大きくしばたたかせた。

沈黙の中、遠くの話し声が聞こえ、やがて遠ざかる。国内随一の超高級ホテル。その総支配人の執務室はあっけないほど狭く、楽屋裏のわびしさをかもしている。トラック一杯ぶんはありそうな無数

のファイルを、けれど桑原は神わざに等しい手腕を発揮して、整理整頓していた。アンティークの調度を並べる余裕さえ持たせて。

「失礼ながら、きみの詩は少女趣味が過ぎるよ」

舐めまわすような視線を感じた。

桑原が彼女の体を欲しがっていることは、もちろんとうに気づいていた。けれどこのホテルでは、従業員どうしの性交渉はおろか、恋愛もかたく禁じられていた。メイドやボーイでさえそうなのだから、まして総支配人ともあろうものが、エグゼクティブ・ハウスキーパーに指一本触れるわけにはいかないのだ。

人間とは奇妙な生きもので、抑圧されればされるほど、性欲を陰火のように燃え上がらせる。桑原は冬美の肉体に触れることができない不自由さを糧に妄想を育て、無限に膨らませているようだ。妄想の肉体を視線でなぶり、陰火の中で犯すのだ。

「ありがとう。もう下がってよろしい」

「失礼いたします」

廊下に出た彼女は、暗い勝利感に酔った。

67（1）

67

緊急職員会議とやらで、学校が半日で終わった。生徒のだれかが、問題を起こしたという噂だった。

二葉は思わず振り返ってみたが、窓際の席に、鳥辺野霞美はいつもどおり、ぽつんと座っていた。

「これからどうするの？」

机に指を添えて話しかけるまで、霞美は気づかずに外を眺めていた。四角く切り取られた風景。灰色の校舎と、灰色の校庭。むだに生い茂る常緑樹さえ、灰色にかすんで見えた。

弾かれたように、彼女は体を震わせた。草食動物の癒しがたい怯えが、見上げる瞳の中に宿っていた。

（この子、サディスティックな心をくすぐるタイプね）

強いて微笑む自身を、牙を隠した肉食獣のように感じながら、二葉は語を継いだ。

「せっかく時間が空いたんだから、ちょっと遊ばない。もしいやでなければ」

泣きそうな顔で首を振る。遊ぶことを拒否しているのか、いやでないという意味なのか。おそらく後者と解釈して、彼女の耳に唇を近寄せた。

「あなたのことが知りたいの。わたしもあなたの知らないこと、いろいろ教えてあげるから」

鳥辺野霞美は耳まで赤くなった。

昨夜はさすがにアルバイトを休んだ。帰宅すると一彦は不在で、工房に一朗がいた。

相変わらず、エイジの部屋から引き取ってきたガラクタ・チャペ

ックの修理に余念がない様子。溶接マスクをかぶった横顔が、黙々と火花を浴びていた。

「ただいま。風砲のエアを充填してほしいんだけど」

鞄をかざしてそう言うと、火花が止まり、溶接マスクが振り向いた。遮光ガラスを持ち上げると、ちょっと驚いた一朗の顔があった。

一彦と一朗。双子の兄とは同じくらい仲がいいが、どちらかというと一朗のほうが、よりウマが合う気がする。一彦は二葉と性格が似ており、機転がきくし抜け目がない。対して一朗はおっとりして、どこか一途で融通がきかない。そんな兄をもどかしく感じながら、粘り強さや慎重さに惹かれるのだろう。二つとも自身に足りないことは、重々承知している。

「使ったのか？」

ようやく一朗が口を開いた。二葉はいたずらっぽく、肩をすくめてみせた。

「痴漢に遇っちゃって」

「最近の痴漢は集団で武装しているのか。まあ、役にたって何よりだけど。貸してくれ」

マスクを脱いで鞄を受け取った。グリップを握り込み、風砲の形にチェンジさせた。けっこう反動がきついのだが、かれの強化アームはびくともしない。もちろんＩＢよりはずっと不完全ながら、禁断の金属細胞が使われており、手術したのはもちろん、二階の変態博士だ。

「ふぅん。あのスクラップが、こんなに奇麗になるなんてね」

後ろで手を組み、彫刻でも観賞するように兄の「作品」を眺めた。八割がた完成しているだろうか。所々カバーが外され機械が露出しているが、穴だらけだった装甲は修復され、博物館の骨董車のように磨き上げられていた。とくにほとんど欠損していた脚部が、見事に再生されているのは、目を見張るばかりだ。

彼女は知る由もなかったが、脚部は俗に「大転３式」と呼ばれる、サンポッドをベースに少しばかり量産された機体の脚を流用してい

る。ただ繋げただけではなく、徹底的に改修して、オリジナルのサンポッドの脚が再現されているのは、一朗の涙ぐましい努力の結実だった。いかにも嬉しそうに、かれは鼻の下をこすった。

「わかるか？　こんな美しい機体は、そうそうないよなあ。この肩の張り具合。引き締まったボディ。両手にガトリングガンを構えた勇姿は、たまらないものがあるぞ」

変態、という言葉を二葉は呑みこんだ。表面が奇麗に直っていると言ったまでで、こんなごついチャペックのボディラインを褒めたつもりはなかったのだが。やはり機械を愛でる男の感性には、ついていけないものがある。

「ねえ兄貴、あのガスマスクのお兄さんたちは、また襲ってくるかしら」

「痴漢のことか？」

「まあ。兄貴だって、わたしが襲われる可能性を想定して、それを新調してくれたわけでしょう」

一朗は風砲を解体する手を止め、宙を見つめた。囁くように、二葉はたたみかけた。

「あいつらはいったい何者なの？」

67（2）

自身の声が、ガレージの中でうつろに反響するのを意識した。

一朗と一彦が、この頃密かに二葉の行動を監視しているのは、たしかだ。放任主義の兄たちにしては、異例なできごとといえた。自身の周辺で、いったい何が起こりつつあるのか。何が変わったのか。繰り返される平凡なサイクルの中で、最近変わったことといえば、新東亜ホテルの別館に移されたくらいか。

いつかエイジに洩らしたように、あそこの異様な雰囲気は、彼女もひしひしと感じていた。ただその原因は、まださっぱりわからないが。一朗が、ようやく口を開いた。

「たぶん、二葉が考えているとおりだよ」

「ツァラトゥストラ教徒？」

「たぶんね」

「わたしなんか勧誘したって、何のトクにもならないと思うけど」

一朗は肩をすくめた。あくまで口が重いのは、二葉の好奇心を刺激したくないからだろう。好奇心に駆られれば、どこまでも突っ走る。そんな妹の性格を知悉していればこそ。おそらく一彦あたりの提案で、情報操作を行っているに違いない。

こんなときは、粘っても始まらない。一朗は口がかたいし、一彦に当たってみたところで、こちらは達者な口ではぐらかされるだろう。一旦身を引くのが得策とみた。

「じゃあ、それお願いね。あとでコーヒーを持ってくるから」

目をしばたたかせている一朗に軽く手をあげて、二葉はくるりと背を向けた。

貸衣装屋は九つの指輪を嵌めていた。右手の薬指だけがフリーなのである。

「あらあら八幡ちゃん、お久しぶりじゃなあい。ちょっと見ない間

に、E女になっちゃってもう」
ぽんと尻を叩かれた。シナを作るたびに、金色の服に散りばめた銀色のラメが、きらきら揺れる。鳥の巣をおもわせる頭髪は真紅で、口紅は上が黄色で下が紫。むろん、正真正銘のゲイである。
「惜しいわあ。あたしがオトコだったら、いっぱいEコト教えてあげられるんだけどなあ。こちらのお友達は、お初よね」
「山の手のお嬢さまよ、MB」
無数の衣装が吊るされた狭い店内。ほかに客はなく、香水のにおいがたちこめ、プッチーニのオペラが低く流れている。
MBが何の略なのか、二葉もよく知らない。看板にはただ「MBの店」とあり、趣味のよくない蝶の絵が添えてあるので、マダム・バタフライの略ではないかと勝手に考えている。MBは、怯えきった鳥辺野霞美を舐めるように眺めながら、指をわななかせて舌なめずりした。
「いじめたくなるタイプよねえ」
「だめよ、わたしのキティちゃんに手をだしちゃ」
そう言い捨てて、二葉はさっさと制服を脱ぎはじめた。表の戸は閉ざしてあるし、MBは「男」ではないから、何も気にする必要はない。
さすがに学校に近い繁華街を、制服でうろつくわけにはいかない。そんな悩める女学生から、お城へ急ぐシンデレラまで、MBの店はこれでなかなか重宝されていた。もっとも、旧政権とともにサロンが消滅したせいで、実入りは半減したようだが。
(刷新なんてさ、世のため人のためと宣伝しながら、せっせと仕事を奪っているだけじゃないの。しかも弱い者からよ)
そういえば、似たようなことをどこかの何でも屋がぼやいていたっけ……衣装の森からいくつか選り分けてきて、MBは言う。
「最近のお勧めはラバーかしら」
「レザーじゃなくて?」
「あえてラバーを選ぶのがお洒落というものでしょう。ちょっとに

おいがアレだけど、香水で消しちゃえば問題ないし。けっこうマニアが多くてね、八幡ちゃんも癖になるかもよ」

ＭＢ自身を眺めれば、お世辞にも趣味がいいとは言えないが、他人を見る目は確かで、流行の一歩半くらい前を行くセンスも信頼に値した。ラバーのブーツとショートパンツ。ゆるめの丸首シャツを重ね着した上から、こちらはレザーのジャケットをざくりと羽織り、木製のネックレスをあつらえた。

「羨ましいわねえ、八幡ちゃんは何を着ても似合うから。髪はもうちょっとアグレッシブに立てたほうがいいわね。あと胸元に引っかけておくサングラスを忘れずに。さてと、次はこの子ね」

ＭＢと二葉が同時に向き直ると、霞美はびくりと震えた。両手で胸を覆ったまま後退りする彼女に、指を蠢かせながら二人はせまった。

「さあて、どう料理してあげようかしら、仔猫ちゃあん」

68（1）

68

この程度の変装で、あのガスマスクの変質者たちを煙に巻こうというのではない。

ただ、あからさまな挑発に、どんなリアクションを示すのか、それが知りたかった。無視か。それとも癪にさわって、手を出してくるのか。後者であれば、タカの知れた相手といえるが、前者ならばかえって手ごわい。意外に奥深いウラの存在を暗示するからだ。

一応の武装はしてある。みょうにソールの厚い靴は自前で、さらにいろいろ仕込まれているし、ＭＢに借りたラバーのリュックには、例の武器がいつでも撃てる状態で収まっていた。

「あの……やっぱりこれ、短すぎませんか」

しきりにスカートの裾を引きおろそうとしながら、鳥辺野霞美は小型の鞘翅類が鳴くような声で言った。

「すごく視線を感じるんですけど……」

彼女のイデタチは、真紅のチュニックに豹柄のジャケットを羽織り、スカートは黒いタイトの超ミニ。赤革のショートブーツに、これも豹柄の厚手のソックスが、膝の上まで届いていた。もちろんＭＢの見立てで、

（名づけて「野生のエルザ」よ）

と、いまひとつ意味がわからないが、ウィンクしながら、満足そうに命名したものだ。

二葉に輪をかけてアグレッシブな組み合わせだが、なるほど大柄な彼女が着ると、じつにサマになる。おそらく長いスカートしか穿いたことがないであろう、彼女の秘められた野生美を十二分に引き出している、といったところか。

「注目されるくらい、魅力的ってことでしょう。だいじょうぶ、タ

イトだから意外に中は覗けないものよ」
「そんな意味では……」
脚を擦り合わせながら前屈みになると、胸の谷間があらわになるという。ＭＢはわざと霞美をなぶるために、こんな組み合わせを選んだとしか思えない。
この界隈を電気商店街という。平日の昼間から、人でごった返している。
文字どおりの「電気」屋が、伝統的に多い。店先でちょっとした充電を請け負う店から、自前の大型発電機を持っていて、数時間から数日ぶんの蓄電池ごと売ったり、レンタルしたりする店もある。連動して、電気器具を売る店が集まり、要するにジャンク屋の巣窟となり、さらにはメディアとの関連から独特なファッションが生じた。
ＭＢの店なんかも、そういった連鎖の最前線というか、最前衛に位置するわけだ。
道幅はとても広く、むかし、官営道路が通っていた名残りらしい。現在は終日、歩行者天国となっているが、法的な根拠は何もない。もしうっかり乗り入れようものなら、立てた髪で身長を１．２倍ほど伸ばしているアンちゃんたちに、粉砕されるだけのこと。
両脇のビルを食み出して露店がひしめき、流しの物売りや芸人がさまよい、ただ自身の満足のために踊ったり、奇抜な衣装を見せびらかしたりする連中がいて、さらにそれを見物に来る者たちが取り囲み、なんとも生命力の坩堝的カオスな景観を現出せしめていた。
「ハーイ、スゥイートハニーパイ。これからオレたちとワルサしない？　マニーならちょっとアルマーニ」
三十秒に一度くらいの割合で、誰かしら声をかけてきた。そのたびに霞美は飛び上がりそうになり、グラマラスの身の置き所に窮して煩悶した。二葉はといえば、いかにも慣れた調子で、人さし指だけの投げキッスを反すのだった。
「また今度、ね、チャオ」

ビルにかかげられた巨大なスクリーンの中で、真紅のチャイナドレスを着た女が、栄養ドリンクを片手に微笑んだ。別の電光掲示板には、地域ごとの汚染指数が表示されていたが、誰も目を向ける者はいない。爆音を雨のように降らせて、上空を常に旋回しているのは、人類刷新会議のオートジャイロだろう。

うっかり注意を怠るとつまずきそうになるほど、ソフトボールが多く転がっている。通りを流しているアンちゃんたちの幾たりかは、変装した武装警官に違いない。だって目つきが違うんだもの。

（ちょっと来ない間に、また警戒が厳重になったとわね）

明らかに、刷新の連中は何らかの胎動を恐れている。テロか、革命か。世界史において、それらは常に同義語に過ぎなかったが、何かそういったものの胎動を。

騒音あふれる、けばけばしい店の前で、二葉は足を止めた。機械ゲーム屋。中学生の頃までは、教師の目を盗んで、ずいぶん彼女も熱中したものだ。見つかれば、廊下に立たされるどころでは済まない。そんなスリルを味わうほうが、ゲーム機そのものの楽しみより勝っていたのかもしれない。

高校生になって教師が腑抜け揃いになると同時に、彼女のゲーム熱もすっかり冷めてしまったが。最近はどんなものが出ているのか、ちょっと興味がわいた。

「寄ってかない？」

68（2）

霞美は、多脚ワームの巣の前に連れて来られたような顔をしていた。またしても、サディスティックな気分をくすぐられながら、二葉は半ば強引に、彼女の手首をつかんだ。たちまち動力室に放りこまれたような、騒音に包まれた。

例によって行き場もカネもない、ガラのよくない若者たちが、思い思いにたむろしていた。けれど二葉はなぜかこの雰囲気が嫌いではなかったし、少なくとも外見上は、彼女たちも充分かれらになじんでいた。

「かわり映えしないわね」

無意味にばかでかい箱の中で動き回る画面を、ざっと眺めて二葉はつぶやいた。まあ、こんな所に置いてあるゲーム機なんて、半分以上は中古だろうし、最新とうたわれているものにしたところで、二番煎じ以上に新しいものはない。たまに一彦が手慰みにプログラムするゲームのほうが、よほど凝っているし、新しい。

戦前は、ほとんど実体験と同等の感覚が得られるゲームがあったとか。それによって中毒する者が続出し、ドラッグ以上に深刻な社会問題にまで発展したとか。しょせん人生はゲームだなんて、うそぶいても仕方がないが、快感より苦痛のほうが多すぎて、これを楽しめる者は極めて少ない。

だからこんな店が、潰れずにすむのだろうけれど。

「この機械、まだあるんだ」

戦闘機のコックピットに模された機械の前で、彼女は立ち止まった。

操縦桿の全面、左右、頭上と、四枚のパネルが貼られ、星をちりばめた宇宙の情景が映し出されていた。「国際宇宙ステーション」という名のゲームで、プレイヤーは宇宙戦闘機に乗りこみ、ひたすら弾をぶっ放しながら、隕石やらエイリアンやらテロリストやらか

ら、宇宙ステーションを守るという、単純なもの。
座席は操縦桿の前にひとつ、その真後ろの少し高い所に、もうひとつついていた。言うまでもなく、後方は銃座である。
「やってみよっか」
「えっ、でも」
「簡単よ。わたしが操縦するから、霞美はひたすら弾をぶっ放せばいいの」
「はあ……」
また半ば強制的に霞美を後部座席に座らせ、自身は前に座ると、コインを投入した。あやしげな美少女二人が、宇宙戦闘機に乗り込むのを目ざとく見つけて、野次馬がぱらぱらと寄ってきた。振り返ると、蛇髪の妖女に見つめられたように、霞美が石化していた。
「操縦桿を動かしてみて、椅子が回るでしょう。それがレーザー砲だから、ロックオンしたら撃つ。しなくても撃つ。射程に入ったら撃つ。入らなくても撃つ。それだけ」
二葉がそう言うと、野次馬たちがどっと笑った。ウケてくれたお返しに、サムアップして、片目を閉じてみせた。あまりにも難度が高すぎるゆえ、欠陥ゲームとさえ呼ばれたシロモノだ。あえてプレイする者は少ないし、ましてあやしげな美少女二人、五秒で撃墜されるのがオチだと、かれらはタカをくくっているに違いない。
（ふっ。中学生の頃は、流星フタバの異名をとったこのわたしよ）
ＧＯ！　と叫んで、スタートボタンを押した。画面が真っ暗になり、やがて前方へ続く光の列があらわれた。宇宙ステーションの格納庫から飛び立つ場面である。ノイズ混じりの無線が入り、進路が確保されたことを告げる。カウントダウンの声とともに、エンジン音が高鳴る。ゼロを合図に、二葉はペダルを踏み込んだ。
「八幡・鳥辺野機、出ます！」
宇宙空間に出ると、とりあえず宙返りを演じてみせた。奇麗に縦に回るのは、これでなかなかコツが要る。ギャラリーが溜め息をもらし、後ろで霞美が小さな悲鳴を上げた。ステーションの壁面ぎり

ぎりを、飛んでみせたのだ。すかさず無線が飛んできた。
＞自重せよ、自重せよ、オーバー＜
「了解」
＞隕石群接近。接触まで5、4、3、2……＜
「いきなりですか。行くよ、霞美！」
ステーション自体、移動式の防壁を備えているので、全て撃ち落とす必要はない。要は、隕石の群れの中に突っ込み、当たらないように避けながら、撃ちまくればよい話。
（あれ？）
このゲーム、こんなに簡単だっけ、と最初に感じた。いきなり洒落にならないくらい、隕石が雨あられと降り注ぐのではなかったか。突っ込むポイントを間違えたのかとも考えたが、画面いっぱい、次々と爆発してゆく隕石の光で、満開の花畑と化している。
すさまじい速さで隕石がロックオンされては、確実に撃ち落とされてゆくのだ。
「うそ……」

68（3）

思わず振り返ると、霞美はぴんと背筋を伸ばしたまま、小刻みにレバーを動かし、絶え間なく発射ボタンを押し続けていた。クスリでも打ったように、完全に目が据わっていた。

信じられない話だが、ほとんど無駄撃ちがないのだ。残像が生じるほどの高速でボタンが押されるたびに、確実に隕石が落とされる。この娘は、真面目なのだ。驚くべきは、その糞真面目さに、身体能力が追いついている点だった。

あっという間に、ワンステージがクリアされ、野次馬たちがどっと歓声を上げた。いつの間にかゲーム機の周りは、黒山の人だかり。

警告音が鳴った。

＜未確認飛行物体接近＞

レーダーにはすでに、無数の機影が映っていた。銃座から通信回路が開かれたらしく、小画面に霞美の顔が映っていた。面倒だから教えなかったのに、もうこんな小技まで把握している。

「この照準なんですけど、長距離ビーム砲ですよね」

「こちらから仕掛けるというの？　まあいいでしょう。好きにしたら」

「でも、まだ向こうが撃ってないのに、発砲しちゃうと……」

「だいじょうぶ、やつらはすでに、別のステーションを屠っている設定よ」

「じゃあ、遠慮は要りませんね」

遠隔戦は、あまり得意ではない。というより、常に接近戦に持ち込んでいたから、ほとんど試していない。とりあえずセオリーどおり、大きめのデブリの後ろに回りこみ、静止状態に機体を保った。この体勢を維持するのも、操縦者として、なかなか骨が折れる。

「ＯＫよ。お手並み拝見といきましょうか」

頭上で光が走り、長く尾を引きながら、前方に消えた。少し間を

おいて、ぼっ、と光の輪が広がった。命中だ。連鎖的に爆発が続いたので、何機か道連れにされたのだろう。

（巧いじゃない）

長距離砲は、命中すれば得点が高い。現に、スコアはうなぎ上りに上昇を続けている。いくらだったか忘れたが、たしかゲーム会社との提携で、ある数字を越えれば、けっこう大きな賞金が出るのではなかったか。

これまで二葉はほとんどスコアを気にしたことがなく、スカッとすればそれでよかった。賞金にも興味がなかったが、ここにおいて霞美が金を欲していたことを、思い出さずにはいられなかった。この手の賞金は、チャイナタウンの大食い大会同様、人間の能力ではまずとれないところに、設定されているわけだが。

（ひょっとすると、ひょっとするかも）

レーダーに映る機影は、すでに三分の一以上が撃ち減らされていた。けれど、このまま素直にやられ続けてくれるほど、このゲームは甘くない。ステージが進んでいなくても、こちらのレベルを読みとって、反則的に強さを増してゆく。けっきょく二葉のやり方では、いつもすさまじい乱戦の中で撃墜されて終わりだったし、それはそれで楽しかった。

警告音が鳴り、光の塊が目の前にせまっていた。大急ぎで逆噴射をかけ、デブリを身代わりに脱出した。その爆発がおさまらないうちに、逃げこんだ次のデブリも粉砕された。

「埒が明かないわ。接近戦に持ちこみましょう」

とはいえ、あくまで背後のステーションを守るのが使命だから、不用意に突っ込むわけにはいかない。霞美が機転を利かせて砲撃を中止し、かわりに小型ミサイルを一斉に放った。敵はまんまと挑発に乗ってきて、見る間にスクリーン上に姿をあらわし、自機の周りを取り囲んだ。

隕石と異なり、今度は敵の動きが複雑である。また向こうも発砲してくるので、エナジーシールドがあるとはいえ、直撃を食らえば

たちまちお陀仏。
「望むところ！」
　ようやく本領発揮とばかりに、二葉は操縦桿に齧りついた。雨あられと降りそそぐビームを避け、体当たりをかわす。霞美は間断なく弾幕を張りつつ、相変わらず恐るべき正確さでビームを放ち、敵機を撃ち落としてゆく。とくに得点の高い高速機は、洩れなく落とされた。ギャラリーがどよめき、歓声や口笛が飛び込んできた。
　さんざん撃ち減らされた敵は、たまらず退却を開始した。逃げ惑う機体を、霞美は容赦なく掃討する。ひでえ、と野次馬の一人が叫び、どっと笑い声が続いた。敵機が目視できなくなった後も、レーダーは母船がまだそこにいることを示していた。霞美が放った長距離砲は、直撃にもかかわらず、母船に影響を与えなかったようだ。
「無駄よ。至近距離からでなければ、ボスは倒せない」
　そいつは不敵にゆっくりと近づいてきた。やがてスクリーンに映し出されたのは、球根型の巨大な円盤の周囲から、触手状の衝角がいくつも突き出ている、グロテスクな機体だった。中心には眼球をおもわせるコアが埋めこまれていた。エイジあたりが目にしたら、さぞ眉をひそめたことだろう。

68（4）

「いい？　一発でも多く、少しでも近い距離から、あいつの眼玉に撃ちこんで。できるだけこっちで時間を稼ぐから」
「了解しました」
「この戦闘が終わったら、おもいきりシャワーを浴びたいわ」
お定まりのセリフに、ギャラリーがどっと笑う。二葉は軽く手を振って応え、慎重に機体を前進させた。
それそろ仕掛けてくるかと思っていると、前方のモニターに通信が開かれようとしていた。こんなときに？　銃座からではないし、ステーションでもない。強制的にモニターの半分以上を切り取るかっこうで、ノイズ混じりのウインドウが出現した。そこには見たこともない、異様な風体の人物が映しだされていた。
人、なのだろうか。
頭部から肩にかけて、鎧とも機械ともつかない、グロテスクな金属で覆われていた。残りの部分は重たげなマントに包まれているが、布地の上にも突起状の、あるいは計器をおもわせる金属片が貼りついていた。
（こんなイベント、あったかしら）
登場のタイミングからして、敵母艦の司令官と考えるべきだろう。けれど、このゲームを何十回プレイしたかわからないが、こんなやつが出てきたのは、初めてである。
画像はとても不安定で、ひどく揺れるし、ノイズが走る。背景はあくまで暗く、何があるのか、ほかにだれかいるのか、まったくわからない。ただその奇怪な人物ばかりが、闇からぼうっと浮かび上がって見えた。モニターを睨みつけたまま、二葉は訊いた。
「だれなの？」
「I……B……」
「えっ？」

ウインドウが歪み、そのまま消え失せた。敵の母艦が、ほとんど画面いっぱいにせまっていた。たちまち無数の光が炸裂し、小型ミサイルの雨が降り注いだ。あわてて機体を上昇させながら、二葉は背筋を何度も貫く戦慄を意識した。低い、地の底から響くような合成音が、まだ耳の底にわだかまっていた。

バグなのだろうか。あるいは、知らない間にプログラムがバージョンアップされていたのか。それにしては、あまりにも趣味がよくない。宇宙空間へ飛び出したＩＢの「王」が、おのれの分身である「軍団」……レギオンを引き連れて飛来するだなんて、ツァラトゥストラ教の霊媒の口から、飛び出したような話だ。

「動揺させようったって！」

もしも心理作戦だとしたら、充分効いていたが、賞金がかかっている以上、早々に撃ち落とされるわけにはいかない。が、回避運動を繰り返しながら、母船の至近距離に留まるのは、並大抵の苦労ではない。しかも敵は飛び道具のみならず、触手状の衝角を振り回して、鞘翅ワームのように叩き落とそうとしてくる。

ただ効率よく張り巡らされる弾幕には、ずいぶん助けられている。たいていの小型ミサイルは、これに引っかかってくれるので、砲門から発射されるレーザーだけを気にしていればいい。そして霞美は、相変わらず正確無比な射撃でビームを繰り出し、母艦の眼玉へ次から次へと命中させていた。

目視が追いつかないほどの速さで、スコアが上昇してゆく。ギャラリーが沸きに沸いている。

（いけるかも！）

母艦の眼玉はまっ赤に充血し、爆発の危機がせまっていることを告げていた。船体の各所から火花が散り、煙、のようなものを吹いている。攻撃も激しさを増しており、だいぶ自機にダメージが出ているが、このままゆくと、敵艦が崩壊するまであと一分程度。それくらいなら、どうにかこうにか、持ちこたえられそうだ。

これを撃破したときのボーナスが加われば、三十万だったか五十

万だったか忘れたが、まず間違いなく、賞金に手が届くだろう。
「霞美、これで終わりにするよ。行っけえええええっ！」
螺旋を描きながら、あえて攻撃が集中している辺りに突っ込んだ。逆に言えば、そこが敵の最も弱い部分でもあるのだ。何発かビームを食らったが、かろうじて直撃は避けている。モニターに大きく映し出された眼玉に、レーザーが次々と撃ち込まれてゆく。コアがひび割れるのが確認され、真紅の光がほとばしる。
（やった！？）
そう感じた瞬間、舞台が暗転するように、いきなり闇に呑まれた。驚きと恐怖。呆然と操縦桿を握りしめたまま、二葉はしばらくの間、何が起こったのか理解できなかった。
ざわざわと、動揺する野次馬たちの声で、ようやく自分を取り戻した。モニターはすべて消えているが、停電でない証拠に、店の明かりはついたまま。他のゲーム機の音は騒々しく鳴り響いていた。のろのろと顔を向けると、野次馬たちを二つに割って、赤いシャツを着た、痩せた男が立っていた。
「おっと失礼。応援に熱が入ってしまいましてね。うっかりコードにつまづいたようです」

69（1）

69

「ふーん。見かけたことはないけど、あんたここの支配人か何かでしょう」

機体から降りながら、二葉は言う。霞美のほうは、野次馬に取り巻かれている現状をようやく認識した様子で、今さら赤くなっていた。

「お察しのとおりと申しておきましょう。ゆえに力も入ろうというもの。お察しいただけますか？」

「そういうことをするんなら、こっちにだってやりかたがあるってこと、察してほしいものだわ」

腕を組んで向き合った。ガキだと舐めてかかるのは大間違いだ、という意志を込めて。

男は三十そこそこだろうか。最近はみょうな薬が流行っているから、見かけの歳はアテにならないが。よくこんなものに人間の体が収まるなと感心するほど、極端に細身の黒いスーツ。赤いシャツにノーネクタイ。いかにも神経質に髪を整え、わざと細く口ひげをたくわえて、銀縁の眼鏡をかけていた。

こんなゲーム屋に置いておくよりは、高級ホテルあたりに納まっているほうが、似合いそうだ。そういえば、二、三度見かけたことのある、新東亜ホテルの総支配人が、こんなタイプではなかったか。赤シャツは演技的に肩をすくめた。

「話し合いが必要、というわけですね。よくわかります。執務室まで来ていただけますか」

二葉は考えた。ここでゴネるべきか、男について行くべきか。かれとしては、もちろんコトを穏便に済ませたい。例えば彼女が野次馬どもを煽って、店をめちゃくちゃにされることを、最も恐れるの

だろう。しかし彼女としても、隔離された上、武装警察に引きわたされては面倒だ。

ジャケットの裾を、霞美がしきりに引っ張っていた。ふり向くと、彼女は赤面したまま、何事かを目でうったえていた。ついて行こう、というのだろう。臆病だと一蹴したいところだが、ともに戦った今では、彼女を見る目が少し違っていた。不承不承ながら、二葉はうなずいた。

「いいわ。行きましょう」

野次馬どもに投げキッスして、男の痩せた背中に従った。出てきた時分から気になっていたのだが、常にリズムをとっているように、体が変な揺れかたをする。やはり、何かクスリをやっているのかもしれない。

赤シャツは奥のドアを開けた。そこは汚れたビルに囲まれた猫の額ほどの空き地で、雑草の中に壊れたゲーム機が何台も、雨ざらしになっていた。

向かいのビルの壁に、錆の浮いた鉄のドアが嵌めこまれていた。鍵はかかっておらず、彼女たちが入ってしまうまで、かれは執事のように取っ手を支えていた。この男、ゲーム屋の雇われ店長などではなく、じつは一帯のビルの持ち主ではあるまいか。ふと二葉はそう考えたが、もしそうなら、せいぜい五十万程度の賞金を惜しむだろうか。

「どうぞ、お掛けください」

指を揃えて、男は布張りのソファを指し示した。緑色の地に、擬似中世ふうの草花模様。同じ色と柄のカーテンが引かれ、床には緋色の絨毯。この八スペースほどの小部屋は、ゲーム屋の執務室の印象からは程遠く、古めかしい個人宅の書斎と言われても不思議ではなかった。

「お飲みものをお持ちしましょう」

「構わないで」

「そうも参りません。紅茶とコーヒー、どちらがお好きですか」

ソファの上で、二人は顔を見合わせた。紅茶を所望すると、赤シャツは「承知しました」と言い、絨毯の上を歩いて、卓上の古風な呼び鈴を鳴らした。間もなく遠慮がちなノックとともに、彼女たちが入ってきたのと反対のドアが開いた。こちらは樫材の重厚なドアなのだ。家事用チャペックだろうと思っていると、あらわれたのは生身の家政婦。

髪をショートボブに切り揃えた、美しいが、これといって特徴のない女だ。けれども二葉が目を見張ったのは、彼女が着ている服が紛れもなく、新東亜ホテルのメイド用だったからだ。

「紅茶を頼みます。わたしにも」

「かしこまりました」

お辞儀の角度も、新東亜ホテルのマニュアルどおりである。どういうことなのだろう。個人的な趣味だとしたら、かなり不気味だと言わざるを得ない。まあ、同様の恰好をした、しかも年端もゆかない少女と暮らしていた害虫屋もいるわけで、ハタ目には、そちらのほうが奇妙なのだけれど。

「失礼、名刺をおわたししておりませんでしたな」

ポケットではなく、机の引き出しからそれを取り出し、二人に手わたした。再生紙とは思えない、やけに白い紙に「亜門　真」と刷られているだけで、何の肩書きも添えられていなかった。

69（2）

紅茶はすぐに運ばれてきた。例の娘をじっと観察していたが、没個性的という以外、あらためて何の感想も浮かばない。ただ、動作は勤務十年のメイドに匹敵する。

「訊かれる前に申しておきますが、あやしげなクスリは入っておりませんよ」

ここへ連れて来られた経緯を考えれば、何が混ざっていてもおかしくない。けれど、ゲームの賞金をくれるのくれないのと、ゴネる小娘を黙らせるためだけに、そこまでするだろうか。わざわざメイドに運ばせてまで、毒や催眠導入剤を飲ませるのもナンセンスだ。

ひと口飲んでみて、二葉は驚嘆の表情を隠せなかった。あやしげなクスリどころか、混じりけなしの茶葉百パーセント。新東亜ホテルで注文すれば、雀の涙ほどの一杯が何千サークルもするシロモノだ。しかし、感動していては交渉が進まない。

「貼り紙を確かめたけど、スコア百万で、三十万サークルだったわ。母艦のコアが確実に破壊されたこと。および、母艦が爆発する直前のわたしたちのスコアは、見物人たちが証言してくれると思う。そしてあなたは、みずからのミスでゲームの電源を落としたことを認めている」

「はい」

「これ以上、交渉の余地があるかしら」

亜門真と名のった男は、腰を下ろさぬまま、カップソーサーを指で支えて紅茶を飲んでいた。決して行儀がいいとは言えないが、なぜか下品に見えない。服装にせよ、物腰にせよ、喋り方にせよ、一歩間違えればただの悪趣味に陥るところ、みょうな品のよさに救われていた。

それに、最初見たときから感じていたのだが、どこかで会った気がする。それもゲーム屋以外のどこかで。新東亜ホテルの総支配人、

桑原光三郎に似ているのはわかっていたが、ずっと若いし、たしかに別人だ。もらった名刺の名前にも、何となく見覚えがあった。
「宜しいでしょう」
「は？」
「三十万サークル、お出ししますよ」
わざとらしく片目を閉じている。拍子抜けしたこともあり、二葉はきつく問いただそうとした勢いを削がれた。心臓がみょうな具合に脈打っている。
自覚症状はあるのだ。十いくつも歳の離れた、三十路男に惹かれやすいという。それはまだ幼い頃に父親を亡くした、彼女の心に由来するのかもしれない。思い出のジグソーパズルに、ぽっかりと欠けたピースを、父親の面影を、無意識に探し求めているのかもしれない。
しかもその面影はなぜかいつも、どうしようもなくダメな男の上に投影されてしまう。明らかにダメな某害虫屋はともかくとして、この亜門という男も、どうしようもない人間のオーラを強く発していた。ダメな男のにおいが、ぷんぷん香った。
「ばかじゃないの。払うつもりがあるのなら、どうしてわざとコードを足で引っこ抜いたのよ」
亜門は飲み干した紅茶を机の上に置き、「失礼」と断って煙草に火をつけた。口の端にくわえる癖。煙を吐くときに、ちょっと眉間に皺を寄せるところも、だれかと同じだった。
「じつはわたしも、あの『国際宇宙ステーション』には、少々思い入れがありましてね。すっかり流行遅れになりましたし、バグも出る。そもそも最初から欠陥ゲームとの悪評つきでしたが、なかなか手放せずにおります」
「あなたもプレイするの？」
「ハハハ、わたしはとても。座席に座っかと思えば、撃ち落とされておりますよ。ただこのゲーム、いまだに更新プログラムが送られてきまして、それもゲームの欠陥を修正する方向へはまったく向か

わず、バグも直らないどころか、ひどくなる一方。ただどうも、敵が限りなく成長しているようなのです」

「敵が……？」

画面にあらわれた得体の知れない「人物」を、二葉は思い起こさずにはいられなかった。低い、おぞましい合成音がつぶやいた言葉を。

「はい。ご存知のとおり、すさまじく難しいゲームですから、敵の背景を濃くしたところで、だれもたどり着けませんし、気づきません。むしろそれをよいことに、ゲーム会社のほうでは、好き放題やっているようなのです。その会社がまた正体不明で、ほかに何もゲームを出しておらず、どうも金儲けにはまったく興味がない印象なのです」

それはそうだろう。あんなゲームが流行るとは、とても思えない。吐き出した煙の行方を見つめながら、亜門は語を継いだ。

「じつはわたし、少々怖くなりましてね。最初はお客さまに混じって、面白く観戦しておったのですが、あの母艦が爆発したら、何かとんでもないことが起きるんじゃないか、と」

二葉はまた、霞美と目を合わさずにはいられなかった。いったいこの男は、パラノイアなのだろうか。たかだかゲームの中で、敵の母艦が撃破されたからといって、現実に何が起こるというのか。

69（3）

亜門は煙草を揉み消した。

「あくまで私見ですが、どうもその会社は、ダミーらしいのです」

「ゲーム会社が？」

「まあ。税金対策なのか。それとも、本業のあやしい商売を、ごまかすためなのか。わたしは後者と考えておりましてね。ただ、それにしては、一応看板どおりの商売をしてはいる。思うに、ゲームの制作も、その本業と、ゆるく繋がっているのではないでしょうか」

「でもそれは、あなたの想像なんでしょう。何の根拠もない」

反論しながら、二葉は軽い戦慄をおぼえた。とろとろとした話しぶりだが、聞いてると次第に幻惑されそうになる。ひところ流行した、あやしげな催眠医の口調に、似ているかもしれない。亜門は笑って、演技的に肩をすくめた。

「なるほど。あなたはわたしに妄想癖があると、疑っていらっしゃる」

妄想癖。そうでなければ、そのダミー会社の持ち主こそ、亜門自身ではあるまいか。

二葉は指でこめかみを押さえた。かれの妄想に、自身が浸蝕されてゆくようだ。

「べつに、妄想だろうが実在しようが、わたしには関係ないけど。そもそも今の世の中って、人間の最もおぞましい悪夢が、具現化したような世界だから」

「卓見でございますな」

「そのゲーム会社とやらがダミーだとしたら、本業はいったい何だというの？」

「簡単に述べれば、テロリストでしょうか。まあひと口に反体制的過激派といっても、様々な勢力が渦巻いておりますな。刷新会議に利権を奪われた不法ギルドから、旧首長派、旧軍閥、あるいは、恐

るべき武装教団に至るまで」

「ね、そこの社員ってさ、靴下を買いに行くときもガスマスクをつけてたりする、愉快な人たちなのかな」

挑発的に笑いながら、亜門の表情を鋭く観察した。かれは二本めの煙草に点火しつつ、かすかに眉根を寄せただけ。もしも二葉を待ち伏せていた「テロリスト」たちが、亜門真と繋がっているのなら、かれが彼女と鳥辺野霞美に対し、何らかの接触を試みるのは自然な成り行きだ。

それとも、すべて彼女自身の妄想なのだろうか……亜門真は、煙を吐く動作に笑顔を添えた。

「ガスマスクをつけていようと、鉄仮面をかぶっていようと、靴下を買うのに問題はありますまい」

「たぶんね。一応訊くけど、あなたはさっき、ゲームの母艦が爆発したら、恐ろしいことが起きると言った。それは具体的に、何を指すの？」

たぶんまた、はぐらかされる。そう考えていると、かれは軽く片手を机に添えた姿勢のまま、まともに彼女の目を覗きこんだ。

「一種のイメージ爆弾、とでも申しましょうか」

「耳慣れない名前ね」

「もともと戦時中、悪魔に魂を売った心理学者どもが開発したもの、こう言えば、おおよそわかっていただけるでしょう。様々な、精神に有害なイメージを一挙に、大量に放出する。思わず画面を見つめてしまう瞬間を狙って、です」

ため息をつきながら、彼女は足を組み替えた。あり得ない。だいいち、ゲーム屋のオーナーが、そんな危険なものを放置していること自体、おかしい。あのステージをクリアできる者はいないという自負があるにせよ、問題が起きて損をするのは、かれ自身ではないか。やはりこの男、筋金入りのパラノイアではないのか。

けれども反面、かれの言葉を裏付ける映像を、彼女が見ていたのも事実。強引に通信を開いてきた、あの悪夢じみた「人物」の面影

が、どうしても脳裏から離れずにいた。
またメイドがあらわれて、カップをさげていった。じっと見ている二葉とは、微妙に視線を合わせなかったが、素直に礼を述べる霞美には、にこやかに会釈した。
「なぜ新東亜ホテルの？」
無遠慮な質問だと思ったときには、口をついて出ていた。照れもせず、当惑した素振りもみせずに亜門は言った。
「おっと、申し遅れました。ゲーム屋のほうは副業といいますか、道楽みたいなものでして、店のほうにも、めったに顔を出さないのです。本日は、偶然お目にかかれた次第。現在わたしは、そのホテルの夜間支配人、ということになっております」
二葉は椅子からずり落ちそうになった。
夜間支配人といえば、実質は新東亜ホテル別館の総支配人ではないか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0930m/

モダンワールド

2012年1月10日05時47分発行